なりたくないけどチートな勇者

南師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なりたくないけどチートな勇者

【Ｎコード】
Ｎ８５６３Ｈ

【作者名】
南師

【あらすじ】
「君にこの世界からサヨナラして貰うためにきたの。」と自称・神様に宣告された主人公。変な能力付けられて異世界に落とされて、巻き込まれてな主人公がほぼ敵無しな最強パワーで奮闘し無双する自称コメディーです。

＊プロローグ＊神様はテキトーでした（前書き）

初です、がんばりますのでよろしくお願いします。

＊プロローグ＊神様はテキトーでした

自分は高校生である。
そりゃもう誰がなんと言おうとピカピカの高校二年生さ。
日常を謳歌してる１７歳の身長１８６なちっと背が高いだけの容姿的には微妙な青年、略して微青年。

目立って悪いとこも良いとこもない。
しいて言うなら一人称が
「自分」なくらいしか変なとこはない…と思う。

ちょっと…
いや、かなりオタクのはいってる普通の人。

それが自分こと長谷川（はせがわ）　鳴海（なるみ）、生粋のオスのホモサピエンス。
…うん、自分は自分だ。
つまり現在進行形で自分は自分でありべつの人間では…

「はいはい、現実からにげないでねぇ～。」

逃げてなどいない、自分はいま、自分という人間が何者で、どのような存在かということを探究するべく…

「現実を直視したまえ。」

…はい

現在、ここは自分の部屋のベッドの上である。
あるのだが…

いかんせん自分のベッドの上空４０センチほどのところである。
結論、ざ・れびてーしょん

そりゃぁこんなことになったら現実逃避もするわい。

そして隣に鎮座（やはりこっちも上空）しておられる髪の長い女性。
整った顔立ちに髪は金、背は１５５くらいか。
なんとこいつは自称・神、名前はまだない。
これからも無いらしい。

「神だからね。」

うっせ、介入すんな変質者。今何時かわかっとんのか、3時よ3時。
自分はちゃかちゃかねたいんじゃ。
可及的速やかに消えて無くなれ。

「うん、それ無理。」
うわっ、良い笑顔。
そしてナイフを持ちながらどこぞのおでん大好き眉毛宇宙人のセリフを言うな。
とっととしまえ。
そしておまえは何者か。

「だから神様。」

いやいやいや、それはファーストコンタクトでベッドから強制射出されたから疑わない。
こんな神様で世界はどうなんのかとか思うけど信じる、うん。
こら、窓に自分を向けるな、勢いつけるな、飛ばそうとすんな、
飛ばそうとすんな、

ごめんなさいごめんなさいお願いしますからやめてください、無礼な事言わないから止めてくださいいい

このままこの世界にいても君の存在無かった事になってるし。」
おいっ！
なんつーことすんだ貴様！

「とりあえず、異世界の注意事項。
まず君には能力を付けておきます。
魔物とかのいるよーなＲＰＧな世界だし。」

無視か、シカトか、知らんぷりかばかやろう。
そして能力ってなんだばかやろう。
たったと教えろばかやろう。ついでにもひとつばかやろう。

「…次、顔からいく？」

すいません、ごめんなさい、もう某三姉妹の末っ子のまねはしません、二度としません、激しくあやまります、ごめんなさい。

「ならいいけど、次やったら潰れたトマトだから。」

ひぃ

「で、能力だけどめんどいからこの部屋にあるもん全部でいーや。」

……ハ？
この部屋のどこに能力が転がってると、漫画とゲームしかないやん。
「うんそれ、ここにあるオタグッズの能力や技、全部使えるから自由につかいなさい。
以上、異世界の注意事項おわり。」

全部って、チートすぎる…

そしておわりって、それだけかい。
それとオタグッズて、漫画とゲームだけだぞ、フィギュアまでは堕ちてないからな。

「うん、いきゃわかるから。
とりあえず荷造りしなさい、着替えとか。」

他に説明は?

「いきゃわかるから、百聞は一見にしかずだから。
そしてわたしがめんどいだから。
強いて言うなら魔物や魔王がいる世界ってだけ。」

そこら辺詳しく!!!!
めんどくさがらず!!!!

「やだ、めんどい。」

このアマ…

「いきゃわかるって、つか荷造り荷造り。」

んなこといっても急にできるかっての。

「早くしてよ、待ってんだから。」

…こいつ、いつか締める。

「そだ、さっそく能力使えば秒速じゃん。
とっとと使いなよ。」

いや、その能力っつのもよくわからんのだが。

「だからあれさ、そのパジャマのポケットが青狸の袋になるのをイメージしなさい。」

…何いってんのさこのキチガイ。
んなことできるはずがないじゃん。

ってぇ！
なにしに箪笥持ち上げっ、つかどやって、つかなに、ナニ、何　！
！？

「いーから、イメージするの、さぁ！！！」

ちょまっ！
わかったから潰さないで潰さないで。するからちゃんと、これは四次元〇ケット、これは四次元〇ケット…

「えいっ」

うわっ、ちょまて、潰れるっ、圧死す……しない。
ポケットにインした…。

「できるっしょや。」

できたっすね。

「つーわけで、荷造り再開」

…わけわかんね。

＊１０分くらい後＊

こんなに物がない部屋初めてです、はい。
「荷造り完了、じゃあ旅立とう。」

はぁ、もうつかれたよ。
つかなぜに自分さ。

「いたから。」

……ハィ？

「誰でもよかったんよ、実際。」

…ぜってーいつか潰す！！！

「つーわけで出発！」

うぁ、なんかでた、なんか黒い膜的な円形のものがフローリングの上に生えてきた。

「のったらいけるから、その異世界とやらに。」

とやらって…
つか

「おまえは行かないのかよ。」
奴は窓から飛び立とうとしている。

「うん、めんどい。
ていうかやっぱし異世界に召喚ったら一人だけってのがお約束でしょ。」

いや、誰とのよ。
少なくとも自分はそんな約束はした覚えは無い。
つか別世界に一人旅っていうのもなにかいろいろと問題が……

「ぐだぐだ言わずにとっとといく！」

とかなんとかいいながら自称・神はドロップキックを横っ腹に旅立ちの餞別としてくれました。
限りなくイラネ！

だけど文句を言う前に自分は穴に落ちていった。
同時に意識もゆっくり無くなった。

…あの黒いの、穴だったんだ。
穴なら乗れないじゃん…。

＊プロローグ＊神様はテキトーでした（後書き）

とりあえず、初投稿です。
感想まってます。

1回目＊自分と猪とご都合主義と

見渡す限り草、草、草でたまに土。
そして３６０度が北海道よろしくな地平線。
しいて言うなら遠くに岩山的な物がちょこんとある程度。
それ以外はなにもなし。

自分、目覚めたらこんなところで寝てました。

いやいやいや、ちょいまて、何故こんなところで寝ている自分。
丁寧にパジャマまで着て、昨日寝たのは自分の家のふかふかベッドで青臭い草ベッドではない、そもそもここは家ではない。

…うん、わかってるよ、うん。昨日の自称・神が自分を異世界とやらに飛ばした（正確には落とした）からここにいる。

さすがにこの状況で昨日のあれは夢でした、とは言えない。
つまるところ、ここがその異世界なのだろう。

どんな世界かはしらねぇけど。
はぁ…

まぁここまできたらどうとでもなれだ。
変な能力ついてる（らしい）しどーにかなる…はず。

……自信無くなってきた。

とりあえずどっかいこう、歩き出さなきゃどこにもつきません。
とっ、なんか落ちた。

ナニコレ、赤い表紙の本、つかパンフ？
えーと【神様の力の使い方と異世界について】？

あんなら最初っから渡せ、あの貧乏神！！
そしてなんつーご都合主義。

…とりあえず読もう、薄いけど、４ページくらいしかないけど。
ホントに書いてんのか？

【そのいち・イメージしたらなんでもできます、なので知ってる技や魔法をベースにどんどんやってみましょう。】

…うん、この能力はご都合主義と命名しよう。
そして言いたい事は何となくわかる。
某未来ロボのポケットもなんかつかえたけど本家は袋だしね。
全く同じじゃないらしいね。
つまり応用がきく。

【そのに・その世界には魔法があります。
そして、いろいろと出せますが魔法の力は君には無いです、なので魔法じゃありません。もっと神秘的な、神懸かった、私のスーパー

なちからです。
常人にはとうていできない能力です。】

魔法、ね。
お約束だよね、自分にとっては恐怖でしかないが。
というか必要な情報が最初の一行だけじゃねぇか。
そして最後の方はスルーだ、いちいちつっこんでらんねぇ。

【さいご・その世界では言葉が通じますが、文字は読めません。
以上。】

…終わり？
もう？
こんどは書くのめんどくなったか、なんか手書きっぽいし、コレ。
てかまだ2ページはのこってんのになにさのこりの2ペー…うわっ、
きたねっ！
ナニコレ、地図って書いてっけど到底みえねぇ、萎びたミミズ並べ
たほうがまだ地図といえる。

字は綺麗なのに神様に絵心はないらしい…。
ん、他にもなんか書いてる。

【PS・これ読み終わったら戦闘だから練習してみなさい。
とゆうわけで、後ろ向いてみて。
じゃあ、健闘を祈る、おーばー♪】

おーばー…。

…よし、歩こう。

人生は前に向かって歩くのが一番、後ろに気配や獣の臭いを感じても、振り向かず、前をみて……。

「ブルァァァァァァ！！！！！」

ひいいいいい！！！！！！

そう、自分がパンフを読んでる間に自分の後ろ5メートル弱の所に待機なさっていたのが、何を隠そう、オッコトヌシ様の如き雄々しい猪様でございます。
これから祟り神になるんじゃねって勢いで睨んでおられます。

自分、死んだな。

っと、来る来る来る、突進してくる！
死にたくないって！
うぉっ！

なんとか避けた、右に転がってなんとか凌いだ。
そして彼は走って行った。
けどね、あれよ。

「ブフゥゥ」

やっぱし戻ってくるのね。
わざわざ止まって自分にロックオンして。
遮蔽物がないからぶつかったりしないから彼も無傷だし。

「ブファァァァァ！！！」

次きそうです、はい。
つかきます。
やらなきゃやられる。
練習って、言われても死にそっすよぅわっ！！！

またきた、突進。
直線でしかこないから避けるのは簡単だけど、
いかんせん体力がもたない。
なにか、なんかないかっ。

「ブルァァァァァァァ！！！」

っつ！
またくる！

彼は止まって方向をこっちを向こうとしている。
もういい、どうとでもなれ。
だめでもともとじゃい。！
そう思いながら自分はポケットからコインを出して。
構える、猪さんに狙いを定めて。

そして

「吹きっ、飛べーー！！！」

叫びながら撃った、藁にも縋る思いであのクソ女神の言葉を信じて。
真っ先に思い付いた必殺技的な物をぶっ飛ばした。

すると

ドゴオォォォォォ！！！！！

轟音と一緒に巨大なレーザーのような物が飛んでった。
そして３０メートルほどの距離の地面をえぐって消えた、猪さんは痕跡も残ってない。

いや多分あの黒いばらばらになった塊がもともと猪だったものだろう。
うん、猪様の成れの果て。

対する自分は茫然自失。

「はいっ？」
事が起こってからこの言葉を発するまで２０秒はかかった。
そして

「なんじゃこりゃぁぁ！！！」

叫んだ、限りなく。
そりゃあまさかホントにツンデレビリビリ少女の必殺技がでるとはおもっちゃいなかったからね。

とりあえず。

身体は無事だけど精神ズタボロです。

このままいけばいずれ、いや、絶対ストレスで胃潰瘍になる自信がある。
…はぁ

とりあえず落ち着こう、はい深呼吸。
吸ってーはいてー、吸ってーはいてー。

…

……

うん、なんとか落ち着いた。
心はボロボロのままだけども。

っと、まずは現状を確認しましょう。
・切羽詰まった自分は超〇磁砲をぶっ放した
・猪さん滅殺

以上の事からあの自称・神は本物の神様で、自分命名・ご都合主義能力は…長いからＥＳＰでいいや、魔法じゃないらしいし、ぶっ放したの超能力だし。
とりあえずあれも本物の能力っつーわけであるということがわかる、うん。

わかるけど、釈然としない。

シュバッ！

うん、本物だ。
中二病の象徴である［目からビーム］ができた。

まじでなんでもありだなぁおい。
あぁ、鬱になる。

とりあえず、身を守る術を会得したので歩き回ってみよう。まずはあの岩山にいってみましょうか、あそこならなんか見えるかもしれないし。

～？？？～

ガチャガチャガチャ
ガチャガチャガチャ

鎧の擦れ合う騒々しい音が扉の向こうから慌ただしくきこえてくる。

「隊長！また東の方向よりこんどは謎の光の筋が飛んでいきました！」

鎧姿の男が報告をするため扉を開けて駆け込んできた。

「何処にむかってだ。」

隊長と呼ばれた２０歳ほどの赤髪の青年が、低い威厳のある声で質問する。

「北の空に飛んで行きました！
また、魔力は感知されませんでした！」

「…そうか、下がっていいぞ。」

「ハッ！」

兵士が下がると青年は頭を抱えた。
何分謎が多すぎるのだ。

いきなり東の草原から轟音と奇怪な光がでてきて、さらにこんどは光の筋が空に向かっていった。
さらにそれらから魔力が感じられない、つまりあれは魔法ではない。
そんな珍事が目の前で起きては兵士たちも警戒せざるをえない。
そしてなによりも謎なのが近頃あの草原のに住み着いていた「カームル」と呼ばれる魔物の魔力反応が消えた事。

カームルとは見た目はでかいだけの猪だが、肉食で凶暴、魔法は効かず、剣も厚い皮膚と魔力の壁による防御で弾かれ、なにより一撃の破壊力が凄まじい。
並の者なら一撃で即死だ。

それが消えた。
討伐隊を編成しようとしていた矢先なので、普通は喜ばしいのだが、なにせ何故消えたかが謎なのである。
その原因がこの城を襲わないともかぎらない。

直接行って調べるのが一番だが、場所が草原で、草と土以外なにもない。

あるとしても小型の魔物くらいだ。
なので隠密部隊に行かせても、隠れることが出来ず意味が無い。

この城で一番強い彼が一人様子見に行くわけにもいかない。
彼自身、凄腕の魔法剣士だが、それでも一人ではカームルを倒せないからだ。
したがってそのカームルを倒した者が一人だろうと数人だろうと彼一人では絶対に勝てない。

したがって彼は決断し、近くにある魔法石をとって、それにむかい言った。

「第１師団から3師団までを率いて原因を探りにいく。
各隊長、副隊長も含め全員だ。
出発は１０分後、ほかの隊は全力で城を守れ。
そして、姫だけはなにがあってもお守りしろ。」

この城には8師団までが揃って居て、そのなかでも数が若い方が強い。
つまりこれは戦争にいくのと同じような量だ。
普通は有り得ない。

しかしそれに対し、了解の意が魔法石から聞こえてくる。
それだけ事態は深刻なのだ。

そして彼はそれを聞き、マントを取って部屋を後にする。

第１師団隊長、ゼノア・ランドルフ。
彼は、戦争並の軍隊を率いるために歩き出した。

2回目＊人の顔は菩薩にも鬼神にもなる（前書き）

なんか予想以上にながくなりました。
最後までよんでみてください。

ちなみに、名前をあれにしたかったから超能力使ったわけじゃないよ。
…ほんとだよ。

2回目＊人の顔は菩薩にも鬼神にもなる

さて、今の自分の姿と今まであったことを振り返ってみましょう。

自分こと長谷川　鳴海は１８６センチの黒髪黒眼な１７歳の純正日本微青年、ちなみにタレ眼。
ひょろ長い、とまでは行かないが、贅肉も筋肉もさほどついてないフツーの体型。

そして、いくら人がいないからって草原のど真ん中でストリップして着替えるほど堕ちちゃいないしする度胸もない。
なので恰好は、ここに来た時の初期装備そのまんま。つまり今のは、黒に白チェックの薄いパジャマの上下に裸足というわけです。

そして此処まで来る間に、ウサギに角が生えたようなでっかいのとか、キツネの六本足みたいなやつとかに遭遇してきた。
まぁ他にオッコトヌシ様モドキの類似品とかには御対面はしなかったので安心した。

つーか奴らはエンカウントした途端、我先にとソッコーで襲って来るから恐いのなんのって。
件のウサギは火とか吐いてくるし。
キツネに至っては六本足だし。

…まぁ会う度に色々試して蹴散らしてったけどね。
変態能力駆使して。

つーか中二の象徴だけでなく、手からレーザー出したりとか、口から毒ガス吐いたりとか…。

もう人間じゃないね、うん。

さすがに武器をいきなしなんも無いとこから造り出したりとかはできなかったけど。
まぁ錬金術は使えましたから不便はしません。
両手をパンッてやってやるタイプのあの錬金術です。

もうあれだ、この能力がＥＳＰを名乗るのもおこがましい、うん。
付けといてなんだけど。

つーわけで、改名。
この能力の略称はＧＳＰ（ご都合　主義　パワー）に決定。

…センス？
なにそれおいしいの？

そして落下地点から３０分程歩いたところで自分、異変に気付いちゃった。

なんか岩山の方向からいっぱい来てるんですよ。
馬とか人とか鎧とか…。

…さあ。
もうこれ以上リアルエスケープ（現実逃避）出来そうにないので腹を括ります。

何を隠そう、自分は今まさに現在進行形で…

千人近くの鎧姿に槍を向けられております。
３６０度、余すとこなく。

正解には最前列の百人位に。
まぁその後ろの方々からも警戒やなんやらのオーラがムンムン来てます。

そう、彼らは前述の鎧軍団です。
彼らは自分を発見するや否やダッシュでこの状態にもっていきました。

所要時間３０秒弱。
早いね、かなりの距離があったのに。

ちなみに自分は無傷です。
なんか雰囲気が殺すより牽制のつもりらしいので、抵抗せずに甘んじて両手を挙げてます。

…べつに怖いし勝てる気がしないからじゃないんなからね！！（ツンデレ風に）

まぁ実際にやり合ったら自分の串刺しが即完成は目に見えてますがね。
何たって自分、オタですし。

と、困惑しながら恐怖してるところに誰かが自分の前に、鎧を掻き分けやってきた。
とゆうか鎧が避けてできた道を歩いてきた。

そして来たのがなんか赤髪の怖そな兄ちゃん。
絶対２００あるって位でかくて威圧感がある怖そな兄ちゃん。

つか怖い、怖そなじゃなく怖い。
だってめっちゃ睨むんだもん、しかもこっち来るとき剣抜きながらきたし。

…あれか、もしや自分は不法侵入者か。
自分はもしやアブナイ国に落ちてきて、裁判無しで極刑にされるのか？
いやまて、話せばわかる、うん。
いくら怖い兄ちゃんでも言葉は通じるらしいし、話せば解り合える。

よし、思い立ったが吉日、できるときに即決行。

「あの「貴様は何者だ」

被さった…
つか何者っつわれても、どう説明しろと。
神様にいきなりドロップキックでここに突き落とされた異世界人です、とか普通信じるはずもない…

「何者かと聞いている、質問に速やかに答えろ。」

…チッ
堪え性のないやつめ。

速やかに答えれたら答えてるっつの。
おまえみたいなやつが将来若禿に悩む事になるんだよ。

勝手な偏見だけど。

「答える気は無いらしいな…。
なら…。」

うわっ！

待て待て待て！
剣を向けるな、答えるからっ！

「ちょっ、まってって。
自分の名前は長谷川　鳴海、何者かって言われても自分の何が知りたいか解らないですし。
ちゃんと質問には答えるから。
だから剣や槍なんて危ないし怖から一回下げてください。」

すると兄ちゃんはしばらく何か考えるように黙り込んだ。
そして剣をしまい、手で合図して周りの鎧に槍を下ろさせた。
そして言った。

「それではハセガワ、貴様にいくつか質問をする。」

お、さっきよか質問の仕方が丁寧になった。
貴様ってとこが気にはなるが。

「はい、解りました。
あ、あと名前は鳴海の方です。」

多分日本とは名前と苗字は逆だろうしね。

「そうか、ではナルミ、単刀直入に聞く。
カームルを倒したのは貴様か？」

…は？
なにその質問。
自分がどこから来たかとかじゃないの？
つーかそもそも…

「あの～、カームルってなんですか？」

そう、自分の知識の中にはカームルなぞゆう単語はないのだ。
そしてこの質問をすると若禿候補の兄ちゃんは目を見開いた。

「…カームルを知らない、のか？」

「はい。」

外野（鎧）から信じられないやら有り得ないなど、困惑の反応。
わるぅごさんしたねぇ。

「…カームルとは、猪型の魔物で普通の猪の比にならないくらいの大きさの魔物だ。」

兄ちゃんが説明してくれた、なんかアバウトっぽいけど。
てか猪なら…

「あぁ、それなら一回倒しました。
あっちの方に残骸があるはずです。」

そう、多分彼の言ったカームルとは、自分がレー〇ガンをぶっ放し

たあのオッコトヌシ様モドキの事だろう。
そう思い、自分が来た方向を指差しながら言った。
すると…

ザッ！！

槍円陣、復活。

皆さん、やめてください。
槍、怖いです。
どんだけぴったりのタイミングで槍向けくるんすか。
自分何か無礼な言動しましたか？
兄ちゃんこいつらどうにかしてください。

そして目の前の赤髪の兄ちゃんを見る、すると兄ちゃんさっきの３．５割増位の睨みを自分に向けている。

恐っ！
人間あそこまでなるともはや悪魔の領域だよっ！
この人も目からビームでてくんじゃね！？

とそこで赤髪兄ちゃんの後ろからなんかちっさいのがでてきた。
１４０センチ位の緑の髪のポニテな少女、つか幼女。
もちろん鎧装備で。

「隊長、確かに今確認したところ、ここから約６キノ程のところにカームルの死骸が発見されました。」

この兄ちゃんは隊長なのか。
どーりでエラソーなわけだ。
つかキノって、具体的に何メートルよ。
そして速い、自分の３０分を返せ。

「…どのような状態だった。」

うん、さらに彼女の報告で睨みが2割増し。
この眼を使ったらバジリスクも返り討ち出来そうだ。
もちろん睨み合いで。

「それが…。
黒コゲで、バラバラでした、これがその一部です。
さらに直線距離６０メノ程、幅は3メノ程がえぐれていて、そこを中心にカームルのかけらが飛び散っていました。」

そう言うと彼女は隊長に黒いカケラを渡した。
つかこやってみるとスゲー身長差。

「…これは、本当に貴様がやったのか?」

「はい…、そうですけど…。」

「どうやってやった。」

いやどうやってって言われても、説明に困る。
「能力を使いました。
自分の、能力を。」

…どうやってという質問の回答にはなってない気はするが、他に言いようがないしなぁ。
つかもともと自分のですらないし。

自分が答えたら今度は幼女が隊長の服を引っ張って、彼が屈むと彼に耳打ちした。
身長差やっぱすげー。

すると、隊長はしばらく考え出して、

「…何故だ。」

いきなり聞いてきた。

「えーと…、何故、とは。」

「何故カームルを殺した?」
…もしかして。
自分、護り神的なの殺しちゃった?

「いやっ、あの、襲われただけであって、他には何も殺してないってゆうか、やらなきゃやられるってゆうか、そもそも護り神とかし…」

「なら…
何故私達を倒そうとしない?」

…ハイ?

「それは…、どういう意味ですか?」

「自分の命を守るためにやったというなら、今此処で貴様は命の危機に直面している。
なのになぜ、貴様はあのカームルのように私達を消し炭にしない？」

…いや、なにいってんのさこの人。
つかいつの間に睨みでなくて真っ直ぐに真剣な目を向けているのさ。

というか答えは…

「…話せば、通じるかと思ったから。」

これしかないよね。
獣なら会話出来なもん。

「…そうか。」

そう言いながら隊長は合図をして、周りの鎧に槍をさげさした。

「それでは、最後の質問だ。」

やっとだよ。
というかなんか隊長の口調が柔らかくなった気がする。

「君は、何処の出身でどんな能力を持つ？」

やっぱりきたか、この質問。
下手に日本とか言ってこの世界にとっての日本の認識が「悪魔の住む国」とかならやだしな。
あのクソ女神ならそんな原因になりそうな人物放り込みそうだし。

でもなぁ…

「出身は…日本だ。
能力はＧＳＰと自分は勝手に呼んでいる。」

悪魔の国ならそんときはそんときだ。

「…そうか。」

納得したのかしらんが、隊長は頷いた。

そして…

「私の名前はゼノア・ランドルフ、いきなり失礼なことをして申し訳なかった。」

握手を申し込まれた。
まぁ断る理由もないので応じておこう。

「はぁ、よろしくお願いします。」

しっかりと握手を交わした。
ランドルフさんはさっきまでの殺気のこもった阿修羅ではなく、いまは柔らかく微笑んでいる。

…クッパでもここまで百面相はできまい。

「ところで、君には今から城に来てもらいたいのだが、宜しいですかな？」

城って…
もしやランドルフさんは王子様とかか？
いや、隊長いわれてたし、それはないか。
でもまあ、草原放置プレイに比べたら雲泥の差だ。

「…わかりました、じゃあお願いします、ランドルフさん。」

こういうとランドルフさんは困った笑顔を作りながら言った。

「そっちではあまり呼ばれ慣れてないから、ゼノアと呼んでくれないか。
別に呼び捨てでも構わないから。」

…すいませんでした。
若禿候補とか言って、まぢ、すいませんでした。
あなたは立派な人格者です。

「わかった、じゃあゼノア、よろしく。」

「こちらこそよろしく、ナルミ。」

そして自分たちは城に向かうため馬車に乗った。

～ゼノアサイド～
『なんだ、こいつは。』

それが第1師団隊長であるゼノア・ランドルフが目の前の青年に抱いた感想である。

先ずは恰好、彼は20年生きてきて黒髪黒眼の者を見たことが無いし聞いたことも無い。
しかも恰好が珍妙にも程がある。
薄い黒地の服にズボン、それだけ。

彼の来た方向からなら大陸有数の砂漠を越えなければここにはこれない。
それを靴すら履かず、この恰好でわたるのは不可能だ。
そのうえ荷物すらない。

さらに砂漠にはカームル並の魔物がうじゃうじゃいる。
なのに服には草が多少ついてる程度で破れていたり、穴が開いてすらいない。

そんな珍妙な者だからこそ、彼は警戒した。

何者かと聞いたら、名前は教えられたが、何が知りたいか解らないといわれ、槍と剣を下げるよう要求してきた。
少し考えたが、問題ないと判断し、要求通りにするよう兵士たちに合図を送った。

そして、1番知りたかった事を質問した。

「単刀直入に聞く。
カームルを倒したのは貴様か？」

すると、彼の予想を超えた返答が返ってきた。

「あの～、カームルってなんですか？」

これには驚いた。

カームルを知らない者がいるという事に、彼は愕然とした。

「…カームルを知らない、のか？」

「はい。」

即答。

普通カームルくらいの高レベルな魔物は一般の市民でも知っている。

それをしらないとは、何処の田舎から来たのだろうか。

とりあえず、奴に丁寧にカームルの特徴を教えてやると、予想通りの返答がきた。

「あぁ、それなら一回倒しました。あっちの方に残骸があるはずです。」

それからの兵士たちの動きは称賛に値するものだった。

一瞬で槍を構え、奴の行動範囲を狭め、威嚇した。

これをうけ、奴もかなり動揺してるようだ。

そこで、奴の言っていた方向へ偵察に言っていた副隊長のノアが報告に戻ってきた。

「隊長、確かに今確認したところ、ここから約６キノ程のところにカームルの死骸が発見されました。」

やはりカームルを倒したのは奴だっと確信し、彼はさらに警戒を強めた。

「…どのような状態だった。」

カームル程の魔物がやられたなら、その方法によって死体の状態も変わってくる。
それにより、奴の手口が解るかもしれない。

しかし

「それが…。」

ノアが困惑した声で放った次の言葉でその期待は脆くも散った。

「黒コゲで、バラバラでした、これがその一部です。
さらに直線距離６０メノ程、幅は３メノ程がえぐれていて、そこを中心にカームルのかけらが飛び散っていました。」

渡された黒い塊からは確かにカームルの魔力が感じられた。
しかも、ほぼ完璧な状態で。

普通、魔物の魔力は魔物自身が疲れたり、傷ついたりすると弱っていく。
しかしこの塊は、そんな様子は全く無い。
つまり、一撃でこの状態にされ、葬り去られたことを意味する。

彼はこの者が予想より、遥かに危険であると判断した。
そして、質問を続けた。

「…これは、本当に貴様がやったのか？」

「はい…、そうですけど…。」

嘘ではない、そう判断した。
そして核心をつく質問をした。

「どうやってやった。」

すると奴は

「能力を使いました。
自分の、能力を。」

当たり前である。
一人しかいないのに他人の能力を使える訳がない、というか、他人の能力を使う能力なんて存在しない。

そこで、ノアからあることを耳打ちされた。

「あの、隊長、実は現場に行く途中にもいくつか、それこそカームルのところ程ではないですが、同じような跡が残っていた所があったんですが、死体が何にも無かったんです。
なので私には彼がそんなに危険な者には感じられないんですけど…。
」

だからどうした。

普通ならそういわれる言葉だが、今の彼にはとても重大な事な気がした。

何故なら彼は、焦っていたのだ。

カームルを一撃で粉砕する力をもつ者が、自分達の護るべき城、ひいては街へとむかっていたことに。

しかし、冷静に考えみると、ここからならあの街が1番近い。

砂漠を超えたなら、そこを目指して次の旅の準備をするのが道理。

荷物もなく服装や外見が奇怪だからといって旅人でないとはいいきれない。

いや、だからこそ旅人であるということなのだろう。

しかし解せないことがある。

「…何故だ。」

それが疑問となり自然と口からでた。

「何故カームルを殺した?」

そう、何故カームルだけ殺し、他の魔物は殺さなかったのか。

聞く限りでは、魔物に遭遇はしたのだろう。

しかし、カームル以外は殺さなかった。

それが不思議だった。

そして、奴は慌てて言った。

「いやっ、あの、襲われただけであって、他には何も殺してないってゆうか、やらなきゃやられるってゆうか…」

そこまできいてわかった。
そして、今1番聞きたい事を質問した。

「なら…
何故私達を倒そうとしない？」

しばしの沈黙。

「…それは…、どういう意味ですか？」

「自分の命を守るためにやったというなら、今此処で貴様は命の危機に直面している。
なのになぜ、貴様はあのカームルのように私達を消し炭にしない？」

そう、彼らはいま、この者に全方位から槍を向けているのだ。
カームルと正面からやり合うよりはマシかもしれないが、かなりのプレッシャーと危機感を感じるはずである。

しかし、彼は当然のように言った。

「…話せば、通じるかと思ったから。」

そう、話せばよかったのだ。
奴はカームルを倒す程の力をもつ、それだけの普通の青年なのだ。

言葉を使い、話し合える。
1番平和な、当たり前のことを1番最初に放棄してしまったのだ。

しかし、このたった一人の青年はそれをしなかった。
この軍団を前にして、最後まで諦めなかったのだ。

「…そうか。」

この青年は争いを好まない、彼はそう判断した。
そして、兵士達に武器をおろさせ、最後の質問をした。

「それでは、最後の質問だ。
君は、何処の出身でどんな能力を持つ？」

彼が聞いたのはここにいる皆が知りたがっていること。
簡単に答えてくれるかは解らないが、彼自身も知りたかった。

「出身は…日本だ。
能力はＧＳＰと自分は勝手に呼んでいる。」
案外簡単に返答された、しかし、どちらも聞いたことが無い。

しかし、聞けただけ今はいい。

「私の名前はゼノア・ランドルフ、いきなり失礼なことをして申し訳なかった。」

はっきりとした謝罪の言葉。
隊長が謝罪をする、つまりこれは、今までの行為は不当だったと認めたということである。

そして、握手をもとめた。
これは正式な自己紹介である。

「はぁ、よろしくお願いします。」

しどろもどろしながら相手も応じる。

「ところで、君には今から城に来てもらいたいのだが、宜しいですかな？」

もちろん謝罪の正式なお詫びのために。
というのが面目上だが、実際は彼がこの者に激しく興味を持ったのだ。

「…わかりました、じゃあお願いします、ランドルフさん。」

ランドルフさん。
そう呼ばれたが、余り呼ばれた事がないので、違和感があった。

「そっちではあまり呼ばれ慣れてないから、ゼノアと呼んでくれないか。
別に呼び捨てでも構わないから。」

なので訂正を促しておいた。
しかし、本音は彼に友達として名前で呼ばれたかったからだ。
あんなことの後であるので、高望みかも知れないが。

「わかった、じゃあゼノア、よろしく。」

しかし、彼はそれに応じてくれた。
それがとてもうれしかった。

「こちらこそよろしく、ナルミ。」

そして彼、ナルミを馬車に乗せ、自分は馬に跨がり、先頭を行った。

ニホンていう国や、ジィエスピイなる能力がどんなものか、そんなことはどうでもよくなっていた。

彼と友達になれるかもしれない、そんな期待を胸に込めながら彼は城に、ウェンノルス城へと駆けていった。

3回目＊苦労人は損をする《前編》（前書き）

ながくなりました。

短くまとめれる文章力がほしいです。

そして、ケータイでこの量をうつと指が痛いです（泣）

そして誤字脱字あったら教えてください、お願いします。

3回目＊苦労人は損をする《前編》

さて、突然ですが、ここでクエスチョン。
自分は今どこでどうなっているでしょうか？

…それでは答えです。

自分は今、俗に言う姫様とやらの眼前にて穴が開くほど視姦されております。

姫様だけでなく、なんかいかにも”隊長”な人達（ゼノア含む）やら爺やらみたいな方々にも。

それらの総勢、１２人。

…間違えた人はひ○し君人形ボッシュートです。
まぁ黒○徹子でも正解はできないでしょうがねぇ…。
…さて、ではなぜにこのような希有な体験をすることになったのかを説明しようではないか。
だがそれをするには多少…いや、かなり時間を遡らなければならない。

…まぁ、ぶっちゃけここにいる理由はめちゃめちゃわかりやすいものなのだが、ここに来るまでにいろいろとあったわけで…

とりあえず、皆様が自分の姿を網膜に焼き付けている間に少し、振り返ってみよう。

＊＊＊＊＊＊＊☆

さて、自分はゼノア率いる槍軍団から開放され、彼らの馬車でお城へと向かっている。

そう、馬車で。

つまりあれだ、あれ。

視線が、痛いのだ。
この世界の人達はみんな眼力が凄いね、うん。

要するに馬車とは、複数人を運ぶ乗り物だ。
なので自分と相席になるお方々がいるのである。

その数ざっと２０人。

さて、そこで隊長であるゼノアからめっちゃ睨まれてわけわかんないことほざいてた自分はもちろん…

注目の的なのである。

視線と言う矢に突かれながら、無言の馬車はゴトゴト揺れる。

正直きつい。
めっちゃきつい。
誰も喋らんし、空気重いし、視線痛いし。

そしてなによりみなさん…

腰の短剣につねに手を置いとかないで下さい。
正直こわい。
めっちゃこわい。

こんな緊張した状況なぞ、普段から目立たず、騒がず。
極力注目されんようにしていた地味男ことＭｒ．ジミーな自分には堪えられんのだ。

そんな状態が１０分ほど続いたところで、その沈黙を破る壮士が現れた。

緑の髪を持つ気弱そうな顔立ちの青年が、これまた気弱そうに手をあげたのだ。
そして…

「あ、あの～…」

彼はびくびくしながら控えめに聞いてきた。

「ニホンって、なんですか…？」

おぉ、これは返答によってはこの空気を打破することが可能なイベントか？
いや、きっとそうに違いない。

なので真面目に答える選択肢を選んでみよう。
そう考え、にこやかに、そして爽やかに答えた。

「日本ってのは自分が住んでた国の名前で、昔はジパングやら極東の地やら言われてた島国のことさ。
そしていまは…、資源は少ないが技術がかなり進んでいてそれでもってる国かな。
ちなみにいま戦争はしてないよ。」

…うん、合ってると思う。
少なくとも間違っちゃいないはずだよね。
いくら何でも自分のいなくなったすぐ後に戦争はおこらんだろう。

「じ、じゃあ、あの…」

むぅ、これだけじゃさすがにこの雰囲気を打破できないか。
そして喋るなら喋れ、ちょっといらつくぞ。

まぁ気持ちわからんでもないが…

「あの…ジィエスピイってどんな能力なんですか？」

…

……どうしよう…。

正直に言うか？
いや、きっととてつもなく重い心の病を疑われてしまうだろう。

でもどう　言い訳しようか…
自分も完璧には理解してないから変なとこで矛盾ができそうだし。

なにより名前がご都合主義パワーの略称だし…

と、いろいろ思案してると…

「あ…、す、すいませんでした。
し、しゃべ、喋りたくないなら無理にいわなきちぇもいいです！」

きちぇって…
噛みすぎだぞ、青年。
とゆうか誤解だ。

「いや、喋りたくないんでなくて、説明できないっていうか、しづらいっていうか…」

うん、当たり障りない解答だ。
よく凌いだ、自分。
ほめてつかわす。

「…つまり、門外不出という事ですか？」

わぉ
どんな秘術よ。
やっぱ自分だめだわ。
凌げてないわ。

「いやちがくて、自分も把握しきれてないっていうか…」

「つまり制御仕切れないっつーことか。」

今度は別の奴が割り込んできた。

青髪の、つり目なイヤミタイプの顔。

…なにこいつ。
感じ悪い。
嫌いなタイプだ。

なんかこいつ、人を見下した喋り方するし。
めっちゃ強気で自分に自信ありまくりな顔してるし。

多分緑君（仮）との会話で自分は安全だと判断されたらしい。
らしい、のだが…

「つーかホントにてめぇがカームル殺したのか？
正直疑わしいな。」

…イラッ

「きっとあれだな、あの光とかは雷で、それがたまたまカームルに落ちたんだ。
そしてこいつがたまたまそれを発見して自分の手柄にしようとしてると。」

イライラッ

「そもそもこんな靴も買えない、変な服しか買えないような奇人のいうことなんて信用するなんてマトモじゃねーよ。
隊長もなんで城なんか…」

「ラルム！」

ブチッ！

緑君（仮）がそのラルムとやらに注意したがもう遅い。既に堪忍袋の緒どころか怒りが溜まり過ぎて袋ごとブッチしたね。
自分の心の狭さなめんな。

確かに自分の力ではないし、把握仕切れてないから制御できるかもわからない。

しかしだ、ラルムとやら。
テメェは自分を怒らせた。
まず何故に初対面でここまで批判されなならんのじゃ。
そもそも、雷なるような天気なら全員ずぶ濡れだろうに。

つーわけでなんか驚かしてやろう。
暴力は嫌いだから精神的にくるものを。さて、何がいいか…

「うっせーよシャール。どうせなんもできねーカスになに言おうが問題ねぇよ。
そもそも話してる時の顔がキメェ。」

…決定。
君には小林〇美と同じ道を歩んで貰おう。

出来るかわからんが。

人の渾身の笑顔けなしやがって。

つーわけで念じてみたら…

うん出た。
これはなんかＧＳＰの力の固まりっぽくて、レーザーとかと同じノリで出せるらしい。
馬車が薄暗いし自分の影で隠れて周りには見えないらしいが。
まぁ、そうゆうふうなとこに自分がだしたんだけどね。

「つーかそもそもてめーみた「うるさい。」

これ以上話しを聞きたくなかったので話の腰を真っ二つにへし折るタイミングでけしかけてみた。

「とわっ！」

すると、ラルム様はいきなりでてきたヘビともカメともトカゲともわからないような予想外の怪生物に襲い掛かられて、驚いているご様子。

そう、自分が出したのは“エ〇ーズ“というスタ〇ドである。ちなみにＡＣＴ１。

それが眼前に迫ってきたので、奴は予想以上に慌てふためいている。

ザマァ。

そして…

バキッ！

驚いてる間にパンチを一発。

バキッ！ビシッ！ドギャア！

さらに三発、全部顔面にくらわしてエ〇ーズを引っ込めた。
つか消した。

「っ、くっそ！
なんだ！今の！」

「だ、大丈夫？」

「あぁ、痛くなかった、が、なんだあの魔物は！
俺様にいきなり襲い掛かりやがって！」

そう、エ〇ーズに攻撃力はない。
ないが、別の恐怖がまっている。

おっ、馬車が止まった。
お城についたのかな？
…まぁいいや、これからがおもしろいとこだし♪

そう思ってるとラルムは自分に向かって…

「テメェ、あいつはなんだ！」

とか叫んできた。
だから素直に答えたよ。
全力の笑顔で。

「大丈夫大丈夫、音だけだから。」

そう、音だけ…ね。

「ラルム！」

「ウルセェ！

俺はいまこいつと…」

「顔に何か、変な記号みたいなのが！」

「はっ！

記号がなんだ！俺はいまっ…がぁ！」

ラルムは、話してる途中でいきなり、それも尋常じゃないほど苦しみだした。

そして耳を押さえながらのたうってる。

そう、これがこのエ〇ーズの本当の攻撃。

何回も何回も書いてある文字と同じ音を反芻させる能力。

つか文字は通じないんだったね。

「なっ、なんだ！耳鳴りがっ！」

「ラルム！どうしたのっ！」

「大丈夫かっ！」

おお、よかったなラルムとやら。

あれか、骨折したらクラスメートにちやほやされるのと同じ現象か。

よし、もっとちやほやされろ。

「ほれ、もう一発。」

そう言いながらもう一度エ○ーズをつくり…

ビシッ！

「うわぁーーーーー！！！！」

ラルム、絶叫。
そして崩れ落ちた。
やっぱり精神的にはきついのかね。

「どうした！」
ゼノアが現れた。
しかし自分は悪くない。

「さぁ？
ストレスたまってたんでない？」

「すと…、なんだそれは。」

あら、もしや横文字が通じないと。

「いえ、あの、その、あの。
ラ、ラルムがちょっと問題起こしただけです。」

「…またか、こいつは。」

やっぱりトラブルメーカーかい、こいつ。
つかシャールさん、怯えた目でこっちみないでください。
ほかの兵士さんも、基本自分は優しいはずです。

「…ハァ。
とりあえずナルミ、これから着替えて、そして姫様に会ってもらうことになった。」

…ハ？
ナゼニ？

「なんで？
いつの間にそんな話しになったんよ。」

「いや…君の事があのお転婆姫に知られてしまってな。
ぜひみて見てみたいと言っていて、王族の命令だから無視もできなく…すまん。」

いや、謝られても…
つか臣下がお転婆って言っていいのか？てか会ってみたいでなく見てみたいかよ。
自分は上野のパンダか。

まぁいいや、とりあえず着替えね。

「とりあえず、自分も着替えたいからどっか着替えれるとこに案内して。」

「ああ、だがまずは着替えを取りにいかねばな。

私のを貸しておこう。」

そっか、いまの自分はぱっと見なんももってないもんね。

「いや、実は自分、これでも荷物とかももってるから。
そこは大丈夫なはずだよ。
もちろんお姫様に会うのだから一張羅を着て行くしね。」

え？

一張羅ってなにかって？
男子高校生の一張羅ったら詰め襟でしょ。

「…どこに持っているんだ？」

…まぁ、普通そうだよね。
百聞は一見にしかず。
一回みしたほが早い。

「実は…よいしょ。
ほらここに。」

そういいながら自分は我が高校の制服を取り出した。寝巻のズボンのポケットからずるりと。

「…ホントに君は何者なんだか。」

「自分でもよくわかんね。」

そんなことを話しながら着替えるための部屋についた。途中、すれ違う兵士やらメイドやらみたいな方々にめっちゃ注目された気もす

るが気にしない。
そしてなにより…

メイドさん数人にネコミミやらそれに類似するものが着いていた気もするが、気のせい木の精気にしない。
兵士も角やコウモリの翼的なのがついてる気もするが、気のせい木の精気にしない。
ゼノア隊長の微笑みの隙間から凶悪な牙が見えて、爪が長くてナイフ並に鋭そうなんて気もするが、気のせい木の精気にしない。

そう、全部木の精霊が自分に幻覚をみしてるのさ。
この世界初心者な自分をいぢめて愉しんでるんだ。
そうに違いない。

結論。
木の精霊はドSである。

そして部屋に入り、着替えた。
だが靴下はあったが靴がなかったのでゼノアに借りた真っ黒いブーツをはいている。

というかスリッパで行こうとしたらさすがに止められてはかされた。

まぁわかってたけどね。

つか自分もってきてんの自分の部屋のものだけだもん。
日本には家の中では靴をぬぐんだもん。
、たからなんで靴だけ持ってないとか言われても、ねぇ。

ちなみに彼は自分の恰好をみると息を飲み驚いていた。

そんなに変かな？

そして、着替えたのちにゼノアに案内され、その噂のお姫様に会うために自分の3倍はあるんでね？ってくらいのでかさの扉をくぐった。

すると待っていたのはお姫様とその部下たちだった。

＊＊＊＊＊＊＊☆

…これがここまで至った経緯です。

ちなみに皆様自分を見るやいなや息を飲み、目を見開きはじめやがりました。

そこまで変か、コノヤロー。

そしてそろそろみなさんの双眼はもしや固定されてるのではないか、と思いはじめたころにお姫様が口を開いた。

「…私はこのトゥインバル国の第三王女、エリザ・ルル・トゥインバルだ。

さっそくだがナルミとやら、お前の能力とは一体どんな物なのか見せてはくれないか？

噂ではカームルを粉砕するとも魔物を呼び出すとも聞いているが。」

周りはお姫様の発言を聞いてざわめきはじめた。つか、爺的な人になんか言われてるし。
あ、爺が渋々よけてった。
きっと言いくるめられたんだろう。

「で、やってみてはくれないか？」

優雅な振る舞いで再度きいてきた。

しっかし美人なお姫様だねぇ。
ピンクのツインテールに真っ赤なドレス、気が強そうだが気品のある顔立ち。
喋り方もさっきのラルムとかとはちがい、嫌な気にはならない。
ただ背中の真っ黒い羽がとっても気になるが…

やっぱしこの国って、魔族の国とかで人間は発見され次第首チョンパなんてないよね…？
というか人間いるのかな…

「…駄目か？」

うぉっ！
泣きそな顔するな！

姫様泣かしたらどうなるかわかったもんでない。
人間魔族関わらず、その場で即座に絞首刑の可能性も無きにしもあらず。

「まぁ、いいですよ。」

仕方がないのでそう答えた。
するとどうだ、光の速さで満開の笑み。
…嵌められた。

まぁとりあえず、やってみましょうか。

「じゃあ…、ななにか要望はないですか？」

～エリザサイド～

ここ、ウェンノルス城のとある一室にて。
この国つまりトゥインバル国の第三王女であるエリザ・ルル・トゥインバルはいま…

「…暇じゃ。
暇じゃ暇じゃ暇じゃ暇じゃ暇じゃ暇じゃ暇じゃひーーまーーじゃーー！」

限りなく暇だった。

周りの者達はなぜかバタバタしていて相手にしてくれない。
そもそもこういう時はだいたいおもしろい事が起きているのだが…

「のぉ、城下に行って遊びたいのじゃが、だめかの。」

「駄目です。
頼みますから大人しくしていてください。」

だいたいそんな時は、それにともなって彼女の護衛、ひいては彼女の行動規制が強化されるのであり、いつも以上に暇になるのだ。

そして姫がこんな状態の時に1番の被害を受けるのは…

「頼みますから姫様、これ以上この老いぼれをいじめないでくれませんか。」

教育係兼お目付け役の老人、ゾーン・エルベルト、その人である。
通称ゾーン爺。
緑の髪の、ダン〇ルドアよろしくな長い白髭を蓄えたいかにも”賢者”な出で立ちの老人。
ちなみに眼鏡はない。

「何度も言ってますように、いま外は危険なじょ「それは草原の方であろう?なら逆の方で遊べばいいではないか。」

今日も今日とて姫様のワガママ爆弾により疲弊している。
そして、外に出たら絶対にこの姫様は護衛の目を欺いて草原に行く。
今までも何度もあったし、なにより彼女の顔がそれを隠しきれてない。

「…わかった、私ももう子供ではない。
大人しく一人で読書でもしよう。
なのでゾーン爺、もう下がってよいぞ。」

もちろんゾーン爺は彼女が一人になったら自慢の羽で抜け出す魂胆だというのは理解してる。

だが…

「…わかりました。
ならわしは隣の部屋で待機しておりますのでなにかご用があればすぐに申し付け下さい。」

あえて離れることにした。
姫様はさっきの2倍くらい目を輝かせている。

そしてゾーン爺は部屋を後にし、扉を閉めた。
そして…

「ねわぁっ！ゾーン爺！
窓に新たな硬化魔法をかけたな！」

窓だけでなく、部屋全体にである。

そしてゾーン爺がいなくなり、窓も開かない部屋に姫様は一人取り残された。
つまり、脱出の手立ても、外に出る為の交渉をする相手もいないのだ。

全てはゾーン爺の計算通り。姫様はまんまと嵌められたのだ。

と、姫様からやっとここさ開放されたばかりのゾーン爺の所に、一人の兵士がやってきた。

「ゾーン様、ゼノア隊長から連絡です。」

そういいながら、碧い手の平サイズの魔石をわたす。

「うむ、ご苦労。
あー、ゼノア、わしじゃ。」

『ゾーン爺、突然だがあの光とカームルについての報告だ。』

「ほぅ、もうわかったのか？」

『ああ、それらは両方一人の青年がやったことだった。
ちなみに彼はいま我々とともに城ついて、いま城門にいる。』

「ちょっとまて、連れてきたのか！？
そんな危険な者を城にか！？」

『そうだ、だが彼は決して悪人ではない。
私が保証する。
それにそもそも、あの草原に放置しとけというのか？』

「うぅむ…」

もっともだ。
それに、ゼノアはあの若さで第一師団の隊長になる程の実力の持ち主。
もちろん人を見る目も人一倍ある。

そんな彼がいうのだから大丈夫だとは思うのだが…

「まぁお主が言うなら…
でも、のぅ…」

やはり不安が残る。
だがこんどはさらに驚愕な一言をゼノアは語った。

『それで実はその青年、ナルミというのだが、彼は実は…』

ここで少し間を置いて。

『実は、黒髪に黒目なのだよ。』

「…は？」

ありえない、と思った。

髪や目はその者の魔力や属性により変わってくる。
水なら青、火なら赤という具合にだ。

それが黒、聞いたことがない。

ところで、彼はいま廊下にいる。
姫様から逃れて部屋からでてきたばかりだったのだ。

つまり…

「それは本当か!?ゼノア!!」

「うぉっ！」

大声で話してると姫様に聞かれてしまうのだ。ちなみに扉は開いてるが、出てはいないため文句は言えない。

「ぜひ見てみたい、私のところに連れてこい。」

「姫様！この者は得体も知れない、危険な者かも知れないのですよ！
そんな事をして万が一があったら…」

「でもさっき、ゾーン爺自身がそいつを城に入れるのを容認したでは
はないか。」

「うっ！」

痛い所をつかれ、何も言うことができない。

「それにゼノアが言うのだ、問題はなかろう。
と、いう訳でゼノア、連れてこい。」

『は、はぁ…』

一気にまくし立てられ、つい流されてしまったゼノアが頷く。

「よし、謁見の間でまってるぞ。」

そういい、一方的に通信を切った。

そして彼女はまず、普段着のドレスから正装に着替え、急いで謁見
の間に向かった。

ちなみに後ろでさわいでいたゾーン爺は無視して行った。

途中その者についてのいろいろな噂が兵士達から聞こえてきた。

なんでも、カームルを一撃で挽き肉にしたとか、魔物を召喚して兵士を一人廃人にした、などなど。

それらの噂を聞いて、少し怖くなったが、好奇心が勝っていたので気にせずに進んだ。

そして謁見の間に着いたら、先にゼノア以外の各隊隊長が待機していた。
多分ゾーンが護衛の為によんだのだろう。

そして彼女に遅れてゾーンもきた。
やはり年か、かなり息が切れている。

ちなみに謁見の間は小さい体育館ほどしかなく、奥に少しきらびやかな玉座がいくつかある以外は質素である。
それには理由があるのだが、それは今はおいておこう。

そして待つこと数分。
扉が重々しくひらいて、

ゼノアと共に、全身黒づくめの青年が現れた。

彼の姿に一同が驚いていた。

髪や目は皆報告で知っていたが、それよりも着ているものが凄すぎた。

ありえない程繊細できっちりとした編み目の服に鈍く輝く黄金のボタン。
襟裳には奇妙な記号が書かれた赤色の長方形の宝石（クラスの書か

れたバッチ）に、青い小さな勲章（校章）。
服だけ見ればどこかの軍人だが、本人に覇気が足りないのでそうとは思えない。
が
『こ、これは…』
そう、覇気はないが、異常に似合うのだ。
実は彼、元の世界でも隠れファンが結構いたりした。
そして以外と緊張しいな節のある姫様は、予想外の事に硬直していたが、やがてこう切り出した。
「…私はこのトゥインバル国の第三王女、エリザ・ルル・トゥインバルだ。
さっそくだがナルミとやら、お前の能力とは一体どんな物なのか見せてはくれないか？噂ではカームルを粉砕するとも魔物を呼び出すとも聞いているが。」
緊張からかまくし立てるように一気に言った。
すると周りの隊長達がざわめき始めた。
何故騒ぐのかわかってない姫様にゾーン爺が近づいてきて小声で
「姫様！こんなところでそれをやらせるおつもりですか！危険すぎます！」
と、あくまで小声で叫んだ。

姫様はなるほど、と納得はしたが

「だからなんじゃ、私はいますぐ見てみたいんじゃ！
それに隊長が全員いるのに危険もあるまい。」

ワガママ、暴走。
しばらく言い争いを続けていたが、こうなった姫を誰もとめることはできないので、仕方なく姫様の後ろに下がることにさせられた。

さらに、ゾーン爺との言い争いで緊張も解れ、いつもの調子を取り戻すことができた。
なので彼を真っ直ぐ見据え

「で、やってみてはくれないか？」

と言った。
すると今度は、彼が姫様を値踏みするような視線を送ってみた。
相変わらず覇気はないが…

真っ直ぐ彼の目を見ていた姫様にしか気付かない程の些細な変化だが。

『やっぱり、どこかの秘術の類かの。』

普通、秘術等は例え王族といえど他人には簡単に見せられない。
それがこの世界の常識である。

なので…

「…駄目か？」

泣き落とし、決行。
ちなみにこの方法はここにいるゼノア以外の全員一回は引っ掛かった。
ゼノアにはやったらすぐに見破られ、叩かれ、その痛みで泣きそうになった。

ちなみに余談だが、５番隊隊長は今の所１３回落ちている。
というか、全部に引っ掛かっている。

さて、このほぼ負け無しな泣き落とし。
彼には…

「まぁ、いいですよ。」

効いた。
口調は冷静だが、顔がかなり焦っている。
してやったりと姫は思い、ほくそ笑んだ。

そして彼は言葉を続けて、

「じゃあ…、ななにか要望はないですか？」

といってきた。

「要望って、まるでできない事などないような口ぶりだな。」

「まぁ、出来る範囲では。」

「それはそうだろう。

ではなにができる？」

「基本的になんでもできます…」

押し問答である。
そこでゾーン爺が…

「なら君が1番得意な事をやってみてくれないかの。」

よくやった、ゾーン爺！
姫様は心のなかでゾーン爺を褒めたたえた。

そして言われた青年は

「…わかりました。」

少し考えた後に答えた。
そして、

「ディカポルク。」

巨大化した。
呪文と共に、天井に頭がつくくらいに巨大化したのだ。

「なななななっ！なんだっ！これはっ！」

姫様の動揺しまくった声を聞いて、放心状態だった周りの隊長達が一斉に構えた。

すると、彼はすぐに元のサイズにもどって、両手を挙げ、敵意がな

いことを示した。

想定外、そして非常識にも程がある。

あれほどの術をたった一言の呪文だけで発動させるのもそうだが、
なにより、どの属性に分類すればいいかわからない。
そもそも、巨大化する術なんて聞いたことが無い。
しかもこれが彼の”１番得意な事”なのである。

「…ゾー…」

ゾーン爺に何が起こったか聞こうと思ったが、肝心のゾーン爺。
腰を抜かしていた。

それを見たエリザ姫、爆笑。
さっきまで驚いていたとは思えない程に笑っている。
何たって、あの常に冷静沈着なゾーン爺が腰を抜かしているのだ。
普段の彼からは絶対に想像できない姿である。

そして、彼女はしばらく呼吸ができないくらいに笑って腹筋がつった。

対するゾーン爺、普段の賢者のような威厳のカケラもなく、哀れにも尻餅をついている。

そして、落ち着いた所でエリザ姫が

「ヒィー、ヒィー、…ゼノア、判別器をもってきてくれ。」

苦しそうに1番隊長に命令を下した。

４回目＊苦労人は損をする《後編》（前書き）

いつにもましてみずらいかもです。

4回目＊苦労人は損をする《後編》

「ディカポルク。」

お姫様になんかやれとの漠然なご命令により困っていたら、後ろにいた爺が得意な事をやってみろってのたまいやがった。

なので、危険でない物をしばらく考えて思いついたのがこれだ。

黄色い本のアヒルっぽい王様候補の術である。

ちなみに彼が消える直前に暴走したときの彼のパートナーのかっこよさには惚れた。

普段ヘタレでカッコ悪いくせに、俗に言うギャップ萌えというやつだと自分は思う。

…興味ないっすよね、はい。

「なななななっ！なんだっ！これはっ！」

おぉう。

エリザ姫めっちゃ驚いてるよ、これ幻なのに。

てかまって！

皆さん、やめて、構えないで！

もちろん命は惜しいので、すぐに術をといてホールドアップさしてもらいました。

すると

「あっはははははははは！！」

エリザ姫大爆笑。

なに、両手挙げるのが笑いのツボなの、この姫様！

…違っぽいね。

なんか後ろの腰抜かしてる爺を指差してるし。

なんかかわいそう、まじ、すんません。

そして、大分収まったっぽい所で姫様が。

「ヒィー、ヒィー、…ゼノア、判別器をもってきてくれ。」

…判別器って、ナニ？

＊＊＊＊＊＊＊＊ゞ☆

判別器とは、その人の持つ属性や特性を示す特殊な魔法石である。

ｂｙ姫

これがこの数１０分の間に判別器とやらについて聞き出す事のできた情報である。

何故姫様かというと、後ろのゾーン爺（エリザ姫が愉快そうに紹介してくれた）は腰が大変な事になってるし、他は警戒しまくりで聞けないし、なによりゼノアがいないしで、必然的に姫様にきくしかなくなってたのだ

そして、姫様いわく

「聞くよりやったほうが早いし解りやすい。
そもそも、説明するのがめんどくさい。」

と、ついこないだ聞いたようなフレーズをいってきた。
なので判別器については全く解らない。

そしてなんだかんだで時間がすぎて、ゼノアが金色の台にのったなんかでっかい、直径1．5メートル程の水晶玉みたいなのが乗った金色の台を運んできた。

そして

「よし、ナルミ。
さっそくこの玉に手を入れてみるのじゃ。」

いれるて、無理。
どっからどう見ても水晶玉で穴なんか空いてないから入らないはずだ。

「すまん、触れども入りはしないと思うぞ。」

言い間違いだろうと思い、両手を触れた。
すると

「！！？」

入った、つか取り込まれた。
触ったとこからヌルッて感じに。

ぶっちゃけキモい。
中では手がゲル状の生暖かい物に包まれてる感じである。
なんかゾワゾワする。

で、入れたはいいが…

「…んん?
反応せんぞ?壊れたか?」

そう、なにも起こんなかった。
エリザ姫はテトテト判別器に近付き、壊れかけのテレビにやるようにびしびし玉を叩いてる。

そして自分はあることを思い出して、近くにいたゼノアに聞いた。

「…これ、魔力とかについて調べるの?」

「それだけでは無いが、今はそう設定している。」

ゼノアが答えて、確信を持った。

「あぁ、なら自分、魔力ないから反応するはずないよ。」

そう、自分に付けた神様的オマケ機能は魔力ではなく、もっと神懸かってるものらしいのだ。

「まて、魔力無しであんなことができるはずがないだろう!」

おわ、ゼノア顔ちかい。
そして外野、ガヤガヤうるせぇ。

「いやだって、実際反応しなかったし、ねぇ。」

「むぅ…。
なら今度は特性審査だ。」

そういいながら、いまだに判別器をいじめてる姫様を押しのけて、
ゼノアが判別器をいじりはじめた。

「…よし、これで設定完了。」

そう言って２０秒くらいしたところで

「うぁ、なんかでてきた。」

そう、でてきた。
右手からは金色の、左手からは銀色の光を放つ“何か”が。

それに１番反応したのがいつのまにか復活を遂げたゾーン爺さんで
ある。

「まてまてまて、なんだこれは。」

しらんよ。

「覇王に、勇者のオーラだと…
オーラが二つあるというだけで信じられぬというのに…」

はぃ？
オーラ？って二つあっちゃいかんのか。

そしてちょいまて、勇者はわかる、お約束だからな。
だが覇王とはなんぞや？

あれか、魔王の上位種か。
世界を混沌の底に沈めようとか目論んで世界中の魔王を統べたりしてるのか。

やっべ、自分には世界を滅ぼすつもりも、勇者に殺られるつもりもないぞ。いやまて、勇者も自分だからその場合自分は自害するのか？
あぁーーー！
わけわかんね！！

…とりあえず、いろいろと質問はあるが、手を抜いてもらえませんか？

「…オーラとか勇者とか、覇王とかってなんなんすか？」

やっとこさ手を抜くことができ、手に残る不快感に顔をしかめながら聞いた。

「そんな事もしらんのか？」

お姫様に馬鹿にされた。
なんか屈辱。

「そもそもオーラって何よ、二つあっちゃいかんのか。」

少しムッときたので突っ掛かるような口ぶりになってしまった。

そこで、ゾーン爺さんが説明してくれた。

「…オーラはだいたい一人に一つ、その者が持つ適性の事じゃ。
騎士なら騎士の、王族なら王族の色のオーラがあり、それによりある程度の将来の方向性が決まってくる。
とはいっても、生まれたときからではなく、生後5~6年程で出始め、それまでの教育によってかわってくるがの。
そして、オーラが二つなんて今までどの文献にも載っていなかったし、わしですらみたこともない。」

心底驚いていた様子である。

つか、オーラってつまりそれまでの教育がどんなんだったかつーことか？
なら、うちの親は勇者とかを育てる教育をしてきたらしいな。

ありえねぇっての…

そして、ブツブツ言いながら思案してるゾーン爺さんはほっといて、ゼノアに聞いた。

「じゃさ、勇者とか覇王とかってなに？」

「…勇者とは、世界を敵にしても全てを守り、世界を動かすし、革変をもたらす勇敢な者。
覇王とは、武と力ににより民を守り、畏怖による絶対的な支配をする魔王の覇者のことを指す。これが一応正式な文献に載っている定義だ。それぞれ、銀が勇者で金が覇王のオーラだ。」

…魔王って、やっぱりここは魔族の国か。

「まぁ今は勇者が“裏の善良な支配者”覇王が“表の善良な支配者”という認識が強い。
あながち間違ってはいないが。」

ふむ、カームルの時とは違い、えらく解りやすい説明だ。

だがまて、

「どこでどうやって裏とか表とかの支配者っつーことになったんよ。革命おこしたんなら、それこそ表舞台にたつことになるじゃん。」

「それはいまだにわかっていない、考古学者の間でも意見がいくつにもわかれていて説明しきれない。ちなみに私は彼の有名な勇者、オルバーハットの起こした“解放戦争”が原因ではな「ゼノア、落ち着け」…すまん。」

…姫、慣れてるな。

とりあえず、ゼノアは考古学好きというのと、自分がとてつもなく変態だというのがわかった。
と、そこでゾーン爺さんがなんかほざいた。

「…しかし、まさか本当に勇者のオーラが存在するとはのぅ…」

ちょいまて。

「本当にとはどういうことだ。
さっきのゼノアの話しでは何人も勇者はいたっぽいけど。」

「いやナルミ、実は彼らは周りからその功績を讃えられて呼ばれてるだけであり、勇者のオーラはでてなかったんだよ。
過去に一人だけそれを持って者がいたなんてゆう話もあるが、それは伝説の種族であって本当かどうかは定かではない。
そもそも、その人物がいたかどうかも疑問視されてる。
お伽話ではよく“勇者の銀色のオーラが悪い魔獣をたおした”なんていうくだりはよくみるけど、本当にそれを纏った者がいたという正解な記録は残ってないからな。
そもそも、お伽話でさえ勇「ゼノア。」…はい。」

ここまでくるとオタだよな、似た空気を感じる。
似てるだけで根本は違うが。

しかし、史上初ねぇ。
今までの勇者な人達はみんな３０秒しか命なかったんでねぇの？

というか、勇者はわかったが、覇王の方はどうなんだ？

と考えてると、エリザ姫様が好奇心からかワクワクした声で発言した。

「ところでナルミ、おまえはどこの国の王族じゃ？
覇王の黄金のオーラがあるということは王族なのであろう？聞いた話では“ニホン”という東の端っこにある島国らしいが、詳しく教えてくれ。」

空気が凍った。
いや、自分は「なにいっちゃってんの、このコ」的な気持ちだったんだが周りは違うらしい。

というか、自分は一般市民である。
そもそも日本は王制ではない。

そしてそんなことを考えてると、再び少しうるさくなった外野から小声で、ある会話が聞こえた。

「もしかして俺ら、他国の王族に刃を向けて、少しだけとはいえ拘束したってことになるのか？」

「ああ。
これが戦争の引き金になる可能性も十分にある。」

「しかも得体の知れない術をつかうし、魔力もないから探知もできない。
はっきりいって俺は勝てる自信が無いそ。」

うぉい！！
どんな勘違い！？通りでゼノア隊長の顔色が悪くなってるはずだ！！
そして日本にはこんな謎能力をもってるやつはいない！
あって陰陽道位だ。

即座にみなさんの勘違いを正さねば。

「いやまてまて！！
みなさん違う！勘違い！自分はただの一般市民の超平凡なフツーの人間で、王族とかそんなたいそうなものでは…な……ぃ？」

まて、何故に空気が再凍結する。
なにが「馬鹿な。」だ、馬鹿は貴様の頭だ、じゃじゃ馬姫。
そもそも、自分の言葉に問題なぞ…

問題なぞ……

…自分、人間ってカミングアウトしてるやん。

周りのお方々なんて、「なんでここに人間なんて生き物いんの？」って目でみてるし…

つか、もう音もない、誰も喋らない沈黙が重い。

…やっぱり、打ち首？

魔族様の本拠地にのうのうと侵入してきた自分はもしや、私刑ののちに死刑にされてしまうのか！？

とか考えてると、姫様がとんでもないことをしでかした。

「とぅ！」

「のぅわっ！」

飛び付いてきたのだ、皆様の目の前で。それにより自分は押し倒された形になった。そして彼女は自分の腹の上で全力の笑みを見せながらすわっている。

そして、女性特有の甘い香りと柔らかな…

てちがうわっ！

これ完璧に処刑ルートじゃん！

きっと「姫をたぶらかした罪で死刑！」とかいわれて首と胴体がサヨナラするんだ！

やだっ！ワ〇ピースの最終話を読むまで自分は死にたくない！

と、すっかりネガティブゾーンを展開していた自分に予想斜め４８０度位上をいく言葉を姫様は発した。
自分の胸倉を掴んで。
くるちい。

「ナルミ！おまえは本当に人間なんだな！」

「はっはい！？
そっ、そうです、人間でぶっ！！」

姫様は自分の頭をめっちゃゆさぶってくれる。なので最後は頭を打った。

「ならナルミ！私の近衛兵となれ！」

「…ハィ！？」

思わず叫んだ。
…自分の脳では処理が追い付きません。

と、ここで姫様が何を思ったか、いきなり手を離した。

ガンッ！！

それにより頭が落ち、いい音がなった。
自分、悶絶。

そして痛がってる自分に姫は

「す、すまん。」

…ちゃんと謝罪できるんだな、こいつ。

「と、そんなことより、ナルミ！
おまえは一体なんの職業についている！？」

前言撤回、あやまれてねぇ。そんなことってなによそんなことって。

つか職業て、自分はただの学生（バイト歴ナシ）よ。
んなことといわれても“高校生”としか…
いやあるな、実際今は存在しないが一度は憧れた職業。
奴らに解るかはわからんがからかってみよう。
せいぜい聞いたこともない言葉になやむとよいわ。

「自分は、武士だ。俗に言う侍だ。」

カッコつけていってみた。
そう、自分は男子なら誰でも憧れであろうものを名乗ったのだ。実際は、今の時代にはもういないから武士の心を持っているということにしておこうという逃げ道を作っての発言である。
これなら嘘にはならない…ハズ。

なぁに、ほんのおちゃめだ。仏様なら許してくれるべ。神様には許してもらわんでも別にどーでもいいし。

…ちなみにこの時自分が、最大級に自分の首を吊しあげている事には全く気がつかなかった。
なので自分はその時、「みなさんには侍やら武士やらの単語はきい

たことはないだろうからそろそろカミングアウトしときましょう。」
なんて甘い考えをしていたのだ。
直後に思い知ったが。

「とはいってもこ「やはりそうか！やはりナルミはブシでサムライで人間なのだな！そうだろう！」

…もしかして自分、悪ふざけで地雷ふんだ？
攻撃したら万能地雷クレイモヤにひっかかった？

…言えないよ、この娘の純な瞳、真っ直ぐで輝きまくってるし。
いまさら嘘ですなんて言えない。自分にはこの期待を裏切る勇気はありません。

「…はい、そうですぅ！！」

…いっちゃった。
もう後戻りできねぇ。
くそ、誰がタイムマシーンをくれ。
ふざける前の自分をどうにかしてとめてくる。

つか、またかよ…

そう、地獄の首ブンブン、再開。
今回はさっきより多めにぶつけております。

そしてエリザ姫はテンションを上げて。

「ならやはりニホンとはバクフのことで、伝説の勇者であるセタ・ソウジロウは実在したのだな！

そしておまえは伝説の勇者と同じ種族で同じ職業なのだな！」

まて、痛いからやめなさい。
そろそろお兄さん身長縮むからやめなさい。

というか幕府は国名ではないぞ、そして誰だセタソウジロウって。
そしてなんだ、伝説の種族って。

いろいろと疑問はあるが、とりあえず首とれそうだからやめて。
質問もまともにできないから。

そんな事を考えたのを最後に、自分の意識は一瞬で途切れた。
後から聞いた話しによると、自分はそのとき脳震盪で気絶したらしい。

そしてその報告と一緒にゼノアから聞いた話しをまとめると
・セタソウジロウとは約３０００年前に世界を救った伝説の勇者で、勇者のオーラを有していたと言われる唯一の存在である。
・彼はバクフというものに仕えていたらしく、それはそういう国のことではないかと一般に思われてる。
・セタソウジロウも魔力をもっておらず、みたこともない武器と不思議な技を使いこなしていたらしい。
・彼は自分をこの世界にはない種族の“人間”という種族であると言ったらしい。
・そして、自分は気絶している間に近衛隊に編入されてしまったらしい。（拒否権ナシ）

以上の５点である。

かくして、自分こと長谷川鳴海は種族・人間の職業・侍兼近衛兵と

なった。

…めんどっ！

～サイドエリザ～

「ところでナルミ、おまえはどこの国の王族じゃ？
覇王の黄金のオーラがあるということは王族なのであろう？聞いた話では“ニホン”という東の端っこにある島国らしいが、詳しく教えてくれ。」

姫がこの言葉を発したとき、空気が死んだ。
正確にはナルミとエリザ姫の二人以外の表情が硬くなった。

そして少しざわめきはじめた。
全員が全員、ここにいるナルミという他国の王族らしき青年にはたらいた無礼が原因で強大な未知の力を持つ軍団が王都に攻めてくる様を想像して青ざめたのだ。
ましてや先程彼のやったようなことを軍団でやられたら、いくら王都でも2日を待たずに陥落する。

そして、周りの者達がそんな事を考えているのを感じ取ったのか、ナルミが弁解をはじめた。

「いやまてまて！！
みなさん違う！勘違い！自分はただの一般市民の超平凡なフツーの人間で、王族とかそんなたいそうなものでは…な……ぃ？」

始めたのだが、その一言がざわめきすらも消すことになった。

「馬鹿な」

ナルミの話を聞いて、エリザの口から無意識のうちに言葉がでてきた。

そして、彼の言葉の意味を理解した。

それからのエリザの行動は速かった。

「とぅ！」

「のぅわっ！」

まずは捕獲、そして逃げられないようにマウントポジションをとり…

「ナルミ！おまえは本当に人間なんだな！」

こう質問した。

いや、質問よりも確認に近い。

「はっはい！？

そっ、そうです、人間でぶっ！！」

それを彼が肯定ことの嬉しさで彼を揺さぶって、それにより彼が頭を打ったが全く気付いてないようだ。

そして、彼女は自分の思うままに動き出す。

「ならナルミ！私の近衛兵となれ！」

「…ハィ！？」

突然の事に戸惑うナルミ。
しかしエリザ姫は彼を自分の近衛兵にすると勝手に決めてしまった。
そうまでしても彼を近くに置いておきたいのだ。
何たって伝説の種族の一人なのだから。

そこで、ふとあることを思い付き、彼女は掴んでいた手をはなした。

ガンッ！！

すると、ナルミの頭が勢いよく床に打ち付けられた。

さすがにこれには気付いて、素直に謝ることにした。

「す、すまん。」

だが本題は謝罪ではない。
もしもナルミが伝説の種族ならもしかしたら…
そう思い、質問した。

「と、そんなことより、ナルミ！
おまえは一体なんの職業についている！？」

すると彼は一瞬考え

「自分は、武士だ。俗に言う侍だ。」

こう答えた。
そう、ナルミは伝説の勇者“セタ・ソウジロウ”と同じ種族で、さらに彼と同じ職業なのだ。

「やはりそうか！やはりナルミはブシでサムライで人間なのだな！そうだろう！」

「…はい、そうですぅ！！」

またも姫はナルミの襟裳を掴み、振り回し始めた。
その顔には、喜びの表情が誰が見てもわかるほどに張り付いている。
ちなみに、ナルミは何度も頭を打って軽く悲鳴をあげているが、エリザの耳にはとどかない。

「ならやはりニホンとはバクフのことで、伝説の勇者であるセタ・ソウジロウは実在したのだな！
そしておまえは伝説の勇者と同じ種族で同じ職業なのだな！」

確認とも質問とも取れる事を言いながら、エリザは未だにナルミを揺さぶっている。

だが、返事がないことに気付いて、揺さぶるのをやめてみてみると、白目を剥いて気絶していた。

それをみて少し、彼女は冷静さを取り戻した。

とりあえず姫は、驚愕の事実と彼女の奇行とで呆けていた周りの隊

長たちに指示を出した。

まずはゼノアにナルミを医務室まで連れて行くように指示し、他の者達に判別器の片付けとナルミを近衛隊に編入させるように指示、そして最後に彼女はゾーン爺に

「三日後にナルミを連れて王都にいくぞ。
他の護衛については任せた、私は準備に取り掛かる。」

王都に戻る事を告げた。
その言葉に驚いていてるゾーン爺を余所にエリザ姫は

「…ふふふ、私だけの二つのオーラを持つ人間の騎士。
だれも持っていない、漆黒のサムライ…ふふふ。」

静かに呟きながら、自分の部屋に戻っていった。
ただ、その姿がご機嫌なのだがとてつもなく不気味で、それを見た周りの者はみな軽く戦慄したという。

5回目＊何が原因で人生が狂うかわからない

さてさて、今自分は美少女と形容して差し支えがない１６０くらいの金色の髪と目をしたお嬢さん（犬耳＆しっぽ付き、ちなみにサイドテール）と爽やかという表現が似合う１７０くらいの青髪で緑の目なお兄さん（舌先が二つに割れていて、それをさっきからチロチロ出したり引っ込めたりしてる）と対峙しております。

え、なぜかって？

この二人が近衛隊の隊長と副隊長だからダヨ。
だって、いつのまにか自分は近衛隊っつーのに入れられてるらしいんですよこのやろー。
ちなみに前回姫様の近くにいなかったのは姿を隠して気配を消して、影から裏から彼女をお守りしていたらしい。
つまり、忍者的な？

そこ、とってつけたよーだとか言わない。

…話しが逸れた。
そう、つまり強制的に本人の意思関係なく自分はこの二人の部下にさせられたというわけで。
新入りは先輩に挨拶せにゃならんゆーわけで…

…その先輩（女性の方）がめっちゃお睨みになられているわけで
もうなれたヨ、この世界の人（？）達の鋭い視線なんて、もう痛くも痒くもないよはっはっは。

…ごめんなさい、嘘です痛いです。
そして牙は怖いです。

まぁ今回は彼女らの気持ちも痛いほど解るよ。何たっていきなしさっきまで不審者だったどこの馬の骨ともしらん奴があなたたちの部下になりました、何て言われたら文句も言いたくなりますよね。
逆にお兄さんの優しい眼が間違った反応だと自分は思います。

つか近衛隊って姫様の護衛でしょ？
ならきっとこの人達もなんか試験とか試練とか乗り越えてきたエリートな猛者なんでね？

そこにぽっと出の一般人が入るって、無理あるっすよ。

さて、ここまで至った経緯をかるーく回想してみよう（現実逃避）ではないか。

…最近回想シーン多いな。
まぁ大丈夫だろう、今回は短いから、うん、…たぶん。

＊＊＊＊＊＊＊＊　☆

ここは医務室である。

頭連打の刑に処された自分はタンコブと言う戦利品の対価として意識を手放した結果ここにいる。

…よするに、頭打って気絶しました。

そして、ゼノアが運んでくれたらしい。

…ハァ。

さて、今自分はゼノアに質問をして、いろいろと分析している。
主にセタソウジロウについてだが。

「で、最後にソウジロウは、世界を支配しようとした闇の賢者、グリー・スヌタスを討ち取り、一緒に冒険したエルフの魔女のリリーザ・マーグと結ばれたというわけさ。
ちなみに、彼は結婚したあと何処に行ったかは解らないが、一説ではリリーザの故郷で二人揃って仲良く隠居したっていうのが有力だよ。」

いゃあ、さすが歴オタ、聞きたいこと全部教えてくれた。
…いらんことも含め、3時間は話しを聞かされたが。

つかセタよ、自分より勇者してるでないか。
最後はハッピーエンドだし。
美女と結婚……羨ましすぎだ。

まぁだが見えてきたぞ。
今から話すのは自分の推測と聞いた話しをまとめたものだが、ぶん合ってるはずだ。

まず、セタソウジロウとは江戸時代のそれなりに偉い武将で、なんせ関ヶ原の戦いでは小早川を仲間に引き込むのに一役買った程の武将である。
なぜこれほどまでの武将の名前が教科書に載ってないかというと、理由は簡単。

３０００年程前にあの貧乏神様がここに飛ばしたからだ。
奴は自分を飛ばすときに“自分をいなかったことにした”とかのたまいはじめたので、セタさんも同じ目にあったのだろう。

で、セタさんはこの世界を支配しようと目論んでいた賢者が凶暴化さした魔物をばったばったと薙ぎ倒し、エルフやリザードマン等を仲間にしながらその賢者を倒して、世界に平和をもたらした勇者となり、前述のエルフと結婚してこの世界のどこかで骨をうずめたと。

そして、関ヶ原の戦いは１６００年、つまり約４００年前の出来事である。
なのに彼は３０００年前にきた事になっている。
この世界での一年がどれほどの長さかはしらんが、同じだとしたら７．５倍こちらの世界の時の流れは早いということがわかる。

…

……まぁ、最後のはいい、いやいくないけど。
あっちで一年たったころに戻ったら自分２４歳になってるとか悲惨過ぎるが今は目をつむろう。

それよか重要なのは…

セタよ、戻れなかったか…

くそ、彼が戻ってたらそれと同じことして戻ろうと言う目論みがはずれてしまった。
つか、戻る方法探してすらいねぇな。

何たって、結婚してんだし。

…どうしよう。

「な、なぁナルミ。」

どしたよゼノア、まだ関ヶ原のことを“ツキノハラ”といった事を後悔してるのか？

大丈夫だ、君は悪くない、悪いのは小早川の事を“コバワガラ”と伝えていた先祖が悪いんだ。

と思ったが、それは言わずにどうした、とだけいっといた。

「いや、その君の持ってる、あの、き、キョウカショ？だっけ、後で見せてくれないか？」

遠慮がちに言ってきた。

そう、自分はさっきまでの話をまとめるのに日本史の教科書を使っていたのだ。

そしたらゼノアが並々ならぬ興味を示した。

まぁ、知らない国の、更にお伽話としか思ってなかった英雄の故郷の歴史が記された本だ、歴オタなら興味を示さないはずがない。

だが

「あ～、いいけど、読める？」

「…読めない。」

そう、文字は通じないのだ。
教科書を手にとり、落ち込むゼノア。

暗っ！

…とりあえず、しばらくは読み聞かせることと今度字を教える事に落ち着いた。
そしたらめっちゃ笑顔になった。

…ほんと、ファーストコンタクトのあれは別人だったのかね。

「あ、そうだナルミ。
忘れてたが、もう君は近衛隊にはいっているから、一回隊員に挨拶に行ってみたらどうだ。」

近衛隊、ね。
やだけど、拒否権ないんだよな…

「…ハァ。
じゃあ、行ってみるか。」

ため息と共にベッドから下りる。

「ゼノア、その隊員のいるとこに案内してくれ。
そして近衛隊の基礎知識をくれ。」

「あぁ、ではいこうか。」

ゼノアも立ち上がり、説明を聞きながら目的地へと向かう。

なんでも、近衛隊とは自分含め7人しかいない小数精鋭の部隊で、エリザ姫を全力で守り、世話をするのが仕事だとか。

…世話ってのが気になるが。

そんな事を話していたらいつのまにか目的地についた。
そこでゼノアは用事があると、どこかに消えていったので、自分一人で挨拶することになったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊÷☆

回想おわり。
これがここまできた経緯です。

ちなみに何故隊長と副隊長だけかと言うと、ゼノアが挨拶のためにと手を回してくれたそうな。
他は仕事中とさ。

てなわけで、コンタクトタ～イム。

「はじめまして、自分は長谷川　鳴海といいます。
よろしくお願いします。」

スッと手を出し握手を求める。
舌チロな兄さんに。

「こちらこそ、僕はリムロ・スザルス、第三王女の近衛隊副隊長を勤めています。

気軽にリムと呼んで下さい。
ちなみにラミア（蛇族）です。」

微笑みながら応じてくれた。
手はひんやりしていて少しびっくりしたが、好青年ではないか。

つかラミアって下半身が蛇な印象がつよいな。
ファイ○ルファンタジーのやり過ぎか？

一通りリム副隊長と挨拶を終らせて、隊長の方に向かい、

「よろしくお願いします。」

同じように握手を求めた。

ペチッ

叩かれた、予想は出来たけど。

「私の名前はミミリィ・エクスプル、近衛隊隊長をしている。
ちなみに君を近衛隊の一員と認めるつもりはない。」

やっぱり、ね。

「ミミリィ、姫様のご命令だよ。
それに彼の魔法はそこらへんの魔術師より遥かに強力だし、入れて損はないと思うけどなぁ。」

リム副隊長、それは褒めすぎでね？
そもそも魔法でないし。

自分の力でねぇし。

「…リム、敬語。私隊長なんだから。
公私混合しない。」

「はいはい。
で、どうしましょうか、ミミリィ隊長。」

「…あぅ。」

…ミミリィ隊長、自分で敬語使えゆっといて使われたらしょんぼりすんのはちょっと。
つかリム副隊長、そのニヤニヤはわかっててやってるな。

「とりあえず、僕は自分の意見を言わせて貰いました。
最終的な判断は隊長に一任いたします。
でも最後に言わせて貰いますと、彼は超一流の魔法使いであります。
彼を倒せる者は非常に少なく、味方にいると大変頼もしい存在かと。」

だから副隊長褒めすぎ。
つか自分としては認められないままのがいいんですが。

しかし、ぜってーわざとだな。
ミミリィ隊長、物凄い早さでしょんぼりしてるし。
副隊長は全力でニヤニヤしてるし。
たぶん、原因は敬語と…

「…うぅ、そ、そうだな。
実際に君の魔術用事があってみてないし、なにより姫様のご命令で

ゼノア隊長の推薦だからな。
…よし、じゃあ一回私と試合をして、それから決めよう。
……絶対勝ってリムに私を認めさせる。」

リム副隊長の煽りですね。
つか隊長、小声でも丸聞こえです。

そして副隊長、いつか刺されますよ?
つか刺されろ。

…とゆうか、これ死亡フラグでね?

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊(　☆

ただいま、中庭にきております。
中庭には、２５０メートル四方くらいの石が敷いてあるでかいステージみたいなところがあり、まわりには野球場の観客席みたいに階段状の席があるのです。

もはや闘技場、コロシアムよコロシアム。当て字にすると、殺死阿武。

つかなんでこんな観客いんのさ、ざっと２００はいるぞ。
これ決まったとき、三人しかいなかったよね。

「…なんでこんなにいるの?」

お、ミミリィ隊長も同じ疑問をお持ちで。
つか、とっとと降参して“自分、近衛隊に向いてませんアピール”をして、さっさと自由をつかみたい自分にとっては降参の恥ずかしさが何倍にもなるんだが。

「あ、僕があつめました。
というか、ミミリィ隊長が出ると言ったら若手が勝手に寄ってきました。」

おまえかあぁぁぁぁ！！！

「ちなみに、ナルミ君が出るって言ったらエリザ様もくるっていってました。」

「「！！！？？」」

おい！
姫様の前っておまっ！
めっちゃ降参しづらいやん！

「っちょ、待って下さいリム副隊長！！
いきなり姫様の前だなんて！」

「だぁ～いじょうぶ、審判僕だから。
問題ないよ。」

なお問題じゃい！！
あなたが審判ならどうなるか想像できません！

ほら、ミミリィ隊長もなんか言って！

「……姫様の前で勝ったら、こいつも私のこと…」

ミミリィ隊長、乙女全開。

…どう収拾つけようか。

と、ざわめいていた観客を静める鶴の一声がその場に響いた。

「静まれ！！」

静めるな！

自分は沈黙が嫌いなのだ！特にこの世界のは！

そしてこの試合辞退させてください！

と、そんなことがあのじゃじゃ馬に伝わる訳もなく、奴は1番高いとこの豪華な席に腰を下ろした。

隣にはゼノアとゾーンのジジイまで立っている。

「お、姫様がきたみたい、じゃあ始めようか。」

ヤダ、始めない。

ゼノア～、ヤッホー。

「…どうしたの？」

おっつ、現実から脱走してた。

つかゼノア、律義にかえさんでいいから。

そして隣の愚な姫よ、貴様に手を振った訳ではない。

本命よりマジになって返すな、はしたない。
おぃ！何姫様に対抗心持ってるんだゼノア！
貴様は馬鹿か！？

「…ゼノアって、いつもあんなんなんですか？」

「ゼノア隊長？うん結構あんなかんじ。強いけど、中身は結構…
というか、初めてていいかな？」

…ごまかし切れんかったか。

「じゃあ互いに、誓いを。」

誓い？

「私、ミミリィ・エクスプルは持てる全てを尽くし、この者と戦う事をここに誓う。」

あ、そゆうのね。
事前に教えとけよこのやろー。

「じ、自分、長谷川　鳴海は持てる全てを尽くし、この者と戦う事をここにちゃかう。」

…噛んだ。

副隊長、めっちゃこらえとる。
つか姫やゼノア含め観客よ、笑うなら笑え、その我慢してるビミョーな笑いが余計にきつい。

「…リム、開始の合図。」

ミミリィ隊長はいたって真面目。
対してリム副隊長

「は、はじっ、くふっ！」

だれより面白そうだ。
つか審判使い物にならんから中止でいくね？

およ、ゼノアが観客席乗り越えてきた。

「リム、姫からの命令だ、代われ。」

「ご、ごめっ、っぷ！」

どんだけつぼってんねん、ワレ。

「…では、試合開始！」

リム副隊長が退場して、すぐにゼノアが開始の合図をした。

さて、ちゃっちゃと降参して終わらしましょ
て、うぉっ！

「ぼーっとしてると、首とぶよ？」
怖っ！

つか装備に問題ありだろ！

何たって
自分
・詰め襟
ミミリィ
・鎧
・両刃の剣と腰にレイピア

ねぇ、せめて武器かしてよ。

なんて考えてる間に、またも迫るミミリィ。

右肩に一撃

うぉっ！

ぎりぎりかわす。

無理、武器無しはきつい、せめてたてうっぁ！

腹部への横へ薙ぎ払うような一撃が掠る。
少し服がきれた。

…プチッ

自分のなかのなにかがキレた、っか吹っ切れた。

てなわけで

…武器がないなら造るまで！（ヤケクソ）

パァン！
バチバチッ！

ヤケクソになった自分は床を素材に武器を作り出（錬成）した。
両手パンして。

で、出来たのが。

ジャキン！！

妖刀・正宗
そう、セ○ィロス様の愛刀である。
身の丈の二倍近くある日本刀である。

…どした。
おい、ミミリィ隊長もギャラリーも、何目を真ん丸くしてんだ。

…とりあえず、

「…交わせるか？」

ズバババババ！

「！！？」

ディ○ディア仕様で行きましょう。
まあ、切れない仕様の正宗だし、死なんべ。

ちなみに使ったのは縮地です。

いっぱい剣圧飛ばすあれです。

…お、避けた。
ジャンプ力すげー。

「っつ、なんだ、今の攻撃は!?
なんなんだ、その武器は!?」

着地しながらミミリィ隊長が聞いてきた。
日本刀知らないのか。
セタさん伝えなかったのかしら?

まぁいいや。
そんなことよか。

「降参しません?」

「っ!バカにっ、するなぁ!!」

うおっなんだ、いきなりキレんなよ。
カルシウムとれ、カルシウム。
つか、なんかぶつぶついってるけどなに?
うぉ!地面からなんかでてきた!

「グ、グオァァァァ!」

これは、俗にいうゴーレムか。
１０メートルほどのでかいの、それが二体。

「いけっ！！」

ミミリィ隊長の号令で同時に襲い掛かってきた。
うーん、相手がゴーレムなら別にいいよね♪

「カモン、ジャイアント！！」

そう叫びながら右ポケットからＧＣコントローラーを取り出し、片手だけでＡボタンを押した。
いや、なんでもよかったんだけどね、実際。

すると

ドガァァァァ！！！

天から極太レーザーが降ってきた。
これによりゴーレムさんはニ体とも消滅。
奴らが居たところは巨大クレーターとなっている。

…後から思うと、ガミガ○ロボなんてマイナーな技、よく使ったな。

さて、肝心のミミリィ隊長はとゆうと。

「……へ？」

脳が追い付いてないご様子。
クレーターの前でぼけっと突っ立ってる。
とりあえずボケッとしてる隊長の首に刃をむけて。

「降参、します？」

再度質問。

「っな！」

隊長やっとこさ覚醒、だが時すでに遅し。

「っつ！……わかった、降参する。」

あや、素直。

すぐに正宗をよけ、審判（ゼノア）を見る。

すると頷いて、

「勝者、ナルミ！」

高らかに叫び、それと同時に歓声が…

歓声が…

……

……

……あれ？

なに、この無音。

もっとこう“ワーー！”とか“キャー！”とかないん？

なんか変なとこでもあった？

試合は自分が勝ったし、何も…

…勝っちゃだめやん

やっべ、制服切られた辺りから暴走してた、自分。

いやだってね、言い訳だけど制服ってたかいんよ、月お小遣１５００円な自分は一回制服を破いてしまい、１０ヶ月近く小遣いが無くなったんだぞ。
そりゃあ怒るべ、ふつー。

１０ヶ月よ１０ヶ月。
ただでさえ少なかったのに…
ちなみにお年玉も没収で総額約五万円のディスアドバンテージです。

…はい、正宗みたいに錬成して直せば良かったですね。
バカですね、…ハァ。

とりあえず、正宗と床元に戻して引っ込みましょう。えい。

…いまさらだけど

ちゃっかり能力使いこなしてしまってる自分が嫌になるよ。

…ハァ。

～サイドゼノア～

はっきり言って、この試合はミミリィが優勢だった。
最初の一撃により、ナルミの眼には焦りが見え、次の一撃で流れが完全にミミリィに傾いた。
誰もがミミリィの勝利を確信した。

次の瞬間までは。

ミミリィの腹部を目掛けた三撃目、これはナルミの服を少し切っただけだったが、これを受け、ナルミの目の色が変わったのだ。

ナルミは後ろに下がり、ミミリィと距離を取った、そして

パァン！
バチバチッ！

ナルミが手を合わせ、即座に床に手を付けると、この音が鳴り響いた。
そして、この音が鳴った直後、彼の左手には“なにか”が握られていた。

彼の身長の二倍はあろうかという、見た事がない片刃の剣、いや、

本当に剣なのかすらわからない。
その奇妙な武器と、“武器を取り出す”という非常識な謎の魔法。
これをうけて、驚かない者などいない。
現にミミリィ含め、ゼノア以外の全員が何が起こったか理解出来ずにいる。
ゼノア自身も、ナルミが服を取り出すところを目撃してたので　そこまではいかないが、それでも驚いてはいる。
と、呆然としてるミミリィに向かってナルミが
「…交わせるか？」
ズバババ！
一言と共に攻撃を仕掛けた。
傍目は武器を一振りしただけに見える、が
「！！？」
ミミリィが攻撃を察知し、跳んで避ける。
すると、ミミリィの居たところはまるで何回も切り付けられたかのようにえぐれていた。
それを見たミミリィは青ざめながらこう言った。
「っつ、なんだ、今の攻撃は！？
なんなんだ、その武器は！？」

ミミリィの疑問ももっともだか、試合の途中で自らの手の内を教えてくれるはずもない。
代わりにナルミは

「降参しません？」

こう挑発した。
挑発としても余りに相手を馬鹿にする口調で。

「っ！バカにっ、するなぁ！！」

それを感じとって、そして先程の事から焦ったミミリィは冷静さを欠いて挑発にのせられた。

そして、あろうことか実戦では周りの補助を必要とする程の長い呪文を持つ、彼女最強の大技をだそうと詠唱を始めたのだ。

ゼノアはナルミがこの隙を逃さずに勝負を決めようとすると考えたが、

『…なぜ、動かない？』

そう、彼は全くその場から動こううとしないのだ。
あさつまえ、余裕の笑みを見せながらミミリィのことを見ているのだ。

そして

「グ、グオァァァァ！」

二体のゴーレムができあがった。
彼女の持つ大地の属性と、彼女の魔力とを組み合わせた鉄壁の守護者。

「いけっ！！」

ミミリィ号令で二体のゴーレムが同時にナルミに襲い掛った。

しかし、ナルミはこれをみて、今まで見たことがないほどの歪んだ笑顔で叫びはじめた。

「カモン、ジャイアント！！」

そう叫びながら彼はポケットから右手で紫の何かを取り出し、それをそのまま親指で押した、すると

ドガァァァァ！！！

空から、神の怒りの如き光が降り注ぎ、二体のゴーレムを裁き、滅した。

彼の叫んだ言葉の意味も、取り出した物も、果ては何がおこったのか理解することが出来る者など、当事者のナルミを除き誰もいなかった。

そして、自らの最強呪文を打ち砕かれたミミリィはというと

「……へ？」

呆然自失、この一言に尽きる。

自分の最強の呪文をたった一撃で粉砕されたのだ、無理もない。
そして、そこにナルミが近付き、彼女の首に武器を突き付けて一言。
「降参、します？」
今度は挑発ではなく、確認だった。
「っな！」
やっと現実に戻ってきたミミリィ。
しかし、この状況はどうやっても覆せない。
「っつ！……わかった、降参する。」
さすがに彼女もそれを理解出来たようで、渋々ながら降参する。
すると、ナルミがゼノアの方を向き、ゼノアも頷いてこう宣言した。
「勝者、ナルミ！」
観客は皆、目の前の出来事が理解出来ずに沈黙していた。
そして、しばらくしてナルミは闘技場を一瞬で元に戻し、去って行った。
その時、彼の見せた後悔と悲しみの表情をゼノアはしっかりと目撃した。
そして、すぐに彼を追い掛けたい衝動を押さえ、姫様への報告を済ませた後に彼の姿を捜し、駆け回るのだった。

～おまけ・サイドエリザ～

「…フ、フフフフ。」

その日の夜に、彼女は自らのベットで一日を振り返りながら笑っていた。
いや、彼女に自覚はないが、自然と笑いが込み上げてくるのだ。

「…フフフ、人間の覇王で勇者で強くて…
私だけの近衛騎士…」

譫言のように、小さく笑いながら静かに発した言葉。
頬は紅く、眼は恍惚としている。
傍目からは恋患いのようもにみえるが…

「早く兄様達にも自慢して、父様にもナルミを認めさせて上級騎士としての二つ名を付けて貰って…
…フフフ、そしていずれは私もナルミの技や秘術を教えて貰って…」

誰も持ってない人間の戦士（おもちゃ）を手に入れた優越感と、これからの事を考えて悦に入っていただけである。

昔からゼノアに歴史を語られた中でも、彼女はセタがそうであったという“サムライ”という戦士に並々ならぬ興味を持っていた。
それが自らの側近ともなれば自然と笑みは零れてくるのもうなずける。

更には、先程の試合で彼が途方もなく強い事も証明された。
彼はエリザの想像以上の人物だった。

「…フフフ、全世界の王族が羨む究極の戦士、他の王族の反応が見てみたいものだ…
…よし、今度のパーティーに連れていって、他国に自慢する事にしよう。」

…もしかしたら、この自分の欲望に忠実なエリザ姫に目を付けられた事が、何よりも彼の不幸の始まりだったのかも知れない。

そして、人間の戦士こと長谷川　鳴海。
彼がこのことに気が付くのには余り時間が掛からなかったという。

5回目＊何が原因で人生が狂うかわからない（後書き）

…ガミガ〇ロボ、解るひといますかね？

いたら哀愁の四〇半ボンバーとどっちがよかったかコメントください、喜びます（笑）

6回目＊人間やると意外と出来る（前書き）

いつのまにかユニーク一万、ＰＶは六万を突破して、コメントもいっぱいいただいて…

みなさんありがとうございます。

自分、受験生で更新がこれからもっとおくれるかもですが、これからもよろしくお願いします

いつかコメントも返します。

6回目＊人間やると意外と出来る

…朝である。
この世界初めての爽やかな朝である。

今、自分は昨日ゼノアに案内された東向きの窓のある優良物件で、開け放たれた窓からの清らかなそよ風と日光を受けながら、ベッドに腰掛けている。

ちなみにその時やたらゼノアが自分に気を使ってた気がしたがなんだったのだろうか。

…そんなことよか、この清々しい朝に今、自分は

「弟子にして下さい！」

昨日のイヌミミ少女に土下座されている。

ｗｈｙ？何故？

「…ナゼニ？」

「昨日の試合で、私は自分の力を過信している事を知りました。私は近衛隊として、姫様を護るべき立場です。
ですが、このままでは、弱いままでは自らの使命を全うする事ができません。
なのでどうか、私を鍛えて、エリザ姫様を護れるだけの力を！どうか！」

おい、君は頭を割りたいのか？
ゴンゴンいってるぞ。

「…つっても、なんでじぶ「ボクが奨めました。」おぅわ！！

リム副隊長、参上。
天井から目の前に落ちてきた。

「昨日の試合でミミリィは君に圧倒的大差で負けて、凄く落ち込んでてね。
なんならいっそ弟子にしてもらったらって昨日の夜に冗談のつもりで話したら、朝起きて着替えた途端に走って弟子入りにいくんだもん。
びっくりしちゃった。」

…またですか。またあなたですか。
つか、隊長と副隊長てそんな仲なんだ。
隊長の片思いかと思ってた。

「ちなみに、さっきそのことゼノア隊長に話したら、どっからか姫様が湧いて来て、「なら、ナルミを近衛隊の名誉顧問として入隊させて、近衛隊全体の教官にすればよいではないか。」って言ってたから、多分もう君は正式に“近衛隊名誉顧問”の称号を手に入れてるはずだよ。」

…はい？
なにいっちゃってんの、こいつ。

「…どゆこと？」

「ん、つまり君は“近衛隊新入隊員”でなく、“近衛隊名誉顧問”として僕たちを指導する立場になったというわけ。」

「自分の意見は？」

「ないに決まっておろう。」

じゃじゃ馬登場。
ドアを蹴って開け、ずかずかと部屋に入ってくる。
ちなみに、後ろにゼノアを引き連れている。

「ほれ、これにサインせい。
そうすればお前は晴れて、近衛隊名誉顧問となれるぞ。
ちなみに、王族命令。」

…泣いていいですか？
あ、ゼノア、助けて！

するとゼノアはそれを感じ取ったのか、自分の肩に手を置いた。
そして言ったのは

「大丈夫、ナルミならできるさ。
むしろ俺も教えて貰いたいくらいだ。」

…しにてぇ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊≧☆

はい、自分達は今、昨日のコロシアム的なとこに来ています。
達と言うのは、自分と近衛隊、そして姫もいるからです。

…姫、なんでいるん？

ちなみにゼノアは自分の隊の練習を見に行きました。

立ち位置的には隊長副隊長以外の近衛隊の面々が自分の前に横一列に列んで、自分の左右に隊長副隊長、後ろに姫と言う具合です。

みんなが列び終わると隊長が

「じゃあ、先ずは自己紹介から。
私とリムは昨日したから、ムーから順番に。」

と言うと一番右の紫の短髪の男（１７０くらいの青色の切れ目、蝙蝠の羽付き）が挨拶した。
「…俺はムー・シャーリス、半竜人（ドラゴニス）だ。」

素っ気ないなぁ。
つかドラゴニスってなに？

次は、その隣の赤髪の女の子（１５０くらいで、髪は肩までの長さ。ちなみに牙と長い爪を所持）が元気よく

「はい！私はシルバ・ランドルフで吸血鬼（ヴァンパイア）です！
よろしくお願いします！」

…おぅ、ヴァンパイア。
この世界の吸血鬼は日光も平気なのか…

あれ、つかいま…

「もしかして、ゼノアの妹？」

たしかあいつもランドルフだったが

「はい、ゼノアは私の兄です！
ちなみに私は7歳年下です！」

ほぉ、やっぱりか。
まぁわかったからってどうゆうわけじゃないが。

次に挨拶してきたのは、緑の髪の男の子（１６０くらい、特徴のない髪型に特徴のない顔立ちの隠れイケメン。しいて言うなら眼が抹茶色で花の冠的なのと薄い虫みたいな羽を付けてるのが特徴）だった。「花妖精（フラワーフェアリー）のテトラ・アストです。
これからお世話になります。」

そう言いながらニッコリと笑った。

……こいつ、副隊長の手の者だな。なんか、そんな感じな笑いかただ。

さて、最後に、真っ茶色い髪の男子（１６０くらいの柔ちゃんヘアーな紅い眼のカワイイ系男子、ハ〇リア人より長いウサ耳をしている）が挨拶してきた。

「ぼくはスゥ・カタトロフ。兎族（ラビット）です。」

うん、ふつーとしか言えんな、この子。

つか、一見テトラくんのが影薄そうだけど、こっちのが断然薄いな。
なんか、ル〇ージ的な雰囲気だ。

そして、最後に自分の番がきた。
つか姫に言われてすることになった。

「…自分は長谷川　鳴海、鳴海が名前だ。
ちなみに種族は人間だ。」

すると、何となくだが皆が息をのんだ気がした。
そして、シルバちゃんが大声で

「凄い！噂は本当だったんだ！」

そんなに凄いのかねぇ…
つかエリザ姫よ、なぜ貴様が鼻高々としているのだ

つか挨拶済んだし帰っていくね？

「そうだ、ナルミ。なぜお前の役職を伝えない？
お前は近衛隊名誉顧問なのだぞ。」

何をのたまうアホ姫よ。
辞退しますよそんなもん。
名誉顧問なぞにょろーんな先輩にあげてくれ、スモークチーズと共に。

つかそもそも、みんな認めてくれないしょ。

「…異議があります、姫。
本当に彼に我々に教えるだけの実力はあるのですか？
昨日の試合は確かに凄かったですが、我々は姫を護る者。
基本的に守りであり、試合のように攻める者ではありませんし、一対一とも限りません。
いくら強くとも、守る事が出来なければ意味はありません。」

ほら、ムーさんはわかっている。
冷静に物事を判断し……あれ、なにその「待ってました」的笑顔は。

「ふっふっふ、なら一つ、試してみようではないか。」

あれー？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊〓☆

愚かなる我が主人（らしい）の提案したことはこうだ。
自分対近衛隊でゲームをして、自分が勝ったら認めてもらう。

単純明快、わかりやすい。

ちなみにルールは
・お昼までに自分が捕まったら負け、逃げ切れば勝ち
・逃げる範囲は中庭（コロシアムと広い庭園）だけ
・自分の持ってる“姫様人形”（等身大）を奪われても自分の負け

つまり変則鬼ごっこ的な？

ちなみに負けると姫様が“お仕置き”をくださるらしいので、真面目にやります。

そして今現在、開始してから一時間は経過しております…が

開始時間がだいたい八時くらいなんよねぇ

つまり残りは三時間。

キッツ！

ちなみにいま自分は庭園の土の中に居ます。もちろん姫様人形とともに。

これぞ忍法土遁・心〇斬首の術！

…ちと違うか？

しかし、みなさんどうしてるかね。

「・・・・しずか・・よ・」

土の中だと外がみえんで暇で暇で。

「・・・ここ・・・・・みんな・」

音だけは聞こえるけどそれだけ…なんだ？

「・・・・いい・・・わた・・・掘るか・」

…まてよ、確か隊長、見た目からして犬よね。

つまり……ヤバッ！

「・・・いく・・・・・逃げたか…」

…あっぶね、も少しでみつかるとこしった。
にしてもテレポートはつかえるな。
さすがレベル7、だてにバ〇ルにいるわけではないな。

ちなみに自分はいま、なんかの木の上にいる。
白い花の咲いた、綺麗な木だ。

さて、次はどこにかく「見付けた！」見つかった！

弾けるように木から飛び降りた。
すると、自分のいたとこになんかツルのムチ的なのが飛んできた。

「ちっ！」

…テトラくん、やっぱり君は副隊長と同類なんだね。
つかなんでわかったんよ。

「…あ、なんでわかったかわからないって顔ですね。
いいでしょう、教えましょう。
僕たち花妖精は、草花と会話出来るんです。
そして、さっきの木から変な人がいるって言われて見たらたまたまいたんです。
まぁ植物たちも気が向いたらしか話してくれませんがね。」

気が向いたらって。
…そして植物みんな敵かよ。

どうしよう…

……

……

……とりあえず逃げよ。

「ハイド」

モフンと消えた、つか見えなくなった。
ふっふっふ、現実でハイドサーチはできまい。
このまま後ろからパニを決めてやろうか。

「え…、消えた…どこだ、おい！雑草共！どこ行ったか探し出せ！」

ついに本性現したーー！

つか、植物が敵なら草のないとこあるけばいいよね。

かくして、自分はそそくさとその場所から逃げ、草のないとこ、つまりコロシアムに戻ってしまった。

まぁ、ここでハイドしてりゃばれんべ。
そろそろ姫様人形のせいで腕が疲れてきたし。

ぼーっとしてたらムー君とかが自分を捜し回ってここを何回も往復していて、見ておもしろかった。

そして20分くらいサボってると、こんどはリム副隊長とシルバちゃんがやってきた。

まぁまた気付かずにいくでしょう。

……あれ？

なぜ二人してこっちゃ凝視してるん？

……そういえば蛇ってサーモグラフィーみたいに体温で獲物の居場所を探知するし、蝙蝠って超音波の反射でさがすんだよね。

ばれとるがな。

逃げよ

「逃がさないよ、それ！」

のうわっ！なにこれ！氷の檻！？

「シルバちゃん！」

「はいっ！全てを灰に！煉獄の剣よ！」

…彼女の右手には刃渡り2メートルはある巨大な炎の剣、それを振りかざして

「いっ、けぇぇぇぇ！」

ちょいまち！当たったら死ぬから！
うわっ！なんかないかなんかないかっ！
テンパってるともう彼女はすぐちかくに。
当たる！そうだ！
思い付いた自分は人形を守るように抱え
「服をバリアに変える能力！」
ゴウッ！
檻ごと薙ぎ払われ、一瞬熱気があったが至って無傷、健康体。
これぞ鳴海の法則！
とりあえずにげよ。
そう思い、近くにあったゴミを掴んで
「電光石火！」
叫ぶと靴がローラースケートのようになり、超高速で…
ドフッ！
「ぐぶっ！！」
リム副隊長の腹にぶつかった。
多分うずくまってる自分を倒したとおもったのだろう。

…すまん、副隊長。
君が近く来てたのきがつかんかったんだ。許せ。
…そんなことよか、自分の才能、減ってないよね？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊≠☆

いゃあ、つかれた。
鬼ごっこは疲れるねぇ。四時間近く逃げ回ると特にねぇ。
しかし、そろそろ終わりだと思うんだが、まだかい？

さて、今自分は中庭の上空にいるのです。
お城の影になるとこでひっそりと浮いています。

浮かんでる理由は簡単、結界の上に立ってるからである。

烏森の守護者たちのつかうあれである。
とりあえず、ここまでくれば見付かっても対処できまい。
結界張れば魔法からも身を護れるし。
うん、完璧。

…だと思ってたんだけどねぇ

さて、今自分はムー君と対峙しております。
彼は自慢の翼を使い、見事自分を追い詰めてくれました。

とゆうか、自分が隠れてたのが隅っこだったので正面にいられるとにげれないんです。

正直、ピンチです。

「…逃げれませんよ。」

いや、まだ王手なだけで詰みではない……ハズ。うん。

「…えい！」

とりあえず苦し紛れに彼に結界をかけて閉じ込めてみたら

「ふんっ！」

彼を中心に風が吹き、一瞬で消え去った。

「…終わりですね。」

いゃあ、お仕置きはやだしなぁ…

てい！

「！！」

とりあえず、結界無くして落ちてにげる事にした。

もちろん結界をクッションにしたから怪我はないよ。

「では、バイ！」

そしてBダッシュで逃げることに…

「逃がすかっ！」

出来なかった、目の前に氷の壁が出来て、逃げれない。
ネオア○アマドールかい君は。

しかしどうしたものか…

「…永久の冬を、氷帝の槍よ。」

おぅ、なんかでてきた、先っちょに風魔手裏剣が着いたような青い氷の槍…
ヤバクネ？

おわっ！モーション無しで突いてくんな！

それから彼は容赦なく、袈裟、逆袈裟、横一文字と鮮やかな槍捌きを披露してくれました。
服をバリアにしてなきゃ死んでるってこれ。

「…奥義、氷炎槍“ヴェリア”」

おうい！奥義ってなに奥義って！
なんで氷の槍に炎が絡まってんの！溶けろ！そしてなくなれ！

「次で決める…」

必殺宣言！？やばい、バリアもたねぇ自信ある！

なんか！なんかない……必殺？

ドゴオッ！

轟音とともに槍が自分に向かって来て、それを

バシッ！

右手で受け止め、砕いた。
槍は跡形もなく、ただの氷の粒となって消えていった。

「！？」

ムー君は何が起こったか理解出来てない様なのでとりあえず気絶してもらうため

「おやすみ～。」

ドゴッ！

右手で殴っといた。
案の定、彼は一撃で夢の世界へ。

……いやぁ、支配○の右手、つえー。
あらゆるものを支配して制御するって、変態だ。

さすが暗黒シティの市長だわ、伊達にドリ○ゴード狙ってねぇわな。

とりあえず、ムー君の槍と必殺とゆーキーワードなかったら自分、死んでたね。

さて、氷の壁を解除して、と。

ゴーンゴーンゴーン

おお、お昼の鐘だ。

…つーことは

おわったーー！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊∴☆

さてさて、今自分達鬼ごっこ参加者は食堂にてパスタを食べてます、海鮮なパスタです。

ちなみに、リム副隊長は腹痛で医務室で、ミミリィ隊長は付き添いのためいません。

…マジでごめん。

そして、自分と近衛隊一堂（隊長副隊長以外）、鬼ごっこを終え、ゆっくりまったり昼食を…

「どうだ！ナルミの実力は！」

できておりません。

姫様が食堂にて近衛隊の面々に自慢げに言っておられる。

「うぅ、確かに凄かったです…」

「うん、ぼくなんか一回しか見つけらんなかった。」

「…奥義を止められたのは初めて。」

「……一回も見つけらんなかった。」

上からシルバちゃん、テトラ君、ムー君、スゥ君のせりふ。

……そういやスゥ君いたね、忘れてた。

「ふっふっふ、そうだろうそうだろう。
まあ見た限りお前たちも頑張っていたが、やはりナルミは一味ちがうのだ！」

なんか一味の使い方違うような…
とゆうか

「見た限りって、どこにいたんですか？」

鬼ごっこ始まった時には居なくなってたし。
まさか人形に変身してたわけでないよな？

「む、遠見の鏡でみてたに決まっておろう。もちろん私お手製のだ。」

…なんか胸張ってるが、遠見の鏡ってなによ。
白雪姫の魔法の鏡てきなのか？

「まぁとりあえず、これで問題なくナルミは近衛隊名誉顧問と認められるな。
明後日には王都に向かうから、怪我の無いように指導を頼むぞ。」

そういい姫は食堂を去って……ちょいまて

「ちょいまて、王都ってなに、ここでないの？」

「ん？ここは王都ではないぞ。
王都はもっと西にある、馬車で四日はかかるぞ。
言ってなかったか？」

えぇ～、聞いてないよ。

「ちなみに、ナルミの事は父様、つまり国王に紹介するからそれなりに準備しとくように。」

それこそ聞いてねぇ！！

かくして、この世界の王様とご対面フラグが立ったのである。

……誰かかわってぇ。

6回目＊人間やると意外と出来る（後書き）

前回のガミガ〇ロボに続き、マイナーシリーズ第二弾

支配者の右手

これこそ知ってるひと少ないような気が…

ドリ〇ゴードは究極のマイナー漫画だと自分は思っています

7回目＊お腹がすくと色々つらい

安らぎ

それは睡眠の事を指す。
自分はいつもギリギリまで惰眠を貪り、その結果、睡眠＞朝食の公式を導き出している。

それは異世界に来ても変わらず、さらにめでたく近衛隊名誉顧問なるものになってしまった自分は前日にも訓練のため大分疲れていた。
なので、いつもより深く自分は夢の世界で戯れていた。

忍び寄る邪悪な影にも気付かずに…

「……起きろぉ！」
グフッ！

「おい、ナルミ！今日は王都へ行くのだぞ！？もっと張り切れ！」

…説明しよう。
人間は、寝てる時に全体重の掛かったボディプレスを腹に喰らうと悶絶する！

…従って、喰らった自分は悶絶している。

「っ……、こんのじゃじゃ馬ぁ！」

「おっと。ナルミ、無礼だぞ。」

しらん！つか貴様が姫なんて認めねぇ！つかいま何時よ！？

「ほれほれ、準備するのだ。そしてお前の荷物を私に見せるのだ！」

……それが目的か、こいつ。

「…ほれ。」

自分はポケットからある物を取り出し、姫に渡した。

「おぉ！なんだこれは！小さいプチプチがいっぱいあるぞ！」

「おしてみ、潰れるから。そしてそれやるからでてって。」

そう、自分があげたのは包装等に使われるプチプチシート（約１ｍ四方）である。

そしてそれを受け取った姫はプチプチしながら部屋を出ていった。

……考えてみたら、今この部屋、備え付けのベッドしかないから片付け必要ないやん。

まぁとりあえず、お転婆娘のお陰で完全に頭が覚醒してしまったので、久しぶりに朝餉をいただきましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊･･☆

さて、この世界は魔族なる者達の世界である。

むしろ人間である自分の方が異質なのだ。

だがしかし。
魔族といえども生き物なのだ。
当然食事をし、飲み物を飲まないと…

ぐぎゅ～～～～

「うむゅ～～～～」

こうなる。

正確には行き倒れる。
ぶっちゃけお城の廊下は人が三人寝転がっても大丈夫な位には広いが、それでもど真ん中は邪魔である。

「…なにやってんの？シルバちゃん。」

とりあえず話し掛けてみる。

「あぁ、先生…」

返事がある、ただ者でない屍のようだ。

ちなみに先生とは自分のことだ。
なんでも、教える立場になっちゃったからそう呼ばれなきゃならないらしい。

「……お腹がすいて……、誰も血をくれなくて……」

あぁ、このコそういや吸血鬼だったっけか。
つか、やっぱりこの世界でも噛まれると吸血鬼にされんのかな?

「…なんでくれないん?」

とりあえず聞いてみた。

「……血は、生命力で……その魔族特有の力をもってて……下手に変な者から貰うと……無茶な見返りを求めてきますし……飲めない種族もいますし……近衛隊の皆も疲れてるし……市販の健康血液は……安くても一個１０００リーグ位して……新入りの私は…そんなに買えないし……お兄様は王都に行く準備が忙しくて会えないから分けて貰えないしで……もう二日飲んでません……ふぇぇ。」

…1リーグっていくらよ。
そういや、未だにこの世界の単位とかって知らないのよな。
言葉はわかんのに、中途半端な翻訳機能な気がして来た。

ぐぎゅる〜〜〜〜

おっと、忘れてた。

「…自分の、飲む?見返りはいらんから。」

見殺しにはできないしね。
するとシルバちゃんは　目を輝かして

「いいんですか!?」

自分は頷いて、左腕を出す。

まぁ吸血鬼にはならんべ、なったらこの世界にはネズミ算式に吸血鬼が大量発生して、うめつくされているだろうし。

「ありがとうございます！では、いただきます！」

かぷっ

そういうと彼女は迷わず自分の首筋に噛り付いた。

……左腕を無視して。

つっ！

一瞬痛かったがそこまでではなかった。

…感じとしては、猫に甘噛みされながら注射で血を抜かれていく感じ。

必死にちうちう吸ってるちびっ子の真剣な顔が何となく癒される。

まぁ、もう少しくらいなら、このままでもいいかな…

……すいません、シルバさん、もうやめて、血が無くなる。

「……ちょっ、シルバちゃ、ん、もうそろやめ…」

しかし、そこは久しぶりのお食事のシルバ嬢。

全く気付く気配すらありません。
朝早くなので人通りもありません。

しぬ、誰か自分にレバーを！
血を早急に作らねば！
あぁ、誰か助けて！

「死ぬ、か、ら、やめて、もう」

ここでやっとこさシルバの娘さんが気付き、慌て離れる。

「あ、う、す、スイマセン。あまりにおいしくて、つい……」

…くそっ、かわいいじゃないか。
涙目の上目使いなんて、しかももじもじしながら申し訳なさ気に謝るとは、まるで自分がいぢめてるみたいではないか。

「……いや、だいしょうぶ、ダ……ヨ？」

あぁ、視界が霞む……。

「え？せ、先生！？せんせー！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊～☆

ガタゴトガタゴト
体がだるい
ガタゴトガタゴト
そして重い
ガタゴトガタゴトガタゴト
つか痛い、寝床が固い　、そして揺れる
「あ、起きた。」
……何故に真っ先に姫様のお顔を拝見せにゃならんのだ。
つかここどこ？

「詰まるところ、自分は倒れてしまって、出発の時間になっても起きないから、気絶した自分をダイレクトにここに押し込んで出発したって訳ね。」

「…だいれくと？なんだそれは。」

「あぁ、直接とかそのままっつー意味。」

自分はシルバちゃんがものすごい泣きそうな…つか泣きながら説明してくれた事をかい摘まんで要約した。

ちなみに、説明には一時間程の時間を要した。
そして、今この馬車にはムー君とテトラ君以外の近衛隊と姫様だけである。
二人は外で警戒のための見張りだとさ、大変だねー
グギュルルルル
……なにみんなみづをうったようにしづまりかえっているのさ。
なんかへんなことでもあったかい？
ぢぶんにはなんもきこえなかったヨ？
「……いまの、ナルミか？」
「……チガウヨ～」
「嘘をつけ、目を逸らすな。」
グギュルルルル
……はい、自分です。
朝ごはん食べようとしたところ、朝ごはんとして食べられてしまったのです。
なので朝ごはんは食べそこね、食べられた分のエネルギーを体が求めています。
「す、すいません！すいません！ごめんなさい！ごめんなさい！」
シルバちゃん式光速土下座

……あぁ、この世界にも土下座ってあるのか、昨日もみたけど。
そして、後ろのじゃじゃ馬よ、笑うな。

…じゃなくって

「いや、いいよ、別に。気にしてないし。」

そういいながら、ポケットから取り出すは、みんなお馴染みポテトなチップス（うすしお）。

ホントはヲタ仲間と放課後に啄むつもりだったのだが、しかたがない。
餓死したくないので、それを開けて貪り喰うことにした。

パリパリ

…どした、みんなで凝視して。
あぁ、このお菓子が珍しいのか。

「食べてみる？」

「…いえ、せんせ「いただこう。」ええ～」

ミミリィ隊長、心遣いありがとう。
そして姫、遠慮しろ。

そんなこと考えてると、姫様が袋ごとひったくってった。

…まじ遠慮しろや。

パリパリ

「……うまい。」

パリパリ

パリパリ

パリパリ

「……独占すんな、そろそろ返せ。」

「や。」

…こいつ

「姫様、僕たちにも少しいただけませんか？」

「…少しだけだぞ。」

……あれ、リム君？

なんで自分でなく姫様に許可求めてんのさ。

そして乙女二人、縋るような目で見てくれるな。

「……いいよ、二人とも食べな。」

それを合図に二人の少女もポテチを少しとって食べた。

「……おいしい。」

「もうダメだぞ、これは私のだ。」

ここまで喜ばれると、軽Ｂも本望だろう。

しかし姫よ、それは自分のだ。

……返してくれる気配が無いので、仕方なく飴を舐めることにした、カー○ィの無敵キャンディみたいなあれを。

なぜ持ってるかというと、好物だからだ。

週七本は消費している。

「……それはなんだ。味見させい。」

こいつ、これもとる気だな。

「だめ、自分が餓死する。ただの飴だから気にするな。」

「むぅ、貧弱だぞ、それくらいで餓死とは。」

「うるせ。」

それからの道中で、昼食として食べた干し肉が姫のイタズラでゲロ甘かった事以外は特に問題はなかった。

なんでも、飴をくれなかった罰だとさ。

……死ねっつー訳か？

＊＊＊＊＊＊＊＊∞☆

うすしお事件から六時間ほどして、馬車が止まった。
なんでも、少し開けた小川の近くで夜営
するらしい。

ちなみに、降りた時知ったが馬車は四グループあり、それぞれ近衛隊&姫の馬車が一台と、第1と第2師団各四台、そして荷物の馬車が二台である。
そして、姫様の馬車は他より大きく、姫様専用簡易ベッドがあったりする。
他は全員寝袋に雑魚寝である。
さて、雲一つない空もだんだん暗くなり、綺麗な紫色に染まっている。大自然に囲まれて、なんとも清々しい。
まるでキャンプをしている気分だ。

あ、一番星みっけ。
この世界でもあるんだ。

なんて年甲斐もなく暢気な事考えてると、吸血兄妹がよってきて

「…今朝は、ごめんなさい。」

「私からも謝る、すまん。」

二人なかよく頭をさげた。

「…また謝ってんのかい。もういいっての。」

何たってさっきシルバちゃん式光速土下座をしてもらったんだ、許さないほど鬼畜ではない。

そして、彼等は自分の言葉を聞いてホッとした表情を浮かべた。

「しかし、そんなに自分の血は旨いのかね？
自分にはよくわからん。」

気になったことを聞いてみた。

「はい、あの、なんかこう、甘くて、コクがあって爽やかで喉越しスッキリで…
いままでで一番美味しかったです！
最高級特別栄養血液“紅の秘薬（妖精風味）”よりも断絶おいしいです！」

……そうか、紅の秘薬より旨いのか。
比較対象がさっぱりわからん。

「…やっぱり人間だと違うのかね。」

とりあえずスルー
しかし、自分の血に対する思わぬ高評価にただならぬ興味を示す者がいた。

「……そんなに美味しいのか？」
ゼノアである、吸血兄妹の兄の方。

「うん！すっごく美味しかったの！」

ゼノアの質問に全力の笑顔で答えるシルバちゃん。

……あれ？展開が読めてきたぞ。

「……ナルミ、少しだけ、ホントに少しだけ吸わせて貰えないか？」

ほらきたーーー

「…少しだけだよ。」

…断れない自分が嫌いだ。

そして、すっと左腕を差し出すと、彼は迷わず首筋に噛り付いてきた。

なんつーか、おまえらなんなの。

それから１０秒位して、ゼノアが首筋から離れた

「うまい！」

なんとも素晴らしい笑顔ですこと。

そんなにうまいんか？

すると、シルバちゃんが

「…私ももう一口いいですか？」

遠慮がちにいってきた。

シルバさん、上目使いは反則です。

「少しだけなら…」

そう言うと彼女は控えめに首に牙を立てた。
…なんか、この体制は見る方向によってはやばくね？

「あーーー！シルバがナルミと逢い引きしてる！」

はいお約束、姫乱入。
そしてその言葉に反応したシルバちゃんは弾けるように自分から離れた。

「ち、ちちちがいます！逢い引きなんてそんな！先生と…あいびき…」

そしてこの純粋乙女はショックが大きすぎて真っ赤になって再起不能になってしまった。

…そもそも、兄貴交えた逢い引きなぞきいたことねぇ。

「違うって、自分の血を彼等にわけてただけ。逢い引きとちがうから。」

「……そ、そうです！先生の血が余りに美味しくて分けて貰っただけで……あ」

あ？

「ほう、それは本当か！？なら私も少し　貰おうか！」

はい！？

「ちょいまち！何故に！？そもそも姫様も吸血鬼なん！？」

「私の種族は誇り高い魔霊王種（ファントム）だ。そんなことも知らんのか？」

「…おあいにくさま、全く知らね。
で、なによそのファントムって。」

「ふむ、かい摘まんで言うとあらゆる種族の祖となる種族。
つまりいろんな種族のいいとこ取りな種族だ。
まぁとは言えいろいろとあるがな。」

ずいぶんアバウトな物言いで

「と、いうわけで。つまり吸血種みたいに血を嗜むことも知っている訳だ。
なので飲ませろ。」

「断固拒否する！」

だってこいつなら干からびるまで飲みそうだもん。

「拒否権なーし！」

グハッ！

なにがあったかというと、自分が人間と暴露した時と同じ状況です。
つまりマウントポジション。

そこからだんだんと姫様の顔が近付いてきて…

カプッ

首筋に一撃

四回目だと、もう慣れたよ。

ちなみに、噛まれる時にシルバちゃんが謝ってた気がするのは気のせいではないだろう。

そして姫様、目を見開き一言。

「……これは、なんと甘美な…。

年代物の果実酒でもここまではいかんぞ…」

さいですか、それはようござんした。

さぁ、とっとと離れろ。

カプッ

コルァ！何二口目突入しとんじゃワレ！

やめろ！この欲望の塊め！マジで死ぬから！マジで！本気で！

お願い！やめて！お願いします！干からびる！

「う……、あ…し、死ぬ、たすけ…」

ここで自分の意識はプッツンした

～サイドシルバ～

姫様がナルミに噛り付いて、しばらくすると、彼の顔がだんだん青くなっていった。
そして、助けを求めてきた。

「う……、あ…し、死ぬ、たすけ…」

悲痛な叫び、もとい呻き

「ひ、姫様！先生が！血の気が顔が！」

「ん？……うぉう！？」

姫が離れると、力無くナルミは気絶していた。

「……ちとやり過ぎたかの？」

「ちょっとじゃないです！！先生が死んじゃいます！お兄様！先生を運んで下さい！」

そう言われ、ゼノアはナルミを背負って馬車に戻って行った。

「うぅ～～、姫様！先生が死んだらどうするんですか！」

いつもとは違う、必死な剣幕のシルバに圧倒されながらたじろぐ姫。

「たしかに先生は優しいし許してくれるかもですが！でもやり過ぎです！」

「す、すまん…」

「それは私でなく、せん「はいはい、それくらいにしようね。」…副隊長。」

マジギレしてるシルバのもとにやってきたのは近衛隊の隊長と副隊長である。

「そもそもシルバ、君も今朝同じような事をしたんではないか？」

「うぅ…」

仕事モードの真面目なミミリィの口調と言われた事実に押され、グゥの音もでない。

「うん、とりあえず今はナルミ君の側で看護してあげたら？きっと彼も喜ぶとおもうよ。」

リムの言葉にはっとしたシルバは即座に

「私、先生の様子を見に行ってきます！」

ダッシュでナルミの元へと消えて行った。

「……乙女だねぇ。初々しい。」

「……でもああいうのが病的なまでに相手に依存してしまうのよね…」

「？」

後に残ったのは、本人も気付かない変化を見抜いた一組のカップルと、その二人が言ってる事を理解出来ない女の子らしくない姫様だけであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊∞☆

「うぅぅ…」

ナルミが姫に襲われてから約二時間、日もすっかり落ち、見張り以外の大多数の者が眠りについている時間に彼は起きた。

「せ、先生！大丈夫ですか！？」

真っ先に反応したのはシルバである。
ちなみに、他には寝静まった近衛隊と姫、そして看病していたゼノアだけである。

「うぅ、だ、いじょうぶ…。でもお腹すいた…。」

「ご飯ですね！持ってきます！」

「おい、まて……ったく。」

兄の制止も聞かず、走っていく妹。
ぶっちゃけ皆が寝てる、この場所での食事は迷惑になるのである。
仕方なく、ゼノアは半覚醒状態のナルミを背負って追い掛けるのであった。

「あ！お兄様うごかしたらダメ！」

「あそこで食事してると、皆が起きてくるぞ。」

大きな鍋を持って怒るシルバを諭すゼノア。
とりあえず馬車から少し離れたところにいくことになった。

グギュルルル

「……いいにおい。」

鍋から流れる香しいスープの香りで完全に目が覚めたナルミ。
はしたない事に少しヨダレが出てる。その姿に苦笑しながらシルバは

「はい先生、おかわりもあります。」

ほほえましい目で眺めてるゼノアをよそに、そう言いながら皿によそったスープを渡そううとした。
そのとき

シュバッ！

「キャッ！」

矢が飛んできた、それに驚き皿を落とすシルバ、そしてシルバを掴んでとっさに庇うナルミ。
他にも複数の矢と、飛んできた方向には複数の人影。

己の欲望のために他者を襲う強奪者。
彼等は盗賊の群れだった。

「敵襲!!全員起きろ!!」

即座に反応して魔法の防壁を張ったゼノアが叫ぶ。
雄叫びと共に迫ってくる盗賊。
各々の馬車から臨戦体制で出て来る兵士たち。
戦場独特の空気と緊張感の中、ただ一人それを無視する輩がいた。

「クク、ククククク…我は影、真なる我。」

場違いな不気味な笑い声に、敵味方問わずに悪寒が走る。

「さぁ、愚かなる隣人共よ……」
その声の主は、右手で真っ赤になって縋り付く少女を抱え、左手を高々と上にあげていた。
覇気の無い目は座って、代わりに狂気の色が見え隠れしている。

「お前たちの好きな、真実を与えよう…」

その言葉と共に、彼の左手にはなにか、混沌としたものが渦巻き始めた。そして、

「此処で死ぬという、逃れ得ぬ定めをな!!」

この一言と共に放った一撃が、轟音と共に盗賊を飲み込み、吹き飛ばした。

それを放ったのは、もちろん人間の戦士、ナルミである。

残ったのは、えぐれた大地と、川の流れる音だけであった。

～サイドナルミ～

さて、自分が今日食べた物をリストアップしてみよう。
・ポテチ三枚
・キャンディ一本

以上。
ちなみにお昼ご飯は姫様のいたずらにより、食えた物ではありませんでした。

そんな自分の前に、ほかほかのあったかいスープがあります。
シルバちゃんが持ってきた、すばらしいスープ。
自分はそれを食べるため、手をのばしました、すると。

シュバッ！

「キャッ！」

人間極限状態になると感覚が研ぎ澄まされると言うのはホントらしい。
とっさにシルバちゃんを庇うように抱え、矢が当たらないように服をバリアに変えた。

しかし、自分はその時あまりに残酷な光景を目撃した。

ガンッ！

ズシャッ！

……鍋が、倒れたのだ。

おいしそうなスープが、今日初めてのまともな食事が…

プッチン！

いやぁ、たしかに自分は短気な部類の人間だけど、これはキレても仕方がないよね。

とりあえず、殺さないだけの理性はあるからみなさんに気絶して貰いましょうか。

「…我は影、真なる我。……さぁ、愚かなる隣人共よ……」

シルバちゃんを抱えたまま、左手をあげて自分お気に入りのせりふを言う事にする。

「お前たちの好きな、真実を与えよう…」

本来はハイ〇ーチャージで1ターン待たなきゃならんが今回は無視だ、んなもん。

そもそも、これ敵の技だし。

「此処で死ぬという、逃れ得ぬ定めをな！！」

そして、思いっきり左手を薙ぎ払う。

リーチとかの問題とかもこの際無視、とりあえずモドキって事で。

ズシャァァァァ！

盗賊、一掃。

地面はえぐれてるけど、死んではいないべ。
ケマの影の必殺技、魔手〇ヒルはくらうと１００％気絶する鬼畜技だからね。とゆうかやっぱカッコイイな、このせりふ。

ちなみに、１ターンのタイムラグで逆に油断してガード解いて攻撃したら、くらって全滅した記憶が自分にはある。

……話が逸れた。
とりあえず、

「ゼノア、敵さん回収よろしく。
全員気絶してるだけだから。
そして、誰か食べ物をくれ…」

途端に弾けたように動き出す兵士達。
各々の仕事に皆が取り掛かる中、近衛隊の面々がパンを持って寄ってきた。

「…相変わらず、非常識ですね。」

「だよねー、しかも殺さないで全員気絶ってそうそうできないよ。
というかあの悪魔のような顔とセリフと技、絶対彼等の心には傷がのこってますね。」

「…さすが、先生…」

上からミミリィ隊長、リム副隊長、ムー君のせりふ。
自分は隊長から渡されたパンを貪りながら彼等の話を聞いていた。
なんか副隊長は褒めてんのかけなしてんのかわからんが。

「しかし、怒る理由がなんとも…
らしいと言えばらしいですが、身を挺して守るとは…騎士の鏡ですね。」

はい？
なにそれ…えと……ウサミミの……スゥ君？だっけ。

「どゆこと？」

「なーにとぼけてんですか、先生。
植物からも聞きましたよ、シルバを自らを盾にして守ったって。
つか、見せびらかしながら何いってんすか。」

……そういや、そんなこともあったよーな…
膝の上を見ると、あうあういいながら真っ赤になってる吸血娘の姿が。

すっかり忘れてた。

「あぁ、ごめんね。」

シルバちゃんを立たせると、残念そうに立ち上がって、大事をとって、隊長に促されるまま馬車へと押し込められた。やっぱり自分みたいなミスターオタクな奴とそーゆー勘違いされると乙女としては

ショックだろう。
まぁ今はいいや、後で誤解も解けるでしょう。
そして、お腹も満たされて大分周りを見る余裕も出来たところであることに気付いた。

「……そいや姫は？」

こーゆーことには真っ先に騒ぎだすであろうあのじゃじゃ馬がいないのだ。

「あぁ、姫様なら寝てるよ。
彼女は爆睡すると朝まで絶対起きないからね。
それと、防壁をかけたから今姫の居るとこは何も聞こえないし誰にも姫の姿は見えないよ。」

……なんとも図太い神経だこと。
つか、防壁張る意味あるんかい？

「ふぁ、私達も寝ましょう。
後はゼノア隊長達に任せて。」

ミミリィ隊長は以外とひどいな、手伝いせんのか。
まぁ、いいや、自分も疲れたし。

「…じゃあ、寝ますか、おやすみなさい。」

そういいながら自分は馬車へと入っていった。

～近衛隊サイド～

「……気付いてないのかな。」

「まさか、それはないと思うよ……多分。」

「姫は絶対起きないでしょうし、ここまで気を使って何も無いことはないと思いますよ。
つか、無かったら防壁張った意味がありません。」

「…でも先生なら、そのまま寝そう。」

「……あ、先生寝息立ててます。逆にシルバは先生の登場で緊張して息が荒くなってます。」

元の世界でも隠れファンの存在に気付かなかった朴念仁が、シルバの気持ち、もとい彼女の気持ちを汲み取った近衛隊の気配りなぞ全く気付くはずもない。

まぁシルバ本人からしても余計なお世話な気もしないでもないが……

なんとも微妙な空気が近衛隊の中に流れるのであった。

7回目＊お腹がすくと色々つらい（後書き）

自分に恋愛もの向かないのはしってます。

けど気付いたら、こうなりました。

最初は恋愛入れるつもりなかったのに…

まぁ、なんとかなりますかね（笑）

頑張ってやってきます

8回目＊嫌な事は忘れた頃にやってくる（前書き）

強引っぽいけどそれは流しておいて下さい。

そしていつのまにか二万ユニークと十万ＰＶ

こんな駄作に皆様ありがとうございます

8回目＊嫌な事は忘れた頃にやってくる

……

……

……夜である。

盗賊の襲撃ののち、即座に睡眠を取った自分は、真夜中に目が覚めてしまったのだ。

理由は簡単、貧血による気絶で強制睡眠を取らされてたからである。

今、馬車には姫と近衛隊の面々が眠っており、とても静かだ。

ちなみにただ一人、ウサミミの……えと、あれだ……そう、スゥ君だけは見張りかトイレかしらんがこの場にいない。

目が冴えてしまった自分は、これからどうしようか考えた。

すると、近くに川がある事を思い出し、なんとも素晴らしい、革命的な考えを思いついた。

そうだ、風呂に入ろう！！

この世界にきてから、水浴びはすれど温かい風呂には入ってない。

そもそもあのお城に風呂が無かった。

ならこの際、ドラム缶風呂を造って心の洗濯をしようではないか。

思い立ったら即実行。

自分は意気揚々と馬車から降りた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊…☆

「テメェら殺すぞ！」

「縄解けゴルァ！」

「服返せカス！」

……なに、このカオス。

パンツ一丁に剥かれた男どもが縄で縛られながら悪態をついている。

多分、さっきの盗賊団だろうが…

なぜパンツ？

「あ、ナルミさん。」

「げっ！」

疑問を浮かべながら見ていると、みたことある緑と青のひとがいた。

たしかシャール君とラルムだっけか。

たしかゼノアの部下だったはず。

「よーす。」

とりあえず挨拶、そして質問。

「奴らなんで下着一枚なん？」

「んなこともしらねぇのか。」

……相変わらず口が悪いなラルムのヤロー

「ラルム、やめなさい。
あのですね、ああいう盗賊団って、脱走のために服とかに色々仕込んでるんです。
だからそーゆーので逃げれないようにしてるんです。」

ふーん、なんかル○ン三世みたいな奴ら。

「テメーら無視すんな！」
「俺ら捕まえていー気になってんじゃねーよ！」

「黙れ捕虜ども！殺されてぇのか！」

「どーせ殺すつもりねーんだろ！！あったらとっくに殺してんだろバーカ！」

盗賊うぜー。
ラルムの怒声も全く効き目ねぇし。

……そだ。

「ラルム、ちょいよけて。」

自分は、怒りに震えるラルムを一旦離れさせ、裸集団に近付いた。

まぁまずは交渉から。

「やぁ。」

「あぁ！？なんだテメェは！？」

「……すこーし静かにしてくれないかな？迷惑だから。」

「テメェらの迷惑なんか知るか！」

交渉決裂、分かってたけどね。
じゃ、本番いきまーす。

「はぁ、分かってたよ、じゃおやすみ。」

あえて大きくため息を、この盗賊さんにかけてみます。

「テメッ！わざとらしく息かけ……る……グゥー。」

するとあら不思議、眠ってしまいました。

フハハハハ、これがイン○ルダウン監獄署長のドクドクの能力！
まぁ吐いたのは毒ガスでなく催眠ガスだけど。

なにが起こったかわからない、近くの盗賊たちは、しばらく言葉を無くした後に。

「テメッ！なにやった！」

当然の反応、当然過ぎて逆につまんない。
いや、どんな反応が詰まるかはしらんが。

「いゃあ、自分のため息を吸って勝手に寝ちゃっただけだから大丈夫だよ。
ただ、あんまりうるさいとそれこそ絶対に覚めない眠りを引き起こすため息がついつい出てしまうかもだけど……
けどしかたないよね、ただのため息だし、生き物は呼吸しなきゃ死んじゃうからため息が原因で君達が死んでもしょうがない、ただの事故死だよねぇ……
で、まだ騒ぐ？
あ、それともももっかい君達を迎撃した技喰らってみんな仲良く気絶する？」

とりあえず一気にまくし立てる、笑顔のオプションも忘れずに。
しんと静まり返る盗賊たち。
顔は青ざめ、震えてる奴らもいる。

「……まだ騒ぐの？」

とどめの一撃。
彼等は必死に首を振って騒がないと意志表示をする。
もう騒ぐ事もなさそうだ。

「そ、分かってくれて安心だよ。じゃあね。」

そう言って二人の元に帰る。
シャール君は苦笑いしながら

「……相変わらず鬼畜ですね。」

うん、褒め言葉として受け取っとくよシャール君。

「…おまえ、何者なんだよ。」

ん？

「おまえは何者だって聞いてんだ！訳わかんねぇ力使うし、いつも飄々として！種族もよくわかんねぇし！ホントに何者なんだよ！」

なんだ？いきなし。

種族はゼノアに聞いとらんのか？

そもそも何者っつわれても…

「自分は長谷川　鳴海、それ以上でも以下でもない。」

…いっちゃった、テヘッ。

するとラルムは俯いて、拳を固く握りはじめた。

「……俺は…」

そういいながら、右の拳を自分の方に突き出し、まっすぐ自分の目を見据えながら

「いつか、絶対あんたを超えてやる！」

突然のライバル宣言。

ヤベェ、こーゆーキャラ自分大好きだわ

「…やってみろ、待っててやる。」

そう言いながら自分も拳を突き出し、合わせる。
そして、二人揃って自然と微笑みあう。

なんか友情が芽生えた。
つか、今までの人生で一番青春してる気がする。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊⊂⊃☆

「ふひゅぅ～」

自分はいま、馬車の群れからちょっと離れたところで風呂に入っている。
明かりはテキトーな木の棒でルー○スを唱えてつけています。

いやぁ、風呂はいいね、やっぱり。
久しぶりだとなお気持ちいい。こんな間抜けな声が出るほど気持ちいい。

さらに満天の星空、最高の露天風呂だよ。

自分が入っているのはそこらへんの石で錬成したドラム缶風呂である。薪はそこらへんにいっぱいあったから困らなかった。

…以外に石ドラム風呂はいける！

ちなみに、あのあとシャール君にこの世界に風呂はあるか聞いたら

『え？フロってなんですか？』

と帰ってきたのでちょっと絶望した。
王都まで行っても大きいお風呂に入れないという事だからね。

とりあえず、心と体を清める儀式と言っておいた。
あながち間違ってないはず。

あー、にしてもこの世界きて初めてリフレッシュっつーかリラックスした瞬間でないか。
ビバ・日本人の知恵。

こんな時間がいつまでも続けば…

『久しぶり～』

いかったのになぁ～
で、どこにいる自称・神。

自分は奴の姿を探して周りをキョロキョロ見回した。

『お、よくわかったね。
でも残念、私はそこにいません。君の心に直接話かけてます。』

くそ！いないと殴れないではないか！
でてこい！

『やだ。』

チッ！
ならなんで出て来た。

『あぁ、君をそこに飛ばした理由をね。』

おぉ、まさに一番気になってたところ。

とくとく、とく教えよ。

『…使い方間違ってない？

まあいいや、で、理由なんだけど……前回送った瀬田　佐之衛門惣次郎については聞いてるよね？』

あぁ、フルネームそんなんなんだ。

で、それが？

『いや、その瀬田が倒した悪い奴の城をさ、急がなくていいけどブッ壊してくれない？』

…なぜ？

『最初、瀬田が奴を倒した時はそーでも無かったんだけど、３００年経ったら霊域化しちゃってさ。

しかも悪役の魂の残滓を核にして、結構なモンスターが一体できちゃったんだよ。

霊域については、瀬田たちが封印してるから誰も入んないし霊域からもモンスターも出れないから大丈夫なんだけどね。』

で？

『そのモンスターの討伐と霊域の浄化を君にして貰いたくてさ。

大丈夫、地図と封印に入るためのブツは君のポケットにいれといた。』

嫌だよ、誰がいくか。大丈夫ならほっとけばいーやん。
つか、自分が勝てる訳ないやん。

『いや、その霊域とモンスターの魔力に当てられて魔物達が活発化するから一概に大丈夫って言えないんよ。
それに君には出来るだけのスペック持ってるし、能力もあげたしょ。
まぁ、それが終わったらこの世界で自由に第二の人生歩んでいけるんだから。』

スペックなんかねーよ。
とゆうか、お前が直接やればいいじゃん。こんな素質もクソもない一般人連れてくるよか断然いーしょ。
そして人の最初の人生勝手に終わらすな。

『私は一応神様だから直接そーゆうのはできないの。それと、実は人間ってあの世界にしかいない貴重な種族なんよ？
さらにあの世界自体が魔法も無いから、負荷も他の世界より大きいの。
だからフツーに生きてるだけで、かなりの体力と精神力を手に入れれるんだよ。
だから私のあげた能力も苦もなくつかえるしょ？』

……まじでか。
人間ってそんなすごかったんだ。

『しかも、なんだかんだ言って魂はあっちの世界に繋がってるからただ生きてるだけで能力の強化が見込めます。
まぁ繋がってるから私が君に干渉できるんだけど。』

これ以上どう成長しろと。
いや、でもそもそも自分なんかよりもっと柔道部とかの…

『あーもう！グダグダうるさい！
とにかく君なの！もう来ちゃったんだからしょうがないしょ！恨むんなら己の不運を恨みなさい。
それと、一回送ったらこの世界の魔力が邪魔して君を送り返せないから。
つーわけで、バイバイ。』

まて、最後にお願いがあります。

『……急に敬語は気持ち悪い…。　で、何さ。』

いや、自分がこっち来てから出る漫画やラノベの新刊とかゲーム・アニメ等の続編が出次第随時ポケットに投入して欲しいなぁと。

今戻れないならしかたがない。
これで我慢してやろう。

『…ゲームとかはどうやってやんのさ。』

ん？
コンセント体に密着さして電気流してみたら普通にできたよ。

『……わかったわよ、じゃあそれで交渉成立ね。
でも普通そこまでしてゲームするかね。』

うるせ。それと、帰る方法わかったら即座に教えてくれ。

『だから無いって。
あ、あと地図と一緒にオマケも二、三冊いれといたから。』

なによ、オマケって。

『あとで見てみなさい。
それと、あのお姫様の教育係りのエルフ、今姫の部屋のクローゼットに丸一日押し込められてて衰弱しきってるから助けてあげな。
じゃあ、第二の人生頑張って。オーバー。』

……嵐のような奴だった。
そして哀れ、ゾーン爺。いないと思ったらそれが理由か。
つか、彼はエルフだったのか。

はぁぁぁぁ、変なモンスターの討伐だとか、めんどくさい。
つか恐い。

……上がろう。
もう一時間は入っていただろうか、大分体はすっきりした。

……心は入る前よか断然重いけど。

…ハァ。

……まぁ、無料で漫画やゲームが手に入るんだし我慢してやっか♪

9回目＊人生は理不尽である《前編》（前書き）

…前半やっちまった感がありますが、見逃してください。
一応、繋がるつもりです、すいません。

……あとがきは…カオスです。
作中の技に疑問、もとい苦情があればみてください。
激しく言い訳してます。

9回目＊人生は理不尽である《前編》

さてさて、自分の目の前には裕に６０メートルはあろうかという巨大な門と壁がそびえ立っております。
何を隠そう、これこそ王都“グラディシア”の正門である。

「でっけー。すっげー。」

自分は馬車の窓からそれを見て、無意識に声をあげていた。
ついつい声に出してしまう、それくらいでかいのである。

「そうであろう、このグラディシアの都が出来て約７０００年もの間に強化、拡張され続けた自慢の門と城壁だ。
ただでさえ国が自然の護りのある中でこの防壁、戦争になろうとも絶対にわが国は負ける事はない。
もっとも戦争などするつもりは無いがな。」

ちなみに自然の護りとは、この国の北は海で西と南は魔物の巣窟な険しい山脈、東は砂漠と完璧囲まれてるのだ。
しかも山には鉱石、海もあるし作物も育つというかなり恵まれた国らしい。

とかなんとか姫がご丁寧につらつら喋っていたらしいが、自分はそんなのミミクソほども聞いてなかった。

まぁいまはどーでもいいや。んなことよか。

「なぁ、ところですぐ王様に会いにいくんか？」

これよね、自分が今1番気になんの。

「…んー、すぐはむりかの……ゾーン爺、いつ出来る？」

「……明日の昼頃には出来ると思いますがの。」

つまり丸一日ほどかかると。

ちなみに、ゾーン爺さんは自分が風呂からあがった後にテレポートして連れてきた。姫いわく、一緒だといろいろうるさいから置いてきたとのこと。

……とてもかわいそうだ

しかも彼も一緒に行ったと城の方々は思っていたから捜されなかったらしく、下手したらマジで見付からずにいたかも知れなかったからなおかわいそうだ。

まぁとりあえず、この一日でサラっとこの世界のこと学んどきますか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！☆

ツ・マ・ンネ♪

…スマン、錯乱した。

ただいま自分は王宮兵士宿舎四号棟の第三王女近衛隊男子部屋の自分のベッドの上にいる。

ちなみに漢字が多いのはご愛嬌だ。

さて、何がつまんないかというと
この世界の言語、ポノノ語だ。
全く英語見たいな文法なんよ、これが。
さらに文字は何処の落書きってくらい見た事ないし、やってらんねーよ。
余談だが自分、今までに英語で赤点三回とってる猛者です。
ちなみに今自分は先日、自称・神がくれた三冊のオマケ本のうち二冊、“和ポノノ事典”と“ポノノ和事典”を使って勉強しております。
“ポノノ”の部分に“英”を代入すると解りやすいと思います。
だぁー!!やめっ!もうやっ!
これ以上やると熱暴走の後に自爆する!主に頭が!
……いや、まだ30分もやってないんだけどね。
とりあえずポノノ語はあきたので、もう一冊のオマケ本、“地球料理大全”を読んでみましょう。
最初はそれこそ『何故にこんなもんが?』て思ったけど、結構これ必要だわ。
醤油の作り方からケーキまで、なんでも載ってるから味噌汁のみたくなっても自分で作れるし、何よりわかりやすい。
一家に一冊、“地球料理大全”!

……わかりやすいけど、興味無い。
今考えたら、食べたい時に使えばいいから、いま読まんでもいいやん。

…どうしよう、急に暇になった。
みんなは仕事でいないから遊べないし、ゲームや漫画はだいたいコンプリートしちゃったし……

……

……

……お城の探険、行ってみるか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、☆

この城は広い、我が学校が１０校、いやそれ以上入るほど広い。
しかも高い、東京タワーくらいあんでねって程高いところさえある。
ホグ〇ーツ見たいなお城だと思えばいいであろう。

よーするにデカすぎるのだ。

だからといって城内迷子なんてお約束にはなりたくないため、１番近くの階段をのぼって１番上で景色を見ると言うミッションを遂行すると言う訳です。

馬鹿と煙りはなんとやらですね　、はい。

で、ただいま兵士宿舎の屋上にいます。

良い感じに夕焼けが眩しく、美しい町並みがよく映える。

…のだが。

なぁ、屋上ってこんなに屍屍累累としてるもんなん？

現在床には約３０人程の兵士が転がっております。

一応息はあるっぽいけど。

そして、その兵士達が倒れてるなかに佇む影が一つ。

「……誰だおまえ。」

ダークレッドな髪を靡かせながら自分に気付き、聞いてきた。

背中には灰色の羽を持ち、獰猛な笑みを浮かべている。

右手の大剣が恐いです

「……失礼しました。」

ペコリと一礼。

とりあえず危険と判断し、即座にUターン。

自分だって死にたくないもん、周りの兵士みたくなりたくないもん。

「まてよ、黒髪に黒眼なんて初めて見たんだ、興味持って当然だろ。

それにこの兵士達を見捨てて自分だけ逃げるなんて輩、根性叩き直してやんねぇとな。」

―ザンッ！

……あっぶね！
なに！今日は雨の代わりに大剣が降ってくんの！？
つか完全に出口塞がれたよ！

「なぁ、なんでこいつら見捨てようとしたんだ？」

これがあれか、逃げようとして周りこまれた勇者の気分か。

「……いやぁ、これだけの数たった一人で倒したんなら一旦引いて仲間よんだほうが得策かなぁなんて……」

口から出まかせ嘘八百。
すると、赤髪さんはいきなり大声で笑い出した。

「…く、あっはっはっはっは！
確かにな！いやー初めてだ！逃げようとしておいてマトモな答え返したやつ！
気に入った！」

はぁ、ども。
しばらくひーひー言ってた赤髪さん。
しかし、その隙を見逃す程自分も愚かではない。

「……あい、きゃん、ふらい！」

とうっ！

端から見たらタ○フル使って頭がいっちゃったみたいな掛け声と共

にダッシュで飛び降り、そのまま飛んだ。
イメージ的にはアトムな感じに。

ちなみに掛け声は気分だ。

このままとにかく逃げ出そう、そう自分は考えていた。
いたのだが…

「すっげー！おまえ羽無いのに飛べるのか！ますます気に入った！」

秒速で大剣掴んで追い掛けてきた。
…そうでしたね、あなたには羽があるんでしたね。

「まぁ待て、今ここで襲い掛かる程俺も愚かでは無い。
とりあえず、あそこの奴ら片付けんの手伝ってくれ。」

そう言いながら、屋上を指指す。

……相変わらず、この世界で自分に拒否権はなさそうだ。

それから１０分くらい後

「…これ、片付けたって言うんすか？風邪ひきませんか？」

先程の兵士達は隅っこに寄せられてるだけである。完全放置プレー。

「大丈夫だ。これくらいで風邪なぞ引かれたら兵士としてやっていけない。」

それ、多分あなただけの常識です。

「でだ、おまえ何者だ？新しい兵士にしては服装が妙だし、そもそも種族はなんだ？」

……どーしよう。

ここで人間とか名誉顧問とかって暴露すると絶対メンドーなことになる。

自分の危険センサーがビンビンそれを感じてる。

「……黙秘権を施行します。」

「…そうか、なら戦え！」

ハィ！？

「何故！？」

「ふっ、俺が戦いたいからだ。おまえがどんな答えを返そうが、ぶっちゃけ関係ない。さっきの奴らでは弱すぎて話しにならなかったが、おまえなら楽しめそうだ。」

おいっ！

なに、こいつ戦闘狂！？

「…もしかして、そこの兵士よけたのってそのため？」

「おう！」

うわっ！めっちゃ良い笑顔！
やだ、この子恐い！
どうにか打開策は…

「ちなみに逃げたら捜し出して毎日戦わせるからな。」

逃げ場なーし。
どうしよう……そだ！

「いやぁー、生憎自分は今武器を持ってないのでマトモに戦えないんすよー。
あー、残念残念。」

ふっふっふ、どうだこの秘策。
これで逃げられる。
この人も見た限り大剣1本しか持ってないし、武器を渡されてしまうことも無い。

「ん？じゃあそこに転がってる兵士の剣持ってこいよ。」

……秘策、失敗。

「……じゃあ、使わして貰います。」

あきらめた自分はテキトーに剣を一方拝借した、７０センチほどの両刃の洋剣。

「それじゃあ試合を始めようか。

良い試合になる事を期待している。」

そう言いながら奴は大剣を構え始めた。

なにが良い試合だこのヤロー。

馬鹿にしやがって。

ならこっちも考えがある。

「良い試合になる訳が無い！」

そう言いながら剣を右手に持ち、頭の上に上げ構えた。

「言うじゃねーか！」

そう言いながら奴は自分目掛けてかなりのスピードでかけてきて、切り掛かった。

それをバックステップでよけながら。

「おんどりゃあー！」

ステップの途中、それも空中から一気に突っ込む。

残像的なのを残しながら、ロケット噴射で。

「うおっ！」

叫びながら奴は右に転がり、回避する。

ちっ！

カイ現象を避けるとは、やるな。

だが甘い！

即座に転がってった方向を向き、覚醒必殺を出す事にする。

「駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目、駄目ー！！」

ドガガガガガ！

「ぐっ、がっ、はあっ！」

どしゃっ

マトモに喰らった赤髪君は兵士達の山に突っ込んでった。

……ふう。

何が起こったか説明しよう。

自分が使ったのはロボ○イの覚醒必殺技、その名も『駄目な奴は何をやっても駄目』である。

とってもシュールな技名だ。

ちなみに、自分は生身の人間なので、イメージ的にはゴム○ムのガトリングの後に止めにバズーカをぶっ放す感じになっちゃいました。

まぁ機械じゃないからね。

いくらなんでも腕が増えたり胴体飛んだりできないしね。

……

……とりあえず、勝ったっぽい。

なので自分は、後ろを向きながら剣を地面に突き刺し。

「これが、科学の力！」

ナルミ、ＷＩＮ！（心の中で）

格ゲーのお約束、勝った時の決めポーズである。

…ちなみに自分、ギル〇ィギアはイスカしかやったことありません。

……さすがに、マイナーすぎるかな？

「…つっ～、効いたぁ！」

！！！？？

びっくりした。

だって倒した思ったらフツーに頭摩りながら立ってきたんだもん。

「カガクっつーのか、おまえの武術は。

初めて聞くし、初めてみた。」

いってーとか言いながらも目を輝かせてこっちを見てくる。

……こっちも科学を武術と認識した人初めて見たよ。

「にしてもつえーなおまえ。

よし、俺も久しぶりに本気出そう！」

…今なんて？

まて、なにぶつぶつ唱えてんの？なんで君の周りに炎がいきなり発

生してんの？
そしてそれがなんで君に纏わり付きはじめてんの？

「……我こそ炎を統べる者、絶対なる力よ、来い！神炎『ミューシャス』！」

そう言い終わると、奴の周りで軽く爆発が起きた。
すると、奴の体は炎に包まれていった。
今の奴を表すなら、炎の天使だ。

そして、彼は炎の剣を持ち、笑いながら言った。

「我が二つ名は豪炎王騎士バリス！参る！」

いや、二つ名以前にお前の本名しらんから。

～サイドバリス～

「我が二つ名は豪炎王騎士バリス！参る！」

そう高らかにバリスは叫んだ。
この国最強の５人、通称“王国五柱騎士”の一人に数えられるほどの強さを持つ程彼は強い。なので、名前を知らない者などこの国にはいない程有名である。

まぁ、彼は正確には騎士では無いのだが…

とりあえず、それほどまでに有名なバリスの名前を聞いたら、普通は驚くなり何らかの反応があるハズである、普通なら。

「……なんか、反応はないのか？」

「…何に対して？」

バリスの名を聞いといて、全くの無反応。
さすがのバリスもちょっと凹んだ。

「…とりあえず、いくぞ！」

そう言いながら切り掛かろうと駆け出すが…

「やだ！くんな！結！」

ガンッ！

ぶつかった、何もない空間に、顔面から。

「つっー……、な、なんだ！？」

鼻を押さえながら体制をたて直し、思った疑問を素直に口にだす。

「……ねぇ、もう自分の負けで良いから終わってくんね？」

明らかな挑発、だがそれには乗らない。

「だめに決まってんだろ！爆滅魔法！“リーキッド”！」

着弾すると爆発するサッカーボール大の炎の球が五つ。
それらが眼前の敵目掛けて飛んでいく。

バリス自身が編み出した上級魔法であるそれは、触れるもの全てを破壊する凶悪な魔法である。
もちろん、止める事は不可能に近い。

奴はその場から動かず、ただ右手を突き出したまま立っている。

当たったとバリスが確信した、その瞬間

――――パキンッ

しっかりと魔法は奴に着弾した。
だが爆発は起きなかった。

寧ろ奴が全て右手で受け止め、消したのだ。

「……」

言葉を失うバリス。
何たって彼一番の得意技が、全て右手一つに止められたのだ。

そこに、奴は

「もう、終わらすよ。」

そう言うと、奴の体から虹色の何か、不可思議な光が揺らめき始めた。
そして、地面を蹴り、その場で跳ねた。

「！！？」

彼から光が出た時点で危険を察知したバリスは、とっさに飛び立とうとしたが、遅かった。

「イィヤァーーー！！」

掛け声と共に彼から放たれた二本の龍のような炎に、バリスは飲み込まれて行った。

～サイドナルミ～

結界にイマジンブ○イカー、それらを駆使して何とかこの炎上馬鹿から身を守っているが、そろそろめんどくなってきた。

なのでこっちから攻めて終わらせる事にする。

「もう、終わらすよ。」

気分はスマッ○ュボールを取ったマ○オです。攻撃判定広げるために、一回ジャンプして

「イィヤァーーー！！」

最後の切り札・マ○オファイナル発動！

マトモに喰らったバリス君は押し出されて場外へ。

まぁ、飛べるから平気でしょ。

……とりあえず

「逃げよ。」

三十六計逃げるにしかず、と。

「まてぃ！」

あぅ、復活早いよ。

バリスさんはばっさばっさと翼を羽ばたかせて、何とか浮いてるようなかんじです。

「はぁ、はぁ、やっぱつえーなおまえ。
まだ一回も攻撃が掠りもしてねぇ。」

いや、イマ○ンブレイカーで右手に当たったよ。

「ホントは使うつもりは無かったけど…
ここまでやられちゃしゃーねーか。」

そう言いながら、彼は屋上に降り立ち、呪文を唱え始めた。
何言ってるか聞き取れんが、ぶつぶつ唱えている。

だが、これは…

「……ハァー、ハァ！」

「グハッ！」

いくら何でも、呪文長すぎでしょ。
２０秒は隙だらけだったよ。
そんだけあれば、ガ○ンおじさんの魔○拳も余裕であてれるって。

ちなみにバリスさん、吹っ飛んでまた落ちて行きました。
けどきっと…

「はぁ、はぁ、はぁ、よ、容赦ねぇな。」

ほら、復活。
どんだけタフよ。

「フ、フハハハハ。でもさっきの呪文で召喚のための基礎は出来た！途中だったから上級は呼べないが、中級の精霊なら簡単に呼び起こせる！」

まじでか。
ならやばくねぇか、これ。

「いくぞ！我が「全員動くな！」なんだ！？」

突然の命令は、屋上のドアからしてきた。
そこにいるのは、緑の長髪で、厳しそうな二十歳程の鎧を着た耳がエルフな女性と鎧兵士が二十人程。

「げ、フィーか！」

誰？

「……あなたですかバリス様。」

「いや、これは、その…」

すっかり怯えてるバリスさん。
いつのまにか、最初の姿に戻ってるし。
つか様って何。

「言い訳はいりません。正直に申して下さい。
なぜ召喚魔法を使おうとしたのですか？」

「いや、その……こいつ！！こいつと戦っててつい…」

自分のせいか？
こいつ、自分のせいにする気か？

「……あなたは誰ですか？」

わお、矛先がこっちに。

「…え～と、あの、第三王女様の近衛隊に…その、所属している者…です。
屋上に来たら、なんか兵士がいっぱい倒れてて、あの、戦いを挑まれて…。」

要領を得ないが、仕方が無い。
だってフィーさん、怖いんだもん。
でもなんか通じたっぽく、フィーさんは後ろにある兵士の山を見て。

「…あれですか。
……バリス様！」

「はいっ！」

「お部屋でゆっっっっくりお話ししましょうか。」

「ひいぃぃぃ！」

バリスは叫びながらフィーさんに引きずられていった。
バリス、弱いぞ。

そんなこと考えてると、鎧兵士に後ろから捕まった。
なぜ？

「そこのあなたも不法侵入で連行します。
私の記憶ではあなたのような者は第三王女様の近衛隊どころか、一般兵士にさえいなかったので。」

フィーさんが自分の疑問を即座に解消してくれた、が。

「いや、ホントです。自分被害者ですし離して下さい。」

「不審者はみんなそう言います。
話しを聞いてあげるだけまだマシでは？
きちんと身分が解り次第処罰を決定します。
まぁ最低でも投獄は確実でしょうが。なんならこの場で切り捨てましょうか？」

いやいやいや。

なにこれ、この不当な扱い。
自分被害者なのに犯罪者扱い？
だれかヘルブ、ヘルブミー！

「そもそも近衛隊に入る為には直接王族から認めて貰う必要があるのです。
そのためにはよほどの才能や技術が必要なんですよ？
上級兵士でも難しいのに、あなたのような輩が入れる訳無いでしょう。
しかも変な色に髪を染めて…
考えるならもっとマトモな嘘を考えなさい。」

自分、全否定。
そしてやっぱり近衛隊ってエリート集団で強いんだ。
そしてこれは地毛だコノヤロー。

……にしても自分、どうなるんだろ。
このまま死刑？投獄？
アハハハハハ……笑えねぇっての。

9回目＊人生は理不尽である《前編》（後書き）

さぁさぁ始まりました、第三回マイナー技講座（笑）

今回はこちら、『駄目な奴は何をやっても駄目』と『カイ現象』。
どちらもギル○ィギアイスカのロボ○イの技です
ちなみに、台詞はロボ○イ2の物も使ってたりしちゃいます。

そもそもロボ○イ知ってる人が私の周りにいなかったので、多分わかんない人のが圧倒的に多いでしょうが…

なのにこれを入れた理由、ずばりそれは自分がロボ○イ大好きだからです！（爆）

ぶっちゃけ『限カイらばーず』とどっちの覚醒必殺使うか迷いました。

マジモンのギルティ○アファンの方から見たら処刑物な気がしますが、ごめんなさい、素直に謝ります。

鳴海君の可動力とかに問題があるんです（オイ

とりあえず、いつか『限カイらばーず』も出してみたいと思っている懲りない私ですが、許して下さい。

そして、長々と言い訳すいませんでした。

１０回目＊人生は理不尽である《後編》

「……で、あなたは一体何なんですか？」

「ですから、第三王女「それはもういい！！」……事実なんだからしゃーないやん。」

自分はフィーさんとやらによる取り調べを受けている。
まぁ、こんなやり取りが１時間程続いているのだが。

現在いる部屋にはフィーさんと自分だけである。

部屋は本棚と机と椅子だけの簡素な感じで、教室と同じ大きさくらいある。

ちなみにバリスはと言うと、フィーさんの怒りの矛先が自分に向かってしまったのであっさりと解放されてしまった。
くそ、忌ま忌ましい。

「しかも何です！髪をそんな色に染めて！あなたは魔族の誇りが無いんですか！そもそも髪の色とは……」

ねーよ
人間だもの、ばい鳴海

つかよく喋るな、喉大丈夫か？

「聞いてるんですか！」

んなわけねーだろ。

「聞いてはいるけど認識してない。」

「……そんなに死にたいですか…」

そういいながら、剣を抜き、構えるフィーさん。

だが

「エクスペリーアームズ」

――フェン、カランカラン

武装解除の術の餌食になりました。

ちなみに杖はシャーペンで代用。

「……あくまで私を馬鹿にする気ですか……余程私に殺されたいようですね！！」

うるせーよ、こちとらリミットブレイク寸前だぞ。

「え、するもなにも元から馬鹿でなかったの？

つか、君如きにできんの？」

「コロス！！」

いきなり殴り掛かるフィーさんと、全て紙一重で避ける自分。

受け止めては駄目である、ギリギリを見極め、避けられる事が相手にとっては一番屈辱なのだ。

「この！避けるな不審者！」

「いや、余りに遅くてつい。」

「うがぁぁぁぁぁ！！」

ハッ！笑止！

一秒を十秒に変える能力の前には余りに無力！！

と、そんな事をやってると部屋の扉が開いた。

よーするに誰か来た。

「おねーちゃーん、お土産持って……なにやってんの？」

ゼノアと初めて会った時にいたちびっ子だ。

名前はしらん。

「……すいませんでした。」

「いや、もういいですって。」

今自分の前でフィーさんが謝ってくれている。

理由は簡単、さっき出現した彼女の妹、ノア・リディムちゃんのお陰である。

なんでも彼女はゼノアの隊の副隊長で、奴から自分のことを色々聞いてるんだって。

ノアちゃんの努力により誤解も解け、自分たちの空気もだいぶよくなった。

ホント、ありがとうですよ。

しかしこのナリで副隊長とは…

人、いや魔族は見た目に寄らないな。

「しかし、人間でサムライで勇者で覇王で近衛隊名誉顧問ですか…。

本当に何者なんですか？」

侍は出まかせで名誉顧問は姫の気まぐれなんだけどねぇ～

「う～ん、自分もよくわかんね。」

実際真面目に自分がわからん。

自分の回答の後、変な沈黙が訪れたので空気を変えようとノアちゃんが

「そ、そうだ。お土産の干しポリャの実食べましょう！」

ポリャの実ってなんだろ。

そう思っていると、彼女は持ってきた袋から１５個程の、葡萄色の

干し柿みたいなのを取り出した。

「モムモム……あ、おいしい。」

味はキウイにそっくりだ。

「やっぱりあの地方のお土産と言ったら干しポリャの実だよね、お姉ちゃん。」

「ん、毎回買ってきてくれて、ありがとね。」

そう言いながら妹の頭をなでなでする姉。

仲がよさ気で良きかな良きかな。

それから和やかになった自分達は、ポリャの実を食べながらお話をしていたのだが…

バンッ！

「よっすフィー、あいつ何者だった？つかいるし。」

ドアを蹴り開け、バリス乱入。

「お、干しポリャじゃん、俺も俺も。」

厚かましいなオイ。

「……そーいやさ、フィーさん。この直情型炎上馬鹿はだれ？」

変な二つ名は言っていたが、本名はしらんのだ。

その二つ名も覚えてないが。

「なぁ、直情型炎上馬鹿ってのはないだろ……いくら俺でも傷つくぞ。」

しらん。

「……ナルミさん、一応この方は王子なのでそのような口のききかたはどうかと……」

ふーん、王子ねぇ。

王子……おう…じって、まて。

「マジで？」

「は？」

「いや、本当に？」

「はい、我が国の第二王子バリス・ポポ・トゥインバル様です。真に残念ながら。」

たしかに、あの馬鹿エリザ姫とは似た傍若無人さ加減だが……

「…残念ってなによ残念って。お前らひどすぎるぞ。」

「いつもいつも近衛隊や一般兵士達を“稽古”して毎回ボロボロにしてる愚か者は何処の誰でしたっけ？」

「む、むぅ……でも！俺はこいつに負けそうになったぞ！あいつら

が弱すぎなんだよ！」

うん、絶対あいつの兄貴だ。
間違い無い。

そして自分とノアちゃんは蚊帳の外らしいので、彼らを見ながら干しポリャの実をモシャモシャ食べている。

しかし、そんな自分の平穏をぶっ壊す発言を、フィーさんが言いなすった。

「彼は人間でサムライで勇者で覇王なんですよ！？勝てる訳無いじゃないですか。」

マテ。
ここでそのカミングアウトすると…

「は！？それ本当か！？」

うわ、大物釣れちゃった。
めんどくさい事になりそーだ

「おい！お前！えーっと…名前は…」

「鳴海だ。長谷川鳴海。鳴海のほうが名前だ。」

「そうかナルミ！それは本当か！」

……違うって言いたい、つかここから逃げたい。
でもやったら制裁くらうだろうなぁ

だいたい、あの姫がこいつに自慢してばれるんだろうから、嘘ついても意味ないよな…

「……一応、本当…」

「そうか！ならお前俺のこの「兄様！ナルミは私の近衛兵です！」チッ！」

振り返り、ドアの方を見て見ると他の近衛隊の方々を引き連れた我らがエリザ姫様が仁王立ちなさっておられた。

「兄様！ナルミは私が先に近衛隊に入れたのです！勝手に引き抜こうとしない！」

「しらねーよんなこと！俺が欲しいから引き抜こうとしてんだよ！黙ってろ！」

「それこそ私は知りません！ナルミは私のものだ！」

……なに本人差し置いて自分の所有権あらそってんのさ。

つか王族だよね、君ら。

言葉遣い汚すぎね？

「よし！ならこいつに決めて貰おうじゃないか！ナルミ！俺のところに来るよな！」

ハィ？

「違うであろう！ナルミ！私のとこに残るであろうな！」

なに、この究極の二択。
つかいざ自分に選択権が与えられると困るね実際。
何たって、自由になる選択肢が無いんだもん。

「「ナルミ!!」」

はいはい、えーっとねぇ……

「……エリザ姫の方で。」

「いよっしゃぁー!!」

「なぜだー!?」

二人共本当に王族?
はしたなすぎ。

「何故だナルミ!?このじゃじゃ馬に惚れてるのか!?」

ない、それは地球が逆回転する程にありえない。

そしてシルバちゃん、怖いです。
やっぱりあなたはゼノアの妹ですねってくらい眼が怖いです。
何をそんなにお怒りですか。

「違う。お前のとこは毎日お前が“稽古”をするんだろ?やってられるか!」

ガーン

そんな効果音が聞こえるくらいにこいつはショックを受けている。
実際毎回屋上でやったみたいな事やってたら体がもたんわ。
「ではナルミ、行くぞ。」
？
「何処に。」
「父様、つまり王に会うための作法とかを教えるのだ。余りきにせんでも良いが、ナルミの国とは違うであろうからの。」
はぁ、そりゃどーも。
とてもめんどくさいです。
「なので今私の部屋へと行く。なので来い！」
めんどくせーな、おい
そう思いながら自分は引きずられながらフィーさんの部屋から連れ出されていった。
その時見たのが燃え尽きてる馬鹿と、何処からかお茶を出して干しポリャの実を食べながら談笑しているフィー&ノア姉妹。
……こいつら、面倒事自分に押し付けてたな。
だから助けてくれなかったのか。

…チクショー！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊℃☆

さて、自分達は今この城の謁見の間へと来ております。
この前まで自分がいたウェンノルス城の約二倍はあるお部屋です。
ちなみに造りは同じような感じです。
周りには貴族っぽいのが犇めいております。

そんな謁見の間の玉座に座っているのが、燃えるような赤髪の、黒い翼を持つ５０歳くらいの男性と、白い翼にこれまた赤い髪の、いかにもマダムな美しい女性である。

男性は王冠とこれまた真っ赤で上質なマントをしている事から考えるに、王様であろう。顔に刻まれたシワが、貫禄を生み出しなかなか渋い顔立ちだ。

女性の方は、緑っぽいドレスを上品に着込んでいる、多分王妃様。
顔は物静かで気品あふれる顔立ちだ。
ただなんか品定めするような眼が嫌だ。

「父様母様、ただいま参りました。」

……誰？
このおしとやかなお姫様は一体誰？

「おぉ、愛娘エリザよ、よく戻った！」

そう言って王様、エリザに駆け寄ろうとするが王妃様に止められる。
ちなみに貫禄は一瞬で消えた。

「またあなたは私に殴られたいのですか？」怖いです王妃様。

「いや、でも久しぶりに愛娘に会うのだぞ？このくらいいいではないか。」

「場所を考えて下さい。今は正式な場なんですよ？」

王妃様つよし、王様形無し。

「うぅ、ではエリザよ、何か報告はあるか？」

「はい、実はこのたび新しく近衛隊へと入れた者を紹介したいと思いまして。」

「…その者か？」

一気に周りの視線が集まる。
緊張してきた。

「はい、この度新しく近衛隊名誉顧問として入りました、長谷川鳴海と申します。以後、おみしりおきを。」

そう言いながらペコリと一礼。

あってるよね？

練習どーりやったんだし。

「そして父様。なんと彼は勇者と覇王の二色のオーラを有しているのです。」

『なんだと!?』とか『馬鹿な、ありえない!』とか周りが騒いでいるのを聞いて、ご満悦な顔の姫と微妙な表情の自分。

だってなんか、血統書尽きの犬的な気持ちになってきたんだもん。

「本当どうか疑わしいなら、今すぐに判別器を持ってきて確かめて見て下さい。」

「……誰か、判別器を持って参れ。」

……またあの球に手を突っ込むのか、やだなー。

結局判別器は前回と同じ反応を示し、それにより自分は二つのオーラを持つということが証明された。

その様子は、めんどいので割愛させて頂く。

「で、父様。お願いがあるのですが。」

「なんだエリザ、言ってみよ。」

なんかなー、この王様絶対娘に甘いよな。
だからこんなんなっちゃったんだな。

「ナルミに上級騎士としての二つ名を与えて欲しいのですが。」

……は？
ナゼニ？

「む、むぅ…。さすがにそれはそうやすやすとは……。」

よし、自分も中二患者が付けるような寒い名前は要らない！

「なんの武勲もあげてない者には……のぅ。」

そうだそうだ。

「ナルミは一人で、それも一撃で生きたカームルを挽き肉にした程の実力です。
十分上級騎士の資格はあります。」

いらんこと言うな！
しかも挽き肉になんかしてねぇし！

「…しかしのぅ…本当に彼がやったのかわからんしのぅ…」

「うぅ……、父様は私が嘘をついているというのですか…？そんな父様なんて……」

「！！？」

エリザ必殺泣き落とし、炸裂。
やばいな、これ。

案の定王様はうろたえている。

「ま、まてエリザ！泣くな！わかった！彼の上級き「いけません。」

自分の危機を救ったのは、以外にも王妃様だった。

「そんな事をしては他の騎士達に示しがつきません。エリザも嘘泣きはやめなさい。」

物静かそーだけど、けっこー飛ばすよねこの人。
さすがあいつらの母親。

「むぅ～。」

エリザ姫ご立腹。
だがすぐに何かを思い着いたような顔をした

「なら、武勲をあげればいいのですね。」

……あ、なんか企んでるな、こいつ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊∋☆

いまこの国の西の山脈の向こうにある“エンダルシア帝国”がこの国を狙っているらしく、今にも戦争が起きるかも知れない状況である。

このトゥインバル王国は、戦争は嫌だからなんとか回避したいが、あちらの国の帝王には今実質権力は無く、全ての実権は将軍が握っているのでそれも難しい。

では、その戦争が起きた時に自分が全て蹴散らせば上級騎士と認められるのではないか。

「つまりこーゆー事ね。」

「うむ！」

「ざけんな。」

自分達近衛隊と姫様は、姫の部屋でこれからについて話し合っている。

つーか姫の突拍子もない話しを聞いている。

「戦争なんて誰が好き好んで……」

「でもできなくはないですよね。」

「確かに、あの盗賊達みたくやれば死人もでないしね。」

「…君達黙ってくんね？」

くそ、なんだかんだで出来ちゃうからやなんだよ。

「うぅ～、でもでも、戦争は危険ですし、先生も危ないですし、怖いです。」

よく言ったシルバちゃん。

「ほら、彼女も怖がってるしょ。だから戦争はダメ、ゼッタイ。」

「戦争は私達の意志に関係無くす起こるだろうに。それに何かあったら護って貰えば良いではないか。そのための近衛隊だ。」

むぅ、確かにそうだが…
自分は自分の意志に関係無く入れられたんだぞ。

「まぁ起きたらその時は活躍して貰う、わかったかナルミ。」

「……ハァ、わかりましたよ。」

「でもいつ起きるかはわからないけどねー。」

全く、起きない事を祈るよ。

と、そういえば…

「なぁ、なんで自分が人間だって暴露しなかったん？
真っ先に言うと思ってたんだが。」

「ん？あぁ、シルバいわく人間だと暴露したら昨日の兄様みたいな輩がナルミを引き抜こうとするという結論に至ってな。
しかもそれを聞いたエンダルシアが何をしてくるとも解らんからな。
大丈夫だ、知ってる奴には口止めしてるし、父様と母様には後で知

らせとくから安心しろ。」

何が安心しろだ馬鹿者！
人の口に戸は立てれねーんだよ！
つーかあの二人に言っていいのか？

そしてシルバちゃん、あそこで面倒に巻き込まれなかったのは君のお陰か。
これは感謝せねば。

「ありがとうな。」

そう言いながら自分はシルバちゃんの頭をナデナデした。

「うぅ、あぅあ……」

すると彼女のお顔が真っ赤になった。
ナゼ？

「……どうしたん、風邪？」

「……先生、本気で言ってます？」

？

なによリム副隊長、めっちゃ本気で心配してるよ。
どうした、なんで他の隊員みんなして『こいつダメだ』的な空気だしちゃってんのさ。

「……とりあえず、先生が人間でサムライだって言うのはいずればれると思います。」

ミミリィ隊長が無理矢理話しを戻し、空気の打破を開始した。

「まぁの、しかししばらくは持つであろう。
少なくとも、エンダルシアが戦争を仕掛けてくるまではもつと思うぞ。
私の見立てでは奴らはあと5日以内に攻めてくる。」

何を根拠にゆーとるのかね、こいつは。

しかし、今の姫の発言により、空気が凍った。
なんで?

「姫、それは本当ですか?」

隊長、あなたはなに子供の戯言を真に受けてんすか。

「あぁ、私がここに戻ったという事くらい奴らももう知っとるだろう。
こっちにその気が無くとも、あっちが勝手に勘繰って“先手を打たれる前にこっちがせめてやる”と考えるだろうよ。」

何をエラソーに、お前みたいな馬鹿が戻ったところでどんだけ影響あるってんだよ。

と、馬鹿の発言を聞き流してるとバタバタと部屋の外が騒がしくなってきた。

そして

バタバタバタバタ

バンッ！

「姫様！至急会議室へ！エンダルシア帝国が宣戦布告をしてきました！」

一人の兵士がそう告げてきた。

え、エリザ姫の予言的中！？

「わかった、すぐ行く。」

姫はそう言って兵士を追い出し、自分達の方をむいて

「だからいったろ、まぁ今までならともかく、今となっては勝てる戦だ。
何たって、ナルミがいるのだしな。」

と、不敵な笑みでのたまった。

なにそれやだよ！
自分はそんなのやりたくない！
勝手にお前らでオ○リスク建ててろ！！

「行くぞ皆の衆！この“謀将姫騎士”エリザ！その力を見せてやる！！」

なにその大層な名前！？
ちょま！引っ張るな！

やめなさい姫はしたない！

「フフフフ、この戦、私の策略とナルミの力を持ってすれば3日で片が付く。
そしてナルミには上級騎士としての箔が付く！」

やっぱりそっちかい！
くそー、もうどーにでもなれだ。

人生諦めが肝心なんだよ。

……でも納得いかねー！！

11回目＊ストレス社会に生きる者《前編》（前書き）

ついに、姫と主人公の関係に急展開が！！

……キャラが壊れかけ注意。

そしてあとがきネタバレ（？）注意。

１１回目＊ストレス社会に生きる者《前編》

こちら中継のナルミです！
ただいま会議室にきております！

「だから！あなた達の隊より機動性のある我が隊が…」

「一番緊急事態に対処仕切れない貴方が何を言う！それより私の魔法騎士隊の方があらゆる事柄に対処出来る！」

「相手がどうやって西のウルス砦を攻撃したか解らんのに、貴様の器用貧乏なだけの隊が役に立つ訳が無い！それよりも私の……」

荒れております！
風速２０メートルはあろうかと言う怒声の嵐です！

と、心の中で実況ごっこしながら自分は待機している。
荒れてる理由は、“今行っても役に立たないけど手柄を立てたい”人達が言い争いをしているからだ。もちろん、言い争いに参加しない“命令があればいつでもいきます”な人達もいる

ちなみにこーゆー場に表立って自分達近衛隊はいることができないので、各々で隠れながら会議を見守っております。
そして自分はハイドで透明になって姫の後ろについています。

ついでに言うと、報告では西の砦に敵さんが攻撃してきた事により、周辺の山が一部焼き払われ、多少なりと砦に被害もあるとの事。怪我人は全体の一割程。
攻撃は恐らく魔法と思われるが、詳細は不明らしい。

そんな事を聞きながらしばらくボケーっと会議の荒れ具合を見ながら立ってると、エリザ姫が小声で自分に聞いてきた。

「……のうナルミ、馬車で二日掛かるところにお前ならどれくらいで行ける？
とゆうかゾーン爺を連れて来た方法で兵を送る事は出来るか？」

む、二日か……
とりあえず、自分も小声で返す。

「うーん、テレポートは…ゾーン爺さん連れてきたやつは明確に場所を思い浮かべる必要があるからいったことないとこは無理。
それ以外は……」

この能力はイメージ、つまり想像力を使ってやるからね、イメージ出来なかったら使えんのよ。
そう言ってしばらく考えるが

「んー、道具があれば出来るかもしれんが生憎造ってる方が時間掛かる。」

一人ならともかく、大人数ならねぇ
少なくとも自分にはＵＦＯくらいしか思い着かない。

ちなみに自分が協力的になってるのはちゃかちゃか戦争を終わらして平和になりたいからです。
つか、敵さんがここまできたら、自分の命も危ないし。

「そうか……はぁ、乗り気はしないが仕方がない。」

そう言いながら姫は立ち上がり、こう叫んだ。

「静まれ！」

すると一気に静まりかえる会議室。

「お前らの名誉や手柄など私にはどーでも良い！ぶっちゃけ貴様ら見たいな能無しは行っても役に立たん！」

うわっ！言っちゃったよこの子！
ほらほら、言われた将軍なんか顔を真っ赤にしてるよ！

「能無しとは聞き捨てなりませんな姫様。
そもそも、能無しは将軍にはなれませんし、兵の指揮もできませんぞ。」

「捨てんでいい、覚えとけ。
貴様は能無しだ、それも底無しの。
というか、将軍になってから貴様は能無しになったのだ。
それに兵の指揮は今回私がとる、将軍が能無しでも問題無い。」

……うわぁ～、この子怖えー。
将軍も青筋立てて震えてるし。

ん？なんか王様も震えてるぞ。
将軍は王様と仲いいのか？

「まてエリザ！まさかお前、前線に赴く気が！？ならん！絶対ならん！」

あ、そっち。

そして、王様が騒がしくしていると、隣の王妃様が王様に

「エイッ！」

「フゴッ！？」

渾身の右ストレート。

そして王妃様がエリザ姫に一言。

「エリザ、それは勝てる策があると見てもよろしいですね？」

「はい、母様。上手く事が運べば三日でこの戦争を終わらせれます。」

エリザ姫の発言に、会議室がざわめき出す。

しかし、それを気にも止めない王族親子。

ちなみに、父は気絶している。

「なら、行きなさい。必要な兵がいれば連れて行っても良いでしょう。」

「わかりました。では、用意でき次第に出発します。ディラン！」

王妃様に返事をして、姫は会議に出席してる人達に向かい叫んだ。

「…なんでしょうか。」

すると、言い争いに参加してなかった青髪い短髪の角が生えたの青年（２５歳くらい）が返事をした。
多分、この人がディラン。

「これから西の砦に向かう！お前の飛竜（ドラグーン）部隊から優秀なのを集めておけ！私と近衛隊、そしてゼノアの部隊を運べるだけな！用意出来次第出発する！」

「…承りました。」

なんかこの人暗いなぁ～。
と、姫、置いてかないでくれ。

言うだけ言って会議室を後にする姫を追っかけて自分も部屋を後にした。

にしても竜に乗るのか……

喰われないよね？

～サイドエリザ～

「……なんで兄様がここにいるんですか。」

エリザ姫の前にはバリス王子とその近衛隊の６人がいる。

ちなみに他は姫の近衛隊とゼノアと２０００程のその部下の兵士たち、そしてディラン率いる竜部隊が２５人。

「いやぁ～、お前が行くって事はつまり、あいつもってことだろ？」

つまりナルミの戦いが見たいと言う事らしい。

「……ハァ。あくまで指揮権は私にあります、邪魔しないで下さいね。」

「いよっしゃ！」

渋々ついてくるのを承諾する。
来るのを拒んでもこいつはついてこようとして余計時間を食うだけだと判断した結果である。

「…姫、準備ができました。」

「そうか、ではいくぞ！」

姫の号令で、兵士達は一斉に竜の背中に乗り、体を固定した。

一部を除いて

「…ナルミ、何してる。」

「いや、付け方わかんなくて。」

固定用の器具に悪戦苦闘しているのは人間の戦士、ナルミである。

「……ハァ。」

大丈夫だろうか、と珍しくメランコリーになる姫であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊｝☆

「これは…」

目的地に付いて、まず最初に見たのは変わり果てた大地の姿だった。

いままで隣国の侵入を拒んできた山が消え去っているのだ。

しかも、砦の兵達は皆疲弊していてマトモに戦う事も難しいような状態だ。

怪我を負った者も多数いる。

報告よりも、明らかに酷い。

「何があった。」

ウルス砦に入り、砦の責任者である牛鬼（ミノタウルス）のダリに説明を求めた。

彼もまた、疲労の色を隠せないでいる。

そして、彼は信じられない事を言った。

「……魔獣です。」

「何！？」

「奴らは、魔獣を召喚して襲って来ました。それも最上級のを三体も。
山を消すのに力を使っていたのでなんとかなりましたが、次に来たら俺達だけではもう持ちこたえられませんでした。」

信じられない、エリザ姫はそう思った。
魔獣とは、魔族の手によって造られた魔物と、突然変異等で魔物が変化したものの二種類ある。
だいたいが自然に普通に存在する魔物とは違い異形の形をしていて、並外れた力と魔力を持ってる。

しかし

「……奴らに、魔獣を召喚するだけの力があるのか？
ましてや操るなど不可能だ…」

そう、召喚をするには呼び出した者の魔力が呼び出された方の魔力より大きくなければいけない。操るなら、召喚に使った魔力と以外に、残りの魔力で呼び出した魔物なり魔獣なりを押さえ付けて従えなければいけないのだ。
実際に必要な魔力は呼び出す方の魔力の三倍が必要なのだ。
並の魔族では出来るはずが無い。

「…一体どうやって…」

あちら側に最上級の魔獣を呼び出す事が出来る魔術師がいるという情報なんて聞いていない。

そう思い思案していると後ろから

「複数の魔術師が共同で召喚したんでね？」

と、バリスの声が聞こえてきた。
いつの間にか壁にもたれながら話しを聞いていたようだ。

「…いえ、普通の魔法ならともかく、召喚魔法はそう簡単にはいきません。
それに、魔獣ともなれば数百単位の数の魔術師を扱わなければなりませんし、集めてもそれぞれの魔力の波長が会わなければ不可能です。
世界中捜しても、共同で召喚魔法を使えるほどね数の波長が合う魔術師はいませんよ。」

エリザはそう答え、また思案し始める。

「…とりあえず、不安要素はあるが召喚魔法相手ならある程度対処は出来る。
ダリ、これから言う事を今動ける兵士達にやらせてくれ。
魔獣三体もの魔力を回復するのに一日二日で出来るとは思わんが、魔獣三体召喚という非常識なことをしたのだ。
すぐに何か、それこそまた魔獣を召喚するとかやって来ないとも言い切れん。
なるべく早くたのむ。」

「わかりました。」

「兄様も来たからには働いて貰いますよ。
私にちゃんと従って下さいね。」

「げ、お前兄貴に働かせんのかよ。」

「当然です。」

そして、話し合いの後に作戦の準備を進め、その日一日は過ぎていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊≫☆

翌日の早朝、まだ日が昇り始めたばかりのころに事件は起きた。

「ナルミ！起きろ！」

ガスッ！

「グボッ！？」

エリザは昨日、飛竜に乗った際に酔い、着いた途端に倒れて今まで寝ていたのだ。

初めて飛竜に乗ったらしいのでしかたないと思い、彼女はナルミを一日休ませた。

そして今日、これからの作戦等についてをナルミに話すべく、近衛隊を引き連れ、朝から直々に彼を起こしたのだ。

腹への肘打ちで。

「いってて」

当然ナルミは痛がり、のたうちまわる。

「なんだ、そのくらいで痛がって。
軟弱だぞ、もっと筋肉をつけい。
ヒョロ長いだけではダメだぞ。」

笑いながら言う姫に、苦笑する近衛隊。
実に平和な朝だった、……この時までは。

のたうちまわってたナルミが、姫の発言に反応してピタリととまったのだ。

「……今、なんつった?」

いつもと調子のちがう、ドスのきいた低い声。
穏やかだった空気が、一気に変わった。

そして、ゆっくりと起き上がりながらナルミは続けた。

「おい、小娘、貴様なんつった?」

いつもと違う雰囲気に気圧されるエリザ。

「え……、あ、あーそのー」

「なんつったて聞いてんだよ!誰が感嘆詞言えっつったぁ!?質問に答えろやクソガキが!」

ドゴオッ！

怒声と共にナルミが右拳で壁を殴った。
すると、爆音と共に壁に見事な穴があいた。
向こうにある、敵の魔獣がつくった荒れ地がみえる程に綺麗な穴が。

そんな事はお構いなしに、ナルミはエリザに近付きながら言った。
それに伴い、エリザも後ずさる。

「誰が軟弱だって？誰がヒョロいって？誰がモヤシっ子だって？誰がデクノボーだって！？えぇ！？」

彼は小学生の頃に“ヒョロい”だの“モヤシ”だの言われて虐められてた時期があったのだ。
そして、小学生の時のいじめっ子たちは、それらを言いまくってとうとうキレたナルミに全員泣かされてからというもの彼の回りではそれらが禁句となったのだ。

今でもナルミはそれらのワードを聞くと、言った相手が死にたくなるまで言葉責めにして追い詰めるのだ。
ちなみに、彼の高校にはすでに被害者が五人いる。

そんな事を知るはずもないエリザだが、恐怖により正常な判断を無くし今にも泣きそうに震えている。

「ご、ごめ…」

「謝って済んだら警察いらねんだよじゃじゃ馬ぁ！！謝るくらいなら最初っからやるな！今の今まで貴様の我が儘に付き合わされた自分の気持ち解るか！？ワカンネェよなぁ！！毎朝毎朝過激な目覚ま

しでよぉ！勝手に戦争巻き込まれてよぉ！ちったぁその無い脳みそで考えてみやがれや！！」

彼はよくキレるが、心の底から“怒る”事は余り無い。
そもそもキレるのは彼のキャラで、学校でもキレキャラとして友達にいじられてる。
そして、なんだかんだ言って彼は面倒見がよく、悪態をつきながらも最後までついていくタイプの人間なのだ。

しかし、度重なるストレスに旅の疲れ、そして彼に対する禁句を言ってしまったエリザは、その怒りを真っ正直から受ける事になった。

周りの近衛隊も恐怖で動けないでいる。

「しかもなんだ！？自分に上級騎士として箔が付くだぁ！？だったらもっと貴様が言うみたいなヒョロい軟弱者でなくもっとマシな奴を入れればいいだろ！！貴様はただ単に自分の持つ珍しいオモチャを他人に自慢したいだけでねぇのか！？あぁ！？」

「ご、ごめんな…ひぐっ、ごめんなざ…ぃ…グズッ」

とうとう泣き出したエリザ姫、しかしそれでおさまる程ナルミのトラウマは浅くは無い。

「なぁ！？違うのか！？自分が珍しい人間だから近衛隊に入れたんだろ！自分の意思に関係無く！なぁ！自分間違ってるか！？おい！！」

ここまで来たら、もはや弱い者いじめのレベルである。
エリザ姫は泣きながら謝罪の言葉を呂律が回らない舌で繰り返して

いる。

「せ、先生！」

勇気を振り絞り、ミミリィが止めに入る。

「あぁ！？」

「ひっ！…いえ、そのあの……そろそろ許してあげてくれませんか？姫様も反省してますし。」

「……」

ミミリィの言葉を聞いて、ナルミはエリザを見た。
泣きながら、謝罪の言葉をつぶやき続ける一人の小さな少女がそこにいた。

「…チッ！」

いくらか冷静さを取り戻したのか、舌打ちをして、それでもイライラ隠そうとせずにベッドに戻ろうとするナルミ。

その時

「……グ…ガァァァァァ！！」

「敵襲ー！！」

いきなり荒れ地に巨大な灰色の怪物が現れた。
大きさは２０メートル程の、ライオンとイノシシとゾウを合成した

ような、地球で言うキマイラみたいな怪物が突然現れて雄叫びを発したのだ。
その後ろには、五千はあるかと言う敵兵士の大群がある。

「おいっ！エリザ敵が…おい！どうした！？」

バリスが扉を蹴り開け、エリザの様子をみて驚いた。
あのエリザが、泣きながら謝罪をしているのだ。

しかし、作戦の中枢である彼女がこれでは敵を倒すどころでは無い。
困惑してる彼に、ナルミが後ろから聞いてきた。
いつもより不機嫌そうに、しかし、言葉の調子は先程よりも戻っている。

「…バリス、あれはなんだ？」

「あれは、魔獣だ。並外れた魔力と力を持った化け物だ。って！まだ召喚するのか！？」

最初に出た魔獣の後ろに、不思議な光を放つ巨大な魔法陣が二つ浮き上がってきた。
そこから、また新たな魔獣が半分でてきている。

「…ギャァァァ！」

そのうち一体、鳥のような頭をもった魔獣が叫び、砦を恐怖が飲み込んだ。

『これは…負けるのか？』

瞬間、バリスはそう思った。

今回の作戦は、無理矢理魔獣の魔力を放出させ、無力になったとこを飛竜が突くと言う作戦だ。
強引でシンプルだが、それを出来る下準備さえあれば有効な手段だ。

むしろ魔獣と言うイレギュラーに対して短期間で簡単に出来る作戦ではない。
だが昨日のうちに、準備も完成させた。

しかし、それには莫大な魔力がいる。
エリザにバリス、ゼノアや少しでも魔力のある兵士達全員で掛からないと完成しない。
そのうち大事な一角のエリザが使い物にならないともなれば致命的である。
彼女の持つ魔力は一般兵士とは比べものにならない程大きく、彼女が欠けると魔力が足りないのだ。

この状況で魔獣を倒す術も作戦も今は無い。
バリスも近衛隊も、絶望していた。

しかし、この作戦には大きな間違いが一つあった。

この作戦では、いくらナルミでも魔獣相手に勝てる訳が無いという事で、ナルミには魔獣の足止めと、できれば後ろの敵兵を盗賊の時と同じように倒して貰う手筈だったのだ。

だが、それが間違いだったのだ。

「うるせぇ鳥頭！リバーストラップオープン！『奈落の落とし穴』！」

いきなりナルミが叫び出した、手には赤い札を持っている。

「ギャァァァァ！」

「グゴォォォォ！」

ナルミが叫んだ瞬間、出て来る途中だった二体が消えた。
いや、正確には出てきた瞬間何かに落ちたように地面に消えた。

「もう一体も邪魔！マジックカード！『ハンマーシュート』！」

ゴッ！

今度は緑の札を持って、ナルミが叫んだ途端に最初に出た魔獣が何かに押し潰されたかの様に潰れ、消えた。

その様子を見て、唖然とするバリスと近衛隊。
それどころか、ナルミ以外の全員が、それこそ敵も味方も関係無しに皆驚き、動揺している。

「魔獣を召喚ねぇ…その決闘（デュエル）、受けて立つ！！我が『次元帝デッキ』に敵う者などいない！！」

そんな中、壁に開いた穴の端に立ち、高らかにナルミが宣言した。
砦で、朝日に照らされるその姿を見た者は皆こう思った

『この方こそ、自分達を救ってくれる勇者様なのだ。』

と。

これが後世まで語り継がれる黒い勇者の最初の戦い、『ウルス砦の防衛戦』である。

１１回目＊ストレス社会に生きる者《前編》（後書き）

こんにちは、すいません。

今回の主人公はおこってるだけで、いつもは皆さんおなじみの鳴海君です。

ただストレスで精神が異常になってるだけです。

次回はきちんと元に戻しますので安心して下さい。

……多分。

１２回目＊ストレス社会に生きる者《後編》（前書き）

戦闘描写、下手くそでごめんなさい。

難しいですね、やっぱり。

精進します。

12回目＊ストレス社会に生きる者《後編》

自分の心の闇を突いたエリザ姫を叱責したが、ミミリィ隊長に止められてしまった。
しかも、いつもみたいな強気な態度では無くただの少女と化した姫にこれ以上怒る気にもなれず、だがストレスを発散しきってない自分は仕方なく、二度寝する事にした。

そしてベッドに戻ろうとした、その時

「……グ…ガァァァァァ！！」

うるさい鳴き声と共に変な生き物がでてきた。
あれか、あれが噂の失敗作か。

「…バリス、あれはなんだ？」

とりあえずいつのまにかいたバリスに聞いてみる。

「あれは、魔獣だ。並外れた魔力と力を持った化け物だ。って！まだ召喚するのか！？」

そうか、魔獣は召喚する物なのか。
あいつらが自分の二度寝を邪魔したのか…

そして、召喚されかけの魔獣とやらが

「…ギャァァァ！」

叫んだ、耳をつんざくほど叫んだ。

さて、ここで考えてみよう。
イライラマックスなキレやすい近頃の若者が、寝ようとした途端にこんな強烈目覚ましを喰らったらどうなるでしょうか、それも二回も。

正確・キレる。

「うるせぇ鳥頭！リバーストラップオープン！『奈落の落とし穴』！」

もちろん自分も例外ではなく、ぶちギレた。
ポケットからトラップカードを取り出し、発動したのだ。

「ギャァァァァ！」

「グゴォォォォ！」

すると、出て来る途中の謎生物二体は、どこかに落ちた。
そりゃああの巨体で攻撃力１５００以下は無いだろうからねぇ。

だが、それだけで収まる程近頃の若者は甘くないのだ！

「もう一体も邪魔！マジックカード！『ハンマーシュート』！」

ゴッ！

当然残りの一体も墓地送りだ。

……楽しい。
なんかこれ、アニメみたくて燃える。
実際あんま遊○王のアニメはみたこと無いが。

そして、いい気になった自分は叫んだ。
原作にあった台詞ではないが、調子に乗った自分はとにかく中二な事を叫びたかったのだ。

「魔獣を召喚ねぇ…その決闘（デュエル）、受けて立つ！！我が『次元帝デッキ』に敵う者などいない！！」

……

……ごめんなさい、皆さんそんな目で見ないで下さい！

何があったかと言うと、皆さんそろって『こいつ、何いってんの？精神危ない人？』的視線を送ってくれているのです。

おかげで正気に戻りました。
そして自分は黄色い救急車に乗るつもりはありません。

つーか考えてみたら、現実で次元の裂け目とかマクロコスモスとか使ってもねぇ。

しかもモンスター召喚出来るかもわからんし……

穴だらけだよ……ハァ。

いくらクラスで第二位のデュエリスト（全四人）だからって、現実で使おうとか、調子に乗りすぎだね、自分。

激しく後悔しております。

ちなみに自分はデッキ破壊にはどうやっても勝てません。

とかくだらないこと考えてると、後ろからバリスの声が。

「ナルミ！また魔獣が！」

んー？

うげっ！今度は四体！？

やめてくれよもう。

とりあえず。

「…トラップカード、『激流葬』。」

ゴバァァァ！

どこからともなく現れた水が、水栓トイレよろしくな流れをしながらでてきた魔獣を飲み込んで、魔獣ごと消えた。

イヤなやられかただ。

水が無くなってしばらくすると、敵の兵隊さんたちが

「うわぁぁぁぁ！」

「ま、魔獣が！魔獣全部がやられるなんて！」

「何なんだよ！どんな怪物がいるんだよ！？」

「うわぁーーん！！死にたくないよぉー！！」

大混乱しながら、逃げ惑いはじめた。

まさに阿鼻叫喚と表すに相応しい光景だ。

しかし最後の一人よ、死にたくないなら兵士になるな。

と、どう収拾つけようかと考えていると

「静まれぇい！」

なんかあちら側の、緑の髪で、髭ふっさーなリーダーっぽいの（ごつい、鼻が潰れてる、生理的になんか嫌な容姿。）が喝をいた。

それに伴い、火のついたピクミンの様だった敵兵士達がピタリと止まった。

「まだ魔獣ならいる！兵の数もこちらが多い！こちらが負ける道理など無い！腐っても帝国の兵士ならこれくらいでうろたえるな！！」

と、彼が叫ぶと途端にビシッと兵士達は隊列をもどし、最初の状態に戻った。

でも大多数は顔が青く、振るえている。

とりあえず、しばらくはこなさそうなので、こちらもやることやりますか。
そう思い、自分は未だに泣いている姫に近寄って声をかけた。

「エリザ姫。」

すると、姫は一瞬ビクッと動いて、恐る恐る自分を見てきた。

「もう自分は怒ってない、だがそっちももうあんなこと言わないでくれ。
ぶっちゃけあれは、自分にとって最大の心の闇でね。
そして、自分も言い過ぎた、すまなかった。」

「……私も、ごめ、んなさい。これ、からは、きをつけます。」

自分が謝ると、多少呂律が回ってないが、姫も謝ってきた。

「うん、でもそんなに気にしないでもいいよ。
ただ今まで見たいな我が儘は少し控えて欲しいけど、いつもの姫のままが一番いい。」

「…うん、わかった。」

うん、これにて一件落着。……多分。

よし、あとは…

「んじゃ、話も着いたし行きますか。」

あそこの敵さんだけですね。

「…ナルミ、あいつら倒せるか？」

「ん～？大丈夫でしょ。」

そう言いながら、パジャマ代わりに着ていた黒ジャージの上を脱いだ。

Tシャツのが動きやすいもんね。

もちろんこれも黒、無地の黒。

ちなみに、本物のパジャマは裾がボロボロで、まだなおしてない。

「これ、持ってて。」

「お、あ、ああ。」

そして、近くにいたバリスにジャージをあずけ……

「うおっ！重っ！なんだこれ！？お前こんなん着て過ごしてたのか！？」

……合成繊維は、この世界では重いらしい。

とりあえずバリスに預けた、そして

「……ナルミ。」

さあ行こう、とした矢先に姫が自分に声をかけた。

「どうした、姫様。」

「……エリザでいい、それより。」

そう言いながら、姫、いやエリザは一拍おいて。

「存分に暴れてこい！お前は私の自慢の近衛兵だ！その力、見せつけやれ！」

いつもの調子で、でもなんか違う感じのする雰囲気で言った。
それに対して自分は。

「おう！」

それだけ答え、壁の穴から跳び出した。
雨降って地固まるとはこのことかね。

＊＊＊

……し、死ぬかと思った。
なんとか着地出来たけど、死ぬかと思った。
まだ心臓バクバクいってるよ。

やっぱりやるもんじゃないね、ゴムゴムのロケット。

「……貴様！何者だ！？」

ん？おぉ、気付かんかったが目的地には着いたようだ。
目の前の髭が警戒しながら剣を構えてる。
ちなみに、後ろの兵士はみんな怯えてる。

そんなに怖いかね、自分。

「よ。元気？」

とりあえず、爽やかに挨拶。
第一印象大事だよね。

「何者だと聞いている！おとなしく答えろ！」

ばっさり切り捨てられた。
取り付く島もないね。

しかたないので脅かしてみよう。

「…いゃあ、自分はあの魔獣とやらを倒した者でして。」

途端にざわめく兵士達。

大半の兵士達は顔に出てる恐怖の色がより一層濃くなった。

「そんな訳あってたまるか！単独であの魔獣達を倒したなど！有り得るはずがない！」

さすがリーダー、威勢は良いね。
でも、ねぇ。

「事実なんだししゃーないじゃん。
つか、震えながら言われても…プッ。」

軽く怯えてるから滑稽としか言えない。
おーおー、どーした真っ赤だぞ。風邪か？

「き、貴様……行くぞお前ら！帝国の力を見せつけてやれ！！」

「お、おぉーーーー！！」

お、いくのか？
大半がやる気ねーぞ？
志気が足りん志気が。

とか何とか考えてると、髭を先頭に兵士達が走ってきた。
もとい襲ってきた。

まぁどっちにしろ行かせないけど。
とりあえず。

「ゴムゴムの」

殺すつもりも無いけどね。

「ガトリング！」

ドガガガガガ！

「うわぁぁ！！」

「ぎゃぁぁ！！」

とりあえず先頭の３００人は撃破～。

……

……あれ？

どうした敵兵、来ないのか？

みんなしてなぜ止まった？

すると敵兵の一人が

「う」

う？

「うわぁぁぁぁ！」

叫んだ、それを皮切りに

「あぁぁぁぁ！」

「う、腕が！腕が伸びた！増えた！」

「殺される！俺達はここで皆殺されるんだ！！」

敵、錯乱。

どうしようか。

……。

「ゴムゴムの」

めんどいので気絶して貰いましょ。

「鞭！」

バシュ！

伸びた足で一気に薙ぎ倒す。

「うわぁっ！」

「ピストル！」

ズドン！

拳で一直線に殴り飛ばす。

「ギャァァ！」

「もいっちょガトリング！」

ドガガガガガ！

とどめにもっかいガトリング。

「ゴベァッ！」

「……ふぅ。」

前半分は片付いたかな。

あとは後ろ半分か…

「なぁ。」

「「「ひぃっ！」」」

んな怯えんでも。

「……もう降参してくんね？」

ぶっちゃけ、もうめんどい。

しかし、この交渉に水を差す輩がいた。

「な、ならん！降参などあってはならん！」

偏屈髭ジジイ、復活。

いや、結構ボロボロだけどね。

そしてこのジジイ、とんでもないこととしやがった。

「貴様ら！ここで降参して、助かると思ってるのか！！」

おい、なんだそれ。

「降参した途端、捕まってこいつらになぶり殺されるだけだぞ！」

まて、そんなこと言うと…

「イヤなら戦え！こいつらに一矢報いてやれ！ただ黙って殺されるな！！」

「「「「「う…、あぁぁぁぁぁぁ！！！」」」」」

あぁ、やっぱり。

パニックになった彼らは自分目掛けて特攻してきた。

ついでに魔法と矢の雨のオマケつき。

このジジイ、これが目的か。

「チッ！ゴムゴムのぉ！」

あーもう！

「バスーカァ！！」

ズドンッ！！

めんどくせーなぁ、おい！

「「「「うわぁぁぁ！」」」」

自分特製、衝撃波付きゴムゴムのバスーカ。
多分これで残りは２００人くらい。

「「「あ、あぁぁぁぁ！！」」」

その２００人もみんな逃げてった。
ミッションコンプリート、かな？

「ウォォォ！」

！？

ガキン！

あっぶね！
髭の存在もっちり忘れてた！

「貴様は！貴様は帝国の最大の障害だ！貴様だけは絶対に殺す！」

このジジイ、勝手に攻めて勝手に障害呼ばわりか。

「ゴムゴムのぉ」

腹立つ、寝てろ！

「ライフル！」

ズドッ！

「ごっ…がぁっ！」

ズシャッ！

……

……ふぅ。

これで本当にミッションコンプリートだ。

いゃあ、疲れた。

そういやギアセカンド使った方が早く終わったかな？

…まぁいいや。

とりあえず。

「おぉーーい！こいつらの片付けやっといてくれ！そして朝飯お願い！」

朝ごはんをたべよう。

あぁー、腹減った。

……いや、別に肉でなくてもいいけどね？

～サイドエリザ～

エリザとバリス、そして近衛隊の面々は、壁の穴からナルミの戦いを見て

ドゴォッ！

「兄様。」

ドガガガガガ！

「何だ？」

ズバシャァ！

「ナルミはいったい何者なんでしょうか？」

ドガァ！！

「……わからん。」

見とれていた。

真面目に作戦を考えてた自分はなんだったのかとも思ったが、それ以上にナルミの理不尽なまでの強さに目を奪われてしまったのだ。

周りの兵士達も皆、ナルミの戦いぶりをみて呆然としている。

ちなみに、エリザはケンカからもう立ち直ってすでにいつもの様子に戻ってる。

そして、しばらくするとナルミが

「おぉーい！こいつらの片付けやっといてくれ！そして朝飯お願い！」

と、敵の司令官を吹っ飛ばして言ってきた。

「……わかった！お前たち、敵兵の回収と朝食の用意を初めろ！」

「「「ハイ！」」」

正気に戻ったエリザが指示を出すと、皆元気よく答え、迅速に行動を開始する。

その時、兵士達の会話が微かに聞こえてきた。

「…俺、あの方に一生ついていきてぇ。」

「俺もだ、弟子にして貰えないかな？」

「あの手足が伸びる、“じげんていでっき”って武術、あれだけでも教えて貰いたいよな。」

皆、ナルミの事を褒め讃えている。

それを聞いたエリザは、一気に気をよくしながら、近衛隊をひきつれて食堂へと向かって行った。。

ちなみに余談だが、ナルミはこのあと“次元帝デッキ”とは武術の名前で無い事を兵士達説明するはめになったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊≠☆

「報告します、敵味方共に死者は０、砦への損害もありません。」

「あ～、ゼノア、固い。誰もいないんだからいつもどーりにしてくれ。」

ここは食堂、今エリザとバリス、そしてナルミ含むエリザの近衛隊がゼノアの報告を聞きつつ、一同揃って食事をしている。
普通、王族と近衛隊が一緒に食事など常識では考えられない事だが、この姫様はこの方が落ち着くと言う事でよく同席させているのだ。
ちなみにバリスは全く気にも止めていない。

「むぅ、しかし…」

「あ、兄様なら気にしないでも別にいーぞ。どうせ最初から気にしていないだろうし。」

「…わかった。」

こんな風に部下にタメ口を強要するのもこの姫様の特徴である。

「とりあえず被害は無い。だが捕虜が多過ぎるのがいまの所１番の問題だ。」

何たって約４８００人の捕虜である、この砦に全て収容出来るスペースは無い。

「ふぅむ……、飛竜に乗せて山の刑務所へと飛ばすか。よし、飛竜部隊と、あと少し実戦部隊をよこすよう王都へ連絡をしてくれ。」

「…エリザが指揮官なんだ、お前がしてくれ。」

「む、しかたないな。」

そう言いながらエリザは、魔石を受け取り王都へ連絡をとる。

その間の近衛隊の様子はと言うと。

「先生、本当に強いですね。とゆうか私の時は本気を出してなかったんですね。」

「…はぅ……かっこよかったです。」

「やっぱ毎日あんな重い服着て鍛えてるからですか？」

「……出来れば、あの技も教えて下さい。」

「ハハハ、もうあの強さは異常だよねぇ。」

「魔獣を一人で、しかも七体も殲滅なんて、本当何者ですか。」

「なぁ、今からでも俺の近衛隊にはいらねーか？」

「……朝ごはんくらい静かにたべさして。」

ナルミを囲んで雑談タイムの真っ最中。

当のナルミはうんざりしている。

「兄様！勝手にナルミを引き抜かない！」

報告を終わらせ、魔石を終わらせ置いたエリザが叫びながらバリス

を叩いた。

「いてっ！やめろよ！」

「兄様が悪いのです。と、そんなことより。」

そう言ってエリザは一呼吸置いて真面目な声で言った。

「なぁ、このまま防衛戦を続けるよりもいっそ、こっちから攻めるのはどうだろうか。」

瞬間、空気が変わった、が

「……なぁ、報告した後に聞くって事はもう王都からは攻める気満々の方々がくるのか？だったら質問でなくて確認でね？」

いつもの調子でナルミがしゃべる

「……プッ…アッハッハッハ！いや確かに！実際攻めるために援軍を送って貰っている。確かにこれでは順序が逆だな。」

そしてエリザが笑った事でいつもの空気へと即座に戻った。

「じゃあ再度言う！明日、準備が整い次第敵国へ攻め入る！ゼノア、それまでに体を休めておくように兵達へと伝えておけ！」

「あぁ、わかった。」

そう言ってゼノアは食堂から出ていった。

そして、エリザはナルミと向かい合い

「ナルミ。」

「ん？」

「朝はすまなかった、これからは気をつける。」

謝った。

「いや、自分も言い過ぎた、ごめんな。」

ナルミも謝りそして続けた

「エリザ、とりあえずこれは喧嘩両成敗という事で水に流そう。」

そして、手をのばした。

「お？あ、ああ。」

それの意味がわかったエリザは、しっかりと手を掴み、二人はきっちり握手を交わした。

「いゃー、仲直りして貰ってよかったですよ。」

「ほんとに、あれほど先生が怖いと思った事いままでなかったしね。」

それを見ながら話すリム副隊長とミミリィ隊長。

「まぁ雨降って地固まると言うし、これからは気をつけてくれるっ

ぽいからもうあそこまでキレる事も無いべ。」

握手をとき、二人の会話に笑いながら答えるナルミ、しかしその横で

「??きれる?雨??りょーせい?ナルミ!」

「んぁ?」

「さっきから雨やら切るやら水やら、何を言っていたのだ?」

「あん?慣用句とかは通じないの!?あれ?でも今まで普通に通じる慣用句もあったし、あれ?れれ?」

「いいから、どうゆう意味だ?何が流れて何を切るのだ?」

「あ、あぁ、まず喧嘩両成敗って言うのは……」

その後、午前中がナルミ先生による日本の諺、慣用句講座が食堂で開かれた。
生徒は皆、興味津々で聴き入ったそうだ。

ちなみに、終わった直後にナルミが呟いた

「……通じる諺と通じない諺があるって……なんて半端な翻訳機能だ。」

という言葉は誰にも聞き取れなかったそうな。

13回目＊後先考えて行動せよ

「うおぉぉぉぉぉぉ！！」

「うらぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ただ今自分達は敵の本拠地の……え～と…なんつったけ……とりあえず敵の国の首都に当たるとこを攻めています。
正解には砦で王都に要請した援軍が戦ってる、というか門を破ろうとしている所を2キロくらい離れた小高い丘にて、高見の見物となっているのですが…

「う～ん、なんというカオス。」

ぶっちゃけて言おう、援軍使えねぇ。

素人目で見ても解る、策もなにもない、ただの神風特攻隊よろしくな感じに数でごり押しなだけなんだもん。
やっぱりエリザの言うとおり、援軍として来たあの将軍は無能だったのか。

「……あれは、兵が無駄に死ぬだけだ。」

激しく同意、略して禿同。

「だから私達が行けばもっと速やかに都を落とせる上被害も最小限ですむのというに…」

そういいながら、苦虫をかみ砕いた後に青虫を煎じて飲んだような

顔をするエリザ。
きっとお茶請けは芋虫だな。

と、話がそれた。
とりあえず、今指揮をとっているのは無能な将軍であり、彼は援軍として来た全ての兵士をお国のために特攻させている。
対する自分達はその様子をただ見守るだけである。

あさつまえ、エリザが考えたここを落とすための色々な作戦も全てパーになってしまった。

真に遺憾であります。

ではなぜ、エリザの作戦を全て捨て、しかも自分達はおいてきぼりで馬鹿が特攻命令を下しているのか。
それを説明するために、少し時間を遡ってみようではないか。

多分、誰もが予想はつくだろうけど…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊↑☆

さてさて、ただ今ここは会議室。
そこで例の如く会議が行われています。

なぜかと言うと、自分による「日本の諺・慣用句講座』を終わらせ一息ついた所に援軍がやってきたので今後の予定、もとい作戦を話し合っているのですが……

「だから！そんな回りくどい事をやるより正面から行くのが一番早いし確実です！！」

「阿呆か！策も無しにそんなことしてみろ！兵が無駄に死ぬだけだぞ！！」

「策ならあります！貴女様よりももっと完璧なのが！」

「ならそれを言ってみろ！！」

……なんでこいつがいんのさ。

いままさに言い争っていらっしゃるのは我らが姫、エリザと彼女に能無し呼ばわりされた阿呆将軍でございます。
ちなみに自分はまたもやハイド。

さて、なぜ彼がいるかというと、援軍の指揮官だからでございます。

正直、いらねぇ…

だってこいつ、ただ全員で門を攻めて一気に城を落とすのが一番と主張して聞かないんだもん。

エリザとしては、まず敵に見える所に堂々と兵士達が待機する。
そしてそちらに意識が向いてるうちに自分がハイドで侵入して司令塔付近で騒ぎを起こす、その混乱の裏で隠密部隊が正門を開き歩兵で一気に攻める。
そして敵の後ろから飛竜を使い挟み打ち。

これが一番楽な方法だと彼女は言っている。

「つっ！ですがそもそも！貴女様の考える作戦を実行出来る程隠密活動がうまい者などここにいません！そんな状況でその作戦を行うよりも私の策に乗る方がいいに決まっています！！」

「居るから言っているこのたわけ！ナルミ、出てこい！」

そう言われハイドを解く自分。

「んなっ！貴様どこから来た！？」

「ほれ、この姿を消す術を持つこいつなら問題あるまい。ちなみに最初からいたぞ。」

「っつ…しかし飛竜を後ろに移動させるのはどうしますか！？あんなに巨大な大群、すぐに見つかりますよ！？」

なんとしても突撃したい将軍。

ぶっちゃけこれだけ反対する理由はエリザの作戦だと彼の出番がないからだろう。

出番がない＝活躍できない＝武勲をたてれないだからね。

何たって最初に自分が出るって主張していたくらいだから、よほど活躍したいんだろう。

「あぁ！？飛竜もこいつが処理できるぞ。」

そう言われながらエリザに親指で刺される自分。

やめなさい、行儀悪い。

「ナルミ、見せてやれ。」

「あ～、はいはい、んと……スモールライト～。」

某青狸風にポケットから出すは懐中電灯（手回し充電式）、中学の技術の授業で造った代物だ。
それのスイッチを入れ、光を机に当てる。

「な…ん……」

すると手の平サイズまで縮む机、おまけに言葉を無くした将軍がついてきた。

「元にもすぐ戻せますよ。」

そういいながらもっかい光を当てる自分。
机はもちろん元通り。

「どうだ？まだなにか文句はあるか？では、お前の策がどんなものかか教えてくれないか。」

勝ち誇った顔のエリザ。

「つっ……解りましたよ！！」

そう言いながら机を叩いて出ていく将軍。
顔は赤く、怒りが滲み出ている。
ぶっちゃけキモい。

「ふんっ！欲にまみれた能無しが。」

そう言いながら残った人達に作戦を詳しく伝えるエリザ。

あれ？
最初より将軍の出番少なくなった。
ご愁傷様、そしてざまぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊ー☆

次の日、昼頃に出発して目的地に着いた自分達は、作戦のための準備を進めていた。

しかし、自分はまたも飛竜酔いでダウン。
そのため、自分は横になって休んでいた。
その横ではエリザが隠密部隊と自分に作戦の最終確認をしている。

その時、事件が起こった。

「突撃ー！！」

「うぉおおおお！！」

「な、何だ！？」

地響きと共に兵士達の雄叫びがこだまする。
それに驚き飛び出すエリザ。
それに追随して飛び出す自分。
ついでに胃からも何か飛び出そうとしてきたが、それはなんとか持

ちこたえた。

「おい！これはどういう事だ！？」

外に出ると頭が二つの変な生き物に跨がった将軍と、彼を怒鳴りつけるエリザの姿が。

……あれ、馬か？牙生えてるぞ？

「どういうもなにも、援軍は私の指揮下にあります。だから私は私が最善だと思う方法を私の指揮下の兵だけで進めたまでです。」

無茶苦茶だ、最高指揮官はエリザなのに。

こいつ、なにやってるか分かってんのか？

「おまえ！これは明らかな反逆だぞ！！」

「もう一度言いますが、援軍は私の指揮下にあります。私の兵をどう動かすかは私の自由です。それに…」

そして、一拍置いて彼は言った。

「最終的に功績を残せれば誰も文句を言いますまい。」

そう言い放ち、彼は駆け出した。

要するに何かしら功績を残したい。

そのためにはエリザの作戦に乗る訳にはいかない。

なぜなら活躍できないから。

だから無断で無理矢理部下達を特攻させる暴挙にでた、と。

……脳みそ何で出来てんだ、あの単細胞。

「っつ～！おい！今居る全員ここに集めろ！各隊毎に残った戦力を確認して私に報告しろ！！」

そう叫びながら指示を出すエリザ。
かなり怒っているのが後ろ姿だけでも見て取れる。

あぁ、なんとゆうか…

面倒なことになってしまった…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊→☆

以上が、今までにあった事である。
はっきり言おう、非常に迷惑である。

現在エリザのもとにいる兵士は、砦に出向いた時の面子、それに一部前線へと行かなかった、もといそんなこと聞いてませんな援軍の方々がいくつかいる。
あとはここまで皆を運んでくれた飛竜部隊の方々。
他は全部あっちがわ。

ぶっちゃけここに残ってる数の二倍はあっちにいっちゃってる。

ちなみに後からきた飛竜部隊の方々の半分は皆、砦で捕虜を運ぶためにいなくなりました。

「……先生、なんとかなりませんか？」

途方に暮れている自分の所にやってきたのはシルバちゃん。
ちょっと遠慮がちに聞いてきた。

「ん～、敵だけを倒すような都合の良いものは生憎もってなくて…」

そう、これが一番重要なのだ。
確かにこれは戦争で、敵を倒すのが一番の目的だ。

しかし、敵を一掃出来るからって味方まで巻き込んで吹き飛ばすなんて外道な行為、自分にはできない。

「そう、ですよね…」

そういって落ち込むシルバちゃん。
とりあえず、頭を撫でて慰めておこう。

「大丈夫、なんとかなるさ。」

「……ふぁ……」

……また風邪か？
真っ赤だぞ。

と、シルバちゃんを気遣いつつ頭を撫でていると

「だー！ナルミ！どうにかならんか！？」

さっきよりもさらに怒ってエリザが登場。

「味方も一緒に巻き込んでしまうから今自分が出るのはちょっと…」

とりあえず、さっきと同じような事をいっておく。

「そうか…やっぱりな…」

そう言って考えこむエリザ。

でもイライラしてか、右足はさっきから地面に穴を掘っている。

そしてしばらくして語り出した。

「さっき出遅れて残った兵に聞いたのだが、あの馬鹿、私が正面から突撃するように指示を変更させたと今朝になって部下に言い出したらしいのだ。それを聞いて多少怪しく思ったらしいのだが、将軍の指示に従わない訳にもいかずに皆出ていったらしいのだ。」

確かに、あいつならやりかねん。

つかこれ、完全に軍事裁判ものでない？

「だからあんな犯罪者、死んでもいい。ナルミ、奴共々敵を蹴散らせ。」

いやいやいや。

「まて、他の兵士はどうなる。ただ巻き込まれただけだぞ。」

「……味方の兵以外、奴共々敵を蹴散らせ。」

「うん、それ無理。」

ぶっちゃけ無理難題。
それが出来たらしてるっつーの。

「やっぱり無理か……はぁ、全く、あれでは門を壊せても城を落とせるだけの兵力が残らんと言うのに。門が開いても、ここに残った兵だけではまともに戦うだけの数がないし……撤退するか……。」

やっぱり、ねぇ。
見た感じ、今こっち残ってる兵士よりもあちらので戦ってる敵兵士の方が多いだろう。
しかも、敵は中にもっといるはずである。

まともにやって勝てるかっつーの。
ここは戦略的撤退をして、もう一度兵士を連れてこなければ。
と、すっかりネガティブな考えをしている自分に、シルバちゃんが一言。

「……いっそ、味方も巻き込んであそこにムルスンを数匹ほうり込めば……」

なによムルスンって。

「ムルスンって、何？」

「あ、ムルスンって言うのは魔物の一種で、草食なんですけど鳴き声を聞くと錯乱して下手すると精神が崩壊する恐ろしい生き物です。」

下手に刺激しなければ鳴かないんですけどね、とシルバちゃんが丁寧に教えてくれた。
錯乱する鳴き声、ね。

「…シルバ、ムルスンは手なずけるのが難しい上にとても危険でしかも数が少ない。出来るはず無いだろう。出来たらとっくに使ってる。」

「ハハハ……わかってますけど私の思い付く味方が傷付かない最善の方法がこれで……すいません。」

「仕方がない、撤退す「シルバちゃんの意見、採用」……は？」

そう言いながら自分は、準備を始める。

「せ、先生？まさかムルスンを手なずけててそれがいまいるんですか！？」

まずは針金と……ピンポン球でいいや、をポケットから取り出す。
2つづつの2セット。

「まさか、んなはずないべ。ムルスンって生き物の存在すら知らんかったのに。」

針金の先っちょにピンポン球を突き刺す。
そしてくっつける。
ちなみに刺すのとくっつけるのはキリとア〇ンアルファで。

「じゃあどうやって……」

お気に入りのマイヘッドフォンの耳に付ける部分の上に貼っつけて完成。
自分は形から入るタイプなのです。

「ん～？どうやってって……」

最後に、端子を…何だっけ……とりあえずウォークマン、パソコンにさして充電するあいつに取り付けてこれで完璧。
曲はもちろんメ○ト！初○ミクは自分の嫁さ！！

「これからやるさ。」

そういいながら、ヘッドフォンをして、耳の部分に手をそえる。

そして、

「熱くなんなってオッサン…。年寄りはもう寝る時間だぜク～ックック…。自分の子守歌でも聴いて…イッちまいな…！」

「「「「ギャァァァァ！！！！」」」」

叫びの合唱の後、門の近くには気絶した兵士達。
敵味方いりみだれて全員仲良く痙攣しながらおねんねしてます。
もちろん、門の上や後ろにも攻撃は行き届いております。

「な……何をやったのだ？ナルミ。」

「奴ら個人個人の最も嫌な周波音を直接全員の頭に発信してやった。」

「どうゆう事ですか？」

あー、発信とか周波音とかわかんないか。

「よするに、嫌な音を際限無く頭の中からずっと大音量で響き渡らせたの。」

「……恐ろしいな、これは。」

確かに、さすがク○ル曹長だ。
あんな嫌な奴にはなりたくないけど。

「…先生が味方で、本当によかったです。」

「本当だな、下手したら一人で国を落とせるな。」

「あ、これが“一騎当千”ですか！」

「おお！そうかこれが一騎当千か！」

おー、よく覚えてるねぇ、と、ちがうちがう。

「…で、どうする？このまま突っ込む？撤退する？」

「おぉ、そうだったな。……ナルミ、あそこにいた兵士は皆死んだのか？」

「いや、多分気絶。上に乗られたり壁から落ちたりして死んでるのも居るかも知れないが、基本気絶。」

「そうか、よし！！各隊毎に味方の回収と敵の殲滅をしてくれ！門は無理に壊さんでも良い、とゆうか壊すな！」

その号令とともに動き出す兵士達。

てか彼らの好奇の視線が痛い、やめてください本当に。

「……なんで門を壊さないの？」

その視線から逃げたいので、エリザに話しをかけてみる。

根本的解決にはなってないが。

「混乱が起きずらくなるからだ。司令塔がいきなりやられた上に閉まっていた門が急に開いた方が奴らとしては最初から開いている所になだれ込むよりもつらい所があるだろう？」

む、確かに。

司令塔がやられたとこに予想外の精神的打撃を与えるのがこの子の目的か。

「エリザ、恐ろしいこ！」

「は？」

「あ、いやすまんつい。」

ほんとに無意識で声が出てしまった。

「姫様、将軍はどうするんですか？」

忘れてた、馬鹿将軍の存在。

つか、いまさらだけど名前しらねぇ。

「あんなやつ、縛り首だ。いや、いっそさっきのナルミがやった奴を延々聞かせるか…」

なにをのたまうこの娘。

「やだよ、主に自分が。なぜにずっと奴のために能力つかわななんのだ。だったらいっそ平の兵士から再出発してもらえ。」

「お、いいな。よし、奴にはもう一度雑用から始めて貰おう。」

まじで?思い付き言っただけだよ自分。

「まぁ生きてたらの話しだがな。ちなみに、これは最高指揮官からとしての一時的な罰であって王都へ戻ったら今度は軍事裁判にかけられた後に正式な罰が決まる。まぁ間違いなく極刑だろうが。」

あぁそうなん。

ぶっちゃけ奴の末路なんて興味無いです。

そんなこんなをしてるうちに、兵士の回収は終わったようだ。

ちなみに将軍は生きてたっぽい。

回収しに行った全員が戻ってきたのを確認して、エリザが号令をかけた。

「よし、いったん砦に戻るぞ!」

それに従い竜乗る兵士達。

「先生、いきましょう。」

「……ヤダ。」

竜は、酔う。

あいつらまるでジェットコースターなんだもん。

それに一時間近く乗ってごらん、死ねるから。

「…帰れませんよ？」

……ハァ。

仕方がないので渋々乗る事にした。

ついさっきも乗ったのに……

しかし、一つ不思議に思う事がある。

なんで奴らは魔獣を使わなかったのだろうか。

確かに逃げていった人達から魔獣は無意味だとか報告されてるかも知れないけど、それは普通、信じてもらえないのではないか。

信じて貰えたにしても全く使わなかったのはおかしい。自分なら真っ先に使って一人でも多く倒そうとするのに…

魔獣が切れたのか、召喚できる奴が捕まったのか……

どっちにしろ、ゲームとかではこうゆうのは何か裏があるからなぁ。

…まぁ、自分が考えてもしゃーないか。

所詮自分だしね。

せいぜい頭の片隅に置いておく程度にしときましょう。

「ナルミ！早くしろ！置いて行くぞ！」

「あー、ごめんごめん。」

とりあえず、今はこのトカゲの上で酔わないようにがんばろう。

それが今自分に出来る最善の策。

「よし、ではいくぞ！！」

え、ま、ちょ！

まだ心のじゅんびィ～～ヤァ！！！？

もう、竜なんて嫌い……。

ちなみに余談だが、このあと自分は。

「あーもう！なんでこんなことしちゃったかな！！」

ヘッドフォンに思いの外強くひっついた針金をとるのに悪戦苦闘していた。
しかもちょうどよく隙間に差し込んだからたちが悪い。

さらに言うと、はがし液の存在を思い出したのはその二時間後である。
形から入っていったあの時の自分を殴り殺したくなってきた。

……チクショー！！

１４回目＊鬱な自分と爆走する女性陣（前書き）

あれ？
なんでこんなことになったんだろう。

１４回目＊鬱な自分と爆走する女性陣

敵さんの本拠地から戻ってきた自分達は、さっそく会議室に集まり今回の暴走による被害報告とこれからについての作戦会議を開いていた。
今回は隠れないで、自分も一緒に会議に参加した。
今回の作戦で、自分はとても重要だからだそうだ。

「報告します、敵の死者は約３０００、あの門にいた者は皆始末しました。」

ゼノアの報告を聞きながら、半分麻痺した頭で自分は考えていた。

……やっぱり、死者は出てしまいますか。
平和ボケした日本人には余り実感沸かないけどね。
だけど、その死者の中にいつ自分が名を連ねても不思議では無い所に自分は来ている。

「対するこちら側の死者は３７８５、援軍の約六割がやられました。」

そして、死んだ敵兵の３０００人は、全てでは無いにしても大部分が『始末』されたのだ。
他でも無い、自分の攻撃によって動け無い所を。

つまり、間接的にでも自分は人を殺したのだ。

そう考えると、とても気持ち悪くなってきた。

「……大丈夫か？ナルミ。」

うなだれていると、エリザが心配して声をかけてきた。

「……あぁ、大丈夫だ。」

自分でも解る、声に力が無い。
今にも泣きそうな弱い声だ。

でもそれをごまかすため、自分は嘘をついた。

「……今日のあれ、やるとけっこー疲れるんから、それのせいさ。」

「……そうか。」

嘘をついたが、多分ばれている。
他の会議に出席している人達は納得してるようだが、少なくともこの娘にはばれている。

「なら会議が終わり次第、休め。今体を壊されたらたまったものでは無いからな。」

言い方は作戦に支障をきたさないように言い聞かせる口ぶりだが、自分の事を本気で心配してくれてる目をしていた。

その優しさが、一層自分の罪悪感を大きくした。

「わかった、気をつける。」

今の自分には、それしか言う事ができなかった。

「……では、明日の作戦についての修正、および変更点を伝える。各自質問や意見は……」

話しが明日の作戦についての物に変わったが、自分の頭はそれを認識できず、気が付けば会議が終わってた。

そのまま、自分は夕食も食べずにフラフラと部屋にいき

ボフンッ。

重力に任せ、ベッドへと体を預けた。

そこで今日の報告を思い出し、次いで出てきたのが

「……グスッ……帰り、てぇよぉ……」

自分の世界、家族や親友との思い出だった。

この日、自分は初めて人を殺した。
この日、自分も死ぬかも知れないと思った。
この日、自分はこれからも人を殺す事になるだろうと思い知った。

言い知れぬ恐怖感が自分を襲う。

数少ない自分の理解者にすら相談できない、支えてくれない、救ってくれない。
その事実がいままさに自分にのしかかる。

様々な事が重なり、誰にも相談出来なでいる自分はとうとうホームシックにかかってしまった。

これからの事、今までの事、会えない悲しみ、死への恐怖、それらが心で渦巻き、絶望に変わる。

思い出の中の、もう会えない両親や親友の笑顔がより一層自分を悲しくさせ、心に闇が広がっていくのが自分で分かった。

～エリザ&

彼女の発言により、近衛隊の面々は皆、彼女に注目した。

どうゆうこと？

ミミリィがそう聞こうとした時、今まで沈黙を守っていたエリザが口を開いた。

「…あれは…ナルミは今罪悪感に押し潰されそうになっている。多分ナルミは……」

そこで言葉を区切り、近衛隊に向き直って言った。

「多分、今まで誰かを殺すという事をした事が無いのだ。」

ミミリィ達はそれを聞き、唖然とした。

あれだけの力を持ち、一人で七体の魔獣を屠り、５０００もの軍隊を打ち倒した者が魔族を殺した事が無い。

ありえない、そう思った。

しかし、考えてみると思い当たる節もある。

盗賊の襲撃も、敵軍を撃破した時も誰一人として死者はいなかった。皆気絶してはいたが、命に別状は無かった。

何故かと思案していると、エリザが歩き出した。

「シルバ、行くぞ。他の者は隠れてろ。」

「はい。」

それについていくシルバと、慌てる他の隊員達。

「ちょっ、姫様。どこに行くんですか。」

「決まっているだろう。」

リムの質問に、立ち止まり当然と言わんばかりにエリザが答える。

「ナルミの所だ。下手に混乱してるお前らは隠れながら成り行きを見ていろ。私達がなんとかする。」

そして再び颯爽と、歩きだした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊※☆

ナルミのいるはずの部屋は明かりもつけておらず、外と同じ漆黒の闇が支配していた。

コンコンッ
ガチャッ

「ナルミ、入るぞ。」

「失礼します。」

「……来ないでくれ。」

その部屋に本人の返事も無視して入った二人が見たのは、いつもよ

りも弱々しい、それこそ触れば壊れてしまいそうなくらい脆くなったナルミがいた。

「先生…」

「……帰ってくれ、今の自分を見ないでくれ。」

ナルミのベッドの隣のベッドに座りながら、思わず声をかけたシルバに対し、ナルミは力無く反応した。
月明かりに照らされた顔には、充血した眼と涙の跡がある。

「……たんとーちょくにゅうに言う、ナルミは今まで戦争とかで誰かを殺すことは無かったのか？」

シルバの横に座りいきなり核心をつく質問をしたエリザに、シルバは驚きながらもナルミの顔を見て、答えを待った。
しかし、答えは案外あっさりかえってきた。

「…ハハハ、うちの国であった最後の戦争は６０年以上前だ、１７の自分には無理な話しだよ。しかし…」

やっぱりばれてたか…

渇いた笑いとともにそう言ったナルミは、真っすぐに二人の顔を見て言った。

「……自分の国では、人を殺すのは犯罪だ、いかなる理由があろうとも。」

そして、語り始めた。

二人はそれをただ黙って聞いていた。

彼の国について、家族について、彼が通う学校という施設と唯一の親友について。

ただ、平和な国だった。

しかし、紙一重な平和である。

彼の国で起きる犯罪は、この国では考えられないほど残虐で、他国とのいがみ合いや一瞬で都市を灰にする兵器、腐敗した国の上層部。

剣先に立つよりも難しいバランスで保たれたその日常が彼の強さの秘密なのだと彼女達は考え、言葉を失った。

「……確かに、平和に守られ暮らしてきた自分は誰かを殺した事は無い。しかし、これから生きるために殺さなければならない事になるだろう。けど、そうなった時に自分がマトモでいられる自信が、自分には無い。だから…」

最後に一拍おいて、彼は言った。

「君達に、自分の理解者になって欲しい。自分が壊れそうな時に、支えて欲しいんだ。」

そう締め括り、彼は話しを終えた。

しばしの沈黙が流れた後、最初に喋ったのはエリザだった。

「ふぅむ、複数同時に求婚とは……それもニホンの文化か？」

「はい？」

「ふぇっ？」

悪戯が成功したようにからから笑いながら喋るエリザと、予想外の反応に驚くナルミ、それと…

「そ、そんなき、きゅ、求婚だなんて、わ、私に先生が……キャー！！」

真っ赤になりながら奇声を発するシルバ。
もはや完全に自分の世界へとリップしてしまっている。

「い、あ、いやいやいや、まてこら。どこをどうとって求婚なんて……とれ、るか？」

「うむ。これが求婚で無いなら何が求婚か。」

さらにニタニタしながら追い撃ちをかけるエリザ。

「いや、その……わかってるんだろ？自分の言いたいこと。」

「はい！最初は女の子がいいです！！」

シルバの爆弾発言に思考が追い付かないナルミと、爆笑するエリザ。
もはやナルミの顔には先程までの暗い表情は無くなっていた。

「ちがっ！なに！？ちょ、勘違い！勘違いだから！！どこまで素敵な未来予想図広げてんの！？エリザも笑ってないで誤解を解け！」

エリザは、いつも通りのナルミに戻った事に安堵した。
そして、覚悟を決め、自らの弱さに向き合う事のできるナルミの心の強さを垣間見たきがした。

その強さの一端を担うことができるのを少しばかり誇らしく感じながら、二人のやり取りを眺めていた。

「ちょっ！聞いてる！？助けて！」

「そうだな……、シルバ、名前は私が付けてやろう。」

「はい！」

「火に油を注ぐなぁ！！！」

とりあえず、今はナルミをからかって遊ぼう。
そう心に決め、エリザはシルバを煽り始めた。

それからしばらく、その部屋からは楽しそうな声がこだましていた。

～ナルミサイド～

つ、疲れた…

確かに落ち込んだ自分を励ましに来てくれたのはうれしい、それは素直に感謝しよう。
だがね、

「いやぁ、楽しかったぞナルミ。」

「うぅ～、恥ずかしいです。」

自分で遊ぶのやめていただけないでしょうか、エリザ様。
ぶっちゃけシルバちゃんの誤解を解くのは疲れました。

彼女はウブだから、求婚とかのキーワードで素敵な未来を思い描いて暴走したのです。
相手が自分っていう最悪な状況を完全に忘れて。

……いや、マジでプロポーズはしとらんですよ?

「にしてもどうだ、少しは気が晴れたか?」

「ああ、さっきまでの鬱な自分はもういません。いつもどーりの自分です。誰かさんのせいで疲労はたまりまくりですが。」

嫌みたっぷりに言ってやった。

「そうかそうか、シルバ、お前が調子に乗るからナルミが疲れたそうだ。」

「あぅぅ、す、スイマセン…」

「ちげーよ貴様だじゃじゃ馬姫エリザ。」

もう、自分こいつに勝てる気がしない。

「ハッハッハ、冗談だ冗談。そんな事より疲れは明日に残すなよ?

こんな事の直後で酷だが、明日の作戦は予定通りに行われる。お前が倒れたら全てが狂う。」

あー、そうだった。
すっかり忘れてたけど明日あそこに侵入するんた。
今からきっちり休まねば。

「わかった、じゃあこれから飯食って風呂入って寝るわ。」

「ん？」

ん？
どした。

「ナルミ、“フロ”とはなんだ？」

「あ、私はお兄様の部下の方が話してるのを聞いた事あります。なんでも、心と体を清める儀式だって。」

ゼノアの部下ったらあの二人か？
つか、話題になる程の物なのかね、これは。

「ほぅ、それは興味深い。よし！そのフロと言う儀式、見せてくれ！」

「私も興味あります。」

……

……え？

まてまて、つまりこの二人の少女は自分が風呂に入るのを見る気満々なわけ？
つまりこのままだと自分が裸になるのを見られる訳？

……

ガシッ！

危機を感じた自分は、音よりも早く二人の肩を掴んだ。

「うおっ、どうしたナルミ、いきなり。」

「うぇ？な、なんですか？」

「頼む、お二方、それはやめてくれ。」

そして光より早く頭を下げる。

「ど、どうした。そんなに危ない儀式なのか！？」

「いや…うん、ある意味危ない。今君らを連れてったら、自分の色んなものが崩壊する。」

主に心、特に自尊心。

「だから頼む！こんどお菓子作ってやるから！！」

「む、むぅぅ。わかった、じゃあ王都に帰ったら即座に作って貰うぞ。」

よかった、案外あっさり引き下がってくれ……

「毎日昼食の後に出して貰う事にしよう。」

無かった…

毎日て、専属コックですか…

「では期待している。シルバ、戻るぞ。」

そう言ってエリザは、シルバちゃんの手を掴み、颯爽とでて行った、

「え、あ、あの、失礼しまちた。」

急でびっくりしたのか呂律が回らないシルバちゃん。

なんというか、全くタイプが違うのに仲いいよねあの二人。

それとも実は根本的なところで通ずる物があるのかな?

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊～☆

さてさて、今自分は食事を終えて、砦から出るために廊下を歩いています。

もちろんお風呂に入るため。

風呂はこの前の石ドラム風呂、ポケットに入れていつも持ち歩いています。

しかし、食堂での好奇心に満ちた皆さんの眼は忘れる事ができませんね。
今もすれ違う度に振り返えられたり凝視されたりしてけっこーきついです。
とかなんとか下らない事を考えていると、自分のポケットでありえない事が起き始めた。
『みっくみっくにしてやんよ～♪』
！！！？？
なぜここで自分の嫁が歌ってる！？
周りの人達なんか、いきなりの事に驚いて、即座に臨戦体制をとりはじめた。
自分は、発信源であるポケットに手を突っ込み、即座に原因を突き止めた。
その手にあったのは、この世界では使う事が無いだろうと思っていた物。
現代っ子の必需品、携帯電話である。
いまだ鳴り響く携帯のディスプレイには、着信『みらくるごっど』の文字が。
……
……ピッ

『あ、やっとで「現在この番号は使われておりません、だから帰れ、それか存在を抹消されろ。」

ピッ、ツーツー…

さて、では風呂に…

『ボクはなんのために歌うバラジクロロベンゼン♪』

!!

な、なぜ!?
なぜあえてベンゼンシリーズ!?
しかもこれは設定した覚えないよ!?

…ハァ、しかたない。

ピッ

『なんですぐに切るかな、携帯の使い方解ってる?』

「解ってるよ、現代の若者嘗めんな。で、何用か。」

『あ、そうそう。君にさぁ、鍵の説明忘れてたから、それをしに。』

鍵?
なんぞそれ。

「なにそれ。」

『この前言ってた封印に入るための道具。』

あぁ、そーいやあったねそんなもの。
でもね、

「なぜに携帯で？」

『う～ん、驚きを求めて？』

おいっ！

『でもいちいち思念を電波に変えるのめんどくなってきた。だからやっぱり直接話すわ、じゃ。』

プツッ、ツーツー

…あいつ、いつか締める。

『できるもんならやってみなさいな。』

……出てこい、やったる。

『や。』

チッ！
で、説明っつーのをちゃっちゃとしちゃってくれ。
自分は風呂に入りたいのだ。

『兵士無視して外に出て、ちゃっかり準備完了してる奴の言うことじゃないよね。』

うるせー、いいから早く。

『はいはい、とりあえずポケットに手を突っ込んでみ。』

ん、こうか？

……あ、なんか棒状の物がある。

『それ、取り出す。』

はいはい、よっ

……え？

『それが私から君に贈る鍵兼武器、名前は……勝手に付けて。』

いや、名前以前にこれ、ぼっこじゃん。

真っ黒な2メートルくらいの木の棒じゃん

端からみたらただの長い炭だよ？

『は？君の眼はピンポン球？よく見てみな。』

よくって……ん？

『ふふーん、これは私が草薙剣（くさなぎのつるぎ）を改良して、丹精込めて創った刀なのだ！』

おおっ！

……はい、驚き終わり。

『え？それだけ！？』

おうともよ、いまさらお前のやる事に驚いてられるか。
つか、こいつなんで刀身まで真っ黒さ。

『いや、なんか黒好きそうだから。』

あーはいはい、そうですね。
ありがとうございました、活用さして貰います。

……うん、いい湯加減だ。

『……むぅ、つまらん。』

詰まろうが詰まらなかろうが自分はしらん。
それよりずっと外にいると冷えるんだ、もう我慢できん、自分は風呂に入る。

ふぃ～、これぞ至福の時。

『……おやじ。』

なんとでも言え、そして用件済んだら帰れ。

『……あ』

あ？

『いやなんでも無いよ、ちなみに言うと、その刀は君が望めばなんでも切るし、望まなければ何も切らない。外を切らないで中だけ切るって芸道も出来ちゃう凄い奴。呪いとかを退治するのにも一役買

うよ。』

あーそう、斬〇剣ね、よーするに。

『ちょっと違うけど、あと名前付けてあげてね。君との繋がりを強くするために。』

名前ねぇ……

よし、君の名前は一護に決定。

『理由は？』

黒〇一護。

『……ふっ、所詮その程度、ね。』

うるせー、卍解すんぞ卍解。

『まぁ私はどーでもいいけど。じゃあ私もう帰るわ。』

おー、二度とくんな。

『あ、あと』

なによ、まだなんかあるんか？

『二人の乙女を傷付けた償いはきっちりしなさいね。じゃ、オーバー。』

……え？

ましゃか。

自分が恐る恐る後ろを振り向くと、そこには

「…あ、いや、な、ナルミが砦を出て行くのを着いていったら……いきなり…その…」

「……あの、そ、その、姫様に着いていって、その、先生が、あの、ハダカ…で……」

顔を真っ赤にして慌てる二人の少女の姿がそこに。

「……いつから？」

「……何か、変な声が、よくわからない言葉が出る物をナルミが取り出した時から…」

最初からでないか。

「…いや、ま、まさかハダカになるなんて…思わなくて……」

「そ、そうです！私達にも予想外でして……」

しばしの沈黙、そして

「「し、失礼しました！」」

脱兎の如く走り去った。

速い、あの二人いつもの自分よか速いぞ。

しかし……

せっかく得た理解者と接しずらくなってしまった…

そして、自分の色んな物が崩壊した。

主に心、特に自尊心。

どうしよう……

その日、彼女達は自分に目を合わせてくれなかった。

なんとか風呂の説明をして、いつもの通りにもどったが、自分は地味に傷ついた。

余談だが、後に彼女達も風呂の虜となるのに時間は掛からなかった。

１４回目＊鬱な自分と爆走する女性陣（後書き）

最後のがやりたいがためだけに刀を出しちゃいました。

しかしこの展開は……

……人間失格だ、死にてぇ

１５回目＊蛇的潜入大作戦・潜入編（前書き）

別に題名はメタル歯車意識してますが、そこまで蛇的な事はやってません。

15回目＊蛇的潜入大作戦・潜入編

乙女二人に裸を覗かれるという、『あれ？普通逆でないの？』な事件から一夜あけ、自分は食堂に下りて来た。

「ではナルミ、作戦内容の最終確認をしよう。」

そして一番に言われたのがこれである。

「なぜいまさら。つか、目を見て話せ。」

「……無理だ、というか理由は解るだろう？」

あー、うん、何となく。

つか

「ごめん。」

「…いや、私達が行ったから悪いのだ。……と、それより作戦。昨日お前は会議マトモに聞いて無かったろう。」

そういやそうだ、メランコリってたからね。

「で、だ。作戦に変更は無いが、実はお前にお願いがあるのだ。」

……偽者だ、こいつ。

エリザがお願い？命令で無くて？

ありえない。

「……なんか、失礼なこと考えてないか？」

「滅相もない。」

「…まあいい。で、お願いはと言うとだな……その前に、あの国の将軍、ズール・スペンタを知ってるか？」

「いんや、全く。」

「あの国の実質的最高権力者だ、三年前からいきなり国を仕切り出した。そのせいで今ではすっかり軍事国家になっている。」

あー、そんな感じなの聞いたような無いような…

「で？」

「ん、実はな、奴が権力を持ち始める二ヶ月前に奴は最近発見された古代遺跡の調査に行っているらしいのだ。」

はぁ、古代遺跡ねぇ……

だからなにって話し……あ、わかった。

「そこで見つけたなんか、今では失われた技術で作られた魔法具とか魔導書みたいな、なんか変なもんを見つけてそれを悪用して…例えば王様を洗脳とかして自分に有利な環境を作った可能性があると。」

実にテンプレートな展開だ。

オーパーツで帝国支配とか、考えても普通やらんて。

「察しが良いな、その通り。現に前回砦で捕まえた指導者のオークが、何も覚えて無く記憶に介入された痕跡もあるらしい。」

「さらに言うと魔獣大量召喚もそれを使った可能性があるね。」

「ああ、だからお前にはそれの調査も依頼したい。更に言うと、もし本当に洗脳されているとしたら、上層部の洗脳を解いて保護し、投降するようにして貰いたい。」

つまり王様からあの国の兵士に投降するよう言って貰う訳ね。
それにこれが成功したらすぐに戦争が終わる。
これは頑張らねば。

「あくまでこれは依頼であって命令では無い。危険ならすぐにやめても構わない。」

「わかった、やってみる。」

なるたけ血を流させない、これが自分のやり方。
と、自己満足に浸っている所でエリザか聞いてきた。

「ところで、その黒い棒はなんだ?」

ゆびを指す先には昨日貰った黒い刀、その名も一護。
あのあとよくよく考えたら、刀が自分の物になったって言う事実と、以外にカッコイイ黒い刀にテンションが上がり、腰のベルトにさして持ち歩いていたのだ。

気分は侍。

ただ二メートルは普通に動きずらい。
細い所は特に。

「これは、自分の愛刀、名前を一護と言う。平たく言うと自分の武器だ。」

漢(おとこ)の浪漫、刀を自慢気に紹介する。

「ほぅ、これが伝説の……これを使うと言う事は、今回の戦いにお前は本気で臨むと言うことだな。」

いやいやいや、何を勘違いしてんのか。
本気もなにも、昨日初めて存在知ったんだよ。

「死にたくないからね。」

でもめんどいのでそのままでいいや。

「そうか……こんな事に巻き込んですまなかっな。」だいぶこの前のは反省してるようだ。
関心関心。

「乗り掛かった船さ、気にするな。そんな事よりも、お前も気をつけろよ。」

これは戦争だ、だからエリザとていつ死ぬかわからん。

「大丈夫だ、私は飛竜に乗って戦況を見ながら魔石で指示を出す。魔獣が出て来ない限り死なん。では、昼頃にはここを発つから準備しとけよ。」

そう言って席を立つエリザ。
しかし、話しの最中、最後まで目は合わせてくれなかったな…
そしてエリザが扉をくぐろうとした時、自分はふと閃いた。

「まて、エリザ。」

「ん？なんだ？」

「ちょい付き合え、実験したい事がある。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊エ☆

とりあえず昼過ぎ。
自分は飛竜部隊を所定の位置まで移動させ、そのまま裏から透明になって城の中まで潜入したのですが……

「なんか嫌な空気。」

みんなぴりぴりしている、当たり前だけど。
と、そんな事はどうでも良い、問題は。

「…どうやって騒ぎを起こそうか。」

これである。
街の中心にある城で何かしらの騒ぎを起こせというミッションなのだが、いかんせん何をしたら良いか……

王様掠うか？

いやいや、それはまずいな。
もしかしたら王様も被害者かもしれんし。
だいたいこーゆーのは武器庫を爆発させればミッションコンプリートな気もするが、なにせ爆弾が無い。

というかこの世界では戦争で火薬を使うという発想が無いらしい。
ぶっちゃけだいたいが魔法を使うとか。
だから武器庫襲撃しても魔法使える兵士がいる限りあまり効果が無い。

と、考えながらうろうろしていると、いつのまにか庭に出ていた。
いくつかお花も咲いているが、やはり戦争中なので周りの兵士も雰囲気が険しい。
顔は兜でわからんが。

そして、そろそろ時間的にヤバイと感じ初めた所で、どこからともなく

「ギャァァァス！！」

雄叫びが聞こえた、うるせー。
これは多分飛竜だな、朝飯ん時も叫んでたのを聞いたから間違いない。

……ん？飛竜？

この声の大きさは結構近くにいるぞ。

味方の飛竜がこんな近くにいたら騒ぎになっているはずだ、つまり……

「ビンゴ！」

歩いて2分、やはりいた。
大量に繋がれた飛竜達が、兵士から餌を貰っていた。

よくよく考えたら、こっちも飛竜を持っててなんら不思議は無い、むしろ無い方が不思議だ。
そしてこれは結構都合が良い。

こいつらが暴れて手が付けられなくなったら彼らの戦力も落ち、何よりかなりの騒ぎになる。
てな訳で、まずは手始めに鼻をほじり、ちょいと汚いがハナクソ確保。

そして

「鼻空想砲（ノーズファンシーキャノン）！！」

ドゴォン！

ハナクソを奴らの目の前で爆発させた。

「ギャァァァ！！」

すると案の定、竜達は騒ぎ出した。

一匹が騒ぐと隣も騒ぎ、さらにその隣もってな具合に一気に騒ぎがおっきくなってった。

ついでだからもう一発。

ドゴォン！！

「キェェェェ！！」

騒ぎに乗り遅れた奴らの前でも爆発を起こし、すべての竜がパニックになった。

もう手はつけられまい。

「「「「「うおぉぉぉぉぉ！！！」」」」」

「敵襲！各兵配置に付け！！」

雄叫びが聞こえ、敵兵達の慌てる声が響き渡る。

あちらも首尾よくやれたようだ。

と、調子ぶっこいて油断していると

「貴様！何者だ！！」

「ふぇっ！？」

後ろには二十人くらいの兵士さん。

……あ、ハイドって攻撃すると解けるんだった。

って！魔法はやめっ！炎怖い！！

「加速装置ー！！」

とりあえず逃げ。
奥歯を噛み締め超加速。

兵士達の姿はすぐに見えなくなった。

……なんと言うか、古いな、このネタ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊コ☆

はぁはぁはぁ……つ、疲れた。
どこへ行っても敵敵敵で、さらに敵。
やっとここさ敵のいない所にきたと思ったら、こんどはここがどこだかわからないっと。

全く、とっとと姿消しときゃよかった。

とりあえず、ここはどこだろう。
なんかお城の中の、結構高いとこっぽいけど……

とりあえずうろうろ、しかたないからうろうろ。
お、なんか扉発見。

「……ざ…な……」

ん？なんか聞こえる。
つか叫んでる。

「…なん……ひ…ゅう……」

あぁ、多分会議室だここ。
飛竜が使えないのにだいぶご立腹なようだ。

タッタッタ

ん？だれかきた。

バンッ！

「失礼します！」

「なんだ！今忙しいのだ！！」

兵士が開けた所に素早く潜りこむ自分。
なんか、スパイっぽくなってきた。
部屋には長テーブルが二つ、向かい合うようにならべられていて、
そこにそれぞれ八人、計１６人が座っている。
一番奥には豪華な椅子には王様らしき青年が座っている、自分と同じくらいの年齢だ。

「ただいま城内に謎の黒服の男が潜んでいるらしく、その報告を。」

あ、それ自分。

「うるさい！そんなものお前らで何とかしろ！」

報告に反応したのは赤い鎧の厳ついおっちゃん。
さっきから叫んでんのはこいつか。
ちなみに顔以外は鎧でわからん。

「しかし、飛竜を暴れさせたのがその男らしく…」

「なら何か、貴様らはその男が飛竜を暴れさせるのを見ながらそいつを取り逃がしたと言うのか。」

「え……あ…あの…」

がたがた振るえ、すっかり怯えてる兵士さん。
しかしまぁ、なんだ。
他の人達はなんでこうも興味示さんかね。
一番奥に座ってる王様なんて目が虚ろよ。

てゆーか、なんでここに幼女がいるのさ。
ノアちゃんと同じくらいか、それより下の身長だよ。

他のいかにも貴族な鎧着た方々もみんな目の焦点合ってないし、やっぱり洗脳説は正しかったのかね。
なんか、捻りがないな。

と、自分が暢気に観察してると

「もういい、役立たずはいらん。」

そういいながら赤い鎧の…多分こいつがズールだな、がなんか取り

出しながら近付いてきた。
正確には横の兵士に。

「お前には魔獣召喚の糧になってもらう。」

そういいながらズールは、取り出した青緑色の石を兵士の額にあてた。
兵士は足がすくんでで動けないのか、真っ青になりながらさっきより振るえている。
そして…

「あ…アァァァァ！！」

バタンッ！

！！？

どうした！？
いきなり叫び出した思ったら倒れたぞ！？

「ふん、この程度か。」

そう言いながら、ズールはさっきより青っぽくなった石を見ながら席に座った。

ここまで起きても、誰一人この状況に興味を示さない。
背筋に嫌な悪寒が走った。

とりあえず、今はどうにかして洗脳を解かねば。
洗脳を解く、つまりコントロールを元に戻すのだ。

「…トラップカード『洗脳解除』。」

ほんとは永続だが、んなこといまはどーでもいい。
よするに、こいつらが元に戻れば良いのだが…

だが…

「ぐ、ぐぁぁぁぁぁ！！」

……あれ？
なんでズールが悶えるの？
なんで他の人達は変化ないの？

「ぐっ……は、こ、ここは…」

え？なんで？
もしかしてズールの方が洗脳されてたの？

と、今だパニクってる自分を他所に、座っていた鎧姿の細身の男が立ち上がり、ズールに近寄る。

「……なぜ、洗脳が解けた？」

「な…せん、のう？なんの事だ、ヒュー。」

「うるさい。全く面倒だ、一回洗脳が解ければ抵抗が付きかけずらくなると言うのに。」

はぁ、とため息をつきながら剣を抜き。

「もう貴様は用済みだ。」

今だに動けないズールに……て、やばっ！！

「死ね。」

ガキィン！！

すんでの所を一護で受ける。

あっぶねー。

「……何者だ、貴様。」

「報告聞いて無かったの？謎の黒服だよ。」

キィン！

そう言いながら剣を弾き、ズールを掴んで後ろに跳び、間合いを開く。

「洗脳を解いたのはお前か？」

「…ズールさん、持ってる石貸して。」

ヒューを無視して小声でズールに要求する。

多分あれが魔獣召喚の鍵だ、だからあいつに渡す訳には…

「あ、あれの事か？」

彼の指さす先は、ヒューの足元。

運ぶ時落ちたのかよ。

「俺の質問に答えろ。」

幸いヒューは気付かないらしく、むしろ無視された事に苛立っている。

ちなみに、今だに他の人達は反応を見せない。

「答えてなんかいーことあんの？」

挑発して、意識を自分に向けさせる。

その間に石を念力でばれないように動かす、が

「質問に質問で返すな！！…ん？」

気付いた、というか怒鳴りながら左足を前にだしたて偶然踏ん付けた。

当然奴はそれを拾い、自らのポケットにしまった。

「ふん、召喚石をとろうとしたらしいが、残念だったな。」

うわぁ、なんて嫌味な笑顔。

キモイ、ギザキモス。

「ついでにもう一つ教えてやろうか。」

ヒューがそう言って、右手を上に掲げると…

ザッ！

他の人達が一斉に立ち上がった。
みんな無表情で、虚ろな目をしながら。
怖っ！！

「ここにいる者は皆偽者だ、本物はほらここに。」

そう言いながら奴は手鏡を取り出した。
中では幼女が必死に鏡を叩いている。

「鋼鉄の自動人形（オートマータ）と言ってな、鏡に閉じ込めた者と同じ容姿、同じ力を得る便利な遺産（ロスト）だ。」

クソッ！
なんでロストとか変な所で横文字使われてんだよ！
つか、自慢してるよ、こいつ。

「さらにはこの召喚石、これは誰かの額に当てるとその者の魔力をねこそぎ吸ってそれを使い魔獣を召喚する。しかも魔力を市販の魔石に移して、それで魔獣を呼ぶ事もできるのだよ。純粋な魔力だから普通に召喚するより格段に召喚しやすい。」

うわぁ、なんかいや。
やっぱりキモイ、こいつ。

「そ、そんな事話して良いのか？」

自分が嫌悪感に襲われていると、ズールがヒューに話しかけた。
今だに腰が抜けたように座っている姿はなんか滑稽。

「別に今から死ぬ奴らに知られても、問題は無い。」

そう言うと、ただ立ってただけの人形達が、一斉に首だけこっちに向き始めた。

だから怖っ！！

「いけ。」

そうヒューが号令をかけると、一斉に襲い掛かってきた。
みんな無表情で、ゾンビみたいな動きで。

「チッ！このっ！」

とりあえず近くの奴の右腕を軽く切った、が

「かわいそうに、腕から血がでている。」

そう言いながらヒューは、切られた人が閉じ込められている鏡を取り出し、自分に見せびらかす。

その腕からは、確かに血が出ている。
人形からは何もでないが。
というかこれは…

「どうすれゆーんね、これ。」

人形切ったら本人が傷付くから人形攻撃出来ないし、人形に守られてるヒューに攻撃する手だても思い浮かばない。
しかもズールが腰抜かしてる上に、窓と扉の前にはすでに人形が待

機していて逃げれない。

はっきり言おう、ピンチである。

１６回目＊蛇的潜入大作戦・戦闘編（前書き）

今回は遊〇王成分多めです。

そして私はハッピーエンド支持者です。

なので無理矢理でもそっちにもって行こうねとしてしまい、文やら設定やらが変になってるかもですがご容赦下さい。

１６回目＊蛇的潜入大作戦・戦闘編

「どーしたもんかねぇ…」

自分は今、この国の重役（多分）達の偽者と戦っている。

というか正確にはあっちが攻めてこっちが守りに徹している。

だってあの偽者に攻撃したら本物傷つくし、こっち腰抜かしたお荷物がいるんだよ。

逃げれないし攻めれない、正にじり貧。

なので仕方なく自分は６４仕様のネー○の愛で守りにてっしているのです。

ほんとは一人用だけどそこはＧＳＰ、融通がきくのです。

なので全く自分達は無傷。

いたって健全健康そのもの。

だけど、ねぇ…

「どうした、守ってばかりでは勝てないぞ？」

こいつ、ウッゼー。

限りなくウザい、さっきから人の神経逆なでするよーに喋ってくる。

「そうか、攻撃出来ないのだったな。これは失礼。」

身体は無傷だけど心は血管がブチブチ切れていく。
だけど確かに攻撃出来ない。
そして皆様は容赦なく魔法や斬撃の雨あられ。

くどいようだがどうしよう。

と、いろいろ思案していると、ヒューのイヤミの矛先がズールの方へと向きはじめた。

「しかしズールよ、ぶざまだな…かつては猛将と呼ばれていたお前がまんまと俺の策に乗せられ、揚句哀れにも力も出せずにその者に守られる姿は実に滑稽だ。」

「き、貴様…！」

「ふん！影のように後ろにへばり付きながら言われても、怖くも何とも無い。」

影の…ように？

「それいただき！！」

「は？」

ヒューの間抜けな反応は無視だ無視。

とりあえず自分はこの状況を変えるため、思い付きを実行しよう。

「忍法影真似の術！！」

自らの影を動かし、人形の影にくっつける。
するとどうだ、みんな全く動かなくなった。
多少プルプル痙攣みたくふるえてはいるが、それ以外は皆、自分と同じ恰好で止まっている。

「な……なぜだ!?なぜ人形が止まった!?」

うろたえ始めたヒューには、もはやさっきまでの余裕は消えて、焦りの色がみえる。

ふっふっふ、いい様だ。
よし、このままさらに混乱してもらおう。
そうと決まれば

「くらえ!」

バキッ!

「がっ、はぁっ!」

かけ声と共に右拳を大いにふるう。
すると、見事に王様（偽）の拳がヒューの頬にクリーンヒット。

……なんか、十何人も一斉に拳を無表情で奮う様は、何とも言い難いホラーさ加減だ。

「な、なぜだ!?なぜ勝手に動く!?なぜ俺に攻撃する!?」

頬を摩り、慌てふためくヒュー。
しかも、四方を人形に護らせていたため、その人形の制御が出来な

くなった途端にその場から動けなくなったのだ。
なんと哀れ…
「く、くそっ！おい！こいつらをどうにかしろ！！」
自分が哀れみの視線をヒューに送っていると、ヒューが叫びはじめた。
どうにかしろって……もうあんたの味方はいないよ？
んなこともわからないの？
と、今度は嘲笑の眼差しをヒューにプレゼントした。
それはもう余裕しゃくしゃくで。
でもこれがいけなかった。
ドゴォッ！！
轟音と共に爆風が吹き、自分が影真似をかけていた人形が吹っ飛んだ。
自分達はつけっぱのまま忘れてたネー○の愛のおかげで無傷だが、床はえぐれて人形達は皆たたき付けられて動かなくなっている。
そして、爆風の来た方向を恐る恐る見てみると、そこには
窓の前にて無表情で木の杖を構える白い鎧姿の幼女が一人。
……窓と扉を見張ってた人形の存在、忘れてたようです。
「影真似の術！！」

とりあえず皆確保、が

「王風神『ヴァンフ』。」

ブンッ

彼女の言葉と共に彼女が持ってた杖が、なんかすっごい変化した。
杖の先には緑の３０センチ大の宝石がはめ込まれ、無骨な木で出来た杖の本体は真っ白い、なんかミスリル的な素材でできた高級そうな杖に変化したのだ。

そして、

「ナクシム。」

呪文と共にさっきよりも強烈な風が自分に向かって襲い掛かってきた。
風が龍（東洋タイプ）に見えたのは幻覚では無いだろう。

しかも直撃した衝撃でかはしらんが、自分を守ってたネー○の愛がなんかいきなりなくなった。
ついでに驚いた拍子に影真似も解いてしまった。

マヂデ？

「…ふ、フハハハハ！！形勢逆転だな！流石に魔法大臣の膨大な魔力の前には貴様も太刀打ち出来なかったか！！」

魔力…？

あ、これってもしや緑のメーター無くなったからとけちゃったの！？
なんて無駄なとこだけ忠実なんだよ。

バリアが解けた原因を理解して落胆する自分を見て、多分あの幼女の強さに対して落胆していると勘違いしたヒューは満足げに言葉を続けた。

「しかしよくここまで粘ったな、まさかこれほどやるとは思わなかったぞ。…よし、褒美として魔法大臣を最強の武装でお前と闘わせてやろう。」

は？何言ってんのこいつ。

自分が頭にハテナを十個くらい浮かべてると、件の魔法大臣（幼女）はよくわからない呪文をつらつら唱えると、彼女の身体から光が出て、全身をつつんでいった。
そして…

「あ、あれは」

後ろでズールが目を真ん丸くして驚いている。
確かにその気持ちはわかる、おおいにわかる。

彼女は今、全身は黄金の鎧に包まれて、左手には巨大な白銀の盾。
右手に持ってた杖も先にはめ込まれた宝石を中心に槍のように変化している。
両肩には楕円を半分に切ったような巨大な黄金の装飾に、身体の所々には小さな翼のような飾りが幾つも付いていて、それに意思があるように微かに動いている。

ぶっちゃけこれは後光が見えるような気がする神々しさだ。
あのエセ神よりもこっちの方が神らしい。
ただね、ただこれだけはいわして…

「どこのミネルヴァだよ!!」

そう、ミネルヴァなのだ。
微妙に違いはあるが、クラ○シスコア最強の敵であるそれにそっくりなのだ。
ぶんどるをつかったらきっとフェニックスの羽が大量にとれるだろう、それくらいミネルヴァなのだ。

「な…みねるばとはなんだ?あれは太古の聖戦で女神“ムル”の使ったと言われる伝説の武具“カルス”だぞ!?文献でしかみたことは無いが、実在したとは……」

ズールが丁寧に説明してくれた。
あんま聞いてなかったが。

「よく知っているなズール。いかにもこれは伝説の武具“カルス”だ。他の遺産と共に発見した代物だ。本当は俺が使いたかったのだが……生憎使い手を選ぶらしくてな、今の所魔法大臣であるイースしか適任者はいないらしい。まぁしかし…」

そう言いながらヒューが指を鳴らすと、そのイースとか言う魔法大臣は奴の横まで瞬時に移動した。

「それでも、鋼鉄の自動人形できちんと操作はできるがな。」

クックックと、気持ち悪い声を出しながら笑うヒュー。
変な空気の中、奴の笑う声だけが会議室に響いていた。

……あれ？
今までピク○ンに襲われたチャッ○ーよろしくな感じにフルボッコにされかけたり、異常な爆風で攻撃されたりで色々テンパってたけど、よくよく冷静に考えてみたら案外簡単に状況打破できないか？

（なぜか）いきなり冷静になった自分は、とりあえずヒューを一旦止める事にする。

「ストップ。」

カキンッ

「クックッ……」

とりあえずＦＦのストップで時間を止める。
気持ち悪い恰好で中途半端なままとまったヒューがそこにいた。

そしてやはりと言うか何と言うか、この人形は操り主が命令しないと何も動かないらしい。

ひとまず人形が動かない事に安心した自分は、さっさと鏡を全部ヒューから奪い、そして

「その幻想をぶち壊す！！」

フラグ乱立駄男の台詞をノリで叫びながら、右手をそいつのイマ○ンブレイカーにして全部の鏡に触れてやった。

パキンッ！

とりあえず成功らしい。
鏡は割れる音と共にボロボロと壊れていった。
人形もそれぞれ皮膚が鉄の色になったと思えば、かさぶたが剥がれる様にボロボロ崩れて中から本物の本人が出てきた。

目の前にいるイースちゃんも、鎧の隙間からサラサラと粉になった人形のカケラが零れている。

「う……、つー。」

以外にも、1番早く起き上がったのは王様だった。
それでも上半身だけで、立つ事は出来ないらしい。

「お前が、助けてくれたのか……」

大分弱った声で話しかける王様。
よく見たらこいつはイケメンだ。
いや、むしろかわいい。
そこらの女より断然かわいい。
さらに肩まである青い髪はなんとも言い難いサラサラ加減で、青い目はくりっとしている。

ただ、なんかオーラっつか雰囲気が男……いや漢っていう感じがむんむんしてるのが残念だ。

「……どうした？」

おっと、考えながら見つめてたらしい。

「いや、なんでも無い。というかそろそろ……」

「……クックックック……あ？」

やっとこさ動き出した。

てか、自分がこいつの存在思い出した途端動きだした。

あのままずっと忘れてたらこいつ、永遠に動かなかったんだろうか……

「な、なんでまた人形が勝手に！？イ、イース！こいつらを何とかしろ！！」

再び慌てるヒュー、そして命令されたイースはと言うと

「う……あ、ま、魔王様！！」

命令無視して王様に駆け寄った。

いやぁ、元気な娘だ。

……そういや、この世界の王様は魔王だったんだよね、忘れてた。

「魔王様！お怪我はありませんか！？私が居ながらこんな事に……なんとお詫びしたらよいか…！！」

「あ、いやイース……なのか？別に怪我は無いしお前の責任じゃ無いだろう。」

「でも！！私は魔王様にもしもの……」

彼らは彼らでなんか大変らしいので、こちらはこちらで片付けますか。

「あー、あの人形全部壊した。」

「こ、こわ、壊した……だと？」

すっげー、人って驚くとここまで目が開くのか。

「そ、だから君を護る物はもう無いのさ。おとなしく降参しな。」

とりあえず一番楽な方法で。

まぁ、もうこいつには何も無いし素直に応じるでしょう。

「ク、クックック…降参？この俺が？いずれこの世界を支配するこのヒュー・スタム・ジューク様が？」

あ、なんかヤヴァイ。

目がイッちゃってる。

だれか救急車、黄色い救急車を呼んで！！

「ふざけるな！！俺にはまだこの召喚石がある！！」

そう言いながら奴は青っぽい石を取り出し、高々と掲げた。

やばい、忘れてた。

掲げられた石は鈍く青い光を放ち、その光が魔法陣を描いていく。

そして……

「ギャァァァァ！！」

変な鳥みたいな魔獣が、天井を吹き飛ばしながら出現した。
体長は飛竜の三倍はある。

後ろにいる王様達は、皆さん揃って言葉を無くし、息を飲んでいる様子である。

「いけ！！奴らを消し飛ばせ！！」

ヒューは何のためらいも無く激戦区となっている大通りを攻撃するように魔獣に指示した。

魔獣は、口を開け、命令通り大通りに向かって攻撃するために突っ込んでいった。

自分はその様子をただ見守っているだけだった。

自分のその姿を見たヒューは、勝ち誇った表情で笑いながら自分に

「クックック、どうした？あれをほっとくと全員死ぬぞ？」

そう言ってきた。
多分こいつは、自分がなるべく人を殺したくないと思っているのを見越して、魔獣を倒すために真っ先にあっちに行くだろうと踏んでいるんだろう。

そんな奴の質問に対して自分は、無意識でかつ簡潔に答えた。

「誰も死なないさ。」

するとヒューが怪訝な顔をして、笑うのを止めた。

「なぜだ？」

今はそれには答えず、自分は事の成り行きを見守っている。

そして、魔獣はそろそろ大通りに突っ込もうとしているが、それでも自分は手を出さない。

そして、自分はここでヒューに回答を言い渡す。

「なぜかって？理由は簡単、至って簡単。」

そこで一旦言葉を区切る。

そして、魔獣がもう大通りに突っ込む直前、こからともなく、聞き慣れた吸血鬼の少女の叫びが聞こえた。

「トラップカード！『サンダーブレイク』！！」

その直後、自分は言葉の続きを喋る。

「自分のかわいい弟子達が待機しているからさ。」

鳥型の魔獣は雷にうたれ、そして消滅した。

「……は？」

ヒューは魔獣が一瞬で消滅したのが信じられないのか、口を死にかけの出目金みたくパクパクさせている。

「な、なぜだ!?なぜ魔獣が!?まさか報告にあった魔獣を一瞬で消す魔法が本当にあるのか!?」

めっちゃぱにくっている。
だがこれは、なんかヤバイ。
肌になんかぴりぴりした物をかんじる。

「なぜだなぜだなぜだなぜだなぜだ!?そうか一体なら少ないのか!?ならもっとたくさんの魔獣を!!たくさんたくさんたくさんの魔獣!!」

狂ったようにヒューが叫び、あたり一面が魔法陣だらけになった。
そして…

「「「ギュルェェェェ!!」」」

なんとも言えない叫びと共に、少なくとも確認できる限りでは八体の魔獣が出現した。

「全部!!全部壊してしまえ!!この世界は俺の物だ!!俺の!俺の所有物だ!!全員俺に平伏すがいい!!」

ヒューがそう叫ぶと、魔獣は全部大通り目掛けて攻撃しにいった。

「ちょっ!大丈夫なのか!?」

「この数はいくらお弟子さんでも無理じゃ……」

後ろからは王様とイースちゃんが自分に話しかけてきた。

しかし、自分は余裕しゃくしゃくで。

「大丈夫大丈夫。見てなって。」

そう言った瞬間、やけに透るお転婆な姫様の声が聞こえた。

「トラップカード！『聖なるバリアーミラーフォース』！！」

そう叫んだ瞬間、魔獣の一体が壁にぶつかった。

そして

ドガァッ！

光が周りの魔獣もろともその魔獣を吹き飛ばした。

だがまだ魔獣は三体いる。

少し遠くて攻撃が当たらなかったようだ。

だが即座にその三体がまとまっているところに近付く小さな影が一つ。

何を隠そう、ムー君である。

ムー君は自分に気付いたのか、こちらに手を振っている。

それに対して自分も手を振り返事をする。

案外余裕っぽいな、彼。

まぁあの中で一番自分も驚きのカードを使えたし、余裕の訳もわか

る気はするが。

そして、自分の返事を確認（？）したらすぐに彼は魔獣に向き直った。

そしてやったのが…

「マジックカード！『滅びの炸裂疾風弾（バーストストリーム）』！！」

ドゴォォォ！！

ムー君から放たれた白い光線が三体の魔獣を一瞬で焼き払った。

いやぁ、生で見るとすげーなバーストストリーム。

海馬が夢中になるのもわかる気がする。

仕事を終えたムー君はパタパタと姫達のいるであろう方向へと帰っていった。

かくして、エリザとムー君の活躍により全ての魔獣は殲滅された。

あと残りは……

「また魔獣がぁぁ！！魔力が足りない足りない足りない足りない足りないぃぃぃ！！」

この気違いだけである。

奴のもっている召喚石は、いまや完全なる緑色。

魔力を入れて青いになるならもう魔力は無いのだろう。

しかし、魔力が無いからって油断は出来ない。

こーゆー奴は最後に何やらかすかわからないからね。

とりあえず、召喚石を奪おうとしたその時。

「あはっ！！そうだ！！俺を使えばいいんだ！！」

そう言いながら、奴は自分の額に石をあてはじめた。
すると、青い気味の悪い触手みたいなのがヒューの体に巻き付いていった。
奴の足元には魔獣召喚の時と同じような魔法陣が浮かび上がっている。

「俺に力を！もっと強く！！誰よりも強い力を！！」

その言葉を最後に奴は、全てを触手に包まれた。
そして、その触手の塊から青い光がほとばしりはじめた。

「やばっ！！」

そう思ったが、時すでに遅く、光が収まった時にはそこには巨大な生物がいた。
山羊の頭を持つ、まさに自分が知る“悪魔”がそこにはいた。

「ヴ、ヴォォォォォ！！全ては俺の物だ！！全ては俺の所有物だ！！」

そう叫びながら、奴は暴れはじめた。
城を壊し、街を潰して暴れだした。

もはや暴走、それしか言えない。

奴は他の魔獣と同じように大通りの方に向かい歩きはじめた。
だが、いまや大通りにいた兵士達は皆、敵味方関係無く逃げ回っている。

そして、悪魔に近付く一頭の飛竜。
多分、エリザ達の飛竜だろうが…

…ヤバイ。
これはいくら近衛隊もヤバイ。
この距離からわかる禍々しい邪悪な気。
あれはマトモに太刀打ち出来る相手では無い。
そう思った時にはすでに体が動き初めていた。

「まて!!お前あいつに挑むつもりか!?」

「いくらなんでも無茶です!!」

王様とイースちゃんが息もピッタリに止めてくれた。
だが、行かない訳にはいかない。

「大丈夫だ、ぶった切ってくるだけだ。」

そう言って、自分は足に気を送り、壊れた壁から一気にヒューの元に近付いた。
そして、一護に手を添え、一気に

「キエェェェェ!!」

ズバッ!!

奇声と共に居合の要領で真っ二つにした。
そして決め言葉。

「また、つまらぬ物を切ってしまった…。」

ズドォン！

ちょうど良いタイミングで真っ二つになった悪魔がたおれた。

一護をおさめ、ゆっくりと辺りを見回す。
自分は大通りのど真ん中で、一人立ちすくんでいた。

周りからは、いろんな兵士達の視線がビシバシと……
まぁ、当然だよね。
あんなんぶった切ったんだもん、注目されて当然だ。

そして、いやーな沈黙がしばらく続いたが、すぐに

「「「「「「ワァァァァ！！！」」」」」」

大きな歓声が鳴り響いた。
もはや敵味方関係無く喜んでいる。

そして、目の前に一匹の飛竜が着地した。

そして、そこから誰か降りてきたが、自分にはそこらへんの記憶が無い。

多分、向かえが来た事で気が緩んだからだろうが。
自分はそこで意識を手放した。

１６回目＊蛇的潜入大作戦・戦闘編（後書き）

次回でいろいろとつじつまあわせ、もとい裏側やらについて語るよていです。

あと、鳴海君以外の人達（現地人）のつかう呪文とかは全部中二な私の思い付きのオリジナルなものです。
テキトーにつけたので、なんかの漫画とかの技では無いのです。

１７回目＊蛇的潜入大作戦・裏側編（前書き）

裏側と銘打ってはいますが、あまり裏側の説明になってないかも。

……皆さんならわかってくれますよね！！

17回目＊蛇的潜入大作戦・裏側編

自分が起きたらベットはいつもよりふかふかで、目の前には見知らぬ天井があった。
当然自分はこれを疑問に思う訳である。

しかし、そんな疑問も吹き飛ばす珍現象が自分の前で起きている。

『おハロー、もう夕方だけど。』

寝ている自分にあの疫病神が馬乗りになっているのである。
それを見た自分が真っ先にする行動は当然

「死にさらせ!!」

シュバッ!

渾身の右ストレートである。
だがしかし、それは当たる事は無く、ただ空を切るだけであった。

いや、正確には当たったが、奴の頭を通り抜けたのだ。

『ふっふっふ、これは私の分身、幻、神の奇跡!君の攻撃など当たらない!』

くそう!いつになったら自分はこいつに一矢報いる事ができるんだ!

……と、ひとしきりふざけたところで。

「んで、今回は何用さ。」

また問題事持ってきとらんだろうな。

『んー、しいて言うならお見舞い？』

は？

お前が？

ありえん。

『……てい。』

ゴッ！！

「おぶっ！？」

い、いたい。

何、何か頭にかったい物が落ちてきたんだけど。

我が親友によるジェノサイドディクショナリーボンバー（広辞苑の角による打撃）並に痛かったんですが、一体なんすか。

『お見舞いの品。』

お見舞いの品を頭に落とす奴がありますか！！

すっげー痛かったんですけど！！

しかもこれさ、ホントにお見舞い？

だってこれさ…

自転車じゃん。

『そ、自転車。』

いやいやいや、なんで自転車？
しかもこのマウンテンバイクは毎日自分が登校に使ってた愛自転車と同じ型だし。

……よく首の骨折れなかったな。

『だからいったしょ、人間は強い種族だって。』

いやそーだけども。
てゆーかなんでいきなり自転車？
しかもこれも徹底して真っ黒だし。
自分のはもっと青いかったよ？

それにこんなものプレゼントなんて、なんか裏がある気がぷんぷんすんですが。

例えば先の戦争の引き金をお前が引いたとか。

『……いや、それは無い。』

……その間はなんだ？
まさかマジでやったのか？
そして目を逸らすな。

『いや、戦争の引き金は私では無い。』

引き金は？
じゃあそれ以外とかか？

『……思いの外霊域が強くなって、障気が少し漏れちゃってた。』

なんぞ、その障気とはなんぞ。

『……人を欲望のままに動かす、そんな感じな魔力の亜種。これにとりつかれると欲望に任せて突き進むようになって、最後はだいたい狂う。しかもなまじ魔力だから無駄に力がつく。』

……つまり？

『……あの気違いが暴走した原因。……テヘッ☆』

こんの疫病神がぁぁ！！

『だ、大丈夫。漏れた障気は全部あいつにとりついたから全部君がぶった切ったし、元栓締めたからもう漏れない！！』

なぜ元栓がゆるんだ？

『……間違えた。』

はぃ？

『４年くらい前に霊域付近の様子を見ようとして間違えて一瞬封印に小さな隙間作っちゃってさ、多分そんときに……あは、あははは。……すいません。』

そう言って深々と頭を下げる自称神様。

そんな彼女に自分はやさしく

「よし、死ねカスクズマヌケアンポンタン。いますぐ死ぬか自分をもとの世界に戻せ。はたまたお前が霊域なんとかしろ。てゆーかお前が引き金の四分の三引いてんじゃねーか。」

罵声を浴びせます。

『うぅ……、今回ばかりは言い返えせない。』

ヨヨヨ、と泣きまねをする疫病神。
あくまでまね、実際泣いてない。

しかし、思いの外早く一矢報いる事ができたな。

「泣きまねやめい。」

『ううん、でもでも、迷惑かけたお詫びに自転車あげたしょ！君のをもとに創った特製の自転車だよ！錆びない壊れない転ばないの理想の自転車だよ！！時速５００キロまでなら堪えれるんだよ！！』

そんなに走れねーよ。
つか、音速越えてねーか？

『いや越えてないよ。学がないねぇ。』

うるせー！！
付け上がるな疫病神！
比喩だ比喩！

『そーゆー事にしといてあげよう。』

こいつ…

……まぁ高スペックな自転車貰えてうれしいけどさぁ……

なんか納得いかないなぁ……

特に人の揚げ足取りするところとか。

『うぅ……あ、そーだ！よく君は他人に能力使わせれるように工夫できたね。私でも思い付かなかったのに。』

なんか、無理矢理話題を変えようとしてるよーに思うのだが……

まぁいい。

それよりあれね…

正直自分もまさかあそこまで出来るとは思ってなかったんだけどねぇ……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ロ☆

「ちょい付き合え、実験したい事がある。」

自分はそうエリザに言うと、朝食もそこそこにエリザと近衛隊を引き連れて砦の外へと出て行った。

その道中、自分はポケットからカードを取り出し、自分以外の人も使えるようなイメージをカードに送っていた。

「で、実験とはなんだ？」

「んー、自分の能力を他人が使えるよーにできんかなーって。……よし。」

エリザの質問に対して自分はテキトーに答え、とりあえず試作品を完成させた。
そしてそれを近くにいたテトラ君にわたす。

「ほれ。」

「…え？なんですか？」

渡されたテトラ君は、よく意味がわからずにうろたえているようだ。

「あのな、これは……」

そして自分はテトラ君以外に聞こえ無いような小さな声で、使い方を説明した。
ちなみに、こっそり話す理由はその方が面白そうだからだ。

「わかった？」

「はぁ……わかりましたが、ホントに大丈夫なんですか？」

むぅ……うたぐり深いねぇ。

「大丈夫かどーかを試す実験なの。んじゃ誰かテトラ君に魔法を軽ーくぶっ放しちゃってくんね？」

そう言って自分はテトラ君から離れる。

もとい避難する。
だって巻き添えはいやだもん。

「……それは戦争直前に、わざわざ味方が負傷する危険を犯してまでやる価値はあるのだな？」

……そういやそーだね。
戦争前に味方が怪我したらやだもんね。

でも、まぁ…

「価値はあるよ。成功したら自分が居なくても君らだけで魔獣の処理が出来る。」

そう言うとみんな驚愕の顔をした。
そんなに驚くものかね。

「あ！もしかしてそれってこの前魔獣を殲滅した時使った魔術符ですか！？」

しばらくの沈黙の後、一気にテンションＭＡＸになったミミリィ隊長が指をさし叫んだ。

「いや、魔術符なんて大層なもんでねーよ。」

つか魔術符って何？
お札的な物か？

「でも実験が成功したらそれを私達も使えるんですよね！？」

「うん、多分。」

やったー、と言ってはいないが、心の声として聞こえてくる気がするのはなぜだろう。

「じゃあ私がテトラに魔法を撃とう！」

ミミリィ隊長とのやり取りの後に名乗り出たのはやはりエリザだった。

そして

「全力でいくぞ！！」

そう言いながら奴は右手に燃え盛る１．５メートル位の炎の剣をどこからともなく出現させた。

かなりエリザから離れている自分のところでさえとてつもない熱気と何か言いようの無い圧力をかんじる。

きっと目の前で対峙しているテトラ君は、もっとすごい事になっているだろう。

……ヤバクネ？

「行くぞ、火炎まほ……」

「カウンタートラップ『マジックジャマー』！」

そして、エリザが魔法をだそうとした瞬間にテトラ君は持ってたカードを掲げ、叫んだ。

めっちゃ必死の形相で。

パキンッ

すると、マヌケな音と共にエリザの手にあった剣が霧散した。
赤い霧的に飛び散ったそれはけっこー綺麗だった。

「おー、実験成功。」

とりあえず実験の成功を素直に喜ぶべく、自分はその事実を口にした。
そしたら有り難みが減った気がしたのはなぜだろう。

「なっ！何がおこったのだ!?」

魔法を無効化されたエリザは、何が起こったかわからない様子でうろたえている。

ちょっと見てて楽しかった。

しかし、ここで問題が発生した。

バタッ！

「ハー、ハー……こ、これ、は……異常に魔力持ってかれますよ。」

魔力の使いすぎでダウンしているテトラの姿がそこにはあった。

「……なんかごめん。」

「……い……いえ。」

なんか、麻痺ったナルガ○ルガみたいって思ってしまった。
二重でごめん。

と、自分が心からテトラ君に謝罪をしているところに後ろから

「ナルミ！訳わからん！説明しろ！」

怒鳴ってきた。
まぁ全力をたった二言三言で潰されたらイライラもするか。

「んー、このカードさ、魔力を使って発動出来るように出来るかなーってやってみたのさ。あっち行ったら自分居なくなるからね。その間に魔獣出てきたら危ないしょ。」

「つまり使えたって事は私達も使えるんですよね！？」

自分の言葉に真っ先に反応したのは、やはりミミリィ隊長だった。
他の近衛隊メンバーも、喜びと期待とで目を輝かしている。

だけどね、皆さん。
現実を見よう。

「そうなんだけど、ねぇ……新たな問題が……」

そう言って自分は情けなく倒れているテトラ君に視線を送る。

新たな問題とはずばり、魔力の消費が激しいと言う事である。

戦場でこんな状態になったら、はっきり言って命は無い。

「……魔力ってどんくらいの速さで回復するん？」

「個人差はあるが、だいたい一日寝たら回復する。ただ全部、それこそカケラも残らないほど使うと一週間は起きないな。下手したら死ぬ。」

エリザの答えに、自分はしばらく頭を抱えて考えた。
なんかビミョーに打開策が思い浮かびそうなのだ。

そして、一つの考えを思い付いた。

「……そっか……回復させる薬とかないの？」

エーテルとか清らかな水とかＡＰブーストみたいなのを使えば万事解決じゃん。

「……先生の血を飲めば私はすぐに回復できます。」

自分の思い付いきに遠慮がちに答えるのはシルバちゃん。
ちなみに彼女の目は自分の血が飲めるかもと言う期待を如実に表してる。

多分本人は隠してるつもりだろーが。

しかし血か……
貧血にならない程度なら提供しても良いが……

ん？血で魔力回復するって事は……

「あー……もしかしてエリザも？」

「そうだな、確かにお前の血は飲むと中から魔力が込み上げてくるな。ただナルミの血の旨さの影に隠れる副産物的な物だが。」

……ふつー魔力回復のがメインでね？

「……ハァ。じゃあ二人はそれで。」

「よし！では血液保存用の瓶を持ってこよう。行くぞシルバ！」

そう言って駆け出す二人。

ちなみに自分はこれから血を抜かれる事に対して若干鬱になっている。

「……他はどう？」

「俺の種族は魔力保有量が多いので大丈夫かと。少なくとも俺はテトラの四倍魔力を保有していますので二三回は大丈夫かと。」

間髪入れずにムー君が答えた。

なんでもムー君の種族はかなりの魔力保有量を誇りって、この世界の歴史に残っている魔法使いの四割が彼と同じ種族だったりするらしい。

あくまで彼の言だから。

ホントにかはしらん。

「そっか……じゃあ練習も一回だけにして、あっち行っても使う回

数に制限つけてやるか。」

とりあえず彼の言う事を信用しておこう。
ムー君は悪い奴ではなさ気だし。

と、ここまでは順調に決まった。
そう、ここまでは。

「……先生、私達はどうすれば…」

そう、残りの三人についてである。

なんでも他の三人は、ムー君みたいな馬鹿でかい魔力をもってる訳でも、エリザやシルバちゃんみたいに血を吸って回復できる訳でも無いらしい。
しかもこの世界に魔力を回復させるアイテムは無いときたもんだ。

つまり八方塞がり。

「……あー、どしよ。」

自然とこんな事を言ってしまった自分を誰が攻めれようか。

自分の発言に目に見えて落胆する三人。
罪悪感がバリバリ生えてきた。

「あー、あれだ、あの……今度他に教えてあげるから今回は我慢してくれ。」

つい自分が口走った言葉にすかさず三人は

「消える術が知りたいです！」
「破壊の光を教えて欲しいです！」
「カタナの使い方をぜひ！」

うん、ナイスコンビネーション。

ちなみに上からリム、ミミリィ、ムゥである。
思わず三人の気迫にたじろいでしまう。

「わ、わかった。出来る限り教えるから。」

「約束ですよ。」

そして、なんとかこの場はおさまった。
そして、自分がホッとしているところに、砦からエリザとシルバが帰ってきた。

手には大量の小瓶が。
全部で軽く四十はある。

「さあナルミ！これ全部に血を注ぐのだ！」

「いや死ぬから。戦争より先に貧血で死ぬから。」

なんとか一人五本に収めたけどそれでもつらい。
しかも血を入れてる途中にいきなり理性を失ったシルバちゃんが首筋に噛み付いてきたから焦るのなんのって。

多分、他の人達がいなけりゃ死んでたね、自分。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ジ☆

とまぁこんなやり取りがあった末に完成した技よ。
どうだ、すごいだろ。

『うん、ホントにね。やっぱり人間ってすごいわ、考えが違うもん。』

で、元栓開けた上にそれが原因で戦争おきた見返りが自転車なの？

『……まだいってんの？友達無くすよ。』

うるせ。
まぁ冗談はおいといて。

こっから質問なんだけど、なんで自分倒れたん？
いままでんなことなかったのに。

『あぁ、それね。能力の使いすぎ。』

んー？
そんな使った気はしてなかったんだがなぁ。

『いや、確かに人間の君は精神力ハンパ無いからフツー倒れないけど、さっき言ってた君の奇策に問題があるの。』

？
とゆーと？

『あの君がアレンジしたカードはまだ未完成で、術を他人が発動するとかなりの負荷が術者にかかるしょ？その負担の１０分の９が君にのしかかったのさ。』

……つまりあのテトラ君の状態ですらまだ１０分の１しか負担かかってなかったって事？

『そ、まぁそれでも普通は倒れ無いけど、血を吸われて多少貧血なとこに慣れない負荷がかかったから気絶したんでないかな。』

ふーん。
なんか、血って大事だね。

『まぁね。てゆーかさ、いまさらだけどあの姫達バカ？フツー魔獣に自ら突っ込む？』

あー、あのヒューが暴走した時ね。
あれはマジビビった。

『その時は他の魔獣倒した事で調子にのってあいつ倒す気満々だったらしいけど、後で後悔したっぽいけどね。』

ん？

『冷静になって考えたら恐くなったって事。まぁそのお陰で即座に君は回収され、フカフカベッドで二日間可愛い吸血美少女に看護されてた訳なのだけど。』

まて、二日？

マジで？

『あれ？言ってなかったっけ？君は二日間このベッドを占領してたんだよ。まぁ原因は姫達が特訓と称して君が渡したカード使いまくってたからなんだけど。』

マジか……
早急に回収せねば……

それともう一つ。
あのロストとか言う物ってまだいっぱいあんの？

『あるっちゃあるけどあそこまで理不尽に気持ち悪いのはもう無い。少なくとも人形はあれで全部。』

そっか、なら安心。

『まぁ他のやつが出て来ても、君の能力でなんとかなるしょ。あとあの気違いが使ってた石と人形は全部壊れたから。ちなみに洗脳も石の力だからとっくに解かれてるよ。』

ほぅ、そうか。
ならもうあんなじり貧には追い込まれる心配は無いのだな。

『そうだね、今のところは。っと、とりあえずもう元気そうだから今日は私帰るよ。そろそろ彼女がくる頃だし。』

彼女？
あぁ、看病してくれてたシルバちゃんね。

ほんと、優しい娘だよ。
自分みたいなオタッキーな奴にまで。

『……君、気付いて無いの？』

ん？
何が？

『……どこのギャルゲー主人公だよ。』

だから何が？
てか神もギャルゲーやるのか。

『やらないよ。とりあえず彼女に立てたフラグはきっちり回収しなさい。じゃ、オーバー。』

なんだったんだ、いったい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ー☆

ガチャ。

自分があのパツキン疫病神がいなくなってほっとして数十分、不意に扉が開いてそこにいたのは

「あ……せ、せんせー！！」

噂の吸血美少女が泣きながら飛び付いてきた。

「せ、せんせー！もう、だ、だめかと……うわーん！！」

うーん、なんと言うか。
対処に困るね。

とりあえず背中をぽんぽんとはたきながら頭をヨシヨシと撫でてやった。
するとしばらくぐずってたが、おちついたのか

「…あ、あの、すいません！」

モーション無しでいきなり離れた。
顔が真っ赤でアワアワいってる。
なんか見てて癒される。

「いや、大丈夫だよ。心配かけてごめんね。」

とりあえず優しく諭す。
しかし、さらに赤くなるシルバちゃんの顔面。

なぜだ？

とりあえずどうしたら良いか解らなくなった自分は意味も無く辺りをキョロキョロし始めた。

そして、入口をみたときに

「……あー、邪魔だったか？」

開いた扉の向こうにいるエリザと目が合った。
後ろには近衛隊もいる。

「……いつから？」

「シルバと一緒にここにきた。」

最初からかい！

とりあえず自分の顔も赤くなるのが自分でもわかる。
なんかかなり恥ずかしい。
シルバちゃんは相変わらずアワアワやってるし。

と、自分が途方に暮れてると、リム副隊長が

「結納はいつですか？」

はい、爆弾投下。
結納っておい。

「まてまてまて、なぜにそうなる！？」

「え！？結婚しないんですか！？」

「いや隊長まで何を言ってるんすか！？シルバちゃんもなんか言ってやって！！」

彼女なら弁解してくれるは…ず……

「わ、わた、私と先生が、け、けけけけっこん!?」

戻ってこーい!!

なんかこれデジャヴ!!
なんか見た記憶ある!!

もう誰か助けて!

と、慌てふためく自分に一瞬の希望の光が

「シルバ!!」

まさかの大穴、エリザである。
よし、このままシルバちゃんを落ち着かせてくれれば……

「しつこいようだが子供の名前は私が付けてやろう!!」

「はい!!先生!!最初は女の子が良いです!!」

うおぉい!!
ちょっとまてぇい!!

この後は日が暮れるまでシルバちゃんの暴走は続き、面白がったエリザ&ampｐ;近衛隊にからかわれて一日が終わった。

なんか、戦争やるよか疲れた気がする。

……はぁ。

……しかもカードの回収忘れてたし。
もう、イヤ。

18回目＊さほど実のない自分の休暇

さてさて、ただいま時間はお昼時。
ここはグラディシアのお城の一室、つまりエリザの母国のお城。
自分は気絶してすぐに竜でここまで運ばれたらしい。

ちなみに今日はあの戦争が終わり6日、つまり自分が起きた4日後である。

なんでも、自分がヒューをぶった切った直後にあちらの王様が正式に降参したとか。
でもなんか話しによれば、むしろあれは戦争では無く王様救出のための革命的な位置付けになっているだとかなんだとか。
ちなみに名称としては救済戦争と名付けれたらしい。

まぁ、むつかしいことはわかりませぬ。
とりあえず全部の責任はヒューが背負い、ついでにこちら側のあの阿呆将軍（名前は知らん）も反逆罪として捕まったとか。
なんかこれから裁判にかけられるとかられないとかなんだとか。

やっぱりむつかしいことは自分にはわからんです。

とりあえず、そんなこんなで今あっちの国もこっちの国もごたごたがやがやしているのである。
これから向こう一週間、戦争の後始末やらなんやらで上の方々はてんやわんやなそうである。

しかし、それはあくまで上の話し。

自分ら下っ端には全く関係ない、むしろ一週間の長い休暇なとってもハッピーな事になっているのです。

まぁここまでつらつら言葉をならべて最終的に何が言いたいかと申しますと。

久しぶりに自分……

自由だぁぁぁ！！

そう自由！
エリザはそのてんやわんやに巻き込まれ、お医者さん（治癒師と言うらしい）からも歩き回りの許可が下りた今、自分の自由を邪魔する者は何も無い！！
この世界で初めて自分は自由に行動できる！！

てんやわんやバンザイ！！

と、自分は久しぶりに自由を手にした喜びを噛み締めながら意気揚々と今まで寝ていた部屋を飛び出し、廊下を練り歩く事へするのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊せ☆

……なぁ、自分なんか悪い事したか？
なんですれ違う人みんなして自分を凝視する？
なんで目があうと急激に目をそらす？
なんで自分が近付くと話しをやめてしんとなる？

そろそろ心が折れそうなんすが。

と、皆さんから汚物を見るような目で見られていると、後ろから不意に声をかけられた。

「ナルミ、もう大丈夫なのか？」

ニメートル位の背がある吸血美男子、ゼノアである。

やべっ、マトモに話しかけてくれたのが嬉しくて涙出てきた。

「……どうした？」

「いや、なんでもない。」

慌てて目元を隠す自分。

いや、マジに泣いてはいないよ？

ふざけてるだけよ。

「まぁ、いいが……何をやっているんだ？」

それはこの行動に対してか、はたまた今ここをぶらついているのに対してか。

まぁ多分後者だろーが。

「久しぶりの、つか初めての休暇だからぶらぶらしてた。」

まぁ実際、行くあても無くぶらぶらしてたんだがね。

ちなみに半分迷子になっていたというのは秘密だ。

「そうか、だと。」

ん？

何が？

と、自分が疑問に思っていると、大柄なゼノアの後ろから小柄なシルバちゃんがぎこちなく出現した。

「あ、あの……この前教えて貰ったあれが……その…出来るようになって……あの…見て貰いたくて…」

そう言って顔を赤くし、再びゼノアの後ろに隠れるシルバちゃん。

このふたり兄妹仲いいねぇ。

ちなみに彼女が言うこの前教えて貰ったあれとは自分がベッドで療養中に……後でいーか。

しかし、自分が起きてこの三日、こんな感じに隠れられたりするとさすがに傷つくね。

たしかに起きた直後のあれが恥ずかしいのはわかるが、この嫌われ様は……ねぇ。

「あー、そうなん？なら見ます、はいみして下さい。」

とりあえず、ガラス細工の鶴を扱う並に気を使いながら返事をする自分。

すると、ロボットみたいな動きでシルバちゃんがまたもでてきた。

熱暴走するんでね？って位真っ赤になって。

「あ、ならあの、中庭…に…」

あぁ、中庭ね。
たしかにここから出たらすぐだわな。

「ん、じゃあ行こう。」

そう自分が言うと、ぎくしゃくしながらシルバちゃんが動き出し、
自分はそれについて行こうとして

「あ、ちょいまって……ん、ゼノア、ほれ。」

途中で立ち止まり、ゼノアにあるものを渡す。
そのあるものとは

「な……これは…」

「教科書と日本語をポノノ語に訳す事典だ。貸すから自分で読んで。」

そう、日本史の教科書と和ポノノ事典である。

ぶっちゃけ文字を教えるのと教科書読み聞かせを約束した自分はめんどくさいのでこれらをゼノアに貸し出したのだ。
反応は予想以上の好感触。
目を見開き口がぱくぱく言っている。

「い、いいのか！？」

「いいって別に、むしろ自分より有効活用できそうだし。」

「あ、ありがとう！さっそくつかわして貰う！！」

そう言うとゼノアは風の如く走り去った。
手には大事そうにニ冊の本を抱えながら。

いやぁ、歴オタは凄い。
自分みたいなアキバ系よりよっぽどパワーがある。

そう思いながら自分は廊下に立ちすくみながら自分を待っているシルバちゃんのもとへ歩き出す。

しかし、ゼノアよ。
君はたしか自分らみたいな一般兵士よかよっぽど偉いんと違いますか？
てんやわんやに巻き込まれてはいないのか？

そんな教科書読んでる暇あるのかね？

そして最後に、自分の横を通り過ぎる時に「妹をよろしくたのむ。』と聞こえたのは幻聴だよね？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ん☆

さぁてさて、ここは中庭、つか庭園。

ここには自分とシルバちゃんとプラスアルファの計四人。
ちなみにそのプラスアルファとは何かと言うと……

「お久しぶりです。」

「ふん！」

シャール君とラルムである。
相も変わらず二人一緒だな。
セットか？二人合わせて３９８円か？それとも…

「ＢＬか？」

「はい？」

おっと、つい思った事が口から。
と、くっだらない事を自分が考えていると、今回の主役シルバちゃんがすっげー嫌そうな、それこそ汚物にたかる蝿が産んだウジムシを見るような蔑んだ目で

「なんでいるんですか？」

プラスアルファにこう切り出した。
するとプラスアルファの駄目な方（ラルム）が

「問題あるか？チビ。」

やっぱりこいつ最悪だ。

「……」

「「ひぃ！」」

コワッ！
ここに般若が降臨している！
むしろシルバちゃんに憑依している！！

ちなみに悲鳴は自分とシャール君だ。

「お、落ち着こう。ね。」

とりあえずメダカの脳みそ程のかけなしの勇気を振り絞り、シルバちゃんをなだめてみる。

「……先生。」

すると落ち着いたのか、いつもの表情でこちらを見るシルバちゃん。
そして発した発言は

「あれをあの方に当てても良いですよね？」

うん、いい笑顔。
しかしあれねぇ……

まさか本当にできるとは……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊べ☆

自分が起きて次の日の朝、目の前にはエリザと近衛隊の面々が。
なぜかと言うと。

「カードかえせ。」

「……どうしても返さなければだめか？」

という事である。
つまり返してほしい自分と返したくないエリザ達。

「実はそれ、まだ未完成なの。それを使われると自分に負担がかかるの。」

「むぅ～。それは本当なのか？嘘では無いのか？」

あぁもう、こいつは。

「よし、じゃあこうしよう。自分がなんか使える技を教えてやるから返せ。」

「どんなのですか？」

真っ先に飛び付いたのは我らが隊長、ミミリィさん。
しかしどんなのと聞かれても…

ぶっちゃけ考えてなかったです。

「先生？」

「あぁ、ごめんごめん。ちょっとぼーっとしてた。」

しかし何を教えたらいいか…
魔力とかぶっちゃけ全くしらんしなぁ…
なんか…魔力的な……そだ！

とりあえず思いついた自分はいきあたりばったり的に試してみる事にする。

右掌の上に魔力が小型台風みたいに渦巻くイメージで。
所詮魔力版螺〇丸さ。
いやぁ、やったら以外とできるもんだね。

そしてそれをやるとみんな目を丸くして驚いた。
いい気になった自分は意気揚々と説明しようとするが

「これはらせ「凄い！本物の“ニール”だ！実在したんだ！」……にーるってなに？」

説明出来なかった。
相変わらずハイテンションなミミリィ隊長に遮られたのだ。

そしてミミリィ隊長いわくニールとは、大昔にとある魔術師が造ったといわれる秘術で、魔力を球状にして爆発的な破壊力を持つ魔術なんだとか。
さらにその秘術についての情報が“魔力を球状にする”と言う事だけで文献等にも全く載っていないらしく、いままで何人も再現させようとして失敗してきただとか。
揚句、もはや伝説上の秘術としか扱われていないだとか。

なんか、歴代の魔術師の方々ごめんなさい。

「これを教えていただけるんですか？」

自分が心の中で会った事も無い偉人達に謝っていると、ムー君が自分を現実に引き戻した。
そして新たに問題がある事を自分は思い出した。

「あぁそうだね……とりあえずゴムボールはあるかい？」

水風船とゴムボール。
これがなければ修業出来ないのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊い☆

とりあえず水風船とゴムボールは代用品（ラーヂの実とググの実とか言うの）があったっぽいのでそれを使って原作に忠実な修業をして貰う事にした。

そしてその修業の結果が

「うん、完璧だね。」

錐揉みしながら木にぶつかって行ったラルムである。
まぁ当然の報いか。

……当然、か？

まぁいい、それよか。

「なんで君らは自分達についてきたん？」

いまさらながら、気になった事を引き攣った顔のシャール君に質問してみる。

ちなみにラルムは動かない、ただの屍のようだ。

「……いえ、あの…なんか近衛隊の方々が凄い秘術を習得したと聞いたので……見せて貰えたらなぁって……ごめんなさい。」

「あぁ…まぁ、あーゆー感じに。」

「…ごめんなさい。」

うん、気持ちわかるよ。

ただ君は全く悪く無い。

悪いのはラルムだ、君に罪は無い。

「先生！どうでした！？」

気まずい空気が自分達に流れる中、その空気の発生源であるシルバちゃんが自分に駆け寄ってきた。

「ごめんなさい！！」

すると即座に彼女へと頭を下げるシャール君。

それはもう恐怖の大王と対峙するかのような表情で。

「……もう邪魔しないで下さいね。」

「はい！！」

もはやここで上下関係が出来てしまっている。
いやはや、なんつーか不憫だな、シャール君。

「で、先生。どうでした？」

そしてあらためて自分に向かい聞いてくるシルバちゃん。
なんでこの娘らの家系はここまで表情の差が激しいのだろう。

「んー、いいと思うよ。もうちょい発動早くできたらなおいいだろうけど。」

「はい！」

とりあえずテキトーに言っといた。
シルバちゃんには悪いけど、ぶっちゃけ自分も詳しく知らないんだもん。

「他の隊員もできるようになったの？」

「はい、ただ姫様は戦争の後始末のため練習する時間が無くてまだ習得出来てないそうです。」

ふーん、なんかナ○トよか習得早いな。
やっぱり近衛隊はエリート揃いか？

「でもやっぱり先生は凄いですよね。伝説の秘術を知っていたり魔獣を事もなげに倒したり。多分すぐにでも上級騎士としての二つ名が貰えますよ。」

……二つ名？
あの厨二成分ＭＡＸなかんじのあれの事？

「……本当に？」

「はい。先生の場合逆に貰えなかったら国の品位が疑われますので絶対に貰えるはずです。」

そう言うと今度はやけに嬉しそうにはしゃぐシルバちゃん。
なんか自分、この娘がよくわかんない。自分はこの娘に嫌われてるのかそうでないのかが特に。

「あ、あと国から他にご褒美が貰えるはずですので何がいいか聞かれた時に答えれるよう考えといた方がいいですよ。」

む、ご褒美。
なんとも魅力的な…

しかし、この場合は選択肢は一つしか無い訳で

「はぁ…やだなぁ。」

「？」

鬱になりそうである。

とまぁ、こんな感じに自分がメランコリッていると後ろから

「ハセガワナルミ様！」

誰かも知らない一般兵士にこう呼ばれた。

様って何、様って。

ゾワゾワする。

しかもあろう事かこの人、片膝ついて自分にひざまずきやがった。

そして彼が言った用件とは

「魔王様が御呼びです！至急謁見の間へ！」

あぁ、やっぱり。

「先生！いよいよですよ！」

いや、何が。

たしかに自分はいよいよ厨二的二つ名をつけられ、ご褒美としては不本意なものを自分から要求せにゃならんゆーのだが。

「……ハァ、仕方がない、行きますか。」

やだなやだなと内心思いつつ、自分は迎えにきた兵士の後について王様のところへと行く事にした。

ちなみに、いまだにぴくぴく痙攣しているラルムの後始末はシャール君へ丸投げした。

18回目＊さほど実のない自分の休暇（後書き）

……言い訳をします。

私は今をときめく今時の若者です。
そんな私、もちろん流行には敏感なのです。
そして今回ワタクシ、めでたく流行に乗り遅れる事無く

インフルエンザ（新型）にかかっておりました。

ある意味現実と向き合っていたのですが、いかんせんつらかったです。

やっと峠も越えたのでこれからはもっと現実逃避（この小説）して行きますのでみなさんご安心を。

……ついでに文が拙くいつにもまして意味が無くなった今回の原因もインフルエンザという事には……あ、はい。駄目ですよね。
全部私の文章力が足りないからですよね。

長々と失礼しました。

１９回目＊中坊と厨房と注文と（前書き）

鳴海君、前半ちょっと壊れり。

19回目＊中坊と厨房と注文と

「では第三王女近衛隊特別名誉顧問ハセガワナルミよ、今回のそなたの功績を讃え上級騎士としての二つ名と地位、それと何かしらの褒美を授けよう。」

……ついにきました精神的死刑執行のお時間ＤＥＡＴＨ！！
そしていつのまにか“特別”名誉顧問って格上げされてるし。

ここは自分が最初に王様に会ったあのでっかい部屋である。
今この部屋にいるのは中央に立っている自分とその正面にいる王様&王妃様、そして左右に無数の貴族達。
ちなみにエリザとバリスはその貴族に紛れて、でもとっても目立つところで自分をみている。

エリザに至ってはなんか異常に誇らしい顔をしながら。

恨めしい、ああ恨めしい恨めしい。

「この事に異論がある者はおるか？いたら申してみよ。」

はい、ここにいます先生！
しかし辞退は出来ない、なぜなら

『王様からの申し出を断ったらですか？もちろん国家犯罪者として指名手配ですが……』

らしいのだ。
シルバちゃんいわくらしいのだ。

エリザならともかくシルバちゃんなら信用できる。
なので自分はこれを受け入れるしか無いのだ。
さぁ！自分に厨二のレッテルを貼るがよいわ！！

「いないようだな、ではまずそなたに授ける名を発表しよう。」

やっぱりヤメテェ！！

どこぞの痛い中坊がつけるようなアイタタな名前を皆の前で付けられるのはイヤァァァァ！！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ミ☆

ふっ、燃え尽きたぜ、真っ白にな。
もはや大〇炭１８よりも燃え尽きたぜ。

何？灰と炭は違う？
知るか！！

「いやぁ、ナルミ。よかったではないか。素晴らしい名を貰えて。」

そう言いながらペシペシ自分の肩を叩くエリザ。

くそぅ、こいつ。
そんなに自分を泣かしたいか？

「少し…いえ、かなり異質ですけど確かに素晴らしい名ですよね。何たってき「やめてくれぇ。」…なんでですか？」

自分に貼られた厨二の証をリム副隊長が言おうとしたところを自分は止め、そしてふたたび崩れるように膝を抱え部屋の隅にて影を発する自分。

ちなみにここはエリザの私室。
無駄にはしゃぐみなさんを尻目に自分は負のオーラをプンプン放出してるのだ。
ちなみにみなさんがはしゃぐ理由は

「でも魔獣撃破の功績が私達近衛隊全員にも貰えるなんて、夢みたいです。」

そう、これである。
彼らがあのお城での大量魔獣大行進を撃破した事に対する功績が認められたのだ。
ちなみにエリザも。

これでお父様に顔むけできます～と、喜ぶシルバちゃんとか素直に給料アップに歓喜するテトラ君とかまぁ反応はいろいろだが、とにかくみんな喜んでいる。

あぁ、自分もこんな風に素直に喜びたい。

ちなみに、短時間で彼らをここまで成長さした事で自分についての評価もグッと上がったとか。
しかも自分が人間だとばれてたからなおのこと皆さん自分を過大評価して。

……なんかこれも国のドロドロネチネチプチプチした事に巻き込まれる原因になりそうでさらに自分は鬱々真っ盛り。

はぁ……イテテ。

やべっ、胃がキリキリしてきた。

しかし、そんな自分を気にもせず、むしろいきなりの昇格に頭が追い付かないと勝手に解釈した彼らはなおもさわぐ。

「…やっぱり先生は俺達には届かない存在ですね。先生に教えを請うことができて光栄です。」

ほんとに、君らは暢気だねぇ。

「本当だよねぇ、たしかそんな感じのコトワザがえっと……」

だれが誰かは推して知るべし。

「“雲の上の人”だよね。ナルミ君みたいな人をあらわす言葉は。」

むしろ自分は“世界の外の人”だよ。

何?上手くない?

知るか。

「ホントですね。さすがは“虚無の黒騎士”。」

!!!??

「テトラァァ!」

「うぉ！どうしたナルミ！」

嗚呼。

ついに呼ばれてしまったか。

虚無の黒騎士、これが自分に付けられた厨二成分ＭＡＸな名前である。

魔力が無いのと今までに無い魔法ってか技ってかまぁそんなのをつかったのが虚無の部分。

んで黒騎士は言わずもがな、容姿からである。

この二つの成分、共に用法容量を注意して使わなければならない超危険ワードであります。

使用時間、服用方法や分量、ましてや処方する患者を間違えると

「やめてくれぇー！自分は厨二ではない！断じて！」

こうなります。

正確には恥ずかしさが限界を超えて半分気が狂います。

そしてそうなった自分はテトラ君の肩を掴みユサユサガタダタガッタンゴットン。

もはや彼の顔が残像で二つに見えるレベルです。

「お、落ち着け！どうした！？なにがあった！？チューニとはなんだ！？」

「先生！気を確かに！」

はぁ、はぁ。

自分は、何を……

「せ、先生……どうしたんですか？」

「いや……自分は厨二病でない事を証明したくて、つい心を乱した。」

「チューニ病ってどんな病気ですか？」

……どんな？

言葉で説明しずらいな。

てかしたくないな。

「……恥ずかしい発言を平気でしてしまうようになる心の病気。」

「なんで急に？」

「いや、まぁ……うん、いろいろあって。きにするな、もう過ぎた事だ。」

まさか王様がそうとか言えないべ。

てか風習なら仕方がない。

てゆーかなんであんなに乱心してしまったんだろうか。

やはり恥ずかしさと緊張と不安からかな。

心、弱いなぁ…

精神強いらしいのに。

「ところで、なんでナルミはあの時に褒美を要求しなかったのだ？あさつまえ後で王と直接、それも他に余計な者がいない時に話したいなど。」

そう、自分はあの時にご褒美を即座には要求しなかった。

理由は簡単、エリザとバリスがいたからである。

だがそれを彼女に話す程愚かではない。

「いや、それはまぁ…ちょっとね。」

なので言葉を濁す事にした。

「まぁ、今のお前の立場だから大丈夫だが、普通ならかなり問題だぞ。」

「まぁ、いいじゃん、問題なかったんだから。」

むしろお前達に聞かれる方が問題なんだよねぇ。

しかしいつまでもこのやり取りをする訳にもいかないので自分はとっとと切り上げる事にした。

「ほら、もうこの話しはおしまい！」

と、自分が無理矢理話しを切り上げたところで納得するエリザでは無い。

なので先手をうつことにする。

「ほら、じゃあ厨房にいこう。案内してくれ。」

すると不思議な顔をしながらエリザが

「なぜだ？」

とのたまった。

あり？
覚えてない？
これは意外。

「お菓子作ってやるって約束、覚えてないならつくんないけど……」

「覚えてる！！よし、厨房にいくぞ！！」

そう言って勢いよく飛び出すエリザ、そして他の近衛隊にも

「今回はみんなのお祝いとして凝ったのを作ってみんなで食べよう。」

そう言うとみんな一層パアッと明るい表情になった。

そしてみんなさっきまでのやり取りは頭からすっ飛んだようだ。

ふぅ、単純だなぁ、彼ら。
いろいろ心配だ。

王族とかそれを護るエリートがこんな単純に騙されるとか。
この国は大丈夫だろうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ミ☆

唐突ですが皆さん、皆さんは入院等をした時はいかがしてお過しになりますかな？

ベッドの上で何もすること無くただただ時間だけがすぎていく。
例外はあれど、それは苦痛な方が多いはずですね。

自分も例に漏れず、ベッドで一人でごろごろうだうだするのは暇すぎて苦痛だったのです。
もとの世界とは時間の流れに差があり、自分のポケットに新たな漫画やゲームが届くのにはまだまだ時間が掛かりそう。
いまあるものも全部制覇しちゃったからやる気にならない。

そんな時には興味はなくとも新しい本があればそれを読んでしまうのが自分である。

それとエリザとシルバちゃんとの約束があったので、一度は挫折したが地球料理大全でプリンを空で言える程度には覚えたのだ。
うれしい事に、食品代用一覧なるこの世界での代用できる食材がわかるものもある。

人間目的があると結構覚えるものである。

まぁそれでも時間は余るので、クッキーとかチーズケーキとか他にも少し……

話しがそれた、ついでに長くなった。

つまり、もう自分はプリンをなんも見ずにつくれるのだ。
そしてプリンはこの世界には無いものである。

つまり、これをふつーに厨房で作り始めると……

「なんと！ペププの粉を入れると砂糖水が膨らんだぞ！」

「魔法薬を料理に使うなど考えた事もありませんでした！」

まわりの調理師の方々が寄ってくるのである。

しかもバニラエッセンス（モムリの樹液）と重曹（ペププの粉）はなんか魔法薬らしく、最初使うと言った時にはみんなに引かれた。

なかでもモムリの樹液は、呪いにも使われる強力な魔力を持つ薬品らしく、自分が生でプリンのタネを啜るまでみんな戦々恐々してた。

なんかちょっと傷ついた。

あれだな、なんか気分は最初にトマト料理つくった人みたいだな。
最初トマトは猛毒と勘違いされていたんだが、実際は皆さんがおいしくいただいているあれである。

あれ？
でも確かその人って確か勘違いしたまま罪悪感で自殺したんじゃ…
…
そもそも作った理由が暗殺目的にお偉い様が『これで作んなきゃ君

を殺すよ。』って脅したからな気が……

わすれよ。

細部まで覚えてないし、間違った記憶もあるかもだけどわすれよ。

「ナルミ！まだかかるか！」

「んー、プリンはもうそろ固まるかなぁ。ほれカルメ焼き。」

ちなみに今はプリンが固まるまで（魔法の氷の箱の中）の間に暇だったからちびっこい頃に婆ちゃんから教わったカルメ焼きをつくってたのだ。

さてさて、エリザの反応は。

「む……サクサク…甘い！旨い！」

うむ、いい笑顔だ。

ちなみにこの娘はすでにホットケーキを四枚平らげている。

なんとも末恐ろしい。

「師匠！上手く膨らまないのですがどうしたらいいのでしょうか！？」

「混ぜる速さとか棒を引き抜く頃合い、あと粉の分量を気を付けてやってみて。」

ぶっちゃけこれは慣れだからねぇ…

そんな教える事は無いよ。

てか師匠って……

……何、そのもっと具体的な事を期待する目は。

「…全部は教えないけど一回自分やったんだからそれを思い出して技術盗んで。悪いけどそれが出来ない調理師は三流だと自分はおもっちゃうね。」

とりあえず、エラソーにいってみた。
これで頑張って自分でやろうとするだろう。
怒る奴もいるかはしれんが。

しかし、自分の言葉で料理人達の眼に火がついた!!
そして料理長にあたる恰幅の良い角が生えたオッサンが

「わかりました!これは試練として調理師一堂乗り越えて見せます!!」

と、高らかに宣言した。
そして早速猛練習しはじめ、猛烈にカルメ焼いていった。

熱い!こいつら熱すぎる!

「ナルミ!プリンとやらはまだか!?」

「あー、はいはい。」

エリザにせかされ、とりあえずこの熱い漢たちはスルーしながら固まったプリンの入った容器をみんなの前に持ってった。

そして自分も一個とり。

「まぁとりあえず毒味。」

一応薬が入ってるので、安心させるために一個をペロリと平らげた。

うん、うまし。

「大丈夫そうか？」

「ん、問題無い。大丈夫大丈夫。」

「そうか。では」

そう言ってエリザが食べる。

次いで皆も一緒にたべる。

そして

「……ナルミ。」

「ん？」

「お前本職は調理師か？」

「いやそれは無い、本職は高校生。」

何を言い出すこのムスメ。

すると今まで黙ってた近衛隊の方々も

「ですけどこれ！なんですか！」

「こんな蕩けるような甘さ初めてですよ！？」

「口触りも滑らかで…人間なら誰もが作れるんですか！？」

上からテトラ君、シルバちゃん、ミミリィ隊長である。
この好評価なら多めに作ったのもすぐ無くなるかな。

てかなんか、こーやって人間のイメージが段々変についていくんだな。

と、自分が少し困っていると。

「ハセガワナルミ様。」

「のうわっ！！」

上から忍者……ではなくツナギ姿のポニテな女性が降ってきた。

「魔王様が御呼びです。褒美についての話しを聞くと。魔王様の私室、謁見の間の左の部屋になります、そこへ。」

「あ、あぁそう、うん、行くすぐ行く。」

いまだにバクバク言ってる心臓を心配しつつ、自分は足早に厨房を後にした。

しかし、これが間違いだった。

厨房へ彼女を置いていった事を自分は激しく後悔する事になるのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ズ☆

「えーっと……失礼します。」

自分は異常にでっかい扉から二十メートルは離れた場所にある非常にでっかい扉をくぐり、なるたけ失礼のないよう入室した。

「硬くならなくていい、楽にしてくれ。」

「そうですよ、“英雄”さん。」

するとそこには何時もと違い、気のいい熟年夫婦がそこにいた。

「一応この場には私達しかいませんのでご安心を。でもさすがに近衛隊はいくつか隠れていますのでそこは許して下さいね。」

あなたを呼びに行ったのも近衛隊の子なのよ、と最初のような試す視線ではなく柔らかい視線を投げかける王妃様。

なんか印象かわったかも。

「では、早速だが君の要求を聞いてもいいかね？」

しばらくやんわりと和んだ空気を味わってた自分に切り出したのは王様である。

なので自分も単刀直入に答える事にした。

「実は自分、長い休暇が欲しいのです。」

すると二人の頭にハテナが浮かんだ。

そりゃそーだ、金や地位ではなく休暇、つまり休みを要求したのである。

普通は疑問に思うだろう。

なので自分はその理由を答える事にした。

「理由は自分がここに来た原因にあります。いくつか話せない事がありますが、そこはご容赦下さい。そして何卒この事はご内密に。」

そう切り出し、自分がこの国に来た理由を話した。

所々隠し、ちょっと嘘も織り交ぜて。

特に神とか神とか異世界とか。

そう、自分が休暇を注文した理由。

それはとっととあの疫病神にかせられた仕事を終わらせて心おきなく戻る方法を探すためである。

１９回目＊中坊と厨房と注文と（後書き）

ちょい裏話し。

鳴海君が国を抜け出して任務をしようとしなかった理由は度胸が無いのと事が終わったら国の図書館なりを使って帰る方法調べたいからです。

あと帰って受け入れてくれるとこがほしかったから。

半チキンな鳴海君らしい考えですね。

ＥＸ・１＊乙女的桃太郎作戦と少女同盟（前書き）

なんぞ、これなんぞ…

何が起こってこんなことに…

EX・1＊乙女的桃太郎作戦と少女同盟

～シルバサイド～

「スフィーさん。」

ナルミが厨房から飛び出した直後、シルバはナルミを呼び出した女性に話しかけた。

「なんですっ！」

そして彼女が口を開けた所にプリンをスプーンで突っ込んだ。

「甘いですよね、これ。」

そして作戦を実行する。

「しかも今までにないとろけるような美味しさ、まろやかな口触り。…正に最高級のお菓子です。」

この国の王妃は大の甘党で有名である。
そして彼女に仕える近衛隊も皆、甘党で揃え皆でティータイムを楽しむのが彼女の楽しみだったりする。
ちなみに全員女性で統一されている。

そして、その甘党の近衛隊というのが

「こ、これは……どこの調理師が作ったんですか！ぜひ教えて下さい！！」

このツナギの女性、スフィーである。

「秘密です、が……」

そしてシルバはあらかじめキープしといたプリンを一個取り出し

「ここにさっきのが丸々一個あります。」

これみよがしに見せ付ける。

プリンの動きに合わせて顔が動くスフィーの動きが実に滑稽である。

「あげてもいいですよ。」

「ほ、本当ですか!?」

もうここまできたら作戦は成功したも同然である。

「ただし…」

ここで一拍置き、ゆっくり話しだす。

顔が小悪魔的に歪んでいるのはご愛顧である。

「私を一緒に連れてって、先生の様子を見させて下さい。」

ちなみにこのやり取りの間エリザ達は

「うむ、焦げてなければいくらでも持ってくるがよい！！」

「姫様、そろそろもう…」

調理師達のカルメ焼いた失敗作を際限無く食べ、近衛隊はそれを見て胸やけを起こしていた。

全く末恐ろしいムスメである。

「姫！もう5個目ですよ！お願いですからやめて下さい！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ゴ☆

「……スフィー、誰それ？」

「第三王女様の近衛隊の方です。」

彼女達は今、屋根裏にいる。

そこには王妃の近衛隊がスフィーを含みツナギ姿の女性が三人いた。

ちなみに、魔王の近衛隊は床下にいたりする。

「はい、先生が気になって付いてきちゃいました。」

渋るスフィーに対して『お兄様にはきちんと伝えておきますよ、スフィーさんは器量良しの理想の女性だって』と言うといともあっさり潜入できてご満悦なシルバもそこにいた。

シルバとスフィーの接点も、最初はゼノアに一目惚れしたスフィーが外堀りから固めようとシルバに接触したのが始まりなのである。

もちろん効果は抜群だった。

「付いてきちゃいましたって……スフィー。」

「す、すいません隊長。」

近衛隊の一人、セミロングの緑の髪を持つ女性がスフィーを睨んだ。もう一人の青いおだんご頭の女性も、無言でスフィーを見据えている。

「スフィーさんを責めないで下さい。つきましてはこれを……」

そう言ってシルバが取り出すのは、さっきナルミが作ったホットケーキの余りである。

まだ地味にほんのり温かく、中に花の蜜を混ぜこまれているそれは甘く上品な香りを醸し出している。

「な、なんですかそれは……」

初めて見るそれから漂う香りを嗅ぎ、それにともなって溢れる唾を飲み込みながら隊長はシルバに質問する。

「これですか？これは“ほっとけーき”というお菓子です。今までに無い、カナムの花の蜜を混ぜたとっても甘く美味しいお菓子です。」

シルバが言い終わると三人から生唾を飲む音がした。

そして彼女達の様子を見て、シルバは残念そうな表情を作り

「でも邪魔ならば私はすぐに戻ります、失礼いたしました。」

そう言ってそそくさとホットケーキをしまおうとするシルバ。

それに対して隊長が

「ま、まって！……あ、うー…この事は私たちだけの秘密だからね。」

まんまと策略にのせられたのであった。

「実は自分、長い休暇が欲しいのです。」

ナルミが魔王へと要求したもの、それは余りに予想外のものであった。

近衛隊とシルバだけか、魔王と王妃すらも訳がわからずに顔をしかめている。

「…ナルミ様は何が目的なんでしょうか……モフモフ…」

「さすがに私も今先生が何を考えてるかはわかりません。」

「本当に美味しいですね、このほっとけーきは……マフマフ…」

ただしかめながらも、近衛隊は皆揃ってホットケーキを頬張ってい

るから緊張感がまるでない。

そして、しばらくの沈黙ののちにナルミがこう切り出した。

「理由は自分がここに来た原因にあります。いくつか話せない事がありますが、そこはご容赦下さい。そして何卒この事はご内密に。」

そして、ナルミは語りはじめた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊エ☆

「…グズッ……」

「……エッ…エグッ……」

「……スン……」

「…ふぇ……グスン……」

ナルミの語る内容は壮絶なものだった。

まず昔の人間の戦士、セタ・ソウジロウが封印した闇の賢者の城が霊域となり、そのせいで魔物達が凶暴化してしまうと言う事。

そして闇の賢者の魂が魔獣として復活してしまったと言うのだ。

ただ、これは誰もがさして問題として見てはいなかった。

確かに危険で大変な事だが、これを解決するのがあのナルミだからである。

ぶっちゃけ、一撃で魔獣を真っ二つにしたナルミが解決できないと

は思えないのだ。

しかし、問題は別にある。

「ぜ、ぜんぜーは…ヒック…かわいぞうずぎまず…」

そう、彼がこの国に来た理由である。

彼は霊域を浄化するために親、親友、仲間達から自分の記憶を消して、彼がいた国からも自分の存在を抹消してからこの国へとやってきたのだ。

誰も悲しまないように、自分が大事にしていた人達の中から自分を消す、並大抵の覚悟では出来るはずも無い。

しかも、自分とは全く関係の無い国の関係の無い者達のために彼はそれをやってのけた。

さらに彼の国は、特別な方法を使ってしかいけない所にあるらしく、一度こちらにきたら二度と帰れないらしいのだ。

つまり、彼は家族や友、さらには国を捨ててまで見ず知らずの自分達を助けにきたのだ。

しかも彼はあくまで任務を遂行するのを休暇の間にやると聞かなかった。

理由は、“一人修業の旅”に出ると言えば誰も付いて来ないし巻き込まないですみますから、と彼はおどけながら言ったのだ。

そして、すぐには無理だが、今後しばらくして、いつか休暇が欲し

くなったら届け出さえ出せばすぐに休暇をあたえる事を魔王は約束して、ナルミは部屋を後にした。

そして今、ナルミが退室後に余りに泣け過ぎて他の近衛隊と交代した（その時シルバは隠れていた）彼女達は兵士宿舎（女性用）の彼女達の部屋にいる。

「あ、あれが真の…ズッ…え、英雄のす、すがだなんですね…」

「全てを捨ててまで私達の国を護るために来たなんて…」

「……私は、あのお方のようになりたい。」

「わ、わだじはぜんぜーのこど、な、なにもわがっでなかっだでず…うぁーん！！」

中はもはや涙で埋め尽くされている。

なんとも涙脆い人達である。

そしてしばらく泣いた後、だんだん落ち着いてきたスフィーはシルバに聞いた。

「シルバ…あのお方はなぜ私たちのためにあそこまでしてしてくれるのだろうか……」

それに対してシルバは、いまだに呂律が回っていない口調で答える。

「わ、わかりま、ぜん…わだじは…なにもわがっでながっだんです……うわーん！！」

「落ち着いて、シルバさん。」

ふただび取り乱したシルバを隊長が優しく諭す。

「で、でもぉ…」

ぷるぷる震えながら泣いているシルバは、端からみたら虐められてるようである。

それからまた泣いていたシルバだが、しばらくしていきなり立ち上がった。

そして言ったのが

「私、聞いてきます。先生がなんのために私たちを護り戦ってくれるのか、その理由を今から聞いてきます。」

そう言い、決意した顔をしながら彼女はドアに手をかけ、扉をあけた。

そして部屋を出ようとした時にボーっと彼女の行動を見ていたスフィーがいきなり駆け出し、彼女を捕まえて扉を勢いよく閉めた。

襟首を掴まれたシルバはぐえっとなってその場で咳込んだ。

「ゴホッゴホッ……なにするんですか！」

「そっちこそ、何をしようとしてるんですか！」

シルバの当然の抗議に対してスフィーは傍目からは逆切れとしかとれない抗議をした。

訳が分からない。
それがスフィー以外の反応である。

しかし、そんな彼女達を無視してスフィーは続ける。

「馬鹿ですか！？なんであの方に直に聞くという事をしようと考えるんですか！！私たちの首を飛ばす気ですか！？」

そこまで言われ、やっと気付いた。

そう、シルバは賄賂（お菓子）により王妃の近衛隊を懐柔してナルミの話しを聞いたのだ。
つまり普通話しを聞けない立場の者が、普通では無い方法で話しをきいたのだ。

その事をナルミに話したら、もちろんなんで知っているのか、という話しになる。

それは近衛隊の彼女達も同じで、寧ろ賄賂により絶対秘密厳守の話しを外に漏らしたのだ。
知られたらただではすまされない。

シルバ共々職業的に、悪ければ物理的にも首が飛ぶ。
少なくとも、罪人として扱われるのは確かなのだ。

「でも…じゃあどうやって聞いたら…」

その事実を目の当たりにして、シルバはうろたえながら一人ぶつぶつ言っている。
すると、スフィーが横から

「聞くにしてもせめて、ぼかして聞くとか考えて下さいよ。まぁ疑問の発端である私もこの事は気になりますし、協力はしますよ。」

すると、他の二人も

「私も、ここまできたら最後まで気になるし協力します。」

「隊長と同じく、やっぱり気になる。」

かくして、ここにナルミが戦う理由を聞くのを目的とした少女達の同盟が結成されたのだった。

「ではやはり、まずはナルミ様の普段の生活を調査してそこから…」

「それは絶対ダメです！！」

だがやはり、前途多難である。

EX・1＊乙女的桃太郎作戦と少女同盟（後書き）

書いた後に気付いた、王妃の近衛隊の隊長とおだんご少女に名前が無い。

……どうしよう。

２０回目＊少し実のある自分の休暇

自分が王様に休暇を求めた次の日、自分は遅めの朝食を食べるために食堂へと向かった。
だんだん皆さんからの道端で車に轢かれ潰れている、正にヒキガエルになったカエルを見るような蔑んだ視線にも慣れてきた。

しかしそれを真っ正面から受けるだけの度胸と根性と心の強さは持ち合わせていない自分は視線を避けながら、なるたけ隅っこで食事をすることにした。

そして、自分が最後のシメのデザートとして出されているよくわからない黄色く固い実を食べるか食べまいか迷っていると、食堂の入り口にゼノアがやってきた。
しばらくゼノアはキョロキョロしながら誰かを捜している風だったが、目的の人物はなかなか見付からないようだ。

自分は石みたいに固い実を食べるのをあきらめ、食器を片すべくその場を立ち上がった。
そして、食器を持ち指定の位地にそれらをほうり込む。

最後に、自分が余った実を捨てようとそれを掴んだところでゼノアがいきなり叫び出した。

「いた！ナルミ！街に遊びに行くぞ！！今日はろべっ！！」

とりあえず、手にしていた実をゼノアに投げた。
そうして無理矢理にでもこいつの発言を止めなければ、自分は今日一日、厄介事もとい面倒臭い事に巻き込まれそうだからだ。

うん、カッとなってやったが、後悔はしていない。
寧ろ正しい選択をしたと思う。

「い、痛い……ナルミ、痛いじゃないか！」

チッ、復活早いな。

「いや、その実がゼノアに一目惚れして飛んでったんだよ。」

とりあえずふざける。
するとゼノアどころか食堂のおばちゃんさえ怪訝な顔をした。

センス無くて悪ぅござんしたね。

「じゃ、自分はこれで。」

とりあえず逃げよ。

「待ってくれナルミ！今日は露店でセタが使った武器が売られているらしいんだ！！本物かどうか一緒に来て確かめてくれ！！」

しかしまわりこまれてしまった。

だが……それくらいなら、良いかな？
やはり自分の勘は当てにならんな。
別にそれ以外はフツーに遊べそうだし。

「わかった、行くか。」

とりあえず、一旦着替えてから行くとゼノアには伝えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ア☆

さてさて、自分は決してオシャレさんではないが、だからと言ってそこまでダサい人間では無い。
オタクではあるが、やはり今をときめく現代っ子な自分は、シャツをズボンに突っ込んで頭にバンダナを巻いて『萌え～』とか公道のど真ん中で叫ぶほど落ちぶれちゃいないのだ。

まあ、そーゆー人がいくよーなとこには何回も行った事はあるが。

それは置いといて、つまり自分はごくごく一般的なファッションセンスを持っている訳ですよ。

今回の着こなしだってほら、下はジーパンに黒いベルト、上は青っぽい生地に円形に英語でなんか書かれてて真ん中にはよくわかんない記号が描かれている半袖の下に長袖を着てるように見えるあのタイプ（呼び方忘れた）のシャツと、左手に無骨ながら渋い腕時計。
その上に黒いフード付きの秋物ジャンバーを羽織ればもはや完璧。

どこに出しても恥ずかしく無い現代の若者の完成さ。

まぁ、つまり何がいーたいかと言うとだな……

「……ナルミ。」

「……何？」

「やはりお前の格好は目立ち過ぎるな。」

現代っ子ファッションは異世界では通用しねーって事ですよ。

道行く人達はみんなしてこっちみてはあからさまに避けて通る。

自分達には今、モーゼも真っ青な人の海を割る力を手に入れた！

全く嬉しくないが。

「…まぁ、黒髪黒眼なだけでも十分目立つ上に、今のナルミの立場からいえば当然といえば当然だが。」

そうおっしゃるのは自分の横にいるザ・ドラキュラな格好をしたゼノア閣下。

一体何人の生娘を毒牙にかけたのだかっていうくらいドラキュラな彼は、道行く乙女達に振り向かれたり顔を紅くされたりでモテ男街道まっしぐらである。

ぶっちゃけ、刺されればいいのにって少し思ってしまった自分がいるのは秘密だ。

しかし、彼の言葉に一つ気になるところがある。

そう、『自分の立場』の部分である。

「…なぁ、自分の立場って…」

やはり、自分は何か知らぬ間に問題を起こしていたのだろうか…

「ん？気付いてない訳ではないだろう。」

やはりそうか…
それなら今までの城の人達の反応も説明が付く。

「今のナルミの立場は…」

やはり、自分は皆に嫌われてるんだな。

「国を救った英雄だからな。みんなナルミを畏れているのさ。」

そして最後は不敬罪で処……へ？

「まてまてまて、英雄ってなんだ英雄って。英雄か？自分は鳴海だぞ。」

「いや、ヒデオが誰かは知らんが、ナルミは国を救った英雄だ。虚無の黒騎士についての話しはもはや国中に轟いているぞ。」

うそーん。
何、自分全く気付いてなかったんすが。

「もはや劇場でナルミを題材とした劇が上演されているくらいだ。」

そう言うと、なんかでっかい建物の前には黒い服と黒いかつらに身を包み、客寄せをしている二枚目の姿が。
他にもエリザやらなんやらの格好をした人物が多数見受けられます。

ちなみに、近衛隊は全員集合です。

「観ていくか？」

「……いや、いい。」

とりあえず、なんか畏怖の対象になっちゃった件はどうにかしよう。
自分、そんな大層な生き物でないもん。

「ちなみに、エリザ達が使った大魔法と魔術符を発明した事から、
一部では“漆黒の賢者”とも“闇夜の破壊神”とも呼ばれているぞ。
ちなみに人間と言うのももう周知だ。」

ほんま、いーかげんにしてな。

そしてなんでお前らそんなに黒の所強調すんのさ。

てか自分、そんな黒いイメージしか無いか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ジ☆

「ごめんなさい！」

今自分の目の前には、土下座で謝るゴブリンのオッサンがいる。
そして右手にはボロい片刃の剣が

事の顛末はこうだ

『どうだ！これがかのセタ・ソウジロウが使ったカタナだ！』

『いや、ただの片手剣でしょ。』

『何をでたらめを……あ…あなたは…もしや黒騎士…』

そしてこれである。

彼いわく、刀が片刃の剣と聞いたのでつい出来心でやってしまったとか。

そして、正直に話すから挽き肉にだけはしないでくれ、出来れば生かして下さいと。

人間を侮辱した事は全力で謝るから命だけは助けて下さい、と。

自分、どんだけ鬼畜やねん。

ゼノアはゼノアで、自分が目で『どうする?』って聞いても『処刑。』的な厳しい視線を返してくる。

ぶっちゃけ半分阿修羅になりかけている。

多分、偽物だって事で腹をたてているのだろう。

さすが歴オタ、自分にはわからん事で怒りよる。

しかし困った。

自分は怒りをミジンコの脳みそ程も感じて無いので、罰するも何も気乗りしない。

とりあえず、このチンチクリンのオッサンが大声で謝るから野次馬だけは寄ってくる。

正直勘弁して欲しい。

とりあえず自分はキョロキョロして回りを見回すと、土下座しながらふるえているオッサンの後ろに商品と混ざってある物が。

「……ブッ！」

「ヒィ！！」

思わず吹き出した。

それに伴い、オッサンもビビりまくる。

「なぁオッサン、あれいくら？」

そう言って自分はソレを指差す。

「あ、あれでございますか？あれはただのガラクタで…」

いまだにびくびくしているオッサンの話しを要約するとだ。

これは大分前に仲間から賭にかって貰った物だが、旅の商人をやる彼にとってはかさばるわ重いわ売れないわ、さらには使い道がわからないわで、何回捨てようと考えたかわからないと。

しかし、何故か捨てる気にならずに今に至る。

ちなみに前の持ち主も同じ心境だったとか。

「で、値段は？」

「あ、あの…５０リーグです…」

ちなみに、一人の一日の食費がだいたい３０００リーグだとか。

林檎的な果物は一個２０リーグだったから、だいたい林檎２．５個分。

ま、それならいっか。

「じゃ、あれくれたら許したげる。」

「へ!?あんなガラクタでいいんですか!?」

「ん、ダメ?」

「と、とんでもない!どうぞ持ってってください!!」

そう言ってソレを渡すオッサン。

周りは『なぜあんな物を。』とかなんとかいいながらざわめいている。

「な、ナルミ!そんなのでいいのか!?そんな訳わかんないもので!」

ゼノアもゼノアでなんかうろたえてる。

まぁ、彼ら何たってこれが何かわからないからな。

自分も本当は何かわからないが。

「いーのいーの。」

だが自分はこれと同じような物を知っている。

何たって、これは

「まっさか現実にナルガ武器が存在すっとは思わなかったけどね。」

左右にある黒い翼を模した飾りに、巨大な本体。
そう、まさかのこれはナルガ武器。しかも狩猟笛の夜笛【逢魔】ときたもんだ。

手に入れるしかあるまい。

「な…なる、が？」

「そうナルガ。名前は夜笛【逢魔】。夜陰に紛れる黒の狩猟笛。裏の世界の住人はこれを使い合図を送るのに使ったとか。他にも大剣とかがある。」

うろ覚えの説明をゼノアにすると、目を白黒させてこちらをみる。
おもしろいから、もちっと混乱さしてやろう。

と言う訳で、狩りにて使った場合の効力についても話してみる。

「さらにこれは演奏によって体力増強、持久力増強、攻撃力増加、風圧無効等の効果が仲間も含めもたらされる。しかもこれ自体攻撃力が高いときたもんだ。」

あんぐりしてるゼノア、ついでにオッサン。
なんか他の野次馬もみんな目を点にしている。

うーむ、やり過ぎたか？

「まぁまさか本当にあるとは思わなかったんだけどねぇ。」

とりあえず、『本当かどうかはまでは自分、知らないよ』アピールをしといた。

多分、これで皆これが眉唾だとわかってくれるだろう。

しかし、これが裏目に出た。

「……つ、つまりそれは人間の間でも言い伝えとされる伝説の武器なのか！？」

自分が言い終わると、一瞬の間の後にゼノアが叫んだのだ。

伝説って何よ伝説って。

自分の頭が追い付かずにしばらく黙っていると、それを無言の肯定とみなしたゼノアは深く頷いた。

それに気が付いた自分は慌て訂正しようとしたが、すでに遅かった。

「いや、伝説とかそんなけったいな代物では無くてだな…」

「ならナルミの一族に伝わる裏の武器か！？」

「ちがぁーう！」

いくら言っても理解しないゼノアに、しばらく説明しようとしたが結局人間に伝わる伝説の武器にされてしまった。

露店の連なる通りの真ん中で、皆に注目されながらの説明はさすがに疲れた。

しかも皆して伝説の武器って認識しちゃってるし。

と、かなり疲れた自分に後ろから近付く小さな影が二つ。

「わぁー、これがニンゲンのデンセツのブキなんだ。」

「しゅごーい！くろーい！」

あらかわいい、尻尾が生えた髪が青い姉妹がそこにいた。
5歳と3歳くらいの小さな姉妹だ。

……和む。

と、自分が彼女達がぺたぺたと逢魔をいじっているのを見て癒されていると。

「ミミ！ナナ！」

青い髪の尻尾が生えた若めの女性が凄い形相で駆け付けてきた。
そして、二人を引っつかむと彼女は

「申し訳ありません！！」

自分に土下座した。
なんだ、一体何がおこった。

「娘がとんだご無礼を！お願いです！この子達は見逃して下さい！罰なら私が！どんな罰でも受けます故！」

ええ～。

「お願いします！この子達だけは見逃してください！お願いします！」

……どこの悪代官さ、自分。
てかこの人スゲーな、必死に子供を守ろうとしている。

「……いや、怒る理由が無いし。子供のやった事ですし、とりあえず頭をあげて下さい。」

「…許して、いただけますか？」

「いや、あんくらいで怒ってたら自分の人間性が疑われますし、そもそも怒る要素が無いですし。子供は元気なのが一番ですよ。」

そう言うと、彼女はボロボロ涙を流しながら『ありがとうございます。』と連呼した。
だからなんやねん、これ。

自分が今の自分の立場についてもっとよく考えようとしていると、後ろからゼノアが

「ナルミ、人間性とはなんだ？」

とぞのたまいける。
人間がいないから人間性って言葉もなかったのかな？

「人間としての品格とか品位とかそんなん。」

とりあえず多分正解だろうと思う事を言ってみる。
詳しくはしらんからね。

「そうか……なら、我ら魔族の場合“魔族性”か？」

「いやしらんがな。」

ほんと、こいつはなんなんだか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ー☆

「ごちそうさまでした。」

「でした！」

「でちた！」

さぁ、ここは現在とある宿のレストラン。

自分はここで今、食事をし終えたのであります。

ちなみにメンバーは自分とゼノア、そしてさっきの子供の計四人である。

「あ、あの…お口に合いましたでしょうか…」

そう言いながらでて来るのは、さっきのお母さん。

なぜかと言うと、ここは彼女達家族の経営する宿だからだ。

ちなみに、この二人は自分と食べると駄々をこねるので一緒に食べていた。

そん時のお母さんの顔の青さは忘れらんないな。

「おにーちゃん、おいしかった？」

一息ついてると、姉妹のおっきい方、ナナちゃんが椅子からおりて自分の近くによってきた。

「ん、おいしかったよ。」

「だっておかあさんのりょうりだもん！」

そう言いながら胸を張る五歳児。

一緒に三歳の妹、ミミちゃんも胸を張る。

……あぁ、和む。

ここ最近、癒しが風呂しか無かった自分にとってはこの姉妹は最高の癒しだ。

近所の子猫をふかふかするくらい癒される。

そして、しばらく二人を見ながら自分が癒されていると、ゼノアが

「……ナルミ、もしかしてそういう趣味か？」

は？

どういう趣味？

ただ自分はこの子供を見て癒されてただけだが？

しかし、ゼノアの視線は何か複雑というか困惑した視線をしている。

お母さんにいたっては、絶望の表情だ。

……よぉし、理解した。

「よし、ゼノア。今から貴様の頭蓋を国外へシュートしてやっから表でろや。」

そう言ってゼノアに近寄る自分。

「ま、待て！しゅうとが何かは知らないが止めてくれ！雰囲気的に首が飛ばされそうだ！！」

対して、全力で焦るゼノア。

「誰にでも趣味の違いはある！だから落ち着け！！」

「自分はロリコンじゃねぇ！！」

まだ言っているこの馬鹿に制裁を！！

パチーン

「うお！」

ドガッ！

ガスッ！

ん？

何があったかわからない？

簡単にいうとゼノアの座る椅子を彼の頭上にアポーツしました。

つまりゼノアは転び、頭の上から椅子が降ってきたのです。

「っ……！」

ゼノアは頭を抱えながら悶絶している。

いったそー。

「君達はあんな風にぶざまに育っちゃダメだよ。お母さんの言う事をよく聞いて、いい子になるんだよ。」

「はーい。」

「あーい。」

うむ、いい返事だ。

「で、ぶざまなゼノアよ、これからどうする？」

「ぶざまー。」

「まー。」

この姉妹、いいわ。

将来大物になるな。

「……それを定着させるな。」

うんざりするゼノア。

ざまぁみろ、人をロリコン扱いした罰だ。

「まぁそれはともかく、ナルミにはこの後俺の家に夕食を食べに来て貰いたい。」

そう言いながら、椅子をなおして座るゼノア。

「ほー、そっかぁ。何、お前料理できんの？」

なんかこいつにそんなイメージねぇなぁ。
部屋いっぱいに古文書とか歴史の本とかが散乱してそうだ。

「いや、俺は作らないぞ。そもそも目的がお前を紹介する事だからな。」

ん？

「まて、誰に？」

「…父上と母上にだ。」

「拒否権は？」

「してもいいが、父上…現魔王の右腕と言われる男に目を付けられるぞ。」

そう言ってため息を付くゼノア。

……なーんかやな予感。
そんな偉いオッサンが自分を誘うあたりが特に。

「…実はな……平たく言うとお前と政治的な繋がりが父上は欲しい

らしくてな……覚悟しといてくれ。」

嗚呼、やっぱり。

やっぱ自分の勘は馬鹿にできないね。

着いてくるんじゃ無かった。

「……さらに言うと、父上が一度ナルミと手合わせしたいと言っていてな……すまん。」

……もう、どうでもいいです。

ちなみにそのあと、ゼノアの家に向かう途中にあった楽器屋にて。

「さぁさあ、これが人間に伝わる伝説の笛、オウマと同じ形の笛だ！大きいのは３０００リーグ、一番小さいのは５００リーグだ！」

「おじさん、小さいの一個！」

「私はそこの中くらいのを！」

「あー、残念中くらいのはもう売切れです、これは見本です。」

「ただいま技術者総出で製作に取り掛かってますので明日には出来ているかと……」

等のやり取りがゆうに四十人はある人だかりで行われておりました。

……ただいまグラディシアには、笛ブームが到来しております。
そして技術者のみなさん、がんばり過ぎです。
あれからまだ5時間経ってないのに、製作スピード早過ぎです。

……収拾つかないな、これ。

21回目＊勘違いから出た妙案（前書き）

奇妙な案と書いて妙案。

今回については強引すぎるとかどこがいい案だとかの苦情は受け付けません

私もわかっていますゆえ、寛大な心で受け入れてください。

２１回目＊勘違いから出た妙案

「ここが俺の、ランドルフ家の屋敷だ。」

そうゼノアが指差す先にあるのは、一言で言うと豪邸だった。
別にキンピカリンな感じでは無いが、かなりでかい。
自分家（２５坪くらい）が百は軽く収まる。

てゆーか目の前の門だけで横にしたら自分の部屋より広い。

「でっけーなおい。」

誰に言うでも無し、独り言のように自分は言った。

「そうか？むしろ家は他の貴族よりも質素に造られているぞ。」

これで質素か、世界中の庶民に謝れ。

そう自分がゼノアに言おうとしたところで、いきなり門が開いた。

「おかえりなさいませ、ゼノア様。ようこそいらっしゃいました、ナルミ様。」

そこにいたのは、いかにも執事な恰好をして角が生えたダンディズムオーラむんむんのおじ様。
そして二十人程の大量のメイドさん。

「ただいまセブル。」

そうゼノアはダンディー執事に言いながら、着ていた上着を脱いで彼にわたした。

「お嬢様もすでにご帰宅なさっております。」

それを受け取りながらそう報告するセブルさん。
多分お嬢様とはシルバちゃんの事だろう。

しかしこれは端から見ると、ドラキュラ伯爵と使い魔の悪魔だ。
この二人、しっくりしすぎている。

「ではナルミ、いこうか。」

くだらない事考えてた自分にそう言ってずかずかと屋敷に入るゼノア。
そしてそれに慌てついて行く自分。

とりあえず着いて行くと、やはり貴族って具合に屋敷は広く、絵やら甲冑やらが飾ってあった。
多分これ、こわくて絶対自分は触れない。
下手に壊して弁償出来る自信が無いもん。

と、いろいろと屋敷を観察していると、不意にゼノアがある扉の前で止まり、自分に話しかけた。

「とりあえず、この部屋で待っててくれ。俺は父上に報告しにいってくる。すぐに戻るが、何かあったら近くの使用人に言ってくれ。」

そう言ってゼノアはさらに廊下の奥へと歩いて行った。
そして彼の表情がかなり硬くなってたのは気のせいでは無いだろう。

実の息子でさえこんなに緊張するって…　逃げ出したくなってきた…

そして部屋に待機しているメイドさんよ。
自分と二人だけになったからってそこまで顔を青くして絶望の表情をしてくれるな。

「……そんなに怖がんないでも。」

「い、いえ！あの！怖がってなど…あ、あの…も、申し訳ありませんでした！！」

そう言って全力で謝るメイドさん。
涙を目に溜め、顔は真っ青に恐怖で身体は震えている。
もはや扱いが恐怖の大王だよ。

まぁ……彼女のけしからん二つの巨大なスイカの谷間が見えるのはうれしいが。

そして、彼女の叫びを聞き付けてなんかいかにも“メイド長”っていうおばちゃんがやってきて

「申し訳ありませんナルミ様！この娘が不手際を…」

「いや違うって。」

だめだこりゃ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

「ナルミ様、お食事のご用意ができました。」

そう言って登場したのはセブルさん。

準備ができたらしく、もうみんな揃っているから迎えにきたとか。

ただ、なんか雰囲気が怖い。

そして彼に部屋まで案内されている途中に、お礼の言葉をのべた。

「ありがとうございます。」

「……いえ、仕事ですので。」

自分がお礼をセブルさんに言うと、彼は一瞬の間を開けて返事をした。

あれか、平民にも気を使う貴族ってイメージか。

なんとテンプレートな。

そう自分が思いながら部屋に案内されてると、彼は目に見えて警戒しながら自分に言った。

「なるほど、まずは私達使用人から好感を得てランドルフ家に近付こうと言う気ですね。うまくいけばこの家の内情も聞けますからね。」

……はい？

「…どんな考えですか。」

「こんな考えです。」

……なんか、怖いこの人。
めっちゃ敵対心剥き出しなんですが。

「……なんか自分、怒らせる事しました？」

勇気を振り絞り、思い切って聞いてみた。
すると、セブルさんは静かに

「…私はお嬢様を、シルバお嬢様が小さな頃から私がお世話をして、手塩にかけて育ててきました。それを……」

そう言って彼は自分に向き合い、話しだした。

なんか展開が読める気がする。

「ぽっと出の若造なんぞに盗られる事が私は許せ無いのです。いくら人間で英雄だとしても、私はお嬢様が不幸になるような相手に嫁ぐのは我慢なりません。まだあなたがどんな方かは噂しか知りませんので、これからしっかりお嬢様に見合う者かを私が責任を持って見極めさせていただきます。」

そう一気に言い放ち、それから一瞬の間の後はっとした表情になった。
そして、彼は影をみせながら呟くように再び話しはじめた。

「……お嬢様があそこまで嬉しそうに語る姿から察するに、あなたは事実素晴らしいお方なのでしょう。しかし正直、会った事も無い

者に長年育ててきたお嬢様が心を奪われると思うと、何かやり切れ無い感情が込み上げてくるのです。それでつい、その気持ちをナルミ様にぶつけてしまい……不快な思いをさせてしまい、申し訳ございませんでした。」

そう言って深々と頭を下げるセブルさん。

……親だ。
ここに娘を思う父親がいる。

「……頭をあげて下さい。別に不快には感じていないです。」

とりあえず、セブルさんのシルバちゃんに対する愛情の深さはわかった。
痛いほどに。

ただ、シルバちゃんが自分をそーゆー対象に見てるとゆー勘違いはどうなんだろ。

嫌われど、好かれる要素が自分には全く無い。

「ありがとうございます。」

そう言ってセブルさんは頭をあげた。
さっそく自分が彼の勘違いを訂正しようと口を開けかけた、その時

「とりあえず、お嬢様が不幸になるようなら貴方が人間だろうが英雄だろうがなんだろうが私が本気で消しにかかりますので、その事は心にとめて置いてください。」

そうセブルさんは言い放ち、くるりと正面に向き直り、再び歩き出した。
口を半開きにしている自分を置いて。

「どうしましたか？食堂はすぐそこですよ。」

そして何もなかったかのように、自分に向かい言い放った。

……父親、強し。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

「失礼します、ナルミ様をお連れいたしました。」

そう言ってセブルさんが扉を開き、それに続いて自分も中に入った。

中には、正装に着替えたゼノアと、厳つい顔の歴戦の戦士な雰囲気のマッスルなオッサン。
さらには優雅な奥様と、綺麗なドレスに身を包み真っ赤になっているシルバちゃん。

なぜに真っ赤かは謎ではあるが。

「ご苦労。」

風格のある声で厳ついオッサンがセブルさんにねぎらい（？）の言葉をかける。
それに彼はペコリと一礼した後に、こちらですと自分を席に案内し

た。

そして席に座ると、その厳ついオッサンが自分に話しかけた。

「ようこそいらっしゃったナルミ君。急な誘いで悪かった。私は現ランドルフ家の当主、ガルク・ランドルフだ。」

堂々とした、いかにも厳しそうな声である。

なんか怖い。

「こちらこそ、自分のような者をお招きいただき、ありがとうございます。」

とりあえず挨拶。

するとガルクさんは満足そうな表情をした。

なんだ、思ったよか普通の人じゃん。

顔は怖いが。

「こちらは私の妻、リリスだ。」

「はじめまして、気軽に“お義母さん”と呼んでいただいて結構よ。」

ぶっ！

「ちょっ！お母様！」

慌てるシルバちゃんにのほほんとしたリリスさん。

リリスさん、完全に遊んでいるな。

まぁ、空気がなんか和やかになったからよしとしよう。

後ろから殺気は感じるが。

「息子達はもう紹介の必要は無いな。いつも世話になっているようで、感謝している。」

とりあえずガルクさんは二人を無視する方向にしたようだ。

実に賢明である。

「いえ、こちらこそいつもお二人にはご迷惑をかけっぱなしで、むしろ自分が助けて貰っている立場です。」

実際自分よりいろいろできるからね、あの二人は。

何たってエリートだし。

他にも二三言の言葉を交わしているうちに、食事が運ばれてきた。

なんか上品な、おフランスのオードブル的な料理が自分の前に鎮座している。

……これは、このお料理様が自分の庶民的な口に入るのを拒否してもなんら不思議では無いくらいに上品だ。

自分はこのお料理様を食べるにあたいする人間だろうか。

ぱっと見はホタテの貝柱にソースとか色々付いてるだけだが、なんか高級なオーラが出てる。

多分、皿と芸術的なソースのせいだろう。

しばし自分はみんなにそれが配られているのを見ながら私案してい

ると、後ろから

「ムリヌとポピーヌのカムシルでございます。」

と、運んできたメイドさんが料理名をいってきた。

ごめん、何いってるか全くわかんない。

ムリヌとかポピーヌって何?

それでカムシルって料理をつくったのはわかるが、そのカムシルすら自分にはわからない。

見た目はでかめのホタテの貝柱だから、さらに謎は深まるばかりである。

「……いただきます。」

とりあえず、食べてみる。

ナイフとフォークは普通にあるからそこは安心だが、何せ相手はカムシルだ。

ぶっちゃけ謎の料理に挑むのはかなりの勇気が必要である。

そしてホタテにナイフを入れると、中から緑の汁がでてきた。

……

はっ!

一瞬思考が停止していた!

周りを見ると、ゼノア達も皆美味しく汁ごといただいているごようす。

とりあえず、食べれるっぽいので意を決して一口パクリ。

……

「……旨い。」

なんか、トマトにホワイトソースかけたような味がする。
普通に旨い。

ただ見た目と食感がホタテなのはいかがなものか。

「気に入っていただけたかな？」

自分が軽く感動していると、ガルクさんが話しかけてきた。

「はい、自分の国には無い料理ですが、とても美味しいです。」

それに素直に答える自分。
すると嬉しそうに顔を綻ばせるガルクさん。

「それはよかった。家の調理師達も喜ぶだろう。」

やっぱりいい人じゃん、この人。
ゼノアは何を緊張してたんだ？

そしてしばらく、他愛も無い話しをしながらタヌイのガーガルとかリュハとブセムのユユユとかの変な名前の料理を美味しく頂いた。
名前（見た目も多少）は変だが、どれも美味しい料理だった。

そして、ゼノアやシルバちゃんについての話しをしながら、ギムシ

のアウリとか言う真っ白いガンモドキみたいなのを食べていた。
実はガルクさんも結構な親バカだというのが判明した。
そして話しに一段落ついたところで、ガルクさんがこう自分に聞いてきた。
「ところでナルミ君は、現在の魔王様の様子をみてどう思いますかな？」
ん？
あぁ、あの人。
「優しいのはいいですが、甘いところがありますね。」
「ほう…どんなところが？」
「なんと言うか…全体的に。それを王妃様がなんとか補っているというか、主導権は王妃様にありますね。てか押しに弱いです。」
「なんとも…よく見てますな。」
「多分王妃様がいなければ、大変な事になりますよ。」
「…どんな風に？」
「まず自由にやらせすぎなんです。多分王様の性格なら厳しい罰とかはできないと思いますから、自由な上に罰も無いならそりゃあ勝手気ままに動き回りますよ。」
「……」

真剣に自分の話しを聞くガルクさん。
そしてやけに熱く語る自分。

「それに対して王妃様はきちんと分別していますね。悪いなら悪い、いいならいいとはっきり言う事ができますし、実質彼女が抑止力ですから、疎まれるならまずは王妃様でしょうね。」

熱くかたっていると、ガルクさんが重々しく口を開いた。

「…そう、か。」

いつの間にか食堂の空気も重くなってる。
少し考える風にして、ガルクさんは再び続ける。

「君から見たら、この国はそんなに駄目に見えるのか…」

はい、ここで自分は気が付きました。
自分が勘違いから、とんでもないことをのたまっていた事を。

まず自分は、ゼノアとシルバちゃんの話しの延長として、王様のエリザ達に対する接しかたとか育てかたの話しかと思っていた。
対するガルクさんは、王様の今の政治についての事を質問したのである。

そして、子育てについて熱く語っていた自分ば、結果的にこの国を酷評したのだ。

やっべ！
これは怒られりなんてレベルじゃねぇ！

処刑街道まっしぐらじゃん！

「では、どのようにしたら国は君から見てまともになるのかな？」

はっ！

これは最後のチャンスではないか！？

ここで選択肢をミスったら、処刑ＥＮＤに直行だ！

えーと、なんか……なんか…

そだ！

「……しばらく、いまより自由にさせれば良いかと。」

自分の発言に目を丸くするガルクさん。

「それは、なぜだ！？そしたらさらに内部が腐敗した国になるぞ！」

こわっ！

やはりあの二人の恐怖の鬼面はこの人からの遺伝なのか！

「…そしたらどこが腐敗しているか、一目でわかるじゃないですか。あとは油断しきったそいつらをさっくりと…さらにそいつらから罰金として奴らが横領した分以上の財産を押収すれば国の資金としても使えます。」

そう自分が言うと、彼はしばしほうけた顔をした後に、考えこむような顔をした。

そして

「君は、いったい何者だ？軍事だけでなく、政治分野まで精通する

とは…」

いや、ただの思い付きでんがな。

「そんな大層な者では…それにこれには財産を持ったまま亡命されれば大損ですので短期間で決めなければいけません。さらにどれだけいるかもわかりませんし、危険も大きいです。」

「いや、それでもやる価値はある。少なくとも、サザールス家の傘下の者はこれで駆逐できるだろう。」

いや、サザールスって誰よ。

「…とりあえず、これは王様や信用できる方々としっかり話し合って決めて下さい。」

自分はにげた。

ぶっちゃけ全部ガルクさんに丸投げな発言でしめた。

「ああ、貴重な意見をありがとう！感謝する！」

そう言って興奮しながら満面の笑顔を見せるガルクさん。

やはり、あの二人の親だけある。

百面相が半端ない。

「…いえ、それほどでも。」

そしてその笑顔が自分に罪悪感をなげかける。

だって、子育ての話しから派生したでっちあげだもん。

と、自分が一通り罪悪感に虐められていると、ガルクさんは近くのメイドさんに果実酒を要求した。
そして運ばれてきたグラスにはいったそれを軽く煽った。
もはや雰囲気が、ただの夕食になっている気がする。

そしてそれに便乗ってか、メイドさんがみんなに同じものを配ったので、他の人もみんなそれを飲む。

その時自分はなぜかゼノアとシルバちゃんから悲しい目で見られていた。
理由はまったくわからない。

ちなみに自分はもちろん酒は断った。
国の決まりで二十にならない限り酒は飲めないと言って下げてもらった。
だってあんな苦いもの、飲めるはず無いじゃん。

そして、グラスを空にしたガルクさんが自分にこう聞いた。

「そういえば、ナルミ君は単独で魔獣を倒せる程の猛者だという話しだが…」

…まぁ、倒せますがね。
裏技使って。

てかこれは対決フラグでね?
早急に折らねば。

「…対魔獣でなら力を発揮できるだけです。」

つまり人相手には使えないと暗に言う、しかし

「しかも魔獣を倒した後に５０００の軍勢を相手に無傷で勝利した程の力を持っているとも聞く。是非手合わせを願いたい。」

クソッ！
ばれてたか！

仕方が無い、ここは武器を持っていないのを理由に…

「ここにくる途中に伝説の武器を手に入れたともゼノアが言っていたので、それの使い心地を試すためとでも思ってお願いできないか？」

……ゼノアァァァ！

キッとゼノアを自分が睨むと、ゼノアはすまんと目で合図を送ってきた。
多分反応から察するに、睨まれたより見られたという認識しかしてないだろう。

これだからタレ目は嫌なんだ。

「…わかりました、ただあれは魔物を狩るのに使う物ですので別の武器を使用いたします。」

嘘も方便。
あながち間違っちゃいないが、そもそも狩猟笛を対人でつかって勝てるはず無い。

演奏してる間に殺られるのがオチだ。

かくして、自分対ガルクさんの対決が早急に決まった。

あの時のゼノアとシルバちゃんの視線の理由はこれだったのか。

そして、この時自分は誓った。

もう自分の勘は疑わないと。

22回目＊勘違い兄貴と自分の心情変化（前書き）

書き終わって気付いた。

予想以上にながい！

どうりで疲れたはずですね。

22回目＊勘違い兄貴と自分の心情変化

「スマン、父上を止められなかった。」

とりあえず食事を終えた自分は、ゼノアとシルバちゃんと一緒に最初に自分が案内された部屋にいる。

なぜかと言うと、ガルクさんの戦闘準備が整うまでに急遽会議（対ガルク対策会議）を開いたからである。

そして、その時のゼノアの第一声が先の言葉である。

「いや、それはいい。それはいいから可及的速やかにガルクさんの戦闘スタイルを教えてくれ。」

本当は全力でご遠慮願いたいのだが、雰囲気がそれを許さない。

てかここで逃げたら印象最悪だ。

人間（魔族）関係がトゲトゲしているのは自分の性格的に嫌なのだ。

しかも相手は国のお偉いさんだし。

「ああ……まず父上は、大剣を使う。一撃は岩をも粉砕する威力がある。」

もはや化け物じゃねーか。

「お父様の二つ名は“剛腕の鉄騎士”ですからね。大剣から放たれる重い一撃、鉄の如く堅い守り。悪く言えば力技ですが、その圧倒的な力でお父様は数多の戦士を沈めて来ました。」

「だが、父上はあまり魔法は得意では無い。攻撃魔法は中級程度し

か使って来ないはずだ。もっとも、父上の場合肉体強化のほうが遥かに厄介だが。」

「……」

誰その変態。

根っからの戦士タイプじゃん。

てか魔法も中級とか、地味に強そうだし。

「しかもお父様はお酒を少し飲みました。あれは本気で決闘する時のお父様流の儀式です。多分全力でやってきますよ。」

もうやだ。

自分死にたく無いもん。

「…はぁ。ものっ凄い猛者じゃないか。」

「ああ、昔現魔王様と共に世界を回り、数々の修羅場をくぐり抜けてきたと言っていた。並の戦士では無い。」

全く、なんでそんな強い親父が自分なんかに決闘を挑むのか。

自分みたいな若造、相手にしてもしゃーないやん。

でも…ねぇ…

「……なぁ、ガルクさんは本当に真面目に本気で来るんだな?」

腹を括り、いままでの嫌々な雰囲気では無く、まっすぐにゼノアを見据えて質問した。

急に雰囲気が変わった自分に二人は多少戸惑いながらも質問に答えた。

「あ、ああ。それは間違い無い。さっきシルバが言ったように、父上が酒を決闘前に飲むのは父上の本気になる儀式でもある。」

「それにお父様は先生にもお酒を振る舞いました。私達はともかく、相手にもお酒を振る舞うのはその相手に敬意を表している証です。そしてそういう相手には全力で向かわないと失礼に当たるというのがお父様の考えです。」

……やっぱり、ね。

「そう…なら、自分も真面目に本気の全力でやらないと失礼にあたる、かな。」

ガルクさんの考えには大いに共感できる。

全力で向かってくる人には全力でそれに答える。
それが出来ない人間は死ねばいいと自分は思う。
それが自分の信条だ。

その点から言うと、ガルクさんは並の人間より遥かに人間が出来ている。

そして、自分はそれに答えなきゃならないと思う。

「今回は自分、体術だけでいく。魔法紛いの反則技を使わないで、自分も全力で向かえ打つ。」

その言葉を聞いて、驚く二人。

正直、どこまで出来るかは自分にもわからない。
だけど人間は強いらしいから、その補正でなんとかなるだろう。

ぶっちゃけその補正も気に入らないが、それは人間だから仕方が無いと割り切るしかない。

てか、さすがにそれは無ければ自分が死にかねない。

とりあえず、自称神の変態能力だけは使いたく無い。
それはあまりに失礼だからだ。
そう自分が決意していると、驚いたような顔をしながらゼノアが

「反則技って…それもナルミの力だろう。」

…そうだった。
事情を知らない彼らから見ると、あれも自分の能力なのだ。

どうしよう。

「……あれは、とある理由によって手に入れなければならなくなった能力だ。本来の自分にはあんな能力は無い。」

とりあえずごまかしぃ。

しかし、ゼノアは止まらない。

「いや、本気でいくならそれも使うべきであろう。理由が何かは知らないか、それを手に入れたのもナルミの力だろう。」

いや、自分の力ではないし。
無理矢理付けられた合成着色料みたいな付属能力だから。
しかし、それを言う訳にもいかない自分はかなり困っていた。
下手な嘘はつきたくないし、ごまかしもききそうにない。
だが、その状況を救うメサイアが降臨した。
「お兄様！」
この吸血美少女、シルバ様であります。
ただなぜ涙目かは謎だ。
「先生がそう言うならそれでいいんです！先生にも事情があるんです！少しは考えて喋って下さい！！」
そう一気に言うと、シルバちゃんはとうとう涙をポロポロと零してしまった。
そして自分に近付き、自分の手を両手でしっかりと握ってこう言った。
「私は、先生を信じています。何があっても、私は先生の味方でいます。だから全部を一人で背負い込まないで下さい。」
「お、あ、ああ。」
正直、何がなんだかわからない。
なぜにシルバちゃんが涙を流し、こんな事を自分に言うのか。
ゼノアにいたっては自分より状況を把握できていないようで、目を

点にしている。

ぶっちゃけ全く謎である。

と、自分がこの状況について考えていると、不意に扉をノックする音が部屋に響いて、扉が開いた。

「……ナルミ様、準備が整いましたので中庭へ。」

そしてそこにいたのはダンディー紳士ことセブルさん。

彼は自分の今の状況を見て、殺気のナイフをビシバシ自分に投げ付ける。

正直、怖いです。

「…わかりました、今行きます。」

そう言って自分はシルバちゃんから手を解き、セブルさんについて中庭に向かった。

ただいまだに彼からの殺気は消えていない。

ぶっちゃけ、決闘より先にセブルさんに殺されそうです。

～シルバサイド～

ナルミがセブルに連れられて中庭に向かった直後、シルバはゼノアに向かって

「お兄様のバカ！バカバカバカ！お兄様なんか死んじゃえ！！」

強烈に罵声を浴びせていた。

「なんで先生の事を考えないであんな事言うんですか！少しは先生の気持ちを考えて下さい！！」

「ま、待てシルバ！何がどうしてお前がそんなに怒るんだ！？」

泣きながら怒るシルバに戸惑うゼノア。

彼は全く状況を理解出来なかった。

そもそもどこに怒られる要素があったのかがわからないのだ。

「ナルミが力を使ってこそがナルミの全力だろう？ならそれを使わない事の方が変だろう。いままでも使ってたんだし、むしろ使わない方が失礼だろ。」

ゼノアの言葉ももっともである。

いままで使っていた能力を使わない、それは傍目からは手を抜いているように見える。

しかし、次のシルバの反論は予想の遥か上を行くものだった。

「誰かを殺して傷つくような優しい先生が望んであんな力欲しがると思ってるんですか！！先生は私達を護るために自分を犠牲にしてあの力を手に入れたんですよ！？」

「まて、私達を護る！？どういう事だ！？」

そのゼノアの疑問を聞き、はっとなるシルバ。

そう、この事は王妃の近衛隊の三人とシルバしか知らない事なのだ。
それをゼノアが知ってるはずもなく、だからといって教える訳にもいかない。

しばしかんがえた後、シルバは少しぼやけさせて教える事にした。

「先生は…自らの存在を抹消してこの国に来ました。友人や家族からも。そして、この国を救うために平穏な生活を捨てて、望まない力を使い私達を護ってくれているんです。だから、先生がもともとの力だけでお父様に挑もうとするのは当然だと私は思います。」

沈黙。
重い空気が部屋に充満する。

「……それは、本当なのか？」

最初に口を開いたのはゼノアだった。

「はい、本当です。」

「……そう、か。」

そして呟き、力無くその場に佇む。

「俺は、ナルミを傷つけてしまったか……」

確かに強大な力は誰もが憧れるものである。

そして敵を打ち倒し、滅ぼすために奮われる。
普通の者ならばそれに魅了され、自らを失いかねない。

しかし、ナルミは違う。
赤の他人を護るため、自らの生活を捨ててまで手に入れた望まない力。
自らの本来の能力を遥かに凌駕する強大な力を手に入れたナルミは、いつもそれを護るために使っていた。

それをゼノアはあろうことか、決闘で自分の力として使うように言ったのだ。

彼は自らを嫌悪した。
今まで本当のナルミの姿ではなく、ナルミが持つ望まない力しか見ていなかった自分を。
そして、それなのにナルミと友達面していた自分に対する怒りの感情が込み上げてきた。

「大丈夫ですよ。」

落胆する彼の肩に手を置いたのは、自らの間違いを気付かせてくれた妹である。

「先生は優しい方です。きちんと謝ったらきっと許してくれるはずです。」

彼女の言葉は優しく、何よりナルミを信じていた。

「そう…か。」

「はい。ではお兄様、もう行きましょう。もうはじまっているはずです。」

そう言ってゼノアの手を引くシルバ。

心からナルミを信頼しているシルバの姿を見てゼノアはこれからの自分の在り方を正さねばならないと心に固く誓った。

「あ、お兄様。さっきの先生の過去の話し、ご内密にお願いしますね。先生にも、私が言った事は言わないでください。」

「ああ、わかった。」

そして自分の妹が、ナルミにそこまで秘密を打ち明けられる程に信頼されていると思い、なんだか誇らしくなっていた。

まぁ、現実は犯罪による盗み聞きの情報なのだが…

知らぬが仏である。

二人が中庭へと着いた時、そこには彼らの知っている中庭は無かった。

大地は粉砕されて土がめくれあがっていて、綺麗に整えられていたはずの草花は、乱雑に切り刻まれていた。

そして、その中心でなおも戦う戦士(かいぶつ)が二人。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

「はぁ、はぁ、はぁ…こんの！」

ガキィィン！

「チィィ！ぬおりゃぁ！！」

ドゴォォン！！

速さで翻弄するナルミと力で捩伏せようとするガルク、その二人である。

ガルクは燃えるように真っ赤な鎧を着ている
フルフェイスの兜で顔は全く見えないが、それでも威圧感はたっぷり伝わってくる。
これは彼が昔使って数多の戦地を乗り越えてきた鎧である。

対してナルミは、不思議な作りの上着の下に見た事も無い魔法陣の書かれた服を着ている。
下は鮮やかな藍色の見事な生地で仕立てられたズボンを穿いている。
どれも見る目がある者が見れば、特別な加護のある装備だろうと一目でわかる代物だ。

「……お母様、これはいったいどうなって…」

数秒の間呆然としていたシルバたが、なんとか覚醒して近くにいたリリスに状況の説明を求める。
同時に復活したゼノアもその答えを聞こうと近寄ってきた。

「あらあら、遅かったわね。そうね、どう、と言われてもこうなっ

ているとしか言えないわね。とりあえず、始まって5分たったころにはもうこんな感じになってたわ。」

ガルクがあんなに苦戦する所も初めてみるわ、といまだにのほほんとした顔を崩さずに話すリリス。
その間もなお、戦いは続いている。

「せぇい！」

掛け声と共に放たれた袈裟切りを紙一重でかわしたナルミ。
その一撃がまた、大地をえぐる。

ドガシャァ！！

「あぶなっ！…とりゃ！」

そう言いながら懐へと一気に詰め寄り切り込むナルミ。

ガシュ！！

しかし、それに即座に反応したガルクは、ナルミの攻撃を兜で受け止める。

「マジかよ！！なわっ！」

そしてすかさずナルミに切り掛かる。
それに合わせて一旦距離をとったナルミは、再び目にも留まらぬ速さでガルクの死角に回り込もうとする。

そんな感じの攻防がさっきから続いている。

ぶっちゃけ、この戦いを見世物にしたらかなりの額を稼げるだろう。
それくらい凄い戦いなのだ。

しばらく彼らは二人のやり取りを見ていたが、ふと思い出したようにリリスがシルバに質問した。

「そう言えば、ナルミさんは、“能力は本当の自分の力では無いから使いません。”って言っていたけど、ナルミさんの能力って何なのかしら?ガルクは呪われた力とか、なにか止むおえない事情があるんだろうって言っていたけど。」

非常に答えにくい質問である。
正直に話す訳にもいかず、だからと言って適当な嘘を言う訳にもいかない。

そうシルバが困っているときそれはおこった。

「しかし君が使わないでいる能力を使えばもっと強いのだろう?なぜ使わないのかはわからないが、相当強力だと聞いている。」

ガルクがナルミに質問した。

それに対し、ナルミはゆっくりと、だがしっかりと答えはじめた。

「ええ、確かにあれは強いです…ですが、さっきも言ったようにあれは自分の本来の力では無い。」

そして一旦静かに息を吐き、そして

「だから自分はそんなまがい物を使わずにあなたに挑みたい！それが自分の筋の通し方、けじめのつけ方だ！！」

こう叫びながらナルミはガルクに突っ込んだ。
それを好機と見たガルクは、ナルミに向かい大剣を振り下ろした。

誰もがナルミの負けをその時に悟った。

しかし、虚無の黒騎士はそんな予想を見事に裏切った。

「うるぁぁ！」

スバァァン！！

「どぅぁぁ！？」

ズシャァァ！！

その場にいた者全てが見た物、それは軽快な音の後回転しながら宙を舞う、かつて猛将と呼ばれたランドルフ家当主の巨体だった。

～ナルミサイド～

素直に言おう、きついです。

何たって、ガルクさんの放つ一撃が重すぎるのだ。
最初の攻撃をかわしてわかった。

あれを受け止めたら死ねる。

なので自分は持ち前の素早さを生かしてヒット＆ａｍｐ；ウェイ戦法をとる事を即座に決定した。

何を隠そう自分、足だけは速いのだ。

自分の学校の体育の授業、男女別に２クラス合同（１クラス２０人）でやるのだが、前回の１００メートル走で見事１２位に輝いた程だ。

……ええ、わかってますよビミョーだってのは。

とりあえず、人間補正で変態的に身体能力、及び動態視力や反射神経が向上した自分は、あの生きる破砕機の攻撃圏外から向上した速さをフルに使って潜り込んでちまちまやっている。

ぶっちゃけ、補正無かったらすでに２０回は死ねてる。

まぁとりあえず、ちまちまやっている。

いるのだが……

「はぁ、はぁ、はぁ…こんの！」

ガキィィン！

「チィィ！ぬおりゃぁ！！」

ドゴォォン！！

守り堅すぎこのオッサン。

エクス○ス道場主様よりも堅いんでないか？

いや、確かに喧嘩すら満足にしたこと無い自分が速さメインの戦法をつかった結果、そっちに意識が行き過ぎて攻撃力がスラ〇ム並になってるのもあるが、それにしたってだよ？

「ふー、ふー……なかなかやるなぁ、さすがは英雄といった所か。」

自分が悩んでいると、ガルクさんが話しかけてきた。
だが全く隙が無いように見える。
いや、素人だからわからないが。

「んな大層な生き物じゃ無いですよ、自分は。何せただの一般市民だったので。」

構えながら答える自分。
だがやはりこれもアニメや漫画で見た構えを真似するだけで、本物では無い。

「そうか…確かに君の動きは武術と言うより喧嘩に近いな。」

そう、彼が言うように自分がやってるのは素人の喧嘩みたいなものだ。
型もクソも無い。

ただ人間補正に物を言わせて動くだけ。
そう考えると激しく自己嫌悪に陥る。

そして、さらに自分を自己嫌悪の海に突き落とす要因がもうひとつある。
それは

「しかし君が使わないでいる能力を使えばもっと強いのだろう？なぜ使わないのかはわからないが、相当強力だと聞いている。」

そう、それである。

自分はあの自称・神が自分に変態能力を付けてここに理不尽にも飛ばし、強制ミッションを課した事にいつも文句を言っていた。

しかし、自分はその神が自分に与えた能力に頼り過ぎていた事をガルクさんとの戦いで思い知ったのだ。

考えてみると、この世界に来てからなにかにつけて神の与えた能力や物を使っていた。

戦争での戦いや潜入、皆との会話や荷物の持ち運び。

果ては料理にすら奴がくれた本に頼っていた。

今の戦いだって、一護《貰ったもの》を使ってぎりぎり持ちこたえている。

なんだかんだ文句を言っていたが、これでは自分は奴に文句を言う資格すら無いのだ。

自分は奴によって生かされているみたいなものだから。

そして自分は今までそれに甘え、それを自分の力だと錯覚して酔っていたのだ。

それに気がつかせてくれたガルクさんには感謝してもしきれない。

「ええ、確かにあれは強いです…」

だから

「ですが、さっきも言ったようにあれは自分の本来の力では無い。」

だから自分は

「だから自分はそんなまがい物を使わずにあなたに挑みたい！それが自分の筋の通し方、けじめのつけ方だ！！」

ガルクさんとの戦いで、今までの自分から決別したいんだ！！

自分は叫ぶと同時に駆け出した。
ガルクさんへの宣言で腹は括れた。
策も何も無い、だが自分は真っ直ぐガルクさんへ向かっていかなければいけないのだ。

そうしなければ、自分は何も変わらない。
そんな気がするのだ。

向かって来る自分をぎりぎりまで引き付け、剣を振り下ろすガルクさんの姿が視界にうつる。

その瞬間、やけにゆっくりと時間が流れるように感じてきた。
自分もガルクさんも、周りの人達も全部、まるで自分だけ時の流れに乗り遅れたように感じるのだ。

そして、自分に剣が届く寸前、自分ははたと閃いた。

そして、自分は思考を放棄し、身体の動きを感覚だけに委ねた。

身体は剣をかわすように屈み、しかし真っ直ぐに突き進んで行く。

そして、居合の恰好をとり、一閃を放つ

「うるぁぁ！」

スバァァン！！

「どぅぁぁ！？」

ズシャァァ！！

まともに食らったガルクさんは、前方に一回転しながら頭から落ちていった。

何をしたかと言うと、ガルクさんの軸足を力の限り後ろへと払ったのだ。

前方へ巨大な剣ごと体重を乗せていたガルクさんは、まともにくらいそのまま回転してしまったという訳である。

正直、タイミングが少しズレてたら自分の頭が砕けたスイカになっていただろう。

ドサッ

あれ？

立てない。

やべ、膝が笑いまくってる。

来年の話しをした時の鬼すらもここまで笑うまいってほどガクガクしてる。

やっぱり、かなり緊張してたんだな。

自分がなんとかして立ち上がろうとしていると、シルバちゃんがドレスを邪魔そうにしながら走ってきた。

「先生！大丈夫ですか！？」

「大丈夫、緊張がとけて膝が笑ってるだけだから。てか君はガルクさんの所に行かないでいいの？」

普通そこはまず他人よか家族の心配だべ。

「お父様は大丈夫です。お父様より先生の方が心配です。」

事もなげにそう答えるシルバちゃん。

哀れ、ガルクさん。

そしてシルバちゃんはぶつぶつ何かを唱えると、両手に青い光が灯り、そのまま自分の膝に手をあてた。

すると、さっきまで震度7だった膝の揺れが、みるみるうちに収まった。

心なしか気持ちいい。

「回復魔法をかけました、もう大丈夫なはずです。」

魔法すげー。

やっぱり回復魔法はファンタジーには必須だよな。

「ありがとう、シルバちゃん。」

立ち上がるながら自分は、しゃがんでいるシルバちゃんの頭を撫でて御礼を言った。
やっぱりこの娘の頭は撫でやすい。

「あ、あぅ…い、いえ……はうぅ…」

すると、みるみるうちに真っ赤になっていくシルバちゃん。

うーん、やっぱり恥ずかしいか、自分なんかに撫でられると。

てか、セブルさん。
怖いから、そんな睨まんといて。

とりあえず回復した自分は、まだ寝ているガルクさんの所へと向かい歩いた。
彼の周りにはゼノアとリリスさんがいる。

「ガルクさん、大丈夫ですか？」

いまだに大の字で転がっているガルクさんを見て、もしや首の骨が逝ったかと心配していると

「ああ、大丈夫だ。さっきまで気絶していたがな。」

鎧から返事がきた。
そしてゆっくり上半身を起こし、その場に座った。

「いやぁ、負けたなぁこれは。」

何を言うこの人は。

「負けたなんて、自分もあのあとすぐに膝が笑って動けなくなったんですよ？」

「いや、それは緊張がとけたからだろう。それに比べ、俺は君に気絶させられた。誰が見ても俺の負けだ。」

むう…そうなるのか？

「しかし全く、あれは一体何がおこったんだ？さっぱりわからん。」

「あれはただ足を払っただけです。ガルクさんが前に体重をかけていたのでうまくいきました。」

「じゃあなにか。俺の力を利用したって訳か？」

「はい。柔をもって剛を制すです。」

「ほう、おもしろい言葉だな…ふむ、気に入った。」

何を気に入ったかは知らないが、とりあえず元気そうだ。
よかったよかった。

「ガルクさん。」

「ん？なんだ？」

とりあえず、終わったのだ。
となると、最後に礼儀としてやっておかねば。

「ありがとうございました。」

そう言って頭を下げる自分。

体育で習った柔道の礼儀作法がこんな所で役に立つとは。

そして頭を上げると、目を見張っているゼノアが。

ガルクさんは兜で表情はわからないが、それでは驚いているのはわかる。

ただリリスさんはまだのほほんフェイスを貫いている。

ある意味彼女が1番ポーカーフェイスかも知れない。

とりあえずなんで驚いてるかわからない自分は素直に質問してみる事にした。

「……何故にみんなして驚いとるん？」

「いや、勝った方が負けた方に頭を下げるなど…むしろそっちの方が信じがたい。」

ゼノアの発言で納得した。

あーそーゆー事ですか。

「試合をした相手に敬意を払う。これが日本人の正しい在り方だ。」

……すんません。

カッコつけて言ってみたけど、自分そこまで考えていません。

全部体育教師の受け売りです。

まぁ本心は別にあるのだが。

しかし、それを知らない彼らはそれを信じこんでしまった。

「そうか…やはりニホンという国はよほど素晴らしい国なんだな。」

いや、最近はそでもねーよ。

まぁそれはおいといて。

「それは別に、そもそもガルクさんには今回大切な事に気付かせていただきました。感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。」

そう言って再び頭を下げる自分。

何せ今までの自分を変えるきっかけをくれた人だ。

もはや心の師匠と言っても過言では無い。

そして、当のガルクさんはと言うと

「え?あ、いや、よくわからないが役に立ててよかった。」

少々困惑気味である。

まぁ、理由を知らないから当然か。

そして、自分がガルクさんとの会話を終えるとゼノアが。

「ナルミ、さっきはすまなかった。ごめん。」

謝ってきた。

多分シルバちゃんがあのあとなんかゼノアに言ったんだろう。
何かわ自分もわからんが。

「いや、気にしてない。大丈夫だ。」

気にはなる、だが薮を突いてキングコブラを出したく無いので詮索はしないどく。

しかし疲れた。
普段不真面目な自分が珍しくマジでかかったんだ、身体が悲鳴どころか、そろそろ断末魔をあげそうである。

自分が首をコキコキしてると、立ち上がったガルクさんが兜をとりながらこう申し出た

「よかったらこのまま泊まっていかないか？君も疲れただろうし、なによりもう真っ暗だ。」

う～ん。
確かにそれもありかな？
なにより疲れたし、自分を変えるって決意した直後に能力使って帰るとか本末転倒だし。

「迷惑では無いですか？」

でも一応聞いてみる。
これ、日本人の美徳。

そして自分の質問に答えようと口を開けかけたガルクさんを遮り、代わりに答える少女が一人。

「迷惑じゃ無いです！むしろ先生なら…あの……えと…泊まって…下さい。」

だんだんしたを向いて声が小さくなってくシルバちゃん。
もじもじしてる指とか真っ赤な顔とか、可愛すぎる。

そして、シルバちゃんに台詞を取られたガルクさんは苦笑しながら

「シルバもこう言ってるし、泊まっていってくれないか？」

と、言ってくれた。
それなら。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。」

そう言って自分は再び心の師匠に頭を下げた。
するとガルクさんは複雑な表情をしながらセブルさんを呼び寄せた。

「セブル、彼を客室に案内してくれ。」

「かしこまりました。ではナルミ様、こちらへ。」

そう言って自分を案内するセブルさん。
表情はにこやかだが、だがオーラは暗黒に染まっている。

自分、寝てる間に暗殺されないよね？

～ガルクサイド～

ナルミがセブルに連れられた後に、それに続くようにゼノアとシルバも屋敷に戻っていった。

残ったのはガルクとリリスだけである。

「あー、まだいてー。」

「あれだけ派手にやられれば当然ですわね。」

首をぐるぐる回しているガルクと、にこにこのほほんとしているリリス。

二人は屋敷を見ながら感慨深く考えていた。

「しかし、彼がシルバと結ばれれば、私の息子になるのか…」

「あら、何か気になる事でも？むしろ私は大歓迎ですわ。」

「いや、それは俺も大歓迎だ。ただ、シルバがあそこまで惚れるとはと思ってな。」

「ゼノアいわく、1番のきっかけはなんでも身を挺してナルミさんがシルバを護ってくれたとか。少なくとも、シルバの目に間違いはなかったという訳ですね。」

「ああ、最初はどんな奴かと思ったが、頭も切れる上に俺を倒す程の力量も持つとは、あの若さで、末恐ろしい奴だ。」

クックックと笑うガルク。

そんな旦那の姿を見ながら、リリスは疑問をぶつけてみる。

「そういえばガルク、あなたはなんで魔法を使わなかったの？」

そう、ガルクはナルミとの戦闘中、魔法を使っていなかったのだ。
リリスの質問に対して、ばつが悪そうにガルクがしゃべる。

「あー、いや、使う隙がなかったってか肉体強化に集中してたってか……」

「つまり修練不足ですわね。」

歯に衣を着せるどころか、牙を研ぎ澄ました一言をガルクに放つ。

「う！……まぁ、そう言う事…になるか。」

ガルクのその言葉を聞き、目を光らせるリリス。
だがこの時も、のほほんとした表情は崩さない。

「ではこれからしばらくは特別な特訓をしましょうか。」

「ま、まて！そんないきなり！！」

「普段から魔法の修練を疎かにしてるから負けたのですよ。」

一言一言に刺がある。
そして彼女のそんな言葉を聞き、逃げようとするガルク。

「それにナルミさんみたいにこれからはもっと頭も使わなければいけませんよ。筋肉馬鹿の時代は終わったのです。」

しかし、逃げようとするガルクに即座に魔法を当てて動きを止めるリリス。

「だから私が魔法から何からみっっっちり教えてあげますからね。」

「ひぃぃぃぃ！」

かつて各地を回っていた現魔王とその仲間達。
その仲間の一人、剛腕の鉄騎士ガルクは同じくかつての仲間、破滅の魔術師リリスと結婚して今の地位にいる。

傍目からは二人は、亭主関白に見えるが実はそうでは無い。
実際はリリスがガルクを溺愛するあまり、ガルクになんでも1番になってもらわないと気が済まないのだ。
そしてつねに主導権を握られているガルクは、たびたびこんな目にあってボロボロになってしまうのだ。

「では、早速書庫へと向かいましょう。」

「今から！？いますぐはじめるのか！？」

「当然です。」

こののほほんとした悪魔を見ながら、ガルクは考えるのである。

シルバもリリスが自分にやるみたいにナルミを扱いませんように、と。

22回目＊勘違い兄貴と自分の心情変化（後書き）

今回も強引な場面はありますが、力量が足らないという事で見逃してください。

これからもっと精進します。

23回目＊神と初恋と電脳歌姫

「つ、疲れた……」

自分は案内された部屋に入ると、早速ベッドへぱたんきゅ～した。
下手な連鎖やフィーバーをくらうよりもひどい目にあったので、当然といえば当然である。
そして、さすがは貴族なふかふかベッドは、自分を深い眠りに誘うように身体を包み込む。

そして、とうとう自分が夢のワンダーワールドへとダイブしようとしていたその時。

『やほー、げんきー？』

いやぁ、相当疲れてるようだな、自分。
幻聴が聞こえる。

『幻聴で無いよ。私こと神様のありがたいお告げだよ。』

……むしろこれは憑かれてるのか？

『まぁある意味憑かれているね。』

だよねー。
じゃ、おやすみー。

『マテ。』

チッ！
なんだよ、いきなり。
自分は眠いんだ。

『んー、何っていうと、警告ってかお知らせ的な？』

は？
何の。

『能力の暴走について。』

……暴走、すんの？

『暴走したの。』

……いつ。

『さっき。最後の最後に能力が暴走して、その結果時間の流れを遅くしたの。まぁ他にも色々あるけど。』

まじか…
自分の力だけでやってたつもりだったのに…

……てかそれがマジならヤバイんでないか？
勝手に能力が制御不能になって、ハルマゲドンを引き起こしたりしないよね？

『うん、多分それは無い。直接の原因が君の心だし、それを君が望まない限りは大丈夫。』

その原因って何さ。
そして直接って事は、間接的な原因が他にもあるんだな?

『ん。まずは直接な原因だけど、君が妙に熱血漢になった結果、それに応じて魂が勝手に“君の能力”として私が君の魂に張っつけた能力を使ってしまったの。』

……どゆこと?

『つまり、あの能力はもう君の魂と混ざり合って、君の一部になっちゃったの。そして、君が自分の力だけであのおじさんに挑むと決意した結果、魂がその決意を汲み取り、君の一部になってしまった“君の能力”を無意識に解放しちゃった訳。』

まじでか…
もはや魂までも改造されてたとは…

『ちなみに言うと、能力は魂にくっついてる物だから、君の身体でどんなに幻想をぶち壊しても、封魔の刻印を身体に付けられても無くなる事はありません。』

そうですか…
なんか自分、どんどん人間から離れてってる気がするのは気のせいですか?

『いや、君はどこまで行っても人間だから。てか人間やめたらあと上には神様しかいないよ?』

…魔族では無いの?

『格的には、魔族＜＜＜越えれない壁＜＜＜人間＜下位の神様＜＜
上位の神様くらいの差があります。』

……神様って、安いんだな。

『違うよ、人間が規格外なだけ。』

……もういいよ。
で、間接的な原因は？

『ムリヌ。』

ナニソレ？

『君が最初に食べた料理の材料。あれ、人間にとっては結構な薬になっちゃうキノコなんだよね。』

ムリヌ……ムリヌ…

あ！
カムシルとか言う料理のか！

『そ、で、それはよく言えば強壮剤、悪く言えば精神が高ぶるお薬。』

…で？

『柄にも無く君の異常な熱血漢になっちゃった原因。てかフツーに考えて、いつもユルユルな君が例えあのオッサンの考えに共感したとしてもあそこまで覚悟を決めるなんてある？無いしょ。』

……はい。
無いです。
冷静になってみると、あの自分は異常でした。

『まぁ人間としちゃあの姿が一番正しいか知らないけど。とりあえず、だいたいの毒物とかは君には効かないけど、魔族には毒物では無い物が毒だったりすることがあるから気をつけてね。詳しくは地球料理大全にて。君が真面目に見るとは思わないけど。』

…なんか、怒ってない？
さっきからいちいち言葉に刺があるよ。

『……ねぇ、君はわざと彼女の気持ちに気がつかないふりをしているの？』

ん？
彼女？
誰？

『シルバちゃんだよ、あの純情乙女。』

あぁ…
彼女は優しいよね。
こんな自分にもフツーに接してくれるんだし。

『…締め殺すよ？いくらなんでもそれは無いしょ！神様でなく、一人の女として言うけど！本当は私が言うのも間違ってるかも知れないけど！彼女は君にベタ惚れだよ！？フツーあそこまでわかりやすい反応されたら気が付くしょ！ましてや盛りのついたオスならフツ

ー！』

盛りのついたオスって…

てか、お前こそわかって無いよ。
あーゆー女の子は、本心を隠して、猫を被って生きているのさ。

自分みたいな弱者を騙してからかうために。

『……何か、あったの？』

仮にも神様なら知ってるんでないの？
こーやって直接頭に話しかけてんだ、自分の記憶を読み取るなんて造作も無いべ。

『いや、出来るけども……それはやっぱり、外道の所業っていうか、さすがにかわいそうだし……』

ああ、つまり知らないと。
いいよ、教えてあげるよ。

自分の悲惨な初恋を。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

中学二年の話しである。
季節は９月、学校祭を二週間後に控えた頃だ。

別に学校祭つっても漫画みたいな派手なのでは無く、事前に面白くも無い保護者用の展示品をクラスでつくって展示したり、当日に全校生徒の前で合唱したりのしょぼいものだ。

さらに当日は、体育館に全校生徒を椅子を持たせて押し込め、指定の位置に座らしたらあとは合唱が終わるまで立っちゃだめっていう鬼畜ぶり。

正直、フツーの授業のが楽である。

そして、その日もありがたい担任教師達のご厚意により、５時間の授業を終えた後に５時まで全員強制合唱練習＆展示品製作をかせられたのである。

こんな性格だから４５になっても売れ残るんだ。

そして当然売れ残りの教え子である自分もその被害にあっている訳で、ただいま絶賛作業中である。

自分の担当は、なんか馬鹿でかい模造紙みたいなのに歴代の画家の絵を写すと言うレプリカって言う物である。
ちなみに作品は叫びである。
ムンクさんのあれである。

「……ねむ。」

到底やる意味を見出だせ無い作業を進める気にもなれず、しかし根は真面目な自分は眠い目を擦りながら叫びを模造紙に鉛筆で写していた。

ちなみに一人で。
他のメンバーは、男子は四分の三は紙飛行機を飛ばして遊んでいて、女子はみんな合唱のパート練習のため一時間前からいない。女子がいないからこそ、彼らは遊んでいられるのだ。
そして、しばらくすると女子がゾロゾロと帰ってきた。
「あ！こら男子！ちゃんと仕事しなさい！」
「うわ！マルオが帰ってきた！」
「私はあんなぐるぐる眼鏡なんかしないわよ！！それに委員長ですら無いわよ！！」
もはやお約束の男女戦争である。
だが、自分は真面目に仕事していたので怒られる筋合いは無い。なので一人黙々と作業をしていた。
すると、隣からいきなり声がした。
「わ！長谷川君一人でここまで進めたの！？凄い！」
そこにいたのは、同じレプリカのチームである……名前は勘弁。傷が痛むから花子にさせて。
黒い髪が綺麗なかわいらしい女の子だ。
「私達、男子はみんなサボって全然作業が進んで無いと思ってたけど、長谷川君はいい子だね。よしよし。」

そう言って彼女は自分の頭をクシャクシャと優しくなでた。

「い、いや。そんな大層なことは自分、やってないよ。」

彼女はそういったスキンシップをよく女子とやっていたのを見ていたので、そーいう娘っていうのは知っていたが、やはり自分も思春期真っ只中のオトコノコである。

いきなりこんな事をされては、意識するなというのも無理な話しである。

「あ、長谷川君照れてる。顔朱い～。意外！かわいい！」

そう言って自分に輝かしい笑顔を見せる花子さん。

まだ中学生で、恋愛なんぞ全く知らなかった自分だが、少なくともこの時は、自分の鼓動が早くなるのを感じてそれを悟った。

自分はこの娘に恋をしたのだ、と。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

その日から彼女は、自分に結構話しかけてくれたり、手伝ったりしてくれるようになった。

そして、そうやって彼女と会話して、一緒に過ごしているうちに、さらに彼女に引かれていった。

さらに、彼女は彼女で自分を意識していて、自分達は相思相愛なの

ではと自分は感じていた。
自惚れでは無い自信があった。
何たって

「は、長谷川君…」

「ん？何花子さん。」

「あ、あのさ……そ、そう！西尾くんと最初どうやって知り合ったの！？」

こんな事を二人っきりの時に顔を赤らめて、まるで恥ずかしいからいきなり話題を急転換するように話されたら誰だって勘違いするだろう。

ちなみに西尾とは、自分の当時の友達だ。
今は自分の学校よりレベルの低い学校にいっている。
ちなみにバドミントン部。

とりあえず、こんな感じのやり取りを繰り返すうちに、自分は先程述べたように、相思相愛だと思っていたのだ。

そして、自分は学校祭前日に、一念発起して告白する事にしたのだ。
放課後、彼女と作業の片付けをした後に二人きりになる時を見計らってそれを実行した。

「は、花子さん！」

「ん？何、長谷川君？」

少しの沈黙。

そして、自分は意を決して

「あなたが好きです！付き合って下さい！」

告白した。

普段ヘタレな自分が告白できたのには、相思相愛だと言う確信をもっていたのが大きい。

したがって、緊張しながらもいい返事がくると自分は思っていた。

が、しかし

「え……、あ、あー……その……長谷川君とは…その…友達以上にはなれないっていうか……ごめんなさい。」

「へ！？」

彼女いわく、他に好きな人がいるだとか。

彼女いわく、それは我が友、西尾だとか。

彼女いわく、西尾に近付くために自分を利用しただとか。

彼女いわく、もう三日前から付き合っているだとか。

「あー……少し、優しくしすぎちゃったかな…なんていうか……悪いけど長谷川君は私の恋愛対象に最初からなかったの……大丈夫、長谷川ならもっといい人みつかるって！」

そう言ってそそくさとかばんを掴み、教室を出る花子さん。

しかし、走る方向は玄関では無く体育館の方向である。
体育館は、学校祭当日には合唱にしか使わないので、普通に部活が行われている。

そしてその部活はきっとバドミントン部なのだろう。

つまり、自分はいいように使われたのだ。

この時自分は心に誓った。

もう女の子なんか信じるもんか、と。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

これが自分の初恋だ。

どうだ、悲惨だろう。

ちなみに二次元の世界に浸るようになった原因もこれだ。
二次元は自分を裏切らない。

『……ごめん、こんな事聞いて。』

ふん、なら帰れ。
もう自分は寝る！

涙で枕を濡らしながら眠るんだ！

『いや待ってよ。たしかに花子はひどいけど、シルバちゃんは君を確かに愛してるよ!?』

うるさいうるさいうるさいうるさい。

『いや、でも、彼女と花子を一緒にするのはあまりに失礼だよ。』

……

『確かにトラウマはわかるけど、彼女の気持ちも考えてあげなよ。』

……

『彼女は君を信じて、本気で君に恋してるんだよ?それを……あれ?』

……くー、くー……

『……』

「思い出香る胃腸の奥に深く刻まれたこれまた思い出♪」

のうわぁっ!

「電話番号変えちゃって伝わらなかった二桁目の左♪」

なんだ!?

なぜにミク様が!

…ここかぁ!!

自分はポケットから携帯を取り出した。
画面にはまたもや“みらくるごっど”の文字が踊っている。

ピッ

「何いきなりさらしとくれとんじゃあ！」

『うっさい、人が話してるの無視して寝るから悪い。』

「それこそうるさい。それに女神はゴッドでなくゴッデスだ。電子辞書で調べたから間違い無い。」

『う……知らない！そんなの知らない！』

「そうか、なら自分は寝る。」

『待ってよ！起こした意味無いじゃない。』

「うるさいなぁ…」

『むぅ…こんな二次元の存在しない女の子の歌の何がいいんだか…せっかくかわいい女の子が近くにいるのに。』

「黙れ。ミクたんは自分の嫁だ。馬鹿にするな。」

『……ルカあたりに踏まれたらいいのに。』

「いや、ルカ様は怖いからや。ついでにメイコさんとハクちゃんは酒を大量に飲みそうだから嫌。」

『……』

「さらに言うと、テトさんはさすがに三十路越えだし、リンちゃんはちっさすぎだから二人とも年齢的に無理。」

『……ロードローラーで潰されればいいのに。』

「だが断る。」

『もういい、君なんか知らない。私はもう帰る。』

「おー、帰れ帰れ。オーバー。」

『……オーバー。』

プツッ！ツーツー…

……何がなんでもオーバーは言うんだ。

まぁいい、さて寝るか。

そう自分が思いながら携帯をポケットにしまい自分は再びベッドへ潜りこもうとした。

すると、その時

ギィィィ

扉が開いた。

そして、そこにいたのは

「…グズッ……せん、せえ……」

目を真っ赤に泣き腫らしたシルバちゃんである。

…何があった。

～シルバサイド～

その時私は先生のいる部屋の前にいました。

理由は簡単、お母様が私に

『シルバ、ナルミさんを襲っちゃいなさい。既成事実を作ってしまえば幸せはもうあなたのものよ。』

こう教えてくれたのです。

私の先生への恋を知られていたのにも驚きましたが、それよりもお母様が私の味方だと言う事実が嬉しくてたまりませんでした。

ちなみに、その時お父様がため息をつきながら遠い目をしていたのはなぜでしょうか？

とりあえず、私には襲うって言うのがどういう意味かはよくわかりませんが、先生と寝ればいいらしいのでそのために私は今ここにいます。

ですが、いきなり一緒に寝ると思うと、緊張しすぎて踏ん切りがつ

かず、さっきから部屋の前でうろうろしているのです。
そして、その後もしばらく扉の前でうろうろしていると

「%◎£&'≠＝♂※〒∠∃∀¥♪」

「！！？」

「%＃&＊@§☆¥¢$℃＾∩↓〒※♪」

先生のいる部屋の中から、聞いた事も無い言語の歌が鳴り響きました。
多分、先生の国の歌だと思います。

あまりに急に、しかもありえない程に大音量だったので、心臓が飛び出るかと思う程にびっくりしました。
そして、恐る恐る扉を開き、中の様子を見てみると

「何いきなりさらしとくれとんじゃあ！」

謎の赤い少し曲がった板を耳にあてて怒っている先生がいました。

「それこそうるさい。それに女神はゴッドでなくゴッデスだ。電子辞書で調べたから間違い無い。」

どうやら念話用の魔石と同じようなものらしいです。
ただ、相手の話しは聞き取れません。

「そうか、なら自分は寝る。……うるさいなぁ…」

何かうんざりしたように先生は答えています。

きっと先生の国の関係者か、はたまた協力者とかだろうと高をくくっていました。

この時までは

「黙れ。ミクたんは自分の嫁だ。馬鹿にするな。」

今、なんて……

先生の嫁？

先生は既婚者？

ミクタンって……誰？

「いや、ルカ様は怖いからや。ついでにメイコさんとハクちゃんは酒を大量に飲みそうだから嫌。」

また、知らない女性の名前。

これは、先生のお嫁さん候補の方々ですか？

「さらに言うと、テトさんはさすがに三十路越えだし、リンちゃんはちっさすぎだから二人とも年齢的に無理。」

私は？

私は先生のお嫁さん候補として名前は入っているんですか？

確かに出会ってからあまり間は無いですが、その間に出来る限り勇気を振り絞って先生にいい印象を残して貰えるように、先生に振り向いて貰えるように頑張ってきたんですよ？

「だが断る。」

……とうとう私の名前は呼ばれませんでした。
なぜダメかの理由も無く、候補にすら上がっていない。

私は泣きました。
涙が止まらなくなって、しかし、声を殺して崩れるように泣いていました。

「おー、帰れ帰れ。オーバー。」

先生はそう言うと、板を折って小さくしまいました。
そして、再び寝るためにモゾモゾと寝る準備をはじめたのです。

私はと言うと、半分開いた扉の前でいまだに泣いていました。
そして、少しよろけて扉にぶつかってしまいました。

ギィィィ

するともちろん閉まっていない扉は、そのまま音をたてて開いてしまったのです。
そして、それに気付いた先生と私は目が合ってしまいました。

「…グズッ……せん、せえ……」

「あー…大丈夫？」

泣いている私に優しく声をかけてくる先生。

先生のせいで泣いているのに。

先生に気持ちを気付いて貰えずに泣いているのに。
それを知らずに、当然のように私に優しさをくれる先生。
私はいつもより優しく、愛おしく感じていました。
そして同時にこの時私は、こう思ってしまいました。
先生を誰にも渡したく無い、と。

「…なんでないでぶぁっ！」

私は、先生が話しているのを遮るように先生に体当たりをし、馬乗りになりました。
そして、先生の襟を掴み、私は先生を問い質した。

「先生は、既婚者なんですか？」

「は？」

先生は一瞬何をいわれたかわからないと言う顔をしたが、すぐに理解し、それを否定した。

「いや、まだ結婚なんてしてない。」

「なら、これからさっき言っていた女性と結婚するんですか！？」

今度は困惑の表情をする先生。
その顔を見て、私は自分の制御が効かなくなった。

「なんでですか!?私は嫌です!先生が誰かに取られるなんて私は嫌です!」

先生を激しく揺さぶって、私は叫び続けた。

「私は先生が好きなんです!!先生は私を見ていて下さい!私だけを!」

「ま、待って!一旦落ち着いて!」

「ミクタンさんなんかに渡したくありません!先生は私だけのものだ!先生をきちんと見てあげれるのも私だけなんだ!だから私と一緒にいて下さい!」

さりげなく告白してしまってはいるが、その時の私は先生を取られたくない一心で叫び続けていた。

しかし

「勘違いだから!それは勘違いだから落ち着いて!」

先生のこの言葉を聞いて、私の頭は真っ赤に染まった。

〜ナルミサイド〜

「勘違いだから!それは勘違いだから落ち着いて!」

なぜか自分と初音さんがリアル結婚をするとか勘違いしたこの娘を止めるため、自分はそれが勘違いだとストレートに伝えた。

すると、わかってくれたのか彼女は自分をゆさゆさ振り回す行為を止めて俯いた。

しかし、この娘はマジで自分に好意を寄せてんのか？
彼女が直接そうだとは言ったが、正直いまだに信じられん。

てか、なんか裏があるんではと勘繰ってしまう最低な自分がいる。

そして、自分がそんな事を考えているとシルバちゃんが動き出し、呟くようにこう言った

「……勘違いじゃないです。」

ん？
何が？

「私が先生を、ナルミさんを好きなのは勘違いなんかじゃないんです！私は本気です！ナルミさんがいたらあとは何もいらないんです！！」

そういきなり叫んで、彼女は右手を上に翳した。

すると、その右手にどこから来たのか炎が集まり、凝縮され、最後には真っ赤に燃える炎のナイフが完成した。

……ヤバクネ？

「ちょま！待って！それこそ最大級の勘違い！落ち着け！」

「勘違いなんかじゃありません！私はあなたがいないと生きていけ

ない！だから…だから…」

そう言って彼女は自分の目をまっすぐ見据えた。
その目には狂気と…なぜか喜びの感情が見てとれる。

「誰かに取られるくらいなら、私があなたを殺して私も死にます。」

アウトォォォォ！！

ちょ！
マジですか！？
なんで！？
どーしてそうなるの！？

「大丈夫です、神様のもと、私達はずっと一緒になれるんです。永遠の愛を紡ぎましょう。」

ヤンデレ自重しろ！
そしてずっと神様といるのは願い下げだ！

「待てって！だから勘違い！自分は誰とも結婚の予定はありません！！」

「先生が無くても…たくさんのお嫁さん候補の方々がいるんでしょう？ミクタンさんの他にも、ルカサマさんとか、メイコさんとか…。私は候補にも上がって無いのに…そんな誰かもわからないような女にナルミさんをとられるくらいなら私がこの手で！！」

そう言って彼女はナイフを振り下ろす。
それを自分は咄嗟に

バシッ！

白刃取った。
人間、頑張ればなんでも出来る。

……あっつ！
めっちゃあっつい！
手がこんがり肉になる！！

「し、シルバちゃん！誤解だから！自分の言ってるのは君の気持ちで無くて自分の発言の解釈が違うって言いたいだけだから！」

自分が焼ける手を我慢しながら、彼女に訴えかける。
だが、当のシルバちゃんはと言うと

「ハー、ハー……」

目が逝っちゃっております。
息も荒く、目の焦点は合っていない。
正直、自分の言葉が聞こえているとは思えない。
そのくせ、この小さな身体のどこにこんな力があったのってくらいの怪力で自分を刺そうとナイフに体重を乗せてくる。

……自分、ここで死ぬ？
まさかの女関係で刺されて死ぬの？

自分が半分諦めかけていると、不意にシルバちゃんが

「が、はっ…！」

自分に覆いかぶさるように倒れてきた。
ナイフは消え、彼女は規則的な寝息を立てている。

「大丈夫？ナルミさん。」

何があったかはわからないが、とりあえずホッとしていると不意に声をかけられた。
声の主は、リリスさん。
シルバちゃんの真後ろに、相変わらずのほほんとした顔で彼女はいた。

「一通りは聞いていましたが、悪いけどこれはナルミさんがシルバの気持ちを傷つけたのが悪いと私は思いますわ。」

「……すいません。」

言い返せないです。

「で、ですけど、ミクタンさんやルカサマさんとは誰で、どういった関係なんですか？嫁、と言っていましたが、さっきナルミさんはそれを否定していましたし、誰なんです？」

「……ミクタンさんとルカサマさんじゃなく、ミクとルカですよ。」

……ヒジョーに、ヒジョーに説明しずらくしたくないが、これは説明しなければ多分今度はリリスさんに殺されるだろう。
のほほんした顔をしながら、目がそういっている。

「あー、まず嫁って言うのは…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

「なるほど、ぼーかろいどと言う人間が電気から創った精霊の歌姫ですか……そして嫁にするとは、ぼーかろいどを使役する者がそれを降す事を表す隠語と言う訳ですね……」

「……それでいいです、もう。」

話はじめて一時間、リリスさんの解釈はこれである。

……ボカロ、精霊に格上げである。

ちなみにリリスさんは、シルバちゃんがこの部屋へ向かうのに後からついてきたらしく、最初っから全部しっていた。

いたなら止めてほしかったな……。

「しかし……精霊を創り出すとは…使役する事さえ難しいのに……人間とはやはり、計り知れない種族ですね…」

精霊とちがうよ。
使役とちがうよ。

だが、自分はそこに水を差さない。

「ハハハ、そう、ですかね?でも誤解が解けたようで何よりです。」

ちなみに自分はいまだに仰向けでころがっている。
疲れすぎて動けないのと、腹の上でシルバちゃんが幸せそうな顔で丸まっているのが原因である。

ちなみに手の火傷はリリスさんに治してもらいました。

「ええ、シルバの勘違いだと言う事がよくわかりました。では、この子の記憶はちょっと消しておきましょう。あんな事をしたとわかれば、この子、自殺しかねませんから。」

「あぁ、お願いします。」

自分が言うと、リリスさんはシルバちゃんの額に手をあてた。
すると、手から緑の光りがでてきてシルバちゃんの頭に入っていった。

「ふぅ、完了です。ただ、この子の気持ちは本物ですので、それは覚えておいて下さいね。」

「……はい。」

神にも言われ、シルバちゃん本人からも告白とそれを示す行動（変なベクトルに向いていたが）をされ、さらにはその母親であるリリスさんからもいわれたのだ。
もはや疑う余地は無い。

「ま、反省してるみたいですし良しとしましょう。じゃあ私はこれで。」

そうリリスさんは言うと、扉の方向に向かい歩いていった。

「あ、ありがとうございい……待って下さい！」

あっぶね！
忘れるとこだった！

「あら、まだ何か？」

「シルバちゃん！このままですか！？」

そう、自分の上にはまだ、シルバちゃんが居座っているのだ。
いつのまにか器用に自分の左腕に抱き着いている。

「あら、そうだったわね。」

そう言って近付いてくるリリスさん。

よかったー。
さすがに一晩中こんな近くにおにゃのこがいたら自制がきかない。
身体は酷使しすぎでギシギシ言って動けない程つかれているので、
間違いはおきないが、それがかえって生殺しである。

そう自分が安心しきっていると、自分の上にふわっとした感触が舞い降りた。

「よいしょっと。」

「……リリスさん、なんすかこれ。」

「おふとんよ。風邪をひいたら大変でしょう？」

いやそうだが。
自分はシルバちゃんをどうにかしてほしかったのですが。

「じゃあ、私はもどるわね。」

そして、そう言ってリリスさんは自分が反論する暇も無くそそくさと部屋を出ていった。

最後に、早く孫の顔がみたいわ、っていいながら。

……泣いていいですか？

まぁ、とりあえず、シルバちゃんの気持ちは理解した。

ヤンデレる程に自分を好いてくれるのは素直にありがたい。
命の危機は感じたが、それはぶっちゃけ自分のまいた種なので彼女を攻めるつもりは無い。

だが、いまだに心の片隅で彼女の気持ちを信じる事ができないでいるのもまた事実である。

なので、ヘタレと言われるとは思うがこの問題、答えを出すのをはしばらく先送りにする事に自分はした。
自分の心、全てで彼女を信じる事が出来るまで、答えは出さない事にしたのだ。

ゆっくり、時間をかけて解決しよう。

自分はそう決心した。

ちなみに、次の日の朝での事。

「あ…おはよう。」

両足がベッドからはみ出し、半分落ちそうな不自然な体制で寝ていた自分はいつもより格段に早く起きた。
シルバちゃんはまだ寝ていたので、起こさないようそっとおろそうとしたら彼女が目覚め、自分は上記の言葉を述べた。

「うー…おはようございい、ま……」

最初は目を擦っていかにも寝起きだった彼女だが、自分の顔を見て、自分が抱き着いている腕を認識するとみるみる真っ赤になっていった。

「あの…その……」

わたわたと慌てる姿は、結構かわいかったりした。

そして、だんだん冷静になってきた彼女は思い出したように一言。

「あ……これで、既成事実完成ですか？」

は？

「これで私は幸せを手に入れれます！」

はい？

「どゆこと？」

「お母様が、先生を襲って一緒に寝ると、先生と一緒に幸せになれ……るっ……て…」

そこまで言うと、彼女は再び真っ赤になって今度は両手をパタパタさせながら慌てて訂正した。

「いえ！あの！そんな一緒にとか！別に他意は無くて！あの！その！……忘れて下さい！！」

彼女を落ち着かせ終わったのは、いつも起きるよりも遅い時間だった。

23回目＊神と初恋と電脳歌姫（後書き）

あとがきと言う名の謝罪

キノコのくだりがやりたいがために前回暴走させたナルミ君ですが、思いの外不自然だと言うご意見が多々ありましたので、この場を借り謝らせていただきます。

すいませんでした。

シルバちゃんのところもまだ入れるのは先の予定だったのですが、前回の熱血ナルミ君の異常鈍感スキルを発動させてしまい、これがさらに不自然さに拍車をかけたとのご意見もまた、多数寄せられてきましたのでこちらも謝らせていただきます。

すいませんでした。

そして数多のご意見、ご感想を寄せていただきました皆さん、ありがとうございました。

これからはもっと皆さんにとってわかりやすい、楽しめる作品をつくっていきたいと思い、精進していく心積もりであります。

長々と失礼いたしました。

これからもどうかよろしくお願いいたします。

敬具

２４回目＊破壊的超絶歪曲英雄伝

「ナルミ！早くしろ！」

「先生、ここがあいてますよ」

どうもこんにちは、鳴海です。
突然ですが、今自分はエリザとシルバちゃんと共にとある劇場にきています。

なぜかって？
理由は簡単、エリザの

『何？私達の劇をやってる？よし、観に行くぞ。』

この一言が原因である。
いや、むしろ情報をエリザに流したリム副隊長が諸悪の根元か。

とりあえず、自分達はみんなして変装し、一般客として劇場に潜り込んだのだ。
変装した理由は、話しのもとになってる人物がそのまま行く訳にもいかないというシルバちゃんの意見により、見事に変人丸出しな恰好になっている。

何たって、普通の街人の恰好にちっこいシルクハットみたいな帽子、さらにサングラスまで装備しているのだ。
いくら髪と眼を隠すためとは言え、怪しむなって言う方が無理な恰好である。

正直、帰りたい。

「先生、早く座りましょう」

自分がなんかたそがれてると、いかにも田舎娘な恰好をしたシルバちゃんに手を引かれ、彼女の隣に座らされた。
すでに左側には、これまた街娘な恰好をしたエリザがいる。

めっちゃニヤニヤしながら。

「いやぁ、やはりナルミの朝帰りからシルバは積極的だな」

何を言う、早〇優。

ほら、シルバちゃんなんかめっちゃあわあわ言って茹蛸になっているじゃないか。

「いえ！あのその！まだ先生とはそう言う訳では…」

「まだって事はいずれなるのだな。城の者もみんなお前らの事は噂しているのだぞ、さっさとくっつけ。なあナルミ」

「自分に振るな。ほら、シルバちゃんも落ち着いて。そろそろ始まるから」

とりあえず、否定も肯定もせずに話しを流す。

だって、下手な事言って殺されたくないもん。

しかしまぁ……意外に人が入ってるな。

もはや満員である。
劇場の形は、半径４０メートルくらいの円で、中心に半径１０メートルくらいの一段下がった場所がある。
よくあるサーカスの形だと思えばいいだろう。

と、自分が観察していたら、不意にアナウンスが流れてきた。
『紳士淑女の皆さま！お待たせいたしました！これより“黒騎士英雄譚”を上演いたします！！』

……帰っていいっすか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

『その日、街はいつもどうりの平和な日であった…』

そう言ったナレーションで劇は始まった。
ステージには街人役のひとが何人かいる、そこへ一人の青年が叫びながらかけてきた。

「魔獣だー！」

その叫びと共に、彼を追うような形で謎の巨大ぬいぐるみがあらわれた。

『だが、その平和も一体の魔獣により壊されようとしていた。』

よし、なにひとつわからない。
いつあそこに魔獣が出たか簡潔に説明を求めたい。

『兵士達は勇敢にも戦ったが、魔獣の圧倒的な力の前に、なす術もなく倒れていった。』

青年達が舞台から逃げ、代わりに兵士役の人達が数人ぬいぐるみに立ち向かった。

……が、ぬいぐるみが動くだけでなぜかみんな倒れていった。

『だが、彼らがその魔獣の力に絶望しかけていた所へ、彼は現れた。』

なんかのそのそぬいぐるみが動き、兵士にとどめをさそう（のしかかろう）とした所で、なんか黒マントに身を包んだのがぬいぐるみと兵士の間に立ち塞がって、高らかと言った。

「待つがいいそこの魔獣よ！民を虐げる悪しき存在よ！」

そう言って奴はマントを投げ捨てる。

「自分！ハセガワナルミがいる限り、そのような事は決してさせない！」

下にいたのは、魔法使いみたいな黒い変な服に身を包んだ、謎のイケメン（黒かつら付き、なぜか眼も黒い）だった。

彼が大見えを切ると同時に、会場から黄色い歓声が上がる。

「おい！誰だか知らないがあれは魔獣だ！」

「そうだ！魔獣に単体でやり合うなんて、命を捨てるような物だぞ！」

そう言うは倒れてる兵士達。
そして次に続く台詞は

「ふんっ！たかだか魔族が私に立ち向かうなぞ！命知らずめが！」

魔獣ぅぅ！！！
貴様が喋るか！
びっくりだよ！

「ふっ…自分は魔族では無い、自分は…」

そう言いながら、ハセガワナルミ（以下黒いの）はポケットから紫の手帳みたいなのを取り出し、それを上に掲げ

「誇り高き正義の使者！人間だ！」

言うと同時に振り下ろす。
すると、ランプの光みたいなのがぬいぐるみに集中し、ぬいぐるみがよがり出す。

「ぐ……がぁぁぁぁ！」

そして萎れる。

なんだこれは。

「大丈夫か、そこの者」

そんな不思議なぬいぐるみには一切関心を示さず、黒いのは後ろの兵士に声をかける。

「あ、ありがとうございます……あなたは一体」

「自分は人間の、ハセガワナルミだ。この国を救うため、来たる戦争に勝利をもたらすために自分は来た。さぁ、自分を謀将の姫騎士、エリザ様の元へ案内してはくれないか」

黒いのがそう言うと、兵士達は慌てる演技をした後に、黒いのを城に案内すると言う言い出した。
そして、その兵士と共に黒いのは一旦舞台から消えた。

……うん、何この茶番。
いろいろ思う所はある、が……一番言わねばならぬのはこれだろう。

なにが正義の使者だバカヤロー。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊★

「そなたが私に会いたいと言う者か？」

「はっ。自分の名前はハセガワナルミ、この国を救うためエリザ様の元へやって参りました」

なぜエリザにひざまずくなぜ敬語をつかうなぜ自らエリザの元につこうとする！？

「聞くところによるとお前は人間だとか、それは真か？」

他に疑問があるだろう。

なぜに不審者がいきなり姫様にの前にいるとか。

「はっ。自分は人間の、王族の血筋に当たる者。そして自分のオーラは覇王と勇者の二色を有しております。それを証明する物はここに」

そう言いながら、黒いのはどこから出したか長く炭みたいな黒い棒をエリザ役に差し出した。

「それは我が家の家宝、サムライの武器カタナと申す物であります。名をイチゴと言い、人間にしか扱えない代物です」

「ふむ……わかった、お前を私の近衛隊に入れる事にしよう」

早いなおい。

いろいろ疑問が残るぞこれは。

「「〜〜待って下さい！」」

そう言って現れるは……まぁ、近衛隊役の方々である。

その中の一人、ミミリィ隊長役（多分）の人が一歩前に出てこう言った。

「私達近衛隊に、弱い者はいりません。確かに噂だけでは強いかも知れませんが、実際に見てみない事には私達は納得できません」

「ふむ、ではどうしろと」

「私達と彼を戦わせて下さい。そうすれば私達も納得できましょう」

……たーしか建前はそんな感じだったけど、彼女が最初に自分と戦う理由はもっと不純だった気がする。

「いいだろう。私もナルミの強さを見てみたい。ナルミ、いいか？」

「エリザ様のご命令とあらば」

……これ、何の劇？

「……本物のナルミもこれくらい忠誠心があればよいのだが」

「…黙って観てろ」

エリザの呟きに対応しつつ、芝居を観る自分。
正直、あそこまでいったら自分じゃねぇよ。

と、なんだ？
なんか段々暗くなってきたぞ？

「主を護りし勇敢な者達よ、その姿に敬意を評し、我が秘術を見せてやろう」

黒いのがそう言うと、完全に真っ暗になり、そして

「ディガリブク！」

呪文と共に明かりがつき、でっかい何かが中央にのさばっていた。
なんか、黒いのがきていた服を着た、でっかい黒いの人形だ。
意外と完成度は高い。
つか、“ディガリブク”って“ディカポルク”の事か！？
どんだけよ。
「……な…なんだ、これは…」
驚いているエリザ。
そして、弱腰になる近衛隊。
『これが自分の秘術の一つだ、さあ、戦いを始めよう。』
なんだこのくぐもった声は。
とりあえず、そんな黒いのの声を聞いてもなお動けない近衛隊。
すると、途端に再び暗くなり、二三秒してまた明かりがついた。
中央に人形は無く、再び黒いのが立っている。
そして、黒いのは息を吸いおもいっきり一言。
「軟弱者がぁ！」
……あっれー？
自分こんなこと言ったっけ？
「高々これだけで足がすくんでいてどうする！近衛なら主を護る為、

いかな強敵であろうとも立ち向かうだけの勇気をもたんか！これから自分がその根性を叩き直してやる！」

そう黒いのが言うと、近衛隊達は泣き出した。
なんか感動したらしい。
それから彼らは黒いのに先生だのなんだの言って、とてもカオスだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊★

それからしばらくの描写は、なんか余りに異常すぎて詳しくはいいたくない。

少し言うと、自分が王都に向かう途中空腹で倒れたシルバちゃんに自らの血を無償で分け、さらに血が少なく弱った所で攻めてきた帝国軍からシルバちゃんを護るために矢を背中に受けながら、気迫で彼らを気絶させた後、最後にシルバちゃんが寝てる自分を介抱して、ついでに感謝の言葉を言いながらキスをするシーンとか。
（この時本物は真っ赤になって気絶しそうだった。ついでに、さっきエリザが言ってた噂の正体を自分は見つけた。）

バリスと決闘（つか死闘）を行い、真の強さやらについてなんかきょーれつに語り、バリスと意気投合した後にそれを王様に認められて二つ名を貰ったり。

砦に出向いて朝早くから奇襲してきた敵を、敵が召喚した魔獣ごと“じげんていでっき”という秘術で倒し、『奇襲なぞ、誇り無き者がする事だ！』とかいいながらブチ切れてたり。

なんか阿保将軍が帝国と繋がっていて、援軍を騙して敵の門に突撃させ、援軍が壊滅しかけている所で自分が歌を歌い（なんか滅びの子守唄とか言ってた）、そこにいた者全ての意識を刈り取るとか、限りない混沌ぶりである。

宇宙の法則もここまで乱れまい。

そして、次の場面は

「姫、ご武運を」

「ああ、ナルミもな」

お城に潜入するあそこである。

そして、黒いのはさっそく内部に潜入し、そこでしばらく考えていた。

「さて、いかがしようか。適度な混乱をもたらし、なおかつ味方の助けになる事」

と、黒いのがしばらく唸っていると、彼の眼にはあるものが。

……あ、なんかよくみたらあれ黒でない。

ただの濃いめのダークブルーだ。

まぁとりあえず、彼は飛竜（やっぱりでっかいぬいぐるみ）を見つけた訳よ。

「飛竜か…これらを味方につければ、戦いも有利に進められよう」

は？
何、味方に？
竜を？

「そこの飛竜よ、自分の言葉が聞こえるか」

『…おや、我らの言葉がわかるのか黒き者よ。珍しい、お前は一体何者か。』

飛竜ぅぅ！！！
貴様は絶対喋っちゃ駄目だろ！！

「自分は人間のハセガワナルミと申す者。この戦いを終わらせるため、貴様達飛竜の力を貸して欲しい」

『なんと！あなたが人間だと！？いや、確かに我ら飛竜と会話出来るのは人間のみ。もはや疑う余地もあるまい。だが、我らにもこの国に恩がある、やすやすと裏切りを働く訳にもいかん。』

お前ら飼われてるだけだから。
恩とか普通あるのか？

「ふっ……どこぞの将軍よりも忠誠があるな。だが安心しろ、この国の魔王は今、邪な者に操られている。自分はわかる。自分はそれを開放し、邪な者に鉄槌を下す事を約束しよう」

してねーよ。

『…つまりそれまで時間を稼げと。』

「理解が早いな、では頼む」

そう言うと、黒いのはどこかに走っていった。
後にのこったぬいぐる飛竜は

『行ってしまったか…なんとも不思議な者だった……しかし、魔王様が操られているのを助けるてなれば協力しない訳が無い。』

そう言い、ぬいぐるみは羽（布）を広げ、高らかに雄叫びをあげた。

……もう、知らん。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊★

「ふふふ…よく俺が黒幕だと見破ったな」

「貴様から溢れる邪な魔力、気付くなと言う方が無理な話しだ」

さてさて、見せ場である。
黒いのは王様を助け、ぼっこをもちながらついに黒幕と対峙する場面だ。

ちなみに、端っこには戦いをしている兵士達がいたりする。

「お前はなかなかやるようだが、他の者はどうだろうかねぇ」

「どう言う意味だ?」

「こういう意味だ！いでよ魔獣！」

黒幕がそう叫ぶと、やっぱりぬいぐるみがいっぱいでてきた。
なんつーか、よくこれだけつくったな。

そして、ぬいぐるみはみんな戦いを続けている兵士の所に向かい始める。
逃げ惑う兵士、高笑いする黒幕。

「ハッハッハッハッハ！どうだこの魔獣の数！貴様に全ての兵士を救う事が出来るかな！？」

そう言いながら、なおも笑い続ける黒幕。
しかし、黒いのはやたら余裕そうだ。

「……ふっ」

「何がおかしい！」

「浅はかだな、やはり小物か…」

そう言いながら黒いのは黒幕を睨みつける。

「自分の弟子が、この程度でやられると本気で考えているのか？」

そう言ったとたんに、カミナリやら風やら何やらがぬいぐるみを直撃し、八つ裂きにした。
これはもう再利用きかないな。

「さあ、貴様の悪事もここまでだ」

そう言いながら棒を構える黒いの。

対して黒幕は

「クク…ククククク……これで終わりのつもりか？俺にはまだ、奥の手がある」

そう言った所で、劇場は真っ暗になり再び明かりがつくとそこには。

『コー…フー…これが、俺の真の姿…さぁ、俺に歯向かう愚か者よ…死ぬがよい！！』

他のぬいぐるみの二倍はあるぬいぐるみがそこにいた。

ぬいぐるみは、のろのろよたよた黒いのに拳を向けるが、赤子でも避けれそうな速さなので、黒いのは軽々とそれを避ける。

そして、ここが最大の見せ場。

「……欲にまみれた哀れな者よ…今、貴様の運命を断ち切らん！！」

そう言ってぬいぐるみに駆け出す黒いの。

そして

ズバシャァァ！

効果音と共に不自然に切れるぬいぐるみ。

そして恰好をつけながら黒いのが一言。

「また、つまらない物を切ってしまったか……」

そう言いながら、仲間のもとへと歩いていく黒いの。

「ナルミよ、ご苦労だったな」

「先生のご指導のお陰で、私も魔獣を打ち倒す事ができました」

などなど、いろいろ言っている。
中身はなさげなのでぶっちゃけ飛ばすが。

そして、最後に黒いのが一言。

「自分は、悪を打ち倒し、君達を護るためにここにいる。自分の名はハセガワ・ナルミ、虚無の黒騎士。自分の命がある限り、あらゆる厄災から君達を護る事をここに誓おう」

そう会場のお客さんに言い放ち、劇は終わった。
観客からは歓声が上がっている。

……パトラッシュ…自分もう死にたいんだ……。

だって何これ!?
三時間近い劇だったけど、全く事実と違いすぎるよ!?
なんか無駄に黒いのがかっこつけてるし、エリザに至っては本物よか常識あるし、なにもかもが違う!!
ツッコミ所満載よ!?

「……なんか、凄い劇だったな…」

ほら!

エリザすら違和感バリバリなんだよ！？
なんでこんな事になっちゃったん！？
「……本物の先生の方が恰好いいです」

……まぁ、この娘には触れないどこ。

とりあえず、もう一度言おう。

なに、この茶番？

とてつもなく理解ができない。
それこそ、駄目すぎて何が駄目だかわからなく、思考回路を遮断してしまいそうな程めちゃめちゃだ。

いや、話しとしたらきちんとなってはいるが、なにせ事実とあまりに差がありすぎなのだ。
なぜにこんな事になっているのだろうか…

「……ナルミ、帰ろう」

「ん、お、ああ」

考えを巡らせすぎて、周りが帰ってる事にきがつかなかったようだ。
エリザとシルバちゃんは既に立ち上がり、帰る準備は万端だ。

「……なんか、この言葉にできない感情は何でしょうか」

本当に、ねぇ……
と、帰らなくては。

そう思い、自分が立ち上がったその時

ぱさっ

帽子が落ちた、そして…

「……あ…本物だぁ！！」

大パニック発生。

なんかみんなしてこっちに寄ってきた。

これは、下手なホラー映画よりも何倍も怖い。

「え、エリザ！シルバちゃん！逃げるよ！」

本能で危険を察知した自分は、二人の腕を引っつかみテレポートした。

イメージした先は、いつも近衛隊が訓練している中庭だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

「おわっ！」

「キャッ！」

「おっと」

バサッ！

なんとか脱出には成功したようで、自分達は今中庭の茂みに落ちてきた。

「…う～…な、何が起こったのだ？」

「城に帰ってきた」

「……もう慣れた、今度この転移術について教えてくれ」

そう言ってぐったりするエリザ。

自分とシルバちゃんも例外無くぐったりしている。

やはりあれは、観ているだけで精神とか心とかなんかが疲れる。

「……とりあえず、戻ろう」

こんな所にいつまでもいる訳にも行かないので、部屋に戻る事を自分は提案して茂みから出る。

それについて二人も出て来る。

「あたっ」

そしてなにかにぶつかる自分。

そのなにかとは

「…先生、何やってるんですか？」

ムー君だったりする。

彼は自分を見て、そのあと後ろの二人を見る。

そしてため息。

「先生、シルバはともかく、姫様にまで手をだすなんて……さすがにそれは…しかもいっぺんに食べましたか」

「よし、なにひとつわからない。何が言いたい」

「いえ、茂みからでてきて、こんなに服が乱れて疲れた顔をしてたら、誰でもそういう考えに行き着きますよ」

そう言われ、二人を見てみる。
二人はなんか疲れた顔をして、茂みから出て来た彼女らはそのせいで服が所々乱れている。

なんか、激しい何かをしていたように見えなくもない。

「違う、自分らは劇場で劇を観てきただけだ。やたら混沌とした内容で、観てて疲れただけだ。ここから出て来たのは事故だ事故」

必死に弁解。
ただ疲れてるので勢いが無い。

だが、ムー君はわかってくれたようでなんか納得してくれた。
そして、重要な情報を口にした。

「ああ、あれですか。確かに事実を知ってたらいろいろ突っ込み所がありすぎてキツイですよね。まぁ、さすがはリム副隊長って所ですか」

マテ。

「なぜにそこでリム副隊長の名前が出るん？」

「え？彼ら劇団に先生の事を教えたのは副隊長だからですが……知らなかったんですか？」

「詳しく話せ」

ムー君の言う事をかみ砕くと、リム副隊長が彼らに教えたのを劇団員は忠実に再現した結果あの茶番になったという訳だ。

つか、監督が彼だとか。

後ろの二人も、反応から察するに全く知らなかったようである。

しかし、なぜに彼は劇を観るようエリザを誘導したのだろう。

「なんか、副隊長はやたら自信たっぷりに自分が作った劇だーって言ってましたし、よほど自慢したかったようですからてっきりもう知っているかと…」

……つまり観してから“俺の作品すげーだろ”っていいたかったと。

「エリザ、どうする？」

「……好きにしてくれ。私は寝る。疲れた」

エリザから許可が下りた。

よし、これで勝つる。

「ムー君、奴の居場所を教えてくれ」

後ほど聞いた話しだが、この時自分は悪魔みたいな笑顔だったとか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

ムー君に引き連れられながら、自分とシルバちゃんは食堂で兵士と立ち話をしているリム副隊長を発見した。

食堂には他にも結構な数の兵士やらメイドやらがいる。

自分はそれらを押しのけ、満面の笑顔を張り付けながら彼に近付く。

「リーム副隊長♪」

自分が気持ち悪い声で彼に話しをかけると、副隊長と話しをしていた兵士はみんな顔を固くし、ぴしっとなった。

だが、シルバちゃんを少しみると、“やっぱり噂は本当だったのか”とか小声で言い出した。

「…あ、ナルミ君、どうだった？楽しかった……」

この諸悪の根元が。

処刑、決定だ。

副隊長がなんかほざいているのを無視して、自分は彼の胴体を掴み

「ウルトラバックドロップ！！」

ドゴォ！！

「ピギャ！？」

呼んで字の如く、ウルトラなバックドロップを奴に決めた。

シルバちゃんとかムー君とか兵士達とか、とりあえず周りにいた人達はみんなして目を丸くしている。

そんな視線も無視して、自分はリム副隊長に

「自分が最強の格闘王、ＮＡＲＵＭＩだ！もう一度やるか？」

こう勢いに任せて言ってしまった。

まぁ、どーでもいいが。

「うう……何がどうして…」

「わからないか？もう一度やるか？」

「いえ……遠慮しときます」

「遠慮するな。ウルトラバックドロップ！」

ドゴォ！

「ニョ！？」

それからしばらく、自分はリム副隊長に受けた精神的苦痛ぶん正座に説経とバックドロップをくらわせた。

……いやぁ、すっきりした。

「……うぅ…何が悪かったのさ。ナルミ君をかっこよく脚色して、みんなの憧れにしてあげたんだよ?」

「それが悪いと言っているんだ。気付けよ」

全く、こいつは…

ちなみに余談だが、この直後いまだにグダグダ言っていた副隊長に、いつのまにか闇化したシルバちゃんが、“先生を困らせる者は私の敵です”って具合に殺しにかかっていった。

なんとか止めたが、マジ、この娘の将来はどうなるんだろうか。

そして、いつ自分がまた襲われやしないか内心ハラハラしている自分がいた。

２４回目＊破壊的超絶歪曲英雄伝（後書き）

ふむ…

なんか、久々に書くとやはり色々終わってますな。（爆）

25回目＊口は禍の元、行動は災難の元

時は昼過ぎ場所は廊下。
自分はエリザと共にふらふらわらわら、廊下をピコピコ歩いている所だ。

しばらくは沈黙が場を支配していたのだが、ただ黙って歩くのにあきたのか、エリザがいきなり口を開いた。

「ナルミ……いや、格闘王。最近どうだ？」

嗚呼、このニヤニヤが憎い…

「……お願いしますからそれ、やめて下さい」

そう、自分が四日前、リム副隊長にウルトラなバックドロップをかまし、決めゼリフを爆発させた瞬間から自分の新たに代名詞として格闘王という名前が定着した。

……ぶっちゃけ、限り無く後悔しております。

「いいではないか格闘王……プッ…格闘王…うん、大変名誉ではないか。で、どれくらい弟子を取った？」

「だーれも。だって自分、エリザの近衛隊の名誉顧問だから。近衛隊以外弟子はとりません。ぶっちゃけめんどくさいし」

自分の回答を聞き、苦笑するエリザ。

「まぁおまえらしいか。だがそのせいで私の近衛隊に入りたいと言う輩が最近増えているのもまた事実なのだ、なんとかしてくれ」

そうなのだ。

なんと、ここ数日で自分に弟子入りしたいという者が何人も、それこそ老若男女関係無く日に日に増えていくのだ。

しかも兵士から学者から、終いには医療関係者からも弟子入り志願が来ていたりする。

あまつさえ、魔法学校から講師として招かれる始末。

兵士は言わずもがな、超監督副隊長による弊害と、自分のＫＥＮ○Ｉ式バックドロップが原因だが、それ他の方々の理由については、少し過去に遡る必要がある。

ついでに、自分達が今ここにいる理由も同じ時間に判明する。

なので少したそがれながら思い出してみよう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

その時いたメンバーは自分とエリザ、そしてスゥ君とテトラ君だった。

そしてなにをやってたかと言うと、所詮お披露目会である。

つまり自分が適当に教えた魔法が完成したとかでエリザによって中庭に引っ張られて来られたのだ。

ちなみに他のメンバーは、休暇や護衛以外の仕事で今はいない。

「……グラビデ！」

バキバキバキ！！

そしてやはりただ今新技をお披露目しているのはエリザだったりする。

ものすごい勢いで案山子（一般兵の基本装備付き）を中心に、中庭の土ごとメキメキ言って潰れていく様はもはや壮観である。

なぜ彼女がこれを覚えるまで至ったかと言うと、先日、今までに無い魔法を教えてくれって言われて真っ先に思い付いたのがこれだったからだ。

だが、重力の概念ってか万有引力の存在すら知られていないこの世界でそれを伝えるのはむつかしい。

だからとりあえず面倒なので、

『何となく範囲内の重さを増大させる感じにやれ。』

って感じに何となくやらせてみた。

したら二日くらいしてエリザが

『ナルミ、出来ん。重さを増大させると言われてもいめーじ出来ん。やっぱりその“ぢゅうりょく”やら“ばんゆーいんりょく”について詳しく説明してくれ。』

とかのたまった。

頑張って使い馴れない言葉をたどたどしく使おうとするエリザの姿になんかクル物を感じつつ、しかたなしに教えてやると自分が言った所、なんかいつのまにか会議室が開放されて城中の魔法使いやら魔法学者が集まり盛大な講義に発展した。

正直、教科書無かったらきつかったです。

ちなみにこの騒動の犯人は、意外にもエリザではなかった。
自分とエリザの会話を耳にしたとある魔法使いが、自分も知りたいがために企画したものだったらしい。

さらに言うと、このあとしばらく魔法使い達に講義のお願いをされ、最終的には講義中の自分の発言のせいでマジで物理学と言う学問が確立した。

その発言とは、物理の先生が言っていた“物理とは物事の理（ことわり）と書く。つまりある種の真理を探究する学問である。”と言う所詮受け売りの言葉だ。
だが、自分がそれをぼんやりと発言してしまったら、皆さんはそれを聞いてまるで神が言った言葉の様に感動していた。

もはや宗教である。

ちなみに新しく自分の名前に“真理の解明者”と言う名前が追加された。
正直いらん。

と、言う事があったのだ。
従って、今自分は明るい道を避け、あまり人に会わない道をこそこそ歩くはめになっている。

全く、悪い事しとらんのに。

とりあえず、紆余曲折あってエリザは新たな魔法を手にいれたと言う事だ。

「ナルミ！見てたか今の！」

うれしそうに両手と翼ををぱたつかせながら寄ってくるエリザ。

……なんかイイ。

「ああ、まさか重力すら知らない所からここまでこんなに早くこぎつけるとは思わなかった。」

素直な感想をのべてみる。

すると、エリザは得意そうに喜んで、クルクル謎の踊りを踊りはじめた。

「やっぱり、先生は凄いですよね。僕、一生着いていきます。」

何となくエリザのタモ○モダンスだかスコル○ンXだかわかんない踊りを眺めていると、不意にスゥ君が後ろから声をかけてきた。

「新たな学問の開発から、僕らに合った新型魔法を授けてくれるなんて…カタナもつくってくれましたし、感謝してもしきれません。」

「だね。先生はいつも俺らの及びもつかない考えをもっているし、今に宗教とかできても不思議では無いですよね。」

…まぁ、魔法使いさん方は半分そんな目で見てくださっております

が。

ちなみに、二人はそれぞれ天〇降臨の道しるべと夜〇の幻影殺人鬼をマスターしております。

いやぁ……いいよね、東〇Ｐｒｏｊｅｃｔ。

個人的にスゥ君には目からビームを出して貰いたかったが。

と、こんな感じに会話をしていると、いきなり目の前に

「ナルミ君！助けて！」

「にょうわ！！」

リム副隊長が出てきた。

彼は見事にこの前、自分考案光学迷彩魔法を習得したのだ。

「リームー！今日と言う今日は逃がさないわよ！！」

「来た！ナルミ君！」

そして彼はそれを悪用していつも自らの彼女をからかって遊んでいたのだ。

だが今回は状況が違う。

「フフフフ……今まで溜まりに溜まった鬱憤！私の新魔法“れーざーびーむ”の的にしてはらさしてくれるわ！！」

そう、彼女はついに習得したのだ、破壊光線を。

彼女は右手をリム副隊長に向け、そのまま光線を発射した。

自分が最初ミミリィ隊長にこれを教える時は正直かなり困った。
何せ相手が光という甚だしく抽象的なものだからだ。
だが教えると約束したので、とりあえず

『なんか……太陽になって光と熱を一点に集中させる気持ちで。』

と教えてみた。

したら最初は弱々しい光りを全身からユラユラだしているだけだったが、段々安定してきて最終的にはかなりのレベルまで成長した。
さらに先程の物理講習の光分野を受けた彼女はより一層技に磨きがかかり、とうとう昨日完成させるに至ったのだ。

そして、それを知らないで自らの恋人のスカートめくりをした哀れな男がここで焦げている。
命に別状はなさ気なので放置する事にしよう。

自業自得の因果応報である。

「次は手加減しないよ。」

「うぅ……ナルミ君、恨むよ…」

なぜに自分さ。
責任転嫁とか、悪いのはお前だろう。

最近君は調子に乗りすぎだ。
少しは反省して、自重しろ。

そんな願いをかけながら、自分はミミリィ隊長に素晴らしい提案をしてみる。

「隊長。今から新しい体術、“ウルトラバックドロップ”を覚えてみませんか？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

プルプルふるえながら謝るリム副隊長。

うん、どこのヒグラシ？
こんど鉈でも渡してあげようかな。

「大変魅力的ですが、今は他に用事がありまして…まぁ、こいつのお陰でそれも終わりそうですが」

そう言いながら足でつんつんとリム副隊長を突く隊長。
なんか、最初見た時と形勢が逆転している。

「あらら、残念。じゃあまた今度」

「はい、また今度お願いします」

うむ、いい笑顔だ。
うむ、哀れな顔だ。

どっちが誰かは推して知るべし。

「という訳で姫様、先生」

ん？

自分も？

「魔王様が御呼びのようです。至急、魔王様の私室へ」

んー？

なんで？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

てな事が、さっきあった訳よ。

で、今いるのがその王様のお部屋の扉の前。

うん、自分の二倍はあるね、この扉。「まぁ、なんで呼ばれたかはわからないが、とりあえずはいろうではないか」

そう言って何の躊躇いもなく扉を開き、ずかずかと入るエリザ。

うん、豪傑だ。

まぁ、親の部屋だから普通っちゃ普通か？

「失礼します」

対して、別に王様が親でもなんでも無い自分は一礼してから部屋に入る。

うん、礼儀正しい日本人の鏡。

「あ！おいナルミ！俺と勝負しろ！」

そしてそのまま顔を上げずに回れ右。

では、パイバイキ～ン。

と、いざダッシュをしようと構えた所で自分は襟を捕まれ、グエッてなった。

「待て、どこへ行くナルミ。兄様なんか無視すればいいではないか」

「おい…いくら俺でもそれは傷つくぞ」

「ゲホッ、ゲホッ……無視したら殴られそうなんだもん……」

「…それもそうだな。なにせ、兄様だからな」

そんな馬鹿を一通り扉付近でやっていると、部屋の中から

「そろそろ中に入ってはどう？見ていて楽しいけど、大事なお話しがあるのよ」

そう言うのは王妃様。

他にも、王様とガルクさん、それと見た事も無い赤ポニテのクールビューティ（白翼付き）が机を囲み、椅子に座っていた。

自分が椅子をすすめられ、そこに座ろうとするとクールビューティ

と眼が合った。

「そいつが、ナルミと言う者か…」

途端、そう言いながらじっくり自分を観察し始めた。

魔力がどうのやら筋肉がうんぬんぶつぶつ言いながら見られる（睨まれる）のは、ぶっちゃけ怖い。

自分が少し困っていると、エリザが救済のつもりかクールビューティに声をかけた。

「姉様、ナルミは私の近衛隊で、こいつの心はランドルフ家の娘、シルバの物です。引き抜きや誘惑はおやめ下さい」

「オイ!!」

何をでたらめを!

とゆーかいつから自分がシルバちゃんに惚れた事になってんの!?

「…誘惑するつもりはないが…まぁいい、私の名はイノム・ネネ・トゥインバル、第二王女だ。よろしく」

「あ、はい。こちらこそ…」

う〜む、なんかこう…長門さんを彷彿させる話し方ってか雰囲気ってか声ってか…

目元もなんか似てるような…

うん、そんな感じだ。

きっとショートボブにしたらウリ…三つくらいに似ているだろう。

こっちのが格段に口数が多いけど。

「…なにか？」

「長門の化身がここに…いえ、なんでもないです」

つい凝視して、ついつい口を滑らせてしまった。
まぁ、長門なんて知らないだろうから別に…

……何みんなこっちゃ向いてんのさ。

その後約１５秒くらい沈黙が続いたが、エリザがつぶやくように言葉を発した。

「…ナガトとは…創世の女神、ユキルガー・ナム・ナガトーラの事か？姉様が…女神の化身…？」

「はぇ！？」

は？
何創世の女神？

長門様が？

「いやいやいや、違うから。ありえん。長門は長門、ただのヒューマノイドインターフェイスだから」

即座に否定。
あれが創世神なら、団長様は何だって話しですよ。

「…ひーまのいどいんたーへいすとは…いったい何？」

だが食いついたのはイノムさん。

うん、惜しい。

そしてどう説明しましょうか…

……

……うん、これ無理。

「……黙秘権を施行します。みなさん忘れて下さい」

だが、さすがはエリザの姉。

「教えなさい」

押しが強い。

「無理です、できないです」

「…王族の権限を使う。喋るか処刑のどちらがいい？」

そして横暴。

処刑ってなんだ処刑って。

助けを求めようとして周り見るが、どーにもこーにもみなさん興味津々で助ける気配がまるで無し。

孤立無縁の四面楚歌。

……きっとここで逃げ出したら指名手配とかされちゃうんだろうなぁ…

「……横暴じゃありません？」

とりあえず抗議。

「権力は使うモノ。で、どうする？」

失敗。

「……喋らしていただきます」

くそう、今になってわかったよ。

民主主義の素晴らしいさを。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

「……つまり、ナガトーラは空を統べる姿無き神、ジョーホートーゴーシネンタイが私達の世界の発展を記録するために創造した、通称ひゅーまのいどいんたーへいすと呼ばれる神の使いだったのか…」

うむ、説明的発言ありがとうよイノムさん。

そしてだいぶ間違っているよ。

訂正はめんどくさいからしないけど。

ついでに言うと、ガルクさんの“それはぼうかろいどとは違うのか？”って言う発言でさらに話しがややこしい事になったのはご愛顧だ。

全く、リリスさんはいくら夫婦だからってそんな詳しく話さないでもいいじゃん。

ガルクさんがボカロに食いついた馬鹿二人（誰かはわかるしょ？ヒントは馬鹿兄妹）に対して、あまりに詳しく説明するもんだから二人揃って

『『ナルミ！私（俺）もぼうかろいどを嫁にしたい！造ってくれ！』』

とか声を揃えてのたまってしまう始末なのだ。

いつか苦情を言っておこう。

ちなみに二人には

『…ボーカロイドに心を奪われて、日の光を嫌い、死ぬまで自分の部屋と言う領域から外に出られずに堕落の一途を辿る呪縛がかかる可能性があるんだけど、やりたい？ちなみに１０人やったら９人はかかるかも…』

って、引きこもりニートになる可能性を示唆してみたら、顔を青くして引き下がった。

…まぁ、ニコ動が無いこの世界では無いと思うがねぇ。

「…まぁ、ナガトーラやぼうかろいどの話しは一旦置いといて、今回集まった理由についての話しをしたいのだが…。ほれ、イノム、戻ってこい」

いつの間にか話しが脱線…つか電車と間違って飛行機に乗った上にそれが太平洋の真ん中で撃ち落とされたくらいに変な方向にいってしまった所を、思い出したように戻そうとする王様。

ちなみにイノムさんは、なんか一人で怪しくぶつぶつ言っている。彼女の脳内会議ではすでに髪を切り揃えて仕立て屋に自分から聞いた（吐かせた）セーラー服とカーディガンを作らせるのはもう決定しているようだ。

あとの課題は意外にも勉強嫌いの彼女が本を継続して読めるかどうかだけらしい。

そしてそんな感じに自らの世界にトリップしているイノムさんは、王様の言葉をガン無視してなおもぶつぶつ言っている。

王様、泣きそうな顔しないで。

「……正直、この雰囲気で話すのもなんですが、せっかく集まったのだから話しておきましょう。イノム、そんなに私の拳を唸らせたいのですか？」

「！！……ご、ごめんなさい…」

状況を打破したのは、やはり王妃様であった。

うん、やっぱ怖い。

「さて…今回集まって貰った理由、それは我が国の内部に蔓延る腐った実を取り除くためです」

んー？

ならなんで自分？

「今回やる事は、ナルミさんがガルクに教えたと言う、作戦を実行します。ガルク、詳しい説明を」

あぁ……

あれか……

……

……マジで？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

それからしばらく、なんか政治的ななんやかんやよくわからない話しを聞かされ、話しかけられるたびに相槌をうったりてけとーな返事をしたりしてると、いつのまにか会議は終わりに近付いてきた。

「よろしいですね。では、異論等は無いようなのでこのように」

そしてそう締め括られ、会議は終了した。

途端に

「よし！ナルミ、いや格闘王！今から真の格闘王を決めるために戦うぞ！」

「何を言うんです兄様！ナルミは今から私に新たな魔術を教えるんです！」

「いや、ナルミにはひゅーまのいどいんたーふぇーすやじょーほーとーごーしねんたいについて教えて貰う。主にナガトーラ神と私の類似点等を中心に」

……何この大岡裁き。

両腕が取れる、しかも襟を捕まれて息がしずらい。

つか、声が出ないから抗議が出来ない。

と、自分が激しく苦しんでいると、王妃様が三人をたしなめる。

「みんな落ち着きなさい。それにナルミさんには私からお話しがあるの。だからしばらくあなたたちの願いは敵わないわよ」

えー、やらぶーぶー、やらの抗議の声が自分の左右と後ろから聞こえたが、王妃様がスッとあげた右拳を見て即座に黙った。

うむ、やはり王妃様強し。

「とりあえず、大事なお話しだから、悪いけどみんな部屋から出て行って貰えないかしら？もちろんガルクも」

「ああ、“鮮血の剛腕”の餌食にはなりたくないからな。とっとと出ていくよ」

そう言い残し、ガルクさんは部屋を後にする。
だが途中、いきなり止まって自分を見た後に天井をぐるっと見回したのはなぜだろう。

「さぁ、あなたたちも」

そう王妃様が言うと、渋々と言った感じに彼女らは部屋を出ようとする。

と、そこでいきなり王妃様が悪戯を思い付いた子供のような顔をして一言

「しかし、ナルミさんはイノムをナガトーラ神の化身って言ってましたし詳しくお話しをしてくれましたが……もしや本物に会った事があったりしますか？」

「「「！！？」」」

バババッと振り向く三人。
それを確認してさらに続ける王妃様。

「天空の神についても詳しく知っているようでしたし……神々との交流があったりしませんか？」

……神との交流ってか神のせいでこの世界にいるんですよ。

だが、それを言う訳にも、かといって良い嘘も思い付かず、ただ黙るしか無い自分。

それを肯定と見なしたのか、後ろから

「な…ナルミ…まさか本当に…」

珍しいエリザの控え目な声が聞こえてきた。

マジでどうしよう。

そんな自分の窮地を救ったのは、自分を窮地に追い込んだあのお方。

「さぁ、あなたたち。私達はいまからナルミさんと大事な大事なお話しがあるの。部屋から出て行ってくれないかしら？」

そう、王妃様である。

なんかかんかほざいていた後ろの人達を拳を見せるだけで黙らす事のできる王妃様。

だが今回は、彼らも簡単には引き下がらない。

「いえ、母様！こんなお話しを聞かされてスゴスゴと戻る訳にもいきません！！」

「ああ、さすがにこれはいくら殴られようが引く気にはならない！！」

「いますぐ、聞きたい」

…王妃様、なにが“あら、からかいすぎたかしら”だ。

変な所で悪戯すんな！！

「ナルミ!!どうなのだ!?」

ヤバイヤバイ。

いったいどうしようか……

「……お前達は彼の生い立ちを、彼の背負うものの重さを理解しているのか?」

!!?

「お前達はただ興味本位で彼の過去を踏みにじろうとしている。それをわかっていて彼に話せと強要しているのか?」

お、王様!!

あんたは偉い!!

王様の勇気ある発言によりたじろぐ三人。

うん、王様を空気と思っていた自分がいたが、心から謝ろう。

ごめんなさい。

「わかったなら戻りなさい。いつか時がくれば、彼から話してくれるだろう」

そう王様が言うと、三人は名残惜しそうに肩を落としながらとぼとぼと部屋をあとにした。

彼らがいなくなると、王様は大きく息を吐き一言。

「……お前、悪戯が過ぎるぞ」

「…ごめんなさい、まさかここまで食いつくとは思わなくて。ナルミさんも、ごめんなさいね」

……やっぱりこの人はあいつらの母親だ、行動原理がにている。

まぁ、謝ってくれたんだ、緩そう。

「まぁ、大丈夫ですよ。王様のおかげで助かりましたし」

そう言って微笑む自分。

うん、寛容さオカン級。

「そう言って貰えるとありがたいわ。……で、今回呼び止めた理由なんですけど」

まぁ、多分予想はつくがな。

あれだろ、あれ。

「ナルミさんに貴族としての地位を与えようと思うの」

そう、自分が出した休暇につい……へ!?

「き、貴族!?休暇についてでなく!?」

「ええ、休暇ももう実は大丈夫なのだけど、一旦こっちを優先しておくわ。実はガルクに頼まれたの、形だけでも貴族として扱う事は出来ないかって。いくらあなたの今の地位が近衛隊名誉顧問だとし

ても、出身が平民で貴族の地位も無いから、貴族の娘と結婚は難しいのよ」

「いやでも！どうやって！？戦争以外は自分、何もやってないんですよ！？」

「あら、やってるじゃない。戦争でのあなたの活躍や戦後のゴタゴタとかで忘れ去られていたものが」

？

なんかしたっけ、自分？

「……ありましたっけ？」

「あるわよ……盗賊団“朱きグム”の壊滅、あと戦争の報酬に逆賊の討伐分が入れ忘れられてたのでそれも」

……盗賊団？

朱きグム？

……とりあえず、今一番気になってるのはグムって言葉の意味だったりする自分は色々と駄目な気がしてきた。

「議会はもう通っているわ。これに署名してくれたらもう、あなたはハセガワ家の当主、ハセガワ・ナルミよ。貴族でもそれなりに高い地位だから、ある程度の融通をきかせる事も可能よ」

……マジっすか。

２５回目＊口は禍の元、行動は災難の元（後書き）

…やっとこさ更新

最近微スランプ気味。

やはりテスト二週間前を切ると精神が…

……しばらく更新が遅くなるカモ

EX・2＊陰からミママモル！（前書き）

ああ……疲れた。

今回の勘違いは……まぁ、はい

……めちゃめちゃな展開は目をつむってください。

EX・2＊陰からミマモル！

～シルバサイド～

霞みがかった空がうっすら青くなってきたころ、彼女達はそこにいた。
小鳥の囀りしか聞こえ無い、皆が眠っている静まりかえった空間で、気配を消すようにしながらひっそりと。

ここは兵士宿舎のとある一室。

この部屋で寝ているのは、黒い髪と瞳を持つ異国の青年、ナルミである。

本来なら彼はもっと上位の、それこそ将軍クラスの住む部屋に住んでもいいのだが、彼がケバいのは嫌と断ってからは急遽掃除したこの部屋で生活している。

中は机と椅子が二個、そしてベッドとかなり質素……というか物が無い部屋である。
元は物置で、その前は一般兵士用の相部屋だったので広さはかなりあるが、何せ物が無いので何か寂しさを感じさせる。

ちなみに言うと、彼がここに来てから近隣の部屋に住む兵士達は今まで以上にピシッとなっているのは彼らの上司からしたら嬉しい誤算だったりする。

そして、そんな彼の部屋の天井裏には四人の人影がうごめいている。

「……私だけでやりたいです」

「無理ですね。あなたならすぐにばれてしまいます。」

「まぁ、気持ちはわかるけどね。」

「……独占欲も、ほどほどに」

シルバ含む、少女同盟（仮）の四人である。
彼女達は今日一日休暇をとり、四人揃ってナルミの一日を観察する事にしたのである。

ちなみに、本来の目的は忘れかけていたりする。
しかも、あまりに朝早くから集まりすぎて隠密活動中なのに暇すぎておしゃべりをはじめる始末。
シルバに至っては、ナルミの寝顔を頬を染め、うっとりしながら眺めている。
そこからは邪な気配と視線がビシビシしている。
ほかの者も皆、存在感丸出しである。

あくまで、気配を消すようにしているだけで、完全には消えていないのだ。
そしてそれに全く気が付かない四人の娘。

ぶっちゃけ、ダメダメである。

だが、そこは現代っ子代表長谷川鳴海。
朝食より睡眠を優先させ、さらには現代日本でこんな忍者的観察をされた経験も無い彼は、彼女達の視線や気配を物ともせず、夢の世界でアニメ的デュエルを海馬さんとしているのである。

ちなみに、十代にはすでに勝っている。

「……はぅ…先生……」

だがそんな事などつゆしらず、夢の中で黒魔術師の少女と聖なるエルフを侍らせながら正義の味方をちまちま虐めている彼の寝顔を陰から恍惚の表情で覗くシルバ。

そしてそんな彼女を見ながら、やはり何にも知らないで彼氏がどうとかの方向へ話を発展させる三人娘。

そう、彼女達は何も知らないのだ。

授業の三分の二を寝て過ごす、睡眠魔人の睡眠欲の深さを。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

「……いつまで寝てるんでしょう」

「……というか、生きてる？」

「……仰向けのまま、微動だにしない」

「先生は生きてます！！何をしつれみょあ」

騒ぐシルバの口を急いで押さえるスフィー。

今の時間はだいたいの兵士が起き出し、活動をはじめた頃から約４時間が経過している。

いつ誰に声を聞かれるかわからないのだ。

ちなみにナルミは今、夢の中で社長とタッグを組み、闇遊戯さんと十代さんペアに立ち向かっている。

今の所はぎりぎり負けている。

そして、やっぱりそんな事を知らないシルバはスフィーを睨み、食ってかかる。

「先生は死んでません！ただ眠っているだけです！」

「わかった！わかったからもうちょっと静かに！！」

そう言うスフィーの方が音量がおっきかったりする。

それから三人による説得で何とか落ち着いたシルバは、最後にこう言った。

「先生が死んだら……私は、生きていけません。私は先生だけの奴隷であり、征服されるべき所有物。先生がいなくなったら私はどこまでも追い掛け、見つけ出します。例えそれが死後の世界でも。それが私の愛であり、先生の奴隷である私の義務なのです」

劇から帰ってから、家族どころかもはや国公認の仲（事実は別として）と知った彼女はやたらオープンにナルミへの愛を語るようになっていた。

若干……いや、かなり方向性に問題はあるが。

と、シルバがナルミへの愛を語り終えた頃に、下の方で動きがあっ

た。

「粉砕！玉砕！大喝采ィィィィ！」

ナルミが奇声をあげながら跳び起きたのだ。

いきなりの大声に、びっくりする四人。

そしていまだに夢から覚めきっていないナルミ。

しばらく彼は動かなかったが、やっと頭が覚醒したのかゆっくりと寝床から起き上がる。

「……ふっ、あそこで地獄の暴走召喚からのカイバーマンでブルーアイズ三体とは……やるな、流石は正義の味方」

しかし、直前にあった自分のデスティニードローがなければ成立しなかった、などとよくわからないことを言いながら水を飲むナルミ。

そして顔を洗い、なにか悪寒を感じながらも白黒の薄い寝巻から、いつのまにかデフォルトになってしまった学ランに着替えて一息つく。

数秒立ったままフリーズしていたナルミだが、ふと思い出したように机に向かい出し、ポケットから何かを取り出す。

それは彼女達が見た事も無い、白い板である。

奇妙な光沢のあるそれをナルミが開くと、上は闇夜を思わせる程に黒一色で、下は見た事も無い文字が間隔を開けて羅列されている。

平たく言うと、ノートパソコンである。

だが、科学のかけらも無いこの世界でそれを理解できる者はまずいない。
彼女達も例に漏れず、最終的に人間が使う不思議な魔法具と言う結論に至った。

「……携帯が奴と繋がるなら、これでニコ動も見れるか？」

そう言いながらナルミが板を触ると、漆黒に塗り潰されていた方が急に海を思わせる青に変わった。
それからしばらくすると、青に染まった部分がまたも急に変わりそこにあったのは…

「……ひっ！」

「んなっ！」

「……」

「あれは……誰……」

黒い扇を右手に持ち、黄金の玉座に座る黒髪黒眼の優雅な女性がそこにいた。
妙齢ながら端正な顔立ちに紅を基本に彩られた異国の衣装、髪にはどこかの王冠のようなモノや見た事がない髪飾り、漆黒の瞳は全てを見透かすかのようにまっすぐ眼前の青年を見据えている。

「……壁紙、アリカ様か……いつのだ？つか地獄の門とか大分古いな」

ナルミ自身も予想外みたいだったが、全く動じずにまたも板をいじ

り出す。
よくわからない言語の歌を歌うあたりから余裕が見て取れる。
そしてまたすぐに板が白く変わり、こんどは文字がうつし出される。
そして崩れ落ちるナルミ。

「……わかってましたけどね。これは携帯と違うって」

そう言いながら、また先程の女性を出現させた後、板を青から黒に変えそれをしまう。
そしてため息をつきながら彼は部屋を後にした。

「あれは一体誰なんですか!?」

「わかりません!あんな女性、私も見た事が無いです!!」

「黒髪黒眼……彼女もまた人間なのか?」

スフィー、シルバ、隊長の順に慌てながら話しをはじめる。
それほどまでにさっきの女性の印象は強烈なのだ。

そこで一人、おだんご頭の少女が冷静に言葉を発する。

「……あれ、ただの絵じゃない?」

あたらずとも遠からず。
だがこれに反発する隊長とスフィー。

「あんな精巧な絵がありますか!」

「そうですよ先輩！あれはきっと封印された精霊か何かですよ！！」

「……封印ならむしろ魔法陣がでると思うし、文字が被さってたから多分絵だよ」

「じ、じゃあ、なんですか？あれは誰の絵なんですか！？」

控えめにシルバが質問する。

冷静さを装ってはいるが、誰が見てもわかるくらい動揺しまくりである。

シルバの質問に、少し考えた後に彼女は答える。

「……多分、あれはニホンの女王だ。ナルミ様がわざわざ様付けで名前を呼んでるし、玉座に座っていて王冠のようなものもしていた。服も見た事がないくらい気品に溢れていて、それを当たり前のように優雅に着こなす彼女はほぼ間違い無くニホンの頂点に君臨する女王だろう」

その言葉に愕然としつつも、どこか納得できた三人。

それだけあの女性は優雅さと気品、そして威厳に包まれていたのだ。

「……あれが…先生の国の女王…」

「うちの国の王妃様とはまた違う怖さを感じます……」

「名前は……たしかカベガミアリカ様か…」

案の定というか、やはりいろいろと勘違いをしている四人娘。

そんな事をしている三人に、さらに自身が分析したことを話す少女。

「……そして、ナルミ様はあれをつねに持って歩いている。つまり彼は祖国への、自らの主君への忠誠をいまだに持っているが、それでもなおこの国を救うために祖国を捨てたという事になる」

しんとなる天井裏。

なにか冷たい物が彼女達の胸に広がっていく。

「……これは、遊びで見ていい物ではなかった。私達がやった事は、ナルミ様への冒涜だ」

それがトドメとなり、彼女達の心に突き刺さる。

当のナルミからしたら、吹き出しながら全力で否定するであろう言葉も、彼女達にとっては致命傷となるモノであった。

思い込みとは、げに恐ろしいモノである。

ちなみにそれからしばらく、彼女達はその場から動く事が出来ず静かに泣いていた。

それにより、兵士達の間ではしばらく“啜り泣く亡霊”の噂が広まったのはまた別のお話しである。

それからしばらくして、だんだん皆も落ち着いてきた。

「……み、みんな、落ち、着いた？」

最初にそう切り出したのは隊長である。

彼女もまた、目は赤く呂律がビミョーに回っていない。

「は、はい……ぐす……なん、とか」

「……スン……大丈夫…です」

彼女の問いに答えたのはシルバとスフィー、もう一人はマイペースにお昼ご飯を調達してくるといってどこかに行っている。

「……まだ、続ける？」

隊長の言葉で再び沈黙が訪れる。

重い沈黙がしばらく続いたが、それを最初に打開したのはシルバであった。

「……続けます。こんな半端なところで止めたらそれこそお遊びだって証明してるようなものです！私は遊びではなく、本気で先生が旅に出る前に先生の事が知りたいんです！！」

そう高らかに宣言し、赤い眼で隊長を見据える。

その眼を見て彼女の言葉が本気だと感じた隊長は、小さく頷きスフィーに聞いた。

「スフィー、きみは続ける？」

「はい、私も続けます。私もナルミ様の、いえ、真の英雄の姿を見てみたいです！！」

そう言いながら小さく拳を作るスフィー。

彼女もまた、本気で答えている。

だが、客観的に見るとどうにも当初の目的とはズレている気がするが、それには誰も気が付かない。

そして二人が決意を見せたところで、見計らったようなタイミングで何かを持った少女がでてきた。

「……新作お菓子、カルミャヤキの試作品を貰った。それと、ナルミ様はエリザ姫様と共に、魔王陛下に呼ばれたらしいが……どうする？」

「「行きます！」」

かくして、新たな決意と共に少女同盟（仮）が再び動き出すのであった。

～？？？サイド～

どこかの、薄暗い部屋の中で二つの陰がうごめいていた。

「聞いたか？」

「うん、聞いた。どうする？」

「決まってんだろ……早速準備だ！」

「いつになるかもわからないのに……とりあえず、これは僕らだけの秘密だからね」

「ああ、それはわかってる」

「本当かなぁ……」

またここで、静かにそれぞれの思惑が動き出す。

～シルバサイド～

彼女達は今、魔王の私室の天井裏に潜んでいる。

最初、他の隊員達が見張っていたのを隊長権限と詭弁でごまかして交代させたのだ。

彼女達が来た時には、ガルクやエリザ達となにやら難しい政治のお話しをしていたのだが、今は話しが終わり魔王と王妃、そしてナルミだけがのこっている

潜んでいる途中、ガルクが彼女達の潜んでいるところを凝視してヒヤヒヤしたり、ナルミが神との交流があるかも知れないという事が発覚したりと色々あったが、今の所問題無く事は運んでいる。

そして、ナルミだけが呼ばれた理由は四人もだいたい予想はついていた。

「やっぱり、休暇の日程が決まったのでしょうか？」

「多分、そうだと思うけど……」

「……まだ、なんとも言えない」

そんな会話をする王妃の近衛隊の三人娘。
そしてその横では

「……寝袋に魔石灯、あとは…」

ついていく気満々のシルバが旅の準備に必要なモノについて考えていた。

「…シルバ、なにぶつぶつ言ってんの？」

「あ、いえなんでもないです」

そんな事をしているうちに、王妃とうとう本題を口にした。

「で、今回呼び止めた理由なんですけど……ナルミさんに貴族としての地位を与えようと思うの」

「ほぇ？」

これはシルバの発言である。
あまりに予想外な内容に、つい感情が声になってでていったのだ。
他の三人も、王妃が何を言っているのを理解するのに頭がついて行かない様子である。

「き、貴族！？休暇についてでなく！？」

そして話の中心であるナルミもまた、混乱を隠せないでいる。

だがそんな彼の反応もものともせず、王妃は事もなげに話しを続ける。

「ええ、休暇ももう実は大丈夫なのだけど、一旦こっちを優先しておくわ。実はガルクに頼まれたの、形だけでも貴族として扱う事は出来ないかって。いくらあなたでの今の地位が近衛隊名誉顧問だとしても、出身が平民で貴族の地位も無いから、貴族の娘と結婚は難しいのよ」

その言葉に一番反応したのはもちろん

「王妃様から……認められ……てる？……私達が……？」

「シルバさん、戻ってきて下さい。そして痛いです、腕を握らないでください」

シルバである。

そしてその被害を被っていろのはスフィーの右腕である。

そしてスフィーの願いは叶う事なく、シルバはさらに彼女の腕を強く握る。

「痛い痛い痛い痛い、ちぎれますちぎれますちぎれるっだだだだ！！」

「ふふ……ふふふふふ……私と……先生が……ふふふ…」

ガンッ！ゴンッ！

「あんたらうるさい、静かにしてよ」

さわぐ二人に隊長の鉄拳制裁がくだる。

「っつ～～～…」

「な、なんで私まで……」

頭を抱え、転がる二人。

そんな二人が痛がっているうちにも、下ではどんどん話しが進んでいく。

「いやでも！どうやって！？戦争以外は自分、何もやってないんですよ！？」

「あら、やってるじゃない。戦争でのあなたの活躍や戦後のゴタゴタとかで忘れ去られていたものが」

「……ありましたっけ？」

「あるわよ……盗賊団“朱きグム”の壊滅、あと戦争の報酬に逆賊の討伐分が入れ忘れられてたのでそれも」

王妃のその言葉に唖然とする四人。

それもそのはず、朱きグムとはこの世界でも五本の指に入ると言われている盗賊団なのだ。

小数精鋭で、個々の戦闘力が魔法を使いこなし並の兵士より遥かに強く、団をまとめ上げている頭の指揮能力が高いのだ。

小数である事を生かした多様な作戦に全員魔法を完全に使いこなすという、そこらのならずものの集まりな盗賊団とは訳が違うのだ。

「……あれですか、あなたの事をナルミ様が身をていして護ったていう盗賊団ですか」

「……たしか、あれ先生が一撃で全員気絶させたんですよね……」

「……討伐に兵士を三回送っても倒せなかったのに…」

「……まさに化け物ですね」

再びあらためてナルミの強さを実感する三人なのであった。

そんな感じにしみじみしているうちにも、話はどんどん進んでいく。

「議会はもう通っているわ。これに署名してくれたらもう、あなたはハセガワ家の当主、ハセガワ・ナルミよ。貴族でもそれなりに高い地位だから、ある程度の融通をきかせる事も可能よ」

「……マジっすか。いくらなんでもはやくないっすか?」

「何事も早め早めが一番よ」

「……貴族って、政治とかしなけりゃならんのでは?」

「違うわよ、政治は政治、貴族は貴族。あ、ちゃんとお家も建ててあげるわよ。シルバちゃんとの愛の巣ね」

「……」

「ついでに言うと、休暇についても支障はないわよ。あなたには反逆者から没収した領地も贈呈するから、そこの様子を見にいくついでに旅に出るって言えば問題ないわ。あいつも一応それなりな貴族だったから、そこにはあなたの別荘もあるわよ」

「……別荘って……どこの軽井沢よ……はは…ぱねぇ……どんな出世だよコノヤロー」

そう言って崩れ落ちるナルミ。
目は虚ろで机に突っ伏している。

「どうした？何か問題でもあったか？」

「……自分、そんなものいらないです。はい、荷が重いです」

力無く魔王の問いに答えるナルミ。
だがどこか的外れな答えである。

「まぁ、議会でもう決定した事だからもう拒否はできないぞ」

「……はぁ……わかりました、わかりましたよ！」

そう言って書類に名前を書くナルミ。
半ばあきらめたような、それでいてやけくそな複雑な顔をしている。

さて、この一連の出来事中、天井裏に潜んでいた四人はどういう反応をしていたかと言うと…

「あ……愛の巣……私と先生の…キャー！！」

「ヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！ちぎれる裂ける爆ぜるもげる！！」

「あんたらいい加減本当うるさい！！」

ガスッ！！ゴスッ！！

王妃の愛の巣という発言により、輝く未来へと意識をワープさせたシルバが再びスフィーの腕を持っていこうとしたので隊長式鉄拳制裁が再び下された。

「だからなんで私まで……」

悶えるスフィー。

だが、シルバはと言うと

「っつ～……隊長さん！私達の幸せが妬ましいからってひどいです！！」

この調子である。

隊長がこのままでは危険だと判断し、早々に見張りをオダンゴ頭にまかせ、二人を連れて別室に行くという判断は正しかったようだ。

従って、ここは今天井裏ではない。

近くにあった倉庫に隠れているのである。

倉庫と言っても、王族ゆかりの剣だとか落書きとも記号ともわからない国宝の絵画がしまわれたりしている所である。

そしてそこに響くのはスフィーの悲痛な叫びである。

「ギャーーー！！だから骨折れる痛い痛い痛い痛い腕！ヤメテ腕！！」

ガンッ！

鉄拳により再び沈黙する二人の乙女。

「いい加減にしなさい！うるさすぎ！あなたもはやくスフィーから手を離して！！」

そう言ってシルバをスフィーから引きはがす隊長。
スフィーの腕はもはや手の形に鮮やかな痣が出来ている。

「……まったく、あなた達本当に近衛隊員？よくいままでやっていけたわね」

「……私悪くないのに」

「……女の嫉妬は醜いです」

「ああん！？」

「「ごめんなさい」」

ようやっと落ち着いた二人は、綺麗に揃って頭を下げた。
そしてそれと同時くらいに

「……収拾ついた？」

オダンゴ頭がやってきた。

「やっとね……疲れたわ」

「……お疲れ様です。こちらもあのあとは特に何もなかったです」

そう言って彼女はナルミ達の会話を説明する。

「……以上が、あなたがたがいなかった間の出来事です」

「そうですか……わかりました」

「で、結局ナルミ様は貴族になられたのですね」

「うーん……なんかあのお方が貴族って想像しにくいかも……」

そんな会話をしばらく続けていたが、今は彼女達は本来仕事中のはずなのだ。

そろそろ戻らねば色々危ない。

「じゃあ、そろそろ解散しましょう。いい？今日の事は誰にも言ったらだめだからね」

「はい、わかってます」

「……りょーかい」

「……腕の痣、跡残んないよね…」

そう言って彼女達は解散した。
とはいえ、シルバ以外の三人は同じ場所へ向かうのだが……

「どうしたんですか？」

オダンゴ頭だけが残ってシルバの肩を掴んだのだ。
そして彼女は口を開く。

「……じつは、まだ他に大切なことを言っていない」

そう勿体振りながら、彼女はゆっくりと話を続ける。

「……四日後にある晩餐会にナルミ様も貴族として出席する事と、ナルミ様は祖国のしきたりからあと半年は結婚できないという事が判明した」

「半年……ですか…」

その報告はシルバを落胆させるには十分だった。
なにせ彼女は今すぐにでも結婚するつもりでいたのだ。

ナルミの意思は関係なく、彼女の頭の中ではもう決定していた事柄でる。
まことに、ヤンデレとは恐ろしい。

だが、肩を落としているシルバに彼女はもう一つ、重大な報告をする。

「そして、こっちの方が重要なんだけど……」

そう言いながら唇を舌で湿らし、すこし間をおきゆったり口を開く。

「とうとうナルミ様の、旅の日取りが決まった。」

その報告は、シルバの気持ちを復活させるには十分過ぎる威力があった。

そして、彼女は動き出す。

目的のため、手段を選ばずに。

EX・2＊陰からミマモル！（後書き）

……なんか、すみません。

そして無茶苦茶なとこで目をつむったらこれ、何も見えませんねｗｗ

今回は色々後に繋がパイプ的役割として複線をわかりやすいのからずらいのまで、はりまくりなつもりです。

……あくまで私がわかりずらいとおもっているだけで普通の人ならすぐわかるか？

……とりあえず、アリプロファン集まれとだけ言っておきますｗｗ

26回目＊キノコの呪縛《前編》（前書き）

これからは週一をめどにやっていきます。

そして貴族は誰が偉いとかは全く無知なので、ノリで読んで下さい。

26回目＊キノコの呪縛《前編》

安らぎ。

それは静寂なる空間で、徒然なるままに繋がらないニコ動に想いをはぜながらただただ、無為なる時の流れに身を任せる事を言う。
うん、いとをかし。

まぁつまり何が言いたいかと言うとだ。
安らぎってか癒しが欲しいんだよ、自分。
自分は今流行りの癒し系じゃないんだ。

自分は癒され系なんだよ。
誰か癒せ。

……ふぅ。

さてさて、何故に自分がこんなに荒れているのかを説明しましょう。

ただいま自分こと長谷川鳴海、もっそいでっかいパーティーに来ちゃっております。

そしてその会場の隅っこにて、自分は料理と一緒に置いてあったジュース（貴族様方のちびっこい子供達が飲んでたやつ。…酒ではないと信じたい）をちびちび飲んでいる。

恰好的には、一張羅（詰め襟）を着こなし、ソーラー発電腕時計を完備して、耳にはヘッドフォンでミクたんの羅刹ト骸をバリバリ流す、と言うくらいのどこに出しても恥ずかしく無い一般男子高校生

スタイル。
しかも、ヘッドフォンのおかげで外界のお貴族達を気にする事もなく、自分の世界に閉じこもってただパーティーが終わるのを待っている。

では、なぜに自分がこんなに癒しを求めて、早く終わるのを待ってるかってーと、それにはもちろん理由がある。

え？何かって？
決まってんでしょ、んなの。

自分がこの会場に入ってきた途端、周りのお方々が

「……あれが…黒騎士……」
「……なんでも、ランドルフ家の娘と結婚するために爵位についたとか……」

「そのために盗賊団全員を血祭りにあげたとも私は聞く」

「いや、私はランドルフの娘を手に入れるため、親である宰相のガルク公爵と決闘をして奪い取ったと聞いたぞ」

とかのたまいはじめたんだよ。

……オイコラテメェら、陰口叩くならもっとばれないようにしやがれや。
それか話しかけたいなら自分の半径5メートル以内にとっとと入って話しかけやがれコノヤロー。

そろそろ心が崩壊するぞ。

そしてガルクさん宰相だったんかい、似合わん。

……まぁ、はい、そんな感じです。

つまり、なんかみんなして噂におびれせびれにエラ鱗、さらには浮袋まで付けたようなとんでもない噂を自分を遠巻きにしながら話してんですよ。

孤高とか一匹狼とか言ったらカッコイイが、本人が望まないならもはやイジメ、精神的リンチだよ。

そしてそんな扱いに耐え切れなくなった自分は、ヘッドフォンを装備してこの中毒性の高い歌を聞いている訳ですよ。

うん、ハ〇さん最高。

……寂しくなんか、ないもん。

「……な……ナルミ……おい……」

もういんだ、自分、これ終わったら吊ってやる。

「なる……きい…のか……」

はぁ……もうやだ。

そろそろこのジュースもあきたし、でも他のは何が入ってるかわからんしなぁ……

「ナルミ！！」

「にょう！？」

いきなり叫ばれ、いきなりヘッドフォンを強奪された。
そして即座にアイアンクローをかまされる。

「き・さ・ま・は私の話が聞こえんのかぁ！！」

その犯人は、猪突猛進という言葉がよくにあう暴走王女、エリザ様でありました。
ピンクいピーチ姫みたいなドレスを着た彼女はめっちゃ口をひくつかせながら、小鳥くらいなら一瞬でヤキトリにできるだけの熱い視線を自分に向けております。

……やっぱこの世界はみんな眼力が凄いんだな。

なぁんて暢気に構えていると、顔がメキメキ軋む気がした。

やばい、顔が部位破壊される。

「すまん、聞こえんかった」

「あぁ！？」

「ごめんなさい、もうしません、なんでもするから許してください」

……チキンと罵るなら罵るが良い。
ただこの眼で睨まれてみろ、青鬼だって友達見捨てて泣いて土下座するぞ。

そしてそんな自分の願いが通じたのか、エリザは自分の顔から手を離した。

「……全く、お前は貴族の自覚があるのか？こういう場はもっと社交的に、家同士の良好な関係を築くものなのに……壁をつくってどうする」

「貴族の自覚？なにそれおいしいの？つか壁つくりたくてつくってる訳と違うし。勝手にみんな自分から離れてくし。」

そもそも貴族なんか、よくわからないっての。

「まぁ、私はお前にそんな事期待はしていないが、せめてもう少しそれっぽくしてくれ。なぁ、ハセガワ子爵」

はい、ここ重要。
子爵、とは自分の貴族としての爵位らしいが……

「うむ、じつは子爵がどれくらいか全くわからん。ぶっちゃけ偉いん？」

自分が知ってんのは、公爵やらの名前だけでどれが上かはわからないのだ。
だから自分が偉いって実感もなければ理解もできない。

わかって軍曹や二等兵や伍長くらいだ。

そしてそんな自分がなんとなしに質問したら、エリザは

「あー、まぁあれだ、伯爵より少し下くらいの……まぁ、そこそこ偉い」

目を逸らしながら答えてくれた。

てゆーかおい。

「……一国の姫として、そこら辺知らないのはどうなんだ？」

こいつ、ぜってーわかってねぇな。

自分のクリティカルな指摘に対し、エリザは慌てながら。

「な！！ち、違うぞ！わからない訳ではない！たた今の奴らに覚える価値がある奴がいないからど忘れしただけだ！！」

「そっちのがヒデェよ。つか、んな事でかい声で喚くな」

こいつの一言で周りにいた貴族方が、一瞬で顔を青くしたり赤くなったり紫に染まったりするのを見て、なんともかわいそうな気持ちがした。

てゆーかこいつ、本当に姫か？

そんな些細な疑問を頭に浮かべている間に、エリザは顔を微妙に赤くしながらそっぽを向いて叫びはじめた。

「ふん！自分の嫁をほったらかして一人で突っ立ってる奴に言われたくないわ！なぁシルバ！」

「みゃう！！」

尻尾を踏まれた子猫みたいな悲鳴が貴族の群れの中から響きはじめ

た。
それを聞いた周りの方々は、悲鳴の発信源と自分との間を避け、道を作りはじめる。
そこにいたのは、黒を基調にたまに白いフリフリがついたドレスの、ゴスロリファッションなシルバちゃんである。

「あ…あの……その…あの……ぁぅ……」

エリザの発言と周りの注目から、シルバちゃんは顔を真っ赤にしながらもじもじしている。
指をくるくるしながら恥ずかしそうにその場に佇んでいるその姿は、そこらの女の子には真似できないクルものがある。

あーくそ、萌えるなこのやろー。
これで病んでなければ最高なのに。

とかなんとか考えている自分も、やっぱり恥ずかしい訳である。
さらに重い沈黙が嫌いな自分はその空気を打破するべく愚かにも声を発してしまった。

「……あー、シルバちゃん……その……その服、似合ってるね。とってもかわいいよ」

まず自己弁護をしよう。
この発言は自分が沈黙に堪えられずにどーにかこーにか見つけ出した自然と思われる発言である。考えながらの発言により、歯切れも悪いし目も泳いでしまっているが、この言葉に他意は……少ししかない。

だが、周りの捉え方はそうではない。

「ムフフフ……似合ってるね、とってもかわいいよ、か……こんなに注目されている所でいきなりそれか。いゃぁ、大胆だな、ナルミ。照れながらもしっかり褒める、さすがだ」

「はい？」

「とぼけるでない。そもそも私の服を見て全く無反応だったくせに、シルバの事になると即座に反応する。これが惚れた弱みという訳か」

ムフフ、と嫌らしい上品さのカケラもないような笑いをしながらエリザが話す。

ちなみにシルバちゃんは自分が褒めた事により再起不能、あわあわ奇声を発して手をぶんぶん振っている。

そんな彼女にエリザは近付き、腕を掴んで再び自分の所にやってくる。

「ほれ、悪い虫がつかないようにしっかり護ってやれよ。まぁ前までならともかく、今お前からシルバを奪おうなど考える愚か者などいないとおもうがな」

そういいながら、シルバちゃんを自分の所にポフッと押し渡す。

そしてシルバちゃんはバランスを崩し、自分のお腹辺りに倒れこみ、反射的に自分はそれを倒れないように抱えこむ。

すると途端に周りから“おー”とかいう歓声が。

……うん、気持ちは何となくわかるが、恥ずかしいからやめて欲しい。

「じゃあ、私は戻るがあとは任せたぞナルミ。シルバはさっきからお前を捜してうろうろしてたんだ、もうはぐれないようにしろよ」

そう言いながら奴はそそくさと戻ろうと…

「ぐへっ!?」

「おう?」

……い、痛い。

こいつ、ヘッドフォンを持って行こうとしやがったな。

首にぶら下がってたＭＰ３プレイヤーがめっちゃ引っ張られた。

「……返せ」

「……チッ」

渋々返すエリザ。

マジでこいつ、姫としてどうなんだ?

「……なんだそれは?」

「え?戻るんでなかったん?」

何をぬけぬけと、こいつ。

そんな態度と舌打ちが腹立つから、ついつい冷たい態度をとってしまうでないか。

だがそこは優しい自分、首からプレイヤーを外してエリザにおいでおいでと手招きする。
そして近付いてきたエリザの首にそれをかける。

「ほり、これが本体。んで、こっちを耳にあてれば歌が聞こえるから」

そんな感じに大まかな説明をしてやると、奴はうきうきしながらそれを聞いている。

「ナルミナルミ、これが噂のぼーかろいどの召喚器か？」

「いや、それらの歌が入ってるだけ。奴らは出てこん」

つか、実際ボカロが三次元に来たらいろいろと怖い。

特に眼とか眼とか眼とか。
あの眼の大きさ絶対脳みそ圧迫してるって。

「んじゃそれ貸すからあっちゃいってなさい」

ヘッドフォン貸すだけで厄介者がいなくなるなら安いもんだ。

「おう！ナルミもいつまでシルバの温もりを感じてないで、少しは楽しめよ。じゃあ私はこれ以上お前達の邪魔をするのも忍びないからもう行くぞ」

そう言いながら奴はノリノリでヘッドフォンを取り付け、どっかに去っていった。

まぁ、あれだ。
大音量のＧＯ　ＴＯ　ＴＨＥ　ＨＯＳＰＩＴＡＬ！！でエリザの耳がやられる事を切に願う。
……なんともちっちゃい仕返しだ。

しかし……温もり？

腕の中を見ると、自分がさっき支えた時のままの体制で、真っ赤になりながらもしっかり自分に縋り付くかわゆい娘っこが一人。

……すっかり忘れてた。

「……一人で立てる？」

「む、無理です立てません。まだこうしてたいです」

……この娘、こないだからだいぶ積極的で大胆に成長したな。
なぜだ？

てゆーかそれより、立ってくんなきゃ困るんだが。
めちゃめちゃ恥ずかしい。

そして悪い事は何事も重なるもので

「あらあら、よかったわねシルバ。でもそれをやるのは今ここでではなく、後でナルミさんの部屋でやった方がいいわよ」

はい、リリスさんご登場である。
水色に紫の装飾付きの綺麗なドレスを着ながらやっぱりのほほんと

した顔を崩さずに、自分ら二人の前にやってきた。

「私も早く孫の顔が見たいし、むしろ今から「Ｓｈｕｔ　ｕｐ!!」」

…しゃ…？」

何を言い出すこの御仁は。

ついいい感じの発音が出来てしまったではないか。

「ほらシルバちゃんも立って。……そんな不満そうな顔しないの」

そしてそのままの流れでシルバちゃんを立たせてやる。

だが立った後もこの娘は腕を掴んでくる。

ほんとに、こいつは。

「フフフ、シルバ、大丈夫よ。ちゃんとナルミさんなら今夜あなたを「だからＳｈｕｔ　ｕｐ!!」」

そしてほんとにこの人は!!

何考えながら生きてんだ

「まったく、で何か用ですか？」

（訳・あんた何しにきたん？マジ迷惑）

こんな事を言ってしまう自分を誰が責めれようか、いや責めれない。

しかし、リリスさんにはそれが通じず、言葉の通りに捉えてしまった。

これを俗に一人相撲と言う。

……多分。

「そうなのよ、実はね、ナルミさんがいきなり子爵なんて地位についちゃったのを快く思わない方々がいるから、気をつけてねって言いたくて」

「……それ、そんな大声で言わないで下さいよ」

この人、脳みそあんのか？

てゆーか何か、自分変な逆恨み的なのの対象に選ばれちゃったわけか？

……みんな死ねばいいのに。

「そう？なら小声で言うわね」

ちゃうわ、黙ればいいんだよ。

あぁもういらいらする。

「あと、シルバって親とか抜きにの結構かわいいじゃない？ガルクの地位もあったし結構狙ってた方もいたんだけど……そっち方面でも危なそうだから気をつけてね」

「来たら即座にぬっ殺しますからご安心を。むしろぬっ殺されに来て欲しいくらいで。もうあらゆる手段を使ってこのストレスを発散させて貰いたい」

ホントに、来るならこいや。

ばっち来いですよ、狂喜乱舞で血祭りですよ。

「……ナルミさん、もしかして酔ってる？さっきからなんか変よ」

んー？
変とな？

「どこらへんが？」

「なんか…全体的に性格や言葉が変というか……なんか怒ってるようでそうでないような……さっきから嫌みやよくわからない言葉をつかったり……」

あ、嫌み通じてたか。

てゆーか変か？
自分そんな気はしねーぞ？
頭大丈夫？

「んな訳ないじゃないっすか。いい精神科の病院紹介しましょうか？」

「それ！せーしんかが何かわからないけど、そんな嫌な口調はこの前しなかったわよ？シルバから聞いた普段のナルミさんもそんな感じしないし、やっぱり酔ってるんじゃない？」

あー？
しつこいなぁこの人。
マジ死ねばいいのに。
むしろ自分が引導を渡してやろ……

ちょいまて自分、何を考えてる？
なぜにここでそんな危険な殺人計画を練っている？

たしかにおかしいぞ、これ。

「……ちょっちそこのネコミミ、こっちゃこい。そう、お前やお前」

異常を感じた自分は、近くにいたネコミミメイドを呼び寄せた。
リリスさんの登場から、周りの貴族はなんかそそくさと逃げてったので割合楽に呼ぶ事が出来た。

……うん、脳に反して命令口調になってる。

「は、はい！な、ななんでしょうか！？」

めっちゃびくつきながら来るネコミミ。
あぁ、この反応すらいらいらする。

「これ、なんの飲み物？」

そんな気持ちを無理矢理押さえ、自分は彼女に持ってたジュースを突き出した。

「あ、こ、これは……生ムリヌ一番搾りの最高級ミュール酒です」

……マテマテマテ。

「スマン、もっかい、パードゥン？」

「は、はい！あの……最高級ミュール酒…です」

「その前！！」

「は、はひ！！な、ななな、生ムリヌ一番搾りで……す」

「ここでもか！？」

マジですか！？
キノコお酒に使います普通！？
頭おかしいんでない！？

「先生、どうしたんですかいきなり」

「あぁん！？」

「……し、シルバは何があっても怯みません。先生がなんで怒ってるかわからないけど、落ち着いて下さい」

あ……ああ、そうだ落ち着こう。
シルバちゃんには罪はない。
てゆーか誰も悪くない、むしろ確認しなかった自分が悪い。

……つか、シルバさん。
そのうるうるした涙目は反則です。

「あ……ご、ごめ…なざ……ごめん……なざい……」

そして泣くなネコミミメイドよ。
グズグズうるさい。

「あー、あんたは悪くないから、うん、大丈夫、だから黙れ」

後になって思う、最悪だ自分。

「ナルミさん、なにがあったんですか？ミュール酒なら子供用だしそんな酔うような事もないし……物凄くお酒に弱いとか？」

説明面倒だな、おい。

「……ムリヌが、駄目ですね。人間の弱点です毒です、精神がいろいろとやばかったり不安定になります、はい」

うむ、簡単簡潔、わかりやすい。

……どしたよ三人、その反応。

「ムリヌ、毒なんですか！？」

声でかいよ、うるさい。

「そうだったの……大丈夫？気持ち悪くない？」

あなたものほほん以外の表情あるんすね、初めてしりました。

「せ、先生……まさか死んじゃいませんよね！？そんな訳……ない、ですよね？」

一回君の家で食べたけど死ななかったよ？

……駄目だ、本気で心配してくれてる三人にこの反応は、人として終わってる。

戻って吊ってこよ。

「……すいません、自分部屋もどって寝ます、はい。これ以上はいろいろと危ないです」

すたこらさっさと戻ろうとする自分。

なんか一人顔を真っ青にした少女が後ろからついてくるが気にしないでＢダッシュで逃走を計る。

しかし、運命はそれを許さないようだ。

走る実際の目の前に、いきなり誰かが意図的に出て来たのだ。

もちろんそれに自分はぶつかり、痛い思いをした。

そして、そのぶつかった奴はと言うと。

「おいおいおい、ちゃんと前を見て歩きたまえ。……おや、誰がと思えば戦しか能のない黒兵士ではないか」

金髪金眼の嫌みったらしいキザな男がそこにいた。

男は１７歳くらいで、自分より２０センチは小さく全体的に細く華奢な感じである。

ただ、頭に二つの触覚がある。

そしてその男は見た目通り、嫌みな言葉をつらつら連ねる。

「たしか君は魔力がなく、武芸しか出来ない落ちこぼれだったな。この前は運よく武勲をあげたようだが、実際はどのようなものだか……」

……こいつ、存在が駄目だ。
拷問楽器『妖謡・魔』（イビルストリンガー）でも食らわせてやろうか？
とかなんとか、危ない事を考えてるとシルバちゃんが自分の腕をギュッてしながら
「あなたに先生の何がわかるって言うの！！いますぐ謝りなさい！」
こう叫んだ。
対象はもちろんあのキザ男。
しかしキザ男はそんな彼女の攻撃をものともせずにこうのたまった。
「ふん、僕は自分より下の者には謝らないよ。それよりシルバ・ランドルフ嬢、こんなのはほっといて僕と一緒にいないかい？」
「誰が女たらしのサザールスなんかと！私は不幸になるってわかってていくていく程馬鹿じゃありません！そんな事より今すぐ謝れ！！」
……あ、闇化しそう、この娘。
確かにこいつはムカつくし、シルバちゃんが自分のために怒ってくれるのはうれしいが、ここで覚醒されたら、ねぇ。
とりあえず、落ち着かそう。
「シルバちゃん落ち着いて。弱い犬程よく吠えるんだ、いちいち小物の相手をしても時間と体力の無駄だよ。それより早く部屋に戻りたい」

そう言って、彼女の手をとりこの場を後にしようとする自分。
だがしかし

「ま、まちたまえ！！」

キザ男がなんか呼び止めはじめた。

「弱い！？僕が小物！？君は僕が誰かわかっててそんな暴言を吐くか！？」

はぁ？
何言ってんのこいつ。

「いやしらねーし。つか知る必要性がねーし。何お前自意識過剰？ナルシーはキモいだけだよ」

自分の言葉に顔を真っ赤にさせながら怒るキザ男。
あー、ナルシストはこれだから。

「ぼ、僕の名前はグルーム・サザールス！！ガーリクル・サザールス公爵の息子だ！！」

へー、そーなんだー。

「……で？」

「は？」

「いやだから、あんたの親父が公爵なのはわかるが、あんたは何？まさか親父が公爵だからってだけで威張ってる訳じゃないしょ？そ

れは親父の地位であってお前の地位じゃないし」

この言葉でさらに顔を赤くするグルームと言うらしいキザ男。
奴は近くにあった青い飲み物を取り

バシャ！！

自分にかけはじめた。

きっちりそれは防いだが、さすがにこれはトサカにきたので、自分も同じのを三つ持ち

「そぉい！！」

パリーン！！

グラスごと投げ付けた。

さすがに顔にはやらなかったが、胸に当たり見事に割れるワイングラス。
それと共に周りから“おぉー”やら“まさか…”やらの声が。

そして肝心のキザ男はと言うと

「……フ…フフフフ」

なんか壊れたように笑いはじめた。
ヤダ不気味。

自分が気味悪がってると、シルバちゃんが横から

「……先生…絶対勝って下さいよ」

とか言ってきた。
ワケワカンネ。

「何を？」

「決闘です。あいつが挑戦を出して先生が受けたじゃないですか。
かなり過激でしたが」

……マジで？
どこの丸マ？

「おい黒兵士！中庭に来い！お前を叩き潰してやる」

……まぁ、こいつが相手ならむしろ大歓迎。
いままでのイライラ、全部発散させてもらおう。

「はっ！！自分に挑んだその勇気、それだけは褒めてやるよ！！」

そうして、なんかいつにもましていろいろとヤヴァイ自分の決闘が
はじまった。

……後になって思う。

やめときゃよかった。

そして断言しよう。

その日は絶対仏滅だ。

26回目＊キノコの呪縛《前編》（後書き）

製作秘話？

今回と次回をやりたいがためにキノコ設定を作りました。

ただ、前回いろいろと叩かれた事もあり実際ボツろうか迷った結果、ボツったら設定の意味ないじゃんって事に気が付き結局入れちゃいました。

なんかすいません。

こんな私ですが、これからも完結まで読んであげて下さい、喜びます。

……本格的な言い訳は後編で。

できればそれまでナルミ君の性格批判は遠慮して……あ、やめて痛い、石を投げないで！！

……ごめんなさい、自信が無いんです。

27回目＊キノコの呪縛《後編》（前書き）

かっとなってやった、だが後悔はしている

27回目＊キノコの呪縛《後編》

さぁ、ここは中庭らしい所。
そこの回りを、一部を除きいろんなお方々が所せましととり囲んでいる。

ちなみに一部とは、ヘッドフォン完備のエリザが権力を使ってテーブルに椅子、そしてデザートらしきフルーツ完備の完全無欠のリラックスゾーンである。

正直、見てていらつく。

そして肝心の自分はと言うとだ。

「さぁ黒兵士、はじめようか」

その中央にて、キザ男達と対峙しております。

まぁ、望んでやってきたようなものなのでしっかりキザ男は処刑しますよ?
今日の全てのイライラ成分を全部あ奴にぶつけてあげます。

……が、あくまで自分が対峙しているのはキザ男達なのだ。
そう、キザ男“達”。

もそっと詳しく言うと、なんかマッスルな青い鎧と子供みたいな白マント、そして剣を持つキザ男。
最初の二人に至っては兜やフードで顔が見えない。

……たーしか、これ自分の記憶によれば自分とキザ男の決闘だったよね？
まだアルツハイマーにはなってないから、ボケた訳でもないし、間違えようがない。

「……その二人は誰？」

多分きっとおそらくこいつらは審判とかだろう、うん。
さすがのキザ男もここで他人の力を借りる程落ちぶれては……

「あ？こいつらは僕の手下だ。もちろん決闘に参加するぞ？」

あ、駄目だこいつ。

しかしこれはルール的にアリか？
アリだとしたらこの世界は相当ダメダメだ。

とりあえず気になるので、自分の後ろで他の貴族に混ざって待機しているシルバちゃんに聞いてみる。

「……シルバちゃん、手下が出るってマジ？」

「は、はい！決闘は配下の者が参加者の武器として参加する事があります。でも決闘のるー……るー る的には可能ですが…えと……まぢでやる方ははじめて見ました」

ふむ、困った時のシルバちゃん。
だが使い慣れない言葉を無理して使わんでもいいぞ？
聞きにくいだけだし。

まぁ、とりあえずわかった事は……

「あー、とりあえずあの触覚が一人で自分に挑む勇気がなかったっつー事ね。ワリィキザ男、さっき褒めたの撤回するわ。かわりにキングオブチキンの称号をやる」

「なんですか？きんごぉぶてきんって」

「キングオブチキンね。直訳すると……ビビリ王とか腰抜け王とか。チキンが弱虫とかで、キングが王様って意味。つまり弱虫界の王様」

ふぅむ……

今日は舌が絶好調だ。

「あ、ぴったりですね。決闘を申し込んでおいて手下を引き連れてくるあたり、腰抜けの極みですもの」

シルバちゃんももはや闇一歩手前である。

したがって、彼女も饒舌にキザ男の悪口を機関銃よろしくな感じに大量射出している。

いろいろと危ない自分に半闇のシルバちゃん。

もはや誰にも止められない最悪コンビ（多分）がここに誕生した。

周りの貴族やらは頷いたり共感しながら自分らのマシンガン侮辱をきいている。

シルバちゃんの隣にいるリリスさんは、のほほんとしながらも焦っているような器用な表情をしながら困っている。

ただエリザはヘッドフォンをしているからかただ眺めているだけである。

さてさて、では肝心のキザ男はと言うとだ。

「き、貴様！！どこまで僕を侮辱するか！？」

真っ赤なお顔でマジギレしている。

実に滑稽。

だが、今宵の絶好調な舌はとどまる所を知らない。

「あーどこまでだ？まだ終わりが見えない。もうちょっと待っててくれ、全部言い切るから」

「先生、ちょっとじゃ無理ですよ。少なくとも三日はもらわないと、多過ぎます」

「ああそっか、これはうっかりしていた」

「もう、うっかりさんですね」

「あはははははははは」

「うふふふふふふふふ」

……後からリリスさんに聞いたが、この時の自分達はものすごい不気味で恐ろしかったらしく、周りの貴様はみんな震え上がっていたらしい。

しかし、キザ男だけは違う反応を示した。

よするに、馬鹿にされ過ぎて頭に血が上ったらしい。

「き、きさまらぁ！！もう許さん！！デリ！チー！行け！！」

そうキザ男が言うと、青鎧がでっかい斧を持って自由に向かって走りだし、白マントはどこから出したのか杖らしいモノを掲げながらなにかぶつぶつ唱えはじめた。

ここで自ら来ないあたりがキザ男である所以か。
もはや救いようが無い。

いや、救う気なんて砂カケラの一粒分も無いけどね。

つうわけで、いろいろとからかいながら戦いましょう。
さて、何がいいかなぁっと。

そうやって余裕をぶっこいていると、鎧さんはいつのまにやら目の前に。
かなり力を入れながら、自分に切り掛かろうとしている。

……よし。
これはあれだな。

「うるぇぁぁ！！」

そんな奇声とともに、自分の首をぶった切ろうと斧をフルスイングする鎧君。
だが甘い。

「バラバラ緊急脱出！！」

「！！？」

切る前から突然首が飛んだ自分を見て、驚く鎧。
しかし、これだけで終わらす自分ではない。

まぁ、ここまでやったらこれをやらねば。
なにせこいつ青いし、斧だし。
ねぇ。

つうわけで、鎧を引っつかみ、上半身を切り離してそのまま上空へ。
そしてさらに手首だけになりじたばたする鎧をひっくり返す。

「落ちて脳天カチ割れろォ！！」

そして頭から勢いよく

「空中錐揉み大サーカス！！」

錐揉みさせながらたたき落とす。

……いゃぁ、実際やってみると爽快だねこりゃ。
首だけふわふわしてる感覚はどうにも落ち着かないが、なんか気持ちいい。

そんなよくわかんない気持ちをふわふわしながら味わってると、今まで頭が埋まってぴくぴくしてた鎧さんが、這い出してきた。

「……グッ……ガハッ…！！」

そしてふらふらしながら兜を取り、血を吐いた。
なかなか渋い金髪碧眼のゴリマッチョである。

「げっ、効いてねェ」

いや効いてるけどね？
血吐いてるし、ふらふらだし。
けどもこの場合はこれを言わなきゃならない気がした。

しかし……普通はここまでやられたら斧とか捨てて降参しない？
なぜにまだやる気でそんなの握ってんのさ。
眼の焦点合ってないのに、ご苦労様だね。

さて、どうやって意識を刈ろうか。

「ストゥール！！」

自分がゴリマッチョをどう料理するか考えてると、後ろからイミフな叫びが聞こえた。
多分声からしたら声変わり前の男の子っぽい。

「ん？」

そしてその声に反応して後ろを向く自分。

そこには、白マントの子供が杖を掲げてる姿と、自分に向かってくる三つの直径1メートルくらいの水の塊が。

……あ、当たる。

「おおぅ！」

ドバッシャァァン！

自分を中心に盛大な水しぶきが上がり、辺りが霧に包まれる。
そしてそれを見たキザ男は

「……ふ、フハハハハハ！どうだ！これが僕の力だ！！僕に歯向かった事を死んで後悔するんだな！！」

と、高らかに勝利宣言。
つかお前の力って、どこらへん？

そしてさぁ、勝手に人を殺すなよ。

「フハハハハハハハ……は？」

「チャオ♪」

霧が晴れたら目が合ったので、とりあえず手を振って挨拶しといた。
したらよほど嬉しかったらしく、口をおもいっきりあんぐりさせながら見入ってくれた。

うん、実に愉快。
サイマグネットはこの世界なら万能かも知れないな。

そしてそいつはふるえながら、自分を指指してもつれた舌でこういいはじめた。

「な、ななな、なんで生きてる！？あ、あああれはチーの全魔力

を注がせた最上級魔法だぞ！？」

ん？

全魔力？

よく見ると、キザ男の横には倒れて虫の息になった白マントが。

……ほぉう。

「つまりあれか。貴様はその子が倒れる程の魔力を使うように命令して、やらせたんだな？」

「な、何が悪い！デ、デデ、デリ！さっさとこいつを殺せ！！」

そうキザ男が言うと、後ろでふらふらしていたゴリマッチョが、再び自分に切り掛かってくる。

頑張ってるようだが、バラバラの能力の前にはぶっちゃけなんの意味もない。

なのでそんなのは無視して話を続けようとする。

「じゃあなんのけ……」

ズバッ！！

続けようとしたが、上顎と下顎で見事に分けて切られたので続ける事が出来なかった。

……こいつ、邪魔。

とりあえず顔は元に戻して、それ以外のぶつ切りになった自分を一旦いろんなところに散らばせた後、鎧の周りにそいつらを集結させる。

そして

「このターンXですべてを破壊して、新しい時代を始めるのだ！！」

ガガガガガガガガガ！！

そのセリフと共に自分の肉片から数々のビームを乱射させる。

そしてトドメに

「できるわきゃねーーーだろぉーー！！」

ドガァァン！！

ゴリマッチョを中心に大爆発を起こしながら、それを背にしてバラバラになった体を元に戻す自分。

被爆したゴリマッチョがゆっくりと、スローモーションで倒れていくのが気配でわかる。

……別に自分は凄くないし∀のお兄さんじゃないから、何も言わないよ？

久しぶりに五体満足になった気がするので、首をコキコキさせながらぶざまに尻餅をついているキザ男を見る。

するとそいつは、まるで闇のデュエルに負けたみたいに怯えて、叫んだ。

「ひぃ！！ば、化け物！！」

「……失礼な」

そう言いながら自分が一歩近付くと、そいつはわしゃわしゃとスリッパで二回程叩かれたGみたくはいつくばって自分から逃げようとした。

しかし、なかなかうまく行かないようでただじたばたと悶えながら転がってるようにしか見えない。

「なんというかこれは……」

「憐れですね」

いつの間にやら自分に近付き、左腕にぶら下がるように抱き着いているシルバちゃんが全ての足をもぎ取られたザトウグモを見るような目でキザ男を見下し、自分の気持ちを代弁してくれた。

しかし……これは……

この肘あたりの柔らかな感触は……

「……シルバさん？なにか当たってるんですが、すこし離れてくれません？」

「イヤですか？」

「いや、イヤっていうか……そーでもないけど……困るっていうか……」

うん、返答に困る。

イヤではないが……うん、なんといえばいいのだ。
ボキャブラリーの足らない自分が憎い。

……ヤメテ！そんなジャンガリアンハムスターみたいなウルウルした目で見ないで！

「つっ～～……わかったよ、好きにして」

「はい！……へへへ、お母様の言ったとおりだ」

渋々承諾する自分と、それを聞きさらにギュっとしてくるシルバちゃん。
それにより、さらに小さすぎず大きすぎない二つの柔らかなモノに挟まれる自分の腕。

……正直、たまりません！！

……にしてもシルバさん、小声でも聞こえてるよ？
そしてリリスさん、怨みますからね。

「これはこれはハセガワ子爵。なかなか見せ付けて下さるな」

困っている自分に声をかけてきたのは、いかにも神経質な印象の触覚がついた茶髪の男だ。
彼の黄色い眼には。なんかいろいろと気持ち悪い感情が渦巻いている気がする。

「……あなたは誰？」

一暴れしたおかげで、ムリヌ成分は大分飛んだらしくわりかし丁寧

な発言ができた。
ただ、シルバちゃんからは警戒オーラがビシビシ来ている。

「私の名前はガーリクル・サザールス。先程は息子が世話になったようで挨拶に来たと言う訳だ」

……ガーリクル……ガーリックル……ガーリック……。

「ぶっ！！」

思わず吹き出した。
だって名前が、自分の耳にはもうニンニクという意味にしか聞こえないんだもん。

「……なにがおかしい」

自分の行動にいたく不快感を感じたガーリクルさんは、それを隠そうともせずに自分に聞いてきた。

自分が正直に答えようかどうか迷っていると、自分の左側から声がしてきた。

「先生はあなたがあの憐れで愚かでかわいそうな方の親だって言うのがわかって笑ったんですよ。なにせ、きんぐほぷちきんの親ですから。さすがサザールスですね」

……敵意丸出しですな、シルバちゃん。
そしてキングオブだ、ホプじゃない。

「ふん！相変わらずランドルフの家は子供の躾がなってないな」

「あら。少なくともさっきのあなたの息子よりはマトモに育っている自信はありますよ？」

そのシルバちゃんの発言に、こめかみあたりに青筋をみせるガーリクル。

そして、急に怒鳴りだす。

「お前は誰に向かってそんな口をきいているかわかっているのか！！私はガーリクル・サザールス公爵だぞ！！」

「私の父はガルク・ランドルフ公爵ですが何か？」

へぇ……ガルクさんって公爵なのか。

どんくらい偉いかは自分にはわからんが。

てゆーかシルバちゃんよ、そんな風に啖呵を切るんなら自分の後ろに隠れるなよ。

それはそれでかわいいけど、しまりがないぞ。

「くっ……まぁいい、貴様の私に対する無礼は後にしよう。それよりハセガワ子爵」

「あん？」

なぜにここで自分？

いまの話に関係なくね？

「私の息子が貴様にひどくいたぶられたと聞いたのだが……それが本当だとしたら私も黙ってはいられなくてね」

……子供のケンカに親が出て来るっておい。
あれか、これが噂のモンスターペアレントか。

「あれはあっちから挑んできた決闘です。それに先生が勝っただけで、何も文句を言われる筋合いはありません」

「違うな、彼は我がサザールス家の誇りに傷を付けた。従ってそれなりの謝罪をしてもらわねばならない」

「なぜですか！？決闘を申し込んだのはそっちなのに、なんで先生が！」

「彼が子爵で私が公爵だからだ。下の者が上の者に従う、当然だろう」

……ああ、こいつはあのキザ男の親だ。
いたく実感できる。
そしてシルバちゃんが嫌う理由もわかる。

「決闘は正式なものです！それをなんと言う暴論！恥を知りなさい！！」

「まぁまぁシルバちゃん、落ち着いて」

しかし、オトナな自分は熱くなるシルバちゃんをなだめ、落ち着かせる。
そして、きっちりと

「とりあえず、あんたが公爵とかどーでもいいけど、自分は悪くないから謝る気はないんで。つー訳で、視界から消えてくださいな」

ムカツクオッサンを馬鹿にしておく。
だって、こいつ腹立つもん。
こーゆー唯我独尊な奴、死ねばいいのに。
……まだ少しキノコ成分残ってるなぁ。

「な！き、貴様は立場をわかっているのか！！公爵の私からしたら子爵の貴様などどうにでも……」

「すればいいじゃん、できるもんなら」

だって、自分貴族とか興味ないもん。
むしろいらねーから、願ったり叶ったりだ。

「……だめです、先生。先生が貴族でなくなったら、結婚できないじゃないですか」

「君の頭の中ではどこまで話しが進んでいるんだい？」

この娘は妄想癖があるんでないか？

「とにかく、ダメです。というかサザールスなんかに言われっぱなしはイヤです」

「つってもねぇ……」

ぶっちゃけ、どーでもよくなってきた。
てゆーかあきた。

そんな感じにやる気なく頭を掻いてると、シルバちゃんがとんでも

ない事を宣いはじめた。

「……なら、決闘して下さい！」

「はい！？」

自分とシルバちゃんが？

なぜに？

「あのサザールスの現当主を、ここで打ち倒して下さい！！」

あ、そっち。

「え～、めんど」

本心から思う、これ以上関わりたくない。

だが、自分のそんな願いははかなくも散る事になる。

というかだ

「私は別に構わんぞ、貴様の魔法のカラクリも見破っている。もはやただのひょろ長い若造に私が負ける道理など無い。なんならランドルフの娘、貴様も共にかかってくるか？私からしたら物の数にもならないが」

そう言いながら、奴は近くに落ちてた石ころを自分に投げてきた。

自分はそれを見事にキャッチして、そいつに向かい投げ返した。

「……よしそこのクズ、いますぐ処刑してやろう」

そう、何があったかと言うと自分の蝉の命より短く短気な心が、久々に聞いたプッツンワードによりブチ切れたのである。

まぁそれだけでなく、このニンニクの態度とか発言とかがムカつきまくったのも原因だと思うが。

「五体満足でいられるとオモウナヨ？」

ああ、だめだ口の筋肉が痙攣してうまく喋れない。

とりあえず、ここらへんから自分はあんまり記憶が無い。

～ガーリクルサイド～

「五体満足でいられるとオモウナヨ？」

ナルミが歪んだ笑顔を見せながらそう呟くと、周りの温度が一気に下がった。

そんなナルミに恐怖感を覚える貴族達を尻目に、ナルミはシルバを体から離し、後ろに下げた。

「少し、離れててくれない？巻き込みたくないからね」

その言葉に従い、シルバはトタトタと自らの母の元へと行き、心配そうにナルミを見つめ、呟いた。

「先生、大丈夫かな……」

「シルバ、旦那様を信じてあげるのが奥さんの仕事よ。きっと大丈夫だから、信じてあげなさい」

そう言って娘の頭を撫でるリリス。

彼女の言葉を聞いて安心したシルバは、今度はしっかりとナルミを見つめる。

こうやってシルバの妄想癖は、母の教育により強化されていくのである。

「では、はじめようか」

ガーリクルはそう言うと、静かに、だけどしっかりとした口調で呪文を唱えはじめた。

そして、奴がそれをはじめた時から異変はおこった。

「これは……周りの魔力が無くなって……」

最初にそれに気付いたのは、リリスだった。

普段魔法を使う者は、体内で自己生産される魔力を使い魔法を使う。

しかし、魔力とは体内だけでなく自然の中にも大量にある物なのだ。

それを完璧に扱う事が出来れば、体内にある有限の魔力を使うよりもより強大な魔法を連発出来るのである。

ただ、不純物が多く不安定で扱いずらいため、一部の者か、特殊な道具を使うしかそれを扱う事が出来ない。

そして、ガーリクルはナルミがその自然の魔力を扱っていると考えたのである。

そしてそれを遮断するため、自らの得意な結界術を最大まで生かしたこの魔法を使えばナルミの力を封じこめるという結論にいたったのである。

「……封魔結界“アラトス”！！」

彼がそう言い終わると、二人を囲むように円筒状の巨大な光の筒が完成した。
そしてそれが出来た事により、勝利を確信したガーリクル。

「ふ、ははははは！自然魔力がなければ貴様なぞ、ただの若造に過ぎん！なぶり殺してくれるわ！！」

そう言って彼は一瞬にして無詠唱で１８体もの小型ゴーレムを地面から造り出した。
この、結界術と土ゴーレムの能力があったからこそ、彼は今の地位にいると言っても過言ではない。
だからこその自らの勝利を疑いもしていなかった。

この時までは

「あ、終わり？つかゴーレムって、どこのギーシュって話ですよ」

普通、ゴーレムには打撃はきかない。
すなわち魔法で対抗するしか手段は無いのだが、この青年は魔力を封じられているにもかかわらず明らかな余裕の表情を見せていた。

ガーリクルの脳裏に不安がよぎる。
だが、それを即座に否定して彼はナルミをしっかりと見据えながら口を開く

「ふん！強がっても無駄だ！魔法を封じられた貴様が私に勝つ事など出来ん！！」

「魔法、ねぇ……」

ナルミはそう言いながら、地面を蹴り飛んだ。
そして

「な！？」

「自分がいつ、魔法を使った？」

翼も無いその青年は、そのまま静かに宙に浮きはじめたのである。
魔力が封じられた空間で、魔法が使えない者がそんな事を出来る。
つまりこの青年は、魔法以外の何か、別の能力を使っているのである。

今まで優位に立っていると思っていた彼にとって、これは恐怖以外の何物でもなかった。

「土下座して泣いて謝るんなら許してやるよ」

明らかな挑発。
そして完全に見下した眼で見られたガーリクルは、恐怖にふるえながらも自らのプライドを優先させて虚勢を張る。

「だ、誰が！私の勝利は揺るぎ無い！謝るのは貴様の方だ！！」

そう言って彼は、全てのゴーレムを一斉に襲いかからせる。
なんの動きも無いナルミを見て、再び勝ったと思ったが、それは即座に裏切られる結果におわる。

「絶好調である！！」

そうナルミが叫ぶと、彼の背中から美しい巨大な蝶の羽のようなモノがあふれ出した。
襲いかかっていったゴーレム達は、それに触れると全て跡形も無く砂になり、消えて行った。

それを見た時、ガーリクルは悟った。

自分がここで負けるのだ、と。

だが、彼にそれを素直に認める事が出来無かった。
彼は異常なプライドを持ち、それを誇示するためにはなんだろうとするような者である。

そのために裏でいろいろと手を回し、対立するランドルフ家の失脚や王家の乗っ取り等をたくらんでいたのだ。
そんな彼がこんな若造一人に負けるなど、認めるはずも無い。

「どうだい負け犬、泣いて許しを求めるなら許してやんよ」

自らの力が及ばない恐怖と、負けを認めれないプライドとで葛藤をしていた彼にナルミが放った言葉は、あまりに彼を馬鹿にしていた。

そしてそれを聞いた彼は、自らの首を締める決断を下してしまった。

「だれが貴様なぞに！！行け！我が最大の下僕“ルーガ”！！」

彼はありったけの魔力を注ぎ、今自らが出せる最強のゴーレムを造りだしたのだ。

しかし、彼は視界の端に捕らえたナルミのいびつな笑顔を見て、今までで一番の恐怖を感じた。

そして、自らの下した愚かな決断を心の底から悔やむハメにるのである。

～ナルミサイド～

あまりに凶暴で、愚かで脆い。

そんないい歳のムカツクオッサンが目の前で震えているのを見るのは、なかなかおもしろい。

特にこいつは自分をひょろ長いと表現した奴だ、なおさら気持ちがいい。

「どうだい負け犬、泣いて許しを求めるなら許してやんよ」

そしてナチュラルハイのように絶好調な自分は、こうやって考えるより先に口が挑発の言葉を繋ぐのである。

これで負けを認めるならよし、認めないなら……そん時考えよ

「だれが貴様なぞに！！行け！我が最大の下僕“ルーガ”！！」

そんな自分の馬鹿にした態度にプッツンしたのか、ニンニクは６メートルはあろうかというゴーレムさんを出現させた。
大分前に見た隊長のよりも、かなり頑丈そうな巨大ゴーレムである。

というかロボだね、これ。

「いけ！奴を捻り潰せ！！」

そうニンニクが叫ぶと、ゴーレムは思いの外素早い動きで自分に近付いてきた。

……これはある意味チャンスではないだろうか。

とりあえず、一旦後ろに下がりゴーレムの拳を優雅に避ける。

そして、右手を固く握りしめ

「自分のこの手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！！」

なにか熱い力を込める。
そして

「いくぞ！」

ゴーレムを一気に粉砕する！

「ばぁぁぁぁくねつ！ゴッドフィンガー！！」

ドゴォォォン！！

バラバラと砕け散る元ゴーレム。
その先には、腰を抜かしたニンニクの姿が。
だけど、ここまで来たら最後までやりたいよね。
という訳で、地を蹴り体を超回転させて
「超級　覇王　電影弾！！」
ニンニクに向かい一気に突っ込む。
「ま、まて！ギャァァァァ！！」
ドガガガァァァン！！
強烈な爆発と共に断末魔をあげて散るニンニク。
……ああ、気持ちいい。
しかし……冷静になって気付く。
周りの目が痛い。
リリスさんでさえ目を真ん丸くして自分を見ているんだ、他の方々がどんな反応をしているかなんて、言わなくてもわかるよね？
そうやって、ぼーっと周りを見回していると後ろから強烈な衝撃が
「おりゃぁー！！」
「グフッ！！」

「先生！！」

どこぞの世界を大いに盛り上げる団長もびっくりの華麗なる跳び蹴りが自分の延髄あたりにヒットした。
俗にこれをクリティカルといふ。

「姫様！先生に何するんですか！！」

「許せシルバ、これは必要な事なのだ」

倒れた自分に駆け寄りながら抗議するシルバちゃんに、さも当然のように言い切るエリザ。

「何が必要だボケ！！一瞬意識か、飛んだぞ！」

自分は蹴られたヵ所を摩りながら、暴力姫君エリザを睨みつける。
だが、いかんせんタレ眼なため迫力とか眼力とかは全く出ない。

母よ、なぜこんな眼をチョイスして自分を産んだのだ。

「で、ナルミ。やはりお前はどこぞの王族だったのだな！？」

自分が異界の母に心で呪詛を唱えていると、エリザが何かのたまった。

王族って、なぜに？

「なにを根拠にそんなこと……」

「自ら言ったではないか！覇王だと」

「……いつ？」

心あたり０なんですが。

「さっき、サザールスの者にとどめを刺す時に叫んでいたではないか！ちょーきー覇王でんえいだーって。あれはニホンでのお前の名前なのか！？」

そこかよ！

なにありえないミラクル勘違いしちゃってんのよ！！

「いやいやいや！違う間違いありえない！何が悲しくて自分が王族なんぞになってんのさ！！」

「違うんですか？」

シルバちゃんまで！

「ち、が、う！自分が王族ならこんな遠く離れた異国の地にいれるはずないべ！冷静に考えてみなさい！」

自分がそう言うと、シルバちゃんが顔を一瞬で顔を青くしだした。

……なんか悪い事したか自分？

「ひ、姫様！先生の過去はそんなに詮索しない方が……」

そんな大層な過去なんかないけどなぁ。

でも助かるから黙っとく。

「む、でも気にな「いいから！」…はい」

……恐い、いま一瞬だけ般若が舞い降りた。

「し、しかし、まぁあれだな。今日はやたらと調子がよかったみたいだな」

「あぁ、そうですね。先生の絶好調は……凄かったですよね」

うむ、エリザが無理矢理話を逸らそうとしているのがよくわかる。
だが、けして絶好調な訳ではないぞ。

「君達は勘違いをしている。あれは“絶好調”ではなく“月光蝶”といったのだ」

まぁ、気持ちはわかるがね。
ニコ動でもよくやっているし、天からお塩と同じくらいの知名度がある聞き間違いでないかな？

「なんですかそのげっこーちょーって？」

む？
月光蝶とはなにか、とな？

月光蝶……月光蝶……

「……あの光に当たったモノを砂にする兵器って覚えておけばいい」

まぁ、人体とかに影響はないよう設定してるからさほど問題は無いがね。

ぶっちゃけ、最初から教えるのは途方もない時間がかかるから、これくらいのはしょりは問題ないべ。

だがそのはしょりをへんに解釈した二人は、神妙な面持ちでこういってきた。

「……わかりました、これ以上げっこーちょーについて詮索はしません」

「私も、もう聞かない。王家の名にかけて誓う」

……王家の名とか、いらないから。

「んな大層な……まぁいいや、それより疲れた、自分は部屋に戻って寝る」

そう言って自分はふらふらと出口へと向かう。

その道すがら、黒ゴス娘がついてくるのを無視しながら自分は今日あった事を思いおこしてみる。

……なーんか忘れてる気がするんだよねぇ。

「先生！」

ぼけーっとしながら廊下を曲がった途端、後ろにいたシルバちゃんが自分の腕に抱き着いてきた。

「今夜は優しくして下さいね！！」

……とりあえず、リリスさんに抗議をするのは忘れないようにしよう。

～エリザサイド～

ナルミとシルバが去った後、エリザはリリスの所へとトコトコ向かっていった。

「あら、姫様。いかがなさいました？」

「……ナルミの事について、話がありまして」

いつもとは違う、真剣な顔でリリスを見るエリザと、何がいいたいかわかっているようなリリス。

「ナルミさんが、なにか？」

「ええ、いろいろと問題が」

周りにいた貴族達も皆、ナルミが去った後各々で再び会場に戻ったり家に帰ったりしているので誰もいない。

ただ、いまだに伸びてるガーリクルがそのまま放置されてる所を見ると、彼に味方はいなかったようである。

そして、その誰もいない広場で意を決したようにエリザが言い放つ。

「サザールス公爵家の奴隷保有の証明、癒着や賄賂の摘発、さらには本人との直接的な決闘での勝利。これらを踏まえてナルミは……現在の地位からどれくらい上がると予想しますか？」

「少なくとも、入れ代わるまではいかないけど候爵までは上がると思いますわ。でもそこまでいくとさすがに姫様の近衛隊に置いておくのは難しいかもですね」

ガーン！！

そんな音が聞こえる程にショックを受けるエリザ。

「や、やっぱりか……」

普通近衛隊と言うのは、王族の事を命を張って護る者である。下級貴族ならともかく、その命を張る者が国にとって重要な上級貴族などありえないのだ。

したがって、ナルミがこのまま上級貴族の仲間入りをするとエリザの近衛隊として置いておく事ができないのである。

それを知って限りなく落ち込むエリザに、リリスは優しく手を差し延べす。

「姫様、大丈夫ですよ。私にいい考えがあります」

「……考え？」

「ええ、今のナルミさんの立場を利用した、それでいてナルミさん

の爵位の上昇も阻害しない、むしろ彼の立場をさらによくする名案が」

……こうして、ナルミ本人のあずかり知らない所で着々と彼の地位は向上していくのであった。

27回目＊キノコの呪縛《後編》（後書き）

……では、前回言ったとおり言い訳をします。

私はゼロ魔の彼みたいな三流の悪役が大好きです。
そしていかにも最低な、外道番長みたいなのが大好物なんです。

特にそいつらが華々しく散る様が

そしてそんなのを書きたいと考えた結果こんなんなりました。

……まぢ、駄文すんません。

ついで言うと、なぜにキノコが必要かといいますとです。

こうでもしないとナルミ君がキザ男を爽快に倒してくれないからです。
最初書いたのは、戦争終わった直後に祝賀会的なパーティーでやってみたんですが、まぁうまく行かない。
そしていろいろやってみた結果、こうなりました。

……前半、てか戦闘シーンがいろいろとカオスでまことに申し訳ありません。

これから精進していきますので、どうか許して下さい。

そして、一週間をめどにとか言いながら、こんなに時間かかってご

めんなさい。

時間かかった割にこの文章か……

……よし、吊ってこよう。

……ああ、ごめんなさい、石ころとか肥やし玉とか投げないで

これからも、見捨てないでよろしくお願いいたします。

28回目＊決定権？それっておいしい？（前書き）

最近タイトルのダサさに気付いた

28回目＊決定権？それっておいしい？

昨日のパーティーで、なにやらお偉いさんをぶちのめした直後、自分は泥のようにめくるめく夢の世界へと旅立っていった。

その時、きっちりと黒ゴス少女はお家へ強制転移させ、鍵もしっかりと閉めておいたので安心して睡眠を貪ることができたのだ。

そして安心しきった自分は、いつも通りの遅起きを決めこみ、起きた直後で動く気になれず目を閉じたままぼーっとしていた。

そして、段々頭が覚醒してきた事でようやく異変に気付くのである。

……なんか、右腕が動かない。

ついでに、お腹あたりになにかが乗っている。

なんとなーく予想は出来てたのだが、おそおそる右を見てみると

「おはようございます先生。もぅ、お寝坊さんですね」

自分の目の前１０センチの所に、ヤンデレ吸血娘ことシルバちゃんが寝転がっていた。

彼女は自分の頬をツンツンしながら、なおも自分に近付こうとさらにきつく抱き着いてくる。

「なぜ君がここにいる！？」

事の異常さ加減にやっとこさ気付いた自分は、跳びはねるようにシルバちゃんから距離をとった。

「照れなくても大丈夫ですよ。それに、愛の前に不可能はないんです」

いやいやいや、確か自分はしっかりと鍵を閉めたよ？
案外頑丈な作りで、ちょっとやそっとじゃ壊れないように加工したんだからこの娘にそれをこじる開けなんて……

「天井かぁ……」

自分の視界の隅に写ったもの、それは穴が空いた天井である。

……本気でこの娘は何なんだろうか。
将来が限りなく心配である。
そして、自分の命も。

「せーんせ！えい！！」

「の！？」

自分がこの娘の未来を悲観している隙に、彼女はいきなり自分に飛び乗ってきた。
そしてすりすりしながら

「えへへ、おめでとうございます！」

とか言ってきた。
なにが？

「実は昨日、先生はサザールス家の不正を暴いたり決闘で圧勝した

りして、いきなり候爵まで爵位が上がったんですよ」

……は？

「……それってどんくらい偉いん？」

「魔王様の次に公爵があって、その次に偉い爵位です！！」

……まぢで？

「ちょま！なんの冗談！？」

「冗談じゃないですよ。ぜーんぶ本当です」

「え～……」

なにがしたいのこの国は。

自分みたいなニート予備軍のお兄さん、略しておＮＥＥＴＡん（おにーたん）な人間をそんな重要ポストに配置するとか、頭おかしいんでないか？

そうやって頭を抱えながらシルバちゃんを抱えていると、不意にドアから

「ナルミ！起きてる……む、鍵が……おいナルミ！開けろ！朗報があるぞ！！」

ドンドンドンとエリザさんが乱暴に扉を叩く音がしてきた。

つか、こいつの朗報が本当に朗報である確率は限りなく低いと思う。

そう思い、奴が諦めてその場所を去る事を期待しながら黙って静かに息を潜めていた。

だが直後、自分はこの行動を後悔する事になった。

「むー……しかたない」

そう言ってエリザが扉から少し離れる気配を感じ、安心した時それは起こった。

「私のこの手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！！」

！！？

「いくぞ！ばぁぁぁくねつ！ごっどふぃんがー！！」

ドゴォォン！！

轟音と爆風と共に飛んでくる元扉とその周囲にあった壁だったものをなんとか防ぎつつ、その爆発源を覗くと、そこには右拳を突き出したエリザがいた。

「おお！やはりできたか！おいナルミ！どうだ！！」

彼女は自分を確認すると、パタパタとこちらに駆け寄ってきた。

「……どうやった？自分、教えた覚えないんだが」

「グラビデで炎魔法を一気に凝縮させ、拳に乗せて爆発させたのだ！！」

そう自慢げに言いながら胸を張るエリザ。

……改めて、魔法スゲー。

「……で、朗報とは？チャッチャと用件を言え。こんな事しでかすくらいなんだからよほどいいことなんだろうな」

ほら、扉があった所を見てごらんなさい。
なんかいっぱい、４０人ちかいやじ馬が来てしまっちゃったでしょうが。
周りの迷惑考えて行動しなさい。

……あれ？
なんでやじ馬みんなフツーに女の子もいるの？
ここ男性用宿舎よ？襲われるよ？

そしてみんななんで鎧でなくてフツーに服着てるの？
ここ兵士用宿舎よ？みんなしてサボり？

……あっれー？

「む、そうだ。ナルミが私を無視せずに素直に扉を開ければ……すまん、そういう事だったか。無粋な真似をしてすまなかった」

最初は威勢よく話していたエリザだが、なぜかだんだんおとなしく、本気ですまないと感じている風にしおらしく謝って来た。

「何がだ」

「いや……まさか昼間っから……なぁ」

そう言いながら、エリザはだんだん視線を下に移動させていく。
そしてその先には

「昼間だろうが夜だろうが、私は先生とつねに共にいるのですよ、姫様」

まぁ、お約束のシルバちゃんである。

うん、客観的にみたらこれはあれだ、ゴニョゴニョしたりチョメチョメをやったりしてるように見えなくもない。

てゆーかやじ馬、何がキャーだ。
特にうるさいのは女の子だが、早く仕事に戻れバーロー。

「まぁ……邪魔して悪かった」

「限りなく勘違いだから、なにアホなコト考えてんだバカヤロー。用件話せ用件。そしてシルバちゃんも調子乗らない、離れなさい」

そう言いながらシルバちゃんを自分から引き離し、エリザに向き直る。

それと同時に、離れた途端に膨らんだ彼女の頬っぺたを突いて中の空気を放出させる。
よし、やはり近所の子供と同じようになんか機嫌が良くなった。

これで自分の寿命が延びた。

「とりあえず、なんか自分がいきなし候爵とか言うのになっちゃったってのは聞いたけど、それだけ？」

自分的にはそれだけでも十分お腹いっぱいだから、それ以上いらないんだが。

「あ、あぁ。それは聞いたのか。もちろんそれだけではないぞ」

「え～、マジで～」

「まじだ、ちゃんと聞け。実はおまえが候爵になった事で、近衛隊においとく事が出来なくなってな」

重々しく彼女が言ったその言葉に一番反応したのは、シルバちゃんであった。

「ちょっと待って下さい！じゃあ、先生は先生じゃなくなってしまうんですか！？」

「落ち着けシルバ。そこでだ、父様に進言してナルミを私専属の物理学講師として雇う事にしたのだ。それによりナルミの知識や技術は王族のお墨付きとしてさらに箔が付き、ナルミ自身の格も上がるというモノだ。さらに言うと、物理学の現在唯一の専門家にして創始者であるナルミを王族のお抱えにする事で王族の威厳もさらに強くなるという事だ」

……ナニソレ？

「……つまり、どゆこと？」

「つまり、おまえは正式に物理学の教授として国に認められたのだ」

「ざけんな、なんだそれ。自身にもそんな専門家とか先生とかじゃないから教授とか……何言ってんだ自分！落ち着け！！」

「そしてさらに、もう一つ」

「まだあんの！？マジ勘弁、もう無理！」

これ以上はストレスで胃に穴が空くよ！
もう自分を追い詰めるのはやめて下さい！！

そんな感じに若干錯乱気味の自分を見て、カラカラ笑いながらエリザは

「そう言うな、彼らがかわいそうではないか」

そう言いながら後ろにいたやじ馬達に、手で合図して全員を部屋に招き入れる。
すると入った途端に、全員揃って膝をつきはじめた。

……なになぜほわい、わっつはぷん。

「彼らはサザールス家にいた奴隷だった者達だ。昨日ナルミが倒した奴らを調べた所、『服従の首輪』がついていてな。それを証拠にサザールス家の家宅捜査をした結果、なんと合わせて３８名もの奴隷がいてな、それが彼らなのだ」

「フムフム、で？」

彼らが何者かはわかったが、彼らがなぜここにいるかはわからない。

「保護したはいいが、彼らについている首輪がどーにも相当強力な遺産（ロスト）らしくてなかなか外せないのだ。だが、そこでおまえの登場だ」

そう言いながら、ビシッと自分を指差すエリザ。

意味がわからない。

「昨日のナルミが放ったげっこーちょーが、ナルミが倒したデリとチーという奴隷の首輪を砂にしたのだ。つまり、おまえに彼らを開放してやって欲しいという事だ」

ああ、なーる。
そーゆー事っすか。

「ん、わかった。じゃあやりますか」

「私達は離れてたほうがいかったりするか？」

「んにゃ、問題ない」

そう言いながら、月光蝶を発動させてそれを試しに一番近くにいた少女にあててやる。
すると、当たった所から首輪が砂に……

「中止ー！！」

「な！どうしたナルミ！？」

いきなりの自分の叫びに驚くエリザと、それを聞き裏切られたかのような絶望の表情をする皆様方々。

だが、しかたないじゃないか。
だって……

「とりあえず、エリザ……」

「な、なんだナルミ。何か問題でもあったのか？」

「ああ、無視出来ない問題が発覚した。……だから」

だって……

「……全員分の服を用意してくれ」

首輪と一緒に服まで砂にしちゃうんだもん。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊～☆

それから即座に着替えを用意して問題は解決した、が。

「……なんであんたらまでいるん」

「悪いか？……痛っ、エリザこら！蹴るな！」

「なんで！兄様まで！ここに！きますか！」

「エリザ、狙うならふくらはぎでなく臑を狙いなさい」

服とともにイノムさんと馬鹿バリスまで一緒にきやがったのだ。
ちなみにイノムさんはきっちりショートボブになっている。

とりあえずシルバちゃんも含め彼らを廊下に締めだして全員を開放した所、みんな涙を流して喜びはじめた。
うん、なんかうれしいね、こう喜ばれると。

だがシルバさんよ、そんな警戒しないでも自分はここにいる女の子達を襲わないし、彼女らも自分なぞにそんな感情を持つハズがないから。
だからそんな絶対離さないオーラを出して抱き着かないで。
腕に血が行き届かない。

……しかし

「なあエリザ、これのどこらへんが朗報なんだ?」

ぶっちゃけ、もったいつけながら言われていたのに、言っちゃ悪いがこれは自分にメリットがない。
いや、なんかご褒美ちょーだいとか言いたい訳ではないが。

そんな自分の質問に、いまだにゲシゲシバリスを蹴っているエリザのかわりに、その泣いて喜んでいた人達の中にいた、まだ１３歳くらいの子供が答えてくれた。

「その質問にはボクが答えさせていただきます、ご主人様。奥様もお聞き下さい」

ん？
なにか今とんでもない単語が二つ程聞こえた気がするのはきのせいかな？

「ボク達は様々な理由から売られたり捕らえられたりして奴隷となった者達です。自由も帰る場所もないボク達はまいままでサザールスの家で虐げられながら、これが運命なのだと諦め、絶望し、いつ殺されるかという恐怖と戦いながら生きていました。ですが、あなたはそんなボク達を救い、開放してくださいました！！」

そう言いながら、グッと小さく拳を握るその子の後ろには、いつのまにか他の人達が自分にまたもや膝をつき、ひざまづいている。

そして、その子もみんなと同じように膝をついて、ゆっくりと話しはじめた。

「そして、ボク達は先程申しましたように帰る場所がございませんし、いつ死んでいたかもわからない失ったはずの命です！ならば！ボク等全員、ハセガワ・ナルミ候爵様に真の忠誠を誓い、あなたのために働きとう存じます！そのために時にはこの身を剣として仇なす敵を打ち倒し、時にははこの命を盾として迫り来る厄災からあなたを護る絶対の忠誠を全能神『ネクロ』の名のもとに誓います！！」

「まて、話せばわかる。ひとまず落ち着けおまいら」

なにがなんだかわからない。
エ？ナニコレツマリドーユーコト？

「つまりあれか、君らは自分のために死ぬ覚悟だと言いたい訳かい？」

頭が痛くなってきた自分は、こめかみらへんを押さえながら確認をとる。
すると

「はい！死んでいたはずのこの命！惜しくなどございません！！」

即座にそう言ってひざまづいたままっすぐ自分を見つめるその子の眼は、決心とかなんかそんな強いモノが宿っていた。
他の人達も全員おんなじである。

そしてそんな強い心を持った集団の代表として目の前にいるその子に、自分は

「なん！でやねん！！」

パッシーン！

「ふぺ！？」

パジャマのポケットから取り出したハリセンを顔面目掛けて振り落とした。

なんかクリーンヒットしたらしく、その子は鼻を押さえながら悶えている。
他の人達に至っては、目を真ん丸くして驚いている。

そんな彼らに向かい、ハリセンを肩に担ぎながら自分は言う。

「べっつにそんな恩返し期待してた訳でもないし、せっかく自由に

なったんだから好きに生きなさい。そもそもわざわざ自分のために助かった命投げ出すとか、意味ないから。むしろ助けたのに自分のために死なれたら、自分がイヤ。わざわざ自分なんぞに恩を感じても非生産的過ぎるから、自由を楽しみながら気ままに生なさい」

ちなみにこの言葉のオブラートを剥がして周りについてた糖衣を溶かしてわかりやすく訳すると、『いや、マジそーゆーのいらない。きみらで勝手に自由に生きて』となる。

そして、自分のそんな優しさというオブラートでソフトに包んだ言葉は、きっちり皆様の心に届いたようで……

「……ふぁ…」

ふぁ？

「うぁーーーん！」

「グズッ……ヒック……」

「……スンスン……」

「せ、せん、せぇ……ふぇぇ……」

なぜかみんなして泣き出しはじめました。

なぜだ？

特にシルバちゃんが一緒に泣いている理由がわからん。

「……ナルミ」

限りない困惑と戯れている自分の肩に手をあて、声をかけてきたのはバリスであった。

「……なに？」

「おまえ、男の中の男だわ。もしかして心が愛と優しさで出来ているとか言わないよな？」

「はぁ？」

なにこいつ、いきなり。

「おまえなにがいーたいの？」

「いや……わからないか？」

わからんから聞いとんじゃワレ。

そんな自分の反応に、困惑したようすのバリス様。
そしてその彼に近付く姉妹の姿が

「バリス、こいつは絶対わかっていない」

「ですね。さすがはナルミと言った所ですか」

おまえらそれは侮辱ととらえてよろしいでしょーか？

「だから、何が言いたい」

「……つまりこいつらは、おまえのあまりに寛大で慈悲深い言葉に感動したって事だ」

「ついでに言うと、彼らのために本気で怒った事も原因の一つだな」

は？

「……わぁー、おもしろーい。こんなおもしろいじょーだんはじめてだぁ。あはははは」

「冗談じゃなく、真面目にそうなんだが……」

真面目って、あんな遠回しに迷惑だと言った言葉の何に感動する要因があったんだ？

「這い這い、ワロスワロス。で、マジな話しなんなん？」

「いや……マジもなにも……もういい」

「……エリザも苦労するね」

？

なんなんだ？

よくわからない王族3兄妹との会話をして、正直反応に困っていると、自分の腕が誰かに引かれた。

まぁ、犯人はもちろんシルバちゃんであるが。

「せ、せんせぇ……ヒクッ……」

彼女はうるうるしながら、縋り付くように腕を引っ張り自分を見上げている。

……かわい。

とかマヌケな事を考えていると、シルバちゃんが爆弾を投下した。

「……この子達を……雇いましょう！」

「はい？」

「……先生は今は候爵です。そして新しくお家が高民区にできるじゃないですか。だから先生が彼らを雇って、お家に住まわせて、もちろんお給料も払います。今彼らに財産はありませんが、やりたい事を見つけてそれのためにお金を稼ぐ場所を与えればいいのです！貴族の、しかも候爵なら従者が４０名いようが５０名いようが問題はありません！！」

ああそうか！
てバカヤロウ！

「ちょいまち！いくらなんでも４０人を養うほどの財力なんて持ち合わせていないし、これからもそこまで儲ける事が出来る自信が「それなら問題ないぞ？」問題大有りじゃ、アホですかイノムさん！」

人の話しの腰をへし折りやがって。
くだらないこと言い出したら、あんたの妹が毎日大量の宿題に涙することになるぞ。

「む、アホとはなんだアホとは。と、そんな事より、金の事なら問

題ないぞ。今回ナルミのおかげで、サザールスからはじまりいろんな不正を働いていた貴族が摘発されてな。奴らから罰として財産の一部を没収したのだが、そこから一割程度をナルミの財産として与える事になっている」

あ、そーなの。

あれか、芋づる式か。

でもねぇ……

「いや、でも一割でしょ？それじゃあたかがしれてるべ。それだけでこの４０人を養っていったら、絶対一ヶ月で底をつくっての」

「……ふっ」

あ、笑われた。

「なんですかその意味深な笑みは」

「いや、おまえは他人の事ならこんなに真剣になるのに、自分の事となるとスッポリ忘れてるのだな、と思ってな」

いや、他人の事なんか考えとらんよ。

自分、現在進行形で自分の事しか考えとらんよ。

そしてなんかバカにされた気がしてムッとなる。

「……じゃあ何を忘れてるんすか」

「おまえが西の地に領地を持っているという事だ」

……ああ。
でも、やっぱりこの子達はそんな半強制労働的に働かせるのは、ねぇ。
見た感じ、８歳くらいの子供もいるし。

「そーいやそーやね……でも……」

「やっと思い出したか！なら早速手続きをしよう！」

「いやちょっと……」

「まって下さい姉様」

自分がイノムさんの勢いに押され、困りあぐねているとエリザが彼女を止めてくださった。
珍しく訳に立つじゃねーか。

「彼らの他に、あともう一名、ナルミのたーんえっくすで半殺しにされて治癒室で治療をうけている者もいますので彼も一緒にお願いします」

そっちか！！

「わかった、そちらも伺おう。ではいくぞ、ついてこい」

そう言いながら、彼らをひきつれてどこかに行こうするイノムさん。
そんな彼女に着いて行こうとする彼らに最後の希望をかけて、呼び止める。

「ちょっとまって！」

するとみんな揃って息もピッタリにこっちを振り向いてきた。
軽くホラーだね、戦慄できる。

「君らは本当にそれでいいのかい？変に義理とか恩とか感じなくてもいいんだよ？」

「はい！最初ボク達はご主人様がボク達を助けてくれた理由を考えていませんでした！ですが、ご主人様のお言葉で、本当にご主人様がボク達に求めている事を痛感いたしました！そして、ご主人様は自由に生きろとおっしゃいました。なら、自由に奥様の言うとおり、ハセガワ家の従者として全力で働かせていただきます！！」

まっすぐだ。
彼らの眼は自分みたいに捻れて拗れて捻くれていない。

そして、このキラキラしたモノはなんだ？

「……あ、いや……うん…よろしく…」

つい勢いに押されて頷いてしまうではないか。

そしてそれを見た彼らは、バァッと明るい笑顔を見せ

「「「よろしくお願いします！！ご主人様！！奥様！！」」」

声を揃えこう言った。
……意志の弱い自分を括りたい。

「……おくさま……これからがんばりましょうあなた！！」

「なん！でやねん！！」

パッシーン！

「きゃう！」

そしてこの妄想少女を誰かどうにかしてほしい。

とりあえず手にしていたハリセンで頭を叩いておいたが、これでどうにかなるとは考えない方がいいだろう。

その証拠にほら、頭を抱えながらもなぜか顔を赤らめている彼女が……

ん？赤らめている？

「うぅ～……痛くです、照れないで下さいよ。……でも、先生の愛のムチはなんか痛気持ちいいような……」

「ムチでなくハリセンだよ。そして君はそっちの属性かい」

……マジでこの娘は将来どうなるんだろう。

そんな感じに猫みたいにゴロゴロ言ってるシルバちゃんの将来を案じていると、後ろからバリスに声をかけられた。

「ナルミ、いや不死身の闘神。折り入って話しがある」

はいまた名前が増えてるー。

「……なんね」

「俺と闘え！！」

「だが断る！！」

こいつはワンパターンすぐる。

いい加減あきた。

だが、ここでそのパターンに変化が起こった。

「なら、俺に闘いと言うものを教えてくれ！！」

「は！？」

自分がバリスの言った事をよく理解できないでいると、エリザがバリスの膝の裏を

「えいっ！！」

「のっ！？」

所詮膝カックンである。

「兄様、ナルミは今私専属物理学講師です。勝手にそういう事を申し込むのはやめていただきたい。まぁ勝手でなくても兄様ならお断りですが、べーっだ」

なんか、エリザのバリスに対する扱いが酷いな。

この二人喧嘩しとんのか？

「クッ……いや、そこをなんとか」

「ナルミ自身が断ったのですから、あきらめてください。ほら、帰った帰った」

しっしと虫を追い払うように手をはらうエリザ。

それに悔しそう見るバリス。

しかしバリスは次の瞬間、悪い事を思い付いたような笑顔を見せ、こう言ってきた。

「そうか、ならナルミは俺に負けるのが怖くて勝負を逃げたという事でいいんだな」

あ、別に自分はそれで……

「いくら王子様でもそれは聞き捨てなりません！」

「ああ、これは兄様から私達への侮辱と見なして問題あるまい」

「ナルミ！！」

「先生！！」

あ、激しく嫌な予感。

「「この挑戦、絶対勝って下さい（くれ）！！」」

まっすぐにこっちを向く二人の娘。

なんか変な空気が流れてくる。

ぶっちゃけ堪えられれん。

従って、この状況から解放されるとっさの方法をとるのは人間として仕方がないといわざるおえない。

そして自分もそんな人間、自分の本能に従い、

「……しばらく自分は消えますので……皆様サヨウナラ！！またいずれー！！」

キレてる二人を残して、全力ダッシュで廊下に逃げだしたのである。

チキン？

そうだけどそれがなにか？

～シルバ＆エリザサイド～

「……それではしばらく自分は消えますので……皆様サヨウナラ！！またいずれー！！」

そう言って、目にも留まらぬ速さで部屋から脱走するナルミ。

まさかの逃亡に、そこにいた三人は反応出来ずにその場に間抜けな顔をしながら突っ立っていた。

そして最初に覚醒したのはバリスであった。

「……逃げ、た…のか？」

そしてそれをきっかけに、残り二人も復活を遂げる。

「……はっ！ナルミ！なぜ逃げる！！」

「……先生…」

そしてしばらくの沈黙の後、シルバがなにかに気が付いたようにはっと顔をあげる。

そして一言。

「わかりました！これは先生からの試練です！！」

「どういう事だシルバ？」

「先生はしばらく消える、と言いました。つまり、これは先生が私達に課した潜入者捜索のための試練です」

俗にこれを勘違いといふ。

「確かに、ナルミは過去に単独で潜入任務をこなし、成功させた実績がある。……ふっ、相手として不足はない！！」

「ですが兄様、これは流石に兄様だけでは無理です。この巨大な城に隠れているナルミを単独で見つけるのは、無謀としか言えません」

「あ、ならいっその事、全兵士の今日の訓練をこれにしてみてはいかがでしょうか？」

「でもシルバ、城にいる数だけで足りと思うか？」

「無理ですね。なんたって相手は私の先生ですよ？そう簡単には捕まるはずがないですが、いい訓練にはなるはずですよ？」

こうして、ナルミの知らない所で城をあげた鬼ごっこが企画実行されるのであった。

本人からしたら不幸というかはた迷惑な話である。

「あ、ならいっその事ナルミを最初に捕まえた者はナルミの弟子になれるというのはどうだ？」

「それはいいですね。そうすればみんな本気で訓練にのぞむでしょう。兄様もたまにはいいこと言いますね」

「……先生は賞品じゃないんですよ？大丈夫だとは思いますが、それで先生に変な危害を与える輩がいたら、私はそいつをどんな手を使ってでも虐殺しますからね」

……とりあえず、ナルミからしたらこのヤンデレ少女に異常なまでに依存されている事が今一番不幸だと答えるだろう。

28回目＊決定権？それっておいしい？（後書き）

この回、じつは続く

そしてなんか、私的にこの回の出来に不服

括ってきます……

２９回目＊逃走中　ｉｎ　お城（前書き）

ちょい早めに更新

そして寝正月に突入

29回目＊逃走中　in　お城

……あれから自分は、あのグダグダした混沌空間から逃れるべく、奥歯を噛み締め脱兎の如く逃げ出した。
そして、お腹がすいたから食堂で余った素材でテキトーにベーコンサンド的なのをつくってもらい、それを奴らに見つからないで食べるためにお城の中でも一番高い塔の屋根の上でポカポカしながらそれを頬張っていた。
その時腕時計を見たら、実はもう2時を回っててびっくりしたのを覚えている。

そしていつまでもパジャマなのもアレなので、一回塔の中に窓から入り、ちょっとオシャレなダメージジーンズと黒いシャツに着替えた。
だが、少しばかり高い所だからか肌寒い感があったので、学校で使っている紺のカーディガンを着て、暖かいけど着こなしが微妙な事にがっくりしていたのを覚えている。

そんな感じに妙な気持ちになっている時、事件が起きたのである。

自分がカーディガンを諦め、フツーにパーカーを着るべくそれを脱ごうとしていた所で、部屋の扉がゆっくりと開いたのである。
そして、剣を手にして素人が見てもわかるくらいに警戒心満々の三人の兵士が入って来た。

そして目が合う。
しばしの沈黙。

で、

「い、いたぞー！！」

大絶叫。

……耳が痛い。

自分が人力音爆弾を食らって耳を押さえていると、三人が即座に自分を包囲してきやがった。

「は、はは、ハセガワ候爵様！ご同行願います！！」

そしてきょどりながらなんか言ってきやがった。

あれか、エリザやバリスらへんの命令だべ？

なら取る行動は一つしかあるまい。

もちろんそれは逃走である。

「……ホエホエ～」

てな訳で、チビエビスン……いや、チビナルミンの術である。

煙りとともに、自分は一寸法師よろしくな大きさへと変化した。

そして、それを見て自分が消えたと判断した彼らは

「消えた！？いや、まだ近くにいるはずだ！！おまえは援助を呼びに、俺とおまえで窓と扉を完全に封鎖するぞ！！」

そう言うなり、彼らはそれぞれのポジションへと向かい、完全封鎖

の体制をとりはじめる。

だけど、まぁ所詮窓と扉を封鎖しただけ。

つまり、このボロッちい塔にある無数の小さな隙間にまでは手がいかないのである。

したがって、余裕のだっしゅ……つ……

……あれだ、この高さは、無理ぽ。

飛べるけど、なんかいつものサイズにくらべて格段に恐怖感が高くなる。

さらにこのサイズ、今考えると見事なまでに鳥の餌サイズだ。

だからといって、この警戒体制のもとで廊下側の隙間を探すのもリスクが高い。

よし、作戦変更。

『フハハハハ！自分がいつまでも同じ所にいると思ったか！実に浅はか！！ではこれにて』

「！？」

「何を驚いている！廊下だ！いくぞ！！」

……ふむ。

声を似顔絵に変える能力は意外に使えるな。

廊下に声をはっつけたら見事にみんないなくなった。

……どっかにテレポートしたほが早かったな、これ。

まぁとりあえず、誰もいなくなった事だし普通サイズに戻り、窓を開け放ち

さぁ、あいきゃんふらい！！

……この調子に乗った大空への飛翔が今日の自分最大のミスだと言うのに気が付くのに、さほど時間はかからなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊…☆

何が起こった？

「いたぞ！西の空だ！！」

一体全体何があった？

「手加減するな！相手は不死身の闘神だ！遠慮したら死ぬと思え！！」

どうしてこうなった！？

「第三火炎魔法隊と第二疾風魔法隊はそのまま追え！第三流水魔法

はそれの補助！他は各自先回りをして罠を張れ！！」

何が一体どうしてこうなった！？

……おわかりのとおり、自分は今限りなく追い掛けられている。

最初はやたら城の周りでせわしなく動く兵士達を見て、何をやってるのかと近付いた所いきなり大声を出されてワラワラと兵士達がやってきたのである。

しかも矢やら魔法やらの雨霰の贈り物付きである。

これは泣きながら逃げるしかない。

「ちょ！待って！話せばわかっこら魔法やめぃ！自分がいったい何をした！？」

うん、情けないのはわかっている。

だが言わずにはいられないのだ。

「構うな！日が沈むまでに意地でも捕まえろ！！」

「「「はい！」」」

「構え！見逃せ！！魔法をやめて！！」

くそぅ！

マジで自分が何をした！？

何か！何かこの場をしのげるモノは！？

ええいままよ！！

「速効魔法『終焉の焔』発動！！」

自分はその場にいきなり止まり、そういいながら、カードを翳すと黒い煙みたいなトークンが二体出現。
それに伴いビビる兵士達。

だがしかし。

「怯むな！攻撃しろ！！」

そう誰かが言うと、再び炎やら雷やら風やらが恐ろしいくらいに飛んできやがる。

バトルフェイズ後に発動したつもりだったのだが、まあいいや。

「カウンター罠『攻撃の無力化』！！」

自分が叫ぶと全ての魔法が空中に出来た穴に吸い込まれて、消えた。

だがさすがにそれくらいではもう皆さんは驚いてはくれないようで、少し距離をとりながらも自分の出方を伺っている。
そしてその隙に自分は

「フィールド魔法『ダークゾーン』発動！！」

直ちにに魔法を発動させる。
すると今まで晴れていた空に、いきなり雷を纏いながら渦巻く不吉なまでに黒い雲が発生してきた。

こうなりゃもうこっちのもんよ。

自分はさも仰々しい動きと声で、威嚇しながらこう述べる。

「今再び、五千年の時を越え、冥府の扉が開く！自分達の魂を新たなる世界の糧とするがいい！降臨せよ！《地縛神　Ａｓｌａ　ｐｉｓｃｕ》！！」

そして黒焔トークンをリリースして、薄いんだかそうでないんだか、二次元だか三次元だかもわからない、ナスカの地上絵をモデルとした巨大なコマドリが出現した。

感じとしては、サイズも形もあの地上絵がそのまま浮き出た感じと考えてくれていい。

そしてまさかのよくわかんない怪物が出現した結果、彼ら兵士は顔を真っ青にしなが

「……あ……アアアア！！」

「ひぃっ！！し、死にたくない！！やだ！やだぁ！！」

「うあぁぁん！！おかぁさぁぁん！！」

腰抜かしたり逃げ回ったり泣いたり喚いたり叫んだり、とにかく大変である。

そして最後の奴、オイ。

まぁ、全体除去持ちの攻撃力３０００がいたらそう叫びたくもなるわな。

それはそうと、この混乱に乗じてこの場を逃げ出そうとした、その時。

「や、やっぱり俺達が闘神の弟子になれるなんて無理なんだ……俺達はこのまま新しい世界のために殺されるんだ……あは、アハハハハ」

その場にへたりこんでいた一人の兵士がなんかとんでもない事をのたまいやがった。
自分は彼を即座に捕まえ

「はい確保！後で詳しく話をきかせてもらう！！」

「はは……はひ……？……ヒャァァァ！？」

一気にお空へ急上昇。
ダークゾーンよりさらに上へと突き進み、越えた所で急停止。

そして怯えながら宙ぶらりんになっている兵士に

「さぁ、弟子やらなんやらについて詳しく話せ！さもなくば落とす！！」

がたがた揺らして説明を求めた。
脅しは御愛顧である。

「は、ははは話しますからやめてくださひ！！や、ギャァァァ！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊¢☆

「……つまり、エリザとバリスが自分を最初に捕まえた奴を自分の弟子にするとかいいやがったのだな？」

「は、はいぃぃ！そうです！間違いないです！！日が暮れるまでにできればですが！！」

「……しかも参加者には国のお偉方もいるんだな？」

「ははは！イノム姫様やバリス王子様などをはじめ将軍から賢者まであらゆる者が……」

「ざっけんなチクショー！！」

なんだこの仕打ち！
自分が一体何をした！？

「ヒイィィ！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいぃぃ！！」

……そんな怯えなくても。
こら、泣くな！男の子でしょ！？

「……ごめん、君は悪くないよ。ちゃんと下ろすから、ほら」

そういいながら、近くのバルコニーに彼を置き、優しくなだめる。

「ごめんって、ほら泣かないの」

「は、はい……ありがとうございま「そこかナルミィ！！」

はい突如乱入するは爆裂王子バリス様。
諸悪の根元の一人である。

奴は大剣を手に、自分におもいっきり駆け出してくる。

……てゆーか最初っから第二形態（炎の天使的なの）に変身してるとか、なに。
なんか焦げ臭い。

「いくぞ！！奥義『神・龍・轟・炎・斬』！！」

そう叫びながら奴は力の限り剣を振るうと、そこから炎の龍みたいなのが……

あ、やばくね？

「ちょま！ええぃ！ザ・ワールド！！」

……

……危なっ！！

あともうちょいでこれ兵士に当たるって！！

と、こんな事やってる場合じゃない。
６秒しか時は止まらないんだ、時間止まっているのに時間がない。

なので急いで彼を担いで空中へ飛んだ所で

ゴオォォォォ！！

今までいた所を轟音と共に炎がえぐる。

あぶねぇ。

「……む、ナルミどこ行った！」

だれが答えるかバカバリス。

そのまま一人でその部屋を焦がしてろ。

「……ふへ？ひいぁぁぁぁ！？なんでまた空に！？誰か！誰かぁぁ！！」

「む！？空か！！」

バカァァァ！！

ここで騒ぐか！！

「落ち着け！！すぐ下ろすから！！」

とりあえず別の所におろそうとするが……

「ナルミ！覚悟！！」

「状況判断して行動しろやこの脳筋！！」

自慢の翼で自分を追い掛けてくるバリスが自分達の邪魔をするのだ。

ぶっちゃけ、限りなく邪魔。

「敵の自由が効かないうちに叩く！これが兵法の基本だ！！」

「それはこの場合外道っつうんだよ！！くらえシャドーボール！！」

そういいながら、手からぎざぎざした軌道を描く黒いボールを奴の顔に向かって発射する。

うむ、なぜXではあいつが出なくなったのか謎である。

気に入ってたのに。

「はっ！こんなのばっ！！」

そのぎざぎざした軌道にやられたバリスは、見事に顔へとヒットした。

そしてそのまま堕ちていく。

ざまぁ、バリスざまぁ。

自分が死にゆくバリスに対する馬鹿にした態度を取ってると、自分の左脇から叫びが

「ナルミ様後ろぉ！！」

「はへ？……のうわっちゃぁ！？」

自分の背後から、何か細長い鋭利なものが襲い掛かってきた。

なんとか避けたが、危なかった。

「チッ！小癪な……」

そこにいたのは、ショートカットの偽セーラー服な長門モドキ、イノム様でございます。
彼女は細長いレイピアみたいな剣を持ち、背中の翼を羽ばたかせている。

「君ナイス！そしてイノムさん小癪ってなに！？」

「小癪は小癪、おとなしく私に捕まりなさい」

そう言うと彼女は、何かぶつぶつ呟きはじめた。
すると、剣に纏わり付くように炎が張り付き、あっとゆうまに３ｍくらいの細長過ぎる炎の剣に……

……あれ、背中から変な汗が。

「さぁ、降参しなさい。しなければ……」

「……しなければ？」

「刺し殺す」

「さようならっ！！」

自分は逃げた。
限りなく逃げた。

そしてその先にいたのは

「くっそ！効いたぞナルミ！！」

はいバリス王子様ご登場。

「何で出てくる！死んでろ！！」

「あの程度で死ぬ訳ねぇだろ！！」

くっそ！

前門のバリス、後門のイノムかよ！

と、半ば絶望していると後ろからイノムさんが

「バリス、どきなさい。ナルミは私が頂く」

こうのたまった。

するとバリスは

「はっ！姉さんこそ消えな！ナルミは俺が捕まえる！！」

これを売り言葉に買い言葉といふ。

「姉に向かってその口のききかた。教育の必要があるわね」

「体力ないくせによく言うよ。結局小手先だけのくせに」

……あれ？

「私は力ではなく技で戦う。まぁ馬鹿にはわからないだろうがな」

「じゃあその技ごと姉さんの自信を今ここでへし折ってやるよ！！」

これはもしかして……。

「覚悟しなさい！」

「後悔すんなよ！」

そう二人が叫び、互いに剣を交えて戦い始めた。

自分をスルーして。

「おうらぁぁ！！」

「ぬるい！てりゃぁ！」

「はっ！おせぇよ！！」

……こいつら、二人して馬鹿だ。

「……ナルミ様、とりあえず逃げましょう。俺、早くおりたいです」

「だね。とりあえず近くにおりるか」

「はい。あ、あそこ、城のあの窓が開いています」

兵士君の言葉に従い、自分はとりあえずお城のなかに入る事にしたのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊○☆

自分達がおりた所は、５０人は余裕で入るただっ広い何もないお部屋である。

誰もいないその空間におりた自分は、不幸な兵士君を優しくおろして謝る。

「とりあえず、何度もごめんな」

「いえ、大丈夫です。てゆーかもう慣れました。……とと」

そういいながら、空中にいた慣れのせいかよろついてうまく立てないようで尻餅をついた。

それに自分は手をさしのばす。

「大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫で……す……」

すると、なぜか顔面蒼白になりながら、歯をガチガチ言わせている。

「どうしたん？なに「かかれぇ！！」ゴバァッ！！」

自分が彼に何があったか聞こうとした途端、上から重い何かが降ってきた。

な、何があった!?

自分が混乱しながらその重みに堪えていると、目の前に赤毛の小柄な少女がでてきた。

「うふふ。せーんせ、捕まーえたっ」

もはやおなじみ、シルバちゃんである。

彼女は動けない自分の顔を優しく抱きしめて

「やっぱり先生は私の所へ戻ってきてくれました。私達はやっぱり結ばれる運命なのですね」

とかいい始めた。

つかこれ……息が。

「ひ、ヒルハひゃん!ひき!ひきできはい!ふるひっ!ひにゅ!」

「あ、ごめんなさい先生。先生が私に会いに来てくれた喜びでつい」

「ハー、ハー……とりあえずシルバちゃん、自分に乗っているの、何、よけて」

「あ、そうですね。みんな、よけていいわよ」

ん?みんな?

彼女がそう言うと、続々と重みが消えていく。

そしてその正体は

「突然の奇襲で不快な思いをさせてしまい、申し訳ありませんでしたご主人様。平に、ご容赦下さい」

深々と頭を下げる自分の使用人達（予定）である。

「先生がこの部屋へと飛んでくるのを見て、みんな一斉に隠れてこの作戦を実行したんです。先生を捕まえるだけの技量を持ってますし、みんなとても優秀で、頼りになりますよ」

そう言うは自称自分の嫁、シルバちゃんである。

「そして先生は彼らが最初に捕まえました。この勝負、私達の勝ちです」

……え～。

「……マジですか」

「マジです、先生は誰にも渡しません」

そう言って彼女は自分にギュッと抱き着いてきた。

それに伴い周りのみんな、主に女子が

「奥様！そこで口づけです！」

「もっと胸を強調して！！」

「いっそここで押し倒しましょう！！」

「ｓｈｕｔ　ｕｐ！！君もここでマジにやらない！！」

こいつらは一体何をこの娘に教えてるんだ？

そしてひとまず落ち着いた彼女だが、なぜかここで急激に闇化しはじめた。

……なぜだ？

「にしても……あなたはなんで先生に抱かれながら一緒にいたんですか？」

そういいながら彼女は今までへたりこんでいた兵士へと向き直り、お馴染みの炎のナイフを取り出しはじめた。

それを見た彼は、顔をさらに青くしてがたがたふるえている。

ああ、だからさっきあんな怯えてたんね。

って！じゃなくって！！

「男のくせに、先生に抱き着くなんて……こんなゴミ！この世から消してやる！！」

そういいながらナイフを彼に振り下ろす。

ヤバッ！！

「ストォップ！！」

ガシッ！！

なんとかすんでで腕を掴む事に成功した。

マジギリギリッス。

「ヒイィィィ！！」

「なんで止めるんですか先生！！」

「殺し駄目！！やめなさい！！」

「ダメです！先生に近付く悪い蟲はみんな私が潰します！！」

そう言って暴れ狂う彼女は、明らかに異常な眼をしている。

この前殺されかけた時と同じくらい恐い眼である。

そしてそんな彼女に振り回されながらも、しっかり両手を正面から拘束して押さえつけてる自分、エライ。

しかしこのままではいろいろ危ない。

てゆーかこのパワーはかなり辛い。

と、そんな状態の自分に一人、あの皆さん代表の子がテコテコよってきた。

そして耳打ちをする

「ご主人様、いまこそ……」

それを聞いた自分は、一瞬気が抜けた。
何を言い出すこの子は。

と、その一瞬の隙をついて脱出したシルバちゃんは、そのままま
すぐ彼の所へ……やべっ！！

「バイバイ、醜い蟲けらさん」

そういいながら、彼女はもはやナイフを振り下ろそうとして……

「だからストップ！」

なんとか後ろから抱きしめて止める。

「離して下さい！これは私達の将来のために必要なんです！！」

くっそ！
もう手段なんか選んでらんねぇよ！！

「シルバちゃん！！」

自分はそういいながら、彼女の顔をこちらに力付くで向かせ

「なんですっ……！！？」

強引に……まぁ、あれだ。
お唇を窃盗した。

後ろで“やった！”だとか“作戦成功！！”だとか聞こえるのは無
視しよう。

「とりあえず、落ち着こう」

「……ふぁい」

彼女は案の定、真っ赤になって呆けたようなふわふわな顔をしながら自分にもたれ掛かってきた。

くそっ！

全部あの子の策略どおりだ！！

「とりあえず、君。今のうち逃げて、早く」

自分がそう不幸な兵士君に言うと、彼は首が取れるんでないかと心配になるほどブンブン首をふりながら、猛ダッシュで部屋を後にした。

うん、今日は彼史上最悪な日である事は間違いないな。

「せーんせー、にゃーん。フフフフ」

そしてこのゴロゴロナゴナゴしているこの娘は一体どうしよう。

「とりあえず、戻って来てシルバちゃん」

「エへへへへ、せんせー。私だけの旦那様……」

ダメだこれは。

マジで一体どうしたら……

「あれですご主人様。このまま奥様を本当の女にしてあげてはいかがでしょうか？」

「私達もまだそこまで教えていませんから、そこらへんを手取り足取りじっくりねっとり……キャー！！」

「奥様程無垢で純情な汚れを知らない女の子なんて今時いませんよ？なんにもそのての知識を持ってないんですもの」

「そしてその汚れを知らない奥様に優しくそれらを教えて差し上げるのが夫であるご主人様の義務だと思います」

「君達絶対これ見て楽しんでるだろ？」

こいつら、雇うのやめてやろうか？

とかなんとか考えていると、したからニュッと手が出てきて

「せんせ、チュッ」

今度は自分の唇が強奪された。

まぁ、唇をチュッとしただけで深くないなのがせめての救いか。

そしてキャーとか言ってる君達、後で覚悟しろよ。

「……これは、私達の負けですかね。まぁ、相手が相手だからさほど不思議ではない、か」

「……ああ、だがまさかナルミがここで捕まるとは……少しこっちも警戒しとけば」

もうあれだ、神速で振り向いたね。
そして振り向いた先にはバリスとイノムさんが。

「……いつから？」

「その娘がナルミに口づけをする所から」

……熱い。
顔がめっちゃ熱い。
今なら恥ずかしさで死ねる。

「とりあえず、訓練終了を伝えるか」

「ああ、なら私がやろう」

イノムさんはそう言うと、どこからか拳大の緑の石を出して、それに口を近付けこう言い出した。

「全小隊長に告ぐ、聞き次第部下に伝えろ。訓練は只今を持ち終了した。勝者は第三王女近衛隊所属シルバ・ランド……」

そこまで言って彼女は、今にも羞恥で悶死しそうな自分を見てニヤリと笑った。

あ、やな予感。

「間違えた、修正する。勝者は第三王女近衛隊所属ハセガワ・シルバ。彼女はナルミを捕まると同時に唇まで奪っていった。そしてこいつらは抱き合うように「ちょっとまてぇぇい！！」

自分は即座にその石を強奪して、それに訂正のための発言をする。

「今の嘘！偽り！でたらめ！変な悪ふざけを信じたらだめだからね！！」

「おいナルミ」

「黙れスカポンタン！そもそも自分らまだ結婚しとらんし！まだ彼女はランドルフだから！！」

「だからナルミ、聞け」

「ｓｈｕｔ　ｕｐ！諸悪の根源！あなたに発言の権利は「だから一回聞きなさい！」何だよじゃあ！逆切れ格好悪いよ！！」

くそっ！

なんでこいつはこんなに……

「まぁ、やりたいのはいいけどさぁ。それ、魔力与えないと通じないよ？」

「はへ？なら今は？」

「ただの石。ついで言うと、魔力がないナルミなら使えない代物」

マジですか。

早く言えっての。

あれ？てことは……

「……今までの自分の訂正は？」

「届く訳がない。ただのでっかい独り言」

「……だれか訂正をお願いします」

そう自分が言うと、あの二人はニマニマしながら微動だにせず、後ろを見るとあの４０人は忽然と消えている。

いまだに自分に抱き着いてゴロゴロ言ってるシルバちゃんは論外。

は、ははははは……

オワタ……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊θ☆

その後の話をしよう。

「ナルミ、おめでとう。こんな器量よしそうそういないぞ」

「ナルミ！式はいつあげんだ！？」

「さすが私の娘ね。ナルミさん、シルバを幸せにしてあげてね」

「よし、皆さん一回落ち着こうか」

あの直後、自分はエリザの部屋へと呼ばれ、そこへ行くと王族三姉弟とランドルフご夫妻プラス兄がおられました。

理由はもちろん

「エヘヘ、先生。みんな祝福してくれてます」

この娘についてである。

「……泣いていいですか？」

もはやこれは泣くしかあるまい。

そんな自分に向かい、今まで黙っていたガルクさんが

「ナルミ君」

「……なんですか？」

「諦めろ。こうなった彼女達は誰も止められない。下手に止めても血を見るだけだ」

そう言う彼の顔には暗い影見え隠れし、その表情は疲れと達観、そして悟りを開いたような色が見える。

「……経験談、ですか」

「俺の場合一番最初は6歳からだった……あの時は子供ながらによくこいつを止めれたと今でも思う」

「今度二人だけでゆっくりお話しをしましょう」

「ああ、上質の酒を用意しとく。共に飲み明かそう」

そういいながらしっかり握手しあう自分達。

やっと……やっとマトモな理解者が！！

「あらあら、もうガルクに認められて。さすがシルバの見込んだ旦那様ね」

「……ナルミ、この場合お前はもう義弟と言う事になるのか？」

……なんで親父はマトモなのに、こいつらはこうなんだろ。

「あんたらだから気が早いっての。自分は祖国のしきたりから１８まで結婚できません！あと半年待たないと無理です」

世間ではこれを時間稼ぎといふ。

……あれ？

「なぜに皆さんそんな驚いた顔しとるん」

「いや……お前１７だったのか」

「おうよ、華の１７歳の高校二年生よ」

「……１４か１５くらいかと思ってた」

はい？

ゼノアさん、あなた眼大丈夫？

「な、ナルミ、本当に１７か？背が高いだけの同い年くらいかと思

ってたぞ!?私より三つも上とは……ありえん」

ありえるわいボケ。

エリザのくせに生意気な。

全く、何をいきなり……あ、そっか。

「あー、自分達の人種は顔が幼く見える人種でな。成人しても若く見えるらしい」

それに一番食いついたのは、力より技で攻めるというイノムさんである。

「ちょっと待て!!人間もそんな何種類もいるのか!?」

「えー、そっからっすか?」

「いいから答えろ!!」

この後、自分は人種やらなんやらについての質問攻めにあい、結婚やらについてはうやむやになったが、別の意味で後悔するハメになったのである。

「……しかし、あれだな。ナルミは17の割に子供っぽい所があるな」

「うるさい万年脳内お天気王女！気にしてはいるんだ、それに触れるな」

「だけど17なのにくぐり抜けてきた修羅場の数や質は並の兵士よりもかなり多いわよね。さすが未来の息子、頼りにしてるわよ」

「リリスさん、違うからそれ。頼りにしないで」

……この苦労と不幸の数も、並の高校生ではありえないであろう程の数をこなす自分を誰か褒めて欲しい。

そしてそれらを乗り越えて少しでもオトナな性格に成長できたならまあいいが全くその兆しがない自分の性格。

これが一番腹立たしい。

「年上でも年下でも、先生は先生です。私の自慢の旦那様です」

「だ・か・ら！今は違うっての！」

「今はって事は半年後には夫婦になるんだな？」

「ｓｈｕｔ　ｕｐ！！そのふざけた口を縫い合わすぞバカエリザ！！」

……そして一番の不幸は、彼女達に目を付けられてしまった事であろう。

死にてぇ……

２９回目＊逃走中　ｉｎ　お城（後書き）

オチがしょぼいのはご愛顧

……やめて！拡散弾を撃たないで！！

EX・3：A＊ヤンデレる者達―彼女達の計画―（前書き）

変態注意報発令中

EX・3：A＊ヤンデレる者達―彼女達の計画―

～エリザサイド～

……私は今、とてつもなく困っている。

今、この場所にいるのは母様、リリスさんにミミリィとシルバ、そして私である。

私達は、皆で食後に女性だけのお茶会を話しをしながら楽しんでいるのだ。

この血のように紅いムリュヌ茶も、サクサクしっとりしたお茶うけのググの焼き菓子も、どちらも美味しく申し分のない最高級の代物である。

では、なぜ私が困っているのか。

別に高級な物を食べるのに気が引けるとか、集まった者達に対する緊張とかは全くない。

むしろ王女である私からしたらもはや当たり前なのだ。

なのだが……その集まった面子での会話が問題なのである。

「やはり誘惑する時は彼の好きなお酒を用意して、甘えながらお酌をするのが一番よ」

「そしてそれに少し薬を入れたりすると、なお効果的ですわよね」

「薬って……あの、リリス様。それはちょっと……」

「お母様、どんなお薬が一番いいのですか？」

「……シルバ、まさかやる気じゃないだろうな？」

これである。

シルバとリリスさんはまぁわかっていたが、まさか母様までそっちの部類だとは思っていなかった。

とゆうかもう内容が『愛しい彼氏を上手に落とす方法』から『愛しい彼氏を上手に暗殺する方法』へとすり替わってる気がしてならない。

今までシルバとナルミの関係を面白がって助長していた弊害が、こんな形でくるとは……

これからナルミに対して少し優しく接した方がいいかもしれない。

「……リリスさんも、それはさすがに駄目でしょう。下手をしたら死にますよ？」

「あら、大丈夫よ。私達は１６歳から２５年間、ガルクにそれをやってきたけどきちんと生きてるわよ？ねぇ」

「そうよエリザ。女は待つだけじゃ駄目なの、自ら行動しなくちゃね。薬くらい、手段の一つよ。それに若い時からやって慣れさせていけば、今やっても問題はないわ」

……え？

「ちょっと待って下さい母様！まさか今も父様へと薬を盛ってる訳では……」

「大丈夫、今はしてないわよ」

「そ、そうですか……よかった……」

とりあえず、過去にあった事は目をつむろ……

「最後に盛ったのは半月も昔よ。あの時はこの歳で久しぶりに気持ちが高ぶって、一年ぶりに使ってしまったわ」

……思わず身体が硬直した。

まぢですか母様。

「ひ、姫様……これは……」

「言うな、ミミリィ。わかってる……ハァ……」

「……先生いわく、ため息をつくと幸せが逃げるらしいですよ」

「それ、私も聞いたが、つかずにはいられないぞこの状況」

「……がんばりましょう」

そうミミリィが言って手を差し出してきたので、私はそれをしっかりと掴む。

仲間がいるのは、素晴らしいな。

とかなんとか。
馬鹿な事をやってると、あっちの話もだいぶ進んだようで

「で、シルバ。ナルミさんとはどこまでいったの？」

「え！？あ、あの…その……」

「私も王妃として聞くわ。どこまでいった、いややったの？」

母様、職権乱用です。
そしてはしたない。

「うぅ……あの……くちづけを……してもらいました……」

あぁ、確か3日前のナルミ争奪戦の時にしたという話は聞いた。

なんだ、それだけか。

私達はそこで納得してお茶を啜ったのだが、これにやたら食い尽く奴がいた。

「くちづけをしてもらった？私はシルバがしたって聞いてたんだけど」

まさかのミミリィである。

でも確かに、姉様からの話ではシルバがナルミに抱き着きながらしたと言っていたな。

「……つまり、この三日の間にナルミの方からしてきた、という事か」

ナルミもなんだかんだ言って、なかなかやるでは……

「いえ、あの……私からする前に、後ろからいきなり抱き着いてきて、みんながいる前で有無を言わさず強引に私の唇を……その、奪って……」

……ナルミ最低。

「シルバ、その話詳しく話しなさい」

そう言いながら、リリスさんはシルバの手をとり、真っ直ぐな目を向ける。

ああ、ナルミ終わったな。

乙女を弄んだ報いだ、痛い目みやがれ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊◎☆

「なるほど……そんな事があったの……」

「は、はい……その…先生のその……嫌じゃ、なかったです……」

「むしろ嬉しかったわけね」

「……うん……」

心から思う。

ナルミ、最低とか思ってすまなかった！
そしてよくシルバを止めた！！

ナルミの行動がなければ兵士の命は確実になくなっていた。
ナルミに称賛の拍手をおくろう。

しかし……

「そんないきなりなんて……ナルミさんはシルバに会えた喜びで自制が効かなくなるくらいシルバを愛してるのね」

「それに皆が見ている中、強引にそういう事をするって事は、シルバちゃんは自分のモノだから手をだすなよって意思の現れじゃないかしら」

「そ、そう……ですか……エヘヘ」

どうしてこうも都合よく解釈できるんだろう？
あきらかにナルミはシルバを止めるための、最終手段としての行動なのに。

おもわず顔が歪んでくる。

「……それは…シルバを止めるためにしかたなくやった訳じゃあ……」

「やめとけミミリィ、誰も聞いちゃいない」

本当……恋をすると皆こうなるのか？
いや、ミミリィはマトモだ、彼女達が異常なんだ。

「全く……もはやこれは恋愛と言うより執着とか依存とか言った方が相応しいな」

「そうよ。恋愛とは互いに執着し、依存し合うモノよ」

「そして心も身体も私色に染めてあげるのが真の愛情なの」

「「ねー」」

……いい歳して、何が“ねー”ですか。

そしてシルバ、感動しない。
ミミリィも、あなた達の恋愛がよっぽど普通だから。
あなたじゃなく母様達が間違っているだけだからそんな落ち込まない。

……てゆーかこれは

「よく今まで行き過ぎて嫌われたりしなかったな……」

あ、思わず口から……

しかし、私のその一言を聞いた母様達は、一気に表情を硬くさせる。

なんだ、なにがおこった。

「そうよ……忘れてたわねリリス」

「ええ……今がとっても幸せすぎて、つい忘れてしまってたわねレイラ」

そう言って、互いに手をとりあいながら立ち上がる母様とリリスさん。

なんだ、なにがおこる。

「「シルバ（ちゃん）！！」」

「は、はい！なんですか師匠！！」

師匠って……

「あなたは幸せを手に入れる前に、様々な障害があるわ」

私はシルバが幸せを手に入れると同時に、ナルミの平穏が崩壊する気がするのは気のせいでしょうか。

「例えばナルミさんを狙うカムカムみたいな卑しい女達や、あなたを狙うブブムみたいな醜い男達」

とりあえず、ここら辺には絶対いない。

いたとしても、5秒かからず死ぬと思う。

「国に属する者の宿命として、時には戦地に赴き離れ離れになる事もあるやもしれないわ」

ナルミが来たら、即効で片が付きます。

「ナルミさんの力に嫉妬して、権力で潰そうとする輩も出るかもしれないわ」

なら、そういう母様が……いや、もうやめよ、疲れた。

「でもね、そんな事よりもこれから、あなたが直面するかもしれない最初で最大の障害があるの」

「それはね」

「ずばり」

「「深すぎる愛が時に相手を傷つけ、心を壊してしまう事があるのよ！！」」

……見事なまでに息があってるな。

互いに一言一言、盛大に身振り手振りを加えての演説とは……

これは“意味のない技能”という意味の“むだすきる”という言葉に当て嵌まるだろう。

そんな事を考えていると、シルバがかなり動揺しながら口をひらいた。

「ど、どういう事ですか！？心を壊すって……私が……先生の？」

「ええ、そうよ。いまのあなたは私達がガルク達の心を壊してしまった時と、ほとんど同じ行動をしているわ」

「あの時は私達も、いつもいつもべったりくっついて幸せだったわ……。でもね、その幸せは脆く、崩れやすいものなのよ」

そう言うと母様達は、今度は神妙な面持ちで再び席に座りはじめた。

……ここまで真面目なリリスさんの顔、はじめてみた。

いっつも何があってもホワホワしてるのに……

「……姫様、どうしましょう？」

「見ているしか、方法はないな。正直、もう全てを忘れて眠りたい」

「……もう完全に私達はあの世界の外にいますから、大丈夫じゃないですか？」

「……すると明日の朝、私が鮮血の剛腕の餌食となる可能性が出て来る」

つまり、私達にはこの話を聞き続けるしか逃げ道はないのだ。

「いい、シルバ。愛とはとっても重いのよ。そしてその愛を、いきなり毎日毎日四六時中周りの目を気にせずに与え続けるとどうなると思う？」

「え？……それは…皆にも私が…」

「違うわよシルバちゃん。でもその気持ちはよくわかるわ。私達も最初は、周りにも認められる程のまだ結婚していなかったのに夫婦と言われる程に一緒にいて、愛を与え続けたわ」

「でもね……あれは忘れもしない、１５歳の時……いきなりガルクが……私のもとからいなくなったの」

「私も同じよ。最初は本当に消えたのではないの、ただ……目の前にいるのに、私を見てくれなくなったの……」

「あまりに重い愛が、負担になりすぎて、それを避けるように私達を避け、会話もしてくれなくて、触る事すら許されない……あの時は、本当に自殺を考える程の生き地獄だったわ」

「結局、離れるのが恐くて自殺もできずに、毎日会いにいってたわ。昔の幸せに戻るために」

「だけどそんな私達を置いてある日、彼は急にいなくなったの」

「私達を置いて、どこかに消えたと知ったときはもう自殺なんて考えられない程の絶望感と喪失感に苛まれていたわ」

「そして私達は残った彼の荷物を抱えながら、毎日泣いて神に祈ったわ。彼を返してって。そしたらある日突然彼は帰って来たの。日が落ちて、紫色をした西の空に星がちらほら見えるような時間に、夕日を背に悠々と」

「ええ、そしてそんな彼に私は泣いて足に縋り付きながら叫んだわ、“私を捨てないで！置いていかないで！！”って」

「そうしたら、彼は優しく私の頭を撫でて、抱きしめてくれたの」

「そして言ってくれたのよ、『君の愛は一度に持つには重過ぎる。だから、これからは節度をわきまえ、少し周りも気にしながら俺を

愛してくれないか。そうすれば、俺も変わらぬ愛を君に捧げよう』って」

「それを聞いた私達は、もうわんわん喚きながらそれを承諾したわ。そんな私を彼は抱き抱えて、彼の部屋まで運んでくれたの」

「そして静かに私をおろして、優しく布団をかけて、『今までごめんね。俺のために、辛かっただろうに。疲れただろう?ずっと一緒にいるから、安心しておやすみ』って言いながら、そっと手を握ってくれたの」

「そして次の日に起きたら、まだしっかりと手を握っていてくれたの。本当にずっと一緒にいてくれて、その時もあまりに嬉しくて、また大声で泣いたのを覚えているわ」

「その泣き声で、彼を起こしてしまったのよね。そしてその時の笑顔を見て、私は再び幸せが戻って来たという事を実感したわ……」

そういうと、母様達はふぅ、と息を吐き、少しの間の後に息を揃えて

「「これが、私達の体験した5日間の地獄の全てよ。こうなりたくなければ、今からでも節度をわきまえ、きちんと考えて行動しなさい」」

「……そうすれば……お母様みたいに嫌われたりしないで幸せに過ごせますか?」

「「ええ、間違いなく」」

「……わかり、ました」

……

……これって、さ。

「母様、リリスさん」

「なに？」

「エリザも悩みがあるの？」

「違います。ただ……お二方の体験した事は、全く同じだったりします？」

「「ええ、そうよ」」

……やっぱり。

私は自分の考えに確信を持つと、ミミリィが小声で

「姫様、もしかしていまの話って……」

それに私も小声でかえす。

「ああ、間違いない」

この話しは確実に

「母様とリリスさんは、父様とガルクさんに嵌められたのだ」

「ですよね……」

多分、父様とガルクさんは互いに協力しあい、同時に行動を起こして母様達それぞれに自分の事で手一杯にさせる事で冷静な判断力を無くさせ、完全に弱りきったところで要求を突き付け、それを飲ませたのだ。

見方によれば外道だが、今までの会話やナルミの状況から致し方ないといわざるをえない。

……ん？

まさか……

「母様、母様の場合の“節度をわきまえる”って、もしや……」

「誰が見ても尊敬される魔王様に寄り添い支える、強い王妃を演じる事よ。本当は縋り付く事しか出来ない弱い女なのにね」

そう母様は言うと、いたずらっぽくクスクスッと笑った。

……節度をわきまえなければ所構わず纏わり付き、節度をわきまえればその剛腕で殴り飛ばす。

どっちにしろ父様に逃げ場はなかったのか。

てゆーかこれなら強いの意味が違いますよ。

腕力ではなく、心が強いと言われるようにしましょうよ。

私が母様に対する認識をあらためていると、ミミリィが母様達に

「……薬は、節度をわきまえてるんですか？」

……わきまえて、ないな。

「大丈夫よ、ただの興奮薬だから。ガルクなんかそれを飲んだらすぐに私を、まるで獣のように激しく乱暴に、それでいて優しく私を求め、愛してくれるのよ。でも欠点としては、その時着ている服を脱がす前に無理矢理破いてしまう事があるくらいね。でもそれがまたいいのよ」

そう言いながら、頬を染めてうっとりするリリスさん。
それに即座に反応するのは

「あの、支配されてる感がゾクゾクして堪らないのよね……私の自由を奪って、言葉でなじってまるで物として扱われるような、それでいて私だけを必要としてくれて愛してくれているという事実が私をより一層喜ばせてくれるの」

まぁ……母様である。

母様って……変態だったんだ……

「そ、そうですか……」

ミミリィよ、口の端が痙攣してるぞ。
言葉が通じないのは最初からわかっていた事ではないか。

「ああ、ダメだわ……今日はもう我慢できない……私はもう帰るわ。はやくガルクに会わないと……これ以上は身体が持たない」

そう言ってそそくさと帰るリリスさん。

……ガルクさん、強く生きて下さい。

「私も、戻るわね……悪いけど片付けをお願い。私ももう、これ以上は……」

すると母様も窓から飛び出し、自慢の白い翼を羽ばたかせて上へと……

『おわっ！なんだいきなっこらっ！！やめっ！』

『あなた！……ハァハァ……今日は寝かさないわよ！！さぁ！私をいたぶって！！』

『何がだ！！だからやめっ！ちょギャァァァァ！！』

とりあえず、ミミリィが無言で窓を閉め、音を遮断してくれた。

……なんだろう、父様がいたぶられてる気がするのは気のせいだろうか。

そしてガルクさんも似たような状況になるんだろうなぁ……

父様が歳の割に老けて見える理由って、母様かもしれないな。

……今度、父様が喜びそうな物を贈ってあげよう。

「姫様、私も……その…先生にあいに……一緒に寝たくて…」

「……そんなあからさまに言うな」

失礼します、とシルバは走って部屋を出て行った。
残ったのは私とミミリィだけである。
しばらくの沈黙の後、私達はまるで打ち合わせをしたかのように
「「つ、疲れた……」」
息をピッタリと、同じ言葉を同じようにうなだれながら呟いたのである。
「……ミミリィ、どう思う？」
「……とりあえず、先生が今まで感じてきた苦労の一端はわかった気がします」
「だな……これからはもっと優しく接してやるか」
何たって、誰も話を聞いてくれずに周りが勝手に話を進めるのだ。
自分の話ではないのにこんなに疲れるのだ、これが自分の事となるとその疲労は計り知れない。
しかも私は最初から諦めていた節があるが、いつもなんだかんだと意見をいいつつ無視されるナルミにしたら、いつ過労で死ぬかわかったものではない。
しかも相手が好意をもって接してくるから文句も言いずらい。
……私も話をあんまり聞かずに今までいたが、これからはきちんと聞いてあげよ。

「……とりあえず、姫様は一度怒られてるんですから気をつけて下さいね。姫様だけでも」

「……ああ、気をつける。だが……私が言うのもなんだが、誰かがシルバを止めてやらねばナルミはいつか死ぬぞ」

「……私達が魔王様達のやったあれを教えてみてはいかがでしょう」

「ナルミなら、乗るかもしれないな……とりあえず、疲れた。もう寝たい」

「後片付けは私がしますので、姫様はお休みになられても……」

「……いや、私も手伝う。戦友（親友）に全てを任せて私だけ休むのは、なにか、なぁ」

「……じゃあ、お願いします」

「ああ、任せろ……ミミリィ」

「はい、なんですか？」

「私達、身分とか関係なしにずっと友達でいような」

「……うん」

私とミミリィの固い友情という絆が芽生えた瞬間であった。

「とりあえず、私達の第一目標は……」

「先生とシルバの関係をマトモに修正する、ですね」

「昔のシルバは、初々しくてよかったなぁ……あの時まで戻してやりたい」

「ですよね……なんであんなになっちゃったんでしょうか？」

「……たしか、シルバと劇を観に行った次の日くらいにシルバが、“私と先生の仲はもう皆さんに知れ渡っているのですね”って言って……その直後くらいからやたらとナルミに纏わり付くようになって……」

「……たしかそれ、リムが劇団の方に内容を教えてたんですよね」

「……ああ、奴自身が言っていた、間違いない」

「……」

「……」

「明日、どうします？」

「おまえの彼氏、しばらく治癒室に閉じこもる事になるかもしれないが、いいか？」

「戦友（親友）の頼みです、むしろ私も手伝いますよ？」

「じゃあ、お願いしようかな」

「任せて下さい。愚か者に制裁を与えましょう」

「ああ、殺さない程度にごっどふぃんがーをくらわせてやる……クハハハハ」

「なら、私はれーざーびーむを……フフフフ」

「ハハハハハハハ」

「フフフフフフ」

……その部屋から私達の不気味な笑い声が消えたのは、それから一時間も後の事である。

……半分八つ当たりだが、問題あるか？

EX・3：B＊ヤンデラレる者達―彼らの過去―（前書き）

変態注意報から変態警報へとレベルをあげて発令中

EX・3：B＊ヤンデラレる者達―彼らの過去―

～ガルクサイド～

あれは今から２６年前の、俺が１６歳の時の話だ。
その時俺は、現魔王のキースと王妃のレイラ、そしてリリスと共に放浪の旅にでていてな。

まぁ、元はそのさらに2年前に俺とキースがこっそり修練の旅に出ていこうとしたのを見つかって、奴らを泣く泣く同行させるはめになったのだが……それはまず置いといて、とにかく俺らは旅に出ていた。

そしてそんなある日、俺らは森と湖の街、プリットという所に着いたのだ。

「……やっと、着いたな」

「ああ、とうとう着いた」

そして俺とキースはあまりに嬉しすぎて、涙が出てきた。
対する女性陣は

「……むぅ…キースのばか、根性なし」

「ガルクも……なんで襲ってくれないですか」

これである。

前のスティー村から約6日間、こいつらは俺らをやたら誘ってくるのだ。
朝昼夜構わずになんだかんだいって足を止めては抱き着いたりくちづけしたり……
おかげで3日でいける所を二倍の日数がかかった。

しかもそもそも服装からまず悩ましい。

リリスは魔術師用の服を来ているのだが、胸が見えるのではないかという程に開いた真っ白な半袖の服に頭巾付きの薄い上着。
下はもう屈めば中身がみえるくらい短いスカート。
ちなみに背中には彼女の背丈並の、先に魔石がはめこまれた青い杖を背負っている。

レイラはもはや上は胸を隠すていどの服に、上は少し丈夫な、だが腹まで行かないくらいの袖がない緑の上着を着ている。
臍は出て防具の類は肩に申し訳程度ついているだけである。
しかも下はフトモモまで丸見えな短いズボンだけ。

そんな奴らが自分の腕に発育途中の女性の象徴を常時押し付けて来たらどう思う？

よく堪えたと自分を褒めたくなるよ。

……まぁ、多少理性が白旗をあげた事もあったが……特に夜とか……でも！まぁ奴らの攻撃の九割強はなんとか凌いだ。

「……根性なかったら、こんな所まで歩いて旅なんかしないよ」

そう言うのは、最近めっきり老け込んできたキースである。

彼はいかにも冒険者な恰好で、背中には剣ではなく巨大な槌を背負うという、なんとも奇妙な恰好をしている。

いつも思ってたのだが、なんで翼が邪魔にはならないのだろうか。

そしてなんで武器に誰も使わないような、そのうえなぜにやたら嵩張る槌を選んだのかは永遠の謎である。

「……野性の獣にはこれでもかってくらい襲われたがな」

そしてこれは俺。

軽くて赤めの動きやすい鎧を着て、背中には愛用の剣を背負っている。

……なんだその眼は。

短くても、事実なんだ、しょうがないじゃないか。

まぁとりあえず、俺らは着いたんだよ、街に。

もう、どこにも辿り着けないんじゃないかってくらい長い道のりだったから、ついつい感極まってしまったのだ。

……だがね、この街に来た事自体が俺らの不幸のはじまりだったのだよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊♀☆

その後俺らは街の、なるべく若い女性の従業員がいない宿を探して

そこへ泊まった。

少し値段は高かったが、殺されるよりは大分いい。
どこでどんな事件が起こるかわからないからだ。

というか一回殺されかけた事があると、嫌でもそこらに気をつかう。

そして、借りた二つの部屋のうち、片方は俺とキース、もう片方はリリスとレイラという部屋割りにした。
もちろん奴らは文句を言ったが……まぁ、だいたい耳元で愛を囁くと黙るのでなんとかなった。

そんな一悶着もあったその日の夜、俺らは街で買った酒を飲みながらこれからの事を話し合っていた。

「なぁキース……俺らこれでいいのかな？」

「どうした、らしくないな。俺はまだ城には戻りたくないぞ」

「そっちじゃない、リリスとレイラについてだ」

「……どうしようもねぇよ。もう国に戻ったら結婚する覚悟もできている……というかまぁ……なんだかんだで俺もあいつを好きなんだよなぁ……」

そう言いながらキースは恥ずかしげに頭を掻いて……

バンッ！！

「キース！それ本当！？」

……まさかのレイラご登場である。

「キースキースキース！！嬉しいわ！私達、夫婦になるのね！！もう離さない！あなたとの幸せは絶対離さないわよ！！」

レイラはそう叫びながら、キースに抱き着き、そのキースからは

ゴキゴキゴキ

なにか危ない音がした。

「ちょ！レイラいだだだだ！！骨っ！おれっ！はなっ！だぁぁぁぁ！！」

「レイラ、落ち着け！自分の力わかってんのか！おいレイラ！！レイラ！！……ていっ！！」

「きゃう！！」

ドサッ

意識を失ったレイラはそのままキースに覆いかぶさるように崩れていった。

「あ、ありがとうガルク……延髄か…」

「延髄だ。慣れてなかったが、なんとかなった」

その後レイラをよけようと奮闘するキースだが、骨が折れない程度

にだきついているそれはどう頑張ってもとる事ができない。
しばらく頑張ってたが、途中諦めたようにこっちをむいてキースだが。

「とりあえず、こいつをよけ……いや、やっぱいい」

こう言って反対側を向きはじめた。

「なんだ、別に手伝うくらい「ガルク」……できそうにないな」

そして俺の後ろにはほんわかした顔のリリスがいた。
彼女は眼をキラキラと輝かせ、希望に満ちた視線をこっちに送ってきている。

……嫌な予感。

「ガルク、私はわかってるわよ」

「な、なにが？」

俺がそう言うと、リリスは『エヘヘヘヘ』とか言いながらひっついてきて、俺の胸あたりで丸を書くように指をくるくるやってきた。
そして言うのは

「ガルクが、キースにレイラと結婚するって言わせたんでしょ？だって私達だけが結婚するのが決まってしまったら、レイラとキースは気まずいでものね。だから先にくっつけて、その後私に正式に婚約を申し込んで……もぅ、優しい旦那様。私は一生をあなたに捧げますわ」

もう、めまいがした。
一瞬意識が無くなった。

しかしリリスはそんな俺など全く気にせず、ただでさえ開いた胸元をさらに開いてこう言ってきた。

「エヘヘ……私の全てはぁ、ガルク、あなたのためにあるんですよぉ。私はあなたを愛し、愛されるために生まれ落ちたぁ、あなただけの忠実な愛玩奴隷ですぅ……」

もう、全身の毛が逆立つ程に恐怖を感じた。

こいつ、正気か？
てゆーか鳥肌が……

「だからぁ……はぁう！」

「はぁ…はぁ……大丈夫か、ガルク！」

いきなり倒れたリリスの後ろには、彼女に延髄を決めたキースが立っていた。
リリスはそのまま床に倒れている。

「……大丈夫…だ」

「いや大丈夫じゃないだろ……まぁ、いきなり奴隷宣言か……うちの国、奴隷制度は廃止されてなかったっけか」

「気にする所はそこではないだろ」

「ああ、じゃあレイラとおまえの愛玩奴隷の記憶は消しておくか」

「……おまえ、怒ってる？」

「とりあえずこうなった原因はおまえだと思いたい」

……勝手な奴だ。

これで今は魔王やってんだから、始末が悪い。

まぁ、とりあえずだ。

リリスとレイラは部屋へと戻し、中断した話しを再開する。

「で、レイラとリリスがどうかしたか？てゆーかおまえはどうなんだ？」

「俺もおまえと同じだ。結婚も考えているし、なんだかであいつが好きだ」

「ならいいじゃないか。てゆーか何をいまさらな話だけどな」

そう言いながら、馬鹿（キース）は再び酒を煽り、カラカラ笑い始める。

……全くこいつは事の重大さをわからないようだ。

「そうだ、俺らはあいつらといずれ結婚する事になる」

「だからどうした。いい加減くどいぞ」

「……結婚できると知っただけであれなら、結婚した後はどうなる

のだろうな」

瞬時にキースの動きが止まる。
杯を持ったまま、変な笑顔で凍ったように動かない。
だがしばらくすると氷が溶けたのか、ぎこちない動きでこちらを向いてきた。

「……どうなるとおもう？」

「とりあえず、さっきの以上のが毎日、それも起きてから寝るまであると考えたほうがいいな」

「無理にきまってんだろ！！」

バンッ！！とキースは杯を机にたたき付け、怒鳴り出した。

「いままでさえ、事あるごとに抱き着いてきたり寝ている時に全身舐められたり！！前の村でだって突然……」

「そうだ、あんな公衆の面前でいきなり口移しで物を食わせたりされるのは、いくらなんでもやり過ぎだ。だから、早急になんとかしなければならない」

「なんとかしなければって……どうするよ？」

「それをおまえと話し合いたいんだが……」

「無理だな、俺らで何とかできるんならとっくにやってる」

そんなキースの発言により、なんとも気まずい沈黙が部屋に充満してしまった。

それを言うな、キースよ。

「……寝るか」

「ああ、もう忘れよう」

……いや、現実逃避とか言わないでくれ。

大丈夫だ、次の日に話は急展開する。

＊＊＊

まぁ、いつもの事だから慣れたがな。

と、そんな事より依頼についてだ。

「なぜ、俺達なのですか?他にも冒険者はいるでしょうに」

とりあえず探りを入れておく。

なにせキースはこれでも王子なのだ。

どこで罠を張られて命を狙われるのか、わかったもんじゃない。

だがそんな俺の警戒の視線をもろともせず、その職員はさも当然のように

「あなた達を選んだ理由は。あなた達が、強い上に正義感溢れるすばらしい冒険者だって三日前くらいから噂になっているからです」

予想の遥か後方を狙う答えが来た。

意味がわからない。

「ちょまっ!どういう事だ!?なんで三日前から!?つかどこ情報!?」

さすがのキース(馬鹿)もこの訳のわからない信頼に対してかなり混乱している様子である。

もちろん俺もかなり混乱して、訳わかんなくなっていた。

そんな俺達に対して職員は不思議そうに

「あれ？たしか大剣と大槌を持った男達が、最愛の妻を護りながら、後から街道を通る者達へ被害が出ないように凶暴な魔物や獣達を時間をかけて駆逐しながらこの街へ来るらしいって……おかげで魔物被害が大幅に減って感謝してたのですが……間違いでした？大槌なんか使ってる方があなた以外見受けられなくてってっきり……」

これで繋がったよ。
とんだ誤解だが。

「いえ、多分それは俺達ですが……」

「ですよね！やっぱりそうですよね！あぁよかった！これでやっとムリヌを収穫できますよ！！ありがとうございます！報酬は必ず支払いますので！！」

キースの顔が引き攣っている。

そりゃあ昼時の食堂だ、こんな大声で言われたら嫌でも周りに知られてしまう。
しかも馬鹿（キース）が持っているのは、この世界でも使ってる奴などそういないであろう大槌だ。

ここでこの話を断ったら、俺達には色々と悪い評判がつくであろう。

……全く、これで一体何度目だ？
だからその槌をとっとと捨てろって言ってるのに。

「……わかりました、その依頼引き受けさせていただきます。で、件の魔物についてや土地の状況等の情報を教えていただきたい」

……ここで悪い評判覚悟でこの話を断っていたなら、今の俺達の関係は全く別物になっていたと断言できる。
それくらい重要な出来事だったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ ⁀☆

依頼の内容は、グルーデックの討伐。
知ってのとおりグルーデックは……なに知らない？

あー、じゃあ説明するが、グルーデックとは主に森の奥深くに生息する飛竜の一種でな、別名瞬竜（しゅんりゅう）と呼ばれている程に素早い竜だ。
見た目は黒く、長い刺のついた尻尾を持ち、ただでさえ速いのに怒ると目が赤く光りさらに速く……なに、なるがくーが？
なんだそれは。

まぁとりあえずとてつもなく速い魔物だと思ってくれていい。
手なずけられたらとても良い足として使えるのだが、まぁ手なずける事などそうそうできないので討伐という形になる。

だがしかし、ここで問題が発生すした。

「……あいつら、どうする？」

そう、リリスとレイラについてである。

リリスは知ってのとおり、根っからの魔術師だからか、運動能力はからっきしでな。
グルーデックの速さについていけず、魔法を唱えている隙に叩かれ

るのがオチだ。

そしてレイラ。

こいつもこいつで根っからの拳士（けんし）なのだが……欠点として足が遅い。

反射神経もいいし、拳の威力ならそこらの魔物なら一撃で、グルーデックだって五発も殴れば簡単に屠る事が出来るだろう。

だがなぜかどうにもこいつは速さがない。

しかも肉体強化魔法の才能が全くないので、リリスに補助をしてもらって何とかいつもの俺達についてこれるくらいに足が遅いのだ。

しかも場所が森だから、翼をつかって空からの攻撃もできない。

つまり、あいつらを連れていくと足手まといになるという訳だ。

「……置いていくしか、ないよなぁ」

すると必然的にこういう答えがでてくるのだが……

「……あいつらが素直に待ってくれると思うか？」

「いや、絶対こっそりついてくる。だから困ってるんだ」

こういう事である。

となるとこれからとる行動は一つしかなく、つまりそれはあいつらに知らないようにする事である。

「やっぱり、あいつらには秘密にしておくか」

そう俺がぼやくと、キースが何か思い付いたように顔をあげ、こう

言ってきた

「なあなあガルク、いっそ今日からしばらくあいつらを突き放してみたらどうだろうか？」

「ん？どういう事だ？」

「しばらくあいつらとは最低限の会話等以外せずにほうっておくんだ。そしてあいつらも俺らがいない事へと慣れ、今みたいにベッタベタにくっついてくる事はないんじゃないか？」

「……そううまくいくかぁ？」

「昨日なんもいい案がでなかったんだ、だめ元でやってみないか？」

この時俺は他にいい案もなく、だからと言って彼女達が勝手におとなしくなってくれるはずもないと考え、キースの案を採用した。

「……そうだな、他に案もないし、やってみるか」

「よし、なら早速どうしたらいいか細かく決めよう。あいつらなら多少無茶しても大丈夫だろ、毎日“惨めな私をきつく縛って、辱めて下さい”やら“悪い子な私にお仕置きをしてください”だとか言ってる奴らだ、問題はない」

「そうだな、多少ならむしろよろこびそうだ」

こうして、俺達による“リリス・レイラ改造計画”がはじまったので……ん？なんだ？

なに、外道？
どこらへんがだ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＋☆

さてさて、とりあえず彼女達の矯正を初めて４日目が経った。

最初はただ俺達の機嫌が悪いと思ってたようだったが、だんだんそうではないと思いはじめたようで、日に日に目に涙をためながら縋るように近付いてくるリリス達を見て、何度もその手をとって抱きしめてやろうとするのをグッと堪え、この日まできたのだ。

そしてその日は、俺とキースがグルーデックを討伐しに行く日なのである。

最近は嫌われたと思ったリリス達が四六時中纏わり付いてくるので、彼女達が寝ている朝早く、日も昇らないうちに街を出発した。

そしてつつがなくグルーデックを討伐して死体をキースと協力して持ち帰……んあ？グルーデックとの戦闘描写？

いや、グルーデック関係ないだろ。
この話の中心は俺とリリスについてなんだから……わぁかったわかった。

全く、君は意外に強情だな。

グルーデックとの戦いは、まず土を魔法で加工して落とし穴を造り、その上に生肉を置いて落ちるのを待ちながら隠れる。

そして落ちた所でキースが頭を槌でぶん殴ったら気絶して、その隙に俺が首を……だからなんなんだい、もんはんって。

まぁとりあえず、だ。

思いの外グルーデックが簡単に罠にかかってくれたおかげで予定よりかなり早く終わったから、街まで死体を運びながら帰ろうとしたのだが、やはり森の奥深く、そう簡単に戻れるはずもなく、その日は森で一泊した。

で、次の日だが、俺達が来た道ならちょっとグルーデックを運びながら帰るのには狭くてな、大回りしながら帰ったら着いた時はもう日も暮れかけていた頃だった。

街に着いた俺達は役場へ赴き、死体をまず俺達の新たな服をつくるための素材となる部分を剥ぎ取り、使わない部分を役場に……だぁかぁらぁ、もんはんって一体なんなんだ？

なにげに君は話の腰をへし折るな。

とりあえず、使わない部分を役場へと渡して報酬を貰い、俺達は宿へと戻ったんだよ。

すると宿の前に、前に見た時に比べて限りなく窶れ、目を泣き腫らしたリリスとレイラがまるで世界の崩壊を目の当たりにしたような顔で立っていたのだ。

絶望を全身から滲み出している彼女達を周りの客はみんな避けるように進んでいた。

そして彼女達は俺達を見つけると、一瞬眼を見開くやいなや涙を流しながら駆け寄ってきて、俺達に縋り付いてきた。

そして放った第一声が

「お願いですから私を見捨てないでください！なんでもしますから！いい子になるから私をあなたの側に置いて下さい！！」

「ちゃんと言う事聞くから！わがまま言わないから！お願いします！私を捨てないで！置いてかないで！嫌だ！離れたくないよ！嫌だ！嫌だぁ！！」

上からリリスにレイラである。

さぁ考えてみようか、今はもう太陽も沈みきる直前くらい、つまり夜の一歩手前だ。
するとだいたいの者は家へと帰るだろう。

だが、この街に家がない、俺達と同じく旅をしている者達はどうだろうか。

当然宿へと向かう訳だ。

宿へと向かう者、宿の中で休む者、果ては宿の従業員。
そんな中で、窶れているとは言え美少女に足にしがみつきながら、“捨てないで”と泣きながら懇願される若い男性が、しかも二名も。

さてさて……何名の者に俺らの姿が見られたかな？
そして皆さんどう思ったかな？

答えは火を見るよりも明らかだ。

だから俺達はかなり焦った。

いや、焦ったなんて生易しいものではない、それ以上の、言葉で表せない程に混乱した。

だから俺は急いでリリスを抱きしめて、彼女が落ち着くように話しかけた。

「大丈夫だからリリス、俺はおまえを絶対に捨てない。いつもいつも溢れんばかりの愛を貰ってるんだ、そんなおまえをどうして捨てようか。……まぁ、一度に貰うには多過ぎるがし、周りをみて節度も弁えてほしいけど……っと、ごめんよ。大丈夫、俺はおまえをいつも変わらず愛してるよ」

もはやなれたものである。

まぁ、焦った結果つい本音が少し出てしまったが。

だがそんな俺の言葉も今の彼女には効果てきめんで

「ほ、ほん…とう?…わ、わが、わがっだ……ぢゃんど…ぐずっ……じゃんどぜづどを…わぎまえて……こうどうじまずがら……だがら……だがら……」

むしろいい方向へと転がった。

「あ、ああ、大丈夫だ。おまえを捨てない、ずっと一緒にいような」

「……うん」

リリスはそう言うと、本格的にびーびー泣いてしまった。

見るとキースも同じようで、後からきいたらあっちも俺と同じく、

なんかいい方向へと話が転がったようだった。

とりあえずリリスを抱き上げ、やじ馬を蹴散らしながら部屋へと戻る。

さすがに今こいつらと別れる訳には行かないので俺とキースはそれぞれ別れて部屋へと入り、リリスを寝所へとおろした。

すると彼女は手をきつく握ってきたので俺は

「ごめんな。そんなに辛かったか……大丈夫、疲れてるみたいだし、一緒にいてあげるからゆっくり寝なさい」

そう言ってリリスの頭を優しく撫でてあげると、彼女はゆっくりと眠りに落ちていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊‰☆

その後の話をしよう。

次の日俺はリリスの泣き声で目を覚まし、約束した直後だが腕にしがみ付いているリリスを大目に見つつ、同じような情況のキース達と合流して飯を食いに行ったのだ。

すると食堂へ着いた途端

「ちょっとあんた達！」

食堂のおばちゃんに呼び止められて

「ふざけてんじゃないよ！！」

ガゴンッ！！

ベギャッ！！

頭を鍋で殴られた。

しかもこのおばちゃん、種族が王鬼（オーガ）だからめちゃくちゃ力があってとてつもなく痛い。

「この娘達はね、あんた達がいなくなった後必死で街中を走り回ってあんた達を捜してたんだよ！こんなかわいい娘を泣かせて……男として恥ずかしいと思わないのかい！！」

「クロノさん、キースを責めないで！わがままだった私が悪いの」

「ガルクも、私がきちんといい子になったら許してくれるって……」

「レイラちゃんにリリスちゃん……なんていい子なんだい！私もこんな娘が欲しかったよ！！」

「クロノさん、苦しいです……でもこうやって抱かれてるとお母さんみたい」

「心配してくれてありがとうございます、私達、幸せになります」

「つっ～～～！！いいかいあんた達！次にこの娘達を泣かせたらた

だじゃおかないからね！こんないい子そうそういないんだから、大事にさなさいよ！！」

「「は、はい」」

ちなみにこのやり取りの間中、俺とキースはずっと頭を抱えていた。

そしてその後

「……おい、リリスちゃんとレイラちゃんを今度泣かしたら俺がおまえらを殺すからな」

「お、見つかったのかい。もう離すんじゃないよ。そしておまえら、次はないぞ……」

「あらあなたたち、やっと見つけたのね。じゃあこれあげるわ、お祝いよ。……あなたたちには、はい、腐ってるけど、これで充分でしょ？」

「やあ！リリスちゃんにレイラちゃん！この首輪なんか買わないかい？魔物用の頑丈なやつなんだけど、女の敵を縛り付けるのにも一役買うよ！君達なら安くしてあげるからね！！」

明らかな街単位のいじめにあった。

そしてリリスとレイラ、どんだけ走り回ったらこんなに街を味方にできるんだ？

だがそんな俺達を救おうとしてくれるありがたいお方が現れた。

「あ、あの～……キース様とガルク様の奥様でいらっしゃいますよ

ね？」

あの依頼を持ち掛けてきた職員である。

「「はい！そうです！！」」

きっとこれは“奥様”と言う言葉に反応したんだな。

異常に返事が早かった。

「あ、あの……ごめんなさい！」

職員はそんな彼女達に、とてつもなく頭を下げた。

「キース様達に口止めされていましたが、キース様達への仕打ちがあまりに酷くて約束を破って申し訳ありませんがお伝えします！彼らがいなくなった原因は私が魔物討伐の依頼をしたからです！！」

……この言い方はまずい！

「実はこの街の近くの森に……」

「つまりガルクと私の仲を引き裂いたのはあなたなのね？」

リリスはそう言いながら、確実に当たれば死ぬ量の雷をバチバチ右手にためている。

「……は？」

「お、おいリリ…」

「キースがいなくなったのは全て、あなたの陰謀だったのね？」

レイラはレイラで確実に殺すため、拳に鉄のついた手袋をはめて臨戦体制をとっている。

「え、あ、いえ…一応役場の……いら…い……」

職員の額には脂汗が浮き出て、顔は真っ青に染まっている。

がたがたふるえている姿は、男のくせになにか小動物的なものにみえた。

そしてそんな彼に彼女達は

「「かけらも残さず、消えなさい！！」」

「「やめろぉぉぉぉぉぉ！！」」

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

～ナルミサイド～

「なんとか頑張って止めたが、グルーデックよりはるかに手強かった」

……本日は、ガルクさんによりランドルフ宅へお呼ばれされてここにいます。

リリスさんとシルバちゃんは王妃様にお茶会へとお呼ばれされたた

め、いないうちに自分とヤンデレについて語りたいとの事で呼ばれたのですが……

ナニコレ。

てゆーか一部完璧モンハンじゃん。
つか、リアルナルガクルガ見てみたいぞ。

「そして街を出る時には「ガルクさんガルクさん」……なんだい？」

「……あの、言いにくいんですが……最近のシルバちゃんの暴走の押さえ方は……」

自分がこう言うとガルクさんは一瞬ボケッとした後

「……あれ、なんで俺とリリスのこんな話になったんだ？」

あ、だめだこりゃ。

そう思いながら自分はコップ（中身はノンアルコールジュース。お酒は断った）を傾け、喉を潤す。

「……悪い、話が逸れすぎたな」

「いえ、そんな」

とりあえず、放置は危ないという事がよくわかった。

「はぁ……だいぶ長い時間話してしまったな」

「そうですね……もう3時間も」

「そうか……もう帰るかい？」

「そうですね……そうします」

自分はそう言いながら席を立ち、後ろを見ると

「上着をお持ちしましたナルミ様」

目の前にお年をめした執事（セブル）さんが

「おのぅぁ！気配が！いつのまに！！」

「主の望んだ時に仕事をする。これがランドルフ家の執事の仕事でございます」

いや答えになっとらんから。

ガルクさんも、笑いすぎ。

「あっはっは、いやー、セブルにはいつも驚かされるな。俺の親父もよく子供の頃に振り向いたらセブルの皺くちゃな顔があって驚いたと言っていたぞ」

「先代当主、グルース様が望まれたので赴いたまででございます……おや、奥様がお帰りになられたようですな」

セブルさんがそう言うと、リリスさんがおもいっきり扉を開いて

「ガルク！会いたかった！昔あった嫌な事を思い出して……わがま

まな私を優しく、慰めて下さい旦那様……」

「失礼しました、ごちそうさまでした」

自分は猛烈ダッシュで逃げ出した。

だって……なんか大人な事をやろうとしてるんだもん。

あそこにとどまるほどＫＹではない。

全く、リリスさんてば自分が見えないん……

「ナルミ様、上着をお忘れでございます」

「みぎゃぁぁぁぁぁ！！」

びっくりしたぁ！

お屋敷の曲がり角曲がったらいきなりセブルさんって！

青鬼を一人でやるよりびっくりしたわ！！

「それと、玄関はあちらにございます」

だが、そんな自分を全く気にもせずにセブルさんは自分を出口まで案内してくれた。

「ここでございます。お気をつけてお帰り下さい」

そう言った彼は深々と礼をして、自分を見送ってくれた。

「あ、ありがとうございます」

そう言って自分は扉に手をかけ、ゆっくり開けた。

……よかった、ブルーベリー畑じゃない。
それにセブルさんも追ってこないし、卓郎みたいにはならなさそうだ。

安心しながら自分は月明かりに照らされた石畳の道を城に向かって歩いて行った。
そして、重大な事を思い出す

『俺の親父もよく子供の頃に振り向いたらセブルの皺くちゃな顔があって驚いたと言っていたぞ』

……セブルさん、あんた一体何歳なんだ？
ある意味、青鬼よりはるかに恐ろしいかもしれない。

……部屋に風雲たけし城でもつくっとこうかな。

ちなみにその後部屋にもどると

「……クンクン…スーハー……ハム…んん……」

「……」

赤毛の吸血少女が自分のベッドを堪能していたので、無言で脱出してテキトーな空き部屋に久しぶりに自分のベッドを出し、そこで寝る事になった。

……あの娘のあれは、絶対遺伝だ。

……どうしよう。

EX・3：B＊ヤンデラレる者達―彼らの過去―（後書き）

……ごめんなさい

変態すぎてごめんなさい
ガルクさんの回想なのになんか変なとこあってごめんなさい
いままで魔王と王妃の名前を出したか出してないか忘れて、発見できなかったから名前つけてごめんなさい

そして奥様二人がやたら変態になってごめんなさい

……まぁ、彼女達は最初から変態設定でつくってたんですが（笑）

でも頑張って二個同時灯下したんです、許して下さい

……R15には、ならないよね

……

……

とりあえず、少しネタバレ、つか予定

次回、ナルミ君はアクションを起こします。

そしてさらに次回、ボスが登場します。

じゃあみんな、次回もみてくれるよな！！

次回、人生そんなに甘くない

じゃあみんな、じゃーんけーん……あちょっ！やめっ！

やめて！角が折れて翼壊れて尻尾切れてるのに打ち上げタル爆弾はやめて！

いたっ！ちょ！しかもボマーではまずいボマーでは……なんでここに大タルGが！？

みぎゃぁぁぁ！！

――――目標を達成しました――――

……センター前でおかしくなってると思って下さり結構です。

更新が遅れたりとか、ぜんぶセンターが悪いんです。

そして感想のお返しは、すいませんが明日という事でよろしくお願いします

模試が悪いんです、疲れたんです

……これからもマジ、見捨てないでよろしくお願いします。

そして全体的全面的にごめんなさい

PS・ブーメランハンターになりたい
……知ってる人、いるよね
とりあえずトライにブーメランがないのは不服

四人でブーメランハントが夢

以上南師(異常な)でした

３０回目＊彼女の恋と彼の愛（前書き）

親がいない間にチマチマ

久々だから、いろいろつらい

30回目＊彼女の恋と彼の愛

「荒ぶる風よ！彼の者を吹き飛ばせ！！」

「この焔の矢でその心臓を射貫いてあげるわ！！」

「天の怒りの雷（いかずち）よ！罪深き者に神の裁きを！！」

はい、えーっとただ今自分、お城の裏側まで来ております。
そして周りではみなさん揃って魔法や矢やら……あ、剣ってそんな投げる物なの？
まぁそこらへんが雨霰、せわしなくそこら中から降り注いでおります。

しかも魔法が使えない方は武器をダイレクトに投げたり、魔力が無くなって力尽きた人がそこら中に倒れているくらいにカオスな状態になっております。

……いや、皆自分に向かってやってる訳と違うよ？

ただ、彼らが立ち向かっている強大な敵には攻撃が通らないのだ。
ぶっちゃけ、不自然にみんな逸れていく。

さてさて、その敵とは何かと言うとだ。

黒く雷を纏いながら渦巻く巨大で不気味な雲の下、巨大な翼を広げ

ながら空中に浮いてる2次元と3次元の中間みたいなでっかいコマドリ……

まぁ、《地縛神　ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ》です、はい。

実はさっき起きた後、食堂へ向かう途中で血相を変えたゼノアに出会い、何とかしてくれと頼まれたのだ。

なんでも、前回自分が出したまま放置していたところ、馬鹿（バリス）が挑もうとしたが全くもって攻撃が当たらず、それを見た周りの方々は『自分もちょっと…』とか思って攻撃を仕掛けたところ、まぁ当たらない訳よ。

そしたらみんな意地になって、この数日ここに我こそはって方々が集まり、何とか倒そうとしていた訳であります。

攻撃対象に出来ないのに、ご苦労様ですね。

だが、それだけならまだいい。

ぶっちゃけ、何とか倒せないかと画策した結果、やたらチームワークがととのって強くなった部隊もあるからむしろいい傾向なのだ。

だが、唯一にして最大の問題がある。

……逸れた攻撃が容赦なくお城を破壊してるのよね。

もう壁なんかないし、廊下まる見えだしの散々な状態である。

というかこれの壁は今日阿保（イノムさん）が放った一撃で一気に瓦解したとか。

……少しは考えろや。

まぁ、ようするにこれ以上の被害が出ないように地縛神を回収して

欲しいという訳なのだが……

「ま、待って下さい！もう少し！せめて攻撃を当てるだけでも！」

「あと一日！お願いします！あと一日だけ待ってもらえませんか！！」

みなさんどうしてもコマドリ様を倒したいようで、二人の男女が自分を必死に止めているのだ。

……いや倒すとか、無理やろ。

「無理でしょう、攻撃当たらないし、何かまがり間違って当たったとしても攻撃力高いから返り討ちよ？」

自分は優しくこう諭すと、みなさんは納得せずにちょっとムッとしながら……あれ？

「……それは、私達がその程度だと言いたいのですか？」

は？

「いいでしょう、わかりました。なら今日一日であの怪鳥を確実に仕留めて見せましょう」

おーい。

「「その挑戦、受けて立ちます！！」」

「ちょっとまてぇい！！」

自分の心の叫びも虚しく、彼らは仲間のもとへと駆け出して自分からの挑戦を伝えはじめた。

「……ナルミ、まぁ……頑張れ」

「君はいったいどこに消えていたんだい？少しは助けろ」

目の前で雄叫んでいる兵士さん達を眺めながらいつのまにか現れた間抜け(ゼノア)に文句をいいつつ、頬をおもいっきり抓る事にする。

「いひゃいひはひ！はべべふへ！」

「なんつってんのかワカンネ」

そういって自分は手を離し、踵を反して城へと戻ろうとする。

そして途中である事を思い出す。

「あ、ゼノア、忘れてた」

「いつつ……な、なんだ？」

「いや、あいつ、死ぬ時多分周りのやつら道連れにしていくからなぁーって。大丈夫、あの雲を破壊すれば被害なく倒せるから」

そう言うとゼノアは顔を青くして、固まってしまった。

あ、なんか楽しい。

「つー訳で、見張りよろしく。自分はエリザの授業があるので」

「あ、ああ、わかった。雲だな、雲を……どうやって？」

ぶつぶつ言いながら数人を集めて作戦会議をするゼノアを残し、自分はエリザの部屋へと向かう。

まぁ、道連れってもただ気絶するように設定してたから問題はないだろう。

さぁ、この訳わかんね事になった原因にどんな嫌がらせをしてやろうか。

とりあえず、宿題は大量にだしてやろう。

後ろから聞こえる轟音をＢＧＭに、心の狭い自分はなんともくだらない復讐を心に誓いながらエリザの部屋へと向かうのだった。

「あー！また壁が！！」

……やめときゃよかった、かな？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊※☆

「う～む……やり過ぎたか？」

「そう言えばリムの種族って体温調整が苦手だったよーな気が……まぁ、生きてますし問題ないでしょう」

「そうだな、焦げてるだけだしな。という訳で、治癒室なら勝手に行ってもいいぞ。てゆーか行け、コゲ臭い」

「ひ、酷い……なんでこんな事に……」

あれ？
なんだこれ、眼が疲れてるのかな？

リム副隊長がエリザとミミリィ隊長に虐げられてボロ雑巾のように打ち捨てられてるように見えるのは気のせいか？

「お、ナルミ。そうか、今日は初授業だったな。ミミリィ、そこの塊を治癒室まで運んで行ってくれ。ナルミがいるから今なら何も問題ない」

「塊て、おい」

つい出てしまったそんな自分のツッコミも無視してミミリィ隊長はリム副隊長の襟を掴み、引きずりながら部屋を出ようとする。

「ちゃんと歩きなさい。ほら、全く……軽はずみな行動をするからこんな事になるんだから」

「うぅ……でもそう言いながらもミミリィは僕を見捨てないよね……やっぱり、なんだかんだ言ってもミミリィは優しいんだね」

「……バカ、リムが変な事すると私が恥ずかしいんだからしっかりしてよね」

そんな会話をしながらズルズルと廊下へ消える二人。

……うん、会話だけを聞けばほほえましいバカップル。

だが、実際は赤くなって照れるミミリィ隊長と、引きずられながらもしてやったりな顔をするリム副隊長という構図。

これは、主導権がまたリム副隊長に戻ったな。

しばらく呆然と扉を見つめていたところ、エリザがわかりやすく咳ばらいをしたので意識を現実に戻し、彼女に向き直る。

途端、エリザは物々しい雰囲気を醸しだして口を開いた。

「なぁ、ナルミ。授業の前に、少しいいか？」

「なんね？」

自分はこいつの意見・発言にロクな事があったためしがないので、ものっそい警戒しながら聞き返した。

すると、奴は一回大きく息を吐き

「ナルミはシルバとこれからどう付き合うつもりなのだ？」

こいつはろくでもない気配がムンムンしますぜ、旦那。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊？☆

シルバちゃんとの付き合い方についてと切り出したエリザだったが、話しの内容は昨日ガルクさんが語ったエピソードと同じ内容だった。

まぁ、内容の解釈の違いは多大にあるが。

そして彼女は、とんでもなく素晴らしい提案をして下さりやがった。

「……と、言う訳なのだがどうだろう。私達も協力するから、ここはナルミも同じようにシルバを弱らせて瀕死の所をこう、サクッと」

「貴様は自分を人の道から外させたいのか？」

やる訳ないだろバカヤロー。

てゆーかそれをやった後の末路を自分は知っている。

何があってもあんな目にはあいたくない。

自分がエリザの意見を却下すると、彼女は困ったような顔をしながら

「む……ならどうする？このままでいいなら止めないが、さすがにいろいろと限界じゃないのか？……あー…その、今まで助長していた私が言うのもあれかもしれんが…その」

と、最後は段々と音量を小さくしながらぼそぼそ言っている。

なんかかわいそうになりながら、自分は彼女に

「ホントにね」

歯に衣着せぬトドメの一言。

クリティカルヒットしたらしく、激しくうなだれはじめたエリザ。

まぁこれくらい、おまえの今までにくらべりゃ訳ないべ。

とまぁそんな事は置いといて、シルバちゃんの今後である。

これはこの際だから話し合っとくべきだろう。

「で、シルバちゃんについてだけど……どうしよう？」

「どうしようって……さっきのがダメなら他のを考えるしかなかろう」

ごもっとも。

でも考えが思い付かない。

「つってもねぇ……」

なんかないかねぇ……あ！

「記憶を消すとか！」

「消してどうする。そしてどうやって消す……いや、ナルミならやりかねん」

ん？

「あり？魔法で記憶は消せないん？」

「特殊な道具があれば出来るらしいが、生憎私は持っていない」

「でもリリスさんは片手間しただけで記憶消してたよ？この眼で見

た」

自分がそう言うと、エリザは目を丸く見開いて

「ちょ！それは本当か！？そんな魔法があれば間違いなく国家機密の仲間入りだぞ！！」

……え～。

「まじで？」

「まじだ！さっそくリリスさんに確認をしなければ……装飾品型の魔法具だとしても、忘却の魔法が使えてしかも身につけられる程小さなモノなど、聞いた事がない」

「普通はどれくらいの大きさ？」

「私が知ってる最小のモノで、ナルミを縦に二つ繋げた位の長さを持つ杖だな。ちなみに最大でこの部屋三つ分の巨大な石版だ」

わぁお、デカすぎ。

「……なんか、いろいろと規格外だな」

「ああ……まぁこれは後でいい。なにせリリスさんだ。ガルクさんが城にいる限り逃げる事はないだろう。それより今はシルバについてだ」

「だね……じゃあ…どうしよう」

「それを今話し合うために私がここにいるんだろう」

あれ、ちょっとまて。

いつものこいつの性格からしたら、今のこいつは明らかに異常だ。

まさか……

「なぁ、おまえさ」

「ん？なんだ？」

「……授業サボりたいだけじゃないのか？」

自分がこう疑ってしまった事を誰が責めれようか、いや責めれない。

ただエリザにとっては『サボる』という言葉の意味がわからなかったようで、キョトンとしている。

小首を傾げる姿に少し萌えつつも、サボるの意味と今のエリザの明らかな異常性というか、今までの自分のエリザに対する評価の低さと今のまとも過ぎるエリザの違いをきっちりと教えてあげた。

いろいろと変な百面相をしながらも真面目に聞いてるエリザに対し、親切丁寧に教えてあげてる自分はきっと先生としては正しい姿なのだろう。

自分なら絶対こんな先生に教わりたくないけど。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊・☆

その後しばらくエリザと話し合った結果、以下の事が決まるまでに至った。

一つ、極力甘やかさずに今までより厳しくする。
一つ、仕事の時等は何が何でもおとなしくさせる。
一つ、とりあえずおとなしくなってくれるよう頼んでみる。
一つ、ぶっちゃけ頼んでダメなら究極は外道案（最初のエリザ案）を採用する。

……うん、いろいろとダメなのはわかっている。
だけどね、自分達の脆弱な頭ではこれ以外のいい案が見つからなかったんだ。

とまぁ、そんな感じに方針も決まった所で、やっとこさ今日の授業へと入る事が出来た訳ですよ。
んで、ただ今エリザさんは自分による基礎の基礎、単位やら有効数字やらの説明をめっさ真面目に聞いております。

何でも、あまりに自分の中でエリザの評価が低過ぎたから見返してやるんだと。

うん、頑張って。
あんまり興味ないけど。

でもまぁ理由がなんにせよ、生徒が真面目に授業を受けてくれるって事は先生にとっちゃ大変楽な事なのですよ。
もとの世界ではもうちょっと真面目に寝ないで授業を受けてた方がよかったかな、なんてちょっぴり後悔もしつつ、何事もなくこのまま授業が終わる……

なーんて、そうは問屋がおろす訳ないですよね。

「んじゃあ７５５０００を有効数字２桁でやってみて」

「んーと、７．５だから……７．５と１０の５乗だ」

「あー惜しい。５の前にもいっこ５があるべ、だからくりあが「せーんせ！えいっ！」ふべらっ！！」

簡潔に言おう。

シルバちゃんの抱き着きタックルによる奇襲を受けた自分は机の角に腹を強打して奇声を発するはめになったのだ。

いかに体が丈夫になろうと、人が二人分の体重をただの一点で受けたなら、それはかなりなダメージになるのである。

まぁ何が言いたいかってーとだ。

「……ナルミ、生きてるか？」

「……か、かろうじて……」

腹を抱えて悶絶する事になったのである。

そしてうずくまっている自分の背中では、シルバちゃんがスリスリしながら

「うりゅ～、せんせー。昨日は寂しかったんですよ～。いくら待っても帰ってこなくて心配だったんですからね」

そう言ってウリウリと自分の背中にのの字を書くように指をクリクリ動かしている。

なんかこそばゆい。

「でもでも！セブルが言うには先生はお父様に私との関係を認めてもらって！これからの結婚生活をどう過ごしたらいいかという助言をしてもらうために私の家に行ってたから帰ってこなかったんですよね！！私もうそれを聞いた時は嬉しくて……もぅ、優しい旦那様。私はあなたに一生を捧げますわ」

……セブルさんよ、何故にそんなウソをつく？

シルバちゃんを自分（馬の骨）なんかに渡さないんじゃなかったのかい？

そして最後のフレーズ、つい最近聞いた事あんぞ。

さすが母娘だ。

頭の片隅でそんな事を考えながらうずくまっていると、段々と痛みも引いてきたので何とか張り付くシルバちゃんをよけて立ち上がる。

そして、意を決してさっき決めた事を実行……

「シルバちゃん、自分は今仕事中なんだ。だからそう言うのはやめてくれないかな？」

……できんかった。

いや、半分くらいなら出来た気もするが、後ろからエリザの声で聞

こえた『意気地無し』という言葉は空耳ではないだろう。

えーえーそうですよ。

よけた時点でもはやウルウルし始める彼女に『ヤンデレ自重しなさい』なんて言う根性自分にはないですよ。

いくらでも罵るがいいわ。

とか考えながらもしっかりいつでも身を護れるようにしておくのは忘れない。

なにせ相手はヤンデレだ、いつこの前みたくなるかわかったもんじゃない。

エリザに至ってはもはや自分から一番離れた所まで逃避している始末だ。

と、ここでシルバちゃんが右足から一歩近付いてきて、それを見た自分は少しビビりながらもそこを動かず彼女の動向を伺うように彼女を見る。

だが、攻撃がくるかと思っていた自分の予想は、次の彼女の発言で間違いだという事に気付かされた。

「……やだ…」

ん？

「いやだいやだいやだいやだ！離れたくないよ！何でもしますから！お願いですから捨てないで！そんな眼で見ないで！悪い事したなら謝るから！どんな罰でも受けますから！だから私を捨てないで！あなたがいなくちゃ私…わたし……やだ……いやだあぁぁぁぁ！！」

そう一気に叫びながら彼女は自分の足にしがみつき、号泣しながら縋り付いてきた。
おもいっきり引っ張ったりしてるので、ガックンガックンと視界が揺れる。

……何があった。
いや、いつかはこんな感じになるのは覚悟していたが、いくらなんでも早過ぎる。

一体なぜ……。

「し、シルバちゃん落ち着いて！何でそんないきなり……」

「ふぇっ……えぐっ……ぜ、ぜんぜいがづめたぐで……おがあざまだぢのおはなじで……ぎらわれで……ぐずっ…やだ…なんで…もじまずがら……いっじょに、いざぜでくだざい……おねがいでずがら……」

つまり昨日の話で聞いた王妃様達の状況と今のシルバちゃんの状況を重ねてしまった訳ね。

なんとまぁ……どうやって？

でもこれはある意味チャンスじゃないか？

自分は彼女の手をとり、膝をついてしゃがみシルバちゃんと目線の高さを同じにする。
そして涙でくしゃくしゃになった彼女の頬へと右手をあて、なるべく優しい口調でこうのべた。

「わかった、大丈夫だよ。君を捨てるなんて事自分はしない。ただもうちょっと甘えるにしても周りを見て、状況を考えてやってくれると嬉しいな。今みたいに仕事をしている時とかね。出来るかい？」

顔から火が出るくらい……てか核爆発が起きるくらい恥ずかしかった。

もう絶対顔真っ赤だよ。

そしてエリザ、なんだその口笛は。

あとで覚えてろよ。

自分が言い終わると、シルバちゃんはなにか光を見つけたような眼で自分を見据え、まだ嗚咽のおさまらない口調で静かに口を開いた。

「ひく…ぞれで……許してぐれまずが？」

「ああ、保証する」

「ぐずっ……あぁぁぁん！！」

自分の言葉を聞いた彼女は、今度は自分の胸に泣きながら飛び込んできた。

自分はせんせーせんせー言いながら自分の胸に顔をあて、服を嬉し涙で濡らしてくれる彼女に少し困りながらもそっと頭を撫でながら、優しく背中を叩いてやる。

まぁ、今の状況ならこれくらいしかたないかな……

そう思いながらシルバちゃんを宥めてると、段々と泣き声も小さく

なり、落ち着いてきたようなので安心している時、いきなり視界が激しく動いた。

「ちょっ!?なにんんっ!?んぬ!?」

「はぁ……んっ…せん、せぇ……はむっ……んん……」

「やった……ついに……」

……なにがおこったかと言うと、シルバちゃんに押し倒されて彼女の舌が自分の咥内へと侵攻してきたのである。

ちなみに押し倒される途中、自分は屋根裏からのぞき見をしている数人の影を確認した。

なんか自分の使用人とかになってる彼らである。

あいつら、気配もクソもかなぐり捨てて全力で喜んでやがる。

てか声まで出して、正直イラッときた。

もちろん自分も無抵抗でいるはずもなく、全力で引きはがそうとするが、なかなかどうして動かない。

むしろ一層きつく吸着してくる次第である。

自分がしばらくジタバタしていると、彼女は気がすんだようでやっと口を離してくれた。

まぁ馬乗りに乗られているのには変わりないが……そんな事より

「……シルバちゃん、早速約束を破るのはどういった了見かな?」

しょーじきこれは予想外。

まさかいきなし約束破られるとは、ぶっちゃけ裏切られた感がかなりある。

「今は自分は仕事中だし、何よりエリザの、姫様の部屋だ。こーゆー事をする時でも場所でもない」

イライラを隠さない口調で自分が言うと、彼女はもじもじしながら

「だって……先生が抱きしめてくれましたし……私といつまでも一緒にいてくれると言ってくれましたし……それに……」

シルバちゃんは再び自分に抱き着いてきて、うっとりするように、こう言った。

「皆が、こうやったら先生は喜ぶから、なにかあったら遠慮なくやったらいいって前に教えてくれて……誰かがいる時に見せ付けるようにやると先生が他人に取られないようになるし、その方が先生もより喜ぶって……」

そう言ってシルバちゃんは部屋の隅にいるエリザをいたずらっぽくちらりと見た。

そして再び自分に向き直り、満面の笑みで

「それに私、約束より許してもらったのが嬉しくて！ごめんなさい先生」

もうやられたよ、この笑顔に。

背景にお花が舞う勢いで全身から喜びを放出させてるその姿は、まさに満開の桜のような華やかさをかもしだしている。

その輝く笑顔に、自分の心はもう見事なまでにテクニカルノックアウトされてしまった。

だからつい叫んじゃったのよね。

「正座ぁ！！」

もうこれ以上は堪忍ならん。
嬉しくてやったから許されるとでも思っとんのか？
しかも悪びれる様子もなく笑顔全開とか、なめんなや。

「天井裏とか、隠れてる奴らも！５秒以内に全員出てこい！！さもなくば……わかってるよなぁ」

びっくりしているシルバちゃんを押しのけ、立ち上がりながら自分は声を張り上げながら屋根裏の住人に声をかける。
すると奴らは天井やら壁やらからいそいそと、血相変えて現れてきた。

その数１４人。
なんともまぁ多い事で。

だからって許す訳じゃあないけどねぇ。

「とりあえず君達全員、正座ね」

「あ、あのせんせ「座れつってんだよ！」ひうっ！！」

シルバちゃんがなんか言おうとするのを怒声で遮り、今にも泣きそ

うな彼女を無理矢理座らせた。
それに伴い、他の奴らもみんな同じように座ったので、あらためてお話しを開始する。

「さぁ君達、何か言たい事はあるかい？」

自分は朗らかに笑いながら、目の前に座る１５人に優しく語りかける。
すると、今にも泣きそうな顔をしながらシルバちゃんがプルプルふるえる手をゆっくりとあげて、質問してきた。

「あ、あの…先生はなんでそんなに怒っているんですか？」

目に涙をためながらの発言は、いろいろとクルものがあるのだが、今の自分にそんな事を構ってなどいられない。

「わからないのかい？君が自分の約束を守らない最低な生き物だからだよ」

自分が親切丁寧に教えてあげると、彼女はとうとう溜めてた涙を一気に放出して泣いてしまった。
すると、後ろにいた人達の中の一人、リーダー的な存在である子供が

「ちょっ！ご主人様それは言い過ぎです！」

とか叫びはじめた。
これにはさすがにカチンときた。
そして奴が次に放った言葉が

「これでは奥様がかわいそうです！奥様の気持ちも考えてください！！」

もうこれで自分がいままで溜めに溜めてた鬱憤が、カルデラ湖を造る勢いで一気に爆発した。

「ふざけたこといってんじゃねぇよクソガキが！奥様の気持ちも考えて下さいだぁ！？じゃあ聞くがお前らはどうなんだよ！彼女にいろいろ吹き込んで！自分の迷惑考えてんのか！？考えてねぇだろ！自分がどんだけ恥ずかしかったかとか！考えた事あんのか！？えぇ！？よくそんな事言えるよな！今のこの状況も！半分お前らが蒔いた種なんだよ！こいつがかわいそうだからなんだ！こーいうのには躾が大事なんだよ！！」

一気にまくし立てた結果、数名が泣き出す事になったがそれでも構わず今度は泣いているシルバちゃんを見下し

「君も君で、迷惑なんだよ！確かに好意を向けてくれる事は嬉しいが、それを押し付けないでくれ！毎日毎日毎日毎日！人目も憚らず！自分の意見も聞かずに話を進めて！自分勝手にも程がある！君も自分の気持ちを考えろ！家畜じゃないんだからそんくらいの頭はあんだろ！？」

肩で息をしながらも、言いたい事は言い切った。

大分短くしたが、これは自分の魂の叫びとして受け取ってもらってかまわない。

とりあえず言い終わって疲れてれ自分に、シルバちゃんは本格的に声をあげて泣きながら、さっきと同じように再び自分の足を掴んできた。

そして

「ご、ごめっ…ごめんな……ざ…ごめんなざい……」

必死に頭を下げて謝ってきた。

だが自分はその手を払い、部屋を出るため扉へ向かう。

ここまでいったなら、今日一日はきっちり反省してもらいましょう。

そして最後に、見捨てられたかのような絶望の表情を浮かべる彼女に向かい、自分は一言、トドメを刺す。

「とりあえず、今の君とは結婚なんてしたくはないから」

そう吐き捨て、扉を閉める。

すると中から

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

シルバちゃんのとてつもない叫びが聞こえてきた。

まるで目の前で家族が全員惨殺されたかのような、悲痛な叫びだ。

「……あいつ……と、ナルミ。あれはちょっとどうかと思うんだが……」

エリザ先に部屋から出ていたようで、自分が出てきた途端に話しかけてきた。

何か思う所があるらしく、複雑な顔をしている。

「大丈夫。手を払う時に、自殺防止のため全能の真球をセロテープで腕にはっつけた。素材はＢＢ弾だが、まぁ大丈夫だろ。万能属性以外無効だし」

「いやそうでなくて……全能の真球がなにかは気になるがそうではなくてだな……シルバ達を追い詰めすぎではないか？」

……

「しょーじきやり過ぎたかなって後悔がひしひしと……」

「だろうな……生き物とか躾とか、半分家畜扱いだしな」

「……でも、これで変わってくれるハズ。……うん、多分。そうじゃなけりゃあ自分、もう何すんのかわからないよ」

実際これはやった後に後悔と罪悪感が津波になって押し寄せてきた。だが、自分の気持ち的にはだからといって怒りが収まる訳でもなく、怒りながら後悔するというなをとも器用な感情である。

そんな自分に追い撃ちをかけるように、エリザが言いにくそうに

「あ～、それとナルミ。非常にまずい事がある」

「……なんね」

「……使用人の少女がな…一部始終を聞いていた」

「……は？」

＊＊＊

ら少しづつ離れていった。

「……なぜに離れる？」

「いや……まだやっぱり危険かなぁ～なんて……」

……

しばしの沈黙。

そして

「邪ぁぁぁぁ！」

「ひぃぃぃぃ！」

あ、たのしい。

エリザがアクセル全開で逃げてったけど、その姿がなんかたのし。

とまぁ、いつの間にやら怒りも収まっていた時、自分は後ろから声をかけられた。

「ずいぶんとエリザ姫様と仲が良いようですね、ナルミ様」

その声は、液体窒素よりも冷たく、殺気なんて生温いものではない、もっと禍々しい感情が込められた恐ろしいものだった。

油の切れたブリキ人形の如く首を後ろに回すと、そこにいたのは明らかな怒気と侮蔑を孕んだ目をしたダンディー執事、セブルさんが背筋を伸ばしてこちらを見据えていた。

「お嬢様を泣かせ、そのくせ自分は次の女に手を出すとは……まさに男の風上にも置けませんね」

「……べ、別に手を出した訳じゃないですよ」

やばい、変な汗が出てきた。

「お嬢様を泣かせた、については弁明しないのですね」

言い訳したい、めっちゃしたいけど……したら絶対殺される。

「それは事実ですが「なら、私も約束を守らねばなりませんな」……約束？」

やばいやばい。
汗がとまんねぇ。

「はい、約束でございます。はじめ、私は言ったハズです」

やばいやばいやばい。
このままでは脱水症状で死ぬのが先か殺されるのが先か。

「お嬢様が不幸になるなら、私があなたを消しに掛かると」

彼はそう言うと両手を広げ、宙に浮きはじめた。
すると彼の全身は強烈な光で包まれたが、しばらくしたら光は消えた。

そしてそこにいたのは

「我が名はセブル。セブルーデル・レーゼン・ブルム・ウェングル。
夢と記憶、そして心を司る種族、心王種（ハーツ）の末裔なり」

四枚の虹色に輝く翼を持った、風になびく銀髪の長髪の隙間から悪魔っぽい角を覗かせる、やたらと凛々しいキレ眼の２０歳くらいの美青年が降臨ていた。

「なぁぁぁぁぁぁ！！」

自分が茫然と彼の姿を見ていると、後ろから聞き慣れたエリザの叫び声が聞こえたので、ついそちらを振り向いてしまった。

「は、ははは、心王種（ハーツ）だと！？お、お伽話のなかの種族じゃないのか！？

「……そんなにすごいん？」

「すごいも何も！人間や混沌種（カオス）に並ぶ伝説の３種族の一つだぞ！？」

……え～

伝説の３種族て……ポケモン？

きっと彼はサンダーで、もいっこはファイアーだな。

そして自分はフリーター、なんちゃって。

……現実逃避はやめよう。

「さぁ人間種のハセガワ・ナルミよ。我が力の全てを尽くしてその存在、塵にしてくれるわ！！」

そう言いながら彼はいつの間にやら取り出した、これまた虹色の両刃の剣の先から、無数の炎の矢を……矢を……

なにこれミサイル？

「されてたまるか！その幻想をぶち壊す！！」

もう全力で受け止めたよ。

あれが一個でも何かにぶつかったら、大惨事だ。

イマジンブレイカー様々だよ。

「やはり噂は伊達ではなかったようだな。しかし、夢を司る心王種（ハーツ）に対して『幻想をぶち壊す』とは……おもしろい！なら我が幻想を打ち砕いてみよ！！」

「ちょっ！誤解！そんな挑戦した覚えないから！！」

こうして、自分とセブルさんによる伝説のポケ……違った、伝説の種族対決が自分の抗議も虚しく開始されてしてしまったのである。

ちなみに後から聞いたらエリザはこの時、めっちゃワクワクして心が躍ったらしい。

なんかとっても恨めしい。

……しかし。
このイマジンブレイカー、まさか忠実に幸運まで破壊とかしてないよね？
いくらヘッポコ神様でも、さすがにそこは……

あれ、なんだろう。
神様からの幸運がイマジンブレイカーに負けてると断言できる自分がいるぞ。

……今度から、イマジンブレイカー封印して支配者の右手だけにしとこ。

３０回目＊彼女の恋と彼の愛（後書き）

このシリーズ（？）は多分あと二回続きます。

忘却魔法とか、シルバちゃんとか突っ込み所満載ですがそれまで突っ込まんで下さい。

そしていろいろレベルが低いのは、テストが悪いんです。
テストが私の頭をめちゃくちゃにするから悪いんです

そうです責任転嫁です。

……ごめんなさい。

そして次回は二月六日以降の可能性が高いです。
いつまでもたんすの裏に手を突っ込んでケータイ盗むのは、疲れるのです。

３１回目＊暴走親父と現代の若者（前書き）

つかれた……

そしてどうしてこうなった！？

31回目＊暴走親父と現代の若者

さぁ、始まるざます。
行くでがんす。
ふんがぁー。

「真面目に戦いやがれ！！」

「ムリでがんす！！」

人間とは頭、つまり脳が発達した生き物である。
そしてその代償に、猿の頃は持っていた……なんかこう、しなやかさとか力強さ的な？
まぁそんな運動能力みたいなのを犠牲にしてきたのである。

つまり何がいいたいかって言うとだ

「だったらおとなしく死にやがれ！！」

「むり！！」

どこぞの魔王様もびっくりなこの弾幕を防ぎまくるのもそろそろ限界なんですよ。
主に体力的に。

ではなぜ、攻撃せずに護りに徹しているのかと疑問に思うであろう。
答えは簡単、単純明解。

「うおぉぉぉぉぉ……こんな戦い、見た事も聞いた事もないぞ……」

「な、何がおこってるんですか！？」

「ひぇぇぇぇぇ」

何を隠そう、自分の後ろにうきうきしてるエリザとか、音を聞き付け部屋から出てきた（自称）自分の使用人とかがいるからです。

断言する。

自分が避けたら彼女達が死ぬ。

そしてエリザの反応が異常。

「ちょっ！君達！早く！逃げて！！」

そしてもうね、そろそろ全ての魔法を一護君でたたき落とすのは限界です。

うん、正直マックスピードなかったら死んでるよ。

いやね、自分も本当はなんか盾的なのを使いたいけど、ラシルドレベルなら弱すぎて破壊されたし、それ以上のやつは出す暇が与えられない。

従って、彼女達が逃げるまで根性で全部たたき落とすしか思い付かず、それを実行している次第なのですが……

「何を言う！こんな戦いを目の前にして逃げる事などできるか！それにナルミが護ってくれてるから安全だろ！」

「てめぇ！やっぱり！改心！のわっ！してねー！！」

これである。

ちなみに二人は

「む、無理です！こここ腰が！ぬけっ！」

「ひぁぁぁぁぁぁん！！」

マジ泣きしてたりする。

うん、これを続に八方塞がりといふ。

てゆーかセブルさん、マックスピードについてくる程の魔法って、どんだけっすか。

「お嬢様を弄んでおいて！所詮貴様はその程度か！！」

しかもセブルさんはなんか性格変わってるし。

だれか助けてください！

と、願いが通じたのかセブルさんの魔法弾幕が止み、かわりに彼は

「こんな男にお嬢様が……！お嬢様の純潔が！カケラも残さず消えさらせぇ！！」

もっそい速さで空(くう)を駆け、手にした剣で切り掛かってきた。

まさかいきなし物理攻撃がくるとは思っていなかったので、慌ててそれを受け止める、が

ゴォウ！！

「のわわわわわ！！」

「ひ！？はひゃぁぁ！！」

「ぴぇぇぇぇぇ！！」

風速１００メートルはある（気がする）程の爆風が廊下の空気を一気に押し流した。
それに伴い、後ろの三人が吹き飛ぶのがなんとなくわかる。

とりあえず、邪魔はなくなったが……

「貴様さえいなければ！お嬢様は！お嬢様は！よくもお嬢様を汚したなぁぁ！！」

「違うっての！話をきけぇい！！」

トランスしているセブルさんが目の前にいるのは心臓に悪い。
てゆーか怖い。

「貴様と話す事などない！我が聖剣（エクゼカリバー）の錆にしてくれるわ！！」

「エクスカリバーじゃないの！？」

「黙れぇぇぇ！！」

怒声と共に彼は腕に力をこめ、それに伴いエクゼカリバーも一層光をましていく。
自分はそんな彼と鍔ぜり合いをして、全くと言っていい程動けずにいる。

多分動いたら死ぬ。

そんな確信にも似た予想が頭をよぎり、自分は全力でセブルさんを押し返す。

するとなぜか鍔ぜり合ってる所から『ギュギュギュ！』って変な音がして火花を散らしはじめ、それに伴い周りの壁がピシピシいいながらひび割れていった。

だがそんな事を気にする程の余裕なぞあるハズもなく、自分は生きるために必死で押し返した。

すると

ガキョン！！

「おあっ！？」

「くっはぁ！！ちぃぃぃ！！」

まさか押し切れるとは思っていなかった。

だがこの隙を逃す程自分も阿保ではない。

「切り捨て御免！！」

ガシュ！！

「ぐっがぁぁぁ！！」

即座に彼を袈裟斬った。

峰打ちだが。

いや、さすがに殺す程の度胸は、ねぇ。

だが相当力を入れたので、廊下の端まで彼は二回バウンドしながら吹っ飛び、顔から壁に激突した。

……二回バウンドって……しかも顔。

死んどらんよね？

てゆーか自分、ノリであんなセリフ言うだけの余裕がまだあったんだな。

自分で自分にびっくりだよ。

だがまぁ、ここまでやった後の自分の行動はただ一つ。

「……逃げよ」

この現場から、少しでも遠くへと逃げる事である。

ほら、だって廊下の奥から兵士さんたちが鎧をガッキンゴッキン鳴らしながら臨戦体制で駆けてくるんだもん。

自分、捕まりたくないからね。

え？

セブルさん？

……自分が逃げるまでの生贄になってもらいますがなにか？

はい最低、その通り。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。☆

自分は逃走後、いろいろな所を歩き回って今現在は中庭近くの二階の廊下にいる。

そして逃げる道中でも聞いた噂話しをここでまた聞かされる事になる。

「あのハセガワ候爵様が奥様を……」

「ええ、奥様を怒鳴り付けて離婚を宣言したらしいわ」

「まさか……あの愛妻家で有名なハセガワ候爵様がそんな……」

「……あ！！ハセガワ候爵が来たわ！聞こえるから話しやめ……あははは、ど、どうも候爵様。ご機嫌麗しゅう」

おせーよ。

聞こえてるよ。

そして君達白々しいよ

「……ごきげんよう娘さんがた。時に自分の国にはこんな諺がある」

さっきから行く先々で兵士やらメイドやらがそんな噂をするのを聞いて疲れとストレスを溜め込んだ自分は、彼女達を使って少しそれらを解消する事にした。

「壁に耳あり障子に目あり。どこでどんなふうに話を聞かれるかわ

かったもんじゃないって感じな意味なんだけど……あんまり陰口叩くのは賢明じゃあないと思うけどなぁ……特にそーゆーお話しは、ねぇ」

自分がそう言ってニンマリ笑うと、彼女達は顔を一気に青くしてガタガタ振るえはじめた。

四人いっぺんに歯を鳴らすという奇想天外なオーケストラが４メートルは離れてる自分の所まで聞こえるくらいにガクガクブルブル振るえている。

多分自分の笑顔が怖いとかじゃなくて、お偉いさんの陰口を本人に聞かれた事で首と胴体がお別れを告げる事になる可能性を危惧してのふるえだろうけど。

とりあえずこれ以上はかわいそうなので、自分は彼女達をゆるす事にした。

「……もうやめてよね」

「は、はい！」
「了解です！」
「わかりました！」
「ひいっ！な、なんですかあれ！？」

うん、四人とも別々の発言をありがとう。
でもふつーは四人でハモって返事するのがセオリーじゃ……

ん？

最後の娘は一体何を見た？

……

「盾（シールド）！！」

「全てを灰に！煉獄の剣よ！！」」

バキッ！！

なんとか凌いだ。

けど……いくら本のオマケのクロウカードでつくった物とは言え、クロウカードの盾にひびって入るんだぁー。

セブルさん、こえー。

もうもうと煙や湯気があがり、視界が遮断されているなかそんな暢気な事を考えていると、向こう側から声がしてきた。

「こんな状況でも女と戯れてるとは……ナルミ、おまえは一体どんな神経をしているんだ？正直俺は裏切られた気持ちだよ」

……あれ？

セブルさん……だよね？

喋り方ちがくない？

自分が半分混乱しながらそんな事考えていると、だんだんと煙がはれて相手の顔を見る事が出来た。

そこにいたのは

「そしてなぁナルミ……妹を家畜のように扱われて！揚句棄てられ

るのに対して黙っていられる程俺は穏和じゃないんだよ！！」

背景が歪む程の熱を持った巨大な剣を片手に持ちながら、般若と憑衣合体しているゼノアおにぃさんがそこにいた。

うわぁ、初対面の時より般若だわ。

てゆーか阿修羅だね、これは。

うん、人間恐怖が行き過ぎると逆に冷静になれるっぽいね。

て、んなこと考えてる場合じゃない。

「落ち着け！話せばわかる！」

「落ち着いてられるかぁぁぁぁ！！」

まさに猪突猛進。

一気に間合いを詰めてきたゼノアの一撃を、またもや一護君で受け止める。

……あれこれなんてデジャヴ？

「お前は！あいつの姿を見たのか！？全てに絶望したようなあいつの眼を！悲しみでおおわれたあいつの表情を！！いくらお前でも許す訳にはいかないんだよ！！」

「あちゃちゃ！だぁぁぁぁもう！！人の話をききんしゃい！そぉい！！」

もう自分はさっきのセブル戦で鍔ぜり合いの要領を何となく得た上、

ゼノアはセブルさんよりか力は弱かったのでさっきよか危なげなくゼノアの剣を弾き返した。

まぁ、至近距離に陽炎が出来る程熱い剣を突き出されたから手に当たらないよう加減はしたけど。

そして、その加減が自分の運命を左右する事になる。

自分の手が焼肉にならないよう、中途半端に力を加えて弾き返した所、これまた中途半端な体制で一瞬固まってしまったのだ。

そして自分は、弾かれて体制を崩したゼノアを見ながら

ドスッ！！

「グフッ！！」

変な音と自分の奇声を聞いた。

あれ？

なんか脇腹が異常に熱いぞ？

あれ？

なんで視界が残像残しながら右に動いて……

ドガッシャァァ！！

「ぐばっはぁぁ！？」

瞬間、自分は中庭まで壁を突き抜け吹き飛ばされた。

脇腹から盛大な紅い華を撒き散らしながら。

「つっ～！！ガハッ！！」

３０メートルは飛ばされた所で、やっと自分は止まる事が出来たが、その場に倒れたまま地面に赤血球で彩られた体液を吐き出す事になった。

訓練していた周りの兵士達の視線が痛いが、それよりバックリいった脇腹が限りなく痛い。
視線など、構ってられるか。

「はー、はー……いいザマだな、ハセガワ候爵殿。だがお嬢様を泣かせた償いは、これだけでは終わらんぞ」

そう言うのは、肩で息をしながらも、自分の血を多量にこびりつかせた剣を携えている真正セブルさんであります。
その遥か後ろには、これまた怖い第二形態ゼノアさん。

セブルさんの剣に付いた血の跡から察するに、少なくとも１０センチくらいは切られているようだ。

もうこれ死ぬって。
しかもなにこれ死刑執行？
ジョーダンじゃない、まだ自分は人生に未練タラタラだ。

「……ヒューヒュー…ケ、ケアルガ」

変な呼吸をしながら呪文を唱えると、体中を緑の光が覆いはじめ、ゆったり３９度のぬるま湯に時間を気にせず浸かっている時と同じような気持ち良さが全身に行き渡る。

あー、きもちえー。
脇腹むずかゆいけど、それがなんとも言えない気持ちよさだ。
はじめてやったけど、これで商売したら絶対売れる。
うん、病み付きになりそう。

じゃなくって。

「ふぅー……で、何がいいザマだコノヤロー。自分はまだピンピンしてんぞ」

呼吸を整えながら、ゆっくり立ち上がって目の前にいる頑固親父をキッと睨みつける。

多分垂れてて睨んでるよーには見えないだろーけど。

するとどうだろう。
そこには驚愕に顔を歪めた頑固親父が……なぜ？

「……全力で背骨を叩き折るつもりの一撃を……何をした」

彼は油断なく身構えながら、自分へと質問を投げかけてきた。
その時後ろから駆けてきたゼノアは、セブルさんに制止させられつつもいつでも自分に飛び掛かれるようスタンバっている。

てか、背骨っておい。
下手すりゃ……下手せんでも死ぬぞ。

「……再生しました、はい完治です。人間なめんなバカヤロー」

普通の人間なら死ぬけどね。

いや、この場合人間だったから死ななかったのか？

判断が難しい所である。

「……少々、侮っていたようですな。ゼノア様、続けて加勢お願いできますかね？」

「無論だ。奴はシルバを泣かせた、全力で潰すぞ」

彼らはそう言うと、持ってる武器を構えて臨戦体制をとりはじめた。

やっぱりゼノアはセブルさんの差し金だったか。

しかし、二対一とかひどくない？

それにゼノアさん性格変わってない？

「……話しきーてくんないかねぇ」

そう言いながらも自分は居合の体制をとり、来たる攻撃に備える……フリをしながら逃げる算段を頭で考える。

そしてなんかないかと考える間に、ゼノアがもっそい速さで切り掛かってきた。

「うるぁぁぁぁ！！」

「のわわわっ！？」

余裕かましてやった事もない居合のポーズとってたもんだから、居合う事も出来ずにただ避けるだけになってしまったという間抜けさ加減に泣けてくる。

と、自分はゼノアの猛攻を避けまくってると、その後ろでセブルさんがなんかブツブツ言ってんのを発見した。
両手と翼を目一杯広げながら呪文を唱える彼を中心に巨大な魔法陣とさらにその周りに小さな魔法陣が着々と描かれていって……

アラートアラートだ！！
危険なニオイがプンプンするんだよ！！
自分は野性の勘はないけど理性の勘があるんだよ！！

「ちょっ！邪魔ぁ！！」

目の前のゼノアを押しのけて、セブルさんを止めるべく自分は走ろうとした、が

「貴様の相手は、俺だぁぁぁ！！」

「どうわぁぁぁ！！」

弾き飛ばしたゼノアが即座に復活して切り掛かってきたのだ。
その時見た彼の眼は、もとから紅かったがそれよりさらに紅く、血走った眼をしていた。

理性のかけらもなく、怒りとか憎しみとかそこらへんに埋め尽くされた眼をしている。

こいつは異常だ、とさらにアラートを鳴らす自分の理性。
そして同時に、色々と疑問が浮かんできた、が

そんな事よりセブルさんである。

あれは絶対止めねばならない。

「退けゼノア邪魔！罠（トラップ）カード『マジックジャ…がっぶっ！？」

ゼノアを蹴飛ばし、困った時の遊戯王と言わんばかりに魔法をジャマーしようとした所、誰かが手を口に突っ込んできて、驚いてる隙に投げられた。

それによりカードが手から離れ、発動は不発に終わってしまった。

そして犯人はもちろんゼノアさん。

なんとも凄い執念である。

そして彼は剣を握りしめ、自分の首にむかい……

「だらぁぁ！！」

あっぶな！！

こいつ躊躇いのそぶりも見せずに人の首はねようとしたよ！！

なんとか受け止めたけど、体制からして無理がある。

しかたない……ここは漢（おとこ）としてはつかいたくなかったが……背に腹はかえられん。

自分は右足に力をためながら、ゼノアに言う。

「ゼノアよ……許せ！！」

そして一撃を放つ！

ドスッ！！

「きょかぱっ！？」

自分の放った必殺の一撃を受け、奇声を発しながら悶え苦しみ、崩れ落ちるゼノア。

何をしたかというと……自分は渾身の力を込めた蹴りを……その、あれだ……。

足と足の間に……な。

うん、漢にしかわからん痛みだろう。

そして見てるだけで冷や汗モノのこの光景。

ほら、周りの兵士なんてみんなそこを押さえてふるえている。

みんなやっぱり不能にはなりたくないよな。

「つっ～～～～！！」

そしてここで男性特有の弱点を押さえて芋虫みたくうねっているゼノアは、みんなが想像している痛みを想像ではなく、体感しているのだ。

やった本人が言うのもあれだが、もはやかわいそうとしか言えない。

「……えい」

「みっ！？」

なので彼には痛みを忘れて夢の世界へと旅だってもらう事にした。
というか電流流して意識を強制シャットダウンさせてもらった。

……重ね重ねホントーにゴメン。

だがここで自分は油断していた、というか忘れていたのだ。
なぜに自分がゼノアの急所を強打せねばならなかったのかを。

「フ、フハハハハハ！さぁ、術式は完成した！我が最大の召喚まほぅ……を……何があった。なぜ皆して股間を押さえている」

あ、言っちゃった。
てゆーかこれは空気読んだんだか読んでないんだか。

「……あー、気にしないで。それより召喚魔法ね、召喚。うん、やめてくれ、頼むから」

ど真ん中ど直球ドストライクドストレートに自分はお願いした、がしかし

「……それでやめると思うか？」

ですよねー。
でも、相手が召喚すんならこっちも手はある。

そう思いながら自分は前屈みになりながらこっそりカードを取り出す。
すると彼はそれを臨戦体制だと認識したのか、声高らかに

「では行くぞ！いでよ我が下僕にして我が分身！影人形（クレィ）！！」

彼がそう言うと、小さな魔法陣から黒い影みたいなのがゆっくりと人の形になって現れた。

そして自分はそこで

「罠カード（トラップ）『昇天の黒角笛（ブラックホーン）』！！」

特殊召喚を無効にして、人形を破壊した。

その爽快感から自分はカードを掲げたまま、軽く悦にはいっていた。

と、ここまではいい。

ここまではいいのだが……

「で、だからどうした？」

再び魔法陣から黒い影が発生した。

あれ、もしやこれスライム増殖炉的なにか？

しかも一体だけではなく、ポコポコポコポコ二体三体……計五体の影人形が。

……戦略的撤退！！

自分は身を翻し、全速力でその場から逃げ出した。

「ふん、無駄だ。追え！！」

するとセブルさんはそう人形達に声をかけると、奴らは一斉にこっちにやってきて、なんかパンチっぽい攻撃をしてきた。

なんとか神速で避けたのだが、なにせ五体分の攻撃である。

マジでギリだった。

しかもそのパンチときたら、ヤケド効果はないが一撃で2メートル近いクレーターを作る威力なのだ。

さらに言うとこいつらは本当に影らしく、蹴っ飛ばそうとしたが全く言って手応えがない。

いやいやいや、マジでないってこれは。

「えぇい！南無三！！」

そう言いながら一護を振るうと、それは流石に効くようなので、人形達をぶった切りまくった。

だがやはり、切った端から新しいのが出て来る出て来る。

マジでこれは八方塞がりか！？

「まだこれだけだと思うな！言っただろう？かけらも残さず貴様を消すと！！」

しかもセブルさん、追い撃ちと言わんばかりに翼を広げ、物理的にありえないとされる黒い光を放つかのように真っ黒い球を胸の前で形勢しだした。

彼がブツブツなにか呟く毎に邪悪なオーラを放つそれはだんだんと大きくなっていく。

……これ積んだ？

いやいやいや！！
まだ何か手はあるはず！！
とにかくあの魔法陣と魔法をどうにかしなければ！
ついでにこの変な人形もってぁぶなっ！！
……そうだ！！
起死回生を賭けて自分はおもいっきり大地を蹴り、空へと跳び上がった。
確か……ここらに…いた！！
「空へと逃げようとも無駄だ！影はどこまでも貴様を追いかける！
そしてこれは貴様がお嬢様を泣かした事への我が怒りだぁぁぁ！！」
そうセブルさんは叫びながら、直径が自身の身長の半分くらいに膨れ上がった黒い球を自分に向けて全力投球のフォームを取り始めた。
だが、今ならまだ間に合う！
「うるせー！いい加減話し聞きやがれ！罠（トラップ）カード！『ゴッドバードアタック』！！」
自分はそう叫んだ途端、ドパンッ！という音とともに黒い球と魔法陣が崩壊して、さらに続けて影人形が全部崩壊した。
「……は？」
球を投げる途中のモーションで止まった大天使仕様セブルさんは、

微妙な姿勢に間抜けな顔と、見事にイケメンを台なしにする格好になっている。
きっと何があったのかわかっていないのだろう。

平たくいうとだ、なんやかんやで放っておいた《地縛神　Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ》をリリースして魔法カードを二枚破壊した感じである。

《地縛神　Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ》の効果もあいまって、相手のフィールドはこれでボロボロにです。
難しいけど、決めれれば勝ちは目前の夢のコンボです。

と、いう訳で

「形勢逆転、ですね。大人しく降参してください」

「つっ～！！」

自分の発言に対して苦虫を青汁とともに一気飲みしたような顔をして悔しがるセブルさんを見て、軽く悦に入る自分が嫌だ。

だがまぁ、あんな大魔法を連発したんだ。
普通のＲＰＧならそろそろＭＰが０になるハズである。
顔色も最初に比べてかなり悪く、息も荒いのがその証拠だ。

と、相場を知らない自分が勝手に判断して勝ちを確信していたのだが……
ここで一つ考えてみよう

確かに彼は魔力が尽きかけてるのようでふらふらしているが、まだ

意識もあるしなにより立っている。
では、ＭＰを使い尽くしたモンスターがする行動はなんだろうか
それはもちろん
「誰が降参などするかぁ！！」
物理攻撃である。
「おわっ！？」
本日三回目の鍔ぜり合い。
いい加減あきた。
「貴様はお嬢様を弄び泣かせた！そのような罪人は！いかに我が魔力が尽きようとも！いかなる手段を用いてでもその命をこの手で刈り取り償わせるのが我の役目！降伏など！誰がするかぁ！！」
「ちょっ！唾飛ばすな！！」
鍔ぜり合いとは言っても、セブルさんはさっきに比べて格段に弱くなっている。
傍目からは猛ってるように見えるけど、剣を押す腕に力がない。
かく言う自分も疲れてきてはいるが、そこまで盛大には疲れていないのでまぁ、余裕なのだ。
「本当に話し聞いて下さいよ」
出来れば平和的解決をしたい自分は、無駄だとはわかっていてもつ

い眼前１０センチの所にいるセブルさんに聞いてしまった。
すると帰ってきた答えは

「煩い！お嬢様は我が手塩にかけて育ててきたのだ！そしてそのお嬢様が貴様に恋い焦がれつつも内気な性格から自ら前に進めずにいるのを後押しした結果がお嬢様を不幸たらしめる事になったのだ！これは貴様の断罪と共に我の贖罪だ！貴様の話など聞く気はない！」

「いやだからって……」

「だからもなにもない！貴様はお嬢様の敵だ！全てはお嬢様のために！お嬢様に仇なす者は全て我が排除する！お嬢様こそが正義！！」

……あ、こいつが教育係だったからシルバちゃんあんななっちゃったんだ。
気持ちはわかるけど。

しかし……

「どんな社会不適合者つくりたいんよ！？」

よくこんなのが教育係であんないい娘が育ったな。

……うちのなんか彼より甘やかしレベル低いくせなあんなんなっちゃったのに、むかつく。

「たしかに自分が育てた子はかわいいのはわかるが、そんな甘やかした考えでいいわけないだろ！その子が中心で世界が回ってる訳じゃないんだよ！甘やかすだけが愛情じゃない！！」

「知ったような口をきくな！！」

「知ってるから言ってんだ！！」

ああ、こいつはあの時の自分と同じだ。
いろいろと盲目になっている。
ここは怒りに任せて実体験を語ってやろう。

「うちには昔康（やすし）ってのがいてな。自分はそいつを今のおまえみたいに甘やかして育てたんだよ……そしたらどうなったと思う？」

「なっ！？我は甘やかしてなど……」

「彼女の求めるモノは即座に与えるとかしてないか？彼女の意見に反対した事はあるか！？」

「……」

一気に沈黙するセブルさん。
思い当たる節があるようだな。

……そーとー甘やかしてたんだなこれは。

「うちの康はな、甘やかした結果誰の言う事も聞かず、見境なく暴れまわて周りを傷つけるだけの我が儘で自己中心的な嫌われ者に育ってしまったんだ。同じように、今の彼女も我が儘で自己中心的な行動が目立つようになっている。ならそれを改善できるよう、多少荒療治でもやってやるのが愛情なんじゃねーのか！？甘やかすのが愛情じゃねーぞ！？」

……はい、勢いに任せて言ってしまいましたが、実際自分がシルバちゃんを怒った時はこんな言う程ってか全く何も考えてませんでした。
ぶっちゃけ感情に任せて怒鳴っただけでした。

……まぁ、ばれなきゃいいんだ。

こんな自分が一番我が儘で自己中心的な気がするのは気のせいではないだろう。

激しく自己嫌悪を抱いていると、俯いていたセブルさんがなにかボソッと言ってきた。

「……けるな」

「は？」

「ふざけるな！貴様にお嬢様の何がわかる！その性格から貴様への恋心を打ち明けられずにいたお嬢様の苦しみが！我はその想いの枷を外してさしあげたのだ！いわば今のお姿こそお嬢様の本質！それを我が儘で自己中心的などと……！貴様はお嬢様を根本から否定する気か！！」

……想いの枷を外してさしあげた？

いやまてまて、まだ判断を下すには早過ぎる。
一回セブルさんの頭をテレパシーで……

……

……オイマテコノヤロー。

「……なぁセブルさん…君はシルバちゃんに何をしたかわかってるの？」

「想いの枷を外しただけだ！もっとも今では後悔してるがな！！」

「ふーん、そっかぁ……ザケンナ」

流石にこれはキレたね、シルバちゃんの時以上にプッツンした。

自分は鍔ぜり合ってたセブルさんの剣を弾きとばし、彼の首筋に刀を当てる。

「おまえ、それ真面目に言ってる？」

「くっ……何がだ…」

悔しそうに顔を歪めるセブルさんは、本当に何もわかっていないご様子である。

この態度がさらに自分をむかつかせてくれた。

「わからない？心と記憶を司る種族が聞いて呆れる……苦しみながら眠れこのゲスが」

ゴキッ！

「ゴッ！ガバッ！！」

自分は渾身の力を込めてセブルさんを再び袈裟斬った。

もちろん殺しはしないつもりだが、さっきの一撃よりは遥かに強い。
たださっきとは違い、袈裟斬ったまま後ろでなくて地面におもいっくそたたき付けたので彼を中心に隕石が落ちたようなクレーターが出来上がった。

「……とりあえず、おまえの彼女に対する深い愛情は歪んでいる。同じ愛情でも、自分の方がまだ正常だと言えるよ」

気絶してて聞こえないだろうけど、自分は彼に向かい語りかけたが、当然返事はない。
自分も自分でなんだかんだでフラフラなので、彼をほっぽって城に戻ろうとして後ろを向いた、すると

「あ……せん、せ……」

目を赤く腫らした、渦中の吸血少女がそこにいた。

……自分の戦いは、まだ終わってないようである。

ちなみにそのさらに後ろで眼をキラキラさせながらこっちを見ているエリザとかバリスや、嫌らしいニヤニヤ笑いをしているリム副隊長にはあとで制裁（いやがらせ）をする事にしよう。

よくみたら他にも近衛隊やら一般兵士やらもいるが、まぁあいつらの笑顔がムカついたからだ。

……あ、今関係ないけどエリザからヘッドフォン返してもらってない。

制裁ついでに返してもらおう。

31回目＊暴走親父と現代の若者（後書き）

……言い訳。

テストが悪いんです。
入試が悪いんです。
だからキャラが勝手動いてこんな事になったんです。
全ては数学が悪いんです。

……はい、根本原因私の力量不足ですねわかります。

とりあえず、今回はいつも以上に自分的には低い出来だといっときます。

……自信なくなってきた。

……次回はシルバの熱愛編の最終回で、今回と前回の解答編（？）の予定です。
その次からは新章突入の予定です。

あくまで予定ですのであしからず。

感想返しは疲れたのでしばらく待ってて下さい。

ではみなさん、これからも南師を見捨てないで下さい。
ボクと君との約束ダヨ♪

……あぁ、とうとう頭が沸いてきた。

最後に、予定よりも更新が遅れて申し訳ありませんでした。

32回目＊雨降って地固まって土砂崩れ（前書き）

……だいぶ遅れちゃいましたね

言い訳がてら、ひとつ叫ばせてください

盲腸なんていらない！！
もうないけど

あと、題名は別に関係が刺々しい事になるからではなく、今までの関係と全くかわっちゃうからで……

ようするに、雰囲気です

32回目＊雨降って地固まって土砂崩れ

所変わって自分の部屋。
そこにいるのは自分とシルバちゃん、それに14人の自分の使用人らしい人たち。

そして他は、自分によってロープ……はなかったのでス○ランテープでマキマキされたセブルさんと三バカトリオがまるで毛虫のようにころがっているだけである。
ちなみに、セブルさん以外はみんないきがいいようで

「ナルミ！なんだこれは！解け！！」

「なんでまた僕まで！僕がなにをした！！」

「ちょっ！汚れを知らぬ乙女にこの仕打ちは！変態！！」

ピチピチはねてます。
だがス○ランテープ、思いの外頑丈で魔法も通さないという優れっぷり。

うん、プラスチック万能説。

にしても

「うるせー。人の生き死にかかってる戦いをあんなうきうきしながら見てるんじゃねー！」

テメーらの娯楽のためにやってた訳じゃねーのに、こいつらときたら

ら……

お仕置き！

「てめっ！ナルミ踏むな！いでっ！！」

「ははははははは」

あーやばい愉しい。

自分が人の道をダンダン踏み外してる気がするが、愉しい。

とまぁ、自分がバリスを突いて遊んでいると、なんかエロい事になっているエリザが、変な顔しながら話しかけてきた。

「……なぁナルミ。おまえさっきの戦い、死にそうだったのか？」

……はい？

「そりゃそーでしょ。現に腹斬られて死にそうになってたし、普通あんな斬られたらしぬって」

「……首から腕から体中バラバラになっても笑いながら戦ってた奴がそのくらいで死ぬなんて、誰も思わんぞ？」

あー、そーいやそんな事もあったよーな……。

でも血を吐きながら悶えてたんだから、さすがにヤバ気だとは思わんか……

「それに、血を吐いて弱ってると見せかけて調子に乗った相手が近付いてきた所での完全復活や、たった一言二言で相手の魔法を打ち

砕く様といい、挑発してたようにしか見えん。自ら攻撃もしてなかったしな」

「……もしかして、さ。自分のやってた戦い方って」

「うむ。傍目からはただおちょくって遊んでるように思えたぞ。したがってナルミが負けるなど考えてもいなかった。だからさぁ、はやく解いてくれ。私は母様みたいな性癖はない」

そっかぁ……悪いことしたなぁ。

「わかった。じゃあお仕置きレベルは少し下げてやろう」

「れべる…？れべる……て、結局お仕置きはあるのか！？」

「うん！」

だってどっちにしろ腹立ったのには変わりないもん。

では、嫌だ嫌だー！と暴れるエリザはほっといて、本題に入ろうか。

そう思い、自分は縛られながらあぐらをかいているセブルさんに目をむけた。

ちなみに翼は仕舞う事が出来るらしい。

「単刀直入に聞く。さっきゼノアに何やったん？」

「……ハァ……ばれてた、か」

「本気だしゃ考えてる事くらい読めますからね。あんま多用はしま

せんが、そんくらいお見通しです。とはいっても、実際はさっとみてぱっと頭に血が昇ったからあんま詳しくは見てないけどね」

「ハァ、心王種の心を読むとは……」

もはやあきらめたように、彼はやれやれといった感じに首を振った。

そして口を開いた、が

「そのと「ちょっとマテナルミ！お前は戦闘中敵の考えが読めるのか！？」

「空気読めバカリス」

戦闘バカが話の腰を背骨ごと粉砕したのだ。

死ねばいいのに。

「あ、いや悪かった。だがこればっかりは気になってな。何せそんな事出来たんなら誰もお前に勝てる訳がない。いずれお前を倒す事を目標にする俺からしたら由々しき事態だ」

「あー……そうかぁ…死ねばいいのに」

あ、つい本音が。

「そんな簡単に死なねぇよ。ところで、どんな事を読み取ってお前はそんな怒ったんだ？」

「今それを話そうとセブルさんが口をひらいたのを、貴様が邪魔したんじゃないか！！」

もうやだこいつ。

ハァ、と自分は盛大なため息をついて、セブルさんに代わって話しだした。

「まず自分がセブルさんの思考を読んだ時、彼はいろいろごちゃごちゃと考えてた訳よ。で、その一端に彼がゼノアをなんかこう、洗脳的な事をしていたとか読み取れた訳よ。で、自分はなんかピンときたのよね」

「何がだ？」

「多分間違いがない推理なんだけど、セブルさんはなんかシルバちゃんにも同じように、積極的になるような魔法やらなんやらをかけて、本人の事を無視して……」

そう言いながら自分はビシッ！て感じにセブルさんを指差した。

すると、彼は観念したように呆れたような表情で……あれ？
こっからが決めゼリフなんだけど……犯人はお前だ的な……れれれ？

「我がお嬢様にそんな事するとおもってるのか？ゼノア様ならともかく、お嬢様にそんな事するはずがない」

え？
あれ？

「なんで？ゼノアにやったならシルバちゃんにも……」

「ゼノア様は、あれだ。可愛いげがない。だからあれくらいなら」

うわ、こいつ最低だ。

「そもそもゼノア様は昔から我の助けも必要とせずに全て一人でこなしてしまう上、聡明で飲み込みが早い。しかも6歳で軍の特殊部隊に入って自立するとか、これほど教育係りとして可愛いげも面白みもない事はない。それに比べお嬢様は今でも我に相談をしてきたりと頼ってくださるし、未だにきっちり自立出来ずに我やご両親に甘えたりおもらしを隠したりとかなさりますし……284年も生きていて、嬢様程育て甲斐のある方は今までいなかった！お嬢様に出会えて我は幸せだ！！」

高らかに熱弁したセブルさん。

こいつもバカだ。

しかもそのお嬢様は彼の言葉により羞恥で顔を真っ赤にしながら自分の横で泣きそうになっているというね。

つか、おもらしって……彼の中で最近なだけだよね？

なにせ284年も生きてるんだし。

てゆーか、あんた寿命何年よ。

とかなんとか頭ん中でツッコミを入れてると、シルバちゃんが

「せ、セブルのバカ！なんでそんな事言うの！私だってちゃんと自立して仕事も出来てるんだから！もうオトナなの！！」

もっそい怒った。

だが鬼が降臨した訳ではなく、むしろいつもより迫力がない。

そしてそんな彼女をセブルさんは

「いえ！自立できてません！！」

一刀両断、切り捨てた。

「確かに仕事は出来ていますし、しっかりした所もありますが、時折考え、行動共に短絡的で子供な所が多々見受けられます。３週間前だって、おもらしを乾かしてかく「キャァー！！もうやめて！！」」

バキッ！！

「ゴブッ！！」

とんでもない事をカミングアウトしたセブルさんは、シルバちゃんの右ストレートによりマットに沈んだ。

そしてシルバちゃんは、自分に向かい顔を真っ赤にしながら大声で叫んだ。

「ち、ちがいますよ先生！あれは魔法の練習でたまたまおふとんに火が移っただけです！！それを消そうとして水をかけただけでおもらしなんかしてません！！」

こーいうのをドツボに嵌まるというんでしょーね。

まぁそれは置いといて。

「生きてる？」

「はがっ……とれた」

セブルさんはそう言いながら、プッと折れた前歯を吐き出した。
右上の前歯が折れた姿はイケメン率２０％減くらいだ。

「……なんていうか、弱いな、伝説の種族」

「言ってやるなエリザよ」

いくらなんでも、かわいそうだろ。

「うるさい、乳歯が取れただけだ」

は？

ちょっとまて、今なんつった？

たしかこいつ２８４歳よね？
自分より遥かに年上の、２６７年も人生の先輩してる人よね？

頭の情報処理速度が全く追い付かない自分は、うろたえながらセブルさんに聞いてみた。

「乳歯って、折れたんでなく？」

「あ、ああ。ちょうどぐらぐらしていたからな。ちょっと困っていたのでちょうどいいが……」

「……ちなみに聞く、君の種族の寿命は幾つだ？」

「たしか大体２０００近く生きると聞いている。それがどうかしたか？」

事もなげにセブルさんは答える。

そしてそれを聞いた自分は即座に暗算を始めた。

えっと、大体８０で人が死ぬとして８０：２０００つまり１：２５。

そして彼は今２８４だから、当て嵌めて人に換算すると……

「……約１１歳」

「は？」

まさかこれで小５かよ。

ありえない……

「詐欺だ……」

「さっきからいったいなんなんだ」

自分の言ってる意味がわからないようで、彼は正直困惑しているようである。

……いろいろ言いたいが、そろそろ脱線した話をもどさねば。

「ごめん取り乱してた。で、話の続きだが……シルバちゃんになんかした訳じゃないなら想いの枷を外したってどーゆー意味？ぶっちゃけゼノアにやったよーに精神介入したんだと思ったんだが」

自分がそう言うと、セブルさんは納得したような顔をした。

「あぁ、そういう事か。いや、我はそんな事はしていない」

そしてゆっくり語りだす。

～セブルサイド～

あれはお嬢様が劇を観に行った日の夜の事だ。
お嬢様は帰ってくるなりすぐ部屋へと引きこもり、食事中も上の空で明らかにいつもと違うご様子だった。

そんなご様子に心配をしていると、旦那様から

「セブル、ちょっとシルバの相談に乗ってあげてくれないか。恋愛沙汰は俺は全く役に立たないし、リリスもリリスであれだからな……。とりあえず頼んだ。あ、それとリリスがシルバの記憶をちょっと弄ったらしいんだが、それはいじらないでくれ。内容は全面的にぶっちゃけシルバの勘違いらしいが」

そう頼まれて、我はお嬢様がお気に入りのお茶とお菓子を用意してお嬢様のお部屋へと向かったのだ。

「失礼しますお嬢様。お茶とお菓子をご用意いたしました」

しかし、我がそう言おうとも全く返事がない。
いつものお嬢様ならまだ寝てる時間でもなかったので、不思議に思いながらも扉を開けると、お嬢様が枕を抱えたまま横になってお休

みになられていた。

どうも座っているうちに眠ってしまったようで、寝巻ではなく普段着で眠ってしまっていた。

そしてこのまま布団もかけずにいるのでは風邪をひくと思い、近付き布団を掛けようとした所で、お嬢様が

「……起きてますよ」

そう言いながらゆっくりと起き上がってきた。

目にはうっすらと涙の跡が。

「……なにか、ありましたか？」

内心絶対ナルミ殿が原因だとわかってたので、ナルミ殿に対する怒りでハラワタ煮え繰り返りながらも、それを悟られないようにしながら我はなるべく優しく語りかける。

最初、お嬢様は無言だったがしばらくすると口を開いて、我に聞いてきた。

「……私って、先生に嫌われてるのかな？」

痛々しい声で今にも泣きだしそうなお嬢様だったが、我は酷とは思いつつも質問した。

「……なぜですか？」

一瞬沈黙が訪れたが、お嬢様は我にこう語りかけた。

「……今日私ね、劇を観に行ったの。そしたらその中で、私と先生は愛を誓い、将来を誓う恋人同士だったわ。でも、実際は私と先生はそんな関係ではないの。ただの生徒と先生の関係なの……それに……」

そこまで嬢様は言うと、さらに一段と悲しそうな表情をなさった。
ちなみにここで我はナルミ殿を必ず殺すと心に誓った。

「それに先生は私との結婚が嫌みたいなの。さっき言ってた劇の内容も、作った副隊長をものすごく怒ってたし、結婚についてもいつも否定するし……私、魅力ないのかなぁ……」

お嬢様はそう言うと、抱えた枕に顔を埋めて啜り泣いた。

ここまできたらいくら３００も生きていない若輩者の我でもわかる。
ナルミ殿は別としても、お嬢様は本気なのだと。

確かにナルミ殿はお嬢様をたぶらかし、我の元から掻っ攫っていった憎い存在ではあるが、お嬢様が本気であるならそれを応援するのが我の勤め。
そして幸い我は昔奥様からも似たような相談をされた事があったので、それと同じような事を教えてさしあげる事にした。

「お嬢様、心配はありません。ナルミ殿はただ、照れているだけです。お嬢様が嫌われる訳がありません。むしろ好かれているのではないでしょうか？」

「……ホント？ホントに先生は私を嫌いになってない？」

「本当です、旦那様をご覧下さい。誰かがいる時は奥様を欝陶しがっているように見えてその実二人きりになると、途端に奥様を優しく包み込む。ナルミ殿も同じで、きっと恥ずかしいだけなのです。だからここで弱気になってはいけません。攻めて攻めて攻めるのです。奥様もそうやって旦那様を捕まえたのですから。自らの愛を、気持ちを全面に押し出しナルミ殿を虜にすればいいのです。何、恥ずかしがる事はありません。お嬢様が言った通りに劇がやっているのならお嬢様とナルミ殿の関係はもはや周知のものです、皆応援してくれてしかるべき。そもそも、妻が旦那に甘える事の何がいけないのですか。見た限りナルミ殿は自ら押していく性格ではありません。なら、お嬢様自身がいかなければならないのです！今こそ戦う時なのです！！」

「今こそ……戦う時……」

「そうです、今戦わずにいつ戦うのか。彼は地位があり財がある、そして何より力がある。この機を逃せばそれらを狙う他の女に取られるやもしれません」

「っ！！いや！そんなの嫌！！」

「そうならないよう、今からナルミ殿をモノにするのです。何、心配はありません。私が甘えるしぐさから化粧の仕方まで、男心を掴むあらゆる方法を伝授致しましょう。なぁに、これでも私も男の端くれ、ナルミ殿の喜ぶ事など、手に取るようにわかります。それに私の言う通りにした結果が今の旦那様と奥様です。きちんと言い付けを守ればお嬢様もあのような、甘い結婚生活を築けるのです」

「うん！うん！！」

「では、まずは男心を捉える甘え方ですが……」

～ナルミサイド～

「それから我はお嬢様に日夜ナルミ殿を陥落させる術を……」

「ちょっとまてやゴルァ」

こいつ頭沸いとんと違うか？
それが自分の素直な感想だ。

自分は彼の首を絞めながら、おもいっきりガッコンガッコン頭を揺らしてやった。

「貴様は！何を！してくれとんじゃぁ！！」

ぶっちゃけ彼のやったことは、アドバイスだと言われたらそれまでだが、まぁそれでは自分の気がおさまらない訳ですよ。
こーいうのには順序ってのがあると自分の脳内彼女、および心の嫁が言っているんだ、間違いない。

だがしかし、セブルさんは何を勘違いしたのだろうか。
ゆらされながら変な笑みを浮かべている。

「……なんねその顔は」

「いゃ、心配しなくとも結構。いくら我がお嬢様の手助けをすると言ったとて、ナルミ殿が心配するな男女の営みについて我は決して

お嬢様ね躯に教えようとは……ぴむっ！！」

「三回くらい死んどけ」

もうやだこいつ。

とりあえずぶん殴っといたが、ホントにもうやだ。

「……まぁ、あれだなナルミ。こいつが別にシルバに対してへんな事した訳じゃあないのはわかっただけいいではないか」

5メートルくらいぶっ飛んだ芋虫を見て、顔を引き攣らせながらエリザが言う。

なんともバカとしか言えない言葉を。

「おバカ。だから問題なんだよ、わからぬか」

「ん？だから問題って何が……あ」

エリザは一瞬考える風に視線を動かし、シルバちゃんを見てそこで止まった。

対してシルバちゃんはなんもわからない様子で首を傾げている。

「……つまりシルバちゃんのあれは、シルバ自身の本質性格なんだよ。なんか頭いじられてた方が、むしろ楽だった」

何がいいたいかってーとですよ。

シルバちゃんの甘え癖（？）は、セブルさんのアドバイスを差し引いても元々の彼女の性格な訳で。

彼女が昔の初々しい状態になる可能性は低い訳で……

「まぁ、あきらめろ。シルバも反省したようだし、なぁシルバ」

「は、はい！これから慎ましく先生を支えていきます！！」

なーにかズレてるよーな気もするが……

「ホントに大丈夫？」

「はい！先生が私のためを思ってに怒ったんだとわかりました！ならそれに応えるのが私の仕事です！皆ともきちんと話し合いました！！」

「うーん……ちょっとズレてるよーな気もするが……まぁいいや、これからは気を付けてね」

別にもう面倒になった訳ではない。

ホントダヨ？

とりあえず、シルバちゃんの頭をなでりなでり。

すると彼女は気持ち良さそうに眼を細めだした。

しばらくそうやってると、潰したはずの芋虫が復活してきた。

しかたないのでそろそろ彼のテープを外してやろうかと考えた、その時彼は口を開いた。

「こちらからも、質問がしたいのだがいいですかな？」

「ん？別にいーけど」

なにもやましい事などない自分は、彼の問いに何も考えずに返事をした。
すると、セブルさんはいきなし鋭い眼をして、こんな事を言い出してきた

「……ナルミ殿はずいぶんと子育てに詳しいようですが……もしや子持ちではないですかな？」

ひやっとなった。
主に部屋の空気が。

シルバちゃんなんか笑顔のままかたまってるし、エリザなんか眼を見開けるだけ見開いてるし……やっべ嫌な汗が……

「どうなのですかな？」

どうって何！？
なんでそんな事になってんの！？

自分そんな事になるような事してな……あぁ！！

「違う違う、康は犬、ただの犬だから。仔犬ん時に家に来て、そのまんま家族で可愛がったら手をつけらんなくなったドーベルマン！自分の子供じゃないよ！」

「……イヌって、なに？」

あ、そいやいたねリム副隊長。
しかしイヌは何か……何かって……

「人間ともっとも共存している生き物かな？ドーベルマンは昔狩猟とかで狩人がひきつれていた種類の犬で、今では悪い事した人を捕まるのに使われている……かな。家の康もそれなりに強いらしいけど、今は自分の友達の飼ってる柴犬の一松にやられておとなしく……」

あ、やば。

言って気付いた、これすごくやばい。

ほら、エリザなんか信じられないって顔してるし。

「に、人間を捕まえるのか！？どんな化け物だよそれ！！」

バリスなんかこれだし。

「いやそんな大層な。確かに捕まえるけど、それも人間の指令があって……ええいめんどい！とりあえず自分のペットなの！！」

「ナルミ君、ぺっとが何かわからないよ」

リム副隊長の冷静な一撃。

そこからか……

「……飛竜部隊の隊員と飛竜の関係、と思っていただき結構」

もうめんどい。

やだこのこたち。

「あんなでかい生き物が各家に一頭づつ……どんな国だ、日本とは」

……もう、なにも言わん。

「それでいいよ、もう」

なにもかもあきらめたような口調で自分は彼らにあたる。
するとセブルさんは、なんかムッとした感じになり、自分に仕返しし始めた。

「しかしまぁ……いかに人間と言えども間違いはあるのだな」

「……なにが？」

「いやぁ、先程の見事に的外れな推理。我がお嬢様に危害を加えるはずもないのに、綺麗に予想を外してくださった。最初、ナルミ殿が我のお嬢様の育て方について怒ってたと思ってたのだが……いやはやかんちがぶるぶぁ！！」

「四回くらい死んどけやゴルァ！！」

なにこれデジャヴ。

しかしこれは……

「うおぉぉぉぉぉ……我が人生最大の生き恥なり！！」

堂々の自分的黒歴史ベスト3入り決定である。
なぜに思い出させるバカヤロー。

泣くぞ？
男泣きすんぞ？

「あの時の自分死ね！」

「……ナルミ…その、頑張れ！」

グサッ！！

バリスの言葉が急所をえぐる。

「ひっ！……あ、そ、そうだナルミ！リリスさんにそこだけ記憶消してもらえ！そうすすれば万事解決だ！！」

なぜか怯えたようにエリザが早口で提案する。

確かにいいかも……けど

「効くかなぁ？」

「……た、多分効かないな。すまん、へんな事言って」

……なんだいエリザ、そんなに怯えて。

いったいなにがあった。

なんでそんな自分の横を凝視しながら自分にあやま……る…

「今はガマン今はガマン後でコロス後でコロス先生を困らせた先生をバカにした先生をからかったセブルコロスセブルコロス今はダメ今はダメ先生との約束先生との約束先生との約束先生との約束今はガマン今はガマン後で燃やす後で焦がす後で刻む後で削る後で潰す後で剥ぐそもそも先生を殺そうとした燃やす焦がす刻む削る潰す剥ぐ吊す千切る刺す溶かす砕く埋める落とすぶちまける……」

「落ち着こうかシルバちゃん。ほら、自分の膝の上においで。抱きしめてあげよう」

「はい♪」

喜々として自分の膝に乗ってお人形のように自分に抱きしめられるシルバちゃん。

さっきまでは眼も虚ろに、壊れたテープみたいにぶつぶつ言ってたのが嘘みたいだ。

ちなみに描写は避けさせてもらう。

しいて言うなら貞子も即座にテレビへ避難して井戸の隅でガタガタ震えるであろうくらいに怖かった。

てゆーか、育ての親手にかけちゃだめよ。

「よしよし、頼むから危ない事考えないでね」

「はい！……えへへ」

よし、危機は去った。

纏わり付くシルバちゃんのおかげで機動性は失ったが、セブルさんの生存が約束された。

「……見せ付けてくれますね」

「あなたが死なないようにするための処置ですよ」

「わかりますし、一応認めましたが……やはり…」

あぁ、娘が嫁にいく父親ね気持ちね。

難儀よのぉ。

「……そういえば、さっき姫様が言ってましたが……忘却魔法を奥様がお使いになられる事をどうやって知ったのですかな？」

いきなり話題変えたな。

まぁ気持ちわからないでもないよーなあるよーな……

まぁいーや。

「んー、実はシルバちゃんにリリスさんがやった時立ち会ったんよね。聞いた話、かなり珍しい魔法らしいけど」

「まぁ、我直伝ですからな。奥様は5歳の頃から旦那様の生涯の伴侶となる事を決意して、それから毎日旦那様に寄り添っていましたから、旦那様に教えるついでに教えたのです。確か親友の、現魔王様と王妃様もそこにいたので使えるはずですぞ」

今おぉぅ、とエリザが言ったのは空耳ではないはずだ。

「それで、それがどうかしたの？」

「いえ、むやみやたらに見せてはいけないと言っていたのですが、そこまで奥様に信用されているのだなぁと」

セブルさんがそこまで言うと、シルバちゃんがクイクイと自分の服を引っ張ってきた。

それを見たセブルさんは、話を中断したので自分はシルバちゃんの方を見ると、彼女は

「先生、お母様が私に忘れさせた記憶って、一体なんなのですか？」

くりっとしたつぶらな瞳で問い掛けてきた。

……困る。

非常に困る。

あんな事をやったんだよって言う事は、自分にはできない。

困りに困って自分はセブルさんの方を見ると、彼は

「我も同じ疑問を持っていた。忘却魔法で一度封印した記憶は、どうにかして思い出させなければ垣間見る事ができない。いったいなぜ奥様はお嬢様に魔法をかけたのか……」

うわぁ、きょーみしんしん。

どうしよう……。

「……知らない方がいい事もあるんだよ」

よし、うまい自分！

これでみんなあきらめ……

「でも、私は知りたいです！先生がそこにいたなら、私はそれを知りたい！なんでお母様が私の記憶を消さなければいけなかったのか……知る権利は、あるはずです！！」

うわっ、まっすぐな瞳。

いや知る権利はあるよーな気もするが……うん。

「まだ君には早い。時がきたらいずれ話そう。それまで待ってくれるかい？」

「……本当ですか？いつか教えてくれますか？」

「うん、いつか教えるよ。約束する」

チキンのなにが悪い。

だってこの娘、自殺するかもってリリスさん言ってたんだもん。

おいセブル、なぜに舌打ちするコノヤロー！！

＊＊＊

そして現在、この部屋には自分と、自分の膝の上に座っているシルバちゃんのみである。

……なんか、いつもと違う味わった事のない空気ってか雰囲気はなんなんだろうか。

「……先生」

「はいっ！？」

声が裏返った。

へんにでっかい声だし、ハズカシイ。

「今日は、ごめんなさい」

自分が自己嫌悪に陥っていると、シルバちゃんが謝ってきた。

上目使いで。

「言い訳はしません。私は自分勝手に、先生の事を考えずに行動していました。……ですが、この気持ちは嘘じゃありません。それはわかってください」

……

……

……イイ。

落ち着け自分！！

素数だ！いや素数では生温い！！

円周率を数えるのだ!!

「……先生?」

いや、わかるよ君がこう、あれな事は!

いくら自分が昔思い込みからの自爆失恋のトラウマがあるからって、これぱっかりは間違いようがもうない。

でもだから……自分も一人の男なんだよ!!

「わ、わかってる!!わかってるからね!?だからおちつ「なら、先生は、ナルミさんはどうなんですか?」……どうって……」

どうって……どうなんだ?

「ナルミさんは私を、どう見て下さってるのですか?私は、あなたと結ばれたい。だけどナルミさんは、私と結婚、してくれますか?」

彼女の眼は真剣で、本気で話してくれていることが読み取れる。

しかし…結婚、ね。

ぶっちゃけ自分は独身貴族になるだろうとか予想していたのだが…

…いや、確かに今はまだ独身で貴族だけども、まさかこんな早く結婚するかいなかの話が出るとは。

だけど…なんだかんだで自分も……。

「好きなのかなぁ」

「ふぇ！？」

どうなんだろ？

なんか最近、いつの間にか隣にシルバちゃんがいて、なんだかんだ言いながらそれが当たり前になってる自分がいる。

よくわからん。

……でもなんか……な。

「……ん」

「ひゃわっ！？はわわわ！？」

自分は無意識にシルバちゃんを抱きしめていた。

腕の中で、形だけの抵抗をしている小さな少女をはなさないように。

そして、抱きしめてからはっきりとした。

自分の気持ちに整理がついた。

「……なんかもう、君以外が隣にいる自分の姿が想像できない」

「……それは、私を貰ってくれると受け取っていいのでしょうか？」

「……ああ。むしろそれ以外に受け取ってもらったら、泣くぞ」

いつの間にかもがくをやめたシルバちゃんを、抱く腕を緩め、お互いの眼が向かい合う。

そしてどちらともなく、ゆっくりと月に照らされた一つの大きな影が出来上がる。

しばらくしてから、再び少し離れて、自分は確実に聞こえるような声で、彼女の瞳をみながら真っすぐ告げた。

「自分は、なんだかんだで君が好きなんだ。気持ちの整理もついた。学生結婚上等、やってやろうじゃないか。自分と、結婚してくれ」

「……はい」

泣きながら返事をしたシルバちゃんを抱きしめ、自分は今までの人生でもっとも異常な心拍数を記録する心臓の鼓動を聞きながら、ゆっくりと時が流れるのを感じていた。

その後の事は……ご想像にお任せする。

きっと現代日本に今から帰って、親に報告したとしても『若さ故の浅はかな考えだ』とか言われるのはわかっている。

だけど、後悔はしていない。

てゆーかする要因がない。

今の自分には地位がある、財産がある、そして何より、貰い物だが力がある。

帰るのを全く諦めた訳ではないが、どうせ帰っても居場所がないんだ。

だったらこの娘のためにここで骨を埋めてやろう。

いつものチキンな自分はどこへやら、シルバちゃんのためにやたら

勇ましい思考回路が出来上がってしまったようだ。

それも翌日の朝、即座にショートする事になったがね。

翌日、やたら早く起きてしまった自分は横で寝ているシルバちゃんの頭を撫でてから、起き上がって服を着た。
ちょっとぼーっとしていると、今は兵士達が起きてくる時間になったらしくガヤガヤとさわがしくなってきた。

テキトーにご飯でも調達してきてあげようかなと思いながら部屋を出ると、一瞬で周りが静かになって、みんなして無言で自分を見つめだした。

……なんね。

自分が困っていると、ガタイのいいお隣りの部屋に棲息するギームさん（王鬼種・２６歳の独身男性）が自分に近寄って来て、いきなり肩を掴み始まれ、そして

「あなたは俺達に死ねと言うのかぁ！！」

叫ばれた……なんで！？

「なんでここであんな……俺達だって…あんな声を夜通し聞かされたら……生殺しとはこの事だ！！」

……

「声、漏れてた？」

「ええ、しっかり。奥様が悶え、懇願する声からハセガワ様が焦らして意地悪する声まではっきりと！！」

掴まれた肩にかかる力がだんだん強くなっていく。

イタイイタイイタイ。

爪が食い込む爪イタイイタイイタイ。

「こんな男くさいところであんな声聞かされたら……俺だって恋人さえいたら……みてろよチクショー！！」

ギームさんはそう言うと泣きながら走って行った。

同じように、八割くらいの兵士が思い思いの言葉を発しながら駆けていく。

残ったのは、いわゆる彼女持ちのリア充に分類される人達だけである。

この時点で、自分は男性兵士の大半からアレな眼で見られる事が決定した。

……そして、駆けて行った兵士達を発信源に自分がシルバちゃんと正式に結婚をする事になったことが城中に伝わっていったのである。

もちろん、それによりからかわれるのは自分である。

……ハ、ハズカシイ。

「せん、ナルミさん、大丈夫ですよ。私達の愛は誰にも邪魔はできません」

「君さ、君のそれが余計に拍車をかけるって事に気が付いて。そして問題点が根本から間違ってるから」

それからしばらく、自分は祝福とも冷やかしともとれる扱いをみんなからうけるのであった。

……拝啓母上様。

不肖、あなたの息子にして一人の漢、長谷川　鳴海は別世界にて吸血鬼の嫁を貰う事になりました。

とてもかわいらしく、器量よしのいい娘ですが……

結婚とは苦労するんですね。

幸せですが、前途多難です。

まさかこんなんなるなんて思ってもいませんでした。

新婚だけに心魂からよろこんでますが、一方身魂が深刻な疲労をかんじております。

なぜかって？

まさに塵嚢（じんごう）のせいですよ。

おあとがよろしくないようで。

32回目＊雨降って地固まって土砂崩れ（後書き）

毎度おなじみ、言い訳反省会～

今回は『言い訳厨乙』と言われても反論できない程の言い訳が満載です。
それが嫌な人は回れー右！！

……ごめんなさい
最後の最後、彼らをくっつけたいがために盛大に企画した企画でした

そして、シルバちゃん洗脳説を信じた人達

そんなことしません！（エヘン！）
そんなことするくらいならヤンデレ設定つけません！
そしてヤンデレは宝です！！

……まぁ、前回のあれがちょっと弱すぎていろいろ言われましたが。
……心の広い方は許してください。

で、1番言い訳したいのがあれだ、エリザ達。

ぶっちゃけヘッドフォンのくだりで感づいてくれるかなぁ、なんて考えてた私が甘かった。

多数の方々がナルミ君に亡命をすすめて下さって……愛されてるなナルミコノヤロー

ぶっちゃけこれが今の私の限界かもです、と思った今日このごろ。書いてる分には妄想を文章化していて楽しいのですが、読まれる方は不快なのかなぁとか思ってしまいます。

結構な方が助言して下さるように、ちょいちょいパソコンで書き方調べたりなんだりしてはいますが……伸び代あるかななんて不安になっちゃったり。

……女々しい言い訳ですね

とりあえず、次回からはちょっと雰囲気変えていこうかなぁなんて考えています
何せもうそろそろナルミ君に出発してもらわんと、いい加減あれなので（笑）

ここからはプロットやらいろいろ組み立てきちんと話が通るようにしていきたいです。

そしていっときますが……何を言われようともシルバちゃんはヤンデレでデレデレです。

多少のレベルダウンはしましたが、これは譲る気はありません。

そしてこの展開（主に最後）についても、失礼ながら文句、批判等は受け付けたくありません。
かなり無理があるっぽいのはわかりますが、私がこんな感じに彼ら

をくっつけたかったと思って無理矢理理解してください。

つか、やりたい事をやり切った！
ある意味もう人生に悔いはない！！

うぅう……言い訳しなくてもいい文章力がホスィ……

では、これからもこの馬鹿な南師を見捨てずに、よろしくお願いいたします

本気で見捨てないでください

ではでは、みなさん病気にはならないよう気をつけてくださいノシ

33回目＊準備が一番騒がしい（前書き）

今回ちょっとお下品カモ。

33回目＊準備が一番騒がしい

自分は某北の工作員みたいな神様とやらに拉致られてこの世界にやってきた。
理由としてはなんかどっかの怪物ぬっころせって事らしい。

だが自分はそこでそれなり…いや、かなり幸せな人生をそこで今現在送っているのだが、やはりそこは頼まれた仕事だし、なにより出発する日にちがもう決まっているのだ。

あと一週間。
そんくらいぎりぎりになって自分はやっと、出発の準備を始めたのだ。

限りなく後悔してますが。

「……わっかる訳ねーだろぉ！！」

ここはやたら広い自分のお部屋。
だが今まで過ごしていた部屋ではなく、とうとう完成した自分のお家である。
しかもエリザの粋な計らいにより、お風呂も完備されたお家なのだ。

シルバちゃんのお家より一回りちっさいが、かなりおっきくて持て余してるのが事実だが……まぁ住み込みが４０人間近くいるのでちょうどよいっちゃちょうどよい。

まぁそれはおいといて、とりあえず自分はそんな感じに部屋にいます。

そして一人で限りなく荒れているのだ。

具体的に言うと、元いた世界で使ってた学習机の四倍くらいある机に大きく広げていた前衛芸術のような絵画をぐっしゃぐしゃに丸めて部屋の隅っこへと全力投球した。

なぜか。

それは言わずもがな、部屋の隅で丸まっている、乃木坂さんもびっくりの美しき絵画に問題がある。

……まぁ、正直に言おう。

あれ、目的地までの地図なのだ。

過去にあったような、ミミズが酔っ払ってサナダ虫と痙攣したウナギの横でワルツを踊りながら尻尾をバタフライノットにされたくらい訳わかんない地図がそこにはあったのだ。

なんか潰れかけのバフンウニみたいなところの中心に、バッテンマークがポチッと置いてあんので、そこが目的地だというのはわかる。

だが……ここがどこだかわからない。

てゆーか地図として機能しとらんし。

だが辛うじて文字は綺麗なので、右下に書かれた事だけは理解できた。

ちなみになんと書かれてたかといいますと

ミッションコンプリート条件

・クルフの森にあるミキシー城を破壊する。

・そこにいる悪いやつをぶちのめす。
・その土地をしっかり浄化する。
スペシャルボーナス条件
・赤コイン８枚。

なんだよスペシャルボーナスって。
スターか？スターなのか！？

……とりあえず、そんなん突き付けられたら誰だってこうなりますよ。
なのでどうしようか、本気で頭を悩ませているのです。

と、自分が頭を抱えていると、不意に扉がノックされた。

「せんっ……ナルミさん。オフロからあがりました」

ホワホワしたラフな恰好をしたシルバちゃんである。

上気した顔がなんかエロい。

「あ、あぁそう……」

と、ここまで言って自分は気付いた。

地図がわかんないなら現地の人に聞けばいい。
てな訳で、自分はさっそく現地の人（この世界の人）であるシルバちゃんに聞いてみることにした。

「ね、シルバちゃんさ、クルフの森って知っとる？」

ちなみに、この旅にはシルバちゃんも連れていく事になっている。
つか、おいていったら後が怖そうだし、なにより彼女が暴れて周りに被害が出ないかが心配だったのだ。

だったのだが……なぜだろうか。
これを話した次の日、彼女はまるで準備していたかのように旅の荷物とか道中によくでる魔物対策とか、完全な用意をしていたのは。

そして自分がそれを聞いた時の彼女の眼がかなりすわっていたのはなぜだろう。

「クルフの森ですか？確か西の果てにある、ミムル山脈のどこかにある魔境だって聞いた事がありますが……伝説の中でででてきた土地で、本当にあるのかはわかりません」

少し考えていた自分にむかい、そういいながらシルバちゃんはトテトテと自分に寄ってきて、膝の上にポスッと乗っかってきた。

最近はここが彼女のお気に入りらしくて彼女はちょくちょく乗ってくる。
二人の時以外はやってこないので、しかたないので認めてはいるが、やっぱり恥ずかしいなぁ。

まぁそれは今はどーでもいいのだが。

そんな事よか、クルフの森だ。

「んー、じゃあさ、ミムル山脈ってどこだかわかる？」

「はい、それは昔お父様に連れていかれた事があるのでわかります」

ビンゴ！

よっしゃ、これであのクソ女神の試練に勝つる！！
あんな毒飲んで集団自殺したバジリスクだか、鼻毛真拳が暴発したボーボボたかわからない地図に頼らなくてもいいんだ！！

わぁーい、自分の半日なんだったんだろー。

「じゃあ道案内頼みたいんだけど、いい？」

「あ、目的地そこだったんですか。はい、もちろん問題ありません」

よっしゃよっしゃ。

いつもと違い、なんかいいかんじに事が運ぶぞ。
やっと自分にも運が向いてきたか。

とまぁ、これが出発四日前、つまり昨日のお話しである。

確かにここまではうまく事が進んだ。
そうここまでは。

よーするに、そうは問屋がおろさなかったって訳ですよ。

＊＊＊

「……は？」

「だから！明日出発するんだろ！？なら馬車を操る奴が必要になるから、俺が無償でその役をやってやるって言ってんだ！！耳は大丈夫か！？」

「……ごめんなさい、こいつの事は無視して下さい。それで……あの、明日出発する旅に僕達も連れてって下さい！なんでもしますから！！」

「いやイミワカンネ。君達なにがしたいかがワカンネー」

自分は今、お仕事のためエリザの部屋の前にいる。
そしてそこで門番よろしく立っていたラルムとシャール君に捕まって、今の状態になったのである。

てゆーか何こいつら、なんでこいつらがその事知ってるん？
たしかあれは秘密にしといてって自分釘刺しといたよーな……

「あ、あのですね！その……明日出発だっていうのはわかってたので、最初はラルムが出ていく門のところに張って無理矢理ついて行こうとか言ってたんですが、一週間くらい前にどの方角に向かうのかがわからないっていうのに気がついて……五つの門全部を見張る事も出来ないから、急遽こうやって直接お願いしようかと……」

「いや、問題はそこじゃぁなくって……」

「しかも、ちょっと屋敷に行って情報を得ようとしたらなんかいきなり五人くらいに襲われて返り討ちにあうし……あいつら！ぜってーいつか倒す！！」

「いや、だから……」

「ごめんなさい、こいつがお屋敷に忍び込もうとしたのは謝ります。ですが、なんとしてもついていきたかったんです！！」

「自分の話をきけぇい！！」

会話が成り立たないってこんなに苦痛だったのか。

今に始まったことじゃないけど。

とにかく自分はびっくりしている彼らの頭をアイアンクローしながら、静かぁに質問してやった。

「なぁ、なんで君達がその事知ってるん？おにーさんしりたいなぁ」

するとあら不思議、なんか二人揃って顔青くしながら、ケータイみたく小刻みに振動しはじめた。

そして、シャール君がふるえる声でボソボソっと、途切れ途切れに口をひらいてくれた。

「あ……あの……こ、この前み、見回りの時……ラルムとちょっと隠れてや、休んでて……その、な、ななにか聞こえて……ここここっそりち、近付いて……そそれで……」

つまり、あの場所にいたって訳かい。

それでいーのか王様と王妃様の近衛隊。

しかし……理由はわかったが連れてく訳にもいかないね。

なぜなら自分はこれ、チャリでいくつもりだからだ。

シルバちゃんとニケツしたら、もう定員オーバー。
歩いてついてこられてもそれじゃ意味ないし、馬車はガッタンゴットンと痛いし三つ眼や六本足の馬なんか扱い知らないし。

つまりはムリなのだ、めんどいのだ。
なのであきらめてもらおう。

「ムリ、めんどい、諦めろ。ちゃかちゃか仕事にもどんなさい」

しかし、彼らも簡単には諦めてはくれないようで、シャール君が超頭をさげて頼み込んできた。
そしてラルムは逆ギレした。

「そこをなんとか！お願いします！！」

「めんどいってなんだ！小さい事言わ「とうっ！！」ごぴゅ！？」

……なんだ、今赤いなにかが跳んできたぞ？
自分の網膜が狂ってなければ、あれは……

「あなたは、なんでまた先生を困らてるんですか？本格的に灰になりたいみたいですね……。ちょうどいいです、私はあなたが嫌いなのでこのままここで火葬してあげます」

やっぱり、覚醒したシルバちゃんでしたか。

綺麗なフォームの跳び蹴りをラルムの側頭部に決めた彼女は、倒れ

たラルムの頭を踏み付けながらそう言うと、手からいつもの赤いナイフを……あ、ヤバ。

「さようなら、下劣で醜いごみ蟲さん」

「はいストーップ。今ここでそーゆー事やるのはやめようね」

自分はそう言いながら、振り上げた彼女の腕を掴んで頑張って止めた。

危ねぇ危ねぇ。
ここで流血沙汰なんて、洒落にならんよ。

ほら、シャール君なんかもうラルムが死ぬと思って目をつぶってしゃがみながらガタガタしてるし。
ラルムに至ってはなんか顔が青からむしろより白くなっていって、いつもの威勢はどこへやら、腰抜かしたようにへたりこんでやがる。

「わかりました。では今晩、こいつが寝てる時に襲撃して処刑します」

「うん、1ミクロンも自分の言いたい事が伝わってない。だから、殺すなってーの」

ピシッ

「あう！！」

デコピンをくらって可愛い悲鳴をあげるシルバちゃんの腕を離し、自分は情けない二人の方へと向き直り、こう告げてみた。

「君達が自分に付いてくるってゆーことは、この娘とも一緒に旅をするって事だけど……。大丈夫？」

するとどうだろう。
彼らはもっそい顔になったと思うと、即座にとれそうなくらいに首を左右にふりはじめた。

「なら、ちゃっちゃともどりなさい。じゃないとゼノアにさっきの事包み隠さず報告すんよ？ちなみに知ってると思うけど、あいつはこの娘の兄貴だから、もしかすると……ねぇ」

「し、失礼しました！！」

「くっそ！覚えてろよ！！」

そう言いながら二人は全力で逃げていった。
あ、シャール君こけた。

しかし……ラルムよ、貴様はどこの三流の怪人だ？
五色のレンジャーはどこにもいないぞ？

……まぁ、いいや。
それより仕事だ仕事。

シルバちゃんが小声で『……あの害虫、いつか潰す』とか言ってるのを自分はしっかり聞いてしまったので、そこも気をつけておかないとならないが、今はスルーしよう。
あとでしっかり釘をさしておかなければ。

……別にもう面倒になったからではない。多分。

「あー、じゃあ自分、仕事だから」

「私もです。一緒に行きましょう」

一緒にって、今目的地の目の前なんですが。

まぁ、小さい事はどーでもいいや。

そう思いながら自分は、扉を開けて部屋に入っていくシルバちゃんの後に続いてエリザのところへと向かっていった。

……さぁ、ここで一つ自分は失念していた事がある。

ここで自分にあの二人が大声でさっきの話をしていた事だ。

そうここ、エリザの部屋の前で。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊÷☆

「ナルミ、手首が痛い。あんまりだ」

自分が部屋に入るなり、エリザが涙目で訴えてきた。

原因はというと、自分が課した宿題（おしおき）のせいである。

「そりゃーこんなに書いてりゃ健勝炎にもなるわな」

彼女の足元には、昨日自分が渡した、コピー用紙に数学の問題がび

っしりとかかれたものが散乱している。
その数え～っと……あ、６０枚。

それをムー君とミミリィ隊長がそれを無言で拾っていた。
ちなみにテトラ君とリム副隊長は、近くでニヤニヤしながらこっちみている。

そんなに自分達二人が一緒にいるのがアレかコノヤロー。

つか、近衛隊全員集合って一体なにさ。
いつもの事だが、なんかハズいぞ。

……あれ？
1、2……うん、全員いるよね。

「ううぅ……スウガクはキライだ。物理をやりたい。波の共鳴や合成や反射の実験をもう一度……」

「お仕置きだからしかたない。つか、数学わからんと物理は出来んぞ。せめて2次方程式はとけるようになれ」

このプリントは全部、方程式の問題をＰＣでプリントアウトしたものです。
ちなみに裏表で。

この娘は物理に興味深々だけど、数学にはなぜか拒絶反応みせるタイプだからね。
なのでこの前のお仕置きもかねて、克服してもらう事にしたのだ。

ま、ちゃんと全部やったようだし許してやろう。

と、ここまで考えてエリザを褒めてやろうと口を開いた時、リム副隊長が爆弾を投下しはじめた。

「いやぁ、それはそうとナルミ君。婚前旅行はいついくのかな？」

……はぃ？

「なんのこと？」

「さっきなんか騒いでたじゃん」

ああ、あれね。

なんかいい具合に勘違いしてくれたようだ。

危ない危ない。

これはこのまま話を合わせていきましょう。

「ダメです、秘密です！」

いや、シルバちゃんそんな怒鳴らんでも……まぁいいや。

「そこをなんとか、お願い！！」

「ダメです！遊びじゃないんですからね！！」

「ま、そういう事だから、諦めて」

ちぇっ、という感じにリム副隊長がひねくれた表情をしたが、まぁ

諦めたようで安心だ。

これで行き先がエリザに知られでもしたら、どうなる事やら。

「まぁ、私としたらすぐに帰って来て欲しいが、たまにはいいだろう。二人でゆっくりしてこい」

「はい、姫様。出来るだけ早く帰って式をあげれるように、頑張ります！！」

なにをだ。

つか、そんな早く帰れな……

「ところで、どこまでいく予定なのだ？」

「はい！クルフの森に魔獣を倒しに……あ」

ばかぁぁぁぁ！！

「ちょっ！シルバちゃん！」

「ご、ごめんなさい！あのそのっ！嘘です！全部嘘です！！」

「嘘って、絶対そっちが嘘じゃないですか！なんですか魔獣って！！」

「そ、そうですよ！なにかあるんですか！？しかもクルフの森って、お伽話でしか聞いた事ないですよ！！」

あぁ、もうダメだ。

テトラ君やミミリィ隊長がここまで反応するんなら、これはもうエリザが駄々をこねて……

「そうか……まぁ、頑張ってこい」

……あれ？

「……ついてこないの？」

「ついていっていいのか？」

「いや好ましくないけど……」

なんだ？

こいつ、いつもとは全く違う。

……まさか、偽者？

「正直ついていきたいが……いままでわがままばっかり言ってきたし、これ以上迷惑はかけたくない。なるべく早く帰ってきてくれれば私はそれでいい」

「……おまえ、偽者か？」

「ちがうわ！私なりにおまえの事考えた結果だ！！」

あ、いつものエリザだ。

「まぁ……魔獣退治や伝説の魔境には興味をひかれるがな」

うん、大人になったな、エリザ。
自分もうれし……

「まぁいまだに誰も足を踏み入れて帰ってきた者がいないと言われるクルフの森に、興味がない訳ではないが」

……

「そこに住む魔獣を退治すると言われて、その魔獣を一回見てみたいと思わない訳ではないが」

……こいつ

「……言外につれてけというのをやめろ。性格悪いぞ」

「そ、そんなつもりはないぞ……」

目をそらすな目を。

「だ、ダメですよ姫様！危険なんですよ！！」

ここでシルバちゃんも必死に止めようと声をあげた。

だが、それが失敗だったようでエリザがなにかを閃いたような顔をして、再び自分に向き直りはじめた。

「なぁナルミ、危険といえばだが……おまえだけでいざという時にこいつを止められるか？」

そしてピシャリとシルバちゃんを指指した。

「さっきの事から、こいつはある意味短気だ。仮に若い女性の従業員がいる宿に泊まったとして、おまえが用事でいない時にその従業員がおまえの部屋を掃除してたりしてる所をこいつが見たら……」

「やめて、リアルすぎて怖い」

そうだよ！

ガルクさんも経験したらしいじゃないか！

ガルクさんの時は彼に怒りの矛先が向かったらしいけど、それが他の一般ピープルに向かないという保証はない。

むしろこの娘はその確率のが高い。

だけど……でも……。

「まぁ無理にとは言わないが……考えといて損はないはずだぞ」

くそ、勝ち誇った顔をしたエリザが憎い！！

でもたしかにこいつの言う事も一理あるし……

とか考えてるうちにムー君が一言

「……先生もずっとシルバと一緒にいる訳にもいかないですし、何かあった時シルバだけよりも俺達がいた方がなにかと安心ですよ」

……たしかにそうだが……しかし……。

と、ここまで葛藤していると、テトラ君が自分にトドメを刺しにき

た。

「先生、たしかに先生なら安心かもしれませんが、シルバも女の子なんですから、姫様や隊長がいる方がなにかと安心かと」

「……いや姫様に護衛させるってどうよ？」

こいつ、頭沸いとんのか？

「ちがいますよ。……続に言う乙女の日とかに男の先生だけで具合の悪いシルバの対処が……」

「よし、エリザついてきてくれ！ミミリィ隊長もお願いします」

自分、撃沈。

いや、しかしそこまで考えていなかった。
たしかにそんな事態になった時、自分だけじゃあ対処できねぇ。

しかたないな……こいつらも連れていかねばならないとは……。
まんまとやられた。

しかし、まぁいざとなればこいつらそのままここにテレポートさせれば問題ないか。

しかしながらこの人数は……
自分のチャリに馬車が追いつけるのだろうか？

なにせあのチャリ、一回使ってみたら瞬時に車より早くなったからね。

これは加減しなければ……

あれ？

そんな乗り物に自分、シルバちゃんをそのまま乗せようとしてたの？

……ありがとう、エリザ、みんな。

自分、浅はかだった。

まぁ、なんだかんだ言ってもこいつらが来るなら、退屈はしなさそうだ。

いい意味でも悪い意味でも。

……こうして、自分の旅は出発前から波瀾万丈な事になっていくのである。

……ハァ。

～エリザサイド～

あの後ナルミは普通に授業をして、出発は三日後だと言って戻っていった。

なので今ここには、私とシルバ含む近衛隊しかいない。

そして私はナルミがいなくなった直後、テトラに向かい

「よくあんな事思い付いたな」

素直な感想を言ってみた。

「いえ、先生なら考えていないだろうと思っただけです」

「いや、私も考えていなかったぞ？月のモノなんか、たしかに厄介だが……なぁ」

「そうですね……やっぱり一人ならきついかもしれませんが、そこまでは……」

私はミミリィに同意を求め、ミミリィもそれに答えてくれた。

多少下品な話かもしれないが、やはりこの手の話は結構……

「あの、姫様……」

「なんだシルバ」

シルバは顔を赤くしながら、ちょっとモジモジと恥ずかしそうにしている。

そして、何回か口を開けたり閉じたりをした後、意を決したようにこう言ってきた。

「お、乙女の日とか月のモノってなんですか？わ、私も女の子ですけど……その、わからなくて……男の子の先生も知っているのに……恥ずかしくて……」

「……」

「……男性陣、出てけ」

この後私とミミリィとシルバとの三人だけで女の子会議が開催されたのは言うまでもない。

「え!?そんな事があるんですか!?」

「まだないの!?」

「……シルバ、おまえいくつだ?」

「今15歳で、今年16になります」

「……おもらしといいこれといい、シルバは私よりある意味子供だな」

「おもらしなんかしてません!!」

「魔法の練習だっけ」

「そ、そうです!練習です!!」

「嘘つくあたりがまた子供だな……」

33回目＊準備が一番騒がしい（後書き）

自動車学校に入ってから時間がなくなってきた南師です。

今回は二つ言い訳。

シルバちゃんは、今回アホっぽいけど、そこまでアホなつもりじゃありません。

そしてエリザですが、次回から性格丸くします。

ぶっちゃけ、エリザも連れていかせようと考えていたんですが、まぁうまくいかずに……すいません。

ついでに全国の女性の皆様、すいません。

では、次回とうとうナルミ君旅立ちます

ではでは、皆様これからもよろしくお願いしますノシ

３４回目＊マッタリ紀行・耳かきと神様（前書き）

みなさんは彼らの意外な一面を垣間見るでしょう。

３４回目＊マッタリ紀行・耳かきと神様

ジャコジャコジャコジャコチリンチリンチリ～ン♪

軽快にベルを鳴らしながら、自分は愛車をコギコギ、三つ眼馬ことドドリーのクンクンとミンミンの引く馬車に平行するように走っといる。

その馬車は、やはりお姫様が乗るので普通の馬車よりいろいろとすごい。
なにせ馬車ってか小屋なのだ。

中では小さなベッドや棚や机やイーティーシィｅｔｃ……

とにかくすごい。
キンキンピカピカしている訳じゃあないのだが、とにかく地味に豪華なのだ。

そしてそんな馬車には窓がついている。
そしてただいまその窓は全開で、そこから身を乗り出すように

「だから！グズッ、聞いてるんですか！？なんで、ヒック、ぼ、ぼくだけの、のけ者にしたんですか！！」

「だからゴメンって、な」

「な、じゃありません！そもそも…ズズッ、忘れてたって！忘れてたってなんですか！！」

はい、すっかり存在忘れてたウサミミスゥ君でございます。

もうね、出発3時間前に彼はこの事知ったんだよ。

てゆーかもう知ってるものと思って……ゴメン、素直に言うわ。

素で存在忘れてた。

マジゴメン。

出発してから既に2時間。

3時間で出発準備を済ませた彼は、まず最初の一時間は疲れによりぐったりしていて、復活したかと思えばずっとこれなのだ。

……涙目で、つか泣きながらそんな風に怒っても、おショタ大好きな腐った女子しか喜ばないよ。

うん、自分反省しとらんな。

ちなみに、他の方々はと言うとだ。

「んー！んんー！！」

「……先生、シルバの眼が危ないです。スゥを狙ってます」

「うわ怖っ！スゥ、睨まれ方が半端じゃないぞ」

「よく見ろテトラ。こいつ、スゥにを睨みながらナルミに縛られた時からずっと喜んでいる。変態だ……」

「うわぁ……さすがというか、血を感じますね」

「何？どゆこと？血？」

これである。

実はさっきスゥ君が最初に怒った時、シルバちゃんが……あれだ、悪落ちしたのだ。

したがってただいまス○ランテープにマキマキされているのだが……そのマキマキした時の会話がこれだ。

『ちょっ！ダメだって！自分が悪いんだから！！』

『いえ、先生は悪くないです。こいつが先生を困らせるのが……』

『えーいもう落ち着け！！しばらく大人しくしてなさい！！』

グルグル

『あんっ！せん、せっ、そんな…きつ……キモチ…イ……はぅぅ……』

『……』

と、言う訳である。

おわかりいただけただろうか。

ちなみにこの後自分は無言でシルバちゃんにさるぐつわを噛ませ、即座に黙らせた。

顔を紅くしながらうっとりとした顔の彼女は、もはや危ないとしか言えなかった。

「ちょっと先生！聞いてるんですか！？」

ちっ、現実逃避失敗。

いや、最初の１０分は真面目に反省していたよ？
だけどおんなじ事６回も言われると、いい加減、ねぇ。

「だから聞いてるよ。けどそろそろおちつこ？」

「うるさいです！ボクは怒ってるんですからね！！」

あーもーしつこい！！

「わかったから！もーごめんって！なんでもするから許して！！」

自分は、いい加減イライラしながら投げやりに言ってしまった。
するとスゥ君は、ニヤリと笑い……え？

「わかりました、許してあげます。なんでもしてくれるんですね。
では、後で先生がこの前やっていた高速移動のやり方を教えて下さい」

「は？」

「約束ですよ～」

スゥ君はそう言って、手をひらひらさせながら馬車のなかに引っ込んだ。

……嵌められた。

「ん？あ、やっと終わったか」

スゥ君が引っ込んで少しすると、今度はエリザが顔を出してきた。

「あ、ああ……終わったが……なぁ、スゥ君っていっつもあんなんなの？」

「いや、いつもはあんな怒んないぞ」

「いや、そでなく……さっきの。最後の方」

「ん？あぁすまん。ずっと皆でシルバを観察していてそこらへん見てなかった。何かあったのか？」

「……いや、もういい」

何と言うか……スゥ君、腹黒い。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊≠☆

その後昼食やら休憩やらの時間を挟みつつも、何事もなくかなりの距離を移動した。

だがテトラ君いわく、この速さでは街に着くのは４日後だと言う事だ。

「これでもだいぶ早いですけどね。あ、ちなみにこのままいくと、

先生の領地に着くのはだいたい2ヶ月後くらいですかね」

「自分の領地？……ああ、あったねそんなん」

「……せん、ナルミさん、まさか忘れてました？」

「忘れてました。すっかり」

ちなみに今は夕食が終わった直後。

日もすっかり落ちたので、みんなで火を囲んでスープを食べていたのです。

「……ナルミは、どこか抜けているな」

うるさいエリザ。

と、しばらく馬鹿な事をやっていたら、なんか耳が痒くなってきた。

「……どうかしたんですか？」

耳の中に小指入れて掻こうと奮闘している様子を不審に思ったシルバちゃんがよってきた。

ちなみに他のみんなはお片付け。

なんか魔法で瞬時に終わらしてるようだが。

「いや、ちょっと痒くて……」

しかし考えてみたら、この世界に来てからだいたい3、4ヶ月、全く耳掃除していなかったな。

耳かき好きだったのだが……まぁ、忙しかったからしゃーないか。

そう思いながら自分はポケットから耳かきを取り出し、カキカキした。

あー、キモチエー。

お、なんかでかいのが奥でガサガサ言って……ん、取れた。

うぉ、でかっ！

そんな事をしていると、シルバちゃんが

「何してるんですか？何ですかコレ？」

不思議そーに自分を見て、その後手頃な石に置いた自分の耳垢を凝視し始めた。

そんなシルバちゃんの様子を、自分はこれまた不思議そーに見ながら今度は反対の耳に耳かきを差し込んだ。

まっさか、魔族だって耳垢がなかったりする訳じゃないべ？

「何って、耳掃除だよ。これは自分の耳垢」

再び奥にある大物を逃さないように細心の注意を払いながら、自分はシルバちゃんの質問に律義に答え……ん、あ、くそ落ちた。

と、答えながら自分が奮闘していると、シルバちゃんがさらに不思議そーに

「耳って、お掃除するんですか？」

ハイ？
するしょ普通。

しなくちゃ耳垢栓塞だかってのになって、耳が耳垢でふさがっちゃって聞こえな……お、いいぞいいぞ……よし！とれってうわっ、さっきのよりさらにでかっ！！

……んー、あとはめぼしいものはないかな。

じゃあ後は綿棒でコナコナしたのを……

「ふうっ……。で、耳掃除だけど、逆に聞きたい。しないの？」

「はい、聞いた事ありません」

なんと、耳大丈夫か？

「本当？耳聞こえなくなんない？」

「耳ってお掃除しないと聞こえなくなるんですか！？」

うーん、いくつかは外に落ちるって言うが、シルバちゃんは耳が髪で覆われてるしなぁ……。

「うん、多分。なんならする？」

「お願いします！」

そう意気込むシルバちゃんだが

「あの……ところでどうやってお掃除するんですか？」

まぁ、耳掃除をしらんかったんだからねぇ。

そう思いながら、自分は正座をして

「んじゃあ頭ここに乗せて、ねっころがって」

フトモモをパンパンしながらそう言った。

すると彼女は顔を朱くしながら

「え！？あ、あうっ……はい……」

そう言って仰向けに……

「シルバちゃん、横向いて」

……なんか、前途多難っぽい。

と、ここまで騒いでいるといつの間にかみんなも集まってきてしまった。

「ほほぅ……耳を掃除するのか」

「なんか、初めて見ます」

「……斬新」

いや、そんな見世物じゃないぞ。

とか思っていると、シルバちゃんが

「は、はじめてですので、痛くしないで、や、優しくしてください」

そういいながらシルバちゃんは、覚悟を決めたように目をギュッとつむりはじめた。

いや、そんな、なぁ。

んないやらしい事する訳じゃないんだから。

そう心で突っ込みながら、自分はまずシルバちゃんの耳の中を観察することにした。

なにせ、どこに大物がいるかわからないまま耳かきすると、そいつらが奥に落ちてしまうからだ。

正月やらお盆やらの親戚の集まりで、毎年毎年従兄弟やらの親戚の子達の耳かきをさせられている自分が言うんだ、間違いない。

ちなみに、話は逸れるが両親のも月一単位でやっている。

きっと端から見たら、４０過ぎのおじさんおばさんが高校生にひざ枕されているという実に不気味な光景だろう。

それはともかく、シルバちゃんの耳である。

夜で暗いとはいえ、雲一つない満月の夜なのでかなり月明かりが明るいので、光についてはパーフェクトだ。

実によく見える。

だが、そこからまぁ……問題が発生した。

「……これは」

「な、何かあったんですか!?もう手遅れで耳が聞こえなくなるんですか!?」

「いや違うけど……」

べつに手遅れとかじゃなく、まぁそこまで問題でもないのだが。

さて、突然だが人間の耳垢には二種類あるのをご存知か。
カサカサ型とベタベタ型である。

……なんかベタベタ型とか言うと、必要以上に汚く感じるような気がするので、ドライ型とウェット型と言っておこう。

さて、では日本人は、八割はドライ型で二割がウェット型なのだが、外国人になるとその割合が逆転する。
ちなみに黒人にはドライがいないようだが、まあそれは置いていて。

本来はウェット型が優性遺伝らしいのだが、日本人はなぜかドライ型が多いらしく、それによってドライ型耳垢に特化した現在のボンボン付き耳かきがよく売れるらしい。

まぁつまり何がいいたいかと言うとだ。

「……シルバちゃんはウェット型か」

という事である。

ちなみにウェット型は、耳かきしなくても別に指でほじくれば問題ないと聞いた事がある。

だから耳かきの習慣なかったのか。

実際耳かきはウェット型には対応しとらんしな。

「な、なんですかそれ？病気ですか？」

「いや違うから。大丈夫、問題ない」

ま、綿棒使えばいいんだがね。

親戚の子にも一人、ハーフの子だけどウェットな子がいたからやり方も問題ない。

さぁ、この道１０年のベテランの腕を味わいがよい。

「んじゃ、いくよー」

「は、はい！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊／☆

「……はぅぅ……」

今、シルバちゃんは体育座りをしながら、自分の横で夢見心地な顔をしながら月を見ている。

顔は朱く、なんか艶やかなため息をつきながら。
まぁ、原因はと言うと言わずもがな。
自分の耳かきの手腕です。

「……なんというか、アレですね」

「うん、ミミリィもあんな喘ぎごバベッ」

「リム、黙れ」

「しかし、なにがおこったのかわかりません……」

まぁ、ぶっちゃけ耳かきに関しては耳のツボまで把握してる自分の右にも左にも出る者はいない、と豪語できる。

でもなんかこの反応は、もしやシルバちゃんって耳がせいか……いや、考えないどこ。
たまに親戚の子もこうなるし、問題ないべ。

つかそれよりリム副隊長、生きてます？
首、凄いですよ？

「シルバー、生きてるかー？」

「……はい……なんとか」

エリザの問いにもなんとか答えるも、その眼は焦点が合ってない。
まさに心ここにあらず。

まぁ、くどいようだが親戚の子もたまにこーなるけど問題ないし、大丈夫だろう。

と、ここでしばらくシルバちゃんを揺さぶっていたエリザがふと

「うーむ……ここまでなるとは、やってもらいたいよーなもらいたくないよーな」

とか言い出した。

なんだかハッキリしないな。

「やってほしいの？」

するとエリザは顔を赤くしながら、手をブンブン振って

「いや、別にそんな……まぁ……興味はあるが……そ、そう！そんな事やると私がシルバに殺されかねない！！」

いや、そんな慌てなくても。

まぁ、確かにシルバちゃんはアレだしなぁ。

だが、そこまで考えていたところでまさかの一言が自分の横から聞こえてきた。

「いいですよ」

「へ？」

「ほ？」

ついエリザと一緒に変な声を出してしまった。

つかエリザ、“ほ?”ってなに。

自分が軽く混乱していると、さらに不思議な事をシルバちゃんが言い出した。

「別に姫様なら大丈夫ですよ。信用してますし、姫様の好みはお「あー!わー!じゃあ頼んだぞナルミ!」

……ひっじょーに気になるフレーズがあったのだが、触れない方がよさげだ。

だからエリザ、触れないから自分のフトモモ抓らないで。

「エリザ、痛い」

「うるさい!おまえの嫁が悪い!さっさとしろ!!」

いや、そうだけども。

「わかったから、大人しくしなさい」

全くこいつは……以外にウブだな。

＊＊＊

「……なあ、別んとこでメランコってくれないか？」

「……メランコがなにか知らんが、少しほっといてくれ」

エリザの耳かきが終わった途端、エリザはさっきのシルバちゃんみたく月を見ながら体育座りしだした。
ただ表情は、鬱々真っ盛りな暗い顔をして黄昏れている。

なぜか、理由としては

「私は！シルバや母様みたいな変態じゃないのに！あんな！あんなこと！！」

まぁ、こういう訳なのだ。

つまりこいつ、さっきのシルバちゃんと同じような反応をしたのである。
てゆーか、ヨダレたらして自分のズボン汚した分、シルバちゃんよかはしたない。

ちなみにシルバちゃんはテントの中でスヤスヤ眠っている。
寝てる人をテントに入れて寝袋にくるむのが意外にやりずらく、重労働だと知ったのもその時だ。

他の隊員も、いつの間にか寝てたりどっかいったり思い思いに散らばっている。

あと、脈絡ないがこいつの耳垢はドライだということをここに記しておこう。

どーでもいいか。

と、しばらく黄昏れてるエリザを眺めていると、ミミリィ隊長が瓶とグラスを持って奴に近付いてきた。

「姫様、今夜は飲みましょう」

「……ああ、そうだな」

……なんか、哀愁漂うな。
これは自分、近寄りたくない。

ここは、触らぬ神に祟りなしだろう。
なのでとっとと自分はその場をはなれる事にした。

クワバラクワバラ、女心は複雑だ。

……そういや、女といえば。

「あのクソ女神、しばらく連絡ないな」

テントに入って寝よう（なんの気をつかったのかしらんが、自分はシルバちゃんと一つのテントを共有する事になっている）としていた時に、そんな事を思い出してしまった。

せっかく出発したのだから、なんか一言くらいくれてもいーよーな気がするんだが……まぁいいや。

そう思い、テントに入ろうとした時に自分は変な事を思い付いて、ポケットから携帯電話を取り出した。

「たしか……あいつからの着信が……あた」

そう、自分は二回程あの自称神様からケータイに連絡が入っているのだ。

ならば、着信履歴からその番号を使い、こちらから連絡できないかと考えたのである。

まぁその番号はなんか文字化けしていたが、とりあえず発信。

……ツ、ツ、ツ、ガチャ。

あ、出た。

「オッス、元気」

『にょわっ!?な、何!?え?』

なんだよ、出たくせに何焦ってんのさ。

「自分だよ自分、長谷川鳴海」

『うえ!?なんで念話できるの!?まだ教えてなかったのに!!』

「いや、フツーにケータイからだが……。着信履歴からそのままかけたんだよ」

『あ、ああそっか、それなら可能か……。……フツーのケータイに戻しとくんだった』

「聞こえてんぞ」

『あ、気にしないで。それより電話なら不便だから一回切って私から念話送るわ』

奴はなんか慌てたようにそう言っていきなり電話を切りはじめた。

ブツッ！ツーツー……

『ふー……。で、なんか用？』

いや、用はないが。

旅に出たという報告とかを。

『あ、やっと？まぁ急がないでもいーんだけどね。つか、そんな事で連絡したの？』

いや、そうだがね。

あ、そうだおまえに一つ言いたい事がある。

『ん？なになに』

おまえどんだけ地図描くの下手なんだよ！！

あんな納豆と山芋と糸こんにゃくをすり潰して広げたみたいな地図でわかるかってんだ！！

『はぁ！？ちょっとなに？あの地図が汚いって！？あれはポルが描いた立派な地図なんだよ！？』

……いや、ポルって誰？
そしてなんか今日声からしてずいぶん荒れてるな。

『あ、あーその……ゴメン。ちょっと疲れててね。八つ当たりしちゃった。何せ最近新しい世界が出来ちゃって忙しいのなんのってね。しかも二つ同時とか、ホントやめてほしい』

……なんか、ゴメン。
そんなスケールのデカイ事になってるなんて考えてもいなかった。

『いやいーよ。別にこれからは私じゃな……いや、なんでもない。気にしないで』

いや、そー言われると逆に気になりますよ。

『いーの！気にしない！』

……まぁ、はい。
それよかポルって誰？

『……あ、そうだ！君に新しい世界の一つの名前を決める権利をあげよう！！』

は？
いやそんな大層な事言われても。

それよりポル……

『いーから！そんな事よりほら！その世界の方向性を決める大事な儀式なんだからね！！』

ならなおさらやだよ！
そんな世界を『いーから！私が後の細かな軌道修正してあげるから！！』……わかったよ。

えっと……つかそれ、どんな世界？

『あー、待って……。ん、成分的には水が多そうだね』

水ね……水、水。

……ネコア？

『ほほう。意味は？』

いや、ｏｃｅａｎを入れ替えてｎｅｃｏａってやったアナグラム。

……いーよ、どうせセンスないんだから。

『いや、センスとかはぶっちゃけどーでもいーの。私の仕事が減っただけで』

は？
どゆこと？

『いや、ただその新世界ネコアの神話に“原初の神にして全能の創世神”として君が出てきてしまうだけだけど……』

おんどりぁぁぁ！！
なにさらしとくれとんじゃぁ！！

『大丈夫、じき慣れる』

……ハァ、もういいよ。

自分の関係ない世界の話しだ、自分が関わる事もないだろう。
しかもまだ出来立ての世界だろ？
ならまだ人間出てくるまで何億年もかかるんだ、自分には関係ない。

『どうだろうね。ちなみに人間はどうあがいても出来ないよ。この世界で言う魔族は出来るけど』

そうなんか。
なんか人間って凄いんだかそーでないんだか……。

『いや、実際人間はフツーに凄いよ。あの世界自体が密度濃すぎてアレだけど、別の世界に行ったらもう凄すぎだよ。まぁ君程の人はそういないけど、まず魂が強すぎだからね』

自分程って……、テキトーに選んだ結果自分になったんだろ？

『ん？あ、あーそっか……うん、そうそう、テキトー』

……なんかな。

つか、魂が強いって何？

『魂が強いってのは、まぁ存在する力が強いって事。生半可な事じゃ世界に還元されない、つまり死なないって事さ。ちなみに魂が強いとその入れ物である肉体も強くなるし体力も必要になる。だから

まぁ、別世界にほうり込まれても、瀬田みたいに力技だけでなんでもできるのさ』

ふーん。
って、瀬田さん、あんた力技だけだったんかい。

『あとは、陰陽道みたいな霊ってか魂そのもののエネルギーを使えるのも人間だけだね』

え？
そなん？

『うん、魔族じゃ魔力が邪魔して無理。たまに出来るってホラ吹く奴もいるけどね。あと、人間が別世界で死んでも魂は地球のある世界に還ります。ちなみにこの時、私や世界が許せば好きな人と魂から繋がって、連れて帰る事もできます。瀬田みたいに』

……瀬田さん、ここでもか。
なんか瀬田さんスゲーな。

『ちなみに魂から繋がるって事は、よほど相性がよくない限りできないけど、出来たらもう何があっても何回生まれ変わろうとも世界が再生しようとも二人は巡り会って結ばれます。』

はー、すげーな。
つか、やっぱり前世とかあったんだ。

自分の前世ってなんだろうか？

『何いってんの、君の前世はスサ……違う違う！ス、スイカ！そ

うスイカだよ』

スイカ!?

自分植物だったの!?

……つかさ、最初の“スサ”って何。

なーんかさっきから隠してない？

『な、なんも隠してないよ。あ、あと、瀬田が連れてった魂はやっぱり魔族のモノだから、体は弱くなっちゃうんだよね。ほら、君のいた学校の担任の先生、あれが今の瀬田の生まれ変わりで奥さんがそのエルフ』

マジ？

市ヶ谷先生って瀬田さんの生まれ変わりなの!?

たしかに奥さん体弱くて学祭も車椅子で来てたけど……。

『だしょ？でもまぁあんま問題はないけどね、何せ魂がくっついてんだし』

そっか……。

で、スサって何？

『……まだ言うか』

だって自分の前世だ、気になる。

『……人を困らせないで、そーいうのは言えないの』

人じゃないじゃん。

『元・人・間!!だから人!!』

ふーん、おまえも人間だったんだ。

だれ？

イブとか言わないよね？

『言わないよ。これも話したくないから、もう前世の話しはなし！終わり!!』

えー、マジでー。

『マジで。全く、なんでこんなのが……』

あんたが選んだんだよ。

『いやそーだけど……。はぁ、さっきから口滑りまくりだし、そーとー疲れてるなぁ……。まぁ、いーや。で、なんか他ある？』

他って言われても……実際用事なかったしなぁ……。

あ、じゃあさっき新しい世界が出来て忙しいっていってたけど、どんな仕事があるの？

やっぱりあれ？

どんな生き物創ろうかとか？

『あー、いや、そんな事はしない。生き物創るのは世界の仕事で、私の仕事は『ヒミー！魂の仕分け出来たから出てきてー！名前つけてあげてー！！』げっ』

は？

ヒミー？

『ヒミーどこー？僕の念話弱いんだからでてきてー。てゆーかもうひとつの世界の名前いい加減決まったー？』

あー、頭になんか間延びする爽やかな男性の声が……。

『ちょ！ポル今念話はっ！！ええい！じゃあまたいつか！！』

プツッ。

……切れた。

なんだったんだ？

つかヒミーって、あいつの名前か？

名前ないとか言ってたくせに。

しかしヒミーね。

ヒミー……ひみー……ひみぃ……。

卑弥呼？

あいつまさか人間時代卑弥呼だったのか？

いやでもあいつパツキンだし……。

もういいや、自分から電話かけといてあれだが、疲れた。
さっさと寝よう。

そう思いながら自分はずっと何もせず立ってた事で体が気持ち固くなった気がしたので、その場で延びをしたり腰を回したりした。
そしてその時、後ろに三つの人影が隠れるように存在してるのを自分は見逃さなかった。

「……何してるん？」

「あ、見つかった」

そこにいたのは、リム副隊長とテトラ君、そしてスゥ君である。

「いゃあ、先生があまりにかわいくてつい見ちゃってました」

そして開口一番にテトラ君が発したこの一言は、自分を戦慄させるには十分だった。

「や、やだよ！自分は男を、君達をそーゆー対象には見れない！！」

つい言ってしまった自分の心の声を聞き、テトラ君達は見事に焦りだした。

「ち、違います！僕達もそんな趣味はありません！！」

「ただ先生がこれからどんな事するのか気になっただけです！！」

「そうだよ！ただナルミ君が初々しいなって見てただけだから！！」

ん？
初々しい？
なんで？
「初々しいって、なんで？」
「だって、シルバのところに入ろうかどうしようか、変な百面相しながら悩んでるんだよ？初々しい以外なんと言えばいいのさ。さっさと襲っちゃいなよとか思いながら見ていたさ」
……百面相？悩んでる？
……
「ち、違う！そんなつもりはない！！」
「いやだって、ねぇ」
「そうですよ。てゆーか俺達の事など忘れて、さぁ。シルバもほら、ちらちら先生を見てますし」
は？
シルバちゃんも？
テトラ君に言われて、すぐにテントの入口を見ると
「ひぅ！！」

いつの間にか起きてた赤い少女が引っ込んだ。

「あ、あの～……」

あ、出てきた。

「い、一緒に寝ます？」

いや、そんな赤くならんでも。

襲わないから、な。

疲れたし、そんな気もあの三人に削がれたし。

……まぁまずとりあえず、後ろの三人には沈黙して貰おうか。

直後、三人のいたところに１００万ボルトなヴァーリーが落ちたのは言うまでもないだろう。

ボルト１００万だが、アンペアは低いので死なないはずだ。

と、三人に神罰を下した直後。

ガインッ！

「ぶっ！？」

なにかが側頭部に直撃した。

よく見ると、それは鎧の頭部分で、飛んどきた方向を見ると

「……先生、うるさいです。俺は眠いんです、静かにしてください」

シルバちゃんにも負けないくらいの顔をしたムー君がテントから顔

を出していた。
彼は自分をめっちゃ睨んだ後、“全く、迷惑考えろってのクズが”と暴言を吐きつつテントに引っ込んでいった。

……怖っ！！

「うぅ……痺れる……」

「だいだい色のカミナリが……」

「羽がうごかない……」

……もう、こいつらはほっとこ。

自分はそう決意し、テントに入って寝袋にくるまった。
少ししたらなんか自分の寝袋に人が無理矢理入ってきたが、まぁ余裕があったというか疲れたので無視して即座に眠ってしまった。

ちなみに余談だが、自分が寝た後しばらくして復活した三人が自分達の様子を見てテンションをあげていたところ、ムー君がキレて三人を血祭りにあげたというのはまた別の話である。

ちなみに、その三人は酒に酔ってやった、酒が悪いと言い訳したが、聞き入れて貰えずに三人そろってムー君に螺旋丸を食らわされたそ

ーな。

……この日から、ムー君が寝てる時はみんな静かに過ごすようになりました。

３４回目＊マッタリ紀行・耳かきと神様（後書き）

……ナルミ君の耳かき技術を持つ人、あれ実在しますから。
あそこまでいかないけど、マジで喘ぎ声出て果てましたから、私。

はい、じゃあこのマッタリ紀行シリーズは、主にマッタリ（グダグダ）した時にたまに出てきますはずです。
おもに移動中です。

あと、あからさますぎるあれは見逃して下さい。
うまく隠すことが出来なかったのです

しかし……最近リム副隊長が汚れ役になってるきがするなぁ……。

ではまた次回ノシ

３５回目＊狩るぞ街クエ！近衛隊！（前書き）

遅れてすいません

35回目＊狩るぞ街クエ！近衛隊！

出発して5日目の今日の昼、自分達はとうとう最初の街に到着した。
街はそれなりに高い塀に囲まれ、馬車がいくつか行き来して活気がありげな賑やかそうな街である。

「おー、なんか活気がありげな街だね」

それを見て、チャリをこぎながらなんとなしに呟いた自分に向かい、テトラ君が窓から顔を出して街について教えてくれた。

「あの街はメレンパっていう街で、湖での漁業で発展した街です。漁業が主な収入源ですが、最近は観光による収入も増えていると聞きますね。活気があるのもそのためです。あと、なにげに近くにある森でもおいしいものがとれます」

「はー、じゃあ食事は期待して大丈夫だね？」

「はい、ガモの包み焼きがおすすめです」

ガモがなにかは知らないが、おいしいもんが食べられるなら大歓迎。
自分はテンションをアゲアゲにして、噂のガモを食べるため、ウキウキしながらチャリを漕いでいた。

……後にある災難など、全く気づく事もせず。

＊＊＊

「ふむ……マグロとカニとイワシと鶏とイクラをかけてアワビで割った後に三乗して4で割ったような味だったな、ガモ」

「……どんな味ですか？」

「とりあえず、初体験の新しい味だという事さ」

自分達は、街についたら早速宿をとり、お昼ご飯がてらガモの包み焼きをみんなで食べる事にした。

ちなみにガモとは、某漫画に出るザリガニフィッシュを黄色にして角生やさせた感じである。
あんなでかくはないが。

そしてそれをなんかの葉っぱで何重にも包んだ後にかまどにポイッとしたのがガモの包み焼きだ。

今までではじめて食べる味だが、おいしかったので問題ない。

そして、少し食後の休憩を取った後、自分達は食堂を出て自由時間と相まった。
つっても、近衛隊員であるため一部はエリザに張り付いていなければならないのだが……

「よし！じゃあミミリィ！シルバ！買い物にいくぞ！！」

「「おー！！」」

やはりあれどもエリザは一人の女の子、という訳で護衛は彼女達と

いうことになったのだ。

ちなみに、シルバちゃんからは

『ナルミさんには今晩宿に戻ってから二人きりで私の服を見せてあげますから、ついてきたらダメですよ』

と釘を刺されてしまった。

女性の買い物なぞ、男衆には苦痛なだけでついていくなんて……あ、荷物持ちにムー君がひきずられてった。

……ご愁傷様。

……まぁ、大丈夫でしょう。

ミミリィ隊長のレーザーの前にはみんな無力に散る運命だ。

最終エリザはゴッドフィンガーで身を守れるし。

ちなみに言うと、エリザ達は皆、いつもの服ではなく“それなりに上等な旅行服”を着て軽く変装している。

あのままいては、エリザが姫だとすぐにばれ、狙ってくださいといってるようなもんだからだ。近衛隊員も近衛隊員で近衛隊員らしい服を着てエリザを守っているとすぐにばれるので、なるたけ地味になっている。

まぁここはいいが……問題は自分だ。

自分は眼と髪の色合いがこの世界にはないモノな上、なまじ有名になったせいでエリザとは別の意味で大変なのだ。

まずは髪。
髪を隠すために自分は友人が家に忘れてった赤いカチューシャをとりつけ、冬用のニット帽をかぶり、リム副隊長から借りたフード付きマントを深くかぶる事にした。

そして眼。
これはもうどうしようもない。
前回みたくグラサンっ……といきたい所だったのだが、前回とは違いミミリィ隊長にそんなものはこの国にはない、と言われたので断念したのだ。

で、取った方法はというと……ザトーってかエディみたいな目に黒い布をつけてしまうあれである。

別に布しても透視すりゃあ問題ないが、さすがに周りには盲目だと思われてかいろいろと視線が痛い。

……学校指定の赤ジャージをマントの下に着込んでいるのも原因かもしれんが。

だって！みんなもう慣れすぎてここにくるまで違和感に気がついてくんなかなかったんだもん！！

まぁ言い訳はどーでもいいが、とにかく別の意味で目立つのだ。

普通ニット帽しながらフードかぶった盲目の赤ジャーとか、注目すんなって方が無理な話だべ。

「てな訳で、自分はこのまま部屋に引きこもる事にする」

「待ってください先生」

チッ！

自分は部屋に戻って久しぶり無限回廊をやろうと考えていたのだが、それは残った三人に止められてしまった。

奴らは自分の右腕、肩、左手首をそれぞれ掴んで自分を拘束したのである。

「……なに？」

嫌な予感しかしないが、一応聞いてやる。

すると、リム副隊長がずずいっと顔を近づけてきてこう言った。

「旅にはお金が必要です。なので少しでも稼ぐために役所へ生きましょう」

は？

ああ、考えようによっては兵士も公務員だもんね。

働かせてくれるはず……な訳ねーだろ！！

そもそも、役所が自分の想像してるのとは絶対違うだろ！！

「行ってどうする！」

「依頼を受けます。そして報酬を貰います」

「勝手にやっとれ！自分は無限回廊をやるんだ！！」

「ダメです。それじゃあ面白いモノが見れないじゃないですか」

「テメッ！やっぱりそーゆー算段かよ！！」

「ちなみに力ずくでここから逃げると、その格好からさらに厄介な事に巻き込まれるかもしれませんよ」

……悪魔め。

自分はリム副隊長にトドメを刺され、色んな人たちに見つめられながら3人に役所までひきずられてったのであった。

……グスン。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊≪☆

で、来たわけですよ役所。

そしたらばそこはまさにギルドな所で、やたらごろつきなやつらがワシワシいた。

中にはマトモそーな奴やら、きれーなねーちゃんやらもいるが、傷だらけマッチョやいかついオヤジ、天空城を目指す海賊みたいなおばさんやらもいて超怖い。

でも、そんな集団の中でひときわ異彩の雰囲気を醸し出してる人物がいる。

それは……

「……やっぱり先生、着替えてきた方がよかったかも」

まぁ、自分ですはい。
理由は……言わんでもいいべ？

とにかく自分は奇妙奇天烈奇々怪々摩訶不思議な格好をして、スゥ君と共に副隊長達が依頼を持ってくるのを待っている。
自分の半径3メートルの範囲は誰も入らない自分ゾーンを展開しながら。

……はぁ。

と、自分が一人鬱々してるとリム副隊長とテトラ君が、一枚の紙を持ってやってきた。

「じゃあ先生、受付に生きましょう」

そう言って彼は自分を再びひきずりながら受付まで嬉々としてかけだした。

そして受付、ギルドな受付。
リム副隊長が紙を出して、受付嬢と二言三言話をすると、彼女はこちらにむかい

「はい、では証明書をお見せ下さい」

……は？
なにそれ、学生証じゃだめ？

おいこら三人、なに普通に出してんだ？
なに自分が間違い？
この世界ではこれが普通なん？

「先生？」

自分がいろいろ考えてると、テトラ君が自分に気づき、話しかけてきた。

「……身分証、ないんですか？」

「はっ、なにそれおいしいの？」

自分がそうヤケクソ気味に言うと、彼は“アウチッ！”と言い出しそうに額に手をあて、周りからは明らかに馬鹿にした笑い声がクスクスと。

「まぁまぁテトラ、落ち着け。すいませんがこの方の証明書を作っていただけませんか？あ、お代ははい」

そうリム副隊長がいいながらお金を出すと、受付嬢は足元からなんか台座付きな丸い石を取り出した。

「わかりました。では、こちらに手を置いて下さい」

自分は彼女に従い、石に手を当てると彼女は台座の反対にあったボタンを押した。
すると台座からうぃーんと紙というか名刺みたいなのが出てきた。
その紙を彼女は取り、自分に手渡してこういった。

「では、ここにお名前をご記入下さい」

言われた通りにに名前を記入すると、彼女は紙を再びとって、確認するように眺めはじめ、そして

「……なにこの字。というか魔力が……」

ああ、そーゆーね。
それは仕方ないじゃんか、文字勉強しとらんし、魔力ないし

「大丈夫、自分、魔力がかぎりなく少ないんだ。名前もちょい遠いとこから来たからね」

嘘も方便、なんてね。

「……そうですか。ではっと、はい、登録完了です」

彼女は釈然としてない顔をしながら、判子をポンと紙に押してた登録を完了した。
そして役所についての説明を

「では、説明を「あぁ、必要ないよ」……はぁ？」

しようとした所でリム副隊長に止められた。

ナゼニ？

「どーせこの方なら最下層の１４級でも１日あれば一番上の特級になることも造作もないし、説明いらないよ」

おい、周りが超睨んでんぞ。

「はぁ……あなたはなにを言っているんですか？現在全世界に特級は5名しかいないんですよ？なのに1日でって……。そもそも、このあなたたちが受ける依頼も、本来準1級くらいの難易度ですよ？初心者連れていくようなモノじゃあないですよ。自己責任ですから、止めはしませんが」

まぁ、これが普通の反応やわな。

だが、こちらのツレがそれに対して普通の反応をしない訳で

「ふふふふふ……」

「……なに笑ってるんですか？」

「いえ……。スゥ」

「はい」

リム副隊長の声に返事をしながら、スゥ君は自分の顔をいきなり受付嬢に近づけて

「ちょっ！なにするんですか！！」

「見たらわかります。えい！！」

目隠しを下にずらしはじめた。

そして目が合う自分と受付嬢。

あっ！

てめっ！！

「目隠しを取ったからなんだっ…て…いう、ん……え？」

すると彼女はみるみるうちに顔を青くしてカタカタ震えはじめた。

はっはっは、展開読めるぜ、これ。

「ま…さかそんな……え？ほん、もの？」

「まさしく御本人ですよ。髪も見ます？」

そう言いながらスゥ君は自分のニット帽を軽く持ち上げ、髪の生え際を少しだけ見せはじめた。

すっとどうだ、彼女は顔を今度は白くしながら、マグニチュード９くらいの揺れをおこしている。

「も、もももうしわけあ、ありませんでした！かか数々の非礼心よりお詫び申し上げます！！ま、まさかあああなた様がそんな！な、何でもしますから命だけは！どうかお許し下さい！どうか！！」

ほら、泣きながらカウンターの向こうで土下座しはじめた。

なぁ、あんだけで殺すとか自分どんだけ非道な噂がたってんの？

なぁ、自分悪い事したか？

てゆーか周りの人たちは自分の眼やら髪やらが見えなかったらしく、全く意味がわからずに自分たちを見つめてる。
全くどんな羞恥プレイよ。

「いいから、きにしとらんから泣くなっての」

自分は彼女を起きあがらせようと手を伸ばすと

「ひぃっ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！な、何でもしますから！だから食べないで下さい！お願いします！来月結婚するんです！お願いします！お願いします！！」

超怯えられた。

「くわねぇよ。もう……」

てかなに、自分カニバリスターか？
人肉大好きか？

どこでそんな噂が……。

「……予想以上の反応だね。罪悪感がのこる」

「……やりすぎましたね、さすがに」

「……ごめんなさい先生、調子のりすぎました」

本当にね、ざけんな。

「……とりあえず、あとで落ち着いた頃にまた謝ろう。今は……依

頼、片づけよか。じゃあ、また後で。本当にきにしとらんから、な。おちつこ？」

「は、はいっ！行ってらっしゃいませ！！」

……もう、突っ込まんぞ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊…☆

……まぁ、勢いで自分たちは街から出て、依頼の目的地だとスゥ君が言う森の目の前までやってきた。
そしてここで力が抜ける一言を自分は発言することにした。

「なぁ、依頼内容、なに？」

「ここにきてそれですか？」

何が悪い。
勢いのままに来てしまったんだ、しゃーないやろ。

スゥ君の言葉に軽くムッとしてると、テトラ君が丁寧に答えてくれた。

「依頼内容は、森の奥地に住むクリームという竜を退治してくれというモノです。……簡単に説明すると、クリームとは、凶暴な炎を吐く銀色の飛竜です。数が少ない上、やたらに強いので一頭でも倒すとかなりのお金と名誉を得られます。まぁ危機管理能力が高いのか、だいたいが倒す前に逃げられます」

……レウス希少種？
いやレイアだっけ？

どっちでもいいや。

つかクリームって、んな強そうな気がカケラもしないんだが。
むしろ甘くておいしくいただけそうな気しかしない。

「ちなみにほっとくと森を荒らすんですが、なにせ森の最奥にすんでる上、街に被害が全くないので誰も倒せずに放置しても誰も困らないので、討伐隊もだされずに三年半も放置されてるそうです」

……まて、なんつった？

「森の最奥？」

「はい、徒歩で片道４日かかるらしいです」

「んなとこいくか！！」

馬鹿だろこいつら。
合計８日とか、どんな足止めよ。

「それは大丈夫です。荷物は全部先生が持っててくれてますので、実質服と武器だけで、とても身軽です。なので空を飛ぶという選択肢がでてきまし」

ああ、なる。
空を飛んだらまぁ障害物もないかんな。

まぁ、できたらだが。

「アホか。自分とテトラ君ならまだ大丈夫だが、リム副隊長とスゥ君は飛べないやんか。つか、歩きで４日なら飛んでも１日くらいかかるべさ」

「この前先生が飛竜を運んだみたいにしてくれたら大丈夫です」

……なぁ、どこまで他力本願？

つか、これ目的が見えない。

「なぁ、君たちさ、何がしたいん？役所のあれを見たかっただけとかいわんよな？」

自分がそうみんなに聞くと、リム副隊長が心底呆れたように

「……本気で言ってます？さっきもいいましたよ？」

とか言ってきた。

なんね、それ。

「お金ですよ、お金」

「はあ？」

「姫様に先生、そして近衛隊をあわせて計八名。気を抜けばすぐに手持ちのお金はなくなります。なら稼げる時にでっかく稼がないと、なにも出来ませんよ？そんな中で姫様達は女の子らしく買い物とか、

はっ、旅を舐めすぎですよ。姫様だから逆らえませんがね。なら女衆が遊んでる間、僕たちも先生が竜を倒す様を見て楽しんでも罰は当たらないんじゃないですか？」

……どうした？

リム副隊長の豹変ぶりに戸惑っていると、後ろからスゥ君が

「先生、副隊長はご両親が旅の商人だったので、その手の話にはうるさくて……」

あぁ、そういう。

難儀やのー。

自分が納得ってかちょいかわいそうな目でリム副隊長をみてると、彼はすぐに顔をもとにもどし

「まぁでも、これが成功したら僕たちの給料の二年分のお金が手に入ります。気合いをいれていきましょう」

そう言ってにこやかに微笑みかけてきた。

自分、もうこの人がわからん。

＊＊＊

ちなみに出発してから現在約３０分。
つまり超速で飛んだのが原因でみんなしてぐったりしてるという事。
そしてぐったりして静かな彼らを見て、面白い事に気がついた。
彼らの装備が、凄いのだ。
リム副隊長が双剣、テトラ君が弓、そしてスゥ君が刀、つまり太刀なのだ。
これで狩るのが飛竜とか、もはやモンハンそのまんま。
なので自分はそれにあわせてポケットから
「……先生、何やってんですか？」
「武器出してんの」
ナルガな笛を取り出した。
会心率が鬼畜な狩猟笛。
最近まで存在忘れてたけど。
それを不思議そーに眺める三人は、変な顔をしながら呟いた。
「……それが、噂の武器ですか」
「変な形だね」
「強いんですか？」

まぁ、気持ちわかるがな？

「強いよ、レア度１０だもん」

実際は会心率しか取り柄ないんだがね。

微妙に誇らしげに言うと、リム副隊長が面白いものを見るような顔をしながら

「まあ、いいてすがね。ですが最初は手を出さないで下さいね。僕たちもどれくらい強くなったか試してみたいので」

「ああ、別にそれはいいよ？むしろやっちゃって」

面倒事は部下に丸投げ、最低上司の鏡です。

なにが悪い。

……性格が悪いですね、はい。

とまぁ自分が勝手に自己嫌悪に陥っていると、したからガサカザと音がして、激しい呼吸音ってかうなり声が聞こえてきた。

「しっ！先生、副隊長、きましたクリームです」

スゥ君がそう言いながら太刀を構えると、二人もそれぞれの武器を構えて臨戦態勢を取り始めた。

いつものおふざけトリオからは想像できないような真剣な顔をしながら、彼らは音がする方を凝視している。

それにつられて自分も神経を研ぎ澄まし、そっちの方向を凝視する。
そこにいたのは……
「なにあれ超厄い……」
想像とは全く別の生き物だった。
顔はティラノザウルスで胴がゾウ、それにコウモリみたいな翼が前足と一体化しながらついていて、後ろ足が犬で尻尾だけはティガレックス、そんなキメラな生き物だ。
それが全身真っ白に近い銀色なのだ。
通じないかもしれないが、マジでそんな生き物なのだ。
もはやこれは厄いとしか言えない。
道化師が幻想入りするより確実に厄い。
そんな厄々最前線な生き物に向かい、テトラ君が
「いきますよぉ……はあっ！！」
ガスッ！！
「ギュレェェェェェェ！！」
雷を纏った矢を放った。
そしてそれに続くようにスゥ君が、背中に矢が刺さって暴れてるクリームの上まで一気に跳び

「うるぅぁぁ！！」

不細工な声を出しながら、右の翼に体重を乗っけた一突き放ち、見事に翼膜の一部に穴を開けた。

そのままスゥ君は地上に降りると、自らの存在を誇示するようにクリームの左足を斬りつけ、クリームの気を自らに向ける。
そしてクリームの吐く、ブレス状の炎を跳びよけ、再びクリームの真上にやってきた。

空中で身動きが取れないところを狙うように、クリームはスゥ君の方を即座に向き、再びブレスを吐こうと口をひらいた、が

「ざん、ねんっ！！」

「目玉もらいっ！！」

真下から今まで隠れていたリム副隊長が飛び出し、上を向いて伸びきった首筋に双剣を鮮やかなフォームで深々と突き刺し、同時に右目をテトラ君が一寸の狂いもなく見事に射抜く。
そして最後にスゥ君が

「でりゃぁぁぁぁぁ！！」

ざしゅ！！

「ぐるぶぁぁぁぁぁ！！」

再びさっきと同じところを斬りつけた。

だが、さすがはクリーム、まだ死んでなかったようで傷ついた翼に鞭うちながら空へ飛び立ち、にげていった。
テトラ君が頑張って矢を放ったが、まあ遠すぎてあたらないくらいににげてしまった訳ですわ。

なんだ、やっぱりクリーム弱いやん。

自分がそう思いながら小さくなってくクリームを見ていると、隣にいたテトラ君が下に降りてったので、自分もそれに続いて飛び降りる。
そこには、スゥ君の耳をワシャワシャしてるリム副隊長の姿が……

「……スゥ！翼ちゃんと壊してよ！！」

「はわわわわ！ごめんなさい副隊ちょひうっ！！」

……

……落ち着け自分、あれは男だ。
自分はノーマル、ノーマルノーマル普通普通。

けしてあのスゥ君にキュンとなんかしていない。

「あー、まあ手応えはあったから大丈夫でしょう。正直ここまでいけるとは思ってもいませんでしたからね」

「そ、そうなん？結構圧倒的な気がしたんだが」

自分は思考を転換させるため、慌てテトラ君の言葉にくいつく。
すると彼は、真面目な顔して

「はい、普通ならあんな一方的には出来ません、というか一方的にやられます。魔力で鋭さを増さなければ刺さりもしませんが、刺さるように魔力を研ぎ澄ましたなら、だいたいは三本で魔力が底をつきます。剣士も同じで二、三分くらいしかマトモにクリームには刺さりもしません。ですが先生の特訓のおかげでまだあと１２本はいけるくらい魔力がのこっています」

……ふーん。

よくわからん。

「つまりそれ強いん？」

「強いんです。実際最近はこうやって先生以外と戦うのは久しぶりですからここまで成長してるとは思ってもいませんでしたが、かなりの成長ぶりです。これでやっと５級から一気に準３級まで……」

あ、今更な疑問。

「な、その準３級やら特級やらってなに？」

「役所が決める冒険者の強さです。高ければ個人的にでかい依頼がきたりしますし、何より周りから見られる目がちがいます。ちなみに、１４級から特級まで、準４、３、２、１級と準特級含む全２０の位があり、一般には１０級以下が初級、以上からが一人前である中級、準３級から１級は上級と呼ばれます。そして特級、準特級は世界に数える程しかいませんのでそのまま特級と呼ばれます」

はー、なんかめんどくさ……あん？

「あーまて、じゃあさっき受付で言ってた会話、やばくね？」

「あ、大丈夫です。先生なら帰ったらもう特級になってると思いますよ？」

「いやちがくて……」

自分が本気で困っていると、リム副隊長がやれやれという感じにこっちを見て、話に入ってきた。

「……先生、今の特級の方もそうそう容易く魔獣を真っ二つにはできませんよ？それをやってのけた先生が特級にならないはずないじゃないですか」

「……はぁ、もういい。肩書きが更に一つ増えたところでもう変わらんし。それよりちゃかちゃかあいつ倒して帰ろ。もう夕方になるよ」

そう自分が言うと、彼らは自分を見た後、クリームが消えた方向み向いて……なにさ。

「……ここまでやっといてなんですが、先生、トドメお願いしてもいいですか？流石に強くなったと言っても、逃げ出したクリームを今日中にはちょっと僕たちには……」

「えー、やだなぁ」

「今日中に帰らないと、シルバが「よし、ちゃっちゃと終わらそう」……これに関しては、本当にすいません」

いや、そこまで謝られてもねリム副隊長。
自分も命は惜しい訳ですよ。

＊＊＊

ウンターヒットだったので、自分は飛び散った血液やら肉片やら脳髄やらを頭からかぶる事に相まった。

で、ここで問題。

今までぬくぬく現代日本に住んでたイマドキの青年が、こんなゲームとかみたいなヴァーチャルグロテスクでなく、今みたいなリアルグロテスクを経験したらどうなるでしょうか？

正解・吐いたり気分悪くなったりのバッドステータスを引き起こす。

従って自分も腰抜かして吐いてむせて気分悪くなってと散々な時間をしばらく過ごす事になってしまった。

一応収まったが、再びクリームをみると再発するってか精神的に自分死ぬ。

「……まぁ、確かに今更ですがね。それより気分はどうですか？」

そう言いながら、リム副隊長が自分に手を差し伸べてくれたので、その手を取って起き上がりながら答えてやる。

「うん、だいぶよくなった。ありがとう」

「そうですか。……クリームの血は、飲むとすぐに死ぬ強力な毒と聞いていたのですが……気分悪くなるだけとはやはり規格外ですね。……ちなみに、ほっといた理由は解毒薬がないだけで楽しんでた訳ではありませんから、見損なわないでください」

「……そーゆーことにしときますよ」

つか、吐く理由が違うから。

……しかし、いまだに残るあの柔らかなモノを叩き潰す感触、断末魔の悲鳴、真っ赤になる景色。

ゲームではあんな簡単に殺したりたりしているのに、やはり現実とゲームは違う。

ゲームは所詮プログラム、敵を殺してもすぐに湧いてくる。

だが現実は違う、死んだら死体が残るだけ。

……やめよ。

これ以上ガタガタ考えたら、それこそ薄っぺらなモノになってしまう。

なんだかんだ言葉を重ねても、自分の逃げ道をつくって目を背けるだけだ。

クリームを殺したのには変わりない。

全てはお金のため、食事のため生きるため。

割り切れる訳じゃないけど、向き合わないといけない事だ。

これからこれ以上に何かを殺さなければならない時のため。

「……先生？どうしたんですか？」

「あ、いや何でもない。さ、帰ろうか」

自分はそう言って、彼らを小さくして学生カバンに彼らが入ってるうちにクリームの死骸を小さくし、ビニール袋に入れ口を縛ってカ

バンに入れた。

「……うえっぷ」

小さくなっても気持ち悪い。
自分は再び吐きそうになりながら、カバンのチャックを締め、すっかり星が見えるようになった空へと飛んだ。

いまだに頭がする割り切れという命令を受け付けられずにいる自分の心。
そんなちっぽけで脆弱な自分の存在を、さらに不安にさせるように空では星が輝いている。

そんな不安の中、まだこの不安を覚えている自分に安堵する自分がいる。

人間は慣れる生き物。
こんな事には慣れたくないが、いずれ慣れてしまうだろう。

ならせめて、慣れる前のこの気持ちを忘れないようにしよう。
まだ完全に立ち直りきれていない心に、自分はそう決心した。

とまぁカッコつけて無理して気取ってみた訳ですがね!?

「うれぇぇぇ」

やっぱり気持ち悪い訳ですわ。
そんな簡単に立ち直れない訳ですわ。

かなり下品な空襲を森に落っことした訳ですよ。

「……先生、大丈夫ですか？」

「ダメ、気持ち悪い。着替えたい」

服装が服装だけに、体自体にはあんまり血は付かなかったのだが、着ている服に多大な血液が付着していて、それが放つ獣臭やらが自分のセンチメンタルな心をチクチクいじめてくる訳で……

「だめ、考えたらまた……おべぇ……」

もうね、なんというか絞まらないというかなんというか……。

完全な三枚目キャラよね、自分……ははは、えっぷ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ ☆

その後の話。

自分達はいったん着替えた後、一時間くらいかけて街へと戻った。

そして、街の前で一度降り、三人とクリームをもとの大きさに……

うへ、また見てしまった。

とりあえず戻し、自分は三人に

「じゃ、あとよろしく」

そう言って逃げ出した。

だってもう触りたくないし、そろそろ癒やしが欲しいのだ。

てか、まず早く帰らねばシルバちゃんがキレるやもしれん。

そう思い、自分は宿まで逃げる事にしたのである。

「あ！ちょ先生！……まぁ、シルバがアレだししかたないか」

理解を示してくれて、助かるよ。

ともあれ、全力ダッシュで宿まで来ても、もう既に遅いっていうか学校ある日に１０時起きするのと同じような訳で。

「……ナルミさん？どこいってたんですか？」

シルバちゃんがご立腹な訳ですわ。

宿の前にジョジョ立ちみたく不安定に立っていた彼女は、自分を確認するやいなや自分に駆け寄ってきた。

……これは、ヤバい！

今振り返ってみると、今日1日の流れ、ガルクさんのあの話しにそっくりだ！

となると次に来るのは……ヤダ、考えたくない。

「ご、ごめん！ちょっと時間がかかりすぎた！」

即座に謝罪、だがそれで収まるシルバちゃんではなく、彼女は歩みを止めずに自分の手をつかみ……れれれ？

「もう、心配したんですからね！夜になっても帰ってこなくて」

「……そんだけ？」

あ、つい口が。

だがそんな自分の言葉にも、彼女はきっちり

「……それだけじゃないですが、ナルミさんとの約束がありますので。……不安、でした」

そうきちんとシルバちゃんはうるうるした上目使いで答えてくれた。

……キュン。

なにこのかわいい生き物。

自分が言うのもなんだが、健気だ。

スイッチ入ったらアレだが、普通はこんないい娘なんだ。

自分はさっきまで精神的に追い込まれていたのもあり、そのまま彼女を引っ張って抱きかかえた。

世に言うお姫様だっこだ。

今、自分はこのかわいい生き物から離れたくない。

「はわっ！？な、なんですかいきなり！？」

「いや、今気持ちが荒んでて、シルバちゃんで癒やされようと。ダメ？今日だけだから」

「……うぅ、ダメじゃないですが」

彼女は顔を真っ赤にしながら、もじもじとうつむいてしまった。
そして消え入るような声で

「ナルミさんから……その、人前でこうやってやられるなんて思ってなくて……」

……人前、ね。
すっかり忘れてた。

周りを見ると、流石に昼間程ではないがチラチラこっちを見てる通行人が数人いたり、壁際で重なるように倒れてる男達がいたり……ん？

「シルバちゃん、あれはなに？」

自分は男達をアゴで差しながら、シルバちゃんに聞くと、彼女はさも当然という感じに

「私に軟派してきた方々です。夕方からずっとナルミさんを待っていて、その間に言い寄られました。あ、大丈夫ですよ、ナルミさん。誰にも私に触らせませんでしたから」

そう言って、眼から“誉めて”というメッセージを乗せた視線を放出しだした。

「……そ、そう。えらかったね」

「えへへ」

とりあえず、心から同情しよう。
ナンパ師達よ、相手が悪かった。

「じゃ、戻ろうか」

「はい！！」

こうして、自分がまた一歩新たに成長した今日という日が終了したのであった～。

とかなれば安心だったのにね

食堂にて、シルバちゃんと夕食……といっても今の自分はサラダしか食えんが、とにかくご飯食べるために食堂に行ったのよ。
したっけそこには

「……ずいぶん楽しそうですね、先生」

酒を呑んでぐったりしてるムー君がいた。

「……俺は一人荷物持ちを三時間、その間に先生達は役所の依頼をこなしてたんですよね。本当は俺も行きたかったのに、ぐすっ……どうせ俺は農民の出、どこに行っても下っ端ですよ。ずずっ…どこにいても仲間外れ、口数が少ないだけで感情が無いわけじゃないのに、性格が暗い訳じゃないのに……俺なんか、どうせ、どうせ…わぁーん！」

……泣いた。

え、まさかのこいつ泣き上戸！？

これは関わってはいけない。

自分はそそくさとその場を離れようと……

ガシッ！

「俺の話し、聞いて下さい」

その後自分は、シルバちゃんを抱えながらムー君が潰れるまで彼の愚痴を聞くハメになったのである。

とりあえず、”……ナルミさんとの二人きりの時間が”と呟きながら恨めしい目でムー君を睨んでいた彼女から、どうやって彼を守るか考えなければいけなくなってしまった。

……はぁ。

35回目＊狩るぞ街クエ！近衛隊！（後書き）

はいこんにちは、恒例の言い訳アワーがやってまいりました。

まぁはい、遅れた理由は文章にまとめらんなかったのが原因です

プロット総崩れ、日本語崩壊になってしまったんでして、没原稿（？）がなんと４つも

ちなみその４つを紹介すると

・ムゥ君の故郷の街でムゥ君の親父さん逝去。だがオバケになって出現。未練を解消するためにクエスト出発
・ムゥ君の故郷の街でバーサーカーなムゥ君の弟に巻き込まれクエスト出発
・ムゥ君-以下略-の妹に-以下略-
・湖の街にて水竜と湖の真ん中で頂上決戦

の４つです

あわせて二万文字いってます。

泣きたくなりました。

つまり何がいーたいかというと、ムゥ君にスポットあてようとして失敗した訳ですよ

しかも最後アレだし、ごむんムゥ君。

あと、シルバちゃんとラブらせたかったのもありますね（笑）

とにかく、また一歩成長したナルミ君たちや、お馬鹿な南師をこれからもよろしくお願いいたします

では、また次回ノシ

３６回目＊噂が千里を一人旅（前書き）

不完全燃焼ってか納得いく出来にならない。

でもいくらなんでも待たせすぎなので一番いい出来なのを投下、多分不発弾。

ちなみにこいつは三代目

36回目＊噂が千里を一人旅

クエストを完了した次の日、自分は朝起きて寝ぼけた吸血鬼の朝ご飯になった後に朝ご飯を食べようとベッドから立ち上がった。
後ろで睡魔に負けた少女が崩れ落ちるのを感じながら立ち上がったのだ。

立ち上がったのだが、そこにはすでに

「ナルミ、もう昼だぞ……もむもむ」

「そうですよ、さすがに寝過ぎで……あ！副隊長それ僕の！！」

「あ、ごめん。ミミリィのと普通に間違えた」

「他人のものを取ろうとしなっ……む、んぐっ……いきなり口に突っ込まないで！！」

「いきなりじゃなければいいの？」

「あ、いや……あの……」

「……あまりベタベタしないで下さい、腹立ちます。……あー、声が頭に……つ」

全員集合の食卓（せんじょう）と化していた。

いや、言うほど戦場じゃなあけどね？

「……なんでみんなここにいるん？」

とりあえずな疑問。

なぜみんな食堂に行かず、わざわざここで朝ご飯を……、いや昼ご飯を食べているのか。

その疑問に答えてくれたのは、一人黙々とでっかいエビみたいなのをかじってたテトラ君であった。

「まぁ、あれです。なんか面倒くさい事になったからです」

「面倒くさい事？」

「はい、そうです。とりあえず先生とシルバが、街中から狙われています」

……は？

「ごめ、意味わかんない。詳細を」

「まず先生……というか僕たちも一緒になんですが、クリームをあんな短時間で、しかも通常有り得ない殺し方で狩って来たので。要するに、目立ちすぎて他の冒険者からの嫉妬やらなんやらがって事です。純粋に手合わせしたいという方もおりますが、ぶっちゃけ迷惑です」

あー、まぁ、うんわかるよーなわからんよーな。

……やべ、また思い出してきたよクリーム。

別の話題別の話題。

「……あー、で、シルバちゃんについては？」

「逆恨みですね。昨日シルバが伸した奴らがあんまりタチのよろしくない奴らで。まぁ要するに、この街のゴロツキ共の中心的な奴も一緒に潰した事からの復讐です。ついでに、なぜかシルバと先生が恋人同士だと奴らは知っていて、先生も一緒に狙っています」

いや、原因はわかるけどね？

きっとお姫様抱っこを見られたのだろう。

だがね……うっわぁ、なにそれ。

まさかの事態だよこれ。

めんどくせぇ。

……れ？

しかし……。

「ななな、一つ質問」

「はい、何でしょう？」

「自分あんな目立つ格好してたのに、なんでここがバレずに自分、昼まで寝てられたん？すぐに秒速でバレる気がすんだが」

普通バレるよね。

なんたって、着替えたとはいえジャージにマントに目隠しだよ？印象に残らん方がおかしいわ。

だが、そんな疑問には意外に簡単な答えが帰ってきた。

「あ、それなら僕たちがみんな潰しましたよ。言ったじゃないですか、先生だけでなく、僕たちも狙われてるって」

……いやいやいや。

「でもそれは……」

「勝てば正義です。まぁ奴らも懲りる様子もなく、外で隠れながらこちらを伺っています。丸見えですが」

そう言われて窓に目を向けると、なるほど納得柄の悪い奴らがゴロゴロいる。

「まぁとりあえずご飯です。その後、役所から報酬を貰ってすぐに旅に出ましょう。あまりここにいてもいいことはなさげですし、念のため全員で固まって行動しよう、という事になりました」

「大いに賛成する」

こうして今日の自分達の方針きまったのであ……

「ナールーミーさん！かぷっ……んんっ、ちう……ゴクン」

……とりあえず、きちんと覚醒しようかシルバちゃん。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊★☆

その後自分は、きっちりご飯を食べてからあの服装に着替え、みんなで一緒に団体行動しながら役所に入った。

ちなみに服装については、血がべっとりな昨日のあれとは違い、フード付きコートに普通の服装、そしてドクロな黒いニット帽である。

そんな格好で自分は、なんとか役所に到着したのだ。

まぁ来る途中に、色々あったのだが。

「で、結局合計で何人抜きになったんだ？」

「僕は４です」

「僕は、７人ですよ」

「俺は６ですね」

「……３です。先生は？」

「……１４。後半、北斗有情断迅拳を本気で出してやろうかと真剣に考えた」

おわかりだろうか。

まぁ、不意打ち闇討ち狙撃に暗殺、様々な方法で自分達は襲われた

のだ。

最初は緩やかな不意打ちから、だんだんエスカレートしていって最終的には魔法合戦さ。

まぁ、自分のマススパークにかなうやつなんかいないんだぜ、ふん！

……あれ、なんか、眼からマックシェイクが。

いや、まぁ普通に決闘挑んできた奴もいるよ？

正々堂々、普通にやってきた奴らも。

でもだいたいが“魔王様に挑む前にこの四天王を倒して行け！！”的なノリの近衛隊員（男子）達により瞬殺されるのだ。

そりゃ普通に生きてたら、敵がリアルに目の前で消えたり弾幕張られたりする事なんかないだろうから、負けて当然っちゃ当然なんだがね。

とまぁこんな感じに、最後は奴ら……というか不意打ちはだいたい不良っぽい奴らだけど、そいつらはもはや意地になって自分達に襲ってきたりなんだりと、宿から役所までの道中で色々と大変だったのだ。

で、なんやかんやでとうとう役所までこぎ着けた自分達は、入った途端に色々めんどくせぇ事になってしまったのだ。

正確には、入った途端に役所の方に捕まり、みんなして奥の方に拉致られた訳である。

特別扱いされてると思った周りの方々の視線がどキツかった。

そして、案内された先にいたのはなんか角生えた冴えないおっさんと昨日の受付嬢、そして……牛の顔した2メートルはあろうかという怪物がスカートをはいて立っていた。

さながら、牛の被り物をした剛田商店の女主人を巨大化させた上で筋肉量を2乗さしたみたいな。

うぇぇぇぇ……。

自分が吐きそうになるのをなんとかこらえていると、あちらの方から動き出してきた。

同時に、自分はビビってビクッとなった。

そんなマジびびりしている自分に向かい、彼らはみんな深々と頭を下げて、冴えないおやじが重々しく

「昨日は、うちの者が多大なご迷惑をおかけし、大変申し訳ございませんでした」

そう謝ってきた。

よく見ると、おやじ、受付嬢共に超涙眼。

つか受付嬢に至っては、マジですすり泣きながら謝っている。

……まぁ、理由はわかる。

つかそんな絶望的な顔せんでも。

「……なにがあったのか、わからないのだが」

そう言いながらエリザは自分の服を引っ張って、彼ら彼女らを指差した。

あぁ、そういや女性陣＋αはあの事をしらんのね。

しかたない、きちんと説明しましょうか。

「いや、実はね昨日……」

それからしばらく、自分達は腰を折り曲げている彼らの存在を忘れて話し込んでしまいましたとさ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＃☆

一通りはなし終え、彼らがずっと頭を下げてるのに気づいてそれを直した直後、エリザが呆れたように口を開いた。

「……なんでそんな怯えられてるんだ、お前」

「わかったら苦労せん」

実際わからんよ。

なにがなんであんなんなったのか……

「ね、なんで？」

「ひっ！？」

……怖がられた。

自分、普通に自然にナチュラルに受付嬢さんへ話しかけただけなのに……。

「その事については、私が説明いたしましょう」

そう響くのは、綺麗で澄んだ美しい女性の声。

現代日本なら、この声を使って生きていく事も可能なくらい、聞き惚れてしまいそうなまでに美しい声。

だがその発信源が……。

「ただ、内容はハセガワ様にとってあまり気持ちよいものではなく……むしろ不快になられるかもしれませんのであらかじめご了承を」

牛魔神だもんなぁ。

牛魔神さんはそれではと言った後に、こほんと咳払いをして話を始める。

「まず、ハセガワ侯爵様はこの国の英雄であり、その上新たな学問を開拓する程の知識を持った、まさに文武共に桁外れの能力をお持ちの方だと聞いております。さらにそれを鼻にもかけず、自ら教鞭をとり数多の知識を惜しげもなく分け与える非常によくできた方だとも」

「……」

なにそれどんな評価？

なに、みんなして自分を祭り上げたいの？

自分、そんな人格者じゃないよ？

そしてそんな噂なら、あんな怯えられる要素がゼロじゃん。

「さらには奥様を非常に愛し、何かあれば自らの危険も省みずに奥様護る愛妻家とも、動物の言葉を理解し会話出来る程の知識を持つとも様々な噂があります」

こらシルバちゃん、くねくねするな、照れるな赤くなるな。

「ですが」

ん？

逆接？

あ、やっと本題にはい……

「その……お、怒らないで下さいね」

いーから、怒らんから。

「続けて」

自分がそう促すと、牛魔神は言いにくそうにもじもじした後に……

うぇ。

とにかくもじもじした後に自分をまっすぐ怯えたような眼でこちらを見つめ、意を決したように一気に喋り出した。

「その……一度怒ると相手が死を懇願するまでいたぶり抜いた後に生きたまま丸飲みにするとか召還獣の餌にするとか永遠に止まらない濁流に捕らわれるとか生きたまま身体を細切れにするとかの噂が……！！ひぁっ！？ごめんなさい！！」

……自分、今どんな顔しとるんかなぁ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊）☆

「だ、大丈夫ですか？怒ってませんか？食べられませんか？」

「食べないから、落ち着け」

自分はあのあと、頑張ってその噂がガセだと彼らに教えてあげた。
所要時間、約二時間。

そして彼らの気持ちを例えるなら、パンダはかわいくて大人しくてもうラブリーな草食動物だと思ってたら、じつは本物を見ると意外に怖くて凶暴で本場中国では年に必ず何人かパンダの餌食になっているほどの雑食獣だと知った時の逆パターンね。

ちなみにパンダ、動物園で見ると模様によってはにこやかに笑ってるよーに見えるが、眼が笑ってないからね。
つねに自分らを獲物として見てるからね。

うん、自分でもなにが言いたいのか、もうワカンネ。

「うぅ……良かった……もう、だめかと……」

「ほら、もう泣かないのクルル。全くいつもは毅然としてるのに、非常時には向かない子ね」

「ごめんなさい……私のせいで班長まで……」

「いいから、部下の失敗を補うのが上司の勤めよ。だから安心なさい。ただ、慌てないようにしないとだめよ」

「……はい」

「でも、あなたはきちんと仕事が出来る。とても優秀な子なのよ、自信を持ちなさい」

「は、はんちょ～……」

ひしっ！！

……漢前な班長だ。

あれだ、上司の鏡だな。

彼女達の背景に夕日に照らされる浜辺が見える。

「もう、いいっすか？」

自分は疲れた、もう寝たい。

何が悲しくて自分はそんな鬼畜な生き物になってんだよってお話しですよ。

セブルさんと戦う理由なんか、彼がシルバちゃんをたぶらかした事で自分がキレた事になっとるし。
そもそも自分、魔獣倒しはすれどもそいつらをまるかじりなんかしとらんぞ。

もはや噂に尾ひれがつくどころか、進化して足が生えはじてるよ。

「では、此度は誠に、うちの職員がご迷惑をお掛けいたしまして、大変申し訳ございませんでした」

自分がしみじみしていて、冴えなさそうなおやじがこれまた冴えない声で自分に再び謝ってきた。
そして続けておっかなびっくりこう続けていく

「それで……本当に処罰の方はいいのですか？」

いや別に。
処罰とかしらんし。

「いや、んななぁ。びっくりしたが実害はないし、まかす」

自分がそう言うと、彼はホッと胸をなで下ろしながら息を吐いた。

「良かった……彼女が居なければ受け付けの業務が滞るので……」

「所長、素直に言ったらどうですか？息子の婚約者が無事で良かったって」

そう軽口を叩くのは牛魔神。

それに呼応するように受付嬢が真っ赤になる。

さっきの緊張はどこへやら、一気に場が和やかになってしまった。

「じゃあ先生、とっとと報酬を貰って行きましょう」

「んぁ？ああ、そうね」

今まで空気だった近衛隊とエリザ達も、場の空気を壊さないように話を打ち切り、この場は解散とあいまった。

その後、自分は所長から直接報酬を貰い、みんな仲良く部屋を後にした。

さて、ここで一つ忘れてしまっていた事がある。

街のいたるところが敵だらけだと言うことだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊『☆

「おい、お前達。ちょっと話があるんだが」

自分達が再びロビー的な所に出た途端、誰か見たことないやつに話しかけられた。

そいつは、輝くような金髪とおでこに生やした角が特徴の、剣を腰にした誠に残念なイケメンだった。

イケメンなのだが、何かが残念、なんかダメなオーラをプンプンさ

してるとにかく残念を体現するような人物なのだ。

ナルシーオーラを背後からスタンドの如く放出しているのも原因の一つかもしれない。

そうだな、例えるなら……そう、谷口！！
あのｗａｗａｗａな谷口を軸にさっきの容姿を足した後、さらに残念エッセンスを混ぜ込んだような感じだ。

そんな残念谷口……略して残口でいいや、残口が、シルバちゃんを指差しながら

「おいチビお前、昨日はよくもやってくれたな。忘れたとは言わせねぇぞ」

とか言い出した。
それに対してシルバちゃんは

「はぁ……あなた誰ですか？」

本気で知らないような顔をしながらどーでもいいような口調で投げやりに答えた。

いや、多分彼は昨日シルバちゃんに伸されたナンパ師だと思うが……。

そのナンパ師こと残口は、まさに驚愕と言った顔をして、息を荒くしながら叫びだした。

「お前！この俺を忘れたというのか！？昨日俺が話しかけただけで

お前が不意打ちしてきたんだろ！おかげで俺の美しい顔に傷がついたんだよ！落とし前つけて貰うぞ！！」

ほら、という感じに彼が指差した右頬を凝視すると、なるほど、全くわからん。

とりあえず、奴の叫びで自分達含む周りの人たち全員が引いたのはよくわかった。

そして自分は、残口のあんまりな発言におもいっくそ引いたことで、シルバちゃんの暴走を止めるのが遅れてしまった。

彼女は自分の右腕を左手でつかみながら声高らかに叫ぶのだ。

「は？自惚れるのもいい加減にしてください。あなたが美しい？アホですか頭は大丈夫ですか？私の旦那様であるこの方こそが世界で一番美しいのですよ？そもそも、この方意外の男性なんて死滅しようが絶滅しようが価値はありません。そんなそこらの害虫以下の生き物であるあなたを記憶する価値なんて、あるはずがありません。私はこの方だけの奴隷であり所有物です、そんな私がこの方意外の男性について考えるなんて、それだけでこの方への裏切りや冒涜になります。要するに、あなたはゴミ、この方が正義。ゴミであるあなたは早々に消えて下さい、邪魔です」

そう言いながら彼女は、ウィッシュの形をした右手を下におろして残口にサインをした。

多分、日本でいう親指を下にするのと同じ意味のサインだろう。

しかし……さすが壊れ系ヤンデレ族変態科電波類依存型健気種純愛派のヒロインであるシルバちゃん、やることが違う。

さすがに正体を明かさないよう“ナルミさん”から“この方”と気を使ってくれたようだが、うん、あれだ。

残口以上にみんなに引かれてる。

エリザ達なんかほら、もう他人のフリしながら隅っこに逃げてるし。

だが、それで終わらないのがシルバちゃんがシルバちゃんたるゆえん、つまりまだまだ主張します。

「そもそもこの方の……むぐっ！？んむにゅう！！」

「落ち着け、さすがに視線がもう痛い」

いい加減ブレーキかけんとこの娘はいつまでも語るだろう。

そして同時に自分にも色々な視線が……。

という訳で自分は彼女の口を手で塞ぎ、抱きかかえるように動きを封じ込めた。

そうして彼女は笑顔で自分の指をペロペロと……うぁぁ。

「やめなさいはしたない」

「だって……はぁい、わかりました」

さぁ、ここで問題です。

この流れを他人が見たら一体どうみえるのだろうか。

答えは簡単、残口を無視していちゃついているようにしか見えない。

つまり自尊心の塊、もといナルシストな当の残口は

「てめぇら俺を無視してんじゃねえ！！」

簡単にキレる訳である。

なんだ、こんな事でキレるなよ。

カルシウムとれカルシウム。

「おいお前！」

自分が残口を憐れんでいると、彼は自分を指差しながら……え、ミ
ー？

「そのチビもそうだが、お前もムカつくんだよ！新入りのクセにこの俺より目立ちやがって！！」

そう言いながら奴は自らをズビシッと親指で指差し、自信満々で更に続ける。

「そもそもクリームだって俺様に掛かれば一人で狩れるものを四人で狩ってきた程度で偉そうにしてんじゃねえよ！お前はこの俺、“雷天（らいてん）のグレイヴ”様より格下なんだよ！わかったか！？」

……なにそれキモイ。

俺様とか、真面目に言う奴いたんだ。

つか雷天って……あいたたたた。

ほら、周りみてみろ雷天のグレイヴ、みんな失笑だぞ。

もうおまえ最高だわ、だから自分に関わらんでくれ。

自分はそう思い、もう面倒になってきて適当に流そと考えていたのだが……

約一名それを許さない者がいる訳である。

「……群れるは恐怖の消えない灯り、躯の奥までくすぶる熱さ、死ねない消せない処刑の焔、罪の数だけその身を焦がせ、ダーリル・ガリマン・エンペール」

「あ？」

自分の捕まえている女の子、シルバちゃんであります。

彼女は小さく長い呪文を唱えると、直径3センチくらいの細かな火の玉が間抜けな声を出した……えと、まぁいいや残口のままで。とりあえずそれが軽く3ケタはあろうという数が残口を中心に一瞬で取り囲み

「楽には殺しませんよ？」

彼女がそう言うと、シュバッ！といった音を立てながら火の玉が残口の体に張り付いた。

すると炎は瞬く間に残口を飲み込んだのだが、それも一瞬ですぐに炎はかき消えた、だが、当の残口はと言うと

「あがあっぁぁぁぁぁ！！あつ！熱い！がだ！がらだがぎ！ぎあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

いきなり倒れてもがき苦しみはじめた。

……え？

「ウフフフフ。ナルミさんを侮辱した罪は、簡単に償える程軽くはありません。せいぜい苦しんで下さい。あは、あははははは」

……怖い。

あれだ、一番最初に闇化した時の顔を今この娘はしている。

てことは……おい！

「やばっ！あいつ死ぬん「命を護る小さな泉、生きる希望と光の雨、アヌルス・ビーグス・エル・ガルム！！」は？」

自分がなんとかしようと奴へ駆け寄ろうとした瞬間、別の誰かが残口に向け魔法を放った。

すると残口はなんかあわあわした水に包まれたと思ったら、その水がトイレよろしく残口の心臓あたりに渦を巻ながら入っていった。

そして当の残口は、苦しみから解放されたからか、床に手をつきながらハーハーと息をしている。

「……処刑魔法、それも拷問用のをつかうとは、穏やかじゃありませんね」

そう言いながら出てくるのは、いかにも魔法使い、てゆーかむしろマリサな黒装束をした銀髪ロングな女の子。

１６０くらいの身長に、キラリと光る金色の瞳。

実に綺麗、かわいらしいより綺麗と表すのが一番似合う方なのだが

……なんだ、違和感がある。

つか処刑魔法って……。

「……邪魔しないで。それともあなたもクライタイ？」

あ、ダメだこの娘。

とうとう壊れた。

目がイッてしまってるってか瞳孔開いてるし、口調がなによりおかしい。

能面みたいな顔しながらのこれは、不気味通り越して戦慄する。

どうし、いや、何をやればいいかは凄くわかるのだが……。

「……目的があるのでまだ私は死にたくありません。が、体を内から一週間かけて生きたまま燃やし尽くす、通称“臓物焦がしの刑”を会得し、さらに単独で使いこなしているあなたには非常に興味がありますね」

なにせこの観衆の中であれは……。

て、臓物焦がしの刑っておい！

物騒すぎるだろ！

「私の全てはこの方の物。興味を持たれようがあなたの出る幕はありません。消えて下さい、私はもう一度そのゴミを処刑しなければならないのです」

「ひぃっ！！」

……はぁ、グダグダ言ってらんないか。

「シルバちゃん」

「はい！！」

……なにこの笑顔と首の速さ。
こっち向くスピードが異常なんだが……。

まぁ、とりあえず

「なんです……んむっ…んぁっ…ぁ」

「……ん、落ち着け、そして少し寝なさい。お説教は頭冷やしてからね。スリープ」

「あ…ふわ……スー……スー……」

……なにをしたかは、詳しく聞くな。
あれだ、チッスだ。

ちなみに、眠らせる前にチッスした理由はきちんと存在する。
いきなり眠らせたならば、この娘は起きた時も闇化してる可能性が大きいのだ。

だから一旦こうやって気持ちをプラスにもっていってやらんといかんのだ。

ともかく、自分は腕にシルバちゃんを抱えながら

「いや、スマン。本当にツレがごめん、この通り」

2人に謝った。

残口については最初あいつが突っかかってきたのが原因だが、たからといって処刑はひどい。

これぱっかりは謝らななならんべ。

ちなみに、これ実際お説教だけで済ませれる程に事が小さい訳じゃないので、それについては後でよく考えよう。

この娘の場合、下手なお仕置きならばむしろご褒美になりそうだからよく熟考せねば。

そして謝られた2人は、まず残口が

「わ、わかったもういい！もうか、かかわりたくない！！」

そう言って逃げ去ってった。

なんだったんだ、雷天の……残念谷口。

そしてもう一人の銀髪さんは

「いえ、そこまでお気になさらずとも。ですが、私自身、使った最上位の浄化魔法により魔法薬も二本も使うという冒険者にとってはとても手痛い出費の上、それでもまだ魔力が底を尽きかけでだいぶきついのもまた事実。ここはお詫びとして、後でその方にさっきの魔法を教えて頂きたいのですが」

とてもしたたかだった。

「そして、あなたが噂の盲目の冒険者ですね。……なる程、本当に普通じゃないようですね」

「……いや、普通じゃないってひどくない？」

初対面でいきなりそれは、ねぇ。

「普通じゃない要素が多すぎます。まず私が全く感知できない程に魔力が小さく、それでいてあの異常に短い詠唱で発動する魔法。さらには盲目なのに見えているかのような動き。あなたも十分興味深いです」

はぁ……。

なんか、あれだ。

根っからの研究者な空気を漂わせてるな、こな人。

「実に興味深い。あの魔法なんか特に……あなた、これから王都に行く予定はありますか？」

「あ、あー逆っす。真逆の方向」

「そうですか……王都に行くのなら、共についていって色々学ぼうかと考えていたのですが……」

彼女は心底残念そうにそう言いながら、じっとシルバちゃんを眺めながら呟いた。

「……まぁ、処刑魔法を、それも消えたはずの魔法を学ぶ事ができるだけよしとしましょう」

それを聞いた自分は、さっきから思っていた素朴な疑問を呟いた。

「……処刑魔法って、なに」

「確実に相手を殺す、一撃必殺の魔法です。詠唱が長い、魔力が異常に持ってかれる、魔力の精密すぎる操作が必要、しかもあたりずらいという有り得ないくらい使いづらい魔法の総称っす。しかし見返りも大きく、当たればほぼ確実に相手の命を、まるで処刑するかの如く奪う事ができるのです。本来は、本当に処刑する時に5・6名で使う魔法なのですが……一人でそれを行った方法が、ぜひとも私は知りたいです」

ほー、なんとも親切に語ってくれますね。
ん？
なら……

「よく治せたね、そんなん」

そんな絶対零度や地割れみたいな魔法、普通直せんべ。

「それは、たまたまです。私の母が治癒師で、様々な魔法薬や回復魔法を教えてもらったり、古い本を読ませてもらったんです。その中にこの魔法に対抗できる可能性のある魔法があったんです。あの魔法は本来、魔力乱れで体が崩壊するのを治す魔法なのですが、同じように内側の魔力をこう、緩和させたのです。あの魔法が即死系の魔法だったら打つ手がなかったのですが、幸い拷問用、苦しませる事に主眼を置いた魔法だったので。本音を言うと、賭でしたけど

ね」

……ごめん、魔法乱れってなに？
だが空気が読める自分はそんな事言わない。

「ふーん、そうなんだぁ」

「……心底興味なさそうですね」

あ、ばれた？

「……はぁ、まぁいいです。とりあえず……」

そう言いながら彼女はシルバちゃんのほっぺを人差し指でプニプニして

「この子が起きるまで、雑談でもしますか？」

そんな提案をし出した。

ちなみにこの時、自分はエリザ達がひっそりとどこかに消えるのを目撃した。

「……いや、自分らは宿にいるから、後で来てくれない？」

「そう言って逃げ出したりしませんか？」

しませんよ。

「んな事すっかっての。むしろこの娘が起きた時、君が近くにいる

とさっきみたいにこの娘がなるよ？いいの？」

この場合、自分も彼女も大変危険である。

「それは嫌ですね……仕方ない、また後で行きます」

彼女はそう言いながら、今度はみゅ～っとシルバちゃんのほっぺたを引っ張っている。

てこら。

「やめんしゃい」

「あはははは。まぁ起きたらしっかり教えて貰います。いい手土産にもなりそうなので」

そう彼女は言いながら手を離し、両手を挙げてひらひらさせた。

「まったく……で、手土産って？」

とりあえずこれ以上シルバちゃんに被害が及ばないように抱えながら、自分は彼女にそう質問した。

もちろん彼女の意識をシルバちゃんに向けないためにだ。

だが、これが手榴弾の安全ピンを引き抜くような行動だと気がつくのには、そう時間はかからなかった。

「はい！じつは私、これから真理の解明者様へ弟子入りしにいくんです！ですからその時にこの一人で処刑魔法を扱えるだけの技術があれば、弟子入りは確実なのです！！」

……今の自分の気持ちを表そう。

いきなり脈絡もなく、松見璃々子が須藤志帆をスキャニングするのを見させられた秋山秀一の気持ちである。

簡単に言うと逃げ出したい。

だが、そんな自分になど構わず彼女はつらつらと言葉を並べる。

「じつは私の母が一度王都に行った時にその方の講義を受けたらしく、その話を聞いてるとどうしても私も学びたくて。幸い魔法の知識は母から出来る限り教えてもらえていたのですが、その方は“ブツリ学”という、世界の理を学ぶ新たな学問を創り出したらしく、さらにその学問は魔法にも応用できるようで、既にその方の講義を受けた弟子には、全てを燃やす光の矢とか、星の力で押し潰す魔法とか様々な新魔法を会得しているみたいで……なのでぜひ私もその方の弟子になって様々な事を学びたいと思っているのです！！」

……熱い。

「そ、そうなん……がんば」

「なんでそんなに適当なんですか！虚無の黒騎士といえばわかりますよね？あの最強の英雄にして至高の賢者、ハセガワ・ナルミ侯爵様ですよ！？あぁ……あらゆる魔法を操り正義を貫く優しき愛妻家……その身体には幾多の戦場を駆け抜け仲間を守るためについた傷と己の誇りを背負い、心には昔、未熟だった故に失っていった仲間の想いと哀しみを刻みつけた涙の戦士。決して自らの力を驕らず、仲間のため、国のため、そして何より愛する妻のために力を振るう慈愛の騎士。特に妻のシルバ様に対しては、命を賭けて護りぬくと

いう鉄の意志と深い愛情を持ち、なにに変えても妻の事を最優先で考える理想の旦那様……」

……なぁ、どんな噂？
なぁ、本気で発信源どこ？

自分、そこ全力で潰すよ？

しかし、これはチャンスだな。
いまのうちにバレないようにそろりそろりと……

「私も結婚するならハセガワ様のようなお方と……て、何逃げてるんですか」

ちっ！！
逃走失敗。

彼女は自分のフードを掴み、自分が逃げるのを引き止めたのだ。

そう、フードを掴んで。

「あちょっ！」

「まだ話は終わってませ……ん、よ……」

ふわさぁっ……

そんな音と共にフードはずり落ち、自分の頭はニット帽だけとなった。

ニット帽が髪をだいぶ隠しているので、遠目からは自分が黒髪だとは全くわからないのだが……真後ろから見ると

「くろ……かみ？」

ビミョーにはみ出してるんだよねぇ……シルバちゃん抱えてるから隠せないし。

なので自分が取る行動は

「さいなら！！」

逃げるのみである。

だが、後ろからはマジな顔した彼女が全力ダッシュをしてくる訳で、しかも人がそれなりにいるせいで自分は全力出せない訳で……。

「強制転移！！」

なので自分はテレポートをして、一瞬で宿の自分の部屋まで戻った訳ですよ。

テレポートという決定的証拠を彼女に見せるのは痛いが、まぁ逃げ切れればなんとかなるべ。

そう思いながら、ベッドにシルバちゃんを下ろし、自分は椅子に腰掛けてニット帽とカチューシャ、そして目隠しを机に放り投げた。

その時、ベッドでシルバちゃんが寝返りを打ち、こちらを向きながら

「うにゅ〜……」

かわいらしい鳴き声を発してくれた。

全く、幸せそうな顔しやがって。

やっぱりこの娘へのお仕置きは、一週間自分と話せない触れ合えないの刑が一番かなぁ。

いい感じにいい顔で泣いて許しを請いそうな……

……自分、なに考えてんだ。

そんな感じに軽く自己嫌悪に浸っていた自分は、全く持って気がつかなかったのだ。

「……黒髪に、黒眼……やっぱり、あなたが……」

「ほぇ!?」

扉を開け放ち、自分をまじまじと凝視する女性の存在に。

36回目＊噂が千里を一人旅（後書き）

本気でごめんなさい、南師です。

オーケーオーケー、みんな待ちなさい。
まず言い訳を聞いてから狩りをはじめろ、だから太刀をしまえ、双剣も。

さぁ、今回またせてしまった理由は……

はい、文がかけませんでした。

いやマジね、日本語で伝えらんないってあすんません、石ころ投げないで

……ごほん。
まぁ他にも、大学入ったりサークル（てゆーか部）入ったりと、こゆい一週間を過ごしていたのもその一因か。

とにかく何がいいたいかと言うと

本当にごめんなさい。

そして内容の酷すぎさについても、触れないでやってくださいお願いしま……あ、無理、そうですか。

とにかくごめんなさい。

これからは頑張ります、だから弓を引かないで！！

くそっ！

逃げるがかちょぅあ！！

なんで落とし穴がここにっ！！

あ！！

こらナチュラルに大樽Ｇを顔におくな！

ておい！

ここでガンスの竜撃砲はやめっ！！

あぁぁぁぁぁぁ！！

はい、ごめんなさい、疲れてるんです。

これからもこんな南師を、皆様よろしくお願いいたします。

37回目＊純愛という名の病原菌（前書き）

今回は短し！

大学忙し！

そして出来に納得いかなし！

注意。

今回は多分に病み闇エッセンスを含んでおりますので、石橋をバズーカで撃った後に飛行機で対岸まで渡るくらい注意してお読みください

37回目＊純愛という名の病原菌

「やっぱり、あなたが……」

そういいながら扉の前で立ち尽くすは、マリサな格好した銀髪ロングの女の子。

彼女は自分をしばらく凝視した後、ツカツカと自分に寄ってきた。

「ほ、本当に本物ですか！？」

「本当に偽物です！」

つい口が悪あがきを。

だが、やはり悪あがきには反動ダメージがあるようで

「黒眼に黒髪で偽物な訳ないじゃないですか！！」

すぐバレた。

なら確認すんなや。

「はぁ……で、何の用？」

自分はいかにも投げやりに、面倒くさそーに彼女に聞いた。

すると彼女は素早く返事を返してくれた。

「は、はい！私をでし「ムリ！」なんでですか！！」

ぶっちゃけ答えは知っていたので、被せるように拒否してやった。

なぜかって？
なんか苦手なんよこーゆーータイプ。
というか彼女を認めたら、他にも弟子入り志願者がやってきて断るに断れなくなる。
しかたないから、やんわりてきとーに理由をいうか。
「もう自分には弟子は手一杯し、君を認めたらあとからあとからきちゃうし。何よりほら、今旅の途中だし、それに、かわいい嫁もいるしあまり女の子を近くには、ねぇ。愛する嫁に嫉妬してほしくないのさ」
いかに現状が手一杯か等を、シルバちゃんを引き合いにだしつつ説明した。
要するに、女の子はいらんという意味なのだが……この選択が失敗だった。
「もぅ！ナルミさんったら！そんないきなりかわいいとか愛してるとか言わないでくださいよ！恥ずかしいじゃないですか！！」
……今一番起きてほしくない方がお目覚めになられた。
「そんな愛してるなんていきなり！私もナルミさんの事が大好きです！愛してます！ナルミさんがいたら後はなにもいりません……誰ですそのコ」
ヤバい、一瞬にして表情が消えた。
ヤバいヤバい、一瞬にして声から感情が消失した。

「ナルミさん」

「はいいいい！！」

「ダレでスかあノコ」

や、ヤバいぞこれは……。
い、言い訳を！
なにか言い訳を！

「あ、いやーあの、自分に弟子入りしたいという……ね、浮気とかじゃないから。自分、シルバちゃん一筋だからそんな怖い顔しないで」

正直にいいつつ、おだてて機嫌取り。
しっかり彼女を抱きかかえながら、腕を拘束するのを忘れずに。

「は、はい！私はハセガワ様に弟子入りしたくてやってきました魔法種（ヴイザード）のメル・サインと言います！よろしくお願いします！！」

そういいながら彼女は帽子をとり、ぺこりとお辞儀をしてくれた。

そしてそこで自分は違和感の正体に気がついた。

この娘、特徴がないのだ。

正確に言うと、角やら翼もないし耳も普通。
つまり人間と同じ形なのだ。

自分はそう考えながら、首を回して彼女、メルちゃんを見ていたのだが……それがまずかった。

「……私一筋なら、なんであの娘の方を見ているんですか」

「はわ？」

自分の腕の中でシルバちゃんが声を震えさせながら、明らかな怒気を孕んだ声でそう呟いた。

「ナルミさんは私だけを見ていてください！ナルミさんは私だけの旦那様なんです！だから私以外の女なんか見たら駄目なんです！あんなナルミさんを誑かそうとしている醜い生き物なんか見たらだめなんです！あんなのを見たら目が腐ります！ナルミさんが見ていいのは私だけなんです！私の全てはナルミさんのモノですがナルミさんの全ては私のモノなんです！血も肉体も魂も！視線も息も匂いも唾液も愛情も心も全て私だけのモノなんです！それなのにあんな……！あんなナルミさんを惑わすイキモノなんか！殺してやる！刺して刻んで潰して焼いて溶かして消してやる！脳髄をぶちまけて骨を砕いて醜い芸術に変えてやる！産まれてきた事を後悔するほど惨たらしく生きたまま晒してやる！！」

彼女はそう叫びながらメルちゃんを惨殺しようともがいているが、自分が頑張って取り押さえながら魔力を無効化しているので、全く動かない。

「離してください！私達の幸せのためにはあいつを殺さなければならないんです！！」

「殺さなくてもいいの！自分はこうやってシルバちゃんを抱きしめ

られたら幸せだから！他人が入る余地なんかないから！君がいたらそれで幸せだから！だから暴れないで！！」

いつもならこういい感じ言えばふにゃふにゃしておとなしくなるシルバちゃんなのだが、今回ばかりはそうはならずに殺意を込めた視線でメルちゃんを睨みつけている。

自分はメルちゃんに逃げるよう声をかけたいが、さすがに今それをしたら火にガソリンをぶち込むのに等しい自殺行為だ。
ガソリンは気化しやすいから、まずぶち込んだら生きてはいれない。

そんな感じに自分はメルちゃんを心配していたのだが、そのメルちゃんはというと。

「わぁ～！いいなぁ、こんな理想の夫婦！これが純愛なのね！！」

息を荒くしながら、なんか電波な事ほざき始めた。

……は？

「旦那様を心から想う奥様と、その愛を正面から抱きしめ愛を囁く旦那様！熱き抱擁で心の情熱を伝え、優しき言葉で自らの愛を教える姿はまさに美しき芸術！まさに乙女の憧れる夫婦のあるべき姿！！私もこんな夫婦になりたいなぁ……」

なにこのここわい。
理想の夫婦とか、え、なに？

「うるさい！ナルミさんは私だけの旦那様だ！お前みたいなゴミ虫なんかに渡すか！処刑してやる！殺してやる！！」

そしてこっちもこわい。

どうしたら収まるか……。

……うん、軽く暴挙に出てやろう。

てな訳で、自分はシルバちゃんの顔を見つめながら、なるたけ悲しそうな声で呟くように言葉を発した。

「そうか、シルバちゃんは自分の事が信用できないのか」

すると彼女は時間が止まったようにピタリと動きを止め、油の切れかけたブリキ人形みたいにギギギとゆっくりこちらをむいてきた。

なんか言おうと彼女が口を開いたところで、自分はそれを遮るようにさらに続ける。

「自分がせっかく君に想いを伝えてるのに、君は自分の言葉に耳を傾けようともしない。挙げ句自分が浮気したかと疑い、あの娘を殺そうとする。自分は君に、自分が君を愛しているのと同じくらい愛されていると思っていたんだけど、自惚れだったみたいだね」

「ち、ちがっ」

「何が違うんだい？自分は浮気なんかしてないと言っているのに、君は自分を信用してくれない。君にとって、自分は君を愛さず浮気する程度の男だったんだろう？」

「そんなこと！私は、私は……」

どうだ。
この作戦は、下手したら彼女がさらに暴走する可能性もある。
さぁ、どう転ぶ……？
「わ、私はナルミさんが……そんな浮気なんか……！！」
彼女は、今にも泣きそうになりなくらい必死な顔をしながら、消え入りそうな声でそう言ってきた。
これは……成功か？
「あ、あいつが！あいつがナルミさんを狙うから！！」
「だから、君にしか興味ないって。わからないかなぁ……ハァ…失望……」
自分がそう駄目押し気味に言うと、彼女はマジで泣き始め
「わ、わわたしは、な、ナルミさんがしんぱ、しんぱいで……やだ…きらいにならないで……わたしを……すてないで…そんなめでみないで…いや……やだ…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
そう叫んだと思ったら、白眼剥いて気絶した。
多分、脳が現実逃避したんだろう。
とりあえず……

「助かったぁ～！！」

自分は安堵の声をあげ、シルバちゃんを抱えたまま力が抜けてベッドに倒れた。

しばらく倒れたまま命の素晴らしさを噛み締めた後、起き上がってシルバちゃんのまぶたを閉じた。

すると、後ろから殺気が……は？

「……なに、してるんですか？」

そこには、激昂したメルちゃんがユラユラと立っていた。

眼は自分を睨みつけながら、本気で自分に怒りを向けている。

「奥様はあなたを心から慕ってあんな行動に出たんですよ？それを踏みにじるように……愛妻家が聞いて呆れます」

「え、なにそれ！？なんで自分怒られてんの！？」

彼女はゆっくりと自分に近づきながら、ゆっくりと、しかしはっきりとした口調で言葉を紡ぐ。

「奥様は、ハセガワ様を護るためにあんな事をしたのに、やれ失望だ信用してないだ……ハセガワ様、まさか奥様で遊ぶだけ遊んで捨てるなんて言わないですよね？」

「なんでそーなるの！！」

メルちゃんは自分を押しのけ、気絶しているシルバちゃんに近付く

と、彼女の髪を撫でながら

「わかりませんか？あなたは奥様の愛を否定したのですよ？愛してるだなんだと言いながら、奥様のあり方を完全否定。それがあなたの愛し方なのですか？」

……なにこれ。

なんで自分助けた娘にこんな言われにゃならんのだ。

「……なにさ、君になにがわかるってーの？」

こっちの気も知らんで、なにを勝手に。

普段のシルバちゃんならまだしも、闇化した彼女は本気で扱いずらいんだからね。

「……なんですかその言い方。あなた、奥様をなんだと思ってるんですか？」

「自分の嫁さんだがなにか？」

あーなんだ、だんだんイライラしてきた。

「だったら！もっと言い方っていうものがあるんじゃないですか！？」

ちっ。

この子うるせー。

「うるさい！じゃあ君はシルバちゃんをあのままほっといて、君が

殺されて彼女が殺人鬼になるのを見てろっていうのか！？」

「にしても！やり方があるでしょう！？それに私ならいざとなったら一人で逃げれます！！」

「うるせーよねるねるねるね！あそこでおさめても後で同じ事あったら意味ねーだろ！てゆーかてめぇのスペックなんか知らねーんだよ！！」

「変な名前で呼ぶな！だったらそのつど止めてあげればいいじゃないですか！！」

あーもう埒があかん！

「黙れ！どんな生き物もあーゆーのには躾が大事なんだよ！悪いことしたら罰を与える！それが教育なんだよ！いいか！甘やかすだけならマトモな大人にゃなねーんだよ！今自分が悪者になってこの先この娘が道を踏み外さないんなら！自分はどんな悪者にもなってやるよ！わかったかねるね！いい顔しぃがでしゃばんな！！」

はぁ、はぁ、はぁ……。

はぁ～、言ってしまった。

格好つけて格好よさげな事を言ってしまった。

自分の師匠が昔言っていた教育理論（犬編）と全く同じセリフを言ってしまった。

彼はリアルにブリーダーで生計立ててるから、マジで真面目に言うことは正しいんだよなぁ。

ちなみに、彼の教育理論は他に猫編、猿編、インコ編、ヒヨコ（鶏）編、そしてグッピー編がある。
全部聞くのには、丸1日はかかるのだ。

さらに言うと、これを言われた原因は見事に康である。
シチュエーションとしては、康が自分に噛みついているのを彼が目撃したという形です。

ちなみに言われてたのは親ね。
家の康に何をするんですか～的な。

だが結果は……まぁ、言いつけ守らなかった自分達の責任です、はい。

と、んなことよか、自分は全力の大声を出したおかげでだいぶ冷静になることが出来た。

全く、このキレやすい性格はどうにかせねば。

……それはさておき、この場の収集はどうやってつけようか。
メルちゃんの性格上、なんかまだまだ突っかかってきそうだし……
はぁ。

自分はそう思い、今から来るであろう精神攻撃（ことばのぼうりょく）に備えて心の中でファインティンクポーズを取りながら、ゆっくり前を見る。

すると、そこには目を見開いて感動している銀髪ロングが……あり？

「……すごい」

「はぁ」

もうやだこいつ。
わけわかんね。

「ごめんなさいハセガワ様、私は勘違いしてました。奥様を真に想うからこそきつくあたり、自ら憎まれ役を演じる。そうか……そうだったのか……」

いや、おもいっくそ犬扱いだがね？

つかなに、ブツブツブツブツ一人で喋りだしたよこいつ。

「目先だけではなく、その更に先を読んでの行動。自らの立場も省みず奥様のためにあんな事をできる度胸。そしてそれでいて奥底から奥様を愛している優しい心。……叱る時は叱り、優しくする時は優しくする。……まさに理想的な旦那様であり、父親のあるべき姿……そしてそれに応えるのが妻としての……」

あの、もしもーし？

「ハセガワ様！」

「んぁっ！？」

メルちゃんはいきなりこっちを向いたと思ったら、眼を輝かせながらとんでもない事を言い出した。

「私も、旅に同行させてください！私はあなた様の魔法が知りたい！知識が知りたい！世界の真理を知るというあなた様の知識のひと

かけらでもいいです！私を弟子にしてください！私は曲がりなりにも研究者、今まで貯めた知識から、攻撃や防御から治癒までどんな魔法も使えます！決して足手まといにはなりません！！」

ここまではいい。
いやあまりいくないが。

ここで彼女を許したら後々続々弟子志願が寄ってくるからよくないが……それよりも

「そして！」

この接続詞以降が問題。

彼女はちらっとシルバちゃんを見た後に

「そして、私は研究者である以前に一人の女です。私の夢は魔法の研究をしながら、暖かい家庭を築く事です。……そのために、私は……

お二方の近くで夫婦とは何か、親とは何か、そして本当の愛とは何かというモノを学びたいのです！！」

……なぁ、話が飛びすぎてないか？

37回目＊純愛という名の病原菌（後書き）

はい、皆様こんにちはー
みんな大嫌い南師希少種ですよー

今回のフィールドは雪山なので落とし穴ははれませんよー
前回しにかけました南師のささやかな復讐ですよー

……グスン。

さぁ、今回のお話は……
まぁ、ヤンデレてるだけです。
あんまデレてもいないか。

多分今までで最高純度の病み闇加減な気がする。
ちなみに今回遅れた理由は、続きがどうしようかっていうアレです。

今回実は、一回の前半分なんですよこれ。

この当初の予定の前半分は欲望に任せてやってたのでスラスラいきましたが、後半がなかなかまとまらずにいろいろ時間かかりそうなので。

てなワケで、次回メルちゃんの正体（笑）が明らかにぃ～

……よし、なんか殺気がひどいからにげっうわっ！！

閃光玉とかまじやめっ！

あちょっ！

爆弾おく音が目の前でぎゃぁぁぁぁぁ！！

はい、悪乗りがすぎました。

余談ですが、北痘神げんこつとか出しても誰も怒りませんかね？
マジでやるかはわかりませんが、「北斗星の神のこぶしの奥深い意義の日の足が不自由な人は生んで殺します！！」やら「将軍はおちるべきです」をナルミ君に言わしてみたい。

でもやっぱなにより言わしたいのは、「むだでしたの～」だなぁ。

とりあえず、ナルミ君は世紀末敗者ラオ様みたいなミスはしませんのでご安心を

……あー、もうなんだかいろいろ終わってんな、私の頭。

……これからも、こんな異常者な南師希少種をよろしくお願いいたします。
アルビノエキスくらいなら頑張って絞り出しますんで（笑）

38回目＊インスタント神様（前書き）

一言言おう

どうしてこうなった？

38回目＊インスタント神様

自分はしばらくメルちゃんの説得をききつつ、さりげなく彼女がシルバちゃんを膝枕するのを見ながら何度目かの会話を続ける。

ちなみにこの時、メルちゃんの膝にシルバちゃんが乗った途端彼女は嫌そうな寝顔をしたのを自分は見逃さなかった。

「ほー、母さんが研究詰めで」

「はい。だから私そういう暖かい家庭というのに憧れてて……。お父さんは大分前にそんなお母さんに呆れて出て行っているし、森の奥の屋敷に2人だけで生活していたので友達もいなくて。……だから本とかで読むような家庭を築くのが夢で……そのために、私は奥様の下で修行をし、ハセガワ様のような理想の旦那様にどのように愛し、接していけばいいのか……」

「うん、帰れ」

全くこいつは……。

何を言っているんだか。

あー、頭痛くなってきた。

「お二方の邪魔立てはしません！だからお願いします！！」

「つってもね、君もわかるべ？君がいたらシルバちゃんはまた暴走するかもだよ？んな危ない橋渡れるかっての。ただでさえ次起きた時どうすりゃいいかわかんねーのに」

つかそもそも、ヤンデレに憧れるってどうよ？

いや、ヤンデレも見方かえりゃぁ純愛だが、それでも、ねぇ。

あれか、愛は感染していくのか？

「そこは大丈夫です！きっと奥様は話を聞いてくれます！」

「なにその溢れ出る自信」

「むきゅ？」

自分のツッコミに反応するように、どこぞの大図書館みたいな鳴き声がメルちゃんの膝の上から聞こえてきた。

そして次の瞬間

「う～……っ！！」

「きゃっ！？」

その発信源たるシルバちゃんがいきなり飛び起き、メルちゃんが跳ね飛ばされ、ベッドに仰向けで倒れる形になる。

シルバちゃんはそのままメルちゃんから一気に離れ、臨戦態勢を取り始め、ものすごい不快な顔をしながらメルちゃんを怒鳴りつけだした。

「このっ！私にいったい何をした！！」

「たたた……。何も変な事はしてませんよ。ただ膝枕をしていただけです」

メルちゃんがそう言うと、シルバちゃんは顔を青くしながら頭をかきむしるようにして、呪詛を呟くように狂った眼をしながらブツブツつぶやきはじめた。

「汚された汚された汚された汚いイキモノに触られた汚された汚染された毒された辱められた洗わなきゃ洗わなきゃ洗わなきゃあんな事があったあとなのにナルミさんに知られたら棄てられる避けられる軽蔑されるいなくなるそんなの嫌だ嫌だやだ嫌だやダやだヤだヤだやダやだヤダあアああアあアあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そしてそう叫んで、再び気絶したっとと。

あぶね、頭直撃コース一直線だったよ。

しかし……今回はヤバいぞ。
これはどうしようか……。

さすがにこれはないぞ。

と、そう自分が考えていると腕の中で早くも復活したシルバちゃんがもそもそ動き出した。

あ、なんか冷や汗が背中に……。

「んむぅ～……。おはようございますナルミさん。んん……ナルミさんの匂いが……」

「お、おはよう」

自分の腕に顔をうずめながら匂いを嗅いでいるシルバちゃんの様子を伺いながら、自分は恐る恐る挨拶をした。

いや、もうそろ夕方になるがね？

だが、自分の心配もよそにシルバちゃんは意外な事を言い出した。

「んっ……ふぅ。しかしナルミさん、私なんで寝てたんですか？確かさっきまで役所にいた気がするんですが……」

……は？

「ちょいまて、覚えとらんの？」

「はい、なんか変なイキモノがナルミさんを侮辱して……ぁ」

そこまで言うと彼女は頬を赤く染め、恥ずかしそうに俯きながらもじもじと

「それで……ナルミさんが私に……くちづけを…みんなが見ている前で……もう！強引なんですから！私はナルミさんが望むなら、いつだってナルミさんが望むままに受け入れますよ。私のすべてはナルミさんのモノです。いつでも好きなように愛し、愛でてください♪」

「うん、わかった。理解した」

つまりこの娘はさっきの出来事があまりにショックすぎたので、そこらの記憶をごっそり封印した、と。

……。

「……うん、もう諦めた」

「？」

寝たい、寝て全てを忘却したい。

誰か自分をあの真っ白いお城に連れてってくれ。

大丈夫、影くらいなら一人で倒せる。

て、んな現実エスケープしてる暇はないっての。

「……で、ですが」

ほらきた。

これはヤバし。

「……それで、あなたは誰ですか？」

ほら、眼が死んだ。

「し、シルバちゃん落ち着こうか。ほら、おいで」

「はい！えいっ！」

よし、復活。

だが……なんでんな勝ち誇った顔しとるんね？
いや、だいたい理由はわかるがね？

そんな挑発的な顔でメルちゃんを見なくても……。
膝に乗ってそんな顔しても、子供っぽいだけだから。

だがメルちゃんはそんなシルバちゃんの威嚇など、ハエに体当たりされた程度くらいしか効いてないようで、期待に満ち満ちた眼でシルバちゃんを見つめながら、さっき自分に言ったように彼女の説得をし始めた。

「あの……お、奥様！私をハセガワ様の弟子として旅に同行するのを許可して下さい！！」

「まてやゴルァ。自分がいつ君を弟子にした」

とりあえず本能的に突っ込んでしまったが……。

さてさて、どうしようか。

「……ナルミさんには私以外の女性は必要ありません。死んで下さい」

「君も飛躍しすぎだろ。そして論点が微妙にズレとる」

この二人、どうすりゃいいのさ。

マジで誰か助けてぇ！！

『緊急事態！即時応答しろ！！』

……空気読めクソ女神！！

『うっさい！緊急事態なんだ！』

なにがだ！

こっちも緊急事態なんだよ！

「……ナルミさん？」

「ハセガワ様……どうしたんですか？」

ほら、女の子二人が自分を不思議そうな眼で見ているじゃないか。

「あ……いやなんでも……きにしないで」

とりあえずこういっとこう。

でなにさ。

『まさかの事態！君が名付けた世界の、ネコアに属する魂の名前が私じゃつけらんない！まさか世界に名前付けた者しかその世界に属するモノに名前をつけらんないとかしらんかった！！』

……つまり？

『君がネコアの神様としてネコアの全管理を……』

「ざっけんなチクショー！！」

「ひゃっ！」

「きゃっ！」

「あ、ご、ごめん」

自分の魂からの叫びでびっくりした二人に気遣いつつ、自分は女神（クズ）に苦情を漏らす。

ざけんな、何が悲しくて神様やらにゃならんのか、と。

『しょーがないでしょ！？私だって前任者からそんな事教わんなかったんだし！あの時は彼女指導の下直接修行したんだよ！？そんな世界の名前だけ決めてはいさいならなんてやらんかったんだよ！』

はい逆ギレ乙！

死ね！

『うっさい！前世で富士山噴火させた超不幸男が文句垂れんな！！』

なんだその情報！？

おまっ！

自分の前世って何さそれ！

“スサ……”とか途中までいってたからスサノオとかの神様かと思ってたんだが。

ほら、一護も草薙の剣からとかいって……

『スサノオなら今ホストクラブで雑用やってんよ！君の前世……て、言っちゃダメじゃん私！！』

チッ！

しかしスサノオ落ちぶれたな……じゃなくって！

『……はい、もうこの話は終わり。それよかネコアだけど……ぶっちゃけて言おう。マジ助けて』

ぶっちゃけすぎだろ。

そして流すな。

『いいの！君が死んだ後教えてあげるから。で、なんだが君の付けた名前さ……リセットできんのさ。だから……マジお願い。お手軽神様でいいからお願い、やって』

いや、つっても……。

『いやね、魂の名前を付けるだけでいいのさ。ただ数が莫大だから時間かかるけど……』

……本当にそれだけか？

『うん、付けた後は私に管理を委託してくれれば。それでもちょっと面倒な手続き必要だけど、まぁすぐすむよ』

そっか……。

よし、わかった。

『手伝ってくれる!?』

断る!!

『なんでさ!』

おまえざけんなよ?

地球にさえ一体なんぼの生命いるとおもってんだ?

一つ一つとか、どんだけよ。

『あーうん、そっか……。うん、それは大丈夫』

は?

なぜに?

『いや、君の魂は情報を流し込めば、魂がオートで名前を刻むようにすでになってるから……』

「勝手にすんな!」

「ひゃう……」

「な、ナルミさん……」

ああまた……全く面倒な。

「ごめん、ちょい席外すわ。今ちょっといろいろ面倒なこと片付けなならんくなってね。大丈夫、すぐ終わるから、おとなしく待ってね……んな悲しい顔しないの、ほらよしよし……ん」

とりあえず面倒なのでシルバちゃんがアクション起こさないようまずなでなでして無力化した後、自分はシルバちゃんを横に置き、部屋から出るため立ちあがろうと……んぁ？

「シルバちゃん、服、離してくれない？」

自分はそう服の裾を掴んでいるシルバちゃんに言ったのだが、彼女は裾を離すどころかそのまま腰に抱きついて顔をうずめはじめた。

「……ダメです。いまのナルミさんはとても苦しんでいます。一人になんかできません」

「苦しんでるってーか……」

いや、苦しんではいないがね？

むかついてはいるが。

『なにラブコメしてんのさ！本当お願いだから！マジお願い！このままじゃ私が怒られる！！』

られてろ。

『君が想像する怒られるとは次元が違うんだよ！？いいかい！世界創世核構築系高時空演算第三十七次元式を使って世界核を1から作り出せとか、もう二度とやりたくないんだよ！！』

ごめん、全くわからん。

『壊れた世界のカケラから世界の中心になり得るエネルギー体を創

り出せって事だよ！なんならあげるか！？そんとき私の創った世界核を君に合成してやろうか！？まばたきがラピュタの雷になる身体になるよ！？』

「どんだけ危険なんだよ！
世界の力半端なさすぎだよ！

やだよんなの！！

てゆーか神の能力に世界の力とか、どんな変態だよ！！」

『なら手伝って！本当お願い！』

……はぁ。
文脈崩壊しとんな……。

ったく。
で、どんくらい手間暇かかんのさ。

『大丈夫、寝てる間にささっとやって、合計６７日しかかからんから』

結構かかんだな……。

本当寝てる間だけか？

『うん、そう。まぁ気を向けたらおきてる時も出来るけど、ぼーっとしていて隙だらけになる。まぁ君なら問題ないだろうけど』

……ったく。

わぁったよ、引き受ける。

『やったぁ！わぁい！これで怒られない！』

はぁ……仮にも世界を構築してる神様が怒られる怒られないとか。

なぁ、おまえ実際偉いん？

『うん、超偉い！』

信じらんないなぁ……。

つか、偉いんなら怒られないんと違う？

『上には上がいるのさ！じゃあ君が今日寝た時に全情報をインストールしとくから。後は君の魂のネーミングセンス次第さ』

さいですか。

じゃあ帰れ。

『うん！本当ありがとう！いつか借りは返すよ！！』

はいはい、期待しないで待っとるわ。

『期待しなさい！なんたって私はなづ……んんっ！この私が心からのお礼をしたげる！』

……なづ？

なんだなづって。

『とにかくありがと！じゃあまたいつか！！』

プツン！

……切れた。

本当、なんなんだあいつ。

全く、自分はシルバちゃんをなんとかせにゃならんの……に？

「なした、その顔」

自分が我にかえってみると、なぜかシルバちゃんとメルちゃんが、自分に心からの尊敬の表情をしながら、キラキラした目で自分を見つめていた。

……なんね。

自分のそんな疑問の答えは、目の前の二人ではなく別の方向から返ってきた。

「ナルミ！“世界の力”とはいったいなんだ！！てゆうか“神の能力”とかについても詳しく教えろ！！」

はい、扉を開け放って仁王立ちしているエリザ姫様でした～。

……いつからいた。

つーか……

「……自分、声出てた？」

「ああ、思いっきり叫んでたぞ」

「師匠はいきなり“世界の力”なんかいらないってさけんでました。やっぱり師匠は凄いです！神様の能力をもちながら、さらには世界の力まで会得可能なんて……」

「……さりげなく師匠というな。こねるぞねるね」

全く……しかし、これは……。

「ナルミさんは神様だったんですね！」

「そうか！だから物理学とかも知っていたんだな！！」

「そうなんですか！流石師匠！……あれ？」

厄介な事になりそうな……どした？

「……なら私って今まで、神様に失礼な事言って……る？」

メルちゃんのその一言で、エリザはピシッと石化した。

……訂正。

これは、もうすでに厄介な事になっとるな。

「えへへ……ナルミさんは神様だったんですか。かっこいいです！凄いです！じゃあ私は神様に身も心も全てを捧げる生贄として、ナルミさんにいつまでも、ナルミさんが神々の世界に帰ろうともいつ

までもついていきます！さぁナルミさん、あなたという存在がいなければ生きていけない、この哀れな生贄を存分に……」

「よーし落ち着けシルバちゃん」

とりあえず、この娘はもう少しおとなしくならんかね。

あの二人まではいかずとも、もう少し……。

つーかあれだな。

テンションが上がるのは同じだが、そのベクトルが二人と違いすぎるんだな。

……とりあえず、誤解を解くか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊◆☆

「じゃあナルミは神様とかじゃあないんだな？」

「そうなんですか……なんか安心したような残念なような」

「ナルミさんはなんであろうとナルミさんです！私はどんなナルミさんでも受け入れます！！」

「本当君は色々ベクトルが違うよね？」

自分はあのあと必死になって彼らに説明した。

嘘八割、でたらめ二割で。

「しかし……おーぱーつか……そんな強力な宝具があるとは……」

「まってください、今まとめます。……えっと、まや遺跡から発掘されたおーぱーつという宝具の一つ、すいしょうどくろに選ばれた師匠は、不死の……えと……」

「さんじぇるまん伯爵だな」

「そう、そのさんじぇるまん伯爵の教えのもと、今の力、神属性の力を手に入れた。そして新たに発見されたおうごんじぇっとというおーぱーつに付随された世界属性も会得してみないかという念話が入った、でいいんですよね」

「あはははは、そうだそうだ。もうおかげでアンゴルモアなんか二秒でぶっぱだったからね。あはははははは」

はい、こういう訳です。

マジごめんなさいサンジェルマン伯爵。

「で、なのだが。ナルミ、詳しくそのおーぱーつとやらを……」

「うんそれむり。これは秘密だよ。言ったら関係者が聞いた奴を消そうとこの国滅ぼしにくるよ？自分みたいなのが大軍でやってきて」

そう自分がいうと、二人は震え上がり一人は夢見がちな眼をしながら……

「ナルミさんが……たくさん……」

うん、無視しましょう。

「……わかった、それについては今はもう聞かない」

「はい、いずれまた」

「あ、また聞く気ではあるんだ」

全く……こいつらは……。

「でも凄いですよね。私達は火やら水やらの属性しか知らないのに、神属性や世界属性とか……」

「全くだな……拝んどくか」

エリザはそう言うと、メルちゃんと共に自分を拝みはじめた。

……はぁ。

「君らは本当馬鹿だろ。自分はそんなんじゃあない」

まぁ、インスタント神様にはなっちゃったがね?

「わかったなら帰ってくれ。自分はもう寝る、疲れた」

自分がそう言うと、エリザは一瞬アホみたいな顔をしたかと思えば

「あ、ああそうか……にほんとここではかなり距離があるらしいか

らな。いくらナルミでも疲れるか……じゃあ夕食時にムーあたりにでも呼ばせるから、ゆっくり安んどけ」
納得したようにそう言って部屋から出ていった。
それに続くように、メルちゃんも

「じゃあ、お疲れ様でした。今日はありがとうございました」

そう言って出て行き、扉をしめた。

……はぁぁ。
やっと終わった。

良かった、メルちゃんが弟子云々を忘れてくれてみたいで、本当良かった。

よし、寝るぞ。

自分はそのままベッドにダイブし、まだ明るい日差しを浴びながら徐々にまぶたをくっつけるのであった～。

「ナルミさんナルミさん」

「ん～？」

「私の膝があいてますよ」

……頼むからおとなしくしてて。

＊＊＊

フワフワクルクル。
ワシャワシャワシャ。

自分は気がついたら、あたり一面不思議な空間にて浮遊していた。

不思議っていうか一面灰色やら赤やら青やら……どこよここ。

『君の夢よ、ここ』

自分がフワフワ浮いていると、どこからともなく出てきたあのアホが逆さに浮いていた。

……はぁ。
今度はなにさ。

『言ったしょ、インストールするって』

ああ。
なんだ、知らないうちにじゃないんだ。

『うん、負荷がかからないようにするにはこれが一番。なにせ曲がりなりにも神様になるんだからね』

はぁ……。

神様、ねぇ。
めんどいなぁ……。

「いや、別に奇跡おこせとかゆう事はないから。別段能力も変わらない、ただ寝てる間に魂の名前をつけまくるだけだから、内職ていどに考えといて」

……内職神様とか、ふざけすぎだろ。

『まぁ、そこはごめん、私のミス。ちょっと駆け足しすぎた』

さいですか。

ならちゃっちゃとはじめてくださいな。

『そうとう疲弊してるね。よし、わかった。じゃあ楽にして』

ん。

楽に楽ーに。

『そうそう。じゃ、いくよ……』

ばっちこーい。

『……よし、終わった』

……あれ？

そんだけ？

おまえ微動だにせんかったが、終わったん？

『そりゃ私神様だし、そんくらい簡単簡単』

呪文やら印やらを使ったりしないん？

『はっ、下級の神様なら必要カモだけど、私これでも最上級の神様だし。あらゆる世界神様の、ナンバー2よナンバー2』

……

『そんな疑いの眼差しでみるな』

つってもなぁ……。

ナンバー2ってのも微妙だしなぁ。

『仕方ないでしょ、そうなんだから。とにかく終わり、私は帰る』

まぁ待て、そう急くな。

『……なに企んでんの？』

いやなに、シルバちゃんをおとなしくさせる方法をだな……

『あー、あの娘。うん、あるっちゃあるけど……オススメはできない』

というと？

『まず性格を変えるという方法、これは論外。私が嫌だ』

まぁそれは……うん。

よくわかる。

『もう一つは過去の性格に戻す事だけど、その場しのぎにしかならない。いずれ戻る』

あー、そういう……

『で、最後だけど。もういっそ契約しちゃうってのが』

は？

契約？

『うん、契約。彼女を君に絶対服従の奴隷にしちゃうの。これも私は好きくない、けど……』

……まぁ、彼女なら悦びそうだな。

『で、どうする？他にも感情封印やら、究極人形みたくするのも可能だよ』

……やめとくわ。

なんか、ろくなのねーな。

『そりゃあ今の人格を全否定するようなもんだからね。でも良かったよ、君がやらないと決断してくれて』

……ちなみ聞く、やるといったらどうなってた？

『私にボコられてたね』

お前に？

絶対弱いだろ。

『ふふんっ。まぁそう思うのは自由だよ』

……なんかムカつくな。

偉そうに。

『神様だからね』

……はぁ。

もうやだ、なんで夢でまでこんな疲れなきゃならんのよ。

『……まぁ、これに関してはごめんとしか』

……そうだ。

なぁなぁヒミー。

『ヒミー言うな』

どーでもいいよ。

それよかさ、メルちゃんどうにかしてくんない？

『ん？誰？』

メルちゃんさ、あの、自分に弟子入りしたかってる。

彼女をどうにか諦めさして欲しい。

『まってね、今調べる。……ほほぅ』

どうした。

『うん、単刀直入にいう。むしろ仲間にしろ』

は？

なぜに？

馬鹿なの？

アホなの？

死ぬの？

『ふふふ……聞いて驚かないでね。彼女の正体はね……

瀬田の血を受け継いだ子孫なのさ。つまり、だいぶ薄まってるけど人間の血が混じってる。即戦力間違いなしだよ』

……わんもあぷりーず。

『彼女は瀬田の子孫。とはいえ、魔族がだいぶ混ざってるから魔法の影響もうけてるっぽいけど、そこらのオーガなら力だけで押せる』

……

『まぁ、それも一旦魔力を全部捨てた場合、ＭＰ０の場合だけだけどね』

魔族って魔力尽きたら死ぬんでないん？

『人間入ってるから、大丈夫なのさ。……ある程度』

……不安だなぁ。

つか、仲間にする以前にシルバちゃんをどう説得するかだし。

『あ、それは大丈夫』

あ？

『起きたらわかるから。とりあえず、いつか借りは返すから、なんかあったら呼んでちょーだい。じゃあ、頼んだよ』

ちょまっ！

なんでそんないきなり……

『だってもう君、すでに１８時間寝てるんだよ？ちなみ今は朝の９時』

……ごきげんよう。

『まぁ、また仕事が終わったら来るから。じゃ、オーバー』

奴がそう言うと、途端にどこからか現れた扉を開き、その中に消えていった。

そして扉が閉じた途端に、自分は……

ゴッ！！

ベッドからずり落ち、脳天から床に激突して目をさました。

……あいつ、次あったら潰す。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊¶☆

「……大丈夫か？」

「……大丈夫」

自分はベッドからずり落ちた形のまま、上下逆になってご飯を食ってるエリザを見ながら返事をした。

……なんで自分の頭が無傷で、床がへこんでるんだ？

「おはようございますナルミさん！」

「……おはようシルバちゃん」

軽く自分の頭蓋骨に絶望しながらベッドに腰掛けると、シルバちゃんがとびついてきた。

「……落ち着け。約束でしょ」

「……ぷぅ。はぁい」

彼女はそう言って、ほっぺたを膨らましながら自分の横へと座ってきた。

とりあえず安心した自分は、部屋を一度見渡すと、まぁ昨日みたいにみんなここでご飯をいただいているみたいである。

ただ一つ違うのは、ねるねるねるねな格好した人が混ざってるくらいである。

しかも非常になかよさげに。

……嫌な予感しかしない。

「ナルミ、紹介しよう。近衛隊に新しく入ったメルだ」

「よろしくお願いします！」

……もうやだ、この娘。

「どういういきさつで？つか、シルバちゃんがよく許したね」

「ああ、それはですね。なんか……」

「スゥ、それ以上言ったら……」

シルバちゃんはそう言うやいなや、眼でスゥ君を威嚇した。

するとスゥ君は、乾いた笑いをしながら逃げるように目の前にあるミートボールを食べはじめた。

……いったいなんなんだか。

「とりあえず、仲間になったので、よろしくお願いします」

「ちなみメルは、ゾーン爺の孫でな。身元とかについては心配いらんぞ」

……ゾーン爺？

誰？

「なぁ……ゾーン爺って、誰？」

「ん？お前にはじめてあった時一緒にいただろう。今はナルミに立場を奪われて、北の塔で魔法の研究をしているらしいが、詳しくは知らん」

……はて。

いたかなそんなん？

……うーむ。

「そんな考えこまんでも……しかも孫の前で」

「あ、ごめん」

「いえ、大丈夫ですよ。それより、いつ街を出るんですか？」

本気で心の底から、ワクワクとしながら彼女はそう言って眼を輝かせながらそういってきた。

「なぁ、本当にこのこ連れて行くんか？」

「まぁ、な。邪魔にはならんだろ」

いや、旅のお供には神様のお墨付きだから大丈夫だがね。

自分が懸念するのはむしろ

「いや、ちがくて。彼女を仲間に入れたら弟子入り志願者が増えるんでないかっていうことなんだが」

「あ、それは大丈夫だ。形としては近衛隊に入隊だから、選んだのは私だという事になるからな」

あー、なら安心か。

安心かぁ？

「とりあえず、予定としてはこれを食べたら出発するつもりです」

とりあえず、自分は本気でこれから先が心配でならない。

なにせこの先、さっきよりも嫌な予感しかしないからだ。

あぁ、ヤバい。

ストレスで胃がキリキリしてきた。

……くそぅ。

たしか次もまた草原だったな。

草原の生き物には悪いが、ぜってーこのストレス発散してやる。

みてろよコノヤロー！！

ブホッ！！

「ナルミさん！？ナルミさん！キャーー！ナルミさんが血を！やだ！死なないで！！」

「ちょっ！ナルミ！？誰か！誰か治療を！！」

……いきなり血を吐き散らした自分は、そのあと即座に自分で回復を施したのだが、大事を取って3日の休養をとらされるのであった。

ちなみその時クソ女神に問いかけたところ、意識をもったまま夢の世界にいると、そこでのストレスは、現実のストレスに比べると約8．7倍の威力があるとか。

まぁ結論から言うとだ。

あいつ(女神)がすべて悪い、という訳である。

いつか“★ほうちょう★”のエフェクトで刺してやる。

そう自分は心に決めた。

ちなみその日からしばらく

「うぁ～ん！ナルミさん死なないで！私を置いていかないで！なんでもするから！なんでも言うこと聞くから！やだ！やだよ！ナルミさんがいなかったら私、私……いやぁぁぁ！！」

「なぁ、シルバちゃん。自分今ただ寝てるだけだから。そしてもう夜だから叫ぶのやめて」

こんな感じのやりとりが、しばらく繰り返されるのであった。

……はぁ。

38回目＊インスタント神様（後書き）

遅れてごめんなさい、南師です
遅れた割にはなにこれな感じにしかならずにごめんなさい

すべてはサークルが悪いのです

とまぁ責任転嫁してみたり。

まぁ、はい。
ごめんなさい。

なるたけ一週間更新できるよう、頑張っていきます。
なのでそんなハンマー持ってこっち来ないで下さい。

お願いします、弱ってるんで……ん？

なに、一人とな？
ハンマーでソロで南師を狩りにきたとな？

一人ならあるいは勝てる……あ、アイルーもいっグベッ！？

あ、悪魔！？
悪魔アイルー！？

くそっ反則だぞ！
戦略的てったガバッ！？

くそっ！
とうっ！

……ふう。
ここならもう大丈夫だろう。

さて、回復のため寝るか。

それから南師を見た者はいなかったという。
ただ、南師が寝ていた場所から、真っ赤に染まったアイルーが出てきたとか……

はい、ごめんなさい。

とりあえず、次回は次週の月曜日までに完成させることを目標にします

あ、あとナルミ君の前世は、思い当たる節があっても言わないでください

そこまでひっぱる事でもないかもですが、もしそれが当たってたら反応が……

とにかくお願いします

これからもよろしくお願いいたします

39回目＊マッタリ紀行・趣味の時間（前書き）

注意書き

今回はいろんな意味でぶっ壊れています

いつものナルミ君が大好きな方は回れ右です

39回目＊マッタリ紀行・趣味の時間

「みんな、悪い。今日、自分は欲望のおもむくまま、気の向くままに生きる事にするわ」

自分が吐血してから3日が経った今日。
やっとこそこの街から旅立とうという事になった。

これを期に、もういっそ今まで溜に溜めた鬱憤ストレスイライラ気分をすべて発散しようと自分はもくろんだのだ。

という訳で、自分はそれを伝えるために、皆さんが集まり、馬車の準備をしている所でそう宣言したのだが……

「……はっ！つまり師匠は、今日1日は欲望のおもむくままに奥様を……」

「だまりゃ！！」

ガラガラッ！

「みぇっ！！」

とりあえずメルちゃんがうるさいので、彼女が馬車に乗せようとしていた荷物をそのまま落としてやった。

……なんかすっきり。

「うぅ……ひどいです……」

「言ったろ、欲望のおもむくままにするって」

まぁ、それ抜きにしても、彼女にはいつかこうやって復讐する事は決定してたのだがね。

「自分は今日1日、自分がやりたいように生きる。もう誰に引かれてもいい、おもいっくそ趣味をさらけ出してやる」

「……先生の趣味……なんですか？」

「もちろん私を」

「君もだまりゃ！！」

つてん！

ダンッ！

「にゃっ！？」

自分は、なんかまた変な事を言い出しそうになっているシルバちゃんの足下を摩擦ゼロにし、彼女はそのまま背中から地面に倒れてしまった。

とりあえず君も黙っとれ、シルバちゃん。

そーゆー事の趣味とは違うってーの。

……はぁ。

「とりあえず大人しくしてろ、君達」

正直今日はこの二人に関わりたくない。

仕方ない、縛って馬車の隅に捨て置く……いや、悦ぶな、それなら。

なにかないか……。

……あ、忘れてた。

「そうだ、シルバちゃん」

「つっ……は、はい。なんですか……？」

背中をさすりながら立ち上がったシルバちゃんに、自分は思い出した事柄をつげてやる。

「今から7日間、自分は君と会話しない。つか、関わりを持たないから」

「……え？」

すると彼女は、一瞬理解不能という顔をした後、目にみえて顔を青くし、慌てはじめた。

「ま、まってください！そんなっ！なんでいきなり……！！」

そう言いながら、いまにも泣きそうな顔をしたシルバちゃんは、おぼつかない足取りでヨタヨタと自分に近づいてきた。

だが、自分はそれを彼女のおでこをデコピンする事で制し、止まったシルバちゃんの目の前で人差し指を上げる形の手をつくって理由

を教えてあげてやる。

「だって君、約束破ったじゃん。人前では自重しなさいと、自分と前に約束したしょ？悪いことしたら罰を与える。当然だよね？だから一週間の間、罰として自分は君と関わりを持たない。大丈夫、たった7日間だから」

人差し指をクルクルしながらそう言ってると、彼女は自分が言葉を繋げる度に絶望的な表情になり、最後にはへたり込んでしまった。

「……そんな、7日間も……ナルミさんが…やくそく…私が……ナルミさんに……けいべつされた…きらわれた……」

「……別に嫌いになった訳じゃないから。でも罰は受けてもらうけどね。……あ、あとほい」

自分はとりあえずフォローをしつつ、彼女に指輪をプレゼントした。

学祭の時、劇で使ったプラスチックでできたオモチャの指輪だ。黄色いフォルムに赤いプラスチックの球がはめられた、まさに安物な指輪である。

その指輪の球を前やったように自殺防止のため、全能の真球にしてやったのだ。

……ちなみに言うと、劇でやったのは文芸部の女子が書いたオリジナルの恋愛ドラマ。

そしてヒロインが自分。

……そうヒロイン。

ちなみに恋愛なのでもう片方いるのだが……あいにくそれも自分の親友（♂）がつとめていて……。

要するに、その文芸部の方が腐った女の子だったんですよ！
ちなみに自分が受けだとか。

くそっ……しかも女子が多い我が学校では、多数決では絶対的に男子が不利なのだ。
つまり数の暴力。

そして自分は心に傷を負いながら、みんなに爆笑されながら全てを演じきったのであった。

……話が逸れすぎた。

何が悲しくて自分で黒歴史を蒸し返してえぐり出さねばならんのだ。

そんな事よか、今はシルバちゃんだ。

「この指輪、ずっとつけてなさいね。破ったらさらに3日延長するから」

「ナルミさんに……すてられる…ヤダ…そんなこと……」

あ、だめだこりゃ。

とりあえずっと。

「あっ……」

とりあえず自分はシルバちゃんの右手を引っ張り……人差し指でいいや。
人差し指に指輪をつけてやった。
それでもおっきかったので、両手をパンしてサイズを変えて再びつける。
……今更だが、彼女達はどっから自分の指に合うプラスチックの指輪を見つけてきたんだろう。
「あの……これは……」
「ん？自殺防止の指輪だが？さすがに自殺とかされたらたまったもんじゃないからね」
そう自分が正直に言うと、彼女はパアッと明るくなり……なんで？
「は、はい！ありがとうございます！！」
「……はあ。じ、じゃあ、はじめるから。今から7日間、自分は君と関わりを持たない」
よくわからないが、とりあえずこのままグダグダしてても仕方ないので、自分は無理やり彼女へのお仕置きをスタートさせた。
そしてそのまま自分は後ろを向き、他のメンバーの……
「……えへへ。ナルミさんは私に死んで欲しくない。ナルミさんは私を必要としている。私はナルミさんの所有物。自由に死ぬ権利さえ持つ事が許されないナルミさんだけの奴隷。私はナルミさんに全

てを縛られながら生きていく。自由は無く、支配され、なぶられ辱められ虐げられるだけの下等な家畜……あぁ…ナルミさん……」

……なぁ、そのセリフは絶対そんな恍惚とした声で言うもんじゃあないだろ。

自分はそう思いながら、再びみんなの方に歩いていくと、そこにはふてくされたウサミミがいた。

「……先生って、よく僕のこと忘れますよね」

「……？……あ」

ああ、そういや彼か。
さっき自分の趣味を聞いてきたの。

「あれですか、先生は加虐趣味でも持ってるんですか？だからシルバを毎回縛ったりなじったりしたり、僕を放置したりするんですか？」

「うん、ごめんなさい。てゆーか自分にそんな趣味はないし」

……とかいいつつ、最近シルバちゃんをいじめて楽しんでる自分がいるような気が……。

そんなわけない！
自分はノーマル！
ＳでもＭでもないＮなんだ！！

鳴海のＮはノーマルのＮ！！

「……本性とは、得てして自分ではわからないモノですよ」

「君こそ実は隠れSだよね。絶対危険なタイプだ」

本当にこいつは……。

いつか自分はこいつを兎詐欺と呼ぶことになるきがしてならない。

「……えすがなにか知りませんが、多分違います。それに僕よりもシルバのあの隷属趣味の方が危険だと思いますが」

「あいつは制限をかければかける程、自由を奪えば奪う程にそれを快感とする変態だからな。たしかに危険だ」

「……どっから湧いてきた、エリザ」

自分がスゥ君とシルバちゃんについて会話してると、どこからともなくエリザが会話に入ってきた。

「さっきからいたぞ、馬車の中に。それよりナルミ、シルバはほっといてもいいのか？」

そう言いながらエリザが指差す先には、なんか顔を朱に染めながら座り込んでいるシルバちゃんの姿が。

「あ？ああそれは大丈夫。すぐに現実に戻ってくるから」

「ん？どういう意味だ？」

「あれだ、彼女は現実逃避しているんだ。ああやって自らを騙して、

なんとか平静を保とうとしているんだよ。なぁに、すぐに自分のとこによってくるから、そんときにきちんと現実を見せてやる」

「……」

「……」

「だいたいあーいう犬みたいな奴は、一回あーやって罰を与えて躾ないとすぐつけあがるんだ。大丈夫、最初は泣き喚いてうるさいかもだけど、すぐにおとなしくなる」

「……」

「……」

「そしたら後は簡単だ。少し甘い事を囁いてやればすぐに陥落する。後は煮るなり焼くなり炒めるなりどうとでも……あぁ、そうだ。メルちゃんも事件の原因の一部だったね。ククク……さぁてどうしようかなぁ……」

そうだそうだ。

メルちゃんにもなにかお仕置きをしてあげなくては。

ぶっちゃけあれだけではまだ気持ち的には納得できない。

もう少しこらしめてやらねば……なんだその眼は。

「……ナルミ、おまえさ……実はかなりおこってるだろ？」

「というかむしろ楽しんでますね」

……なにがいいたいきさまら。

「自分はいつもどーりだよ?そんな彼女らをいぢめて楽しむとかないよ。自分はノーマルなんだ」

自分がそう言うと、エリザとスゥ君は同時にため息を深く吐き出した。

……だからなにさ。

「……自覚ないなら、いいですよ」

「だな。まぁ今日1日は、私達に被害が出ない程度にすとれすとやらを発信してくれ」

「ストレスは発信するんでないぞ。発散するもんだ。まぁ言われなくとも、自分は今日1日、自由に過ごす!歌って踊れる程テンションが高い自分は、もはや誰にも止められない!!」

もはや真夜中にニコニコ生放送をしている時と同じくらいテンションが高くなってきた自分は、そう叫びながらノリノリで馬車の中に侵入した。

……なんかその時、チラッとエリザの顔が青くなったように見えたが、多分気のせいだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊¶☆

時は流れて、太陽が大分高くなってきた午前中、自分以外のみんなはとても疲弊していた。

理由はなぜかって？
きまっているだろう。

自分が出発してからぶっ続けで、本当に歌ったり踊ったりしたからですよ。

自分は、まずダンスダンス革命やポップンな音楽やらを大音量でやり始めてまず久しぶりにリズム感とかリズム勘とかを取り戻しにかかった。

最初はみんなテレビやゲーム機やらに興味深々だったのだが、可能な限りの大音量で自分がゲームをはじめたのでみんな耳を塞ぎ、超おっかなびっくりこちらをみていた。
馬車の外に音が漏れる事はないから、つかならないようにしたからそこらへんは問題ないが、まぁ馬車の中にいるみんなはご愁傷様としか。

対して、自分はというとこの世界はじめてのダンス革命。
やってびっくり今までどう頑張ってもできなかったやつができるようになっていたのだ。

さすがは自分。
悲しくなる程能力が素晴らしい。

ちなみに1人、曲が終わる度に拍手をしてくる女の子がいたが、そいつは無視した。

で、次いでポップンもやってみたら、まぁ素晴らしい。

ハイスコアしか出ない。

で、ここで自分は考えたのだよ。

これなら、もしかしたら自分の夢も叶える事が出来るのではないか、と。

そう思った自分は、さっそくゲーム機やらを片付けはじめた。

それを見た彼女達は、心底からほっとしたような表情をしたのだが……残念。

これからが本番である。

自分は片付けをして、すぐに走ってる馬車から飛び出し、その馬車の屋根の上に飛び乗った。

そして広大な草原と、近くに広がる森を見回していると、とても気持ちいい風が体を通り過ぎた。

そんな大自然に満足しながら、自分は腹の奥から……大声を出して歌い始めた。

まぁ、ぶっちゃけただの歌ならまだいい。

自分の選曲、それは……

“U・Nオーエンは彼女なのか？”のアレンジ曲、“最終鬼畜全部声”である。

それを能力フル活用しての大音量。

歌った途端に森から鳥が逃げ出す程の大音量。

……人はこれを人災と呼ぶのだろう。

自分の夢、それは歌ってみろタグのついた曲を全力で歌う事なのである。

そして最終鬼畜全部声を頑張って歌いきった所で、とある異変に気がついた。

……馬車が全く動いていないのだ。

なぜか、理由は簡単。

「……先生」

「なに、ムー君。つかなんで止まってんの？」

「……先生の雄叫びで、こいつらが気絶したからです」

……これからは、音量を下げて歌う事にします。

「……ナルミ。耳が……」

「っ……キーンって……耳なりが……」

「いたたた……」

……なんか、これは本当にごめん。

「お願いだから、音量下げてナルミ君……」

「……ごめん」

こうして、自分の大音量歌ってみろ計画は午前中で頓挫する事になったのだが……。

まっさかこれが事件の引き金になるなんて、想像もしてなかったよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＆☆

とりあえず、馬が気絶したのでちょいと早いがそこでお昼をとり、軽く休憩をする事にした。

自分はさすがにあれはやりすぎたと反省し、みんなに謝罪をした後、ご飯を食べて馬車に引きこもった。

ちなみに食事時、ご飯を持って自分によってきた赤い人はいない風に扱った。

……話変わるけど、いくらすごい馬車とはいえ、やはり揺れるのよね。

今は遊ぶために馬車にいるが、まぁやはり旅は自転車のがいいな。

そう自分が思っていると、馬車の入り口から誰かが入ってきて自分に声をかけてきた。

「……先生」

「ん？どしたムー君」

「……馬たちが先生を見るたびに怯えるようになりました」

……。

「それを報告してどうしろと？」

「いえ……とりあえず気をつけてくださいと。下手な事すると、奴らが暴走するかもですので」

そう彼は言うと、すぐに馬車から降りていった。

まぁ、確かに正論だが……。

……イヤミに聞こえるのは自分の心が荒んでいるからか？

……まぁいいや。

それより、午後をどうするかだが……。

しかたがないなぁ。

久しぶりあれをだすか。

そう思いながら、内心ウキウキしながら自分はポケットから一つの

機械を取り出した。

……さて、ここで一つ自分について語ってみようか。

自分は自他共に認めるオタクである。
だから趣味は漫画にゲーム、パソコンニコ動などなどなど、沢山ある。

だがそれらはあまり、世間様的には胸を張って言っても人によっては冷たい視線を浴びせられる趣味である。

だが、そんな自分にも2つだけ他人に胸を張って言える趣味がある。

一つは歌う事。
カラオケなどが該当する。

そしてもう一つが……

「……ナルミ、なんだこれ」

「これはキーボードという楽器だよ」

ピアノ、もといキーボードである。

自分は子供みたく興味深々にこちらをみているエリザに親切に答えてあげると、彼女は“……楽器”と一言呟いてなんか少し顔色を悪くした。

……なんなんだ？

まぁいいや。
これ、もともとは箱入りお嬢様だった母さんが子供ん時にピアノを習っていたのだが、自分がちいちゃい時に母さん直々にピアノを教えてくれたのだ。

それがずっと続き、コンクールとかには出た事はないが一人前に弾けるようになり、頑張って貯めたお金で去年新しく買ったのがヤマハ産のこいつである。

そして今ではボカロ曲を作るのに一役買っているくらいになり、頑張れば弾き歌いも……って、今の自分なら頑張んないでもできるな。

……なんか、色々今までの自分の努力を否定された気分。

自分が軽く鬱になっていると、エリザが

「これ、楽器なのか。……お願いだ、しまってくれ」

こんなことを言いだした。

「は？なぜに？」

「あんな大音量で楽器なんて……無理だ！もう耐えられん！」

ああ、つまり自分がまた暴れるかと懸念してるのか。

「大丈夫、もう反省したからんなことしないよ」

「……本当にか？」

……疑われてるな、自分。

「本当にだよ。なんなら聴くか？弾き歌いなら出来る自信あるぞ」

「……わかった、全員呼んでくる。私だけ死ぬのは嫌だ」

「……どんだけ自分、信用ないんだよ」

まぁ、当然っちゃ当然か。

こうして、この後の話し合いの結果、馬車での移動中に自分のプチコンサートが開かれる事にあいまった。

ちなみに言うと、この時午後に馬車の操縦を担当する事になっていたテトラ君は本気で喜んでいただとか。

……ちくしょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊△☆

結果だけ言うと、コンサートは成功に終わった。

「いや、まさか先生にこんな特技が……」

「本当ですね。やっぱり博識だと、それだけ趣味も広がるんでしょうか？」

「……ふつうに歌えたんだな」

「凄いですナルミさん！」

とまぁこんな感じの反応が返ってきたのだ。

ちなみに最後のは完全スルーを決め込んだ。

そろそろ涙眼になってきている。

と、ここで一つ、リム副隊長が奇妙なことを言いだした。

「で、ナルミ君。その歌詞は君の母国の言語なの？」

……？

「そうだが……ポノノ語に聞こえない？」

「いやまったく。はじめて聞いた言語だったよ」

あれ？

自動翻訳機能どうしたんだ？

故障……ではないだろうし。

なにしろ今自分はそれを使って会話をしているし……。

日本語とポノノ語……。

うーむ。

てゆうか自分は常に日本語話してるつもりだし……。

「……わっかんねーな」

自分がそう呟くと、エリザが首をかしげながら

「ん？なんと言ったナルミ」

とか言ってきた。

「あ？いやわっかんねーなって」

自分がそう言うと、彼女はさらに考える風なポーズをとり

「いや、絶対違うだろ」

「いや、そう言ったんだが……」

「いや絶対違う。というかもはやどうやって発音したのかという感じに意味不明なことを口走ってたぞ」

そのエリザの言葉で、自分は一つピンときた。

「なあエリザ、これから言うことを復唱してくれないか？」

「ん？あ、ああ」

よし、じゃあまずポノノ語。

「今日は晴れでした」

「き、今日は晴れでした」

よしよし。
じゃあ日本語。

「今日は晴れでした」

「ま、まてまて。もう一回言ってくれ」

「今日は晴れでした」

「あ、き、うははれ」

「よしわかった、あんがと」

よくわかった。

この翻訳機能、どーやら頭ん中で切り替えが可能らしい。

そりゃあ考えてみたら、日本語の歌詞そのまんま外国語に変えたらリズムに合わして歌えるはずがないもんな。

……てことはまてよ?

「なあエリザ。じゃあ今度はお前が自分に話しかけてくれ、復唱すっから」

「……ああ」

……なんでそんな不機嫌なんだエリザよ。

「晩飯は魚が食べたい」

「晩飯は魚が食べたい」

よしよし。

では今度は日本語に切り替えて。

「じゃあもっかい」

「……カパルペルプスミュヒルマイクヤム」

「……あ、ありがとう」

まぁ、とりあえず実験は成功した。

やり方次第で、自分はいろんな言語を操れるということがわかったのだ。

「……ナルミ、さっきから1人で納得してるようだが、私にもわかるように説明してくれ」

自分が1人納得してると、エリザが不機嫌そうにそう言ってきた。

つまり自分が1人だけ納得して、理由もわからないエリザを利用したのが気にくわないとな。

しかし……。

「あ、ああ。いや、あれだよあのー自分の隠されたマル秘能力の一つだよ。詳しくは言えないし自分もまだ完全にあつかいきれてない

んだ」

まさか神様から授けられた翻訳機能だーとか馬鹿正直に言ったら、あとあと面倒だ。

「……どうしてもか？」

「どうしてもだよ。下手したら自分が伯爵に殺される」

マジごめん、サンジェルマン伯爵。

だが、やはりこう言うとなんだかんだで物わかりがいいエリザと愉快な仲間達。

すんなり納得してくれたようである。

まぁ、そのかわり

「じゃあ先生、かわりにそのニホンゴを教えてください」

「あ、私も気になります」

「そうだな……それならいいだろ？ナルミ」

「わ、私も習いたいです！いつかお義母様達に挨拶しにいく時のために！！」

まあ、そんくらいなら。

……とりあえず。

「チッ」

最後の発言に対して、とても大きな舌打ちをしてやった。

「……ナルミ、お前は結構根に持つ方なんだな」

「んー？なんのこと？」

「……いつか泣くぞ、あいつ」

はん。

たまにはいいんだよ。

最近自分は彼女に甘すぎだったんだ。

一度ああやってやらんといつまでもそれを当然として受け入れる。

「大丈夫だ、ほらみてみろ。泣きそうな顔しながら、自分があげた指輪を大切そうに見つめて心の支えにしている。何事も飴と鞭の使い分けが大切なのさ。ともかくあれで気が狂ったりはしないだろう」

自分がそう小声で言うと、エリザはおでこに手を当てながら、なにかを呟いた。

「……そうやってさらにシルバを自らに依存させて縛り付けるんだな」

ん？

なんつったん？

まじで聞こえなかった。

「ん？なに？」

「いや、だいぶ普段と性格が変わってるなって。まぁ今のナルミの事を表すなら、鬼畜、外道という感じだな」

そう言いながら、エリザははぁ、とため息を。

「……自分は普通だ。そんな不名誉な称号はいらん」

「これで普通なら、かなり怖いぞ。むしろこれが本性なら、ちょっと……な」

なんぞ、本性って。

「まぁ、気にするな。それよりニホンゴを教えてくれ」

「……まぁ、いいけど」

とにかく、納得いかないが、この話はながしてやろう。

こうして、自分指導のもと日本語教室が開かれたのである。

今まさに秒読みでちょっと面倒な事がおきているなどとは気づかずに。

ちなみに余談だが、このあと日本語教室の事を知ったテトラ君が本気で悔しがったのはいい思い出だ。

39回目＊マッタリ紀行・趣味の時間（後書き）

パンパカパーン
恒例言い訳タイムの時間デスよー。

さぁ今回、まずナルミ君がゴメンナサイですね。
言い訳としては、いい加減彼もストレスがヤバいんですよ。

そして翻訳機能についてですが、とりあえず一言お願いを。

少し前にエリザが“ストレスを発信すれ”“いや、ストレスは発信でなく発散だべ”的な会話をしていましたが、ここらの突っ込みはナシにしてください。
具体的には、“日本語なら発散と発信は似てるけど、ポノノ語ならそういう言い間違いはなくないか？”的なのです。

ぶっちゃけ言うと、ここはただのネタなので。

ちなみに私、これについては完成さしてから気づきましたが……ま、大丈夫だろう。修正めんどいしというてきとあたっ！石をなげないで！

……ゴメンナサイ。
でもマジ携帯だったら、話の真ん中あたりを修正するのが面倒で……。

昔あったページジャンプ復活しないかなぁ……。

とにかく、今回はこんな感じにグダグダと作り出したモノです。

予報通り、月曜日に間に合うように頑張りました！

さぁ、じゃあ次の月曜日まで間に合うようにがんばろうかな。
全く、毎日ＧＷなら２日更新も……あ、すんません盛りました。

とにかく、こんな私ですがこれからもよろしくお願いします。

あ、あと最後に。
一応ナルミ君の設定は、これで全部（表側は）さらけ出しました。
なのでこれがナルミ君最終形態だと思って頂き結構です。

ちなみに、しばらくしたらいつものナルミ君に戻ります。

まぁ、またには彼もガス抜きしてやらんとかわいそうですからね。
……でもなんか、ナルミ君の人気が落ちそうな気が……。

まあ、いっか。
ナルミ君だし……ん？

これはハンターの気配……！！

ふっ、やられっぱなしの私ではない！

私も日々進化しているのだ！
というわけで皆さん！

さらばっ……あれ？

なんで剣が銃に変わるの？

なんでそんな現代的な服を着ているの？
なんでハンターさんそんなジャンプでき……あれ？

え？
アラガミ？

違う違う、私はただの善良な南師希少種だからった！？

これは内臓破壊弾！？
ちょまっ！

あたたたたた！！

あっ！
喰わないで補食しないでってぎゃぁぁぁぁぁ！！

……ちなみ私の中では、ＧＥはストーリーを楽しむものです。

それでは皆様、またいつかー

４０回目＊自分はＳではありません（前書き）

はぁぁぁ

なんか前回消した割にはな内容すぐる

そしてなかなか文章が安定しない

とりあえず、前回の内容すっ飛ばして後にやりたかったお話しを無理やり詰め込むという形に落ち着きました

あと、今回のナルミ君も相変わらず壊れてますのでごめんなさい

そして、更新遅れてごめんなさい

40回目＊自分はSではありません

それは、自分が疲れてまだ太陽が沈まないうちから昼寝してる時におきた。

「シルバ、お前そんなにナルミの寝顔を見つめて……端から見ると気持ち悪いぞ」

「私はナルミさんにだけ受け入れてもらえたらそれでいいんです」

「……そのナルミにも7日間の拒絶を宣言されてからに」

「まぁ、先生は加虐趣味の持ち主ですからね。いじめていじめぬいてそれに快感を見いだす方ですから、これも先生の趣味の一環でしょう」

「加虐趣味があるからこそシルバの被虐趣味とうまくかみ合っているからある意味いい夫婦ですよね」

「ならきっと、寝室を探したら首輪とか縄とかの拘束具とかがでてき……てててて！！」

「リム。舌、抜くよ？」

とかなんとか、ひっじょーに不愉快極まらなさすぎる会話がなされていたらしいのだ。

ちなみに、なぜ知ってるかってーと彼女、シルバちゃんが“いい夫婦”とかの部分で気をよくして、寝起きの自分に話しかけてきたか

らだ。

だが、自分はそれを当然のごとく無視してボケーッとしてると、彼女はまたもや泣きそうな表情になっていた。

……別にこの表情がいいとかは……少ししか思ってないですからね！！

と、んなこたどーでもいい。

そんな事より、これから先のが大事なのだ。

自分は寝起きの頭を覚醒させようと、走ってる馬車の扉を開け、そこから屋根に飛び乗り気持ちよく風をあびながら、屋根の上でほんのり紫がかってきた空を眺めていた。

もとの世界の都会とは違い、街灯やらコンビニやらの光がないこの世界の草原からは、まだ太陽が残っているにも関わらず星がキラキラと輝いていた。

自分の地元も、田舎と都会との中間くらいの発展をしている街なので、ある程度星は見えるがさすがにここまできれいに見えた事はない。

地元と違い飛行機も飛ばないから静かだし、選挙カーのうるさい叫びも聞こえてこないし、ゴミを漁るカラスもいないし。

それに、あの抜けてる母さんの世話しなくていいし、なに考えてんだかわかんない父さんの相手しなくていいし、電波や脳天気やムダに万能な友人たちと付き合わなくていいし……あれ？

なんか目頭が熱くなってきたぞ？

……。

……。

「……みんな、元気かなぁ」

……うん、キャラじゃないね、自分。

なにいまさら故郷に想いをはぜてんのさ。

確かに会えないのは寂しいが……寂しいが……。

……。

やめやめ！

自分は今こっちに専念するんだ！

ぶっちゃけもうなんだかでお嫁さんいたりでここ離れる訳にもいかんし。

そもそも魔力が邪魔して帰れないんだから考えるだけ……ん？

魔力が邪魔して？

……マナの枯渇をしながらだったら元の世界に帰れるんではなかろうか？

……。

……やめよ。

どーせ帰っても、存在消されてんだ。

居場所なんかないんだったら、こっちで生きてたほーが断然いい。

うん、そうだそうだ。

全く、イライラ通り越して一周してなんか心が折れそうだ。

考えてみたら、なんだかんだで自分の能力とかばっかり見られて自分自身をきちんと見てる奴少ないよーな気がするし。

……そういや腹割って自分の事とか考えとか境遇とか昔話を隠す事なく話す事が出来る人いないしなぁ。

……みんなは、自分を本心じゃあどう思ってるんだろうか。

……何も気にせず、母さんの味噌汁がの飲みたい。

……。

「生きてるうちにもいちど会いたいな……」

うん、なんだ自分。

なんか青臭いぞ、なに青春しとるんだ。

と、一人ナイーヴな感じになりながら空を眺めていると、空に1羽の巨大な鳥のような影が現れた。

「せん…い…」

その巨大な鳥っぽいそれは、馬車の上をクルクル三回くらい旋回しだした。

「せんせ……せ……い！！」

その後、自分に足を向け、まっすぐ突っ込んでき……は？

「先生！！」

「うおっ！」

なんとかよけた自分は、そのまま草原に肩から落ち、激突した。

そしてさっきまで自分がいた馬車の屋根、そこには

「アァ～～ッ！アッア～！！」

なんか奇声を発してる2メートルはあろうかという真っ黒な鳥……

まぁ、見た目カラスである。

ただ、足がなぜか3本だが。

「なにこれ八咫烏（ヤタガラス）！？」

自分はたしかそーだった気がする名前を無意識に叫んでいた。

その八咫烏の近くで、テトラ君が弓を構えて油断なく八咫烏……め

んど、カラスでいいや、カラスに狙いを定めている。

で、当のカラスはと言うと

「アッア～！ア～！ア～ア～！！」

自分をガン見しながら叫んでいる。

しかし……なんだ。

なんかこな叫び聞いた事ある。

それに、こいつ自分らを獲物として見ていない……気がする。

なぜかはしらんが。

と、考えているとそのカラスは再び翼を使い飛び立ち

「アッア～ア～ア～ア～！！」

「うわっ！！」

自分の目の前に降り立った。

だが、なにか様子がおかしい。

降り立ったあと、自分の周りをピョンピョンと跳ね回りながらずっと叫びまくっている。

「アア～ア～ア～！！」

「……なんなんいったい」

自分の今のステータス表示を見たら、きっと“こんらん”とでているだろう。

そしてカラスはというと、何回かピョコピョコ飛び跳ねたと思ったら、猫みたいに自分にすり寄ってきた。

「アッアッア～！アアアッア～！！」

「……誰か助けてぇ」

もうね、軽く恐怖だよ。

なんでいきなりこんな巨大野生生物に懐かれにゃならんのだ。

「……ナルミ、いつの間にシャモを手懐けた？ていうかどうやった？」

「は？軍鶏？八咫烏でなく？」

いつの間にか近衛隊を引き連れ、ひょっこり現れたエリザは呆れ半分、尊敬半分な微妙な視線で自分を見始めた。

周りの近衛隊員たちも、一部を除いて同じような反応だ。

「にほんではやたがらすと言うのか」

「まぁ、うん。確か。ただ初めて本物見た」

まぁ、日本に本物の八咫烏なんかいないんだがねぇ。

ちなみに軍鶏は鍋がうまい。

「そうか……いや私も初めてシャモなんか見たんだがな？」

「はーそうかってこりゃ！乗るな！！」

自分がエリザとそんな会話をしていると、何を思ったかその八咫烏……もといシャモが自分の右肩に乗ってきた。

それを振り払おうと腕をバタバタやってると、なんとかシャモは肩から飛び立ったが、今度はその右手に乗り始めた。

形としては、鷹狩のあの……名前忘れた、あの鷹操る人たちみたいな。

ただ、桁違いの大きさだが。

「……本当にいつのまに手懐けた？」

「いや、手懐けた記憶なんかないって」

「いやでも……懐いているではないか」

「しらん」

そんな会話をしていると、後ろから爆音が轟きはじめた。

慌てて見てみると、そこには仰向けで転がっているスゥ君が。

「……なにやっとるん？」

「……いえ、本物のシャモに触れるなんてそうあるものじゃないので、つい」

「……ななな、いまさらな質問だが……シャモってそんなに貴重な生き物なん？」

とりあえず自業自得なスゥ君は平気そうなんで捨て置いて、目の前にいるエリザや近衛隊員たちにそんな質問を投げかける。

そして、その質問に答えてくれたのは未だに霧雨さんのような格好をしたメルちゃんである。

ただ、なんか歯切れが悪い。

「まぁ、貴重というか……さすが師匠というか凄いというか……」

「なんね。怒らんからはっきり言いんしゃい」

そう言うと、彼女は目線を空に逃がして気まずそうに頬を掻きながら

「……あー…あのですね……。……野生の魔物です、それ」

「……は？」

「ま、魔物ではありますが、その……むしろ神獣の一体に数えられていて、風神の使いとも呼ばれています……はい……」

……まぁ、話はわかった。

だがそれだけでそんな微妙な反応する意味がわからん。

「……で、あの…とても気難しいというか、その、普段はおとなしいのですが、危害を加えたり下手に近づこうとしたりすると……」

そう言いながら彼女が指差す先には、土埃を払いながら立ち上がっているスゥ君が。

「……なまじ、むしろ魔物より魔獣といった方がいいくらいに能力が高いので、下手したら死にます。風神の使いはだてではないのです」

だからスゥさんもかなり手加減されてますね、と、若干引き気味に視線を泳がしながら彼女は説明してくれた。

……うん、シャモについてはわかった。

だが……。

「なぁ、なんでそんな挙動不審なん？」

メルちゃんの挙動が不審すぎるのである。

その答えには、彼女が自ら答えてくれた。

「いえだって……まだ子供とはいえ、神獣手懐けるとかいくらなんでも非常識というかおかしいというか……近づく事さえ難しいのに、手懐けるなんて聞いたことありません！そうでしょう皆さん！！」

「いえ、ナルミさんですからこれくらい当然かと……」

「まぁ、先生ならね」

「先生ですからね」

「ナルミ君なら仕方ないよ」

「ナルミだから別にそこまで……あ、そうだナルミ。後で羽を一枚くれないか？加工するといい魔法具になるのだ。髪飾りなんてどうだろうかミミリィ」

「せっかく羽を貰えるのなら、どうせなら二枚使って腕輪にしたほうがいいのではないでしょうか？」

なんねその無駄な信頼。

そしてエリザ、勝手に話進めんな。

てゆーかこいつ子供だったんかい。

あまりに異常なみんなの反応に、呆然としているメルに向かい自分は再度質問をする。

「なな、こいつ成長したらどんくらいになるん？」

「……ありえないでしょ普通……。あ、はいなんですか！？」

……とりあえず最初のはきかんかったことにして。

「このシャモさ、成長したらどんくらいになるん？」

「あ、はいシャモですね。今の約……15倍くらいにはなるかと。本で読んだ時にはそのくらいだって書いてありました」

……。

「よし、巣に帰れ」

「アー！アー！」

自分がこのカラスを逃がそうと腕をふると、カラスはすんなり腕から離れた。

そして、空高く舞い上がったのち

「アー！アアー！！」

「……てめっ」

再び、今度は左肩に乗り始めた。

いったいなにがしたいんこいつ。

あれか、焼き鳥にして欲しいのか？

「……先生先生」

自分がこのカラスをどう調理したらおいしいかを考えていると、今まで黙ってたテトラ君が自分に話しかけてきた。

「……なんね」

「なんか、そいつ先生を親だと思ってるっぽいです」

……は？

「ちょまっ！え、なにそれ。どこ情報？」

「シャモが飛んできた森の木が面白そうに囁いてました」

……そーいやあったね、花妖精の植物会話能力。

すっかり忘れてた。

「ちなみに理由は、先生の声を聞いてそれを親の声と思ったからですよ？」

声って、いつこいつは聞い……あ、そうか！！

「さっきからこいつ、全部声みたいに鳴いてたんか」

「アッア～！！」

どーりでなんか聞き覚えある気がするはずだ。

だってさっき歌ってたんだもん。

「ちなみに、なんでそのシャモがここまできたのか詳しく聞きますか？」

「う〜ん。うん、頼んでいい？」

「はい、大丈夫です。……つーわけでそこの木材共、話すか伐採か好きな方を選べ」

……君は植物にはやたら強気だな、テトラ君。

多分君は内弁慶なタイプだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊Φ☆

とりあえずその後自分たちは、そのカラス、もといシャモを無理やり肩から下ろし、いい時間なのでそこにテントを張って寝場所を確保する事にした。

なのでお話しはそれが終わり、夕食を食ってる時にする事になった。

なので今は夕食時。

炙り干し肉をかじりながら自分はテトラ君と二人で話をしていた。

ちなみに、他のみんなはシャモに夢中だ。

頭はいいらしく、待てと言ったらその場で小さく鳴き歌いをしながら羽を時たまバサバサ動かして馬身の近くでみんなに触られたり肉を与えてられたりしている。

まぁ、約一名、自分の後ろで服の裾をキュッとつかみながら一緒に

干し肉をかじってる赤い娘がいるが……なんだろう、この娘、息が荒い。

「……はぁ、ん……ナルミさん……私そんな…意識して無視して…
…そんなに私を……はぅ……」

……なんか、もはやこいつ放置に目覚めたか？

……うん、無視しよ無視。

罠かもしれん。

顔があまりにもで押し倒したくなったが無視だ無視。

「つまり、このシャモは生まれてまだ半年も経ってないのに、つい最近親を罰当たりな狩人ってーか山賊みたいなやつらに殺されて、ここまで逃げてきた、と」

「はい、なんでも、かなりの人数で囲み、まだまともに飛べないあいつばかりを魔法で狙って守ろうとしている親の隙を突いて殺したのだとか。で、親が必死に守った結果こいつは命からがらここまで逃げてきた、っていう訳ですね。あと、半年じゃありません。半月です」

「なぁ、シャモの成長速度ってどんだけ早いんよ？」

「知りませんよ。ほとんど文献にも詳しい事はかかれていない、謎の多い生き物なんですから」

うーむ。

なんか、なぁ。

てゆーか神獣、そんな簡単にやられるなよ。

「それで、ここからが重要なんですが……先生も普通神獣とか呼ばれる生き物がそう簡単にやられるなんて思いませんよね」

「まぁね……ジャストでそう思ってた」

「全くその通りです。分類としては魔物ですが、強さは魔獣と肩を並べる程の強さを持つ生き物ですよ？普通いくら魔族があつまっても倒せませんよ……先生は除いて」

「……そこらへんはわからんの？」

とりあえず、魔物と魔獣の線引きはどうなのかというのは横においとこう。

「実は、奴らは魔獣を使ったらしいのです。仲間が隙を作ってる間にシャモの近くで魔獣を召還し、親シャモを殺した、と。なにか特殊な道具類をつかったらしいのですが、そこらの情報やどんな魔獣かについての情報がないのでこれ以上は……。先生が怒ってここらを焼き払うかもしれないと言っても草達は知らないとしか……肝心な所で役に立たなくて、腹立ちますよね？」

「うん、自分は今君に腹立ってますかな。なに勝手に人の名前出して脅しとくれとんじゃい」

……はぁ。

本当にこいつらは、ほんとは自分を利用しようとしてるだけなんと違うか？

……あ、ダメだ。

なんか、疑心暗鬼になってきてる。

「……うん、わかった。……ちょい自分、あいつの様子見てくるわ」

自分はそう言うと、残りの肉を口に放り込み、気分を変えるべくシャモの所にいくために立ち上がった。

そして、そこで違和感を感じた。

その違和感がなんなのかわからないまま、自分はシャモの所にいくのであった。

で、シャモの所に行った時、自分はその違和感に気がつくのである。

「……いい？私がお母さんで、ナルミさんがお父さんなの。わかった？」

「アー！アー！！」

さっきまで後ろでいろいろ覚醒していたシルバちゃんが、シャモに変な事教えていたからだ。

いつのまに移動した。

ちなみにみんなは、少し離れた所でご飯を食べている。
多分、近くだと取られるからであろう。
「……こいつは」
もう、どうしよう。
なんかこの娘、本当に脳みそあるんだろうか？
本能のままに動いているよーにしか見えないんだが。
……あーくそ、またイライラしてきた。
くっそ、今日の自分は情緒不安定だな。
「……先生、どうしたんですか？」
「んあ？」
自分がイライラしながら、シルバちゃんがシャモに変な事を教えているのを眺めていると、後ろから再びテトラ君がやってきた。
どうやら彼もご飯を食べ終わったようだ。
「あーいや……あの娘はいったいどうしたもんかとね。……かわいいにはかわいいけど、暴走するのがね……ほら、あんなふうに」
そう言いながら指差す先には、いまだにシャモに話しかけてるシルバちゃんが。

「そうよ、ナルミさんはお父さんで、私の旦那様なの」

「アー！アアー！！」

「あぁ……。全く懲りてませんね」

「だべ？さっきなんてもはや放置プレイに目覚めたんだよ？」

もう、自分こいつがわからん。

……まぁ、別れる気にはならんが。

「……いっそ拘束して首輪に繋いで監禁してしまえばいいのでは？シルバも悦び、先生の趣味にも合いますし、なにより繋いでしまえばもうなにも……」

「君は本当に自分をなんだと思っとるん？」

「……結構真面目に言ってるんですが」

いや、これが真面目とかダメだろ。

そして、なにより自分はＳではない。

ただ少し、いじり癖があるだけだ。

「……もう自分、お前らがわからん」

「らってなんですからって」

自分はそんな事を言ってるテトラ君を無視しつつ、テトテトとシャモとシルバちゃんがいる方向へと歩いていった。

そして

「シールーバーちゃん」

「え?は、はいっ!!」

シャモになんか教えてるシルバちゃんに話しかけた。

シルバちゃんは一瞬反応が遅れたが、すぐに輝かしい笑顔でこちらを向いてきた。

「な、なんですかナルミさん!!」

その表情はもはや動かないといわれていた両足が、名医の手により完治して再び動くようになったサッカー少年のように希望に満ち満ちた顔をしている。

そんな彼女の顔に、自分は

グワシッ!!

容赦なさすぎるアイアンクローをかましてやった。

「え?いたっ、いたたたた!!」

「君さぁ、反省するとかゆーのは考えないん?開始1日経たずにこれとか、なんなんよ?あんまりちょーし乗ると……そうだな。なん

ならもう別れようか？何言っても聞かないよーなバカな娘は、自分嫌いだし」

実際別れる気なんかさらさらないが、こうやるとほら、さっきまで輝いていた瞳はどこへやら、その眼は恐怖と絶望とで支配されてしまっている。

「や、やぁ……やだ…そんな……」

「だったら」

自分はそう言ってアイアンクローを解き、薄く涙を流している彼女のあごに手をやって無理やり上を向かせる形にし、そのまま耳元で優しく囁いてあげた。

「残りの日数は、賢く過ごす事だね。あまりふざけた事ばかりやってると、後で泣くハメになるからね」

そう言ってそのままペロリと彼女の頬に流れた涙を一粒軽く舐めとり、彼女から手を離した。

すると、彼女はそのまま膝から崩れ落ち、膝立ちのような格好で虚空を眺めだした。

そんな彼女を自分は再び無視し、そのままテトラ君に……なんね、その顔。

「……どした？」

「……いえ、ただ……やっぱりなんでもないです」

？

なんだ、変な奴だな。

でもまぁ……少し、スッキリしたかな。

それにしても……シルバちゃんのあの表情（かお）は……。

「ククク……」

「……先生、不気味に笑うのやめて下さい。怖いです」

「……自分は笑ってなどいないぞ、うん。ただシルバちゃんの泣き顔を思い出してただけだ」

「……真性だな」

「なんか言った？」

「いえなにも」

……？

本当にこいつはなんなのだろうか？

とりあえず、これでシルバちゃんの問題は……まぁ解決したと思いたい。

して、残りの問題は……。

「アアアー！ア！ア！アア！！」

こいつよねー。

なんね、こいつ自分見て喜びはじめるし。

どーしましょうか……ん？

……あれ、いまなんかとてつもなくめんどくさい事に気がついてしまったぞ。

「なぁなぁテトラ君」

「はい、なんですか？」

「……こいつがおそわれたのって、いつらへん？」

「6日くらい前らしいですが……それがどうかしましたか？」

「……なんでこいつここまでそんな時間かけて逃げてきたのかな？」

そう言って自分は、冷や汗を流しながらシャモの嘴を優しく撫でてやる。

すると、シャモは嬉しそうにアーアー鳴きはじめた。

「……先生の声が聞こえたからじゃあ」

テトラ君は、自分が言いたい事に気づいたように、しかし現実から

目を逸らそうとしながら彼なりの推測を立てている。

「自分、歌ったのは今日なのですが。……で、こいつ1羽いたらどれくらいの金になる？」

そう言いながら、自分はテトラ君の方を向き、親指でビシッとシャモを指差した。

「……程度にもよりますが、死体でもしばらく遊んで暮らせますね」

もうこの言葉で確信したね、自分の考えが正しいと。

「……これは、その盗賊がこいつを追ってきてると考えるべきだな。しかもこいつをどっかやっても、魔獣を持ったやつらが強気になって自分らを襲わないとも限らんし、警戒しとくに越した事はないだろう」

「至急、全員にその事を伝えてきます」

テトラ君はそう言うと、みんながいる所まで走っていった。

その顔は、焦りとかそんなものがありありと見える。

「アー！アアー！！」

「お前はなんちゅーか……のんきだなぁ。狙われているのに」

とまぁこんな感じに、自分らはこの一晩をのんきかつ緊張しながら過ごしたのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊Φ☆

……と、なる訳もなく。

「……なんで自分が。アニメもニコ動もないのに徹夜なんて。しかも男と身を寄せ合って」

「……それは先生が一番魔獣が出てきた時に対処できるからです。あと、女性と一緒にだったらそれはそれで危険ですし。なにせ先生に襲われたら、だれも抵抗できませんもん。シルバだったら喜ぶでしょうが」

「……君は自分を理性のない野獣とでもおもっとるん？」

「夜の男はみな肉食獣です」

自分はテトラ君と寝ずの番をする事になったのである。

ただ、丸まって眠っているシャモが意外に暖かいのがよくわかった。

いや、さすがに真夜中に雲一つなくなるともう寒いのなんのってね。

……ただ、男二人が身を寄せ合って鳥にくるまってる図はあまり気持ちよいものではないと思われる。

あ……朝日が出てきた。

あー、超眩しいー、ぬくいー、灰になるー。

「アー！アアー！！」

そして日が昇ると同時にシャモが起きて騒ぎだした。

……うるさい。

頭に響く。

「……黙れし。鶏ガラスープにすんぞ」

「あはははは、先生もさすがに覇気がなくなってきてますね」

そしてこいつはナチュラルハイになっちゃってるし。

ちなみに、テトラ君が見張りに選ばれた理由は、草達を経由した広範囲感知能力のせいである。

昼は馬車を操作して、夜は寝ずの番とかご愁傷様すぎる。

そんな会話をしている自分たちは、もうテンションが異常すぎるのだ。

片やナチュラルハイ、片や徹夜による半ギレ、そして野生の巨大鳥。

色々と危ないパーティーである。

そして、この時自分はまだ気がついていなかった。

ヌラリヌラリと迫り来る、敵意剥き出しの恐ろしい魔の手に。

「あははは……！？先生！！」

最初に気がついたのは、変なテンションでもきっちり周りを警戒していたテトラ君であった。

彼がいきなり立ち上がり、弓を構えたちょうどその時、目の前にある森の一部がまるでそこだけ光が届かないかのように黒い霧に染まっていった。

「アアー！アアー！アー！！」

その途端、今まで楽しそうにしていたシャモが怯えたように騒ぎはじめた。

そのことから、自分は今まで警戒していた“敵”がやってきた事を確信し、一護を構えて自分も迎撃体制をとる。

そして、目の前の霧に覆われた森からは、霧の中でバキバキと木をなぎ倒す音を響かせながら、中から何人かの人影が姿を表した。

「……あぁ、なんだ獲物が増えてる」

「本当だ。残念、僕らにあっちゃった不運を恨んでね」

「馬車か……商人か貴族か、どちらにしろ金になるのは確かだな」

彼らはそんな思い思いの言葉を発しながら、ずらずらと何人も霧から出てくる。

その数えっと……ひぃふぅ…１６人。

みんながみんな黒いコートを着込んで顔を隠しているという、どっかの13人構成の機関みたいな格好をしている。

その中のリーダー格みたいな一人が、彼らの中から一歩前に出てきて自分たちにこう告げる。

「まぁとりあえず、積荷とシャモを置いて逃げるなら命だけは助けてやる。……あぁ、女がいるならそいつらも置いとけよ？俺らが可愛がってやる」

そして、その男の言葉で自分は色々プチンときた。

さらに昨日から微妙に続くイライラプラス徹夜のストレスなどなど、もう自分色々限界だったようだ。

「クハッ！ウキャキャキャキャキャキャ！！」

自分は両手を広げ、のけぞるように空を仰ぎながら口を大きく開けて腹の底から笑いを上げた。

「……せん、せ？」

「ア、アー」

「な、なんだ！？」

「わからん。後ろのシャモの影に隠れてよく見えない」

自分のいかにも壊れた笑い方に、近くにいたテトラ君はもとより、遠くにいるあいつらまで引いている。

だが、自分はそんなものを気にもせず、そのまま左手で顔を覆い、前屈みになって言葉を発する。

「ふーんそーですかそーですか。君たちは自分より強いつもりですかわかります」

そして前屈みになったまま、右手に持った一護を抜刀した。

「あまつさえ、自分のお嫁さんをそーやって慰み者にするよーな発言。いいねぇ、その腐った考え。うん、実に清々しいくらいに三流悪役の考えだわ」

「……貴様！」

「僕達をバカにしてるよーだねぇ」

「わざわざ死ぬ道を選ぶとは、バカな奴」

「はっ！グチグチうっさいよショッカー共」

色々なにかを言ってる黒い奴らに自分はそういいながら、鞘を後ろに放り投げて自分は続ける。

「とりあえず、自分への睡眠妨害及びその強姦未遂発言から、君ら全員……どうしてやろうかねぇ」

「……シャモ、みんな起こしてにげるよ。このままなら巻き込まれる」

「アー！！」

なんか後ろでテトラ君たちがなんかやっているが、そんな事はきにしちゃいねぇ。

自分はすべてのストレスをこいつらにぶちまける事を心に決めたのだ。

だが、奴らはそんな自分の反応が気に入らないようで、奴らも奴らでキレはじめた。

「貴様！いいだろう！我々の力を見せてやる！！」

そう言いながら、リーダー格の男が右手を上にあげると、後ろにあった霧の中から、なにかがヌメヌメと這い出てきた。

「あーあ、まともな死に方できないよぉ」

「……女もいるはずなのに、もったいない」

そう言う奴らの声は、言ってる事とは裏腹にとても楽しそうな声である。

「フハハハハ！出てこい！魔獣ゴッペル！！」

そしてリーダー格みたいな男がそう叫び、出てきたのはとてもグロテスクな生き物だった。

「うわぁ……」

後ろでテトラ君がこんな声を出すくらいにグロテスクなのである。
それはなにかと言うとだ……タコと鮭をとカニを足したような生き物である。
正確には、蛸足の生えた鮭がタラバガニのハサミを持っているという形である。
それが口から墨みたいな霧を撒き散らしているからなおさら気持ち悪い。
だが、曲がりなりにも魔獣ぶった斬りを果たした事のある自分が、脳内麻薬分泌されまくりの状態でそんな事を気にする訳もなく
「で、だからなに？おろして刺身にしてほしいんですかぁ？」
思いっきり挑発して、魔獣をスライスする気満々でいた。
なにせ睡眠妨害の原因だし。
しかも見下した態度が超腹立つし。
何よりシルバちゃんに手ぇ出そうとするし。
ウラミハラサデオクベキカァァァ！！
「この！よほど死にたいようだな！！」
「ごめん、睡眠妨害及びシルバちゃんに手ぇ出そうとしたクズに殺られるつもりはさらさらないから」
とりあえず、こうして戦いの火蓋は切って落とされた。

だが、自分はまだ気付いていなかった。

この後に、己の信念を賭けた壮絶な戦いが繰り広げられる事を、この時の自分は全く気がつきもしなかったのだ。

「……先生」

「なんね、邪魔すんな」

「いやまぁそうですが……ひとつだけ言わして下さい。先生も何だかんだで最終的にはシルバ中心に物事考えていませんか？」

「……空気読め」

「……否定はしないんですね」

「いいから！みんなの避難をさせなさい！！」

「……みんな先生が戦うなら大丈夫だろうって二度寝しましたので、途中で諦めました」

「……それでいいのか近衛隊」

「ダメでしょうが……まぁ、先生が相手ですから、特に問題は」

なによその無駄な信頼。

……これは、近衛隊の意識の引き締めをしなければいけないかもしれないな。

ちなみに、この時奴らは何を考えているのか自分たちに攻撃もなにもしてこなったあたり、やっぱり奴らは変身ヒーローに出てくるザコ敵臭がプンプンすのである。

「貴様ら！何俺らを無視してんだ！！」

あ、さすがにキレたか。

まぁいいや。

「ごめん、眼中になかった」

「てんめっ！！」

こうして、本当に戦いの火蓋は切って落とされたのである。

４０回目＊自分はＳではありません（後書き）

ぱんぱかぱーん

はい皆様ごめんなさい

今世紀最大の糞ユーザー南師です。

いやぁ、前回はごめんなさいです。
本当に。

ちょっとお話しの進行上、やりたい事があって前回のを書いたんですが……

ぶっちゃけます、詰め込みすぎました。

もういっぺんに設定詰め込んでしまった結果、暴発してしまった形になっちゃいました。

本当に、沢山の方々にご迷惑および不快な思いをさせてしまい誠に申し訳ございません。

さてさて、では今回のお話しですが

まぁ、ナルミ君が色々覚醒しちゃいましたね。

ただまぁ、徹夜明けったらみんな変なテンションになりませんか？

……あ、ならない。

そうですか。

……とりあえず、皆様を安心させる一言を。

次回、ナルミ君は元に戻ります。

遅くても次回の次には戻りますってか戻します。

きちんと彼にはストレスを発散させて、睡眠を取ってもらいます。

で、唐突にですがこれからの予定を。

前書きにあった通り、後に書くはずのお話しを先に引っ張ってくる形になります。

で、これからは近衛隊員一人一人がある程度メインになれるお話しをつくろうかなぁなんて考えています。

なので数少ないムー君やスゥ君ファンの皆様、期待していて下さい（笑）

とりあえず、今回の詳しい言い訳は次回という事で。

そして、私事ながら諸事情により今日から二週間、日常生活がかなり忙しくなってしまいい、更新がやや遅れるかもしれませんが、ご理解の程をよろしくお願い致します

こんな南師ですが、これからもよろしくお願い致します。

41回目＊それが日本の文化です（前書き）

最近感想の返事を書いてないのに気がついた

気持ちは書いてたつもりだったのだが……ごめんなさい

でも今週は忙しいので、ちまちまとしか返せません

でもきちんと返します

ごめんなさいです

４１回目＊それが日本の文化です

さあ、結果だけを言おう。

「でりゃぁぁ！！」

自分は難なくタコ鮭を真ん中から真っ二つにした。

「……は？」

「……え？」

２つに別れて倒れていくタコ鮭を見て、奴らは状況を理解出来ずに固まっていた。

だが自分がそんな隙を逃がすはずもなく

「はいおやすみ」

「みっ！？」

「みゃのっ！？」

「ぺっ！？」

バチバチバチという音を出しながら、自分は奴らに１０万ボルトを放つのである。

すると、自分の能力によりマヒ率１００パーになったそれをくらっ

た奴ら……5人くらいだが、奴らはみんな地面に崩れ落ちた。

「さぁて……次はどーしましょーかねぇ……」

自分はそのままフラフラとまだ起きてる奴らに近づき、小さくカタカタと再び壊れたような笑いをしはじめる。

そして、その様子を見た奴らの中の一人があることに気がついた。

「……あ」

「っ！どうした！油断するな！！」

「……黒髪に黒眼に……あれ、虚無の黒騎士だ」

そう誰かが言った直後、奴らは一瞬固まったのち

「……に、逃げるぞ！！」

そう言って一斉に森に逃げようとした、が

「なぁっ！？」

「ちょっ！なんで草が！？」

「枝！うわっ！！」

森の木やらなんやらが奴らを一瞬で捕縛し、全員が見事に捕まった。

だが、自分は何がおこったか理解できない。

なにせこれは自分がやった訳ではないからだ。

「……なんだ、いきなり」

「先生、花妖精なめないでくださいよ？植物との交渉などお手のものです」

あ、テトラ君か。

なるほど、そんな事もできたのか。

まぁとりあえず。

「……ふぅ。これで全部か」

自分がそう言いながら、木に絡まってる奴らを見ると、みんな思い思いの行動を取っている。

ある者はもがいて逃げようとし、ある者は電気いすを目の前にした死刑囚のような顔をし、ある者はよだれたらして気絶している。

中には、こちらに罵声を浴びせている奴もいる。

……ふむ。

「テトラ君テトラ君」

「はい、何でしょう？」

「ん」

自分はよくわかんない声と共に、ポケットからス〇ランテープを取り出し、彼に渡した。

「……何ですか？」

「全員縛っといて。自分は眠いから寝る。起きた後にどーすっか考えるべ」

そう言って自分は後ろを振り向き、どっか適当なテントに入ろうとして、あることを思いついた。

「えい！」

あのタコ鮭魔獣を腐って腐敗臭放たないよう、氷漬けにしてやったのだ。

すると、今まで何だかんだわめいていた奴らが、一瞬で黙りはじめた。

なぜかと思い、そちらを見ると、みんなして“ひっ！！”と小さな悲鳴をあげながら、ガタガタ震え、怯えている。

なるほど、理解した。

だが、んな怯えんでも別に君らを氷漬けにはしないし。

はぁ……疲れた。

寝よう。

自分はそう思いながら、適当に近くのテントに入っていった。

が、たたき起こされた。

「ちょっ！先生！！」

「……ちっ！なんね」

「この赤い紐、切れません」

つくづく思う。

もしやこの世界ではプラスチックは最強なんじゃないかと。

＊＊＊

がおったそうな。

ちなみにテトラ君は過労により寝袋で夢の世界にレッツゴーしている。

……で、エリザなにしとるん？

「なにやってるん？」

「ん？これか？これは奴らが持ってた地図だ」

そう言いながらも、なおも地図に穴が開く程それを見ているエリザの顔はもはや真剣そのもの。

……なんだ、気になる。

そう自分が思っていると、エリザは地図をたたみミミリィ隊長に手渡した。

そしてミミリィ隊長はそのままそれを持って馬車に消えていった。

……超、気になる。

「ところでナルミ」

「んぁ？」

あ、つい考え事してたから変な声が出てしまった。

「あいつらをどうにかしたいんだが……なんとかなるか？」

……ごめ、よくわからん。

「なに、どゆ意味？あれか、この場で処刑しろとゆー訳か？」

「違うわ。このままこいつらを連れてく訳にも、連絡して兵士をここに呼ぶのも時間がかかる。だからこう……ナルミの能力で一気に」

「あぁ、なるへそ」

つまりこいつらを王都まで連行しろゆー訳ね、理解した。

「まぁ、可能、うん可能」

「よし、なら頼む。なに、そいつらをそこらの兵士の真ん中にぽんと落としとけば後は父様が勝手に裁いてくれる。まぁ王族（わたし）に刃を向けたんだからろくな判決にはならんだろうがな。じゃあ今から私は父様にこいつらについてとかの手紙を書いてくるから、少しまってくれ」

そうエリザは一気にいうと、馬車に消えて……ん？

「アアー！！」

「……ありがとう、慰めてくれてるの？」

……なんだ、馬車の横に黒い塊に包まれた、赤い少女の姿が見えるぞ？

「……大丈夫よ。もう、泣かないって決めたの。次に泣くのはあと6日後、ナルミさんの腕の中で……抱きしめてもらってから……ぐ

ずっ…ごめんなさい…ごめんなさい」

……見なかった事にしよ。

見てたら自分、変になる気がする。

「ねね、ナルミ君ナルミ君」

自分がシルバちゃんから視線を外した途端、後ろからリム副隊長が声をかけてきた。

「あの魔獣、どうするの？残すのもあれだし、燃やしちゃおうとしても凍ってるから無理だし……」

そう言いながら彼が指すのは、先程自分が斬った魔獣……名前忘れた。

とりあえず、タコと鮭とカニを足して3で割ったみたいな生き物だ。

「うーん、まぁ氷溶かして……」

そんな生き物の死骸を見ながら、自分はリム副隊長の質問に答えようとして……

……自分の中では最善な答えを導き出してしまった。

「……ナルミ君？」

自分は話を中断し、ふらふらと魔獣に近寄った。

そしてポケットから一護を取り出し、おもむろに魔獣のタコ足のう

ちの三本の先端を氷ごと切り落とした。

拳大の氷に包まれたタコ足がことりと地面に落ち、自分はそれを拾い上げた。

この時の自分は、今考えても何を考えていたのかがわからない。

だが、少なくとも一つの欲望に支配されていたのは確かである。

自分はタコ足の氷を溶かし、そして何をトチ狂ったのかそれを……

パクリ……もっちゃもっちゃ

「……普通にタコだな」

躊躇いなく口に放り込んだ。

本当に、なんで最初にあいつを食べようなんて考えたのかはわからない。

だが少なくとも、今の自分はそんじょそこらの生き物が持つ毒程度では死なないという確信と、長らく口にしていなかった日本食への恋しさが主な原因だと自分は分析する。

そして、ここから自分の行動は早かった。

まずタコ足を三本切り落とし、次にカニバサミも切り落とし、最後に鮭の腹を大きめのブロック状に捌いて馬車付近に戻ってきたのである。

「……ナルミ君、それどうすんの？」

自分がルンルン気分で馬車までくると、リム副隊長が頭にハテナを浮かべながら聞いてきた。

それに対して自分は満面の笑みで

「うん、食べる！！」

そう勢いよく言ってしまった。

瞬間、リム副隊長が石化した。

「……へ？」

だがもはや頭が和食にシフトしている自分はそんな事も全く気にせず、それらを一回念力で浮かせば、両手をパンしてキッチン……っても材料を切る所と置く所だけのだが、とりあえずキッチンを作り出します。

もはや自分の頭には、刺身にお寿司にたこ焼きたこわさ、タコザンギにあぶりサーモン石狩鍋、カニ汁からかに雑炊に海鮮パスタも捨てがたいし、かにクリームコロッケなんかもいいな、などこいつらをいかに料理するかに意識が行っていた。

後半和食なんか関係ないが。

だが、やはり最初の選択肢としては……

「やっぱり刺身が一番かねぇ……」

という事で、自分はポケットから前からつくっといた醤油モドキを

取り出した後、一護で材料を捌いていくのである。
そして、これが事件のはじまりだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊τ☆

「……うめぇー！！」

自分は今、猛烈に感動している！！
なにせ今ここで、かなり上質の刺身がいただけているからである。
いやぁ、リアルザリガニフィッシュとかもうまかったが、やはり食べ慣れた日本食が一番！！
つーかこの世界のある意味ゲデモノ食材に比べりゃ、鮭カニダコなんかかわいいもんだ。

「……先生、おいしいんですか？」

「うまいよ！食う？」

「遠慮しときます」

そうか……残念。

しかしここまでいったらわさびとご飯も欲しいところだが、まぁそこは我慢するしかあるまい。

朝からこんな刺身の盛り合わせとか、贅沢すぎるしね。

そんな事考えていると、自分の前に一つの影が。

「……なにやってんだ？」

「お、エリザ。手紙は書き終わったん？」

自分がその影の主を見上げると、そこには口の端をひくつかせたエリザがたっていた。

「ああ、終わった。……で、なにしてる？」

「飯くっとる」

今の自分は上機嫌なのだ。

だから漫画なら頭の上におんぶがひょこんと飛び出しそうなくらいニコニコと刺身を頬張っている。

だが、なぜかエリザはさらに口をひくつかせながらなおも聞いてくる。

「質問が悪かったみたいだな。何を食ってる」

「む？刺身だ。あの魔獣がおいしそうだからつい……」

自分はそこまでしか言葉を続けられなかった。

なぜか、答えは簡単

「何気持ち悪い事してるんだお前は！！」

がすっ！！

「ぶっ！！」

エリザ姫様のおみあしによるかかと落としが頭に決まったからでございます。

……微妙に痛い、がエリザは自分よりもいたそうだ。

その証拠に、彼女は足を抱えて飛び跳ねている。

「っつ～～！この石頭！！」

「攻撃した側が言うセリフじゃないよね？つか、なにしてくれとるんよ！お刺身全部落ちちゃったじゃないか！」

「しるか！！」

む。

しるかとはなんだしるかとは。

……まぁいい。

今日の自分は紳士的だ、運がよかったな。

そう思いながら深いため息をつくと、再びお刺身を作るべく自分は

魔獣の所に……ん？

「離せエリザ」

「……ナルミ、お前はどこに行こうとしてるのだ？」

「……あっち」

自分は服を掴んでいるエリザにムッとしながら、魔獣を指差す。

するとエリザは

「ふざけるな！またあれを喰う気だろ！！」

そう怒鳴りだした。

……うるせー。

「なにか問題あんのかよ！日本の食文化なめんなよ！！」

……つい怒鳴ってしまった。

だが、その怒鳴り声に怯んだエリザは信じられないような顔を……

あれ？

なんか反応が変だぞ？

「あ、ありえない……」

「ありえない訳ないだろう。自分としたら、あの……ガバムとかい

う虫の揚げたのの方がありえなったぞ」

あれはなかった。

見た目は蜂にカマキリのかまがついたようなやつなのだが、それを丸のまま油にぶち込むのだ。

それをみんなが笑顔でサクサクやってたのを見たら、自分は無理と言うに言えなくて仕方がないからシルバちゃんにあーんするふりして全部押し付けたのは自分だけの秘密だ。

「そんなのただの好き嫌いだろう！私がいいたいのはそんな事じゃぁない！！」

む……。

「なにさ、何がそんなに問題なのさ」

「お前の行動だろ！わからんか！！」

……むかっ！

「だから！ただ刺身食ってるののなにがいけないのさ！！」

「問題だらけだろ！魔獣を食べるとか！しかも生で！異常にも程があるだろ！！」

「魚の刺身をバカにすんな！日本人ならみんな食うわ！！」

「あれを魚と呼ぶのかお前は！！」

「うっさい！あれくらいの鯨やたこなら太平洋にわんさかおるわい！！」

そう互いに怒鳴りちらし、肩ではーはーと息をする。

そして、少しの沈黙の後エリザが

「よしいいだろう。なら私とナルミ、どちらが正しいか近衛隊に聞いてみようではないか。みんな、こっちにこい」

そう言ってみんなをこちらに集めた。

「さぁ、さっきからの魔獣は食い物か否かの口論、私とナルミ、どちらの主張が正しい？」

そしてみんなにそう言うのである。

ふん、みんななら自分の国の文化くらい、多少ちがくてもわかってくれるさ。

一昔前なら刺身は外人に驚かれてたけど、今ならアメリカとかにも寿司屋があるんだ、同じようにきっとみんな……

「いぇ、あの……さすがに魔獣を生で食べるのは……」

「……ない、ですね」

「というか食べるという発想が……」

「これぱっかりは俺も……」

……あれ？

なにこのアウェイ。

いつもの狂信者ぶりはどこに行った？

ほら、それにさっき考えた通り今の時代は外国にも……あ。

……ここ、外国以前に外世界だった。

ダメダメじゃん。

だが、こんな自分にも擁護してくれる仲間はいるみたいで、リム副隊長が必死に自分の事を守ってくれてる。

「いや、みんなよく考えてみな。きっとナルミ君の国ではあれは魚の一種なんだよ。で、そのくじらやたこかいう生き物と一緒にあれも家畜として育てられてて……ごめんナルミ君。やっぱり無理だ。どう考えてもあれが食材とは考えられない」

だが寝返られてしまった。

……まぁまて、自分にはいつも味方してくれるシルバちゃんが……。

「……アー」

「ふふ、私？私は参加しないわ。もう、ナルミさんに嫌われたくないの。だからナルミさんが許してくれるまで、ナルミさんとの関わ

りを絶ち、思い出だけを糧に生きていくのよ……。大丈夫、ナルミさんから貰った指輪が私の心を支えてくれてるから」

……あぁ、ダメだ。

つか、関わらないゆった手前自分が頼ろうとしちゃダメじゃん。

「どうだ、わかったか。間違ってたのはナルミの方だ」

くそうっ！

いや、でも待てよ。

「わかった、君らの考えはよくわかった。だがこれは自分の国の文化であり、食事なんだ。だから何を食おうと自分の勝手だ」

そうだよ、自分の勝手じゃん。

別に食えと強制してる訳ではないし。

まぁ確かに、見た目は魔獣でとてもアレだが、食って普通だし、食うの自分だけだし。

「……お前は本当に魔獣を食い物としてしか見ていないんだな」

いや、そんな訳では……なきにしもあらず。

「まぁ……食えるし」

「……もう私、人間という種族がわかりません。神獣手懐けたり、

魔獣を食べたり……」

言っとくが……訂正、思っとくが君にも人間の血は混ざっとるからね？

「……別にいいじゃん。どーせ死体なんだし。どっかの野生生物が喰ったり腐って土にかえったりすんだべ？今食おうが一緒じゃん」

もうみんなのあまりに酷すぎる反応に嫌気がさした自分は、もう投げやりにそう言ってしまった。

すると、メルちゃんが

「師匠、それは違います」

なんかそう言ってきた。

なにが違うのさ。

「魔獣は土にはかえらない。なぜならそれ自体が自然の摂理から外れた“異端”の存在だらです。魔獣は自然発生したものもごくまれにありますが、だいたいは魔術師などに作られた作為的なものです。考えてもみて下さい、あれほどの力を持つ魔獣が、ちっぽけな魔族程度に普通従うか。答えは否です。ならなぜ従うのか、理由は最初から従うように造られた生物だからです。そしてそんな歪んだ生物は、同時に持つ魔力も従来のそれとは違い、歪んだ魔力になってしまいます。下位の魔獣なら死んだ時にその歪んだ魔力が外に出ようとする力と、元の魔力に戻ろうとする働きにより消滅しますが、これみたいな中位から上位の魔獣は肉体が強すぎて歪んだ魔力を内包したまま死骸が残ります。すると、魔獣の死により周りに魔力が放

出されてしまいますが、死骸がある事で一定の距離まで行かないと歪みは戻りません。従ってその歪んだ魔力が広がった地域は本来の魔力の均衡が崩れ、その場所の魔力自体が歪んでしまいます。すると周辺の魔物の凶暴化や、その地域での魔法が使用できなくなるなど、様々な問題が出てきます。なので魔獣は倒したなら即座に焼くとかして死骸を消さないといけません。死骸がなくなれば、魔力が歪んだままになる原因がなくなって、すぐにもとに戻りますからね。そして、その原因である魔獣の死骸を体内に取り込んだなら、まず間違いなくすぐに発狂します。下手したら自らの魔力と反発し、魔力乱れを起こして死にます。実際魔獣の肉を乾かして粉末にした毒がありますので、まず間違いなくそうなるかと」

……ふーん、そうなんだー。

よくそんなにいっぺんにしゃべれるね。

じゃなくって

「……つーことはあれか。魔獣の肉は魔族には毒なのか」

「はい、そうなりますね」

「わかったかナルミ。ていうかそこまで詳しくは初めて知ったが……とりあえずそういう事だ」

「うん、まぁ、ごめん」

確かに喰ったら発狂するような毒を自ら進んで喰ってたら、かかと落としてでも止めたくなるわな。

そして、それを喰って平然としている自分に絶望。

「わかればいいわかれば。……まぁ、私もちょっと言い過ぎた感はあったが……すまん。考えてみたら人間はもうなんでもありだものな」

「うん、その認識は間違ってるがね」

んな人間がなんでもありなんて、んな訳ないべ。

「それに人間にも弱点あるし」

特にムリヌとかムリヌとかムリヌとか。

「ほぅ……気にはなるが、やめておこう。いつ誰が聞いてるかわからんし、何よりあいつらがいる」

そう言ってエリザが指差した先にいるのは、“食べられる”とか呟いて怯えている盗賊たち。

うん、すっかり存在忘れてた。

「まぁ、そだね。んじゃああいつら送って、旅を再開しますか」

「まぁ、そう急がなくてもいい気はするが。これ、手紙だ」

そう言いながら手紙を渡すエリザから、自分は苦笑しながらそれを受け取る。

「まぁそう言うな。人生だいたい７０年。短い人生をいかに濃く生

きるかでそいつの価値が決まると昔本で読んだ気がする。まぁ自分はそれよか早く死ぬだろーけど」

主にストレスとかそこらへんで。

「んじゃ、行ってくるわ」

自分はそう言いながら、奴らを連れて王都までテレポーテーションした。

そして、訓練してた兵士たちに盗賊を押し付け、ちゃかちゃか王様に手紙を渡して戻ってきた。

こうして、この盗賊たちが引き起こした事件は無事、幕をおろしたのでありました。

なーんて都合よく終わるはずもなく、問題はまだまだ残っている。

「……こいつ、どうしよう」

「私に聞くな。お前の子供だろ」

「いや違うから」

これからシャモをどーすっかっていう問題ね。

「……師匠、いっそ連れてったらどうですか？」

「この巨体を？むりだ」

「あ、飛竜を小さくしたみたいにすれば大丈夫じゃないですか？」

……ミミリィ隊長、恨みますよ？

「……でも、ねぇ」

「アー！アアー！！」

未だに渋る自分の頭に、シャモが勢いよく乗り始めた。

「あこら！てめっ！やめろ！！」

「アアー！アーアー！！」

「ははは、ナルミ君、もう連れてっちゃいなよ。邪魔にはならないはずだよ？」

……全く、みんなして。

「わあったよ。つれてきゃいーんだべ。ったく」

とか言いながら、内心ちょっと嬉しい自分は正常なはず。

と、考えているとメルちゃんが手を叩いて

「じゃあ名前付けてあげましょう！いつまでも名前がなかったらかわいそうですし！！」

そう言ってみんなでこいつの名前を付ける運びになった。

しばらくみんな考えていると、ちらりほらりと案が出てきた。

「アネミョンなんてどう？」

「えー？このこオスなんですか？それなら私はナムシルの方が……」

「いや、むしろこれは夜明けを意味するベルスなんて言うのはどうだろうか」

……なんかカオス。

アネミョンとか、なにっていうね。

しかし名前かぁ……。

「……お前はどんなんがいいん？」

「アーアー！！」

アーアーか、斬新な名前だな。

そう考えていると、ポカリと頭を叩かれた。

「……ナルミも考えろ。つか、そもそも今はナルミが親なんだぞ？」

いや名前ゆーても、オスがメスかもわからんのに……。

うーん……。

「……命(みこと)？」

とりあえず思いついたのは、男女共に使える普通な名前。

もうひとつ、司(つかさ)なんてのも思いついたが、これはどっちかってーと男っぽいからね。

それにほら、なんかこれなら凄いお医者さんになりそうだし。

鳥だけど。

「ほう、ミコト……意味はなんだ？」

「漢字で……日本語で命と書いてみことと読む。そこまで深い意味はない」

「いや、なかなかいい名前だと思うぞ？なぁシルバ」

「ひぁっ！！」

いつの間にか自分の近くにやってきていたシルバちゃんをエリザは捕まえ、こちらによく見えるように引っ張ってきた。

「あ、い、いいと思います……」

「うーん……お前はどう思う？」

微妙に会話が成立していない状態で、自分はいまだな頭にいる黒い鳥に問いかけた。

ちなみにこの時、シルバちゃんはやっぱりという顔をしながらため息をついて、涙眼で指輪に小さなキスをした。

……なんか、いろいろそそるね、これは。

「アアアー！アー！！」

「……なに言ってんのかわかんね」

こっちはこっちで鳥だし……。

もういいや。

「うん、お前の名前は命に決定。異存ある人いる？」

自分がそう言うと、みんなそれに納得したらしく誰も異議を唱えなか……お、ムー君がなぜか手をあげたぞ。

「なに、ムー君」

「ミコトとは、どんな字を書くのですか？」

ああ、そういう。

「んっとね……なんか書くもの……」

そこまで言って、自分はひとつの考えに思い至った。

「もういっそ、今日はこのままここに泊まって日本語教室開くか？まだ片付けも終わってなあのに、今から動いてもしゃーないべ」

「お、それは賛成だ」

「やった」

「……ひらがなは覚えました」

こうして、自分達は激動の1日を平和に終了させるに至ったのでありました。

……たった今、現在進行形でとてもややこしい事になっている事なんて微塵も知らずに、自分達は平和にこの日を終わらせたのである。

ちなみに余談だが、前日に馬車の操縦と徹夜の見張りをやらされグロッキーになったテトラ君は、この時もまだ眠っていて、再び開催された日本語教室にまたもや参加できなかった事を心から悔しがっていた。

全くもって、間の悪いお方である。

ちなみにその頃、王都にて。

『あ、あれは化け物だ！魔獣を生のまま嬉々として貪っているあれは！刃向かっていい相手じゃなかった！あのままなら絶対俺達は生きたまま喰われていた！あれは狩る者の眼なんかじゃない！皿に盛られた料理のどれから食べるかを考えている眼だ！！』

『魔獣の黒い体液を滴らせながらその肉を喰らっている姿はもう……！い、いやだ！喰われる！喰われる！！』

『魔獣さえ食糧としか見ていないあれはもう魔族が関わっていいもんじゃねぇ！あれはなんなんだ！人間とはみんなあんなんなのか！？俺はあれが神だと言われたらそれを信じる！それ程までに狂気にみたされたあの笑顔は、笑い声は……！！』

『お願いします！どんな罰でも受けますから！あ、あんなの初めてだ！獲物を見るような眼で僕たちを一瞥し、舌をなめずり回すあの顔は僕たちの中の誰かを喰おうとしていたんだ！や、やだ！お願いします！たすけてください！！』

『あのお方は神だ……！絶対の捕食者だ！もう遅いんだよ！俺達はあのお方に喰われるのを待つだけの家畜なんだ！あははは！おしまいだ！なにもかも手遅れなんだ！俺達にはもう絶望しか与えられないんだよ！どこにいても時がくるまで怯えながら日々を過ごし！その瞬間がきたら生きたまま咀嚼される恐怖を味わうしかないんだ！！』

『魔獣さえ家畜として扱うような種族に勝てる訳がないんだ！この国も！いずれあの方に食い荒らされる！狂った笑いをあげながら魔

獣を刻む姿はあれは邪神だ！黒い破壊神が世界を蹂躙するんだ！おしまいだ！世界はもう……あのお方に食い尽くされて滅びるんだ！！』

「……以上が、先ほどハセガワ侯爵が連合してきた盗賊たちの主な証言です。他にも色々ありますが、どれも同じような内容なので割愛させていただきます」

「……」

「そして、盗賊たちは全員容疑を認めており、エリザ姫様の手紙との矛盾はないようです。なので裁判自体は……」

「いやそれはいい。それはいいがガルク……流すな」

「……ちなみに、これはナルミ君が奴らを預けた兵士から、すでに王都中に噂として流れている。幸い、悪い噂ではないのだが……彼からしたらよろしくないかもしれない」

「……ちなみに、どんな噂だ？」

「……彼が、といいか人間とは邪悪を喰らう正義の種族である。そして邪悪の化身たる魔獣は人間の主食である、と。あと……」

「まだあるのか！？」

「ある。あと、彼がこの国の王族に忠誠を誓う理由が、この国の王族には邪悪な考えがない。つまり清く正しい政（まつりごと）をしているという噂が」

「……」

「あと、彼がうちのシルバを嫁に選んだ理由は、あいつが無垢で澄んだ心を持っているからだとか、彼が教える生徒……つまり姫様たちだな、は皆正しい心の持ち主だという噂が。要するに、彼に認められた奴らはみんな心が美しいという噂だな」

「……よし、その噂は放置だな。むしろ少し広めた方がいいな」

「……ナルミ君にはかわいそうだが……しかたないか。まぁ国に仕える身としたら、国家の印象がよくなる事から喜ぶべき所だがな」

これが、ガルクさんの彼らについての報告を王様にした時の会話だそうだ。

こうして、自分の預かり知らない所で主に国家のイメージ向上のためにまた訳わからない噂が立ちあがったのである。

この後から、自分は“平和の使者”やらそれ系統の名前がつけられた。

……もう、慣れたよ。

だがひとつだけ納得いかない事がある。

それは……

「しかし、“国喰らい”か……。こんなものが本当にいるのか？」

「は？なんだそれ」

「ん？にほんでナルミ君が所属していたと言われている機関だが……。なんでも、害のある魔獣を殲滅することを目的とした機関で、魔獣を使いそれを軍事力にするような国の根本を叩き壊す……まぁ先の戦争だな、そのような事をする機関らしい」

後に自分はガルクさんと話してる時に突っ込んだ。

どんな噂だよ！！と。

「……噂の域は出ないが、旅に出た理由からまぁなんとも信憑性の高い。……まさか本当に……」

「ん？なんか言ったか？」

「……いや、なにも」

そして信じないで下さいよ王様。

こうして、自分は自分でもはやなにがなんだかわからない設定が付け足されていくのであった。

４１回目＊それが日本の文化です（後書き）

はい、毎回恒例の言い訳タイム～……の前に。

ちょっとこれからは、多数の方々から“なにが元ネタかわかんねぇ”というご意見を頂きましたので、あとがきを利用してまとめようかななんて。

でもあからさまに言っちゃうのはなんかあれなので、ちょっとオブラートに包みつつ。

てな訳で、今回は少ないですがまとめます

＊１０万ボルト・世界的電気ネズミの必殺技
＊紳士的なナルミ君・某ＲＰＧのアイテム使ったらキレるあの漢
＊手をパンして・鋼な錬金術の漫画
＊ザリガニフィッシュ・なぜか必殺技が釘パンチなグルメバトルマンガ
＊命・私の友人の本名。または最上の小児外科医師

こんな感じですね。

書き漏らしがあったらごめんなさい。

さて、それでは恒例言い訳タイムです。

まぁ今回は、なぜナルミ君が魔獣をたべたかっていう謎ですが……

ぶっちゃけます。

ニコ動でゴキブリやらカマキリやらを食ってる時代なんだからタコとカニと鮭混ぜたよーな巨大生物なんかまだマトモだと思います！！（キリッ！

まぁあとは、ナルミ君が人間の強さを自覚もとい過信し始めた事もありますが

そんなこんなで、隠されたテーマはカルチャーギャップという事で今回のお話しを書きました

うん、叩かれる気しかしない！！

……まぁ、うん慣れた。

とりあえず、そんな感じのお話しです。

さて、次回は……どなるんだろ？

とりあえず続き物だった最近のお話しは今回で終わりです

もーぶっちゃけ混乱の極みだった最近のお話し、やっと抜け出しましたよ

これで昔みたいにまだマトモな路線に……いけるかな？

とりあえずそんな感じなので、これからも南師をよろしくお願いいたします。

では、また次回

……なんだ、さっきからダンボールが四個程、だんだん近づいている気がする

……ん？

なにこの黒いたびゃ！！

し、手榴弾！！

なぜ……あ！

やめてお髭がダンディーなオジサマ！！

現代兵器をこっちにむけるぎゃぁぁぁ！！

「目標沈黙、これより帰還する」

……くそう。

私を狙わないとならない程食料自給率が悪いのか……ガクッ

42回目＊嗚呼忌まわしき定期テスト（前書き）

とりあえず、遅れてごめんなさい

あと、前半の一番最初、あのバカップルがいちゃつきます

はい、ただラブらせたかっただけです

そして、文章が残念でごめんなさい

……本当ごめんなさい

42回目＊嗚呼忌まわしき定期テスト

シャモこと命が自分たちの所にやってきて早一週間くらい。

あれからは特に事件とかも無く、しいていうならたまに魔物とエンカウントしたくらいである。

そして今日の朝、自分達は朝ご飯を食べた後テントをしまい、さあ次の街を目指して動き出そうとチャリンコにまたがろうとした時、後ろから服を引っ張られた。

「……ナ、ナルミさん……今日はその……」

「あー……今日で7日目だったね」

「ご、ごめんなさい……もう、あんな……ひぐっ……」

「ん、これからは気をつけてね」

「は、はい……あぁーーん!!」

引っ張ってきたのはシルバちゃん。

彼女は今日があれから7日目である事から、嬉しさのあまり泣き出してしまった。

仕方がないのでそのまま胸を貸してやるあたりが、自分が甘いという証拠であろう。

「……おぉ、熱い熱い」

「……いけ、命」

「アアー！」

「あ、こらっ！やめっ！！」

とりあえず、なんか呟いてたエリザには手乗りサイズに縮ました命を特攻させる事でお仕置きしといた。

しばらくエリザに乗ったりして彼女を翻弄していた命だったが、必死に羽ばたいているのにだんだん、緩やかに地面へと落ちていった。

そして最終的に地面に力なく落ちる命。

そしてエリザはそんな命を見ながら、勝ち誇ったような顔をして

「ふ、あはははは！どうだ！日々鍛錬に鍛錬を重ね、私の重力魔法は範囲、威力共にここまで細かな微調整をできるまでに成長したのだ！！」

そう叫びだした。

ふーん、凄いねー。

「……シルバちゃん、落ち着いた？」

「……ぐすっ……はい。……で、あの……」

とりあえずエリザは無視して、シルバちゃんに意識をむけると、彼女は幾分か元気になったようで、すっきりとした顔になった。

だが、なんだろう。

恥ずかしそうに彼女は顔を赤くしてもじもじしながら下を向きはじめた。

そして、意を決したような表情になると、自分の服を引っ張りだした。

すると当然、前屈みになってしまった自分の耳元に彼女は口を近づけ、自分にしか聞こえないような小さな声で

「……こ、今夜……二人きりであの……私を、あ、愛して、くだ、さい……」

そう言ってきた。

……。

据え膳ですねわかります。

ただ……

「今言いますか」

「だ、ダメ……ですか？」

「いやいーけど」

けど……タイミングとかそこらへんがなにか間違っちゃいないか？

「……ナルミー、シルバばかりかまってないで少しは誉めてくれ。頑張ったんだぞ、私」

あー、こっちはこっちでいじけてるし。

「うん、よく頑張った。これからは星の魔女を名乗る事をゆるそう」

とりあえず、適当に言っておく。

重力だから星の力で星の魔女。

うん安直極まりない、しかもなんか厨二臭漂う名前だがなめてはいけない。

自分もこの世界の性質について、ある程度把握してきたのだ。

「……星の……魔女……。ナ、ナルミ！それ、それは本当か！本当にいいんだな！？」

この世界の住人達は、厨二なものがとてもお好きなのであります。

「おう、使え使え存分に使え」

「やった！さっそくミミリィ達に知らせてくる！！」

そう言うやいなや、エリザは馬車の中に飛び込んでいった。

「全く、そんな名前くらいでよくはしゃぐな……ん？」

自分はそう言いながら、エリザを少しかわいそうな目でみていると、くいくいっと服をシルバちゃんに引っ張られた。

「ナルミさんナルミさん」

「ん？なに？」

「多分、ナルミさんはあまり自覚がなさそうですが……ナルミさんは侯爵で英雄で、ブツリ学の第一人者で、教授なんですよ？」

「うん、それが？」

実際面倒だがね、物理学の先生とか英雄とか。

「で、そのナルミさんが姫様に名乗り名を与えたんですよ？」

「名乗り名ってなに？」

「ナルミさんの二つ名的な意味合いがあます。ただ、二つ名は国などからもらいますが、名乗り名は師匠などから名乗るのを許された名前です。普通は名乗り名を与えるのにもかなりの地位や権力が必要ですが……世界で唯一のブツリ学教授に権限がないはずありません」

「……つまり？」

「名乗り名を与えられるのは、一人前にならなくとも、かなりの実力を持たないとあり得ません。まぁ姫様はかなり勉強熱心だったか

ら、問題はないかと……。一応普通の段階的には、先に門下生としての証が与えられてから名乗り名をもらい、次に免許皆伝が普通です」

自分は彼女の言葉を聞き、即座に馬車の中のエリザに向けて叫んだ。

「……エリザー、ごめん間違った！ちょい名乗るのやめ！やっぱり段階通りに事を運ばせるわ！だから実技だけでなく、一回筆記試験して合格したら次の段階って形にするわ！！」

「は！？おまっ！ふざけるな！いいって言ったじゃないか！！」

すると当然キレるエリザ。

彼女は馬車から飛び降りてきて自分に詰め寄ってきた。

「大丈夫、実技は合格だから」

「いやにしても！！」

エリザがそこまで言った所で、エリザの後ろからミミリィ隊長が彼女の肩をポンポンと叩き、こう言った。

「先生が変な所で常識がないのは、今に始まった事ではありません」

あ、ナチュラルにけなされた。

「それもそうだが……くそぅ！覚えてろよナルミ！！」

とても恨めしそうな眼で睨まれた。

ただ、半分涙眼なのがちょいかわいい。

「ごめん、自分も今その名乗り名とかいう情報知ったんだ」

だが自分は素直に謝る。

なにせ悪いのは自分だ。

「先生も、あまり軽率な発言はしないでくださいね。先生の発言力はかなり強いんですから、冗談のつもりが思いがけない事になるかもしれないんですからね」

そしてミミリィ隊長にも怒られた。

……なんか久しぶりに誰かに怒られた気がする。

「はい、反省してます」

自分はそう言って頭を下げると、エリザはちょっと鼻をすすりながら“ナルミのバカ”と罵ってきた。

これはどうにかしてご機嫌をとらねば。

「本当悪かった。今度ある試験に合格したら証やるから」

「……本当だな？」

「本当本当。範囲は物理が力学とか音とか光とかで、数学は関数やら方程式やら。あまり応用は出さない。有効数字は2桁までで、7

日後にやる。合わせて２００点満点中の１３０点で合格。もちろんそのための問題集も渡すし、質問があれば受け付ける。どうよ？」

ちなみにこれ、応用やらないのは応用出せないからである。

７日ってのは、期末テストのテスト期間のイメージで口が勝手に出した期限だ。

「……絶対満点とってやる」

そう自分に宣戦布告して、エリザは馬車に消えていった。

その後自分は、ミミリィ隊長に

「近衛隊員も、一緒にテストする？どうせなら一緒にやったほうがいいからね」

そう言うやいなや、ミミリィ隊長は顔を思いっきり明るくして

「本当ですか！？」

そう言ってきた。

「うん。実技はその後になっちゃうけどね。あと、正式な範囲は後でまた通告するとエリザもふくめみんなに伝えといて」

「わかりました！！」

ミミリィ隊長はそう言うやいなや、駆け足で馬車に乗り込んでいった。

しばし彼女が入った馬車の扉を眺めた後、自分はシルバちゃんを馬車に戻し、自転車にまたがりムー君が操る馬車と並行しながらもうそろそろ見えるであろう街を目指して走り出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

と、いうのが3日前の話。

で、今はというと……

「ナルミ！薄膜の光路差の値が違う答えになる！何が間違ってるかわからん！！」

「くさび形とごっちゃにすんな、Ｃｏｓ　ｒ（コサインアール）をかけ忘れとる。あと、面倒でも途中式かけ途中式。答えだけならマルはやらんし、中間点あげられんぞ」

「先生！この式のやり方がわかりません！！」

「んぁ？スゥ君、これ昨日説明したべ。５のｘ乗をｔと置き換えてやれば普通の二次関数だからな？……あーっとメルちゃん、コサインとサイン逆。こっちがサインだから」

その日についた宿に、３日間こもりっきりで勉強してます。

あはは……みんな必死だなぁ……。

ちなみに今更の事だが、自分は最近……つーか物理学教授に任命されてから、恥かかんよーに物理と数学、そして化学を死ぬほど勉強したので、今では教科書丸暗記である。

……小麦粉的なのから食パンみたいなの大量生産してそれに教科書を写して食べたり、どっかの探偵学園に出てくる少女みたいな記憶能力つかったりとズルもしたが、とりあえず丸暗記である。

なのでもはや自分、センター試験で満点取る事……は、まだ3年生の教科書持ってないから無理だが、そこそこいけるはずである。

目指せ、東大!!

……無理なのはわかってるよ。

で、話を戻すと、自分がプリントアウトした、ポノノ語辞典を片手に制作した簡単な問題集を彼らは必死こいてやっているのだ。

よほど合格したいと見える。

……ん?

ポノノ語も同じように辞書丸暗記すりゃあよかったのか?

……まあいい。

ちなみに、この中で一番頑張ってるのがメルちゃんである。

というかこの娘は集中力が凄い。

まだ入隊して二週間経ってないのにもうみんなに追いつきかけてる。

……まぁ、今回のテストは公式暗記すりゃいいだけだからかもしれないが。

てな訳で、みんな揃って自分に質問しながら問題集をやり、その傍らで自分はパソコンをカタカタしながらテストを制作している。

……これを一回日本語でつくった後、手作業でポノノ語に変換してスキャナーで取り入れてからプリントアウトするという作業は誠に面倒だ。

全く、パソコンにポノノ語変換とかないんだろうか。

しかし……いい加減デスクトップのアリカ様は変えた方がいいかな。

さすがに古い。

堕天國宣戦にでも変えるか。

まぁ、今はんな事はどーでもいいが。

んなことよか、今はとりあえずテストだテスト。

とは言え、そのテストの問題ももう完成間際なのだがね？

なにせ内容が内容だから、こうそのままコピペして数値だけをちょちょいと変えて、答えが美しくなるようにすりゃあいいのだ。

答えが美しくと言えば、うちの学校の物理の先生はやたら“美”に

こだわる先生だったなぁ。

“いいか？ここをただ公式に当てはめて、最後に移行して計算すると、ほら、式が美しくないだろう？だが、最初にここを消してあらかじめこうやれば、ほぅら、美しい式だろう？計算とは、いかに無駄を省き短くするか、いわば繊細にして大胆なやり方こそが美しいんだ”

いやぁ、このセリフにはまいったね。

本当に、還暦間際の爺ちゃんがなにをほざくかと最初思ってたが、いざやってみるとマジで美しいから困る。

ちなみにこの先生、蕎麦作りの名人（自称）らしく、まるまる一時間をつかって蕎麦の素晴らしさを叩き込まれた記憶がある。

彼曰わく、“蕎麦は麺よりもつゆに力を入れるべきだ。ほら、よくテレビでレポーターがラーメンの取材をして、『ああ、コシのある麺ですね』とかいうだろ？で、お前たちはそれ以外に麺についてのコメントを聞いた事あるか？ないだろう？だいたい他はつゆについてのコメントだ。つまり、麺類は麺よりもつゆこそが作り手の個性を表すものなのだ！！というか普通に麺を打ったら嫌でもコシが出る。逆にコシのない麺を食べてみたいものだ”との事。

この時は不覚にも頷いてしまったね、うん。

……盛大に話が逸れた。

ま、とりあえずもうテストは完成しそうだってー事よ。

あとはこれを彼らが寝てる間とかに、気づかれないよーにポノノ語化して量産すれば完璧よ。

うん……ツマンネ。

みんなが必死に勉強してるから、邪魔するのもアレだし、だからと言って一人あからさまに非想天則とか寄生ＪＫとかやるのもはばかれる。

……そしてなにより、宿の外から入り込む香ばしい匂い、人々の楽しげな笑い声や売り子の声、そして少し離れたところから聞こえる熱のこもった闘技場からの観客の歓声。

……ここはかつて戦いの神がつくったと言われる、いわば傭兵の街、その名もソラニン。

あはは、どこのジャガイモ、とか最初は思ったが、もう慣れた。

なにせカラスが軍鶏なのだ、文化とか言語の違いよ。

つまりカルチャーギャップさ。

で、そんな力自慢たちの集まる街で、なんと今日は武道大会なるものをやっているのだ。

別に天下一を決める訳じゃないが、とにかくそうなのだ。

そんな大会があると、つまりみんなはお祭り騒ぎで出店やらなんやらがでている訳で……。

みんなが勉強に集中しすぎてお祭りなにそれおいしいの状態な訳で

……。

だけどお祭りはおいしい訳で……。

つまり、お祭りいきたいが、行ける雰囲気ではない、って訳である。

だから仕方がないので、自分は遠くに見える闘技場の上空にて、飛びながら無賃観戦しよーとしている魔族達が警備員的な方々に捕縛される様を眺めるだけに……あ、２４人め。

……ツ、マ、ン、ネ♪

「師匠、ｘの２乗＝３になったんですが、これのｘの答えはどうなるんですか？２乗して３になる数を探すんですか？」

「ルートを忘れとるルートを。ルートは２乗したらその数になるってしるしだから、そのままｘ＝ルート３ってしたらいい。ただ、プラスとマイナスの２つの答えかかなならんから気ぃ付け。マイナスは忘れがちだからね」

「なるほど……ありがとうございます」

……はぁ。

なんでテスト出す側の自分がお祭り我慢せにゃならんのか。

あー、あそこの串焼き肉超うまそう。

「先生、連立方程式に記号が３つとかやり方がわか」

「移行してｘ＝とｙ＝、ｚ＝の形に変形して代入したれ。それを整理したらばできるから」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

いやはや全く、テストやる時期を間違えたな。

なんでテストとはこんなにイベントと重なる事が多いのであろうか。

いや、それを出す自分が言うセリフではないのはわかるがね？

「ナルミさん、解説読んでも絶対値の意味が」

「噛み砕いて言うとだ、今現在の場所から北に５歩歩くのをプラス５、南に歩くのをマイナス５と考えると、どちらも５歩歩いたのには変わりないべ？それが絶対値だ。原点Ｏである０からどれだけの距離を移動したか、が絶対値だ」

「えっと……なら、西は？」

「原点からの距離がかわらなきゃ絶対値も変わらん。つーかくだらない事いわない。それとも君は天然か？あと、君は途中式を順番に書こうな。それ、見直しして訳わかんなくなんない？」

「え？……えっと……たまに」

「……見直しする癖つけよーな。マイナス付け忘れたとかで点数おとして不合格なら洒落にならんから」

「は、はい……」

「あとテトラ君。今は見逃すけど、本番でそんなちっさな種飛ばしてなんかやってんのみっけたら問答無用で0点にして、さらに次回から満点とらないと合格にしてやらんからな。てゅーかなぜに今それやってんの。本番のための練習か？」

「……あ、あはははは」

全く。

あー、あの果物超うまそう。

りんご飴くいてー。

こうして自分たちは、ぐだぐだとこの街で一週間を過ごす事になってしまったのだ。

……予定では。

次の日の朝、なんかいきなり変な人がきた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊И☆

「……は？」

「で、ですからその……ハセガワ侯爵様に明日、今大会の優勝者と手合わせしてもらえないかと……」

「ほざけ」

目の前にいるのは、大会運営委員会会長のモモモさん。
一応男。

ちなみに大会運営委員会ってーのは自分が今勝手につけた。

彼はミミリィ隊長みたいな耳と尻尾を持っているが、ミミリィ隊長がゴールデンレトリバーならこっちはダルメシアンな耳と尻尾を持っていて、全体的に華奢な雰囲気……ってーか痩せこけてる。

そんな彼の青い髪はボサボサで、赤色をした眼は生気が感じられず……大丈夫か？

「そ、そこをなんとか！」

そう言ってこちらに一歩近づいてくるモモモさん。

……なんだ、あれか。

今回の大会にはやたらヤヴァイ奴が出て、大会を荒らしてるからどーにかしろって訳か？

だからモモモさんもそんな大変な事になっとるん？

「なにか、自分が出なきゃいけない理由があるんですか？大会で事件が起きてるとか」

自分は彼をまっすぐ見つめ、そう聞いてみた。

すると彼は自分に向かいこう言ってきた。

「……いえ、特に」

過労死してしまえ。

「いえ、今回の大会で優勝したらハセガワ侯爵様と戦えるともなれば、より一層試合も盛り上がるのではないかと思いまして……」

「ざけんな」

全くなんなんだこいつは。

つーかなんで自分がここにいる事をこいつはしっとるんだ？

「そんな、お願いします！今年は孤高のムッペルこと槍使いデシャルや灰燼の魔女ニャーなど……」

「いや、興味ないんで。うち、マジでセールスお断りなんで」

とりあえずんな事よりか、こいつどーにかせにゃぁな。

てな訳で、首根っこ掴んで廊下に放り出し、扉をしめ鍵をかけた。

「ちょっ！開けて下さい！！」

「お帰り下さい」

すると扉をガチャガチャやって開けようとするモモモさん。

つーかさ、今更だが、自分一応お貴族様だよ？
普通こんなふうにやってきて“大会出場してくださいよー”的な事やっていいん？
……自分、なめられてるなぁ。
自分がそう考えていると、扉の向こうから女性の声が響いてきた。
「モモモ！やめなさい！！」
おお、ダメな主人公を助ける幼なじみ的ヒロイ
「お母さん！ハセガワ侯爵様がやだって……だから僕っ！！」
……は？
「全くモモモ！こういう事はちゃんとお母さんに言ってから行動しなさい！！」
「だって……こうしたら盛り上がるかなって……そしたらお母さんにもほめてもらえるかなって……」
「全く、それでもあなたはこの街の役所の所長の子なのよ？一人で出歩いてなにかあったらどうするの？」
「もうてめぇら帰れ」
とりあえず自分はモモモとその母……これまた痩せこけたヒステリ

ック的雰囲気を出してるおばさんをひきずり、近くにいた宿の人に預けてやった。

もういいよ、帰れ。

ちなみに、この後またなんかやってくるんなら全力で潰すとオブラートにも包まずどストレートで言ってやったら震えだしたので、もう来る事はないと思う。

そして、事実彼らはもう来なかった。

そう、彼らは。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ν☆

お昼頃、自分達はむさむさとご飯を食べた後、再びみんなに教えてるときにその変な人がやってきた。

「私は、灰燼の魔女と呼ばれております、ニャー・スペルクです。ハセガワ侯爵様がここにいらっしゃると聞いてやってきました。どうか私と手合わせを」

「セールス、押し売りはお断りです」

とりあえず、これ１７人目。

もうここまでくると、扉も開けずに断ることを学習した。

……全く、なんでこんな。

つーかニャーってなにニャーって。

個人的には、ネコミミメイドなイメージが……やべ、気になる。

ちょい透視を……

「うおうわぁっ！！」

「なっ、どうした！？」

とりあえず一言言うとしたら、地球最強の生物、勇次郎さんの顔をした緑の長髪に紫の巨大リボンをした１４０センチくらいの少女である。

な、なんだこの核兵器的存在！！

……まぁでも、対処は他と変わらんがな？

「いや、なんでもない……ニャーさんごめん！他の方々も断っとるから！帰って！！」

「いえ！ここで引き下がる訳には……」

「帰れ、引き下がれ、それとも今すぐ刻まれたい？」

この時、同時に相手の顔の横スレスレの、ギリギリ肌を斬るくらいの所に一護を投げてやれば、ほうら、他のやつらと同じように血の気が引いた。

「ひっ！し、失礼しました！！」

そしてそのまま逃げ出した。

うむ、さすがにドア貫通して刀飛んできたらみんなびびるわな。

そう思いながら自分はドアまで行き、一護を引っこ抜いて再び元の場所に戻ると、ムー君が自分に聞いてきた。

「……先生。なんで先生がここにいることがバレてるんですか？」

「しらん。自分がききたい」

本当に、なんでなのかね。

「あ、なら次にくる奴を捕まえて、こう……縛って拷問して吐かせればいいんじゃないですか？先生の趣味も満たされ、情報も得られ……」

「君は自分をなんだと思っとるん？」

とりあえずスゥ君、君の合格点は今から合計１９０点以上だ、よかったな。

「あ、そっか。シルバにしかやらな」

「よし、君は１９５点以上じゃなきゃ不合格だ」

「んなっ！！」

はん、ざまぁ。

「わ、私はナルミさんに縛られたり拷問されたらとかは……その、縛ってほしいというか……なじってほしいというか……」

「君も黙ろうね？」

この娘は本当に……なんでこんなドMなんだろう。

しかし……次の奴を捕まえて聞く、ねぇ。

……んな事せんでも遠隔テレパシーでプライバシー侵害しまくりゃいいではないか。

レッツスキャニング。

てな訳で、感覚を研ぎ澄ませ。

……。

……。

……。

「ちょっと今から自分、過去の自分を張り倒しに行ってくる」

「まてまてまて、何があった」

「……ふっ。前回の街から出る時、自分が変装しないで馬車に乗り込む姿を発見されたらしい。で、その馬車と同じ馬車がただいま宿

の裏側に」

つまり、うっかりミスだと。

……街に入る時は変装してたのに。

「……まぁ、気にするな。それよかこの問題なのだが」

「気にしろよ。そして君らは自分に質問してばっかだな。もっかい対策授業でも開くか？」

「おぉ、それは嬉しい。対策授業、やりたいぞ」

あ、墓穴った。

「と、それもあるが……ここの解説文の『まろやかな面からの垂直抗力』とはなんだ？」

「……なめらかな面です、はい間違いました」

……ポノノ語なんか、きらい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊и☆

それからさらに3日後、自分達は今馬車で道なりにガタゴト揺られている。

本来ならあの街でテストを行う予定だったのだが、あのあとさらに

人が殺到してもう収集つかなくなってしまったのだ。

主に、大会で負けたから鍛え直してくれ、と。

もう嫌になってきたから、自分達は逃げるように街を飛び出した。

みんなもみんなで、やたらめったら人が押し寄せて勉強の邪魔をするので嫌になったらしく、反対意見は出なかった。

そして馬車に揺られる事3日間、今日がとうとうテストの日。

今日の夕方あたり、寝る場所を決めてからテストを開始するという事でみんな必死に勉強してる。

テスト前、３０分勉強して1時間休憩とか言いながら漫画読んで、いざ1時間たつとあと1時間とか考え、結局テスト前日にすら1時間も勉強しなかった自分には眩しすぎる。

いやぁ……なんだろ、目から悲しみの汁が。

と、いう訳でみんな一斉にお勉強中。

そして自分は

「アー！アアアー！！」

「命、はしゃぐな。そして君らも怯えるな」

おうまさんを使って馬車を操作しとりますです。

ただ、超怯えられるのが傷つく。

まぁ変わりに、素直に言うこと聞いてくれるが。

そんなこんなしとるうちに、日も傾きいい具合に空が紫になった頃、前に誰かがキャンプしたであろう焚き火の跡を発見したので、そこで今夜は寝る事にした。

そして、とうとう運命の夜がやってきた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊？☆

「はい、では今から試験を開始します。最初に数学、次に物理で、各５０分。合格点は１３０点。で、間に１５分の休憩を取ります。不正行為は禁止、見つけたら０点になり、さらに罰ゲーム。わかったテトラ君」

「……はい」

今、は太陽がまだ少し見えるくらいの時間。

彼らは馬車の中で、自分が適当に造ったテーブルでテストに臨むべく座っている。

馬車の外は暗いが、スタンドライトなどをフル稼動させているので問題はない。

みんながみんな緊張した面もちでいるが……ぶっちゃけそんな難しくはないんよね。

「不合格者が出た場合、再試験はその時考える。まぁ各６５点取りゃあいいんだ、そう気ぃはらんでもいけるって。んじゃ、配るわ。あ、終わっても私語は禁止ね。見直しして時間潰してなさい」

自分はそう言いながらテスト用紙を配り、かれらの一喜一憂……一喜八憂くらいをしている様を眺めながら、テストが終わるのを待っていた。

そしてこの時同時に、先生の凄さを思い知った。

こんな暇な時間をテスト中経験していたとは……教師、恐るべし。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

そして、テストが終わった。

「……ふっ、二次関数なんか消えればいいのに」

「……え？そんなきれいな数値になりました？」

「なったよ、そこは。計算面倒だけど、すっぱり２になった」

「私、すうがくは自信あります！！」

「シルバ、ちょっと黙って。みんな落ち込んでるから」

まぁ、屍々累々。

なんか、結構ひさんっぽい。

……物理ん時数学の採点せんでよかった。

なんか、顔に出そうだ。

「お、お疲れみんな。じゃあ今から自分はちょっくら採点してくっから、また明日……おやすみぃ……」

とりあえずそのカオスな空間から逃げ出し、テントに引っ込む自分。

うーむ……採点すんのも勇気が必要だな。

とりあえず、赤ペン用意。

サクサク採点はじめま……

「今からこのテントを覗こうとかしたやつ、不合格な」

自分がそう言うと、３つくらいの気配がどこかに消えてった。

ったく、気持ちが超理解できるぞ。

では、採点をはじめませう。

結局この日、採点が終わったのは夜遅くであった。

とりあえず、テスト返す時にテトラ君になぜちっさな種がテストに乗って紛れてたのかをといただきにゃならんよーだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊Φ☆

んで、とうとう次の日がやってきた。

「はい、んじゃーテスト返しまーす」

お昼ご飯をみんなで食べてる時、自分はそう言ってテスト用紙を取り出した。

そこ、空気嫁とか言わない。

みんながきちんと一カ所に集まるのは、お昼時くらいしかないんだから。

で、みんなの反応はと言うと、朝からそわそわしていたのが一気にピシッと姿勢が正しくなった。

うむ、実にわかりやすい。

ま、とりあえず順番にいくか。

「ほんじゃまずは……ムー君。ほい」

「……」

彼はもらった答案を恐る恐る確認して、小さくガッツポーズをとった。

つまり合格。

成績としては数学７８に物理８１という成績である。

「で、テトラ君は……あの種なに？」

「不正はしてません！先生も見てたでしょう！！」

「……」

レッツスキャニング。

『種って何！？いつ落ちた！？なんでこんな時に！？』

「おめでとう、なんとか合格だわ」

彼の成績は数学６５と物理６８。

だがまぁ無実だったし、合格は合格だ。

「次は……スゥ君……不合格」

「ちょっ！えっ！？本当に不合格ですか！？」

「うん、１９５点いかなかったもん」

数学８０、物理５９ならねぇ……不合格にしかならないわぁ。

「まっ、待ってください！普通に合格じゃないですか！横暴だ！あ

んまりだ！！」

「……しかたない、寛大な心を持つ自分は今度の食事当番を代わってくれることを条件に……」

「やります！やらせてください！！」

「……いや、いいよ。普通にからかってるだけだった！叩くな！！」

ったく……次は

「ミミリィ隊長。ほい」

「……お、おお」

はい、感嘆詞でるよねそりゃぁ。

まっさかきれいに全部８８とか、びびったもん。

「で、リム副隊長は……面白みもなんもない」

「……いいじゃん別に、合格なら」

確かにね？

リム副隊長の成績、数学９６、物理６１。

さすがは商人の子。

「で、けっこう面白かったのがメルちゃん」

「な、なにがですか！？」

「見たらわかる」

そう自分が言うと、彼女は恐々としながら点数を見て……

「……へ？やったぁっ！！」

狂喜した。

いや、数学１００はまじ凄いとかおもったからね。

ルートもわからんかったのに。

ちなみに、物理は６９と普通に普通だった。

……で、問題はこの二人。

闇系超弩Ｍ人妻シルバちゃんと、すっ飛ばし型快活じゃじゃ馬姫エリザである。

……今更だが、実はまだ自分達正式に結婚しとらんのよね。

まぁ、んなこたいいか。

「……シルバちゃん」

「は、はい！」

とりあえず、まずは彼女。

「君は本当に面白いな」

「そ、それって……あっ！！」

彼女は、メルちゃんの様子を見て面白い＝高得点と思い顔を明るくさせた。

だが甘い。

「ほい」

「えっと……え？」

シルバちゃんの成績、物理９４、数学３９。

惜しい、あと3点で赤だったのに。

ちなみに唯一の３０点台。

「とりあえず、途中式答えにすんのはやめようか。答え出てんのに、回答間違ってると意味ないよ」

「……見直しして、ぐちゃぐちゃになってて訳わからなくなって、書き直したら時間なくなって」

そう言いながら目をそらすシルバちゃん。

おいこら。

「だからきれいに書けゆーたろ。物理も難しい問題出たら詰んでたぞ」

全くこいつは……。

よかった、物理美しい式になるようつくっといて。

で、最後に……

「エリザ！」

こいつよ。

「君は今までなにを学んでいたんだい？」

「そ、そんなに悪いのか！？」

「いや普通に合格だけども、シルバちゃんと似たり寄ったりだぞ？ほれ」

自分はそう言いながら、テストを不安顔のエリザに渡す。

するとエリザは、一瞬喜んだ後微妙な顔になった。

「……これ、喜んでいいのか？」

「いいけど、だめだろう」

エリザ、物理１００。

まぁ、公式だけだし、こいつ物理大好きだし、まぁわかる。

だが、問題は数学である。

４５点。

とりあえず、途中式書け、マジで。

おかげさまで三角ばっかだぞ、このテスト。

「な、途中式のありがたみ、わかっただろ？つか、物理なら途中式書いてんのに、なんで数学は書かん」

「……方程式消えればいいとおもう」

「……気持ちはわかるが、あきらめな」

がんばれエリザ、ファイトだエリザ。

……さて、ひとしきりエリザを応援した所で

「とりあえずみんな合格おめでとう」

みんなに激励の言葉を贈る。

「はいっ！」

「やった！合格だ！！」

「……どんな証が貰えるんだろう」

すると、みんなしてうきうきわいわい騒ぎはじめた、が

自分は彼らを今から凹ませる。

「じゃあ明日、実技やっから」

「……は？」

「え？どゆこと？」

自分の一言で、みんなは一気に困惑の表情を表した。

「いや、筆記の後実技って、この前言ったべ。まぁそんな気ぃはらんでも、普通にやってくれりゃ問題ない。自分が教えたことをそのままやってくれりゃあいい」

「……師匠、私、なにも教えられてないのですが」

……すーっかり忘れた、メルちゃんの事。

「……君が今できる最大の魔法で手を打とう」

「……わかりました」

いや、そんな不服そーな顔やめんしゃい。

終わったらちゃんとなんか教えたげるから。

こうして、第一回自分主催の大テスト大会が終わったのである。

……え？

実技？

面白みもなく終わったよ？

だって彼ら、いっつもやるのと内容同じだもん。

あ、ただメルちゃんがムー君に張り合って直径１０メーターのクレーターつくったのは面白かったな。

だっておかげで進行方向が塞がったんだもん。

「……なにか言うことは？」

「ごめんなさい」

よし許す。

こうして、彼らは無事、全員試験に合格したのであった。

そして実技終わった後、しばらくして。

「はい、じゃあみんなにこれ。証という名の腕輪をプレゼントしまーす」

自分はそう言いながら、もう使わないであろう、小学校の図工の時間のあとから机に封印されていたビーズたちをつかった、簡単な腕輪をみんなにプレゼントした。

すると、みんなはとても喜びながらそれをはめ、かなり楽しそうにはしゃぎはじめた。

「おおっ！なんと綺麗な……」

「この宝石、なんていう宝石ですか！？」

「うわ……全部全くおんなじ大きさに切りそろえてある」

「これ、すごいです！外に無駄な魔力が漏れる事なく最低限の魔法で魔法が使えます！！」

うん、さすがプラスチック万能世界。

そしてビーズは宝石と違うよ。

「……先生、こんな高価なもの本当にいいんですか？」

そんな浮かれるみんなの中、ムー君が一人やたら心配した眼で自分を見つめながらそう言ってきた。

「いーよいーよ、んなもんありあまってるし」

ぶっちゃけビーズが二袋、机の奥底にまだ眠ってるんよね。

いやぁ……１００円で3袋のやつ買ったら、見事にあまったからね。

つーかいまだに値札シールがはっついてるから間違いない。

だから別に、こんなやすいものあげても別に気にならない。

「そんな高価とか、家にあったのでささっと作っただけの安物だからね。気にしないで使いなさい」

「そう、ですか。……家と言えば、先生はこの旅が終わった後は一度祖国に帰られるのですか？」

なんだ、唐突に話かわったな。

しかし……家かぁ……。

「……無理だね。ちょっと理由があって帰れないからね」

考えてみたら、あっちに頑張って帰ったとして、こちらにまた戻れる保証はないんだし、やらない方がいいね。

自分はそう考えながら彼の質問に答えると、彼の眼が一瞬光った気がした。

……なんね。

「そう、ですか。すいません、失礼な事を」

「あ、いやそんな失礼だなんて」

「いえ、この国のために魔獣討伐を目的に、祖国を捨ててまでやってきた先生にあんな……」

「いやいいから、そんな事。まじ気にしないで」

全く、やりづらいな。

「そもそも自分はそんな恩を売りつけるためにきた訳じゃないし。半分島流しみたいにこっちに送りつけられただけで亡命した訳でもないから。わかった？ドゥユゥアンダスタン？」

「……はい」

なんだ、なんでそんなまっすぐこちらを見る。

……ああ、そっか。

やっぱりこうは言えども、自分がつらい役を押し付けられてる事とか、国を護らなならない事とかが心配なんだな。

なんだかんだで、自分はストレスも溜まるが楽しく生きていけてんだ。

だからそんな気にしないでもいいのに、かわいい奴め。

「大丈夫だって。んな気にせんでも、自分は楽しく生きてっから。みんなで楽しんで、バカな事やって。……確かに君らには自重して欲しいが、それでも楽しいから」

「……はい」

「ま、とりあえず目的地の怪物倒すまで、楽しく旅を続けましょうや。人生短いんだ、楽しまなにゃ損だろ？」

なんたって自分は今１７で今年１８。

７０で死ぬとしてそろそろ人生の約２／７にもうなるのだ。

しかもセブルさんの年齢から、人間はかなり寿命が短いのだと自分は思うのだ。

いやぁ、つい最近まで小学校に行ってたのに、今なら立派なお貴族様だよ。

時が経つのは早いねぇ、あっはっはっはっは。

……つーかなによ自分、えっらそーに。

なに、かっこつけてんだか。

まだ１０代のゆとりが人生語るなや。

……はぁ。

「……は、い……ズズッ」

……なに、なにがあったムー君。

なぜ君がそこで涙を溜めている。

「ちょっ、どしたム「ち、ちょっと、じつれいしまず」……おーい」

彼はそう言うと、自分の元から去っていった。

いったいなんなんだ。

……そしてスゥ君、きみはなにこちらをじっと見つめているんだい？

自分、君が言うみたいにドSじゃないからムー君をいじめた訳ではな……こら、目をそらすな。

こうして、よくわからないままこの日は過ぎていった。

自分が泣かしたみたいなシチュだから、みんなの前で聞くに聞けないので悶々としたが、しばらくするといつもどーりに戻っていたので、自分は次の日にはこの事を忘れてしまっていた。

この時、自分が異変に気がつけられればと後悔したのは、この日からさらに日数が経ってからであった。

本当に思う。

この時、きちんと誤解を解いておけば後々面倒な事にならなかったのであろう、と。

４２回目＊嗚呼忌まわしき定期テスト（後書き）

はい、では今回も元ネタ大暴露。

・アリカ様・蟻さんプロジェクトのボーカルである女神様。魔女とか言った人表出ろ
・堕天國宣戦・アリカ様の歌。マジで女神様
・非想天則・キャーイクサーンな東の方のプロジェクトの格ゲー。動く大図書館が最強
・寄生ＪＫ・はるかっかのよく死ぬりょなげー。寄生女子高生と読んだ人はしばかれて海に捨てられなさい
・ゆうじろう・地上最強の生物。バキのおとっつぁん。
・瞬間記憶・某探偵学園に出てくるあれ。最近学校の図書室で実写のやつのビデオを発見した
・食パン・国民的アオタヌキの袋から出る未来の食料。食べて覚えられたら苦労しない
・スキャニング・死神のゲームに出てくるキー能力。南師のＨＮの元ネタのゲーム
・武道大会・もはや語るまでもない。仙豆たべてみたい

どうでしょうか。
書き漏らしがあったら教えてください。

では、恒例の言い訳を

とりあえず、今回のお話、最初と最後がやりたかったというのは秘密。

間のはぶっちゃけ飾りです。

証拠としては、出オチしかいません。

全世界のニャーさんファンの方々、ごめんなさい。

……最後をやりたかったとか言いながら、伏線も糞もないあたりが私の力量の低さを伺える。

……で、話を逸らしますと、今回遅れた理由はですね。

端的に表すと、最近部活が猛烈に忙しくなってしまったということのせいです

もう足がいたいのなんのって……

とりあえず、休みがなかったんです

一応夏休みはまだ余裕ができるらしいのですが、あと1ヶ月は更新が停滞するかもです

とりあえず、そんな南師ですが、これからもよろしくお願いいたします

……全世界のニャーさんファンのみなさん。

みなさんがニャーさんを後押ししたら再びニャーさんが復活するかも……

……いや、さすがに出オチすぎるのでありませんが。

……こんな感じに壊れかけの南師を、みなさんどうか見捨てないでください

どうぞこれからもよろしくお願いいたします

EX・4＊スゥ君による先生観察報告書（前書き）

なんかすごい事になった

とりあえず、今回はエロいです

ナルミ君のただでさえ少ないファンがさらに減るくらいエロいです

そして目指すは“イイハナシダッタノニナー”のタグをつけてもらう事であります

EX・4＊スゥ君による先生観察報告書

～スゥサイド～

きっかけは、ミコトが先生のところにやってくる直前でした。

先生はまとわりつくシルバを無視し、昼寝から目覚めたばかりの眠そうな顔で馬車の屋根に飛び乗りました。

そしてしばらくした後、先生は小さくつぶやいたのです。

「……みんな、元気かなぁ」

震えた声で放たれたその言葉には、今までにないくらい悲しい感情がにじみ出ていた。

種族柄、僕は耳がよいので他の仲間が聞こえないくらいに小さな先生のつぶやきを聞き取る事ができたのだ。

「生きてるうちにもいちど会いたいな……」

そしてさらに続けられた言葉は、今にも消えそうなくらいに小さく、また儚いものだった。

この時はまだ、先生が故郷を夢にでも見て思い出していただけかと思い、あまり深くは考えなかった。

しかし、その次の日、僕はその考えが間違いであるということを痛

感した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊Y☆

次の日、盗賊たちを捕縛した先生は、奴らが召還した魔獣を貪り、それが原因で姫様とちょっとした喧嘩に発展した。

だが、それもやがておさまり、先生が盗賊たちを王都に連行する直前、僕はあの言葉を聞いてしまった

「まぁ、そだね。んじゃああいつら送って、旅を再開しますか」

「まぁ、そう急がなくてもいい気はするが。これ、手紙だ」

そう言いながら、手紙を先生は苦笑しながら姫様から受け取った。

「まぁそう言うな。人生だいたい７０年。短い人生をいかに濃く生きるかでそいつの価値が決まると昔本で読んだ気がする。まぁ自分はそれよか早く死ぬだろーけど」

初めは、ただ小さな違和感が耳に引っかかるだけだった。

だが、この時唐突に前日の先生の言葉が思い出され、小さな違和感は大きな疑問に変化した。

なぜ、まだ１７の先生が本で読んだとはいえこんなに生きるという事に達観したような言葉をなにかを悟ったように発するのか。

なぜ、先生は自分が人間の平均的寿命より早く死ぬ事を知っているのか。

そしてなぜ、相手が誰かわからないが、心の底から会いたい相手に生きてるうちに会う事ができないのか。

これらの疑問が頭の中で生まれ、ぶつかり合い、そして一つの最悪な仮説をはじき出してしまった。

だが、これを答えにするにはこの時はまだ判断材料が足りなかった。

だから僕は、しばらく先生の様子を見る事にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊☆

その後はしばらく、いつも通り先生を観察していた。

途中、ムーにも事情を話し、協力をしてもらい観察していたのだが、なかなか決定的な証拠が見つからない。

ちなみにムーを選んだ理由は、口が固いから。

そして、いざ先生に見つかったりした時に表情を変えずにしらを切れると思ったからだ。

なかなか証拠を掴めない僕達は、ある日一つの策を思いついた。

それは、バレない程度に自然に遠回しに、先生から直接証拠を聞き出すという事だ。

策と言うにはあまりに稚拙ではあるが、もはやこれしか方法はないと僕達は結論づけた。

なにしろ、僕の推測が正しければ、あまり時間はあるとは言えないのだ。

そして、僕達は試験が終わって証を与えられる時、それを実行することにした。

直接話をするのは、表情の変化が薄く感情が読まれにくいムー。

内容は事前に何回も確認した。

先生は変な所で常識のなさや価値観などの違いを披露し、ニホンでは一般的だとはいうがこの国では珍しいものなどをよく見せてくれる。

なので、会話のきっかけにその証についての話をするという事から想定し、事実それは成功した。

「……先生、こんな高価なもの本当にいいんですか？」

そんな浮かれるみんなの中、ムーが先生にそう言いながら近づいていった。

僕は、先生達の話が聞こえるよう、腕輪をいじるふりをしながら聞

き耳をたてる。

「いーよいーよ、んなもんありあまってるし。そんな高価とか、家にあったのでささっと作っただけの安物だからね。気にしないで使いなさい」

よし、いい流れだ。

最初は、証がどんなものなのかとか、先生の家の紋章とかは入っていないのか、とかから話を持っていこうとしたのだが、先生から話をふってきてくれた。

そしてムーはこの機を見逃さず、しっかりと話を捉えた。

「そう、ですか。……家と言えば、先生はこの旅が終わった後は一度祖国に帰られるのですか？」

さあ、どうでる？

「……無理だね。ちょっと理由があって帰れないからね」

少し困ったような顔をした先生は、おどけたようにそう言ってきた。

そして、その答えから僕達の推測はより一層現実味を帯び、心に不安が渦巻きはじめた。

「そう、ですか。すいません、失礼な事を」

「あ、いやそんな失礼だなんて」

ムーは怪しまれないていどに謝った。
次の話題に自然に入る事ができるように。
「いえ、この国のために魔獣討伐を目的に、祖国を捨ててまでやってきた先生にあんな……」
“祖国を捨てて”。
僕達は先生が国を捨てたかなんか全く知らない。
だが、予想が当たっていたなら捨てた可能性は限りなく高い。
つまり、僕達は先生に鎌を掛けたのだ。
そして、その答えは
「いやいいから、そんな事。まじ気にしないで。そもそも自分はそんな恩を売りつけるためにきた訳じゃないし。半分島流しみたいにこっちに送りつけられただけで亡命した訳でもないから。わかった？ドゥユゥアンダスタン？」
見事に予想通り。
ただ、一つ違うのは先生が自分からこの国にきたと思っていたが、どうやら違うらしいということ。
だが、その外れた予想はどうやらさらに事態を悪くさせるに足る情報だ。

だがそれはあとで語るとしよう。

「……はい」

ムーは真っ直ぐ先生を見つめながらも、その手にはきつく拳を握りしめている。

そんなムーの様子に気がついたのか気づいてないのか、子供に言い聞かせるかのように先生はムーにこう言った。

「大丈夫だって。んな気にせんでも、自分は楽しく生きてっから。みんなで楽しんで、バカな事やって。……確かに君らには自重して欲しいが、それでも楽しいから」

「……はい」

「ま、とりあえず目的地の怪物倒すまで、楽しく旅を続けましょうや。人生短いんだ、楽しまなにゃ損だろ?」

……もう、これで確信した。

僕の予想は、悲しい事に当たってしまったのだと。

ムーはそれを悟り、先生の目の前で涙を流してしまった。

困惑する先生を置いて、逃げるように駆け出した姿は、あのがたいのいいムーだとは信じられない程小さく、壊れそうなものだった。

いつのまにか二人を凝視していた僕は、運悪く先生と眼が合い、とっさに目線を逸らして何事もなかったかのようにその場を後にした。

僕達な確信してしまった事。

それは先生が、魔獣との戦いを終えた時、その命も共に散らす運命なのだ、という事だ。

＊＊＊

「うっ……」

珍しく僕の言葉にたじろぐ姫様。

他にも近衛隊員はいるが、みんなは黙って聞いている。

ちなみに先生は、シルバを押し付け外で見張り兼火の番をやってもらっている。

とりあえず、シルバは耳をかじられてなめられるのが好きらしい。

そんな事より、今は先生についてだ。

「もう一つ、証拠となる発言があります。先生が言った、“半強制的にここに送られた”という発言です」

「……それが、どうした？」

「姫様は、他国の魔獣を倒すために、わざわざ数少ない“神属性”の持ち主にして、“世界属性”の適合者である人間の兵士を帰ってこれない事を前提に送り込み、見捨てるなんて事をしますか？僕が国王なら、少し腕の立つ兵士を数人送るに留めます。というかむしろ、よほどでないかぎり親交もない他国にわざわざ兵士を送るつもりにもなりません」

「……いや、違う。世界属性は最近……」

「その場にいないのに、適合者かどうかがわかるはずがありません。だから事前に検査なりなんなりをして、適合者かどうかを調べていたんでしょう。で、先生がそれを使うのならば、宝具が送られる予定だったのではないでしょうか？あいにく先生はそれを断ったので

すが」

「……」

「つまり、なにが言いたいかと言うと。

それほどまでの戦力を投入しなければ、普通の人間では倒せない程に強力な敵だという事です。先生が、命を懸けなければ勝てない程の。

そして、その敵は人間にとって早急に倒すべき、人間の数少ない“天敵”となりえる敵なのではないでしょうか。

人間にも弱点はある。

先生が前に言っていたこの“弱点”とは、その“天敵”が関係するのではないでしょうか。

そしてきっと、先生が一人できたのは先生の性格故、誰かがいたなら見捨てられずに守ってしまうから、足手まといにならないよう一人できたのでしょう」

そこまで言うと、ミミリィ隊長が声を荒げて反論してきた。

「でも！なら先生が最初にシルバを連れて行こうとした理由は！？それならシルバを連れて行かないんじゃないの！？だからそんな……」

「全能の真球」

ミミリィ隊長の言葉を遮ったのは、姫様のつぶやいた一言だった。

「ナルミがシルバに渡した宝具だ。あらゆる攻撃を無効化する指輪型の宝具で、今はシルバが身に付けている。前に、ナルミがシルバに怒った時も自殺防止と言ってつけたらしいし、性能は間違いないはずだ。私もつい最近初めて本物を見たが、たしかに宝具をシルバはつけていた。だから、その宝具“全能の真球”をつけているシルバは、宝具に守られているから問題はない、という事ではないか？」

姫様はそい言うと、睨むように僕を見つめてきました。

「だが、この推測には穴がありすぎる。それほどまでに強い魔獣を相手にするのに、なぜナルミが新たな戦力になりえる世界属性の習得を断ったのか。なぜナルミの師匠であるサンジェルマン伯爵が直接、またはナルミとともにこなかったのか。いろいろあげていけばきりがない」

……。

「確かに言われてみればそうですが、それでも推測を完全に否定できるに足る証拠でもないかと」

「ああ。それに今の疑問に今現在で推測できる答えを出すなら、ナルミが魔獣に確実勝つ事は可能だが、同時に確実に死ぬから、これから死にゆくナルミ自身が使ってしまうより、他の者につかわせる方がいいと考えたとか、ナルミがただ念話する事でさえ消耗の激しい距離にあるニホンからここまで、ナルミを送り込む事ができるのが伯爵しかいなかったとかが考えられる。だが、それを言っていけばきりがない」

「……つまり、何がいいたいのですか？」

正直、今の姫様の意図がわからない。

いったい何が言いたいのか……

「いや、ただ複数の可能性があるというだけだ。例えばこれとは別に、ナルミが魔獣を倒したら、次の場所にいる魔獣を倒すために一人旅に出るとかな。つまり、あらゆる可能性を考えて行動するべきだ、ということだ」

「……行動、ですか？」

姫様の言葉に反応したのは、今まで黙っていた副隊長。

副隊長は珍しく不安な表情をうかべている。

それに対して、姫様は凛とした声で頷いた。

「そうだ。どのような推測にしろ、魔獣のもとにナルミが行く事は好ましくない事になる。だが、まだ急ぐ程でも無いこともわかる。ならばいくらかやりようがある」

「待ってください。なんでそんな急がなくてもいいとわかるんですか？」

つい話に割り込んでしまった。

少なくとも僕の考えでは、先生は手早く魔獣を倒そうとするのかと思っていたからだ。

「これは、ナルミが私たちを連れてわざわざ馬車と同じ速さで旅をしている事から簡単に推測できる。もし急ぐなら、私たちなんか残して一人走った方がナルミなら確実に早いだろう？」

……確かに。

そうか、まだ時間はあるのか……。

ならば、やることは……。

僕がそう考えていると、姫様はニヤリと不敵に笑い、僕を指差して言ってきた。

「だから、私たちのする事は一つ。ナルミの妨害だ」

つまり、先生の目的地になるべくつかないように回り道や寄り道をして、時間を稼ぐという訳か。

「……でも、それならもし、時間の制限があった場合、師匠は……」

「さっきも言ったように、ナルミなら走った方が速い。もし時間がないのなら、私たちの旅はそこで終わり。ナルミには遠慮なく私たちを見捨ててもらう」

メルの疑問に、姫様はしっかりとした口調で言い放つ。

「もともと無理やり付いて来た旅だ。途中で帰れと言われても、しかたがない。寂しくもあるが、ナルミを止める権利までは私にはないのだからな。たとえナルミが二度と帰ってこないとしても」

そう言った姫様の目から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

つられるように、隊長やテトラまでもが涙を流す。

「とりあえず、私たちはギリギリまでナルミを引き止める！そのため、これからは定期的に進路についての会議を行うようにしよう」

姫様がそう言うと、みんなは決意を宿した眼をして、無言で頷いた。

目的は、僕達の中に、先生の中に少しでも多くいい思い出を残す事。

そして、みんなの心には、もう一つの共通した決意が生まれた。

『先生が不安にならないよう、そして先生が僕達を見ていられるうちに、立派な一人前になって先生に安心してもらおう』

先生、僕達は今はまだ、先生に護られてばかりの弱い魔族です。

だけど、いつか必ず、先生に認てもらえるくらいに成長して、先生のように、大事なものを身を張って護れるようになってみせます。

だから、お願いです先生。

……魔獣を倒しても、僕達を残して先に逝くなんて言わないで、いつものように笑って帰ってきてください。

あなたは人間で、英雄で侯爵ですが、なによりあなたは僕達の……

僕達のたった一人の先生なのですから。

ちなみにそのあと。

「んっ！んんっ！！」

「……先生、なにやってるんですか？」

「えっ！？ムっ、ムー君！みんなも……いつのまに……」

「うわっ……首輪まで……師匠、これどこに持ってたんですか？」

「いやつくっ……じゃなくって！これはその、お仕置きっていうか、別にやましい事では！ほら、メルちゃん見てみ！彼女服着て……」

「……さぁ、おねだりのしかたは教えただろう？」

「スゥ君てめぇ！！」

なにをそんな形相で怒るんでしょうか？

先生の趣味はもはや周知のものだというのに。

ていうか先生、本当に自覚ないんですか？

まさか、この状況でそんな訳ないでしょう。

とりあえず、僕達を心配させてる罰です。

存分に困ってください。

そうこうやってると、隊長にすずらんてぃぷを外されたシルバが慌てたように早口でなにか言い始めた。

「み、みなさん違います！勘違いしてます！！」

「シ、シルバちゃん……」

「私はナルミさんのぺっとで家畜でぶただから首輪や縄は……」

「そぉい！！」

「みゃうっ！！」

「自分は、そんな変態ではありません！今日はたまたまです！たまたま！！」

なにを今更……。

くどいですが、先生の性癖なんかみんな知ってるというのに。

なんというかまぁ……。

平和だなぁ。

「……ほら、なんも言わないとどうして欲しいかわからないよ？全く、君は意外に強情だね。……あぁ、口の布が邪魔なのかな？ま、自分にゃ関係ないけど」

「スゥ殺す！そこ動くなよ！いまから貴様の死の点を刺してやっからな！！」

こうして、この日の夜は更けていったのだった。

ちなみにちなみにさらに後日談、次の日の朝。

「……スゥ君、自分やっぱりSなのかな？」

「えすって、加虐趣味の事ですよね？間違いなくそうかと」

「……でも、ただ自分は、シルバちゃんの反応がかわいくて、気づいたらついやっちゃうだけなんだ。そんなつもりじゃないし、シルバちゃんも悦ぶから……。そう無自覚！無自覚無意識だから自分は

Sでは」

「無自覚無意識ならむしろ本物です。というかなぜ僕にそんな事を相談してくるんですか」

「いや、隠れドSのスゥ君から見たら自分は本当にSなのかなって……」

「失礼な、僕にそんな趣味はありません！！」

「……そうか、自分、まわりからみたらこんなんなんだ……はぁ」

……なんですか、そのため息。

……ちょっと不快。

EX・4＊スゥ君による先生観察報告書（後書き）

こんにちは皆様

あいもかわらぬ人類の底辺南師です

さて、まずは元ネタ紹介……今回は少ないってか1つしかないですが

・死の点・月姫に出てくる直死の魔眼の能力のひとつ。アルクは萌える。

ではではさっそく言い訳を……の前に

すいませんでしたぁ！！

なんか、久々に勘違いさせてみたら……文章力がなくて不自然な勘違いのしかたで……

いろいろ穴だらけな彼らの推測は、あくまで“推測だから”ってー事には……あうっ！

やめて！モスをけしかけないで！！

……ゴホン

とりあえず、かれらはあんな具合に勘違いしてるとお考えください

で、最後のバカップルのいちゃつき（？）については

やりたかっただけです、はい

まぁナルミ君がSを自覚するというどうでもいい目的はありましたが

とりあえず、目的は果たしました

こんなカスい南師ですが、これからもどうぞよろしく……ぐぼっ！！

なっ、なんだ！？

こ、これはすいみ…ん…だ……ｚｚｚ……

南師重傷のため、次回更新まで更新はありません

４３回目＊宗教と災害（前書き）

祝・復活

待っていた方、いたらごめんなさい

長らくお待たせしました

なんとか復活しました

４３回目＊宗教と災害

……自分はね、あれだよ。

日本にいた時から常々思ってた事があるんよ。

……いや、常々って程常に思ってた訳じゃあないけどね？

とりあえず、修学旅行やら友達と遊びに行った時やらに考える事があるんよ。

なぜに人間はジェットコースターなんぞ発明しくさったのか、と。

「おるぇぇぇぇぇぇ！！」

「……ナルミさん、大丈夫ですか？」

……本当に、やめて欲しいね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！☆

事のはじまり、起承転結の起を話すと、それははつい３日前の話になる。

自分達は優雅に荒野を干からびながら進んでいた。

「……あ、あつい」

「……太陽が憎い」

いや、なんというか、もうみんな馬車の中でグロッキーなんよ。

お空に鎮座されるお天道様は、ここ数日大会直前のバレー部のごとく休まずに毎日毎日働きづめなのである。

しかも今いるのは荒野。

日陰なんかありもしないし、みんなはかなーり参ってる。

馬も馬で見るからに元気ないし、もう大変さ。

で、そんななか唯一元気なのは……

「ほんっと！人間はいいな！このやろう！！」

エリザに石を投げられた自分であります。

おいこら、窓からそんな投げるんでない。

チャリから落ちるだろ。

つかどこに持ってた。

「人間だってつらいぞ！……今はまだ平気だが」

しょーじき確かに最近暑いとは思うし、現に暑いのだが……なんかあんまダメージがないんよね。

こう……『今日なんかいつもよあちい気しねぇ？』程度の感じで…

…すまん、自分もようわからん。

「うぅ……せめて風が……死ぬ」

エリザはそう言いながら、はしたなく窓から身を乗り出しうなだれている。

しかし風、ねぇ……。

「扇風機はコンセントないと使えんしなぁ……」

確かにまぁ彼らのようすから、かなりまいっているのがよくわかる。

だからと言って、魔法で風を起こすのも微調整がむつかしいらしく、長続きしない。

水やら氷やらを出した所で、こんどは馬車が重くなり馬が死ねる。

全く……どうしましょうかね。

「あー……師匠の力でなんとかなりませんか？」

「……なるかもしれんがねぇ」

ぶっちゃけあまごいとかしたら、なんとかなる気もしないでもないが、したらしたで、ねぇ？

……はぁ。

しかし雲の一つくらい出てもいいんでないかね……お。

そう思う自分の願い……願い？

みんなの願いが通じたのか、なんかそわそわと風が吹いてきた。

すると、みんなは悲鳴をあげる！！

「あ、あつっ！いたっ！目がっ！！」

「窓！窓閉めましょう！！」

「姫様早くひっこんで！！」

そりゃそうだ。

ここは荒野、乾いた砂とか土で構成された大地である。

しかもただでさえ暑いこの地域、無駄にただ風が吹いただけならそれが涼しいはずもない。

なにせ砂粒を巻き上げ熱を孕んだ凶悪な風が、その砂粒の弾丸を打ちながらカラカラの熱風となりむしろ襲ってくるのである。

まっこと、自然とは恐ろしい。

哀れその弾丸を目に食らったスゥ君はまさにその恐ろしさを全身で感じた事であろう。

……あ、全身でなく目だけかな？

ま、どうでもいいや。

しかし……なんだ。

この風、だんだん強くなってる気がする。

ほら、後ろからはコーッて感じに風を切るような音が……ん？

振り向いた先にいたのは、緑の鱗に包まれた三匹の巨大なドラゴンがこちらに向かってきている姿であった。

「のわっ！！」

あまりにいきなりなその存在に、つい自分は悲鳴をあげてしまった。

対してそのドラゴンは、自分達を発見するやいなやこちらに向かって急降下をして地面に降り立った。

奴らが地面に足をつくと、震度３くらいの揺れが大地を震わせ、なにかが着陸した音が大気を揺るがした。

その様を呆然としながら見ていた自分は、馬車の窓が乱暴に開けられる音とミミリィ隊長の焦った声で正気にもどった。

「な、なんですか今の音は！！」

「……はっ！ちょっ！なんか来た！ドラゴン的なの！！」

自分はそう言いながらチャリから飛び降り、同時にポケットから一護を取り出す。

……最近戦闘慣れしてきた自分がいて、なんか悲しい。

「まってください。私たちは敵じゃあありません！！」

自分が悲しんでいると、ドラゴンのうちの一体の背中から、誰かがそう叫んできた。

するとドラゴンは首を下げ、それを伝うようにそいつはこちらに降りてきた。

容姿は青髪にそびえ立つ角の２５歳くらいのどっかで見た事ある青年。

「お久しぶりですハセガワ侯爵様。突然、申し訳ございません」

彼はいきなり目の前に来ると、そう言いながら自分に跪いてきた。

お久しぶり……？

誰や。

「ディラン、お前なぜここにいる」

自分が混乱していると、馬車からエリザが降りてきて彼に向かいそう言ってきた。

ディラン？

知らんなぁ。

「姫様……。突然の無礼を、お許しください。故あって、ハセガワ侯爵様を王都に戻っていただくべくここまで馳せ参じました」

「いあっ？自分？」

なぜに？

「はっ。ご迷惑なのは承知しております。ですが、国の存亡がかかっております故」

彼のその言葉に、馬以外のみんなが凍った。

「……なにが、あった？」

そんな空気の中、エリザが重々しくディランさんにそう質問した。

すると彼は、とても真剣な眼をしてエリザを見つめながらそれに答える。

「……先日、国中の魔術師が一斉に不吉な予言を致しました……今から１２日後に、封印された夜が来る、と」

するとみんなは、まさに戦慄したような顔をして彼を見つめはじめた。

対して自分は

「……封印された夜って、なに？」

一人全く会話についていけていなかった。
とりあえず説明は後回しにされ、自分達はそそくさと馬車を片して王都に戻るためにドラゴンに……ドラゴン……。

「のらなだめ？」

「……まぁお前なら一応一瞬で帰れるだろうが……乗ってやってくれ」

そう言いながらエリザは困った顔をして人差し指で頬をかく。

「飛竜隊は、私たちを迎えにきたのだ。なのにお前がこいつら連れて瞬間移動するとだ、その気はなくとも言外に彼らを役立たずとして扱ってる事になるというか……つまり彼らの面子が丸つぶれなのだ」

……わかるよーなわからんよーな。

自分は遠い眼をしながら、じっとディランさんが乗ってきたドラゴンを眺め……なぜ伏せるなぜ震える。

「……さすがハセガワ侯爵様、うちのセノを視線だけで服従させるとは……というかセノが怯える姿を始めて見ました」

……あーそーですか。

そろそろ自分がなんなのかわからなくなってきた。

はぁ……このモヤモヤをコーラとかガラナとかの炭酸ですっ飛ばしたい。

あー……はぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊↑☆

で、その後はさすがのドラゴンも1日でつける距離ではなかったらしく、3日もかけて王都に到着。

そして今は王都で嘔吐中、と。

黄土色の王土が汚れに汚れる。

「ナルミさん、水……」

「あ、ありが……うっ！！」

「本当に大丈夫かナルミ」

そして応答できない自分に対し、夫を気遣うシルバちゃんと王統のエリザが……

「うるぇぇぇ……！！」

はぁ、はぁ……くそ！！

このままどこかの王道楽土に逃げ出したい！！

……こんなくだらない事考える余裕はあんのにね、自分。

とりあえず、ドラゴン嫌い。

もう3日もこれだもん。

なんも食べてなくても、胃酸だけ上がってくるし。

胃酸、岩溶かすし。

……はぁ。

「落ち着きましたか？」

「……なんとか」

自分はとりあえず足で嘔吐物を埋めながら、シルバちゃんに返事をする。

はぁ……もう自分ジェットコースターに乗らない。

「はぁ……人間は変なとこが弱いな」

「うっせ」

「ま、しかたないだろう。なにせあの距離を昼夜問わずにたった3日で飛んできたんだ。私も少しクラクラする」

エリザとこんな軽口を叩いていると、どこからか三人くらいの兵士がやってきた。

「エリザ姫様、ハセガワ侯爵様。至急、議会室までお越しください」

議会室ってどこさ。

「あぁ、わかった。いくぞナルミ……シルバは待ってろよ？」

「流石にそれくらいの分別はつきます。天井裏から静かに見てます」

「いやそれは……あ、仕事か」

忘れてた。

近衛隊はそうやって忍者的護衛をするんだったね。

……こんど彼らに手裏剣とかクナイでもやろうかな？

「どうぞこちらに」

「ほら、いくぞナルミ」

「げっ！？」

全くもってくだらなすぎる事を考えていた自分は、エリザに襟を掴まれて引きずられながら……。

「……おもい。歩け」

……訂正。

引きずられずに、首を締められたまま自分は直立不動だった。

おもいって……始めて言われた。

やばい、感動してき……

「い！く！ぞ！！」

……すまないエリザ、忘れてた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊X☆

ヴァイネルとは、太陽の女神である。

月の神様ヴィルザムとは夫婦の関係らしい。

だが、そんな彼らに嫉妬するのは、夜の女神メルサ。

メルサはヴィルザムを愛していたが、ヴィルザムはヴァイネルと結ばれ2人の間に星の女神ルーメルが産まれた。

だが、そんな幸せ真っ盛りの二人を見てパルパルしていたメルサは、力を蓄えに蓄えに蓄えてとある魔法を生み出した。

それは自らの夜の力を使って、本来は光で溢れているはずの昼の世界からヴァイネルを追い出そうとする魔法である。

その魔法は、確かにヴァイネルを捕らえ、神の力を奪っていった。

それにより、昼は夜となり太陽は姿を消した。

魔物や魔獣は活発になり、魔力は乱れて地上はとても危険な冗談になった。

だが、太陽を守る光の女神チャムがその魔法からヴァイネルを救い出したのだ。

すると行き場を失ったその魔法は暴走し、今度は大地を浸食しようとしたが、月の神様ヴィルザムがその魔法を自らの中に封印した。

それにより月は日によって魔法の影響で満ち欠けを始めたが、地上は無傷で救われた。

しかし、何回も満ち欠けを繰り返していれば月も疲弊し、封印が緩くなる。

そして封印が解けると、再び同じ悲劇が繰り返される。

それが封印された夜である。

これは下手をしたら世界が転覆するのではないかと言われる大災害である。

幸い何回か過去にあったその夜も、二人の女神の力により退けられてきたが、それでも危険なものである。

なにより乱れた魔力により、ただの魔物が魔獣になるかもしれない上、今まで出た事はないが“闇色の騎士”という正体不明原因不明の魔物が現れるという言い伝えがあるのだ。

「そうなん……ですか」

「ええ。これは国家を揺るがしかねない重大な問題です。しかも今回は神話にある夜と限りなく近いものが来ると予想されます」

ここは議会室とかいう部屋。

そこには真剣な顔をした重役たちがいっぱいいる。

とりあえず今は確認のため魔術師代表的な誰かが物語を語ってくれたのだ。

あー、なんとも……。

「……まずは王都にある結界の強化をすればいいのではないか？」

「いえ、下手に結界を張ってしまっては被害が広がる可能性があります。なにしろ得体の知れない魔法です。

属性を見誤れば、同調して王都に魔法を集める可能性も……。まぁそれがわかれば……」

そう言いながら魔術師代表的な人は自分をちらりと見た。

……えぇー。

「……ハセガワ侯爵、なにか知っていないかな？」

彼の視線に気づいたＥＸモード王様がそう自分に話を振ってきた。

ただね、まわりの何人かのなんつーか……敵意丸出し、特に丸々太ってるよーなやつの視線がキモい。

しかし……心当たりないわけではない。

ていうかこれしか考えられん。

「……日食。その伝説のは多分皆既日食で、今までのはただの日食かと」

自分がそういうと、みんなの頭にはハテナが浮かんだ。

だろーね。

日食知ってたら、こんな集会起きへんだろーし。

なぜ、自分が日食だと思ったのか、それにはもちろん理由がある。

ていうか、真昼に夜って完璧日食じゃんっていうね。

でもまぁ、月の満ち欠けが云々とかでも連想できたし、太陽を守る光の女神って皆既日食の時にはみ出した光なんだろうねって思ったし……。

まぁ、地球でも昔日食は不吉な予兆って言われてたしね。

しゃーない、説明すっか。

「あー、日食とか皆既日食というのは……」

と、ここまで言って気がついた。

ここで“日食って、月が太陽隠してんですよ”とか言ったら、いろいろまずい。

神話が政治にはみ出してくる世界だ。

その神話でいい人ポジションの月が実は太陽の邪魔してますって言ってみろ。

極めて面倒な事になる。

「……自分の国での“封印された夜”の呼び方です。神話に出てきた完全に太陽を覆うものを皆既日食、途中で退けられたものを部分日食と呼んでいます。日が食べられると書いて日食と呼ばれます。同じ意味で、日が蝕まれると書いて日蝕とも」

「ほう……対処法はあるのか？」

対処法って……無害ですから日食。

しゃーない、デタラメでいくか。

「対処法っていうか……自分の住んでた街は夜も明るくてなんというか……眠らない街状態だったので被害があまり……」

実際そこまで明るくはないがね。

「眠らない街……」

エリザ、んなキラキラした眼でみんな。

「……今から王都を同じようにするのは可能か？」

不可能です。

「無理です。今からやったら時間が足りないし、何より自分にはその分野の専門知識がありません。おおまかな仕組みはわかりますが、それを応用、発展させた技術が必要ですので、そこらへんは……。というか下手したら財政破綻します」

「そうか……」

よし、ごまかせた。

「……」

と、うかれる自分とは対照的に、気まずい沈黙があたりを支配する。

うーむ……どうしたものか。

……あ。

「そういえば、闇色の騎士とかいうのってなんですか？」

すーっかり忘れとった。

うーむ……いかにもちゅーになお名前で。

「ああ、それは……わかりません」

「はあ……？」

わからぬとな？

「そもそも言い伝えのみに出てくる魔獣ですので、存在するかもわかりません。ただ、魔族の血肉を好んで喰らうとか、千の武器を操るなどの情報はありますが……」

うーむ……そーなのか。

となるとあれだな。

自分的予想としては真っ黒い甲冑とか顔まで隠れる兜を装備したオーディンみたいな奴だと思うね。

きっとなんかギルドとかあったらランクＳＳＳくらいの強さなんだろう。

「その魔獣は、暴走して地上を破壊し尽くそうとした魔力そのものらしいとも言われてますが……全く情報がないのです」

「そっか……」

魔力そのもの、か……よし。

近衛隊には、念のためプラスチックのリコーダーとかハンガーとかクイックルワイパーをわたしとこう。

自分は信じるよ、プラスチック万能説を。

……あ、延長コードもプラスチックで覆われてるから、振り回せば武器になるかな？

自分がそう考えていると、王様が思いっきりため息をついた。

「……とりあえず、今日ももう解散する。明日、同じ時間にまた始めるので遅れぬよう。……良い知らせを期待している」

あぁ……相当皆様切羽詰まっていますね……。

今日も、って事は今までも何回も会議をやって、なんの進展もなかったのだなぁ……。

しかもその原因が日食とか……ようわからん。

光魔法とか、ないのかねこの世界。

なんかこう、プチ太陽を作り出すような魔法が……

「……あ」

「どうかしたか？」

そうだそうだ忘れてた。

やろうと思えば可能なのだよ、うん。

「いや、太陽みたいなのなら作り出せるかなって……」

「なのぬっ！！」

なんすか王様、その叫び。

「ま、まこっか！？」

「まことです。あせらないでください」

まこっかって……王様テンパりすぎ。

「えっと……フィールド魔法『シャインスパーク』」

自分はそう言いながらカードを取り出すと、部屋の真ん中にまばゆい光を放つサッカーボール大の光の球が。

……正直、発動してる時にこれ室内ならでかすぎね、とかそもそも太陽なの、って疑問が浮かんだが、なんとかなった。

いやぁ……必死に祈ったかいがありました。

「……とりあえず、気休めにはなるかと。まぁどんな効果があるかわからないですが」

ぶっちゃけ攻撃力上げた所で、だしね。

でも超栄養太陽よりかは、いくらかましなはず。

そもそもあれ、通常魔法だし。

そんな事を考えていると、王様が

「……いや、充分だ。少なくとも、民の混乱は防げる」

おー、そりゃよかった。

人はヤケクソになると怖いからね。

「では、一応今はしまっておきますので、その時に」

自分はそう言いながら、とりあえずカードを解除……解除……。

「『魔法解除』」

解除してポケットにしまった。

ふう……とりあえず、彼らにプラスチックを与えるか。

そう思いながら、自分はなんかウキウキしている魔術師代表に囲まれながら部屋を出た。

だが、この時自分は気づかなかった。

自分をやたら血走った眼で睨みつける存在を。

ちなみにその頃の裏庭。

「お、おい！あの雲が消えてるぞ！！」

「え！？嘘でしょう！！」

「せっかくの涼しい日陰が……」

「……あ！私の魔法威力が下ってる！！」

「え？俺は変わらないが……」

……そーいやダークゾーンそのまんまだったの、すーっかり忘れてた。

フィールド魔法が発動して消えてしまったのか……にしても。

「あぁー！フカフカの雲が！！」

「ちくしょう！どこで昼寝すりゃあいいんだよ！！」

「ひなたぼっこが……」

君たち、多分ヘタなデュエリストよりダークゾーンを有効活用してるよ。

つか、あの雷纏った雲によく寝ようと思ったよね。

てゆーか、乗れたのかダークゾーン。

４３回目＊宗教と災害（後書き）

こんにちは皆様

蘇りし南師《アンデット族・星８・シンクロ》です

わからない人はスルーしてください

まずは元ネタ紹介、と言いますが、今回は久々に遊戯王ネタしか出してません

なので（？）皆様、遊戯王をやりましょう

さてさて、今回１ヶ月ほどいなくなった南師ですが、リアルでいろいろありまして、しばらく携帯をいじれずにいました

テストやら、いろいろもろもろかくかくしかじかです

まぁそれも終わり、なんとかこれからも続けられるようになりました

皆様、ご心配をおかけしました

これからも南師をよろしくお願いいたします

とりあえず、皆様熱中症やらなんやらには気をつけてください

そしてビアガーデン付近の酔っ払い運転は特に気をつけてください

世界が回りますし、何より入院はつらいですよ？

てなワケで、皆様お身体をきをつけてください

４４回目＊貴族とか教授とかご主人とか（前書き）

日本語崩壊注意

多分前のあれみたくフルボッコ必至のひどいお話し

……あと、困ったときはバカップルに限る

４４回目＊貴族とか教授とかご主人とか

さてさてさてさて。

自分は昨日から、お家に帰ってきていたわけである。

別に我が偉大なる警察の交通課勤務なお父様や、気がつけば大豆料理しか作らない自称天才デザイナーな天然なお母様がいる家に帰ったわけではない。

いつの間にか出来上がってた自分が家主のお屋敷である。

まぁ帰った途端に使用人の皆様から、“なぜに黙って旅にでたのら！！”とか怒られたのはしかたないね。

まぁ頑張って辞書引いた結果、“自分、旅でる、帰る、いつか”てな電波的怪文書になったのだから、語尾が“のら”ってなるのもしかたがないよね。

そしてついでに屋敷やら使用人達の管理を全部王様経由で押し付けられたガルクさんにも怒られた。

……これはマジで猛反しました。

しかもこれまた王様経由で謝礼金と使用人たちの給料やら屋敷の管理費用も先渡ししたから、金銭面は問題なかったはずだが、それがさらにガルクさんの逆鱗に触れたらしく、“いっくら義理の父親でもそうポンポンと大金を預けるな！！”だそうです。

……ちなみにまだ結婚はしとらんよ？

……まあもう事実婚状態で、正式な婚約もしているのではあるが。

……げふんげふん。

とりあえず金銭面の言い訳としては、ひっじょーに責任転嫁的無責任発言になる事実を発表すると、これは全部エリザの発案、エリザの根回し、エリザの手配でガルクさんに面倒な事が回ったんだがね。

……自分が悪いのはわかっとるし、全面的に認めるよ。

……はい、でさらにだ、そしてそしてさらにさらにこれに加えて同時に驚愕の事実が発覚したのである。

なんでも、詳しい経緯は知らないが、ゼノアが二人の部下と二人の自分の使用人を引き連れて、自分を追って旅に出たのだとか。

……その二人の部下、ちょっち今度潰しとくかと決意したのはまた別の話。

さらに言うと、彼は自分みたく休暇の形ではなく、限りなく休暇に近い別の形で旅に出たらしいが……なんだろう、よく教えてくれんかった。

まぁ限りなく休暇に近いなにからしいから、国の管理するドラゴンたちは使えないので仕方がなくお馬さんでパカラパカラと街を出たらしいんだがね。

あ、あと一緒に旅に出た自分の使用人二人。

彼らは自分の屋敷の中でも掃除、洗濯、料理に攻撃、防御に魔法に格闘にと、あらゆる方面で優秀なツートップが、ご主人様（自分）の身の回りのお世話をするための少数精鋭として彼らについていったらしい。

この時使用人のほぼ全員が一緒にいこうとしたらしいが、まぁ詳しくはしらんが、屋敷を守って、いつご主人様（自分）が帰ってきてもいいくらいに綺麗にしとけと言われたらしい。

そのせいか、彼らが前いたお家からかっぱらってきた美術品が廊下や部屋に並び、スッカスカだった書斎の本棚も同じ境遇の書物が溢れんばかりの勢いで投入されている。

……一部はガルクさんが管理しきれなくなったのを持ってきて彼らに渡したとの情報もある。

そして、ここからが重要なのだが……。

……なんか噂では旅に出た二人、メイド長とセバスチャン長とかいう役職らしい。

なんでも、前自分がお屋敷にいた時、ついうっかりシルバちゃんとこんな会話をしたのを聞かれてしまったらしいのよ。

『なんつーか……マジメイドってこんななんだね』

『まじめいど？』

『ああ、本物のメイドさん……まああの使用人の侍女さんたちのことを自分の国では“メイド”というのさ。ちなみにメイドたちを纏める人をメイド長という』

『そうなんですか……。なら、執事の男性は？』

『男は……普通に執事、かね。……あぁ、そういや執事と言えばセバスチャンとかかね、よく思いつく名前は』

おわかりいただけただろうか？

つまり彼らはこの会話で、日本では侍女はメイドと呼ばれるという ある意味正しい認識と、執事は日本ではセバスチャンと呼ばれる役職であるというあやまった認識を手に入れたのである。

いやぁ……最初真顔で言われた時は腹筋が崩壊通り越してビッグバン起こしそうなのを必死に耐えたからね。

偉いよ自分。

しかもみんな気に入っているからたちが悪い。

意味は知らないが、セバスチャンの後半のスチャンという部分が縁起のいい言葉なんだとね。

……もうなにも言わん。

あ、ちなみに、彼らがどーやってゼノア達についてったのかは、全くもって自分は知らない。

別に教えてもらえんかった訳ではなく、ただ単に聞くの忘れてたのである。

さて……ここまで語ったように自分はようするに昨日この巨大なお屋敷に帰ってきたのである。

そして色々面倒くさい事になり、最終的には全部投げ出しふかふかベッドにダイブして、メイドたちになんか吹き込まれた赤い娘に布団に侵入されて抱き枕にされながらその波乱の1日が終わったのである。

＊＊＊

でしょう。

学校の教室くらいのお部屋に、お上品な机。

さらにはいくつかの本棚に、なんか高そうな雰囲気を醸し出す風景画。

そしてひときわ目立つのが、まだ技術の発展が進んでいない事による茶色がかった紙が幾重にも積み重なってできた高さ４０センチくらいの特選タワーが計６つ。

「ちょっと自分、用事あるから帰るわ」

「はっはっは、黙れ」

うわぁ、ひどいよエリザ。

「恩師に向かってなんという口の聞き方」

「姫に向かっての不敬罪で処罰されたいか？」

「ごめんなさい」

はぁ……忘れてたが、姫なのよねこいつ。

いーよな、姫はぐーたらできて。

「というかこれくらいで音をあげるな。私なんかひどい時はこれにさらに２山くらい多かったぞ」

しらんよ。

「……はぁ。しゃーないのー」

とりあえず、自分は腹を括ってデスクワークにはげむのであった。

「あ、あと今日の予定はシルバが知っているから、そっちから詳しく聞いてくれ」

「なぬ？なぜにシルバちゃんが……て、彼女なら、うん」

「気持ちはわかるが、誤解するな。彼女の仕事からだ」

うむ？

「なに、近衛隊員の仕事かえ？」

「んにゃ、ちがう。お前の秘書の仕事だ」

……は？

「秘書？誰が？誰の？」

「シルバが、お前の」

……ほわい。

「……なんで？」

「む？お前と結婚するからだろうに。私の近衛隊なんかやってたら、

時間とか色々あるし、ちょうどメルが新しく入った頃に……あ、そうか。正式に手続きするまでお前を驚かすために黙ってる事にしたんだった。すまん忘れてた」

「うぉい！！」

とりあえず、その謎サプライズいらないから。

そして昨日のシルバちゃんよ。

君、天井裏に隠れる権利なかったんではないか？

「とりあえず、私は私でやることがあるから部屋に戻る。では、公私混同してちちくりあわないようにな」

エリザはそう言って扉をしめ……また開いた。

「そうそう。お前の事を疎ましく思ってる貴族やら、他国からの密偵やらがそれなりにいるらしいから気をつけてくれ。すでにお前目的の密偵を捕まえた数が2桁に達してるらしいからな」

そしてそう言って再び扉をしめた。

……なんつーか、ねぇ。

いやーなフラグが今にょきっとした気がした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊―☆

そしてしばらく、反則的記憶術をつかって辞書を丸暗記した自分は、書類ひとつひとつに目を通していたのであります。

すると、しずしずと扉が開いて、シルバちゃんが書類を抱えて入ってきた。

「えと……ナルミさん、これ……」

「ははは……書類追加ですねわかります」

とりあえず絶望。

……影分身でもすっか？

「それであの、おと……んんっ！ランドルフ様から、伝言とナルミさんのこれからの予定を」

おお。

まじめに秘書をやっている。

えらいえらい。

「えっと……まず予定ですが、今日の午後に、姫様への授業があります。それから、何人かの貴族の方と王宮魔術師から面会したいとのご要望と、ナルミさんの授業を開いて欲しいとのたくさんの声が」

……うん、予想はしてた。

貴族とかとの面会は予想外だが、授業については予想通りだ。

……どーやって逃げよう。

「それから、お……ランドルフ様から、の伝言で、“なにか手伝える事があれば言って欲しい”だそうです」

うーむ。

なかなかに強力なバックが自分についたと考えていいのかね、これは。

「わかった、ありがとう」

「は、はい！！」

とりあえず、頑張って書類読みながら仕事してる姿が初々しくてかわいかったから許す。

「……で、その書類の山は」

「あぅ……追加です。主に講義の要望や兵士への指導願いが大半です」

やっぱりか……。

もうね、魔法学校からのお願いまできて、やんなっちゃうよ。

しかもなにげに魔法学校遠いし。

他にも、なぜか色々な書類があるのだが、これ自分がやるべき書類じゃなくね？てな書類も多々あるわけよ。

とりあえずそこらはよけといてるが……

「ねね、シルバちゃんさ、なんで自分にこの書類が回ってきたか理由わかる？」

ひとまずわかりそうな方に聞きますか。

彼女は、トテトテとよってきて、無慈悲に机のあいたとこに一山追加した後に自分がヒラヒラさせてる書類を取って黙読した。

すると、彼女は答えを出した。

「あぁ、多分これはお父様の仕事が回ってきたんですよ」

なぬ？

「なぜに？」

「ナルミさんは、派閥で言えばもうお父様が筆頭に立たれる魔王派の一人ですからね。その関係で、お父様の仕事のうちいくつかの貴族が署名しなくてはならない書類が……んと……ほら、この外壁の補強費用要求なんか、すでにいくつか署名されています」

そう言いながら彼女が自分に見せるのには、なるほど、確かに署名がなされている。

「他にも種類はありますが……。とても簡単に言うと、今のナルミ

さんは宰相であるお父様の補佐役の立場として周りからは見られてますね」

なるなる。

……あれ、微妙に責任重大でないか、それ。

……まあいい。

宰相の娘さんに相談しながら進めますか。

……それより気になるのが

「なぁ、派閥って、今どーなってるん？」

これよね。

エリザの忠告もあり、非常に気になる。

「今の所、主な派閥で対立してるのが魔王派と貴族派ですね」

む？

よくある騎士派対貴族派ではないのか？

「魔王派は、現在の魔王様の政治のあり方に不満がない、それに付き従っている方々の派閥です。そして、貴族派は逆で、もっと税率をあげるべきだ、とか主張している方々です。というか主な対立の原因が、税率をあげるか否か、らしいです」

ほーう……難しそうですな。

「ちなみに、今の主な税率はその貴族の領地ごとに違いますが、だいたい3割から4割で、最大まで引き上げても5割までだと定められています」

まじか。

自分の領地は税率なんぼだろう。

「昔お父様や今の魔王様が就任した時は、税率が7割、ひどい所では9割なんて所がザラにあったので、改革に改革を重ねて、前魔王様を処刑して今の税率に持ってきたらしいです」

「ふーん……処刑!?」

え、まて。

前王様って、つまり今の王様の親父さんだべ？

……なにがあったし。

「はい、処刑です。実はお父様と魔王様は、お母様と今の王妃様と共に、若い頃修行の旅という名目の婚前旅行をして各地を巡っていたらしいんです」

……婚前旅行。

なんと都合のいい解釈だ。

「それで、その間に魔王様のお父様、つまり先々代の魔王様が亡くなられて……一説では暗殺らしいですが、そして、今の魔王様がその場にいなかったので、代わりに当時の魔王様弟である方が代理として魔王に就任したのですが……その方が税率を引き上げたり、女の子をさらったりなんだりと、色々やったらしいのです」

……まあ、よくある話だね。

そこからそれを聞いた王様たちが国に駆けつけて解決……

「ちなみにお父様たちがそのことを知ったのは、魔王様が亡くなられて3年後の事らしいです」

……。

無礼を承知で言わせてもらう。

あほか。

「そして事態を知ったお父様たちは、国に戻ったのです。当時の魔王様により暗殺とかの危険もありましたが、無事に国に帰ってきて、代理の魔王様を椅子から引きずりおろし、国政に参加したらしいです」

そうか……なんか、バカみたいに見てたけど、以外にすごいんだな、王様。

「ちなみにその改革せいで貴族派と魔王派の対立が明確になったのですが……」

……ですが？

「その貴族派の筆頭がナルミさんに敗れて不正を暴かれて貴族派の勢力がだいぶ弱まったらしいです」

……。

「さらには、魔術師たちからの支持や軍部への発言力から、ナルミさんは魔王派の中でかなり重要な位置にいる事になります」

……泣いていい？

「あ、あと話は変わりますが……」

「まだなにかあんの？」

もう勘弁して。

「はい。なんでも、ナルミさんが魔獣を丸かじりした事が街中に広まって、“人間は悪の根元たる魔獣を主食とする正義の種族だ”という噂とか、ナルミさんが日本から派遣された特殊部隊の一員でこの国を救いにきただとかの噂が……」

「……もうやめて」

なぜに、なぜにそんな噂が……。

「それと、ミコトをつれてた事からも噂が……」

「もう本当……命？」

そういや、忘れてたが……。

「命いま、どこ」

「命なら、いま姫様を乗せて空を飛び回っています」

ほら、とシルバちゃんが指差す先を見ると、窓から空を黒い鳥が旋回しているのがよくわかる。

……とりあえずエリザ、宿題倍化な。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊※☆

「さあ！楽しい楽しい授業の時間だ！じゃあこれが宿題！はい、終わり！！」

「まてまてまて」

とりあえず自分はエリザの部屋にいき、机に宿題をドサッとおいて帰ろうとしたら止められた。

まぁ、本気で帰るつもりはないがね。

「とりあえずエリザよ。命を勝手に連れ出すな。つかどうやって戻した」

たしか命は、手のひらサイズに収まってたはずである。

「……落ちてた」

「は？」

なにが？

「……これ」

そう言いながら渋々出すのは、なるほど、昔自分が中学の頃に技術の時間、はんだごてで制作した手回し発電懐中電灯である。

たしかスモールにするライトとして使ってたんだよな。

「ねこばばかい」

「……すまない。つい出来心で」

はぁ……全く。

「まぁ、いいわ。もうすんなよ」

自分はそう言いながら懐中電灯をしまう。

さて、近衛隊も全員参加してるし、シルバちゃんも彼らに混ざって待機しているので、授業をはじめますか。

……てゆうかちゃっかり姫様の部屋なのに全員分の机と椅子が用意され、壁掛け式黒板とチョークにいた石まで常備されちまっているとは。

なにかが間違っている。

……まあいい。

「とりあえず、今日はいつもとちがう特別授業をはじめます。今日のお題は、“物理的に考える日食”です」

「まてまて。日食とは、封印された夜だろう？あんな魔力の塊のような現象を、物理的になど……」

「魔力関係なくどうしてあんなふうになるかは説明できる。ただ、魔力は管轄外なので、そこらはわからんがね。……あと、あまり今日の授業は他言しないように。ちょっち宗教問題に発展する可能性があるから」

自分はそう言って……うむ。

「@↑※ΘＨＺυτＸｒＭ」

「のわっ！？」

「なに砂漠！？」

とりあえず諜報対策に、長門式適当呪文モドキであのカマドウマフィールドを適当に作り出した。

実際はいろいろと違うが、まあ誰にも聞かれないで見られない方法が今の自分にはこれしか思いつかなかったのだ。

で、授業開始。

「はいみんな落ち着いて。害はないから」

「……本当に先生はでたらめですよね」

うっせ。

「はいはい、はじめるよ。まず、日食の前に月とこの星はどういう関係かを……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊―☆

そして話は飛んで夜。

授業のあとは書類を片付けたり、なんやかんやの業務を終え、お屋敷に戻ってきたのである。

ちなみにお土産にエリザがかき集めてきた過去の日食の資料がもっさり。

なんでも、自分が分析した方がなにかと期待できるとの事。

買いかぶりすぎだね。

そしてご飯を食べ、ひと歌いしたあたりで、だれかがうちにやってきた。

それはなんと、ガルクさん……プラスセブルさん。

なんか本やらなんやらをたくさん持ってきた。

とりあえず客間……ではなく、ガルクさんの要望で書斎へと案内した。

「いきなりすまない。だが、どうしても話を聞きたくてな」

「はぁ……」

なんだ、旅の土産話が聞きたいのか？

「今回の封印された夜についてだが……」

ああ、そっち。

「直球で聞く。ニホンでは封印された夜とは、どういう扱いなんだ」

……困った。

一応今日の授業で、エリザや近衛隊やらに日食についての説明はしたが……政治屋さんにこれはどうなんだ？

……うーむ。

……。

「……」

「……」

「……あー……実は、ですね。日本では日食は……無害というか、見せ物というか……」

ああ、ついに話してしまった。

いや、あの“できた大人の真剣な眼差し”が2方向から来たら、誰だって白状せざるをえない。

「……順を追って説明します」

こうして、本日二回目の日食特別授業が真夜中に開催されたのである。

……とりあえず、メイドさんに頼んでシルバちゃんを寝室に運んでもらおう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊≫☆

それからは大変だった。

まず、準備のよろしい使用人たちが可動式黒板を持ってきて、説明しやすい状態へと書斎を整理してくれた。

まぁ、可動式とかっこつけても所詮は二人がかりで運ぶ壁掛け式で、チョークなんて上等なものがないから白い石の塊を使ってなのだがね。

そして、人通り今日エリザたちに説明したように説明した。

日食とは、月と太陽が一直線になっておこる現象で、物理的にはなんもこの世界に影響はない、ただ一時的に暗くなるだけだ、と。

魔力が関係すんのは全く管轄外でわからないとも一応伝えて、そこらへんの原理やらなんやらを詳しく教えてやった。

いやぁ……しかしエリザの時に聞いたのだが、こうやって説明してるとマジでドラゴンがこの世界にいて良かったとはじめて思ったね。

ドラゴンで世界一周が過去に何回もやられてて、世界が丸い事が証明されてたからね。

もし世界は亀に支えられいるとか考えられてたり、天動説が導入されてたら説明が超面倒だったからね。

そして、やはり日食の事実は彼らには衝撃的だったらしい。

「……そうか。月が……」

「はい。やっぱりこの話はあそこで言ったら……」

「下手したら宗教問題で国が分裂するな。その判断は正しかった」

エリザと全く同じ事言われた。

……めんどくせ。

「しかしまぁ……宗教なんていつの時代もそんなもんです」

そう悟ったように言うのはセブルさん。

そしてそれに反応するのが、この中で一番偉いガルクさん。

「そうだな……とりあえず、それ自体は自然現象だという事はわかった。だが、やはり魔力が色々乱れるのはどうにかしたいのだが……」

「まぁ、そうですね……」

ぶっちゃけ一番の問題はそこなんよね。

過去の資料をざっと見て、ひどかったのは５８１年前の王都に半分魔獣化した魔物が大殺到する事件とか、１０７９年前のいきなり植物が枯れる事による大飢饉があげられる。

……ちなみにこれらの事から、自分が魔力についての新たな仮説を思いついてしまったのは、今は黙っておく。

下手に喋ってしまったらば、今の自分なら本当にそれが世間に受け入れられてそのまま真理としてしまうかもしれない。

自分は賢いから、慎重になることを学んだんだよ。

……ごほん。

「まぁ……そこらへんはこれから資料を見て分析して対策を考えるつもりです」

自分はそう、にこやかに言った。

さぁ、この言葉の意味に気づけ、ガルクさん。

「そうか……頼んだ。今国ではナルミ君が一番博識だ。だから、辛いかもしれないが……」

あー……これは、いけるか？

「通常の業務と一緒になら大変だと思うが、頑張ってくれ」

いけなかった……。

くそっ！

言外に“だから仕事減らしてくれません？”メッセージを込めたのに……。

それから自分たちは、一晩中話し合い情報を交換しあって“災害”の対策を練っていた。

その中ではセブルさんの実体験が一番資料として役立ちそうであった。

そして自分的腕時計で午後の１１時頃、ガルクさんは奥さんをこれ以上ほうっておいたら危険だからとセブルさんを引き連れて帰ってしまった。

いやはや……苦労してますなぁ。

それから自分は寝室に行き……はしたないからよだれを垂らしながら寝るなよ。

かわいいけどさ。

……そして、人肌くらいの温度に暖まった布団に潜り込み、いつもより遅い時間に眠りについた。

いやはや、深夜アニメがないと気兼ねなく寝れるからいいね。

それではでは

「おやすみ」

自分は横で寝息をたてている女の子の頭を撫でながらそう言って、ゆっくりと瞼を閉じた。

怒涛の勢いで自分の周りが変化した1日は、こうして幕を閉じたのである。

……で、1日の幕が開いた午前0時。

自分は寝息をたてる隣の可憐な少女を見つめていた。

なぜかというと、一度瞼は閉じたものの、全く眠れないのである。

……理由ははっきりしている。

今日家にきた訪問者二人の、帰り際の言葉である。

『……そういえばナルミ君。孫はできそうかな？』

『はい！？』

『孫だよ孫。どうだ？実際の所……』

『いやいやいや！！』

『……どうせ毎夜お嬢様を汚しているのでしょう？』

『汚してるって表現ひどくない！？』

『でも君らくらいの若さなら、毎夜とはいかずとも……』

『……ま、ぁ……はい……』

『……チッ。なんでお嬢様はこんなケダモノと……』

『頑張ってくれよ？期待しているんだ』

『は、ははは……』

……わかった？

さすがにこの年齢で子供はとも思ったが……ねぇ？

あんな風に言われたら意識すんなって方が無理でしょう。

こうして自分は悶々としながら夜を過ごし、時は過ぎとうとう眼の下にクマを作って朝を迎えたので……

「ナルミさん、寝不足ですか？」

「……チュッ」

「ふえっ！？」

あ……。

朝一で目の前にシルバちゃんがいたからつい……。

「ナ、ナルミさんが望むなら、私は……」

「……いい？朝食はまだ少ししてから呼び出すのよ？今いいとこだから。あと、少し多めにつくるよう厨房に連絡して」

……。

自分、今彼女たちを助けた事とっても後悔しています、なう。

……気が、ききすぎだよ。

ただ扉の向こうから声が聞こえるのは……ねぇ。

……セブルさんの言ってたケダモノという言葉がとても胸に突き刺さった状態で、自分は朝食前の３０分を過ごしたのであった。

４４回目＊貴族とか教授とかご主人とか（後書き）

はいこんにちは、みんなの生贄、南師ダヨ！！

まずはネタバレからいくアルヨ！！

スモー○ライト＊あの青狸の有名な懐中電灯。もとの大きさになったのは、サイズを戻す光りを当てたから

以上ヨ！！

他にあるかもだけど、忘れたヨ！！

……では、言い訳タイムに入ります。

今回遅れた理由、それは……

日本語って難しいよね、ってわけです

要するに、文章化できんかったのだ

おかげで四捨五入して三週間、音沙汰なしの悲しき結果に

……はあ

高校に戻りたい

高校に戻って、○妻先生の現国の授業を受けたい

そしてポニョの話をききたい

……あの先生、ポニョ好きだったからなぁ

“ソースケ、すきー”って物まねするくらい

……ちなみに男よ?

とまぁ話がそれましたが、つまりは私、日本語レベルが低くて書けなくなっていたのです

なので高校の頃の国語の教科書ノートを片手に、がんばってレベルを上げていきます

真性南師ことミナルーツになってかえってきたいです!!

これからもよろしくお願いいたします

……さて、ノートを

えと、超ゆ『え・え・ゆ・ゆる・ゆれ・えよ』

……蹴る『け・け・ける・ける・けれ・けよ』

活用なんかしたかねぇわい!!

現国のノート!

ノートはどこだ……あ

……夏休み前に掃除して、赤いノート捨てた気が……

……レベルアップまでの道のりは遠そうです

４５回目＊神様のお仕事、姫様のお悩み（前書き）

愚作、投下。

多分フルでボッコボコにされても文句は言えない

あと、今回はエリザファン必見、エリザとナルミ君がくっつかない、というか恋愛対象として見れない根本的な理由をお話しするよ

納得するかどうかはおいといて、だけど

45回目＊神様のお仕事、姫様のお悩み

夢で見た事を日記につける、つまり夢日記をつけると、夢と現実の区別がつかなくなると言われている。

また、某国家では昔鏡に向かって毎日“おまえは誰だ？”と問いかけるという実験をした結果、その人は自分が誰だかわからなくなってしまったという都市伝説も存在する。

この2つのお話しは、一見全く別のお話しに思われるが、自分はそうではない、根本は同じだと思うのである。

この2つは、まず一つ目が“現実と夢の境界線”を、二つ目が“自分と他人の境界線”を曖昧にし、最終的にはその境界線を取り払ってしまうのである。

これによりなにがおきるかと言うと、まず脳が混乱する事が予想される。

今までキッカリと区切られていたものが、薄れ消えていっ

『はい、現実みようか』

……消えていったのだから、それを脳が処理できなくなる可能性も否めない。

さらに、人間はなにより“知能”が犬猫畜生より発達した生き物であるが故、その脳には“自己”や“他人”、はたまた“夢”と“現実”などを明確に区別する

『あくまでスルー？』

……黙れ。

明確に区別する事が可能

『よし、ここで寝ている君のお嫁さんに色々イタズラしちゃおうか』

「しばきあげるぞ」

『じゃあ人の話は聞きましょうか』

……状況をまず説明しようか。

今は午後の5時くらい。

朝から使用人たちが無駄な気を使ってくれた日の午後5時だ。

午前中から頑張って仕事を終わらせた自分は、午後はマッタリとポカポカした日差しに虐められ、自分の机にて睡魔という武将に打ち取られてしまったのである。

それはシルバちゃんも同じだったようで、備え付けの秘書官用の机にてよだれ垂らしながらかわいく寝息を立てていた。

そして、しばらく睡魔に捕虜とされていた自分が釈放されると、目の前には見覚えのある金髪クソ野郎がいた。

ちなみに先ほどのやたら哲学的な考えは、俗に言う現実逃避である。

てっ、んなこと考えてる場合じゃない！！

『ふふーん。そんなに抱きしめなくても、私はなんもしないさ』

「黙れ、信用できるか」

自分はシルバちゃんが変な事されないよう、寝ていた彼女の所までダッシュで駆け寄り彼女を強く、なにがあっても離さないくらい護るように強く抱きしめた。

『よほど彼女を愛してるんだね』

「問題あるかバカヤロー」

『んにゃ、応援してるさ』

……なんか、今更ながらこの行動とかが恥ずかしくなってきた。

『よくある話さ。まぁ彼女なんもしないから戻っといで』

自分は顔を赤くしながら、彼女をもとの位置に戻し上着として着ていたパーカーを彼女に

『当たり前のように服をかけてやるあたり……いやぁ、漢だねぇ』

「……うっせ」

あぁ恥ずかしい。

泣くぞ、自分泣くぞ。

「で、なに用さ」

自分は椅子を軋ませながら勢いよく座って、目の前にいるバカに問うた。

『あぁ。……はい』

したらば奴はどこから取り出したか、大きめの紙袋を机に置きはじめた。

中にはなんか本が大量に。

「……なにこれ」

『参考書とか』

……話が見えん。

『いやぁね、この前君にお願いしたお仕事あるしょ？あの名前付け作業』

……はて。

あぁ、あれか。

「あったねそんなん。で、それが？」

『いやね、あれが終わったからそのお礼に。想像以上に早く終わっ

たもんだから驚き桃の木山椒の木だよ』

なんだそれ。

……まぁいい。

「はー、そーなのかー」

『そーなのだよ。流石私が見込んだだけあるよ』

そういいながらうんうんと唸るバカ。

そうだね、それなりな水準以上の適性がある中から適当に見込んだだけの事はありますね。

『他の神様からの評判もよかったよ。“仕事が早すぎて対処しきれません！このスピードは過労死できます！！”って』

……他の神様、マジでごめんなさい。

「そ、そう……。で、それはなんの参考書？」

とりあえず、話題を逸らし逸らし。

『ん？あぁ、物理と化学。あと数学も少々。高二までの教科書なら色々あれでしょ？』

「……まさか貴様に感謝する日がこようとは」

正直、そろそろ行き詰まりを感じていた。

これは、結構なレベルでありがとうだよ。

『一応言うと、私たち神様が色々会議討論を重ねた結果のお礼だから。いろんな意見が出て大変だったんだから』

……ほう。

「ちなみに、どんな意見がでたん？」

『んー、言っていいの？』

「いーよ別に、どうせもらえるのは参考書なんだし」

まぁ“あ、そっちのがよかったかな”って思う可能性もあるが、問題ないだろ。

『うん。じゃあいうけど、まず一つはコスプレセットが……』

「まて、どうしてそうなった？」

訂正、問題あったわ。

『なんか、意見としては君のお嫁さんにセーラー服やら和服やら着せてみたいとの意見が多数女性から寄せられてね』

……神様って、暇なんか？

「んで、他には君の好きだったケーキ屋さんのチーズケーキをホールでとか」

「あ、いいなそれ」

『残念。今はないんだな、これが。かわりにこの中には、君専用の“教授セット”が入っている』

そうやつが指差したのは、先ほど参考書が入っていると言ってた紙袋で……あ？

「なんねそれ」

『白衣、ネームプレート、電子タバコ、伊達眼鏡のどっかの教授が使ってそうなコスプレセット』

……。

「なぜ」

『なんか君、いっつもジャージやスウェットやらで授業してて教授って感じしないんだもん。これは最初に満場一致で決まったプレゼントだよ』

……まじで神様ってなに考えてんだ。

『電子タバコはね、君は顔がおとなしいからせめて少しくらいハードボイルドに近づけれるよう私なりの配慮』

「いらねぇよ」

『えー……ま、いっか』

そう言うとやつは紙袋を一旦床に置き、近くにあった椅子を引き寄せて机を挟んで自分の向かいに座りはじめた。

『まぁそんな事はぶっちゃけどうでもいいのさ。とりあえず、そういう事。で、今日はもう目的も果たしたし、私はかえるよ』

そう言うと奴は伸びをしながら椅子から立ち上がり、肩をコキコキと鳴らしはじめた。

「……神様ってのも、身体の構造は人間と同じなんか？」

『ま、ね。一応食事とかはしなくていいけどね。まぁ食事は生きる楽しみの一つだから、だいたいの神様は食べてるけど』

……ふーん。

「なに食ってんの？人間？」

『それもある』

……。

『嘘だから引かないで！食べないから！！』

いや、眼がマジだった。

眼見てないけど。

……はぁ。

「で、実際神様が住むとこにも牛やら羊やらジャガイモやらはいんの？」

『本物はいないよ。まぁそこらへんは神様だからね。魂なしで成長する野菜やらは開発できてるよ。まぁ試験管の中で育つ肉や魚みたいなのを想像してくれたらいいかな』

……。

なぜだろう。

なんか、一気に生物災害の世界みたいなのが頭に浮かんできた。

『……なに想像してんの？』

「いや、なんでも」

自分はそう強がるが、とりあえず吐きそうになってきた。

……うぇぇ。

『……君は意外にデリケートだな』

「うるさい」

……あぁ、まぁ落ち着いた。

『大丈夫？』

「なんとかね」

しかしまぁなんというか、今更ながら神様って変だよね。

そんなグロテスクなもの……いや想像だけども、とりあえずそんなものを食べたりコスプレ趣味だったり。

……あ、そういや今更ながらの疑問が。

「ななな、時にヒミー」

『ヒミー言うな。で、なに？』

「んにゃ、ただ貴様はいったいなんの神様やっとんのかと。よくあるじゃん、大地の神様やら幸福の女神やら」

自分がそう奴に聞くと、奴は腰に手をあて、ふんぞり返りながらえらそうにのたまいはじめた。

『名前などない！！』

聞いて損した。

さんまの特売だからと大量に買い込んだ次の日、親戚からさんまが箱で届いた時くらいに損した。

「……本当に偉いん？」

『超偉いよ。そりゃあもう全ての神様が私の下僕さ』

ひどいなそりゃ。

「……じゃあ、どんな仕事するん？」

『う？えっと、魂の名前つけたり、新しい世界の名前つけてみたり、新しい生物考案したり、簡単な世界核暇つぶしに作って遊んだり、それを適当な神様に投げ当てて遊んだり、寝たり、食べたり、遊んだり……』

「なぁ、本当におまえなんなん？なんか、暇してるだけな気ぃするんだが」

もうだめだ地球。

一番偉い神様がこれじゃあもう終わり……あれ？

『実際仕事ないと暇だよー。まぁ簡単にできる仕事じゃないけど』

そーなのかー。

もう今はんなこたどでもいーわい。

それよか……

「なぁ、おまえさ、たしか二番目に偉いんだよな？」

『うん。あらゆる神様世界生物全て含めたナンバー2』

そうかそうか、よし。

「ならさ、一番偉い奴って、誰？なにやってんの？」

これ、気になるよね。

まぁ教えてもらえるかは知らんがな。

とりあえず自分が質問すると、奴は少し考えるふうにしてポツポツと語り出した。

『そうだね、“彼”……まぁ彼に性別なんかないけど、彼が誰かは私からは言えないかな。怒られる。でも“彼”がなにやってんのかは教えれるよ』

おお。

高確率で拒否られるかと思ってたのに、よかったよかっ

『“彼”はなーんもやってない。毎日人間を眺めて観察しているのさ』

……よくねー！！

なにあれか、神様のナンバー1とナンバー2は揃ってサボタージュ魔王なのか！？

よく今まで世界崩壊しなかったな！！

『あ、あと最近は君も観察されてるよ。まぁ君の場合、“彼”だけでなくあらゆる神様が暇を見つけては君を見ているのさ』

「なのぬ！？」

なぜに!?

なんか自分した!?

そう変な声を出しながら慌てる自分をよそに、やつは腕を組んでうんうん唸りながら

『まぁね、今君は神様の中で話題ナンバー1の有名人なんだから仕方ないっちゃ仕方ないさ』

とぞのたまいやがりける。

「なぜに!?なぜにナンバー1有名人!?」

『さぁね。見てて楽しいからじゃない?ほら、あそこ見てみ。あそこから世界均衡整備局の局長が新しい生物つくるサンプルを新しい世界に送るために羊を片手に持ちながら興味深そうにこっちを……あ、逃げた。こらー!羊落とすなー!!』

……いや、見えんから。

つーかあれだな、これは

「すまん。なんかもうこれ、自分が関わっていいスケールの話じゃなかった。なんかごめん」

もうききたくない。

『ん?いや別に続々関わっていいんだよ?』

いやいやいや。

あんたバカやろ。

「自分人間、てめぇ神様。おっけー？どぅゆーあんだすたん？」

『絶対真面目に神様と思ってないよね』

いや、思ってない訳とは違う。

認めてないんだ。

ま、賢い自分はそれを言わない。

お口はバッテン、ミッ〇ィーちゃんだ。

……そういや全く関係ないけど、昔友達と某リボンした猫ちゃんのマスコットとその会社に当て字して、“山梨王（さんりおう）・鬼帝（きてい）ちゃん”とか言って遊んだりした事あったっけなぁ。

確かそん時漫研の友達が、激しくトラウマな超ゴリマッチョ描いて“これ、鬼帝ちゃん”とか言ってたなぁ。

ちなみに、その会社が山梨県にあるかは自分しらん。

……話の脱線が半端なさすぎるな。

進路確認、戻し戻し。

「まあ、文句は敬われる事してからお願いね」

『むぅ……。まぁ、そう言われると君にはなんも反論できない訳であって……さ！終わり終わり！だいぶ話し込んじゃったし、私かえるわ！！』

そう言って奴はクルリと後ろを向き、扉までダッシュして

『じゃ、オーバー』

そう言いながら、ドアから出てった。

……逃げ出したな。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊≪☆

さて……すっかりお外も星の煌めく真っ暗夜空。

そしてお部屋も真っ暗闇。

そんな時間までなにをやっていたかってーと、奴が言ってた参考書とやらを読みふけっていたのである。

……あと、試しに噂の装備を全部フルセットで装備してみたり。

いや、白衣って地味に憧れるんよね。

なにせ自分、高校は普通科だったから着る機会がなかったし。

ちなみにネームプレートは存在する意味がわからなかったから即座にポケット入り確定余裕すぎました。

あ、あと電子タバコは自分気に入った。

友達が過去に“電子タバコ？無理無理超まずい”とか言ってたからどんなんなのかとドキドキしながら吸ってみたら、鼻を突き抜けるミントの香りが自分は好きでした。

……好きだったんだが、なんだろうこの敗北感。

主に奴が持ってきたものほぼ全てが気に入ってしまったが故のこの敗北感は……。

だめだ、悲しくなってきた。

……とりあえずそんなむしろ教授ってゆーよか下っ端研究員みたいな格好で読書していた訳ですよ。

したらばね、まぁ昔の自分さようならみたいな感じに物わかりが良いので、読んでて楽しくなっちゃってついつい時間忘れて読みふけっていたのだよ。

いやね、高校の教科書丸暗記したら意外にわかるよ、こーゆーの。

今なら原子オービタルも説明出来る気がする。

えっと……ごめん、やっぱそこまでは無理ぽかった。

けどまぁ意外にわかるもんだね。

理解したら面白いとはこの事か。

覚える気はないがね。

……いや、そこまでは面白い訳じゃあないし。

とりあえず、次回の授業は本格的に微積分をしてエリザを泣かす事に決定した。

ま、とりあえずだ。

いつの間にか真っ暗がりで本を読むというなんともお目めによろしくないことができた理由は、ひとえに人間的能力補正なのかしらねぇ。

とかなんとか、考えながら伸びをして身体をほぐすと、ドアからなにかコンコンという音がした。

「入ってまーす」

反射的に言ってしまったこの言葉に、トイレじゃないんだからとセルフ突っ込みをしたのは自分だけの秘密だ。

「……暗っ！！」

うわぁ……エリザ様発見伝。

「なぜきたし」

自分のそんなど真ん中ど直球どストライクどストレートな嫌みを受けたエリザであったが、ヤツは嫌な顔一つしなかった。

いや、したかもしれんが暗くてわかんなかった。

とりあえずそいつはこの部屋備え付けの魔法式ランプみたいなのを起動させ、自分の方にてこてこやってきた。

そしてさっきまでいた変な人と同じように椅子を引き寄せ、ドカッと品位のかけらもない座り方で座りやりながらこいつが語るここにきた理由は

「暇つぶしだ！！」

「よし、鼻の穴に納豆詰められるのと耳ににぼし突っ込まれるののどちらがいいか選ぶ権利をやろう」

とりあえず、いい笑顔を形成するそのほっぺたは赤くなるまで引っ張ったる。

「あたたたた！はにゃしぇ！！」

「仕方ない、許してやろう」

ひとまずつまんでたほっぺたを離し、自分は息を吐きながら深く椅子へと腰掛け、なにげなく首を回してコキコキと……あーあ。

「うう……痛い」

なんか行ってるエリザを無視して、自分はてこてこと寝ているシルバちゃんのとこへハンカチ片手に近づいた。

「はぁ。洗濯物が増える」

そして彼女がしゃぶってる自分の上着を取り上げ、彼女の顔についたよだれの跡を拭ってやる。

「うみゅう……」

すると、そう鳴き声をあげながら彼女はほっぺたを拭くために顔を上げさせる仕事をしている左手をいきなり引っ張り出し、自分の指をちゅぱちゅぱと……

「……なんか、嫁さん貰うってよりでっかい子供貰うって気持ちに最近なってきた」

「つつ……まぁ、シルバだしな。仕事はできるが、中身が箱入りすぎるからな」

「……全ての元凶はセブルさんか」

とりあえず、セブルには人生を見直してほしいと思った瞬間である。

さてどうしようかと考えながら、とりあえず起こすために彼女のしゃぶっている指を口の中で動かしたが、なんか反応が思いのほか気持ちよさそうなのでやめた。

「で、なんだその格好は」

「白衣」

さて次はどうしようかと考えていた自分に向かい、エリザがまぁ当たり前な質問をしてきたので、至極簡潔に答えながら自分は彼女の舌を摘んで引っ張ってみた。

「いや、見ればわかる」

「あ、こっちにも白衣ってあんの？」

「ひみゅ？」

あ、おきた。

「おはよーシルバちゃん」

「おふぁひょふごひゃひまひゅ」

まごまごと舌を摘まれながら喋る彼女は摘まれている事は疑問でもなんでもないのか、そのまま目をこしこしとこすりだした。

……とりあえず離してやろう。

「あ、あぁ……」

「残念そうな顔しないの」

……本当にこの娘は

「……シルバは本当に変態だな」

「全くだ……おい」

おまえが言うなし。

「ちなみに私の中では、ナルミもギリギリ変態に分類されているぞ」

あ、こいつ今度微積分でマジ泣きさせてやる。

「なぜおまえにその認定をされるのか甚だ疑問だが、大変不名誉極まりない」

「変態に名誉もなにもあるか」

いやないがね？

でもおまえに言われるのは納得いかん。

「名誉もなにもないが、変態に変態言われるのは納得いかん」

だからもうオブラートにも包まず糖衣もせずに、思った事をそのまんまぶちまけた。

「……撤回しろ」

「ぬ？」

「今の言葉を撤回しろ！！」

したらばなんかキレられた。

そして叫びと共に姫の姫らしい姫姫した姫ドレスからは想像できない姫式ハイキックが自分の顔面を……ほうわっ！？

「……今の言葉を撤回しろ。さもなくば蹴り殺す」

「ま、まちまちまち！なにがあったし！キレる要因がどこに」

「うるさい！！」

そんな怒声を上げながら、彼女は再び舞うように脚を上げ、自分を狙って蹴りを放とうとするが……

「はい、姫様落ち着いて」

「さすがにはしたなすぎますよ」

天井から降りてきたミミリィ隊長とメル隊員により、その行為は未遂に終わった。

同時に、天井裏からドタドタとなにか走るような音が聞こえてきた。

「離せミミリィ！メル！こいつは私が蹴り殺すんだ！！」

「魔獣生で丸かじりするような方に勝てるような変態的な実力持ってから言ってください」

……隊長、なんか傷つきます。

「うぅ……それは、やだ」

そしてなぜそれで落ち着いたのだエリザよ。

もうなにがなんだかわからなくなっている自分をよそに、再び天井裏からなにかが降ってきた。

「仕留めたよー」

……それは、血まみれ、とまではいかないまでも、右手を真っ赤に染めたリム副隊長であった。

「ご苦労様リム。でもやっちゃったの？」

なにをやっちゃったんだい？

「いや。僕は右脚を貰っただけ。後はスーに全部任せた」

「そう……大人しく白状してくれればいいけど」

なにを白状させたいんだい？

「どーだろうね。ナルミ君に張り付いてたんだから、それなりに口は固いと思うけど」

「……なにがあったんだい？」

とてもききたくない。

ききたくないが……きかなきゃならない気がする。

「あぁ、諜報員ですよ。この警戒網をくぐり抜けて潜伏していたのは優秀ですが、まぁ最後の最後で詰めを誤りましたね」

……。

「この警戒網って？」

「あれ？ナルミ君が連れてきた訳じゃ」

リム副隊長がそこまで言って、今度は床が開いてそこから縛り上げられたオッサンが二名放り投げられるように飛び出してきた。

そして、次になんか見覚えのある顔が……。

あっれー？

この人自分ちで見た事あるぞ？

「……申し訳ございません、警戒が甘かったようで、侵入者を三名も許してしまいました」

そしてこの方はあの朝から気をきかせてくれるよくできすぎたメイドさんではないか。

「うん、まず警戒ってなに」

「はい、私たちはご主人様や奥様に危険がないよう常に８人体制でお二方の身の安全を確保していたのですが……今日は１６人も揃っていながら、申し訳ございません。いかなる罰も受けます故」

あ、８人体制って、自分に８人、シルバちゃんに８人なのか。

多すぎだろ。

しかもなぜに黙って待機してたのら。

「いや、罰はいいけど……なんで警備なんか……しかも黙って」

「言ったらご主人様ならば必ず断ると勝手ながら判断したからです」

……うん、まぁ断るがね。

「そして、理由はご主人様の事を狙っている輩が多いという事にあります」

「これはさっきの諜報員についても繋がる話ですね」

あ、ミミリィ隊長。

すいません、エリザ共々忘れてました。

「ぶっちゃけて言うと、先生がいる事で国の外交が有り得ないほどこの国に有利になるように進んでしまっているのです」

は～……まぁ、ぶっちゃけたとえるなら世界唯一の核保有国状態だからね。

「当然そうなると他国からの印象もあまり良くありません。魔王様はなるべく対等な立場での対応を望んでいますが、それがうまくいかないのが外交の難しい所です」

「その主な原因に二つがあって、まずこの国の商人がやたら強気で他国の商人と交渉してでね。法外まではいかなくても、納得しにくい値段で売りつけてるのと、外交官とかの文官が強気で行くべきというのと冷静に対等な立場をとるべきという二つに別れちゃってね」

「だけど魔王様は強気には出るつもりはない。もし強気に出て周りの反感を買ったりでもしたら、先生が病気なり寿命なりで亡くなった場合にそのツケが一気に回ってくる可能性があるからです。だから、強気に出るべきという方もなかなか思い通りにいかなくて苛立っています」

「あとは個人的な嫉妬やらもありますね。おじいちゃんみたく仕事がなくなってやっと解放された、自由が手に入ったという感想を持つ方は稀ですからね。曰わく、師匠が来てから魔王派の力が急速に大きくなって、それ以外の派閥から疎まれているようです」

「私が調べた結果では、一部の武官からも同じような者が出ています。まぁほとんどが役に立たない武の道を逸れた者ですが」

……ふむ。

「とりあえずゾーンさんは元気そうだね」

「はい。この前合ったら“孫にも会えて胃の痛みから解放されて感謝してもしきれない”と言っていました」

「よしメル、あとで一緒にゾーン爺の所へいこうか」

あ、死亡フラグ発生。

「……話を戻しますが、いいですか？」

……はぁ。

こーゆードロドロしいのは牡丹と薔薇だけで充分なのに。

「とにかく、先生には内にも外にも敵は多いのです。先生を蹴落とそうとするのから、命を狙う者まで幅広く」

「証拠に、屋敷へと忍び込んでご主人様の知識ひいては書物を盗もうとする輩が盗賊から密偵まで幅広く存在します。ちなみに、今のところ被害は全くありません」

そうかそうか、ほめてつかわす。

「で、なんでこんな話になったんだっけ？」

「……ナルミ君、これは真面目な話なんだから緊張感持とうよ」

うわ、リム副隊長にいわれた。

「なぜ私たちが護衛をしているのか、から派生しました話です」

そう護衛メイドさんが言ったと同時に、床下から別のメイドさんが毛布を持ってきて自分の横で手をしっかり握りしめながら再び椅子で夢へと旅立っているシルバちゃんにかけて、縛り上げられたまま忘れられてたオッサンを抱えて消えていった。

……君は本当にのんきだなぁ。

ほれ、ほっぺぷにぷに。

「……で、話変えますけど、実際さっきのはかなりあぶなかったんですからね。特に姫様！！」

「むふっ！？」

あ、こいついつのまに人の本を……こいつ、いつのまに物理の参考書読めるまで漢字をマスターした？

「それ、読めるか？」

「あまり読めんが、微妙にわかる。このきゃぴしたというのが電気をに関するものだというくらいはわかる」

「そうか。……電気工学（エレクトロニクス）好きか？」

「うむ！だが力学の方が私は好きだ！！」

「ならまず数学をできるようにしましょうね」

「うっ……いや、やっぱり数だけなら味気なさすぎてだな……しーならぴーやらなんかいつ使うのかとか……」

「二人とも真面目に聞いてください！！」

そう叫ぶミミリィ隊長は近くにいたエリザに拳骨を……ああ。

「ぐおぉ……」

頭を抱えてうずくまるエリザをよそに、ミミリィ隊長は話を続ける。

「ったく。で、話を戻しますが、今回の先生と姫様の衝突はかなりあぶなかったんですよ。諜報員は全員捕まえたのでなんとかなりましたが、これからは気をつけてください」

うむ、なぜだ。

「すまん、なぜあぶなかったんかよくわからないのだが」

自分がそう言うとミミリィ隊長はあからさまにため息を……なぜに？

「1から説明すると、まず姫様は現魔王様の末っ子とはいえ娘です。つまり王族の一人です」

「うん、それはわかる」

「で、次に先生ですが、まず先生は現宰相の娘であるシルバと婚約しています。従って、先生は実際はこんな派閥はないですが、魔王様と宰相とではどちらかと言えば宰相寄りの立場になります」

「……うん、理解した。だいたい先にくる事も理解した」

「まぁここまでくればそうなりますね。ですが、一応きちんと説明します。今の現在では魔王様と宰相の仲は極めて良好であり、お互いに信頼しかなりの結束力を持っています。ですが、その結束力が煩わしい派閥もあるわけです」

「そんな奴らが自分を警戒して見張りを立てた所、自分とエリザのケンカが勃発。したら当然そいつらはこう思うのな“エリザ姫様と

長谷川侯爵は、仲が悪いのではないか”」

「はい。王族の姫と宰相の娘の旦那、この二人が仲が悪いなどとなれば当然魔王様と宰相の二人が真相を知っていても周りが騒ぎ立てれば魔王様の周りもその噂に飲まれていく」

「したっけあの二人が仲良くやってもその下で部下同士が真っ二つに別れて収集がつかなくなると……なんとも面倒な。……でも、したらば最初っから嘘でもそんな情報流さないかね？」

「流しても真実味がちがいます。全くの嘘はほぼ確実に失敗しますからね。真実を織り交ぜた嘘が噂として真実味を帯びて広がります」

「あと言うなら、今流した所でなとこもあるしね。仲の悪い人と普通は旅なんかしないし、何よりここに来た時に酔ったナルミ君を心配する姫様をかなりの兵士が見てたからね。仲が悪いって今言われても、だれも信じないよ。それが全くの嘘なら特にね」

そうかそうか……国ってのもやっぱり大変だな。

「で、今回の事についてですが、まず先生！乙女心を少しは理解してください！そして姫様！姫様はもっと我慢をしてください！！」

ふん、という感じに腕を組んでそう言ったミミリィ隊長は、さすがエリート軍団近衛隊の隊長をつとめているだけはあるというほどにカリスマがほとばしっていた。

「でもミミリィ！こいつは私に変態って言ったんだぞ！？私に！変態って！！」

対してその主人は見事にカリスマデストロイ状態で……なんか様子がおかしい。

「私は普通だ！一般的だ！決して変態などではない！それなのにこいつは！！」

「まて、なにがあった落ち着けった！？」

なぜか錯乱したように自分へときれいな回し蹴りを放つエリザであったが、自分はなんとかそれを避け、エリザはミミリィ隊長に取り押さえられた。

「落ち着いてください！ただわめいて暴れるだけならそれこそ変態ですよ！！」

「う……す、すまない」

そういってしぶしぶ引き下がったエリザだが……話が見えない。

「……なにがあったのさ？」

「……話したくない」

エリザは自分の質問に対し、拗ねたようにプイッと横を向いたがミミリィ隊長に頭をつかまれてこちらにむき直された。

「話してください。これ以上の迷惑はごめんです」

「……話さなくてはだめか？」

「きちんと話さなくては、それこそ姫様がただ暴れるだけの変態だと思われてしまいますよ？」

「……話す」

……なんだろう、ミミリィ隊長が怖い。

というかあれだな、二次関数的に最初に比べてイライラが上昇してるな。

そんな感想を持つ自分をよそに、エリザはうつむきながら淡々と語り出した。

「……私たちが旅に出る前の話だ」

その内容は、自分もよく知る過去に聞いた話であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊―☆

「それで私は誓ったのだ、“私は母様みたいな変態には絶対にならない。あんな特殊な性癖も持たず、異常な執着心も持たず普通の精神で普通に過ごそう”と。そう私は心に誓い、ミミリィも私のそれを応援してくれている」

「はぁ……その時にそんな事が」

エリザの話した内容、それは昔自分がガルクさんにいろいろお話しを聞かせてもらった日に行われた、女性陣だけのお茶会の話である。

つまりそのお茶会でそれを誓って以来普通を目指して普通に過ごそうとしていたのか。

「最初は大変だったぞ。まず自由すぎるのはダメだ。普通の大人ならある程度自重をしなければならない。……まぁこれは性格だから、まだ完全には治ってはいないのだがな」

「いや、まぁ最初に比べたらだいぶマシだぞ」

「それは嬉しいな。あ、普通を目指すとは言っても、別に知識や技術も持たず一般に埋もれるつもりはないぞ。ナルミのような異常な程の力までは欲しくないが、できる限りに知識や技術に磨きをかけたいとは思っている。私が嫌なのは、母様やシルバみたいな異常な依存やナルミみたいな特殊性癖とかについてだ。つまり、私は性格面で普通を目指す！！」

……うむ。

とりあえず特殊性癖だとか本人さして目の前で言うの止めようや。

……最近マジで言い返せない事が発覚しましたがね！！

で、ひとつそれとは別に。

「なぁエリザ」

「なんだ？」

……あ、ダメだ言えない。

みんなが自分をSだと言って、それを否定してた自分の姿と重なった気がしたなんてこの目にいえない。

「……姫な時点で普通は無理くね？」

「姫でも普通な性格にはなれるだろう？」

いや、そんな“なに、こいつバカ？”的視線をこっち向けんなし。

自分の優しい気遣いが無駄になった気がするからやめろし。

「まぁとりあえずそういう訳だ。いいか？私は母様の娘だが、母様には決して似ていない。私は変態ではないからな。私は父様に似た普通の性格だ」

「わかったわかった。お前のコンプレックス……まぁ悩みはわかったし、お前は普通だ。普通の性格だ」

自分がそう言うと、奴は満面の笑みを浮かべて“そうだろうそうだろう”と頷いてきた。

だが、そう喜びながらはしゃぐエリザをよそに、ミミリィ隊長がそっとこちらに近づいてきて

「……実は私としたら、姫様はどちらかといえば王妃様寄りの性格だと思っているのですが」

全く自分っ同じ考えを言い出した。

「まぁね……なんか理由はわからないけどね」

「……いざとなったら、覚悟してくださいね」

ん？

なにを？

「覚悟って？」

「……姫様が本気で惚れる相手が現れた場合ですよ」

この言葉で、自分の脳内には恐竜が一気に死滅するアルマゲドンを落とされた気分になった。

「……把握した」

「なにをコソコソ話してるのだ？」

あ、エリザが訝しげな目をこちらに向けだした。

「なぁに、エリザは武器を使うよか足技のが好きなのかなぁって。基本自分への攻撃は蹴りやらかかと落としやらの足技だからさ」

ナイス自分。

で、ミミリィ隊長はあからさまにほっとしない。

「む？むー……確かにな。なぜだろう？身体が勝手に足を動かすのだが」

「姫様は王妃様みたくはなりたくないと考えていますから、無意識に拳ではなく足をつかおうてしているのではないでしょうか？」

「むぅ……そうなのかもな」

……短絡的な。

そしてそんな理由でも無意識下まで行動を徹底するお前がすごい。

「よし、ナルミ。今度足技の指導を頼む」

「うぇ～」

やだなぁ……。

ラブハリケーンでも教えちまうか？

「まぁ、気が向いたらね」

「やた」

そうぴょんこぴょんこと喜ぶエリザの姿を見てると、なんか妹ができたような錯覚に陥りそうになる。

「ナルミ君、話終わった？」

自分がエリザをワガママな思春期の長女みたいだと評していると、空気と化していたリム副隊長が自分に話しかけてきた。

あ、ちなみにメルちゃんはどこか抜けてる乙女心が芽吹きはじめた

次女で、シルバちゃんはアホの子な世間知らずの末っ子だ。

……なんだろう、自分の嫁が一番酷評な気がする。

「うん、終わったよ。多分」

「まぁ、もう伝える話はありませんからね」

さしずめ近所の面倒見のいい女子大生的ポジションにいるミミリィ隊長がそう言うと、彼は首をコキコキさせながら

「いやぁ……疲れた」

なぜお前が疲れる。

「もうずっとあんな真面目な話されたらもう疲れるのなんのって……」

「いや、一番疲れるの自分だべ」

「……うみゅ？」

自分が呆れながらリム副隊長に突っ込んだ所、後ろから可愛らしい声が聞こえてきた。

「……あ、起きた？」

「うぅ……おはよーございましゅ」

彼女はそう言いながら目をコシコシと猫みたいにこすって立ち上が

った。

そしてパタパタとこちらに近づき

「……」

「……どした？」

「朝みたいにおはようの口づけを」

「てい」

「みゃっ！？」

とりあえずでこぴんしといた。

こら、そこ！！

これだから変態はとか言わない！！

「うぅ……あれ？ナルミさん、その顔にかけてるのはなんですか？というかその格好は？」

でこを抑えながら彼女は自分を指差してそう聞いてきた。

……う～む。

どう言い訳しよう。

というか、今までよく誰も質問せんかったな。

多分タイミング逃しただけな気もするが。

……あれ？

さっき誰かにされたっけ？

まぁいっか。

つーかこれも、適当に国から送られたっていやいいか。

「自分の国から送られてきたんよ。自分が教授になったからって、物理やらの参考書とともにそれらしい格好しなさいって。こんなんとともに」

そう言いながら自分は電子タバコを取り出し、軽く水蒸気を吐き出した。

「はぁ……なんかいい匂い」

「まぁね。ミントっていう植物の香りだ」

「ほー、ニホンはみんとというものを葉巻にするのか」

「いや、違うぞそれは。これも正確には葉巻じゃないし」

「ほー……それで、なぜ白衣なのだ？」

む？

白衣はあるのに用途が違うのか？

「逆に聞くが、白衣ってこっちならなににつかうん？」

「む？こっちでは薬師が着てるぞ？」

あ、それ正解。

そうか、薬剤師だけなのか。

……珍しく地球との共通点を発見した気がする。

「あぁ、こっちもそんな感じだけど、他に医者と科学者が着る事もあるんよ」

「ほぅ……つまりは科学者としてそれを着ているのだな」

「そゆこと」

自分はそう言いながら、かっこつけて電子タバコをふかしてみる。

そしてその時視界の端に、一人のメイド服が写った事でとある疑問が浮上した。

はて……彼女らはなぜ奴が出現した時に出てこなかったのでしょう。

「君に一つ質問。さっき変な人ここにこんかった？金髪の……」

ここまで言って二重でマズいことに気がついた。

まず、奴は仮にも女神とやら、つまりは女性に分類される。

そんなんと会ってたなんて知ったら、今隣にいるこの娘がどうなる

か……。

そして、そいつについて今ここで彼女に聞くって事は周りの方々もお聞きになりやがるって事なのだ。

……激しく説明がわやめんどくさくなりますわ。

「……いえ、誰もきていません」

「そ、そっか。いや、夢で懐かしい顔がやたらリアルに出てきたからね、まっさか現実で来たりしとらんよなって」

素潜りで深海１５メートル並みに苦しい言い訳だ。

そして内心いろいろききたい。

例えば、彼らからみたらいつからどうやってこの紙袋が机に出現したのかとか。

「そうですか。夢に出るとは、よほど仲の良かったご友人だったのですか？」

「あ、うんそう。あれだ、奴は変な奴だったが、よくつるんでた奴だったんだよ」

……日本語破綻宣言をここにしたほうが良さそうだな。

「その友人とはどんな人物だったのだ？」

黙れエリザ。

自分は電子タバコを吸ってなるたけ考える時間を用意しながら、頭をダイソンに吸われた埃のごとくフル回転させながら嘘と偽りとを構築する。

……よし。

「そいつはな、自分とよく音楽を奏でる仲でな、ギターという弦楽器を扱うんだ。もう一人、ドラムという打楽器を扱う奴もいたがそいつはおいといて、自分たちはよくそれで音楽を奏でたりして遊んでいたよ。いやぁ、懐かしいなぁ。またみんなでなんか演奏したいよ」

嘘ってのは真実を織り込みゃ真実味が増すと聞いた事がある。

だからもういっそ、ほぼ真実で構築してやった。

まぁあれだ、ギターの奴が金髪でなく将来ハゲまっしぐらのショッキングピンクだってくらいしか嘘はないさ。

ぶっちゃけ3人集まってもオタソングしか弾かないがね。

とりあえず、最近のお気に入りは恋のミクル伝説でした。

「そうなのか……なんか、悪い事聞いたな、すまなかった」

ん？

なにが？

「と、とりあえず楽しそうだな、日本の生活は……あ」

自分が疑問符を頭に浮かべてると、エリザはなぜか謝り、なんか言って直後顔を青くしてかたまった。

……意味がわからない。

「姫様、落ち着きましょう」

そんなエリザに近寄りなだめるのは、魔法使いメルちゃん。

「あ、ああ……そうだな」

なだめられたエリザは、気まずそうな顔をしながらぎこちなく彼女に顔を向ける。

……なんでだろ。

そんな事を考えていると、後ろから奇妙な音がした。

くきゅ～……、という音がした方向をみてみると、あら不思議誰もいない。

仕方ないから反対の後ろを見るが、それでも誰もいないのでなんもない空間に声をかける。

「お腹すいた？」

「……はい」

すると不思議や不思議真後ろから声がした。

そういや今は……あや、もう8時なるん？

「……うん、自分らもう帰るわ」

「そ、そうか……わかった」

自分の号令に従い、奴らはそそくさと扉から出て行き、最後に出た自分は責任持って扉の鍵をガッチャンコ。

まぁ今後ろにいるメイドさんの存在から、意味は全くない気がするがね。

「……おいナルミ」

「ん？」

自分が鍵をしまっていると、エリザがなんか真剣な顔を、でも不安が見え隠れする顔で自分を見ながらこっちみてきた。

近衛隊は……さすがに廊下とかなら身を隠すらしくみんな素早く消えてった。

「今度のにっしょく、頼んだぞ」

「んー？……あぁ、人工太陽ね。きちんと国民の皆さんに説明はしてくれとっかい？いきなりならきっとみんな混乱……」

「いや、そっちではない。……私がいいたい事は、にっしょくの時出てくる怪物の事だ」

……あぁ、あれ。

「いや、どうせあれ言い伝えの「言い伝えの中の種族がなにをほざく」

……そでしたね。

「とにかく、気をつけてくれ。言い伝えが真実かはわからないが、少なくとも、ナルミがいる事でその存在は俄然信憑性が高くなっている……本当に出てくる可能性も、否定できないだろう？」

そーいわれると否定できないな。

「ま、自分なりに頑張るさ。人間大事な人護るためならどこまでも頑張れるからね」

「ひゃっ！？」

自分はエリザの不安をぬぐい取るべく、近くにいたシルバちゃんを抱き寄せアピールした。

「だから大丈夫さ。安心して……なんねその顔」

しかし、なんか微妙な顔をされた。

メイドさんには、いい笑顔をされたが。

「……そこでのろけるな」

「あ……？あぁ！？」

そしてエリザの言葉で我に帰った。

いま自分、ダークモンスター中心の闇属性デッキにおけるキラートマト並みに自殺行為をしていやがった！！

は、はずかしい……。

「ナ、ナルミさん……」

こっちはこっちで感動しちゃってるし……。

誰か、介錯を頼む。

ここは日本男子たるもの、潔く華々しい切腹にて最期を飾ろうぞ。

……やめろっ！！

そんな眼でみるな！！

死ぬ！恥で死ぬ！！

うわぁぁぁぁ！！

「ナルミさん……私、私……んっ」

「い、今抱きつかないで！恥ずかしくて死ねる！！」

「奥様、ご主人様は照れているのです。もっと抱きついても大丈夫ですよ。それよりほら、奥様もご主人様への愛を……」

「ちょっ！まてい！愛ってなにさ！あれは事故！特に考えないで口から出ただけだから！！」

「つまり、考えるより先に奥様を護るって無意識で言ったんですね？」

「あ、う……」

「そうなの？ナルミさん……嬉しい！！」

「あーも！エリザ助けて！！」

「さて、周期表でも覚えに行くか」

「ちょっ！行かないで！！」

「変態はこっちくるな」

「ナルミさん……あぁ……」

「ふふ……奥様、愛を示すのはなにも今ではなくとも、今晩寝室で2人っきりのときに存分に……」

「てめっ！なに吹き込んでんだ！！」

……この後自分はこの事がどこからか広がり、妻のために命を投げ打つ覚悟を持った愛妻家として、しばらくお城の話題を豊富にするのを不本意ながらお手伝いしたのであるある。

４５回目＊神様のお仕事、姫様のお悩み（後書き）

こんにちは皆様、伝説のへんたいポケモン、南師だよ

今回は復活するのが遅れてしまって、申し訳ない

それもこれも、金の玉おじさんが二人に増えたのが原因だ

とかなんとかいってるが、じつはポケモンＢＷは買ってもいないよ

まぁかわりに、キングダムハーツは予約したけど

んな身の上話はおいといて、今回のお話しは神様とかについてと、

エリザの隠された心情を語ったね

そして、これから先について回収できるかもしれないフラグを配置したね

さて……どーしたもんかねぇ

とりあえず、次回予告

次回は日食がとうとう始まるよ

そしてナルミ君の予想はあたるのか、怪物とはなんなのか

みんな、ストレッチパワーを貯めながらまってくれよな！！

……ちなみに変なテンションの理由は、人間情報科学のレポートが

腹立つくらい面倒くさいからです

あと、体力がもうありません

あ、あと今月はわけあって東京にいきますので、皆様野生の南師に遭遇したらぜひ餌をお与えください

それでは皆様、これからもよろしくお願いいたします

……あ、今回の元ネタ集は、面倒だからなしで……

いや！やめて！！

オノなんたらをけしかけないで！

友達がいってた！

オノなんたらっていうドラゴンタイプのポケモンは今回の厨キャラ確定だって！！

……まぁポケモンについては、よくわかりませんが

とりあえず、これからもよろしくお願いいたします

ちなみに金で時代が止まった私ですが、ゴーストタイプに異様なまでに興味が惹かれます

金でもムウマ６体のパーティーつくるほどに

４６回目＊ウサギは寂しいと死んじゃうの（前書き）

長い間更新しないで、申し訳ございませんでした

待っていた方がいるかはわかりませんが、追憶の南師、華麗に復活したいつもりです

あと何話めかの表記を変更してみました

意味はないです、気分です

そして、お待ちさせて申し訳ございません

46回目＊ウサギは寂しいと死んじゃうの

「……ふへ～」

自分は今、とても疲弊していた。
なのでだらしなく職場にあてがわれた自分のお部屋とやらにて白衣姿で机に突っ伏しながら口の隙間から水蒸気を吐き出しているのだ。

……あ、やべ電子タバコ落ちた。

「だいぶお疲れですね。お茶、飲みます？」

そんな自分を見て苦笑しながら棚からカップを取り出すのは、セミロング吸血鬼のシルバちゃんである。

「……よろしく頼むよ」

自分は電子タバコを拾いつつ、彼女の好意に甘えてお茶の用意をお願いする。
本当は緑茶がいいのだが、あるかわからんので贅沢は言わず、思うだけにしよう。

さて、ではなぜに自分がこんなお疲れになりやがってるかってーと、これにはもちろん理由がある。

それはなにかと言うと、実は今日が日食がおきるとされる日の当日なのだ。
したがって自分は兵士たちの部隊に挨拶をしてなんか演説まがいをさせられたのである。

意外に部隊が多くて、かなり時間がかかって泣きたくなったのだ。

おかげで自分は朝からあっちへタカタカこっちへポコポコお城のあらゆる所を駆けずり回るハメになり、兵士の士気云々を上げる事に体力と時間を費やしたのだ。

そしてその士気に比例して自分のやる気は下降すると。

全く、予報は午後からららしいのにね。

……はぁ。

「……んしょ、んしょ、えい！！」

……目の保養目の保養。

棚に届かないからピョンピョン跳ねるシルバちゃんはとてもかわいらしいです。

だがシルバちゃんや、それは危ないから椅子使おうな。

……しかたがない、取ったるか。

「……ほり」

「あ、ありがとうございます」

自分の渡したお茶葉を抱え、赤くなるシルバちゃん。

……かわいいなおい。

しかしこの娘、最近病まないよな。

いや病まれても困るが、ここ最近は天然お嬢様なだけでいたって普通だ。

ま、今が一番平和なのさ。

……ただ、最近自分は恥ずかしさやらなんやらがだんだん薄れて、爆弾を投下しやすくなっている気がして困るのだが、どうしようか。

やはりなにかにつけて自分と彼女をラヴらせたがる使用人ズが問題かね。

しかも彼らはいつの間にやらシルバちゃんに変な事吹き込むしね。

とりあえずそんな事を考えながら、彼女をなでなでして自分の席に戻り……。

……やはり自分はいろいろ行動を改めなければならないようだ。

まぁやる行動がだいたい近所の小学生にやるような子供扱いだからあまり……やっぱり問題あるかな。

さてさてどうしたものでしょうかねと考えながら、自分は電子タバコをふかしてポケ～っと窓から空をみる。

……そういや日食の予報ってどうやっているのだろうか？

占星術やらなんやらかな？

ただの占いとかなら信憑性は薄いような気がする。

むぅ……もしかしたら、今日の予報はハズレるかもしれんな。

そしたらそしたで後々面倒くさそうだ。

「お茶、できました！！」

……いつのまに隣にきたよシルバちゃん。ビビったわ～。

「あ、ありがと……手、どしたん？」

自分が彼女の手からティーカップを受け取ると、その手には何かで切ったような切り傷が。

治りかけてはいるが、まだ血は少し出てるのでついさっき切ったようだ。

結構痛々しいので、なでなでしながら痕が残らないように治しておこう。

とまぁ彼女の手をとり傷を優しくなでていた自分であるが、そんな自分に目の前の彼女がわけわからんことを言い出した。

「あ、お茶に入れました」

「……なにを？」

「私の血を」

……さて、耳鼻科はどこだろうか。

いや、むしろ脳神経外科か？

もしかしたら精神科かもしれん。

「いっぱい飲んでくださいね」

いや、そんな笑顔されても。

……あぁ、そうか文化の違いか。
そういや君は吸血鬼だかんね、血ぃくらいなんでもないのね。
毎朝自分の血液ちうちうしてるし。

「……いただきます」

そして彼女の期待に満ちた視線を裏切る事が自分はできず、一気にそれを飲み干すのである。

……レモンティーに花の香りを足したみたいな味だった。

「……うん、おいしい、よ」

「やった」

ピョンコピョンコと跳ねる姿は、実に愛らしい小学校低学年の子供に見えて……。

なんか、自分ってもしかしてロリコン？

いや、そんなわけがない。
絶対ない、ないったらない。

こら、誰もいないからってそんなくっつくな、恥ずかしい。
君は身長の割に意外とむ……そう！！
だから自分はロリコンではない、うん。

「……楽しそうだな、お前たち」

自分が腕に感じる感触を半分……全力で楽しみながらいろいろ考えていると、扉の方向から呆れた声が。

「お、エリザ。なに、もう自由に出歩いていいんか？」

そこにいたのは、念のためとお部屋に押し込まれていたはずのエリザ姫様が仁王立ちしていた。

……しかし、シルバちゃんのを感じてからエリザをみると非常に残念というかかわいそうというか。
エリザのが身長高いのにね。

……どんまい、それもステータスさ。
大丈夫、需要はあるよ。

「……なぜそんな憐れみの目で見られなくてはならない」

「いや、別に」

女の勘は鋭いね、くわばらくわばら。

「……」

そんなジト眼でみるなし。

「姫様、なにやってるんですか」

自分のことをじぃ～っと不審な眼で見ていたエリザの頭が、その言葉と同時に下に落ちた。
どうやら、ミミリィ隊長が後ろからポカリと頭を小突いたようだ。

……近衛隊の隊長として、それは大丈夫なのか？

「むぅ……」

……膨れてはいるが、大丈夫そうだね。

まぁいい、それよりどうしてくれるよエリザ様よ。
邪魔された事で自分の横から不機嫌オーラがちょっと出てきている
ではないか。

……しかし最近病まないな、この娘。
あれか、とうとう完治したか？

「……して、なに用？本来ならお前は今頃お部屋にて捕らわれのお
姫様かっこ笑いになってるはずなのに、なぜにここにいる？」

「お、ああ。そうだ……なんだ？かっこ笑いって」

「気にするな」

どーでもいーこと気にするね、君は。

「で、なぜいる？」

「うむ。実は一つ心配事があってな」

ふむふむ。

「にっしょくの時、シルバはどうするのかと」

「……と、いうと？」

いや、だいたい理解できてるが、一応ね？

「この前あれだけナルミが言ってはいたが、やはりナルミもずっとシルバがくっついた状態で万が一の事態を乗り切るのは難しいと思うのだ。で、午後はシルバは私と一緒に」

「嫌です！ナルミさんとずっといます！！」

……こら、離しなさい。

そんなコアラじゃないんだから。

「……と思ってここに来た。そしてシルバがこうなるのを予測して私が直々にきたわけだ。正直他の奴らにこの状態のシルバを説得できるとは思えんからな」

なるほど、そういうわけね。

「そっか……だって、シルバちゃん」

「……嫌です」

あらら、拗ねちゃって。

しかしまぁ、成長したなこの娘も。

昔なら『そうやって私とナルミさんの仲を～』なんて言いながら暴れそうなのにね。

ていうかすごいね、君。
そんな本格的にコアラみたいに手足使ってしがみつくって、疲れないかい？

まぁ支えてる自分も自分だけどさぁ。

「まぁ任せろナルミ」

……どうしたエリザ、いきなり。
なんか笑顔が怖いぞ。

こら、怖いからこっちくんな。

「なぁシルバ」

「……なんですか」

「はしたないからやめろ。というか疲れないか？」

そこかい。

「……大丈夫です」

「無理しないで、ナルミの膝の上に乗せてもらえ」

「そうします」

「なぜにそうなるさ」
こいつは……。
シルバちゃんもシルバちゃんで普通に座ってくるし。

「で、シルバ。今日の午後はこっちにこい」

「いやです！！」

プイッとそっぽを向く姿は本当にお子様だな。
こんどお子様ランチでもつくってやろうか？

「まぁそういうな。ちょっと耳をかせ」

そんなお子ちゃまシルバちゃんに、エリザは気味悪い笑みを浮かべながらすりよってきて、自分の膝にちょこんと座る彼女の肩に腕を回した。
そして誰にも聞かれないように彼女の耳元になにかを吹き込むのだが……なぁ、しってるか？

そんな事、こんな至近距離でやられたら自分に丸聞こえなのですが。

「シルバ、お前実は今、ナルミとの関係で悩んでいるだろう？」

「……なんでですか？私は今、とっても幸せで」

「そうなのか？シルバちゃん」

「っ！！」

「ナルミの前だけで平気な顔しても、私にはお見通しだ。お前、私がナルミに呼び捨てにされてるのに自分だけいつまでもちゃん付けなの、実は結構気にしてるだろ」

……そうなん？
全然決して微塵も全くかけらも毛ほども気づかんかった。

「なぁ、シルバ。その違いはいったい何だと思う？」

「し、しりませんよ！！」

「ぐびっ！？」

……シルバちゃんや、膝の上で跳ねるな。
顎いったぞ。

というか、歯と歯がゴツンって！！

「あ！ご、ごめんなさい！大丈夫ですかナルミさん！！」

「だ、大丈夫……」

そうか。
今知ったが、この世界の魔法やらの攻撃は自分あんまり効かないけど、こうやって自分の身体の一部と自分の身体の一部がぶつかると普通にダメージ喰らうんだな。

……あー、痛。

歯、欠けとらんよね？

「私は知ってるぞ、その理由を」

……エリザ。

君のスルースキルは賞賛に値するよ。

まぁそんなひどいダメージでもないし、シルバちゃんには話を続ける許可をやろう。

「本当に、大丈夫ですか？」

「大丈夫だって。話、続けなさい」

舌の先で前歯が欠けてなか確認しながらそう言うも、彼女は心配そうな視線をこちらにむけて離そうとしない。

そんな彼女の背後から、怪しい気配をたっぷりと滲ませたエリザが見えたので、ちょっと自分泣きたくなった。

だって、なんかキモイんだもん。

主に笑みが。

「と、いう訳だ。気になるのならこっちにこい。母様やミミリィと一緒にお前の相談にのってやるぞ」

「……でも」

なるほど、その誘いがよほど魅力的なのか彼女は自分とエリザに交互に視線を向け、本格的に迷ってるご様子であった。

仕方ないなぁ。

「気になるなら行っといで。自分は大丈夫だから」

「う～……でも」

いまだに渋りながら、チラチラとこちらを盗み見るシルバちゃんが、なんか犬みたいにみえてきた。

「シルバちゃんのためになるなら、行った方がいいんじゃないかい？」

「……わかりました」

お、折れた。

で……なんでちょっと不機嫌そうに膨れてんのさ君。

とりあえず彼女は自分からピョコンと飛び降り、膨れっ面のままお茶のカップを片付け……ようとしていきなり現れた見慣れたへんな人たちに取られてしまった。

片付け強奪すんなら淹れるのもやったれよ。

そう心でツッコミを入れてる自分のそばに、トタトタとよってきたのは我らが姫ことエリザ様。

「……ま、これで午後の間、シルバはおとなしくなるだろう。というかさせる」

「まぁ、頑張れ」

「ああ。……とりあえず終わったらシルバを呼び捨てで呼んでやってくれ。私の方からは適当に言っとくから」

あ、だからあんな聞こえるように会話してたのね。

……なんだかなぁ。

というか、よくよく考えたらこいつがたかだかそんな理由で彼女を連れて行くわけがないよな。

「……して、彼女を連れてく本当の目的は？」

「いくら指輪があっても、シルバがいたら下手するとナルミの邪魔になるからな。お前もシルバ抱えながら戦いたくはないだろう？攻撃が効かないとしても、お前ならやりかねん」

あぁ、確かに彼女をおんぶしながら謎生物と戦うのは心臓に悪いわ。

……で、なんで攻撃きかないん？

「なん「それと、ナルミの近くにシルバがいたらこちらも配置が面倒くさくなりそうでな。二人で均等に護れる位置に追いやった。持ち場を離れて一カ所に集まられたらたまったものではないからな」

「……」

こいつは。

「……はぁ。どゆこと？二人って、自分と誰？」

もうなんか、面倒くさくなってきた。

「む？決まっているだろう？伝説に対抗するのだ。人間であるお前

と心王種のセブル殿の二人がいたら、なにも問題は出ないであろう」

……なるほど、把握した。

……もうやだ。

自分はエリザの無慈悲なその言葉により、遠い目をしながらいつのまにやらお茶の淹れ方を使用人さんからレクチャーされてるシルバちゃんを眺めるのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊【☆

そして今、自分は噂のセブルさんと共にいる。
彼はお昼すぎあたりに自分の部屋やってきて、今はにこやかに自分とお話ししているのだ。

ちなみに、シルバちゃんは彼が来てすぐにエリザのとこに行ってしまった。

……まぁ、いいんだがね？

そしてだ。
そのまま自分はニコニコしている彼と、爽やかーにシルバちゃんについての結構危なげな会話をしていた。

「まぁつまり。ある意味お嬢様はこの国で実は誰より強大な軍事力を有しているということになるわけですよ」

「……まぁ、ぶっちゃけね。自分もセブルさんもどっかの誰かが、それこそ国単位であっても彼女になにかしらちょっかいかけてきたら、場合によっては滅ぼす勢いでキレる可能性あるだろうしね」

「そうですなぁ。だからこの前我はナルミ殿を殺そうとしたのですよ。まぁ結局完敗しましたが」

「ですよねぇ。……で、セブルさん」

「どうか致しましたか？」

「その刃物下ろしてくれないかなぁ？」

「ははは……それじゃあ答えてくれませんかな？お嬢様の手首と首についていた拘束の痕がなんなのか」

「はっはっは。それはあれだよ、シークレットだ。ひとのプライバシーにあまり踏み入るのはよくないよ」

「そうかそうか。よく意味がわからないのだが」

「んー？つまり、平たくいうと秘密」

「ははははは、黙れ」

と、いう訳さ。

いやー、でも一度自分の腹を半分結合崩壊させた剣を再び突きつけられるのは気持ちよくはないわぁ。

で、なぜこうなったかっていうてーと、それはさっきセブルさんとシルバちゃんが交わした会話に問題がある。

まず最初に、部屋に入ってセブルさんがシルバちゃんの首に薄い痣のようなものを発見したのが事の始まりだ。

『……お嬢様、その痣は？』

『え？あぁ、なんでもないわ』

『そう、ですか……手首にもありますね』

『うん。だけど大丈夫よ。ナルミさんがつけてくれたものだから』

『……へぇ』

『あ、そろそろ私姫様の所に行きますね。じゃあナルミさん、またあとで』

『……あ、うん。いってらっしゃい』

という訳さ。

とりあえず、セブルさんの引きつった笑顔が怖かった。

だからだろうね、彼女の爆弾発言を止められなかったのは。

そして今に至ると。

いやぁ、怖いわぁ。

特にあの痣を撫でながら幸せそうな顔をしたシルバちゃん、怖いわ

ぁ。

いやもうね、笑うしかないわな。

「あはははははは」

「あはははははは……てい！！」

「鉄塊」

ガキン、という金属同士がぶつかるような音が自分の首から聞こえた。

……頭に響く、音が中で反射する。

それに耐えきれず自分は頭を抱えてうずくまってしまった。

「うぉぉぉぉ……うるせぇ」

「……はぁ。血の一筋も出ないとは……前より弱くなったか？」

どうやらセブルさんも自分がうずくまった理由が、まぁ斬りつけられたのが原因ではあるが、理由が別の所にあるということはわかったみたいで、ため息をつきながら自らの剣を恨めしそうに眺めはじめた。

「……まぁいい。それよりナルミ殿、これからどうする？」

「あーうー……耳が、壊れる……ん？なに？」

「……チッ」

やっべ、舌打ちされた。

「……なんか、今くらいまで気持ちが負の方向にいくと、もしかしたらナルミ殿と再び戦っても勝てる気がしますな」

「自分としたら迷惑極まりないからそういう考えは捨てましょう。洒落にならんし」

「洒落じゃあありませんぞ。実際魔力とかは感情に大きく左右されますからな」

……あ、そうなん。
初耳だよその事実。

自分、魔力とかって生命力みたいななんかかと思ってたのだが……。

今回の日食も、太陽光に含まれるそんなようなのが、日食による月とかなんらかの影響で変なんなるのではないかと予想していたのであるが……見事に外れたね。

「あとは、我みたいな力の強い種族は周りの感情を読み取ってそれに当てられた魔力を集めることもできます。勝手に集まる方もいますがな。だからこうやって我自身がこう、色々負の方向に強く気持ちが傾くと、周りもそれに共鳴して……えい」

「たっ！？」

「こうやってそれだけで自らの魔力を消費せずに魔法が撃てます。まぁ今は我一人なのでこの程度ですがね。そもそも効率のあまりよ

ろしくない方法ですし、制御が難しく暴走しやすいです。周りの空気を呼んで感情を理解して微調整をしなくてはなりませんからな。我一人ならこう簡単にいきましたが、数人集まってだととても扱えたものではないのですよ。ま、威力がこれだから暴走しても被害は皆無ですが」

……謝れよ。

まぁホントにおでこへの衝撃は輪ゴムピストルくらいしか攻撃力はなかったけどさ。

もういい、スルーだスルー。

「へぇ……そうなん。魔力云々は管轄外だから、全くしらんかったわ。……で、さっきなにいってたの？」

空気の読めなさ、プライスレス。

「……これからの段取りですよ。どうやって警備するかっていう」

あぁ、それね。

「そんならさっき自分は説明されたのだが……君はされとらんの？」

「あいにくと、ナルミ殿に説明を願えといわれましたので」

あー、ガルクさんこのやろう。

「そーかい……んじゃあ説明しましょうか」

自分はそう言って、机の上でたたまれていたこの街と周辺の地図を

開き、机いっぱいに広げてやった。

その中のだいたい南側、つまり正門のある位置を電子タバコでトントンと差しながら説明をはじめる。

「まずここ、正門にあたる位置ね。まぁ攻め込まれても大丈夫なよーにぐねってはいるが、大通りには違いないので兵力の約3分の1を一番広いここに配置する」

「ふむ」

そして次に、北の部分を差してやる。

「ここの北側はいわゆるお貴族様の住まわれている地域だから、気合いを入れて3分の1をここに配置する」

「……」

なんだその目は。

……まぁいいや。

次に西側、森に面したそちらも小さめだが一応門はあるのでそこも電子タバコでトントンと。

「んで西側は、なんか一番気配やらなんやらに鋭そうなセブルさんが担当する」

「……そうなって」

「鋭くないの？」

「いや……他種族よりは優れてはいるが」
「なら問題ない」

そして今度は東側の、草原みたいなのが広がる側の門をつっつきながら自分は続ける。

「んで、消去法で残ったここを自分が担当する。ちなみにこっちはなんもないからいつもみたく派手にぶっ放してもいいとのありがたーい許可がおりた」

「そうか……いつもみたく？」

「うん、いつもみたく」

「……いつも、ぶっ放してるのか？」

「いや、ぶっ放してる印象が強く残ってるだけさ」

……なんか、悲しくなってきた。
主に自分のイメージについて。

「……はぁ。で、お城あたりに兵士の４分の１を配置。そして残りで街を巡回と」

もはや投げやり気味に簡潔な説明を完結させ、自分はすっぱすっぱと水蒸気を吐き出しまくる。

「ちなみに北側か南側になにか異変があったら即座に自分たちが駆けつけろとさ」

やってられんよね、とか思いながら、大量の水蒸気を口から漏らす。

「……そうか。ふむ……」

そんなやさぐれた自分の目の前では、顎に手をやり真面目な顔で考え事をしているセブルさんが。

……あれ？

なんでこいつなんも言わないの？

……もしかして、気づいてない？

「……な、セブルさんや」

「……ふむ……ん？あぁ、なんですかな？」

「……疑問とか、質問とかない？」

自分がそういうと、彼は首をかしげて……あ、気づいてねぇな。

「……いや、特にはないが」

あーそうかい。

……まぁいいや。

しかたがない、説明してやろう。

「セブルさん」

「……なんだ？」

「正門に兵士を3分の1、北に兵士を3分の1、お城に兵士を4分の1、残りをすべて巡回に回す。……なにか、疑問におもわんかえ？」

自分のその発言に、再び首をかしげるセブルさん。

……男がやっても、ねぇ。

「……特に変な所は……あ」

お、気づいたか？

「……我らの所に兵士は」

ブリリアント。

「いない。一人。つまりソロ狩り」

ね、ひどいしょ。

「……え？なんで……」

「パイの実並みの数のオブラートに包まれていた言葉をど真ん中どストレートで訳すると、“お前らんとこになんか変なのがきてビックリ人外大戦争をおっ始めてたら死人がでる。大通りなら逃げ道もあるが、お前らんとこは道細いから避難もできない。というか、避難さすくらいなら最初っから連れてかんほーがいいべ”。とのこと」

「……なんという」

「ちなみに近隣住民はもう避難し終わりましたとさ。あははは…
…やんなっちゃうよねぇ……」

自分はそう言いながら、明後日の方向を向き水蒸気をため息と共に肺から押し出す。

本当、嫌になるわ……。

あ……目から飛竜のナミダが……。

そんな自分に対して、誰かがポンと肩を叩いてきた。
首をひねってそれが誰だか覗いてみると、そこには優しい顔をしたセブルさんがいた。
いつのまに机の反対から移動したんだろう？

まぁ、そんな些細な疑問はどうでもいい。
そんな事より、彼は落ち込む自分にこう語りかけてきてくれたのだ。

「……頑張ろう。終わったら、二人で飲もう。な？」

「……うん。お酒、飲めないけど」

これが、自分とセブルさんの間に友情が芽生えた歴史的瞬間である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊】☆

皆既日食って、昔“怪奇”日食って書くんだと自分信じてた。

そんなことを考えながら、自分はひとりさみしく座り込みながらお空にて徐々にかけていく太陽を眺めようとしている。
それね後ろのお城のほうでは、事前にだしといた太陽もどきが光輝きまくってるので情緒も糞もないのだが、それはまぁしかたがないか。

ま、そんな訳で自分は塀の上で孤独に太陽をみていたのさ。
もちろんイベント好きな人種である自分は、携帯片手に写メまくりる準備をしながら。

あはははは、いやぁ、たーのしぃ。

あはははは……。

はは、は……さみし。

いや、思えば自分、こっちきてから一人でいた事なかったわな。
常に誰かしらいて、いっつも誰かと話してて……。

特にシルバちゃんとはいっつも一緒にいたからなぁ……。

……ん？

「……使用人さんたち、そこにいんなら出てきて」

「はい、お呼びでしょうか」

……いたよ。

執事さんAがいきなり出現し始めたよ。

「……他の人たちは？」

「皆待機しています」

仕事熱心だね。

うん、どっからその忠誠心がハミ出てくるのか、本格的に問い詰めたい。

……いまはいいか。

「そっか……よし、君。話し相手になってたもれ」

「はぁ……いい、ですが……仕事の方は」

「……人間って寂しいと死んじゃうんだ。孤独死って言って……」

「いいでしょう！なんでもお話ししましょう！！」

「……冗談だよ。寂しいと死ぬのはウサギだよ」

そうだったね。

彼らにこーゆーネタは危なかったの、すーっかり忘れてた。

……こいつら、かなーり面倒くさ……む？

「うぅむ……はじまっちゃいましたよ、日食さん」

「……うぁ」

自分がこれからの彼らとどうやって接していこうか、割と真面目に悩みそうになった所、計ったように地上へと降り注ぐ日光の量が減り始めた。
それを見て、自分の横ではなにか怖い顔をしている執事さんが。

一方自分はというと

「うっわすっげー。あ、ムービームービー。よっし、とれてる」

テンションただあがりであります。

「……なにやってるんですか？」

「んー？記録よ記録、日食の。この前見た時は半分も欠けなかったからね。今回は皆既日食の可能性があるからしっかり記録しないとね」

個人的なね。

「……根っからの研究者ですね」

「あははは、違うよ。そこまでいかね。だからその尊敬の眼差しやめてください」

こういう補正、いらないと思う。

と、そうこうしているうちに日食は続き、とうとう太陽がすっぽりと影に覆われてしまった。

横では、なにか身構えるような気配がする。

だがしかし、やはりというかなんというか、何事もなく太陽は再び顔をだしてきたのである。
そしてそのままだんだんと大きくなり、とうとう太陽は半分が復活した。

「……なにも、ありませんね」

「だしょー？所詮噂は噂さ」

ま、この後なにかしら魔力云々の自分が全く知らん分野の問題が出てくるゆー話しですがね。

……あーあ、終わっちゃった。

「いやー、一人で寂しかったけど、割と有意義だったねこりゃ。特等席での日食撮影とは、うん、楽しかった」

そう言いながら自分は立ち上がり、伸びをするなどのストレッチをして身体をほぐそうとした。

……のだが、その横でなんか緊張した声が自分に話しかけてきやがった。

「……ご主人様」

「ん～、っと。なに？」

「……あれ、なんですか？」

そう言いながら彼が指差す先には、草原の真ん中に土を盛っただけのような、なにか黒い山みたいなものが……ん～？

「……しらん、なにあ……え？」

「どうかしましたか？」

「……あれ、なんかこっちに向かってきてね？」

自分の目には、あの黒い山が人の歩く速度くらいでのそのそとこちらに這いずってきているように見えるのだが。

ほら、なんかあれ下の方にたくさん触手みたいなのがうねうねと……。

「君、ダッシュ……いま近くにいる中で一番速い人に全力疾走でお城に連絡入れるように頼んで。“なんかウロヴォロスみたいな変なのが出た。もしかしたら交戦するかもしれない”って」

「御意に」

彼はそう言って忍者のごとくサッと自分の横から消えていった。

仕事が早くて助かるよ。

ウロヴォロスがなにかはわからないかもだけど。

「……さぁて、どうしましょうかね」

とりあえず自分はポケットから一護君を取り出し、臨戦態勢だけはとっておく。

「……様子を見てきましょうか？」

「それとも魔法、打ちますか？」

「……とりあえず君らはなぜに沸いてきたし」

ほんにこの執事アンドメイドさんたちは。

まぁいい。

そんなことより今はあの変なのがなんなのか……うへ、よく見たら赤い複眼みたいなのが点々とあるし……。

「あ、そだ。セブルさんにも報告、だれかいってくり。彼ならなにかわかっかもしんないか」

「きた！！」

誰が叫んだかはわからないが、とりあえず自分は噂の黒い塊を見ると、なるほど祟り神みたいな動きでこちらに全力ダッシュをしてきていたりした。

……意外に速いな。

自転車くらいはある

……。

「えい」

とりあえず自分は、奴の進行方向に目玉模様が大量にかかれたスキマを発生させ、その出口を隣に逆方向を向くように設定してやる。

するとどうだろう。
スキマに入ったでっかいのは、そのまま反対のスキマから出てお城とは反対の方向へ……あ、止まった。
そのままどっかいけばいかったのに。
しかし、どうしようか……あ、こっち振り向いた。
「……なんか、確実にこっちを標的にしてますね」
「だね、はためひばぷわっ！？」
そして思いっきり伸びてきた触手に掴まれて空高く投げられた。
下からは、自分を呼ぶ悲鳴にも似た声がいくつか聞こえてくる。
うぅむ……このまま刺すか。
……なんか、だんだん殺生に対しての抵抗がなくなってくる自分が怖いわぁ。
ま、いっか。
とりあえず
「約束の地よ」
ドカンと一発、脳天直下ね。
刀をまっすぐ下に向け、全体重をかけて下に落ちる。
ＤＤＦＦなら地味にこれ、当てづらくて困るわぁ。

ていうかセフィ様のダメージ攻撃は全体的に当てにくい。
てな訳で、見事にこれもかわされた。

つか、先ほどまでは自転車くらいの速さの動きしかしなかったのに、今の回避はやたら速いな。
正直少し舐めてたわ。

……さて、ではここで話が唐突にかわるが、少し自分のお話ししようと思う。

元来自分は調子に乗りやすい人間である。
Dモードが強いからと、少し強い敵が出ただけで変身しまくってストーリー中盤で侵蝕率９８％になってるくらいに調子に乗りやすい性格なのだ。
もう少しわかりいく言うと、空中でネガティブゾーン展開してそのままゆったりと死んでいくみたいな。

つまり、調子に乗りやすい。
そしてそれは、油断しやすいとも言い換えられるのだ。

ま、よーするになにがいいたいかってーとだ

「おわっ！たっ！ちょっ！やめっ！だぁ！！」

シパパパパパッと自分を狙う奴の触手の動きが、実は尋常じゃなかって訳。
こんなんなるわかってたら近づいたりしなかったよ。

ええい！邪魔くさい！！

「富竹フラッシュ！！」

とりあえずは左手にいまだに持っていた携帯を使っての目くらましであります。

ま、ただのフラッシュではあるが隙をつくることはできたようで、奴は思いっきりひるみはじめた。

というかモンハンでいうピヨった状態になっている。

……今のうちに刻むかね。

そうだそれがいい。

真っ先に滅殺コマンドを選択できるあたり、自分はだんだんと人の道を踏み外していくような気がするが、まぁあれだ。

生きている豚やら牛やらを目の前で首落としてバラしてはい食べなさい言われると食べたくなくなるが、魚とかなら生け簀に泳いでるの指差して板前さんに平気でこれさばいてとか言いながらそいつが活け作りになるのを見届けた後にパクつくのとおんなじだ。

猫を蹴り殺したら罪悪感に苛まれるけどありんこなら踏み潰しても誰も気にしないみたいな、あれだよ。

だから虫みたいなこいつは倒しても問題ない。

うん、全くない。

ないったらない。

……そうですね、所詮言い訳ですね。

でもまぁこいつを放っといたら街の方にどんな被害があるかわかんないからなぁ。

……悪く思わんといてくれよ。
こちとら、曲がりなりにも国民護る立場ですからねぇ。

「ま、悪く思う思考能力があるかはわからんが、ね！！」

いまだに携帯を片手に持ちながら、自分はやっこさんの触手の数本をぶった斬る。
携帯についてはしまうという発想が出てこなかったので、ずっと持ちっぱだ。

対して、触手を斬られた黒い謎生物はというと痛覚もなにもないのか、特に暴れるでも叫ぶでもなく別の触手で自分を狙って攻撃してくる訳でもなく、しばらく残った触手をもぞもぞさせたと思うとなんだかしらんが丸くなってしまった。

まるでこたつの中の猫のような感じに、ゴロニャンと。

……なんなんだこいつ。

図体はでかいくせに、移動は遅いし触手だって豆腐みたく柔かったし眼は赤いし。
しかも最後は丸まったし、どないせいゆーね。

あれか、このまま刻めゆーことか？

確かにこれはチャンスだが……しかたがない。
いくか。

そう自分は考え、奴に近づいて刀を構える。
未だに携帯は持ってるが……まぁ特に問題はない。

片手でできる、つかできてる。

「……桐雨流居合術一式“瞬（またたき）”」

ほら、鞘もないのに居合い術。

太刀筋が見えないほどの高速の居合い抜きだって簡単にできてしまう。

いい加減携帯しまえよ自分。

ま、なにはともあれ良かった良かった。

これだけ斬ればあてはなんの問題もありますまい。

自分はそう勝手に判断し、後ろを向いてスタスタとお城まで引き返していったのだ。

バラバラと後ろでなにかが崩れる音を聞きながら。

だが、その判断は間違っていた。

「……ヴヴァァアァア」

「うあ？」

なにかが呻く声が聞こえてきて、反射的に自分は後ろを振り向いてしまった。

そこにあったのは細切れになった黒い塊ではなく、ドロドロのタール状の液体が一面に広がっていた。

そしてその中心に、人の形をした真っ黒いなにかが生えていた。

それは、子供のような体系をしていて、目も鼻もなく、腰から下の下半身は液体と同化しており、男か女かはわからんがいわゆるスライム娘みたいな状態である。
そして、そんな奴の顔にあたる部分にはやたらと大きな口がぱっくりと開いており、どうやら呻き声はそこから発生されているようである。

と、ここまで説明してはいるが、じつは自分そんな細かくまでこいつを観察しなかった。
いや、出来なかったといった方が正しいか。

とりあえず、これは奴が誕生する瞬間を目撃した自分の使用人さんたちから聞いた情報である。

そして、この謎生物は自分が振り向こうとした直後、とんでもないことに巻き込まれたのである。

「エァアヴァァア！！」

「なっ！ぶっ！！」

こいつを中心に半径約１００メートルの範囲を巻き込む大爆発に巻き込まれてしまったのだ。

勝ちを確信して余裕ぶっこいていた矢先の不意打ち。
それを自分はモロにくらってしまったのである。

さすがにいくらこの世界で頑丈さＳＳＳランクの人間である自分でも、ほぼ爆心地でこんなのをくらったらたまったものではない。

もうもうと湧き出る黒い煙のようなものを見たのを最後に、自分の視界はブラックアウト。

すべてが真っ暗闇に閉ざされた。

４６回目＊ウサギは寂しいと死んじゃうの（後書き）

こんにちは
桃色思考の持ち主、南師ですよ

早速ですが、２カ月も遅れてごめんなさい
遅れた言い訳は、見苦しいのでしませんが、本当にごめんなさい

さて、ではでは今回の元ネタ集を

富竹フラッシュ・とあるフリーカメラマンの必殺技
スキマ・とある隙間妖怪の通常技
瞬・とある番長の必殺技
鉄塊・とあるＰＣ９の防御技

こんなもんですかねぇ……
取りこぼしがあったらごめんなさい

しかしモンハン３ｒｄ、楽しいですよね

武器補正がなくなったりでゆとりゲームになった気はしますが、やはり楽しいです

クック先生がいなくなって悲しいですが、まあカボチャ頭にコナンスーツで下僕猫（アイルー）をクロマ風にできるのでよしとしましょう

アグレッシブウサギのダイナミックアタックはうざったいですが

では、私は皆さんに石を投げられる前にこのへんで……あれ？

なんだ、でっかい船がこっちにきて……なんかバリスタがこっち向いてるきが……

うわぁぁぁぁぁ！！

毎回こんな茶番、ソロソロやめたほうがいいですかねぇ？

……では、今回もありがとうございました

47回目＊まっくらやみの共同作業（前書き）

あけちゃいました。

遅れてしまい、申し訳ありません。

あと、途中急いだり今回最初書いて最後書いて真ん中書いての順番で書いたので、へんなとこあったら教えてください

正月にマターリしてからなおします

……場合によってはすぐなおします、はい

47回目＊まっくらやみの共同作業

……物理的に、黒い光、というものをつくることは不可能とされる。理由は、“黒”という色自体が光を吸収してできる色だからである。

魔法やらなんやらがあるこの世界なら、もしかしたらできるかもしれないが、まぁきっとおそらく無理だろう。

さて……ではなぜこんなことを自分が考えだしたか、説明いたしましょう。

「……どこよ、ここ」

現実逃避です。

先ほど自分が一人呟いた通り、自分はいまどこにいるかわからない。でもだからといって、どっかにワープしたり移動したりした訳ではない。

むしろ自分はこの場を微動だにしていないのだが、そっから見える風景が問題なのだ。

あたり一面、まっくらけっけなのである。

３６０度、どこを向いてもまっくらけ。

自分の身体も視認できず、本格的にまっくらけ。

全く見えない闇の世界なのである。

なんでこうなったんだろうね。

……いや、理由はわかってる。

先ほど、謎の生物を角切りにして背中を向けた直後、なんか鳴き声だか泣き声だかわからない悲壮感溢れる呻き声を聞いて振り返ったと同時に自分を巻き込んだ爆発が原因なのだろう。

あの爆発自体によるダメージは無に等しかったが、大量に空気が口から侵入して肺を思いっきり膨らますのと、地面が吹き飛んで足場を確保しようとした結果、おもいっくそ自分の足を踏んだのがきつかった。

小指がいまだにじんじんする。

久しぶりに痛みで泣いたね、涙出た。

……あと、舌も噛んだしね。

で、足踏んでこけて起き上がったらまっくらけ。

肺に不法侵入した空気を咳で追い出しながら、いまだにしっかり左手に持ってた携帯でライトをつけてみるが、まるでだめ。

視界に光がかけらも見えない。

「……てい」

で、言い忘れていたのだが自分はこの状況でもきっちり攻撃を受けている。

ビシバシと、なんか触手みたいなので。

ただ、言っちゃあなんだが軽いのね。
しかも刀で豆腐みたく斬れるし、つか斬れたし。
見えなくても感触でわかる、さっき斬った本体より柔らかい。

……まぁ、いいや。

とりあえずどっかに進もう。
そう、前進前進。
前にすすまなお話しにならないのですよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊∞☆

……で。
体感時間で３０分くらい歩いたところで

「……ちかれた、もうやだ」

自分は疲れ果てた。

邪魔な一護は途中でしまい、携帯電話もポケットに突っ込み、襲い来る触手は文字通りちぎっては投げちぎっては投げを繰り返してここまで進んできたのだが、もうそろ自分、疲れたよ。

だってどこまで行ってもなにも見えんし、何より足元が暗くて怖い。
何回石にけつまずいてこけたか。

あーもう。
触手の相手も面倒になってきたし、どうするよ。

身体に絡みつくのは引きちぎり、脚に巻きつくのは蹴り飛ばし、適当な触手は締め上げたとしても、いくらなんでも面倒だ。

だからといって、本体っぽいの叩こうにもまっくらすぎてどこにいるやら状態で、ぶっちゃけこのまま平行線を描いていると、決着つかずに日が暮れる。

触手に攻撃したとして、多少なりとダメージがあるならその限りではないが、全くおさまる気配のない触手乱舞はそうではないという事を物語ってる気がする。

……アルテマでもやったろうか？

いや、ここはお城の近くだし、下手したら近くにいるかもしれない使用人さんを巻き込む気がする。

ホントに、王様たちの判断は正しかったよコンチクショー。

てな具合に、自分は色々考えながら触手を締め上げていた訳ですよ。おもに引っ張ったらイモみたく本体でてくんでね？とか思いながら。

で、引っ張って5秒で触手がちぎれたその時である。

タッタッタと危なっかしい足音と、少し荒めな人の呼吸音が聞こえたのは。

気配を探り、その方向へ無駄だとわかりつつも向いてみると、その足音は勢いよく横へ跳んだ。

……なんか、聞いたことあるってかよく聞く息づかいだね。

おもに夜き……げふんげふん。

「ん……？シルのわっ！？」

「ナルミさん！！」

そして自分はその足音の主に後ろから抱きつかれた。

というか負ぶさってきた。

あぁ……この感触は、いつものシルバちゃんか。

……なぜいるし。

「……シルバちゃん、なんでこ」

「右に跳んで！！」

……なんだ？

なんでこんなせっぱ詰まった声してんだ？

とりあえず言われた通り右に跳んだ所、シルバちゃんが相変わらず焦った声で自分に話しかけてきた。

「ナルミさん、私の心読めますよね！？」

「読めるけど、どうした？」

「今すぐ読んで！説明はそれで読み取っ後ろに跳んで！！」

ん～？

とりあえずバックステッポするが、何だろう。

……なんか、これ言っちゃあ人間としての性格疑われるをだろうけど、つい思ってしまうんよね。

なんか、この娘に指示されると、ちょっと後で虐めたくなる。

……どうしようかね。

ま、今は置いときましょう。
それよか読心術ね、悟(さとり)ですね。

『……ナルミさんの背中……あったかい……いいにおい』

……。

「なに考えてるん、君は」

『……すいません』

全く……。

「で、なんで読心術が必要なん？」

『それは、また後ろに跳んでください！！』

……なんなんだ、いったい。

『で、ですが。私たち吸血種は、頑張れば声を使って周りの状況を把握できるのです。魔力と体力が結構もっていかれますが、こういう暗い所でも周りをみているように問題なく動けます。というか、視覚よりも認知範囲が広いです』

……なるほど。

「つまり君が自分の所に問題なくこれたのもそれのおかげで、さっきからの指示はあのうねうねが自分に向かってくるのを感知しての指示か」

『そうです。だけどさっきみたいに声で方向を示していたらその間はそれが使えないので、こうやって心で直接お話ししています。ちなみに今は私が来てナルミさんの動きが変わったので、警戒してかわかりませんが、あれは遠巻きからこちらを伺ってるようです』

ほぅ。

ならその間に情報を仕入れましょうか。

「とりあえず、このまっくらなとこから脱出できる？」

『無理です。外からの様子ではナルミさんを中心に、ナルミさんが移動するとこの暗闇も一緒に移動してました』

「……外の様子は？」

『使用人のみんなとセブルが遠巻きから警戒しています。ほかの兵士は、お城の警備に回されています』

『……た……あさ……て……』

……ん？

「……今、なんか言った？」

『いえ、特には言ってもいませんが思ってもいません。なにかありました？』

「いや、なんかノイズが……」

『わ…や……し……』

……また、なんかよくわからん声が頭に響く。

なんというか、悲壮感漂う声が……。

自分がそう思案していると、なんか自分らを囲む空気が少し、嫌な感じになった気がした。

少し警戒して身構えた自分に気づいたシルバちゃんが、心配そうに自分に話しかけてくる。

『……ナルミさん？』

「……シルバちゃん、奴の動きは？」

『いえ、特には……きた！！』

シルバちゃんの声を合図に、自分はその場を全力で逃げた。

背中に背負っていたシルバちゃんを護るように前に抱えながら、触手をなぎ倒してダッシュした。

『ナ、ナルミさん！！』

「こいつらの攻撃は自分にゃきかんさ！自分を助けようとしたとしても、勝手にお城抜け出したらダメよ！！」

『……はい』

あり。

なんか少し、いやかなり悲しい感情と共に彼女の声が響いてきた。

……そんなつもりはなかったのだが。

まぁフォローはあとにしよう。

それよか、現状からの脱出だ。

「でも、君がいて助かる！自分はこの中なんも見えんから、君には自分の目になってもらうよ！とりあえず、こいつらの本体どこ！？」

『は、はい！えっと、いまはこのまま右斜めの方向にいます！！』

……なぜ今度はそんな嬉しさマックスな感情は。

どこに喜ぶタイミングがあったんだ？

そう疑問を抱きながら、攻撃のため再び自分は彼女を背中にやり、言われた方向へ足を向け、そのまま敵へとダッシュした。

『あと１０歩くらいの位置にいます！！』

「おっしゃ！しっかりつかまっててよぉ！！」

背中で彼女がしっかり自分に抱きつくのを確認して、自分は気合いを入れて地面を蹴った。

「うぉら！龍刃（りゅうじん）！！」

所詮跳び蹴り。
だが、気合いの入った左足には、なにか弾力のあるものが当たる感覚がある。

先ほどまでのような豆腐みたいな柔らかい感覚ではなく、もっと人のお腹をけったような感覚。

「う　ゃ、あぁあぁぁぁぁ！！」

『……ね！……き…！…こ……り……！！』

そんな感触を残し、自分は後ろから響く叫び声を聞きながら、地面にしっかりと着地した。
だが、頭には再びよくわからないノイズが聞こえる。

けど、なんだろうこのノイズ。
なんか、とっても喜んでいるように感じるが……

『ナルミさん！まだ生きてます！！』

「ぬ！？」

なんと、結構本気目に行ったつもりだったのだが……しぶといな。
この世界の生き物なら、少し蹴っ飛ばしたら吹き飛ぶかと思ってたんだがなぁ。

と、呑気なこと考えていると、後ろから小さな悲鳴が聞こえてきた。

『……っ！！』

「どうした？」

それはなにか痛い思いしてとか怪我とかの悲鳴ではなく、なにか気持ち悪いものを見つけたような悲鳴である。

蛇にムカデみたいな感じに足を生やしたような生物を見たときの反応と同じだから、間違いない。

前者はいっつもきい……あぁ、だめだ口がヘリウムガス並みに軽くなっている。

『いえ……さっきナルミさんが蹴り飛ばした本体らしきものが、ちょっと』

だろうね。

「気持ち悪いかもだけど、詳しく教えてくれないかな？」

『はい……なんか、うねうねしてます』

……。

「擬音だけの抽象的なものでなく、具体的に」

『でも……うねうねです。なんか、子供の上半身に背中からと下半身から大量のうねうねが……背中？側面かも』

あぁ、声の反射だからそこらはわからんのか。

「ふむ……こっちに向かってくる様子は？」

『なさげで……あ』

「どした？」

『上半身が割れた……』

……ふむ。

上半身割れるとか、想像つか

『はな……！も……ぃ……！！』

……またか。

しかし、だんだんと聞き取れるよーになってきたわな。

ま、今は余計なこと考えんとこ。

下手打ってシルバちゃんが死んだら洒落にならん。

つーか、怪我しても洒落にならんかんね。

「シルバちゃん。しつこいようだが、詳しく説明お願い」

「……下半身そのままで、上半身だけが2つに分離しようとして……あ、もどった」

もどった、とはこの場合もっかい一つにまとまったゆーわけね。

……なんつーか、もうなにがなんだか。

自分は頭を抱えたい衝動にかられるのを押さえていると、自分の後ろにいる闇属性妹系人妻な女の子が、自分に思考で語りかけてきた。

そういや、もうちょい深く彼女の思考に入り込めば会話しなくても状況を把握できるよーな気が……。

……うん、よそ、この考え。

人のプライバシーにそんなずかずか入り込むのは、人としてだめだ。決してシルバちゃんの思考の奥深くで、自分がなんか彼女の妄想で大変なことさせられてるかもしれないとか、思ってる訳じゃない。

ま、それは置いといて彼女は自分に語りかけてきた。

『……あ、そういえばナルミさん』

それはなんというか、いつもより間抜けな印象を受ける心の声だった。

なんでだろ？

「ん？どーかしたん？この場面の打開策でも思いついた？」

自分がそう聞くと、彼女はいいづらそうに……いや、思いづらそうに応えてくれた。

『多分……あの、瞬間移動はやってみたらどうでしょうか？』

……。

「そうだな……すっかり忘れてた。とりあえず、こっから頭上２０メートルんとこにでりゃあいっか」

……え？

こん時自分がなに考えてたかって？

……聞かんといて。

ま、とりあえずそんな訳で、自分は彼女をしっかりと押さえながら

「んじゃあいくから掴まっとってな」

そのまま頭上２０メートルのとこまでテレポった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊％☆

んで、頭上２０メートル。

あたりはいまだにまっくらけ。

どーやら２０ならまだ足らんよーで。

でもこれ以上はシルバちゃんが保たないかもだしなぁ。

魔族のことを侮りはじめた自分です。

とりあえずおりよ。

『……だめでしたね。ごめんなさい』

心底申し訳なさげな声が頭に響く。

「んにゃあ、シルバちゃんのせいじゃないさ……しかし、どうしたもんか……あ」

そこまで言って、自分はこの状況を打破できるかもしれないことを思いついた。

『どうかしました？』

「いや……悪いけどシルバちゃん。ちょっち君の心の奥にリンク……奥を覗いて奴の正確な場所を割り出すけど、いい？なんかいろいろ君の心を覗くことに」

『いいですよ』

はやいなおい。

『ナルミさんに見られて困るようなことはありません！むしろ奥の奥まで！隅々まで私の心を覗いて、蹂躙して辱めてください！！』

「そこまでせんよ」

ったくこの娘は……。

ま、とりあえず、許可はおりた。

なのでリンクしましょうか。

……。

……。

……。

よし、やや右斜め前約17メートルんとこだな。

途中自分がシルバちゃんを本気で家畜扱いしてる映像やら、泣き叫ぶシルバちゃんを異常な拷問してる映像やら最終的に彼女を生きたまま食べてる様とか見た気がしたけど気にしない。

見てない、そんなの自分は見てない。

うぇ。

もう、この娘こわいわぁ。

まぁ、いいや。

「……あんがと。んじゃあいきますか……“旅人（ガリバー）”！！」

ポケットからゴミを……もったいないが使ってないティッシュの塊を握りしめながらそう自分は叫んだ。

すると、煙が風で霧散するように暗かった世界が徐々に明るく……。

まぶしっ！！

目が！

目がぁ！！

……。

……。

……よし。

だいぶ慣れた。

人間の適応力ってすごいよね。

自分の肩に頭をうずめているシルバちゃんをみていると、ホントよくわかる。

「……大丈夫？」

『……チカチカします』

まだそうやって会話しますか。

「少し、休んでなさい」

『はい……』

ま、この娘は問題なさそうだ。

でも今一番の問題は

『……そういえば、私勝手にお城抜け出したけど、ナルミさんに怒られないかな？でも私頑張ったし、誉められたりしてもいいよね。……怒られてお仕置きされるのかな？誉められてご褒美もらえるのかな？……えへへへ』

……ごめん、この娘も相当危険だったわ。

まぁそれは後でいいとして、だ。
今の所一番の問題は……

「う〝ぁあぁぁぁあ……」

目の前にいるあいつよねぇ。

とはいえ、今は箱の中だが。
やっぱりあいつを隔離したらあれは消えるようだ。

きっとあの箱のなかみはまっくらなんだろう。

ちなみに説明すると、“旅人”とは捕獲の神器であり、とある天界人の中学生がつかったものである。

中からは絶対壊せず、外からは容易に壊せる親切設計。
ただ、捕獲に０．５秒もかかるからあのナイフ使いみたく相手の能力によっちゃあ逃げられるけど。

てなわけで、攻撃しましょう。

どーせならでっかいの。

な、に、が、い、い、か、なと。
よし。

普通に壊そ。
あまり大技は叫ばないといけなくて、とっても痛い。

「……“鉄（くろがね）”」

てなわけで、またも天界人の神器の、それも初歩の初歩をつかわしてもらいます。

まぁよーするに、翳した右手が大砲みたくなってでっかい弾がでるのだよ。

では、グッバイ、自分の世界の貴重なティッシュ。

さて、では箱は割れ中身に直撃した大砲の弾はどーでもいいとして……いや、あれ結構どーでもよくないか。

自分よかでかいもん。

……ま、いい。

それで中身の方なのだが……うん、うねうねだ。

その変なモノは、力なく腕をだらんと下げ、うなだれる形で立った状態のままピクピクと痙攣をしていて、その足元には真っ黒い水たまりのようななにかが広がり、そこからはうにうにと触手たいなものが動いている。

まさにうねうね。

シルバちゃん、君の表現がよくわかったよ。

「無事ですか!?」

そんななにかを観察していた自分の横に、先ほど自分に刃物を突きつけてきたお兄さんが。

「無事よ無事。自分もシルバちゃんも至って無傷、健康体。ただ彼女は今まっくらなとこからいきなり光を見て目をくらましているけど」

「そう、ですか……」

いやぁ、なんというか、セブルさんは羽根があんのに子犬みたいだね。

特にその安心しきったひょうじょ

「奥様！大丈夫ですか！？」

「旦那様！奥様になにが！？」

「お二人ともお怪我はありませんか！？」

……めんど。

「彼女は目をくらましてるだけだから。自分らはいたって無傷よ。とりあえず、彼女連れてみんなどっか安全なとこいってて」

自分はそういいながら、背中にへばりついているシルバちゃんを……

「離れなさい」

『……ぷぅ』

ぷぅじゃないよ、全く。

というか、そろそろ口つかえ。

で、シルバちゃんをおろして使用人さんたちに彼女を預け、再びあのうねうねした変なのを見て、隣にいるセブルさんとお話しをする。

「……あれ、なにかわかる？」

「いえ、わかりません」

やっぱりかぁ。

なんか自分的に、ネット発祥な都市伝説の“くねくね”が実在したらあんなんかなって今一瞬頭をよぎった。

「……わかりませんが、とても奇妙ですな」

「そりゃああんなキングくねくねみたいなものが奇妙じゃなかったらこの世に奇妙なものなんてなにもなくなるよ」

「いえ、そうではなくてですな……奇妙、というのも語弊がありますが、なんというか、複数の意識が集まってアレを形成しているように見えるのですよ」

……複数の意識？

「詳しく」

「意識というか、感情ですな。様々な人の、あるいは生物の感情がまとまっているというか……先ほど我が説明したあれの延長です」

あぁ、セブルさんが自分の首をはね飛ばそうとして失敗した時のあれか。

「でも、それって実害あんまないんじゃなかったの？」

「だから奇妙なのです。あれほどまでに強大になるなんて、聞いたこともありませんでしたからな」

つまりはセブルさんにも未知の範囲、か。

さて、どうしようかね。

そう自分が考えていると、再び頭になにか声が響いてきた。

『は……く！……し…！……て！！』

その声は途切れ途切れではあるが、焦りの感情が読み取れた。

なにに焦っているのか、また誰がなにを伝えたくて自分にメッセージを送っているのかは全くわからない。

だが、自分になにかを伝えようとしているのは伝わった。

……なにを伝えたいんだろう？

「……」

「どうかなされたか？」

「……いや」

「ならいいが……早く倒すべきだと我は思うのだが」

「うん……」

自分はセブルさんの言葉を華麗にスルーして、先ほどのノイズの正体を探るべく意識を集中させてみる。

『……して！……く！…た…！！』

……少しづつ、聞こえてきた。

『……わ…！……か……！！』

とても幼い声が、頭に響く。

『わた…を……はや……！！』

だんだんそれがはっきりと聞こえてくる。

『も…げ…かい…おさえ…』

そして、自分はメッセージの受信に成功した。

『はやく！はやく私を殺してよ！……もう、抑えきれない……』

なんとも物騒な内容ですこと。

「……セブルさんや」

「む？」

「あの謎生物がさっきセブルさんがいってた感情云々の奴ならだ。

その中心には誰かいるのか？」

自分の質問に、彼はしばらく考えて、少し……かなり苦い顔をした。

「おそらく。しかも中身はかなり強力な力を持った方が。じゃないと身が持ちません」

あーあ、やっぱり。

「しゃーないなぁ……セブルさん」

「助け出すなら、諦めた方が……」

うん、そのセリフ予想して

「と、普通なら言うんですがな。して、ナルミ殿はどのようにするおつもりで」

あらっ。

「あー、そう。つまり自分は普通じゃないと」

「……普通だと思ってたんですか？」

思っとりませんよコンチクショー。

くそっ、そんな“あんた大丈夫？”とか言いたげな顔やめろし。

「もういい！セブルさん！お前はパーティー強制参加だコンニャロー！！」

いやぁ、涙出てきた。

「つまり手伝えと」

「にたよーなもんかね？平たく言うと共同戦線さ」

「ほぅ……まさか我が背中を預けられる程信用されていたとは」

「言ってろ」

こいつは……

「しかし……むしろお一人のほうがよいのではないですかな？」

ん？

あぁ、まぁいつもの自分見てたらそう感じるかもだけどね。

「今回は少し……かなーり特殊だからね。自分は魔力は全く無知、それなのに魔力に包まれた中の人を救い出すったら、魔力の専門家が必要でしょ？」

自分がそう言うと、彼は一瞬呆けた顔をした後にニヤリと笑いはじめた。

「なるほど。魔力の専門家、ですか……そこまで期待されているのなら、それに応えてやりましょう」

「まぁ自分が他人を評価できる立場ではないが、セブルさんはかなり有能なんでしょ？」

じゃなきゃあんな長い間ガルクさんが近くに……

『はやく殺してよ！このアンポンタン！！』

……ごめんなさい、名も知らぬ誰か。

「……はぁ。んじゃああちらさんも限界そーだし、はじめますか」

「御意に」

自分は刀を、セブルさんは剣を持ち、目の前にいるよくわからないものと対峙する。

では、反撃開始といきますか。

……あ、なんか今自分、とってもダメなこと思いついた。

多分、言ったらいろいろダメなんだろうが……言いたい。

非常に言いたい。

「時にセブルさん」

「なんですかな？」

いやまて。

まだ引き返せる。

……ま、セブルさんだし大丈夫か。

「そんな装備で大丈夫か？」

言っちゃった、てへ。

「さぁ、わかりませんね。こんなのと対峙するなんて、経験した事ありませんからな」

……。

「……なんですか、その顔」

「いや……見事にへし折ったなぁって。ツマンネ」

いや、そのまま死亡フラグおっ立てられても困るのだがね？

まぁ内容しらんなら、これが普通の反応か。

「……なにが？」

「気にしない気にしない。これで緊張ほぐれたべ？」

言い訳ばんざーい。

「……あなたは少しくらい緊張してください」

「えー。まぁ不意打ちやら人質やらされん限り自分らが負けることなんてないべ」

「……はぁ。少なくとも、あなたが怪我するとお嬢様が心配するのですから気を付けてくださいね。護るということは、そういう事も気を付けなければならないんですよ」

むぅ……じじくさい説教。

「まぁつまり言いますと……この後お嬢様が泣いたりなんだりしたら……もう一戦追加です」

……ゴメン、しゃれになんね。

あーも！
剣をこっちむけるなし！！

振るなし！
だからあーぶーな

『たったとしてよ！いい加減もう限界なのよ！このノロマ！！』

……ごめんなさい。

47回目＊まっくらやみの共同作業（後書き）

あけましておめでとうございます

さあ皆さん、この今年初の南師、つまり初南師を存分にご鑑賞くだ、
あ、やめて、石なげないで

……はい、相変わらずの茶番大好き南師です

予定では0時に出す予定だったんですがね……

ごめんなさい、いろいろすっかり忘れてました

てなわけで、約一時間遅れのお届けです

では、だらだらいきそうなのでここでスパッと元ネタ集に移行しましょう

各種神器・本文に出た通り、サンデーでやってた能力バトルのマンガ
龍刃・私の大好きな格ゲーの元気中華ぼったくり娘の技。しゃがめば怖くない

こんな感じです

さて、では次回は珍しく今回のお話しを説明しちゃいます

説明しなきゃなんないなら説明しなくていいのかけよって話ですがね

今日じゃないのかよ、とは言わせません

まだ決着ついてないので

あと、このことを忘れてたら説明しません
忘れないように頑張ります

……で、なんの話でしたっけ？

ちなみに、今回のやつはあまりひねりもなく、結構ストレートにいくつもりです
今まで変化球なげたかといわれたら疑問ですが

とにかく、なんか身体を乗っ取られた誰かの叫びを聞いて、主人公がそいつを助ける

いやぁ、王道ですね

予定では、次でいろいろ戦いおわってその次で後片付け、そして最後に後日談アンドバカ夫婦にいちゃラブしてもらおうか

ま、次とその次は一つにまとまるかもですが

……ちなみに、いま変なテンションだからいいますが最近というか前回のお話しを作る時に６こくらいボツったのがあります

それは別にいいんですが……内容が大変大変です

６分の４が、最終的にナルミ君がシルバちゃんを襲いました

そのうち一つに至っては、ナルミ君がなんかシルバちゃんを捕獲監禁し始めました

……なんか、最近私自分の脳が本気で心配です

……いや、私にそんな趣味はかけらしか持ち合わせていませんがね

はぁ……どうしましょ、ん？

あら、かわいい下僕猫（オトモアイルー）。

どしたん、こっちにき……なにやっべば！？

ちょっ、しびれ罠の術……あ！オトモ同士連携術まで！！

ちょっ！

属性解放やめて私熱いのきらいだかあぁぁぁぁぁ！！

……以上、ハンターランク４の南師でした

上位のナルガは気持ち悪いです

片手厨になった私には難しいです

ていうか……武器補正、なくなったからなぁサード

……ではでは皆さん、よいお年をー

48回目＊我ら伝説の無責任コンビ（前書き）

ここから更新されたよ

そろそろこのお話しの題名を変えたくなってるよ

なにがいいかはわからないから募集するよ

でもやっぱり変えるかは未定だよ

48回目＊我ら伝説の無責任コンビ

さてさて、自分とセブルさんというなんとも珍妙なパーティーが結成して早2分くらい。

「……で、どーしたらいいのかねセブルさんや」

自分は早速セブルさんに丸投げた。

「そうですな……」

しかしセブルさんはそんな自分に対して嫌な顔一つしないで真面目に考えてくれる。

いやぁ、いい奴だ。

と、そんなことを考えながら答えを待ってると、なにやら黒いものが目の前を横切った。

そして足元から、ズガァンという音と共に激しく砂煙が。

『も、にげ……』

あ、ノイズが消えた。

……。

「……ナルミ殿、一つ提案があるのだが」

「ふむ、聞こうか」

「もう少し街から離れないか？」

「大いに賛成する」

それからはもう速かったね、自分ら。

行動的な意味でも脚的な意味でも。

案の定あの黒いなにかは敵認定している自分達を……。

「……一旦二手に別れませんか？」

「それ、君絶対自分を囮にする気でしょ」

訂正。

案の定あの黒いなにかは敵認定している自分を標的に攻撃しながら追いかけてきた。

「つーかなんで自分狙われるん！？あれ、魔力だとか何だとかってそんな意思的ななにか持ってんの！？」

「……おそらく、中にいる人がナルミ殿なら自らを殺してくれると希望を持ったおかげで、そのままあっちの方も興味を持ったというか方向性を示されたというか」

……うわぁ。

「なにそれネガティブすぎて泣けてくるよ」

「……まぁ、頑張ってくださいな」

うるせーよ。

……まぁとりあえず。

「ここらで止まりましょうかねっと」

ある程度の位置で自分らは急停止し、やってくる触手をなんか……どうしよう。

考えてみたらどの程度までならアリなんだろう。

実際一度刻んだ自分が言うのもあれだが、どんくらいの力加減でいきゃあいいのか……。

と、自分がなんやらかんやら思考を巡らせて黒いうねうねが思いのほか近くにやってきた、その時である。

「光の壁！！」

なんか聞き覚えのある声でやたらシンプルな呪文が横から聞こえてきたのは。

その呪文が叫ばれた直後、自分らと塊の間になにやら透明っぽくて金色っぽい光輝く壁が出現した。

当然、目の前にいきなり壁なんかできたのでその黒いうねうねはゴンッ！！という盛大な音を立ててぶつかっ……うわ、なにこいつ壁があんのがわかんないの？

なんか、ガラスの向こうの光源に行こうとする虫みたいに動いているぞ。

そんな風に呑気な観察を始める自分の横から、やたら苦しそうな声が響いてきた。

「っ……重っ……」

もちろんこの声の主は先程の光の壁を出現させた張本人のセブルさんでございます。

「大丈夫ですか？」

「……まぁ、実際少し想像より重かっただけで、実際はそんな問題ありません」

へぇ……あれか、芋の詰まった袋かと気合いを入れて持ったら、実は中身はお米で想像と違う重さについ声が出た感じか。

……まぁ、芋も米もどっちもクソ重いけどね。

でも、やっぱり相手はあのあいつだからなぁ。
あまり余裕ぶった油断はできないよね。

「大丈夫ならいいけど……大丈夫？」

「大丈夫です。それに防いでわかりましたが相性もいいみたいですしな」

……相性？

「相性とは？」

「あの塊の魔力の属性、つまり方向性ですな。あちらは闇属性で我は光属性を使っているので、我の方が有利なのです」

……へぇ。

闇属性やら光属性なんてあったんだ……あり？

「でも、そーゆー属性ってないんでなかったん？なんかこの前」

「あぁ。それはあれです、実用性がないので廃れて忘れさられただけです」

あら。

どゆこと？

「光属性も闇属性も、どちらもなにも生み出さない、というか魔力を切ったらすぐに消える上に適性がないと扱えず、しかもよほど訓練しないと魔力の燃費が悪いというものなので。それに器用貧乏というか、表立った弱点もないかわりに他の属性に特別有効なわけでもなく……まぁ闇と光同士はなぜか互いに惹かれ合って使い方次第で強くも弱くもなるのですが、それはまぁ例外的に。でも、使いこなせば楽ですぞ？使う時間にもよりますが、うまく使えれば他の魔法より魔力の消費は少なくなりますからな……８００年くらい修行したら」

そーなのかー。

うん、よーわかっていません。

あと、よく考えたらあん時はメルちゃんが“火や水とかしか知らな

いのに～”とか言っただけで、それ以外もあるんだよな、きっと。
世界属性や神属性が無いだけで。

……ま、いいや。

「とりあえず元気に話をできるようなので、大丈夫そうだね」

「……まぁ、相手があの状態ですからな」

そう言う彼が顎で指す先には、なるほどさっきと同じように壁にぶつかる黒いなにかが。

「あいつ、よほど自分にゾッコンなんだね。一心不乱に自分目掛けて壁にぶつかってる」

ははは、笑けるわぁ。

「……どうやら、中の人の影響でナルミ殿に意識が行き過ぎて思考とか他のものが置き去りにされているようですな」

「ははははは、バカジャネーノ」

いやはや、なんというか。
あれだな、今の自分の気持ちとしたら雀が猛スピードでガラスにぶつかって気絶するのを1から10まで余すとこなくみていた時の気持ちかな。

平たく言うと、内心憐れみがこみ上げてくるという。

……と、んなこた今どーでもいいっての。

それより……本格的にどうしましょうかねあいつ。
なんかこう、手っ取り早く中の人を救出する手立ては……あ、そうだ。

「ねえ、セブルさんや一つ提案！いいこと思いついた！！」

ナイス自分、グッジョブ自分。

「聞きましょう」

「なんか、魔力をこう遮断っつうか消滅するようなものがあった気がする！あれが魔力の塊なら、
そうしたらもう蟻の巣がコロリするくらい清々しく消えると思」

「……仮定の話ですが」

ん？
なんねいきなり、人の話をぶった切って。

「あれは魔力自体の塊が中の人に寄生しているような存在です」

うん、まぁ。
イメージはつかめる。

「うん、だから魔力をこう、パアッとやれば」

「前例を知らないのでなんとも言えませんが、魔力のみで形成してるならあの塊は中の人の魔力に根を張って操っている可能性があります。そしてあれは超高密度の魔力がそのまんま直に外に出て暴れ

まわっているようなものです」

へぇ、さすが専門家。
そこまで分析してるのか、やるねぇ。

でも、魔力の塊ならなおさら消したらかいけ

「ですからそんな状態でこのままあの魔力を無理やり消したら、あの塊と共に中の人の魔力も一緒に消す事になる可能性があります。なにせ深くまで根を張ってますからな。しかも塊を通じて外に直接つながってますので、中の人の魔力を残す方が不可能かと」

……。

「……ちなみに、魔力が無くなったら？」

「死にます」

「別のを考えよう」

最終結果が死ぬってなるんなら最初っから自分あれをザンテツケンでもぜったいれいどでもやって葬ってます。

気がついたら自分の口から溜め息一つ。
そして隣からの言葉にさらに溜め息が二つこぼれる。

「……して、別の具体案はありますか？」

……はぁ。

「……あったら提案しております。セブルさんはなんかないん？」

さて、ここで自分は反省しなくてはならない事を一つ告白しよう。

自分、なんだかんだでセブルさんの事をバカにしてる、まではいかないけど、少しセブルさんを見くびっていた節がある。

なにせシルバちゃんが関わった時のあの変態さ加減だ。

自分の中で、彼は親バカ暴走オヤジの烙印を押されています。

……いや、別に本当にバカにはしてないよ？

親バカとバカは違うからね。

うん、きっと多分恐らく。

そんけーしてまーす。

……んで！

そんでそんな風に自分に見られていたセブルさんは、次の瞬間こんなことを言い出したのだ。

「ありますよ」

「……」

自分は自らの耳を疑い、ついでにどや顔のように見える表情のセブルさんの声帯も疑った後に無言で彼の頭を叩いてやった。

ゴツンという清々しいくらいにいい音でしたよ。

「った！なにしますか！！」

「……あんなら勿体ぶらずにさっさと言いなさい」

くそ……もっと強く殴りゃあよかった。

今の覚醒したセブルさんみたいなキツい感じのイケメンは頭抱えても様になるからなぁ。

全く妬ましい忌々しいパルパルしい。

「……んで、どーすんすか？」

とりあえずその最初殴ったのとは別な、自分でもわかるくらいに理不尽な怒りを心の海に沈めつつ、彼の考えをきいてやる。

「ああ、それは……」

すると彼はそう言いながら、自らの携えている剣を取り出し

「あの周りのを刻み続ければいいかと」

今度こそどや顔でのたまいはじめた。

……とりあえず、もっとさっきより力入れてぶん殴ってもいいよね？だめ？

「あの周りにある黒い触手は、先程も申しましたように恐らく魔力の塊です」

憤りを覚える自分をよそに、彼は自慢げに……自分フィルター越しに見て自慢げに語りだす。

「なのであれを切り崩すなりなんなりできれば、切り落とされた魔力は形を保持できず霧散すると予想できます」

……ちっ。

「……でも、あれは元から野良魔力が集まったみたいな代物じゃあないんかい？なら、霧散した魔力ももっかい取り込まれんでね？」

……まぁ自分、公私は分けれるタイプのできる男鳴海ですから、この人生の大先輩をぶん殴りたい衝動を抑えつつ、真面目に質問しちゃいますよ？

元から怪しかった敬語が無重力エリアで宇宙空間に飛び出してしまったアイザックのようにどっかに飛んでいきましたがね。

「野良魔力……まぁ、霧散した魔力をかき集めて再生する可能性もないわけではありませんが、まず完全に回復は無理だと思いますな。多少なりと回収できない魔力も出てくるだろうと思いますし、そもそも再生にも魔力は消費されるはずです」

……へー。

けど、それって魔力の塊相手なら焼け石に水というか、サハラ砂漠にじょうろのレベルだと思うのだが。

「あと、我の剣は魔力の剣。斬ると同時に相手の魔力を奪い、吸収する事ができるものです。なので時間はかかれど中の人を助け出すならばこれが一番確実かと」

……。

「バカたれ！それを最初に言えぃ！！」

「へプシッ！！」

今度こそ、今度こそ自分はこいつの頭を先程より力を込めてぶん殴った。

したらば彼はみょーな叫びと共に吹っ飛び、そのまま地面に突っ伏してしまった。

落ちて地面に刺さる剣がなんとも滑稽でござる。

「ぐおぉぉぉ……首が……」

「折れなかっただけ感謝しろ。つーかなっぷしゃ！？」

そして自分の顔面になにか当たった。

いやね、さほど強かった訳ではないが、喋ってる途中にやられたからなんか変な声が出た。

「な、何事？」

で、なにが飛んできたのかは知らんがそのぶつかってきた方向を見たのですよ自分。

そしたらね奥さん、ええ、聞いてくださいよ。

真っ黒いのっぺらぼうが目の前にいたんですわよ。

さて、ここで突然なのだが人間とはこう、お化け屋敷とかで驚かされても人により反応が様々に見られるのだよ。

で皆さんはどのタイプの人類なのか、自らで理解してはおりますか

な？

まぁそう言う話。

……そう言う話？

まぁいいや、で、驚かす側のレベルの度合いにもよるが、くどいようだが人間は様々な驚き方を個性として持っている。
叫び声をあげるアメリカンホラーみたいなタイプとかね。

他に例をあげれば、叫びたくとも声が出ないでパクパクやる和製ホラータイプとか、全く動じない不動心タイプもある。
さらに細かくいけば、泣き出すタイプや逃げ出すタイプ、腰抜かして漏らすタイプとか様々なタイプがあるのである。

これらが複合する場合も大いに考えられるしね、いきなり叫びながら泣き出すタイプとか。

で、自分はと言うとね

「ほわぁぁぁ！！」

あまりに驚いたら真っ先に手がでるタイプの人間なのさ。
あと奇声も。

流石に普通に生きていて常にではないが、まぁいきなり不気味なもんを目の前に突きつけられたらやっちゃうのよ。
過去にも一回だけあったし。

ちなみにその一回とは、小学6年の最後くらいん時、目の前2セン

チくらいんとこに羽持って半分に割いたトンボをいきなり近づけてきたクラスメイトを思いっきりぶん殴ってしまった時でございます。
手加減なんてせずに、全力で顔面ど真ん中に。

ちなみ彼はそのまま鼻血出して気絶してしまいましたとさ。

さらに言うとそいつはいっつもアホなことしてクラス中の女子から嫌われていた奴だったので、いつの間にかクラスの女子が先生にそいつが勝手に転んだと報告して事なきを得ました。

まぁ今でも交友はあるけどさ。
あいつのスケベさ加減はクソ程も改善されてないけど。

高校にエロ本をカバンいっぱいに持ってきて授業中に読み出すバカは他にはいるまい。
そしてそれを先生に発見されて停学くらうバカも全国に何人いるやら。

あの時はきっと奴のご両親、息子を全力で殺したかったのだろうなぁ。

……話が逸れた。

とりあえず自分は当時と同じように手加減なんてしらん、と言わんばかりに渾身にして黄金の左がその黒い顔面に炸裂したのよ。
そしたらね。

……うん、ちょっと飛んでったのさ。

……ごめん、嘘ついた。

とりあえず中の人、ごめん。
顎砕けてたら治すから、許してね。

……さて、まぁ過ぎた事は仕方がない。
ひとまずは吹っ飛んだ黒いのは捨て置いて、もう一つの吹っ飛んだセブルさんを助けにいこう。

って、まだ転がってんの。

自分は彼の近く、転がってる彼のまぁ頭の上らへん……乗ってる訳でないよ？

そこから自分は彼の後頭部を、っと、顔だけ起き上がってきた。

「……元気？」

「……ぐわんぐわんします」

「それは大変、頭打った？」

「……器の小さい」

うるせーよ。

少し移動して一言大いセブルさんのわき腹をげしげしとつっつきながら、自分はそろそろ本題に入ることにする。

「んで、対処はできるんだべ？」

「……てい」

あ、脚つかまれた。

「まぁ、先程いいましたように、問題なくいけますよ」

そう言いながら立ち上がったセブルさんは、首をコキコキと鳴らすように動かした。

……自分悪くねーし！！

「……あ」

あ？

「どしたん？」

「いや、我の剣が……」

剣？

あぁ、そう言や持ってないね。

確か……

「確か、剣ならあそこに刺さっていたはず……」

自分はそう、珍しく彼に優しく本当の事を言いながらその方向を指差した。

するとそこには、キラキラと輝く剣がまるでどっかの斜塔みたいに雄々しくそびえ立っていた。

が、一つ問題があったりする。

「……来てますな」

「……来てますね」

自分たちと剣を結んだ直線の延長線上に、剣の柄が傾いている方向に黒いあいつがいるという事だ。

そしてそいつは自分目掛けて触手振り回しながら駆け出してる、と。

「……自分、右に逃げるから左周りに剣とりにいって」

「……御意」

理解が早くて助かるよ。

言った直後、自分とセブルさんは左右に分かれて駆け出した。

そしてそれに反応して、黒いあいつも自分目掛けてて曲がりだす。

ええ、内心ほくそ笑んでいましたよ、予想通りに事が運んで余裕ぶっこいていましたよ。

まぁ多少この黒いのが件の剣を踏んづけてっつうか触手を叩きつけているのを目の端に捉えたけど、さほど気にもせずに調子こいてました。

そしたらね、大変なことが起こったんだよ。

まず最初に、最終的に同じとこをグルグルやってる自分のとこにセブルさんがやってきた。

「……ナルミ殿」

「ん？なーに？つか剣は？」

ちなみに手ぶらで。

なに、剣持ってないならさっきの二手に分かれた意味でしょ。

「……剣が、取れません」

「は？なんで？」

意味がわからないよ。

なに、もしかしてあいつの体重にやられてポッキリいったの？

「なにがあったし」

「……頭まで全部、土に埋まってて……抜けません」

言われて自分は周りを見たね。

グルグルまわって走っているためその場所からは遠ざかってはいないが……なるほど、それらしいものはどこにもない。

「……丁度柄があいつの方に傾いていたので、そのまま叩きつけら

れて一気にメリッと」

冷静に分析すんなし。

「……掘れない？」

「時間がかかります。あと道具も」

「土系の魔法」

「……剣が魔力を吸収してしまうので無駄です」

「ん？したらばあれ持って魔法できんくね？」

「魔法を出すのと受けるのは違うんですよ」

「つーか魔力吸収するんでなかったの？あれが魔力の塊なら、埋まるのは無理なんでね？」

「剣の部分が魔力を吸収して、柄から持ち主に吸収した魔力を与えるので、柄を叩かれたからそのまま……」

……。

そのあと2周くらい二人揃って無言で走ったね。

「……コピー能力アニマルでこう、地面を……」

「お願いですからやめてください。なにかはわかりませんが、なにか剣ごと地面をえぐりそうです」

「……わがままいうなし！！」

「もとはといえばナルミ殿が我を殴ったからこうなったんですよ！？」

「さーらーに、もとを辿れば君が提案出し惜しみしたからだべ！！」

「出し惜しみなんかしてませんよ！！」

「しらんわ！んなことより一つ提案！！」

「なんですか！ふざけたこと言ったら魔法飛ばしますよ！！」

「ほざけ！とりあえずくだらない口喧嘩後にして打開策考えね！？」

「大いに同意する！！」

ちなみこれで1周と半分くらい。

なんかくっだんね。

「……で、どうすっべ」

「……地道に刻んでいくのが一番かと」

まじで～。

それあれでしょ、ピタゴラスイッチをガチで造るのと同じくらい面倒でしょ。

……って、そういや君、武器は？

「……武器は？」

「いや、埋まってるからこういう話に」

アホか。

「ちゃうわい。武器ないのにどーやって刻むのかと問いたい」

自分の日本語……日本語？

まぁ言葉に不備はなかったはず。

……自信なくなってきた。

「あぁ、それなら……頑張って素手で」

……。

「……他に方法は？」

まぁ、ないからこういう話に

「……あるにはあります」

お、まじで。

早く言えよ。

「あるなら早く言いなさいな」

自分がそう言うと、彼はにがーい顔をして内容を話し出した。

「……ですが、結構面倒かつ危険で」

「うん、でも聞く。どんなん？」

さあ言うべし。

場合によっては自分ならできる可能性もなきにしもあらず。

「魔力を消滅、それこそ先ほどナルミ殿が提案した話の延長です」

ふむ？

しかしダメ出ししたのは君なのだよ？

「具体的には、魔力を少しづつ削っていき、中の人と外の黒いのの境目になった途端に術を止める、という方法です」

……あ、自分それどう難しいかわかった。

「それさ、実は超精密な微調整が必要な上境目が見分けづらいとかいうオチだべ」

「さらにぶっちゃけると消すのと同等以上の魔力が術者からも消えていきますので……いくら我でもあれ以上の魔力は持っていません」

……はぁ。

どーにかならんかねぇ……ん？

「まちぃ。考えてみたら確か自分は過去にそこら中の魔力を」

「あれは検証の結果一定範囲から魔力を追い出す結界と判明しました。それを自らの魔力の特性意外を追い出すように特化させたのがナルミ殿の体験したものです。ちなみにやった所で中の人の魔力も追い出されて死ぬだけですよ」

……。

どないせゆーね。

……あ。

「そうだ」

「どうかしましたか？」

うん、どうかした。

「いやね、すっかり頭から飛んでたんだが……」

そう言いながら自分はポケットから適当なエコバックを取り出し

「とーりよせーバックー」

それを高々と掲げだした。

ちなみお忘れかもしれないが、自分ら絶賛駆け足中である。

そして駆け足しながら自分はそのバックを齢……いくつだっけ。

まぁいいや。

「掘れないならダイレクトにとりゃぁいいのな。ん」

そのバックを自分は横を併走する元気なおじいちゃんと称するに値する年齢の青年に突きつけた。

「ん？」

するとなにそれってな感じな顔された。

そして思い至る。

別に彼でなくて自分が掴めば問題なくね、ってなことに。

「あ……失礼。……そいや！！」

そう叫びながら自分はバックから件の剣を取り出し、ずずずいっと隣の彼に突きつけた。

……いや、きちんとハサミやら包丁やらみたいな刃物渡す時のマナーとして、刃の部分に持ち替えて柄を彼に向けて渡したからね。

「おう！？我の剣が……いや、深く考えないでおこう」

そしてセブルさんはそうつぶやきながらそれを受け取ったとさ。

これが俗に言う思考放棄さ。

「……とりあえず、ありがとうございます」

「いえいえ」

ま、そんなこんなで典型的なお礼の言葉とその返事をした自分たち。

さてさて……それではでは

「で、準備はいいですかなセブルさん」

自分はそう言いながら一護を取り出し、併走するセブルさんの返事を待つ。

が、しかし、待つべくもなく瞬間的に返事が帰ってきましたよ。

「えぇ、問題ありませせね」

そうかそうか。

では、いきますか。

「ほんじゃぁセブルさん、そろそろ自分走るのも飽きたので」

「そうですな、我も同じ場所を周り続けてこの景色にも飽きてきましたので」

その会話を皮切りに、自分らは地面に跡をつける勢いで急停止。

そして後ろの黒いやつを眼に捉え、叫ぶのである。

「反撃再開といきますか！！」

「迎撃準備致しましょう！！」

……。

「……準備してどーすんの」

「……そちらも、再開もなにも、反撃したことありませんよ」

「……そもそも同じ言葉をハモらす事でかっこよさ累乗の場面では」

「……はもらす？ハモラの花がどうかしましたか？」

どこまで行っても息が合ってんのか合ってないのか、よくわからん自分たちであった。

48回目＊我ら伝説の無責任コンビ（後書き）

・元ネタ

とりよせバッグ・青狸ロボのあれ
アニマル・ピンクい肉団子のあれ

こんにちは、みんなの心のサンドバック、南師です

これは自分の文章力、表現力の乏しさに絶望しながら仕上げました

自分の長所がわからないー

だれか教えてー

……割とガチでこの5ヶ月悩んでました

あと、それに加えて書きながら過去のトラウマがフツフツとメンタルが弱いもので

では、南師でした

まだまだ続くよ！！

４９回目＊一難去らずにもう一難（前書き）

もひとつ前から読むと具合がいいよ

あと、この回が今回の混乱を巻き起こしたかわいそうなやつです

まさにだいぶ前にやらかしたあれを彷彿とさせる

でも、私としたら今回は真面目というか（まだ）後ろに繋げられるレベルなので前みたいな体たらくにはならないはずだと言い訳しますというかそもそも繋がるのは大前提なのですが

まぁとりあえず、今回のへんてこりんな部分は後々使いたいのですよ奥さん

だからある程度は見逃してください

ちなみに今回のことを詳しく言うと……

とりあえず、超展開としか

49回目＊一難去らずにもう一難

さて……この黒い触手にそこはかとなくエロスを感じる自分はきっと正常ではないのだろう。

……ごほん。

まぁそんな個人的かつ気持ち悪い趣味はロックかけたフォルダに厳重にポイしておいて、話を自分とセブルさんに戻しましょう。

まず自分らは二人で息が合ってんのかあってないのかわからん、それこそ王ドラとエルマタドーラのような微妙な連携で件の触手を地道に芝刈り機よろしく刈り取っているのである。

理想はバンジョーとカズーイのような連携だが、あいにくと自分とセブルさんに決定的に性格の違いがあるので、到底無理な話である。

例えるならば、自分はピクスの色なんかこだわらず、近くの色に近くの色をあてる大雑把な性格なのに対し、彼は律儀に遠くても同じ色を几帳面に狙うくらいに性格が違うのだ。

……つまりね。

「あーも！セブルさんちまい！一撃で大量に削りたいのはわかるが攻撃が遅い！もっと手数出してばっさり終わらせようよ！！」

「そういうナルミ殿は大雑把すぎます！もっと効率よくやろうとしてください！さっきからただ適当に近くのをぶつ切りにするだけじゃないですか！！」

こんな会話をしながら一緒に戦っているのだよ。

うん、醜いしそもそも口出ししなければいいのはわかってる。
わかってるが……なんか言っちゃうんだ。

これって友達がゲームをやってるのを後ろから見ている時と同じ心境かな。

ま、いいや。

とりあえずこんな感じで順調に戦っていた訳ですよ。
地道に地道に、コツコツと。

得点としたらチーププレイでマイナスされるワンパターンなやり方でね。

……チームプレイでチーププレイ。

……失礼。

で、なのだか……こうしてだいたい自分らは約１０分かそこら、コツコツと地道に頑張ってあやつのエイチピーを削っていった自分たちではあるが、ここで一つ重大なことを失念していたのである。

まず、この黒いなにかは魔力の塊であり、中に誰かを核として取り込んで暴れている、という代物なのではあるが、ここでひとつ疑問が残る。

はてはて……ではいったいその魔力とはどうして発生したものなん

でしょうかね？

ぶっちゃけこの疑問に気づき、解答を得ないことにはこの触手を刈り取る簡単なお仕事も終わることはないのだが、これぱっかりは残念としか言えないね。

日食が始まって５２分と２７秒。

二人はまだなにも気づかない。

＊＊＊

……ん？
自分？
服はボロボロなんだけどねぇ……。
さて、そんな満身創痍な彼にこんな残酷なことを言うのも気が引けるが、一つ大きな疑問をぶつけてみよう。
「なんかさこいつ……でかくなってね？」
そうなのだ。
自分らが戦っているこの触手。
じつはなにかしらんが段々攻撃範囲も広く長くなり、触手自体も次第に太く逞しくなっているのである。
さて……で、答えは。
「……」
無言の返答。
やはり君も気付いていたか。
「自分ら、こいつを削っているんだよね？したらば小さくなっていかなおかしんでないかい？」
そう言いながら、自分は触手を5本程ぶった斬る。
と、同時に、セブルさんが口を開く。

「……一つ、いいですかな？」

「どうぞ」

自分の許可を聞いたセブルさんは、触手を刻みながらこちらに近づいてきて自分にくっついてきた。

……いや、ボーイ達のラブみたいなくっつきではなく、背中を合わせてのくっつきかた。

多分話を集中してできるようにのつもりで前にしか注意を払わなくてもいいこのスタイルにもってきたんだろうが……。

まず翼が邪魔。

次に実はこれ頭上が穴。

そしてそもそも触手は自分めがけてしか来ないんだから君が来る必要性。

つーか君はなんだかんだで無駄なダメージを受ける行動が多いよな。

その傷もほとんど勝手に自分の近くに突っ込んできて受けたもんだしな。

あれだな、セブルさんは実は猪突猛進型だよな。

考えあるようで考えないような考えた行動で突っ込んで、一発で大ダメージを与えたがるが実は迎撃余裕です的な。

……うん、訳わからんね。

まぁいいや。

「んで、その一つとは？」

自分がそう言うと、彼はちょーっと重い口調でこう言いました。

「……そもそも、根本が間違っていたかも知れません」

……なにそれ。

「平たく説明」

「……考えてみたらあれって感情とかから出てくる魔力の塊なのですよ。で、離れたとはいえここは人口の多い街の近くなので……」

そう言われて、自分は遠くに見える街の外壁をつい見てしまったね。どれくらい離れているかはまぁよくわからんが、結構な距離がある。

そしてその外壁の上には小さな豆みたいな人影がちらちらと。

「……削った以上をあの街から補給してると？」

「おそらく。多分これは不安やらそこらが中心の魔力の塊なのでしょうなぁ……だからこいつも削った量以上に回復できるのかと」

きっと中の人がそういうのを増幅させる体質なのもあるでしょうが、とセブルさんはもはや諦めの入った声色でそう言ってきた。

対して自分は言いたいことはわかるが、少しよく、主になぜに不安が主成分なのかが一体よくわからなかったが、少し考えてなるほどちょっと理解した。

「つまりあれか、あの街の人たちは主戦力二人投入しても未だこいつを倒せないことに絶大な不安を抱いているのであるな」

これが自分の考えだした結論。

「おそらく。あちらはこっちの事情を知らないですからなぁ」

もはや嘆きの入った発言。

……ふう。

「したらばどーすっべさこいつ。削るのが意味ないなら残る方法は寸止め消去しかないじゃないか」

もうやってらんないよ。

「あはははは……なにかないですか？」

「あったら言っとるさ」

どうしましょう。

なんつーか、八方塞がりな状態です。

「ですよね……全く、寄生形の魔獣なら本体叩けば済むのに、外殻全部が本体とか……」

全くだ。

そもそも周りのやつだけ消すなんて都合のいい……ん？

「……あ」

あれ、もしかしたらいけるかも。

いやでも……。

「なにかありますか！？」

……うん、あるっちゃある。

あるのだが……いやでも。

あ、ちなみに忘れられているかもだが、自分らは絶賛触手をなぎ倒しています。

警戒してか、本体は一定以上近づいてこないけど。

「あるなら教えてください！！」

うんそうだが、ねぇ。

確かに自分は閃いてしまったんだよ。

こいつを消し去ることのできるモノを思い出してしまったのさ。

彼の言葉をヒントに、思いついてしまったさ。

しまったのだが……ぶっちゃけこれは両刃で諸刃で脆刃の危険な剣。

これをやれば確かに自分はやつを葬れるだろうがね、しかしこれはやったが最後、自分はあらゆるものを失ってしまう可能性がある。

社会的立場や名誉はこの際どうでもいい。
最初っからいらんし、ぶっちゃけまだ自分がそれを持ってるとは自覚できていないから。

だが……下手したら自分はシルバちゃんから白い目で見られるかもしれない。
多分そうなったら……絶対泣く。

しかしやらなかったらどうなる？
いや、やらなくても倒せるっちゃあ倒せるだろうさ。

たぶんおそらくきっと。

……無理かも。

……そもそも、こちらもぶっちゃけ疲れてきたし。
あまり長期戦は好ましくないのだよ。

時間がかかればかかるほどこっちが不利になるっぽいしね。

……はぁ、しかたがない。

街からは結構離れてるし、見えないことを祈ろうか。

「……わかったよ。セブルさん、ちょっと下がってて」

そもそも自分、悪いことしていないんだ、むしろ良いことしてるんだ。
恥ずかしいったってなにも猥褻物陳列するわけじゃあないんだから、

後ろ指刺される謂れは少ししかない。

「下がっててって……何をするんですか？」

それにこのまま悩んでなんか被害が出たとしたら、そしたら自分は胸張ってお天道さんの下を歩けない。

そして何より彼女に笑顔でおかえりと言ってもらえない。

……なにしんみりしてんの自分。

「……いや、ちょっとね」

ちょっち自己嫌悪。

そしてこれからさらに自己嫌悪するんだろうなぁ。

「まぁ、これやると自分結構沈むと思うが……あとのフォローよろしくねセブルさん。信用してる」

自分はそう彼に言うと、そのまま地面をおもいっくそ蹴ってやけくそ気味に走り出す。

一目散に自分は走る、本体目掛けてたいした距離もないけれどもまぁ頑張って駆け抜ける。

触手をなぎ倒し引きちぎり踏み潰し、本体へ向かいまっすぐ駆け出す。

そして本体までおおよそ5メートルの所で自分は地面を蹴り、奴より高く飛び跳ねた。

顔に手をやり、もう片方の手で指名するように奴を指差すポーズを

取って。

そして、そのまま自分は声高らかに叫ぶのであった。

「光魔法“かっこいいポーズ”！！」

その叫びと同時に、自分から眩いばかりの光が飛び出し、あたり一面を照らし出した。

自分はというと……説明必要？

……光源として光の真ん中にて一護を逆手に持った右手でうねうねの本体を指差し、左手は開いて顔に添えるようにしてという、ぶっちゃければジョジョ立ちのそれである。

顔は斜め下を向き、威嚇するように指な隙間から瞳を覗かせるように睨みつけながら、一護の刃を水平に保ち格好付ける。

そんな格好で光りながら空中で静止している自分。

……まず、まんまジョジョ立ちですね。

地上にいたら重心が後ろで倒れます。

そしてポーズ的には昔どっかの瀟洒なメイドがやってたのを真似ました。

効果音はドドドドドで。

いや、ズキューンの方かな？

もうどっちでもいーや。

ま、そんな自分の心情なんかはさて置いて、自分的にはこれ以上ないくらい由々しき事態だがおいといてだ。

この光魔法“かっこいいポーズ”は、平たくいうと極めたら一撃必殺になるという見た目も威力もインパクトも精神的負担もすごい魔法なのだ。

ちなみに女の子版は“かわいいポーズ”だった気がする。

と、いうわけで、自分から発せられた謎の光に照らされたそのうねうねは、最初こそうねうねしていたがだんだんと動きが鈍くなり、最終的には光の中に掻き消えた。

やっぱり属性が闇だから、光属性には弱いのだろうね。

というか魔力の塊……黒い部分だけを消すように微調整した自分勝ち組。

まぁただ黒いところだけを魔物と勝手に認定しただけですがね？

まぁそんなわけで、闇属性くねくねは霧のように溶けて消え、巨大だったその図体もしだいにしぼんでいくのである。

あまりにあっけなくもいろいろ辛い決着だがしかたがない。

んで、くどいようだがその小さくなってく闇の塊は、だんだんだん消えてゆき、最終的には全てが無惨に霧散した。

そして同時にさっきまでそいつがいた場所の中央に、小さな小さな人影が現れた。

それは腰まである白とも銀ともつかない長い髪をした、肌の白い小さな小さな女の子。

……いや、きっとさっきまで真っ黒くてでかいの見てたからそう感じるんだろうけど。
ともかくそんな女の子が、色素の薄げな金色の目を見開いてそのままその場に前からダイレクトに倒れ込む。

ゴツンって音が生々しい。
……そして全裸なのも、様々な意味で生々しい。

とりあえず自分はなにもみていない。
シルバちゃんに殺されるから、幼女の全裸なんてみていない。

……どうしよう。
とりあえずおりるか。

そのまま自分は光を収めてゆっくりと地上に降り、そしてそのまま地面に膝をついた。

所詮オーアールゼットな形である。

「……終わった。自分の人生終わった」

もうね、死にたいよ自分。

あんな生き恥晒してしまい、もう最低な未来しか予想できない。
だって自分もあんな格好真面目にする奴なんかに近づきたくねーもん。

「大丈夫ですか!?いきなり倒れて……」

自分が先の人生絶望してると、覚醒型セブルさんがよってきた。

「……だめ、もうやだ死にたい……誰か銃を……青酸カリでもいい」

「……元気そうですな」

おい、君はなにを根拠にそんな発言を致すのか。

……まぁ肉体的には元気なんだがね？

それに考えてみたら、今このタイミングで落ち込むのもあまりよろしくないのではないか。

……あとで自分の部屋で一人で悶えてよ。

てなわけで自分は立ち上がり、一護をしまいながらセブルさんと今後どうしようか相談しましょう。

「……はぁ。とりあえず、あの子どーする？」

そう自分が指差した先には、未だ倒れてる女の子が。

きっと気絶でもしてるんだろう。

「捨て置く訳にもいきませんし、やはり保護した方がよいかと」

わぁってるよ。

問題はそっちじゃない。

「保護はいーんだがさぁ、あの子をこれからどーゆー扱いにするべきかという問題があるのだよ」

そう、この問題が一番の問題なのだ。

彼女は仮にも災害のど真ん中にいて、あのうねうねの一部として本人の意思はともかく真っ黒いのとともにこちらにやってきた。

さて、この場合もう彼女にはうねうねとの接点がなくなったといくら説明したところで、周りのみなさんが彼女を受け入れられるかどうかという問題が浮上する。

自分みたいにこの国の益になる事をしたならいざ知らず、彼女は本意か不本意かはしらんがこの街に攻めてきた、つまり害になる事をしたのである。

さらには彼女が普通とは違う絶大な力をもった存在だというからたちが悪い。

絶対彼女を国の中に置いといたら、いろいろまずいことになるよ、これは。

……いま考えれば、自分ももしかしたら一歩間違えていたら彼女みたいな立場になってたかもしれんよな。

本当、なんだかんだで神懸かった幸運だよ。

てな具合に、自分がなんか思考をだんだんと別の方向に脱線させそうになっていると、セブルさんが隣から

「彼女がここにいなかったことにして、使用人に紛れ込ませて雇えばいいのではないですか？」

そんな打開策を打ち出した。

「そうすれば彼女も路頭に迷わず、余計な迫害も受けずに生きていけると思いますが」

「……うん、自分その発想はなかった」

あ、解決した。

まぁ使用人さん方が文句垂れる可能性も否めないが、そん時はそん時だ。

「それでいこう。そうなればとりあえず、彼女を自分ちまで運ばなくては」

「なら、とりあえず我が運びましょう。途中ナルミ殿の使用人に渡すことになると思いますが」

セブルさんはそういうと、スタスタと彼女に近づき自らの上着をかけて彼女をお姫様だっこ……

「むぅ～……」

ガスッ！！

「ぶっ！！」

……自分は見てない。

君が顔を殴られる様なんかみていない。

「……笑うなら笑えばいいではないですか」

幼女をお姫様だっこったセブルさんが、帰ってすぐにそう言ってき

たのだ。

「わざわざ傷を抉らんでもいいよべ、自分は気にしてないし」

気にしてるけどね。

しかし……ぷぷぷ。

あれだ、きっと抱っこするときお尻に触ったりして殴られたんだよ、きっと。

「……他人が気にしなくても、本人はやたら気になることってありません？」

そうだね、ありすぎて困るね。

例えば君の羽根が一本へんな方向向いているとことか……えい。

「いった！羽根をむしらないでください！！」

「あははは、ごめんごめん」

多分これ、とっても腹立つ謝り方。

……ま、んなこたどーでもいーの

「と、んなこたどーでもいーや。たかたか帰るよ。……あ、上着落ちてる落ちてる」

「……どーでもいいって……誰のせいだと」

自分ですね、ごめんなさい。

反省してない反省の仕方をする自分をセブルさんはため息と共に呆れた顔で一瞥した後に彼は器用に幼女を抱いたまま屈み、落ちた上着を拾い出す。
そして隙間から幼女の際どい部分が見える。
……いや、幼女相手に変な感情はもたんよ。

ま、いいや。

とりあえずそんな感じにその場で無駄話をしつつも無事に幼女を保護した自分らはたったと戻ってシルバちゃんと……違う違う、王様たちに報告したりするべく帰るために、お城のある方向へ振り向いた。

途端に、バァンというなにやら爽快な音と同時にセブルさんが吹っ飛んだ。

「……あ？」

自分がそう無意識に口から言葉を発しながらセブルさんの方を向くと、なるほど右肩から血が流れている。
それでも幼女をしっかり抱きかかえているあたり、彼の漢が見てとれる。

「……っ！んだぁ！！」

あ、生きてた。

と、このように今になったら冷静に観察できるのだが、当時の自分

はなにやら突然すぎて頭が追いつかないまま、自分はアホみたいな口でボケっとセブルさんを眺めて数秒の間思考を停止していたのでそんな事を考える余裕もなかったりしていた。

ただまぁ、なにやら危険な匂いはプンプンしていたのでとりあえず自分は彼の傷をケアルしてみた。

すると途端に再びバァンともう一度音が響き、何かが自分の右側頭部……というかこめかみへと直撃し、立ち上がるセブルさんと入れ替わるように今度は自分が転がった。

そして同時に、なにやら迫る身の危険に対してやっとこさ自分は目が覚めてきたのである。

しかし痛いなこれ。

さすがみさえがグリグリするだけはある。

「ナルミ殿！！」

とりあえず久しぶりに働いた痛覚に感心しつつ、自分は駆け寄ろうとするセブルさんを手で制しながら立ち上がる。

「ったた……君はとりあえず最優先にその抱えてる女の子護ったってて。っと、大気固定（フィスクドエアー）っと」

そう言ってなにかがきた方向の空気を固めて壁を作ったがその直後、再び爽快な音が鳴り響いた。

だが、今回は壁に阻まれてかその飛んできたなにかも自分らに害を及ぼすこともなく、それを飛ばしてきた方向にいる人影を落ち着い

て視認することができたのである。

その人影は2つ重なるように存在し、一つは自分のよく知る人物。
そしてもう一つは自分の全く知らない人影であった。

「……っ、ナルミ殿！あれ！！」

その人影を見てセブルさんは目に見えて焦りを露わにしながら人影の知らない方をキッと睨みつけつつ自分に警戒を促した。

対して自分は

「……あ？あいつなにやってんの？」

ちょっと後々自分でも引くくらいブチギレた。

その人影はだいたい自分の２０メートルくらい先に存在しており、まず知らない方の人影はなにやら茶色っぽいマントを羽織り、それに備え付けのフードでスッポリ顔を隠したよくわからんスタイル。
そのスタイルでそいつは右腕をこちらに伸ばして青色の袖をユラユラさせている。

そしてそのそいつの黒い手袋をした右手にはなにやら長いくてこれまた茶色いマスケット銃のようなものを持ちながら、こちらに狙いを定めている。

さて……この男か女かオカマかしらんがこいつについてもう一つ描写しなければならんことがあるのだが、そいつは一番最後に回して次に良く知った顔について説明しましょう。

もう一人は少し小さめの身長で、セミロングの髪を……って、説明とかやるよか個人名出した方が早いかね。

早い話が、そこにいたもう一人は自分の嫁さんであるシルバちゃんだったりする。

ただ、誤解のないようにここに一つ明記させて貰おう。
先ほどから自分らを狙っていたのは彼女ではなくもう一人のマントの人物。

彼女には確実に罪はない。

なぜなら

「……お嬢様……なぜお嬢様があいつに捕まっている!?」

彼女はマント姿に拘束されているからである。

多少遠いが自分は見えるよ、縄に巻かれた彼女がマント野郎の左腕に首を巻かれる感じに捕まって、ついでにナイフを首筋に当てられながら小さく震えているのが。

「……動くな!!」

自分が二人を観察していると、そいつは野太い声を響かせながらこちらに一歩一歩近づいてくる。
もちろんシルバちゃんも強制的に……なんかシルバちゃんの顔に痣がある気がするのは気のせいか？

つーか声からして男か……。

……。

「少しでも動くと、こいつを殺す」

野郎はそう言って自分らのとこから約5メートルくらいかそんくらいのとこに来て足を止める。

自分はあまりに熱くなりすぎて逆に冷静になった頭で言葉を投げた。

「目的は？」

「あなたに死んで欲しいと依頼があって」

はぁ、依頼ねぇ。

あれか、じゃあさっきの黒いのとの戦いで弱った自分を狙っていた訳ね。

「……あれは、火縄銃、かね」

これは独り言。

奴の持ってる鉄砲みたいなのを見て一番可能性の互いものが無意識に口からこぼれただけ。

「……なんですかな、それは」

しかし隣のセブルさんにはしっかり聞こえていたようで、反応されてしまった。

対して自分は唇を動かさないように小声で返す。

「……鉄砲、鉄の弾を飛ばす遠距離武器さ……瀬田さんが持ってた

のかね」

火縄銃は長篠合戦で本格的に使われていた武器だからね、桶狭間で活躍した瀬田さんが持ってた可能性はあるだろう。

……今は関係ないか。

それより今はシルバちゃんの無傷奪還だ。

「さて、ハセガワ様」

自分がその奴が持っている鉄砲のようななにかについて考えながら、彼女を助ける打開策を思案していると、奴の方から声をかけてきた。それに反応して眼球だけ動かし視線を奴の顔にやると、そいつはこんなことをのたまった。

「俺ではあなたを殺せないようなので、自殺してください」

途端に奴に捕まっているシルバちゃんがゴソゴソと暴れ出したが、奴の腕に呼吸器をキュッと締められて咳き込み無力化されてしまった。

その様子を見てさらに腸（はらわた）が煮えくり返って型くずれしそうになるのをぐっとこらえ、自分は努めて極めて冷静な風を装う事にした。

……ちっ。

……どうやってこれ以上シルバちゃんを傷つけずに救出しようかね。

生憎とこちら陣営としたらセブルさんは幼女を抱えていて動けない

し、シルバちゃんは論外、幼女にしたって問題外甚だしいので、この場をどうにかできるのは自分だけとなる。

そんな中、自分が暴走したら確かにマント男は倒せるかも知れないが、人質になってるシルバちゃんにさらなる傷がつくかもしれない。

それは自分、許せないよ。

今の状況でももうすでに怒髪天を突き抜けん勢いだけどね。

まぁ彼女を人質にした時点で生きたままマミる事以上の苦しみは保証されたも同然だがね。

……ま、でもぶっちゃけ今の状態なら打開策はいくらでもある。

「ふむ……」

ひとまず自分がそう言って一護を放り投げると、奴は警戒して泣きかけているシルバちゃんにさらにナイフを近づけ、すぐに首を切れるように準備する。

……あんま意味ないけど。

なにせ自分、時間とめれるし。

「……ザ・ワールド」

なので自分は即座に時間を停止させ、余裕のよっちゃんと言わんばかりにシルバちゃんを救出してついでに鉄砲とナイフも奪い去ってもといた場所に舞い戻る。

「そして時は動き出す」

……時間とまった世界で格好つけてもだけど。

まぁそして再び時間を再生させると、あら不思議。

マント男の装備はすべて自分の手の中に。

「……！！」

その状況に一番早く気がついたのは、自分の腕の中にお姫様的だっこされいるシルバちゃんだったりする。

まぁ背中に鉄砲あたっていたいかもだが、そこは我慢な。

ともかく、時間が再生された途端に振り向いた彼女はその双眼をまさに驚愕と言わんばかりに見開いて涙腺からは締まりの悪い蛇口みたいに水滴がこぼれ出した。

……うん、男の子なら昔はみんなお姫様を助け出すシチュエーションに憧れたよね。

自分、いまそれを充分に堪能してる。

「……ちっ」

次いで状況を把握したのは目の前マント男。

普通は自分が抱えているシルバちゃんより正面にいるマント男のが反応は早くて然るべきだろうが……まぁシルバちゃんだし。

とにかくそいつはシルバちゃんの次とはいえ、一秒もなく状況を見極め、即座に踵を返して逃げ出した。

が……まぁそう簡単に逃げ出せるハズもなく。

「ぶっ！？」

奴が振り向くのに反応したセブルさんが即座に出した光の壁に、振り向いた直後顔面を強打したのである。

彼、あんな戦っといて実はＭＰ満タンだからね。
なにせ魔力を吸収しながら戦ってたんだもん。

つーか魔法使えるなら……あ、詠唱的なの必要なんね？
なら話は別だわ。

ま、今はんなことよか。

「……どうするよ、これ」

そう言いながら背中をふみり。
ちょっと危ない折れたみたいな音と気持ち悪い嘔吐を見た気がするけど気のせいだろう。

そのまま自分はにじりにじりとまるで幼稚園児がありんこを徹底的にすり潰すみたいに足を動かす。
ただ、あんな無邪気な笑顔ではなく今までの人生で一番邪気に満ちた笑ってない笑顔で見下していたがね。

さてさて……しかし今回は想定外である。

いや、想定内ではあったが想定外だ。

彼女が狙われる事、それ自体は想定内ではあったが……捕まることは想定外だった。

なんというか、彼女の周りにはあの人たちが蠢いているし、なにより彼女自身がこんなナリで強い部類に所属する人だからね。

まっさか捕獲されるとは思わんかったよ。

……そういや彼ら彼女らはどうしたんだろ？

死んどらんよな？

「……ナルミ殿」

ん？

あぁ、セブルさんいつの間に後ろにいたんね。

「なぁに？」

「いや……それ」

そう言いながら指だけで差す先には、未だ自分に踏まれ続けている惨めな誰かが。

「なぁに？どかしたん？」

あくまでにこやかに、爽やかに。

自分はセブルさんにそう言いながら、さらに強めに踏み続ける。

するとさらにバキッという乾いた音が響き渡るが……特に気にならない。

その音を聞いてセブルさんは、あちゃ～といいたげな顔でそいつを見下す。

「あまりやりすぎて殺してしまうと、依頼人の特定が……ん？」

ん？

なにかあった？

「どーかした……なに、シルバちゃんいきなり……あーも、甘えん坊なんだから」

しかし今自分にとってはセブルさんの発見より、いつのまにやら上半身と腕をめいっぱい伸ばして自分の首に腕を回し、チュッと自分の首筋やらなんやらにまるで夏場の血吸い蛭のように張り付き、なにやら血液ではなくエナジーを吸おうとしている……

「今度はなにしたいんのさシルバちゃ……んむ？」

「……」

訂正、いつの間にやら上半身と腕をめいっぱい伸ばし、ちゅっちゅっと自分の唇やらなんやらをまるで赤ちゃんがほ乳瓶にしゃぶりつくように貪りはじめ、なにやら血液ではなく……やめよ。

ともかく彼女は立派なキス魔にジョブチェンジしたのである。

しかしこの娘、無言である。

そしてそのまま自分はしばらく彼女の好きなようにさしてやった所、彼女はなにも言わずに離れてしまった。

少し……かなり残念。

……最近思う。

なにやら自分はもういろいろ毒されている。

「……」

「……満足？」

が、しかし。

卑怯な人間たる自分はそれを面にも表にも出さず、あくまで彼女が勝手にやったこと、という風に罪をなすりつけるのである。

そんな自分の問いにふるふると首を横にふり、再び自分にくっつこうとしてきたので、自分は首を捻って華麗によける。

「はいはい、続きはまたあとで」

そんな非難めいた目をされてもだめですよー。

後でやったるから我慢なさい。

ちなみによける時につい体重移動を間違えてしまったので、足元から“バキッ！！”というエクスクラメーションマークが２つは付く程の大きさのなにかが折れる音が聞こえたきがするが、まぁ自分人間だし？

人間誰しも間違いはあるんだから、しかたないよね。

「……チッ」

……あ、セブルさんがいらいらしてる。

……自分、あやまるつもりないからね。

「で、どーしたの？」

だから自分は優美なるスルースキルを発動させる。

まぁ彼のいらいらを増長させる可能性は否めないが。

こういうのを確信犯という。

「……いや、もう少しお嬢様を箱に入れて育てていればよかったなと後悔をして」

あぁ、そっち。

……まぁ考えてみたら、流れ的には“その舌打ちはどういう意味？”って質問になるわな。

自分的には、“さっきなんか気づいたみたいなんはどうしたん？”って意味だったんだがな。

「……まぁ今のお嬢様なら仕方がないかもしれませんが」

ん～？

今のお嬢様とな？

「なに？どゆこと？」

自分の純粋な汚れなき清き質問。

しかしセブルさんは苦い顔をする。

「……我に言わせますか？」

……なんね。

なんか問題あるん？

「言わせます」

自分は断言した。

すると彼は大きくため息をついて、さらに遠い目をしながら言い出した。

「……人は、自らの生命の危機、戦争とか、そういうのに直面すると、早く子孫を残そうと」

「ごめん、わかった、許してくださいお願いします」

しかし自分のそんな謝罪は受け入れられることもなく

「……つまる所が発情期ですよ」

そうどストレートに吐き捨てた。

……ごめん。

「……とりあえず、さっきなに気づいたのさ。自分気になるなぁ」

白々しさ上等。

くそっ……そんな目で見るなし！！

しかし、そんな目で見られたのもほんの数秒。
セブルさんは視線を倒れてるマント男に向けて、わかりやすく話をはじめた。

どうやら気づいたことを教えてくれるようである。

「あぁ……それですが、それ、その今ナルミ殿が踏んでいるそいつ」

彼はそう言いながら、顎でそいつをクイッと示す。
その先には、当然ながら自分が踏み続けているマント男が。

「こいつがどかした？」

自分は視線を一度マント男にやった後、変化がわからずセブルさんに答えを求めた。

「いや、あれだけバキバキ言っていたのに、血が全く流れていないんですよ」

そして再び視線を動かすと、確かにもはや背骨にあたる位置は完全粉砕な人物の周りには、なるほどこいつが吐いた真っ黒な嘔吐物しか……真っ黒？

「ちょいまち、この吐瀉物はなに」

「それもありますが……もう一つ、伝えたいことが……」

なに、まだあるん？

「……聞こう」

自分の号令に彼は一毛の戸惑いも見せず、はっきりとなんか理解し難いことをのたまった。

「そいつ、木製の人形です」

「……はい？」

怪訝とはこんな顔か、という手本のような顔を自分はしたのだと思う。

そんな顔で自分は彼の顔をガン見したが、彼は特に気にした様子もなく

「とりあえず、その頭巾をよけてみてください」

そうのたまうので、言われた通りフードを足でよけるため、今までそれを踏んでいた足をあげた所、なにかがパラパラと衣服の隙間からおちてきた。

見ると、それはとっても木片でした。

「……てい」

念のためフードも蹴っ飛ばしてみると、なるほど綺麗に彫刻されたマネキンの顔が転がった。

「……なにさ、これ」

当然の疑問。
しかしこれの答えを教えられる者はここにはおらず

「さぁ？我にはなんとも……」

セブルさんも頭を捻ってしまうのである。

しかし……なぜにここに木偶があるのか。
考えられるのは……マーガトロイド嬢やしろがねの姉御みたいな人形繰りの達人がいるとかしか自分、思い浮かばないな。

「セブルさんや、この世には人形繰りなぞゆーもんがあったりしますかな？」

とりあえずの素直な質問。

「大道芸で上から紐で操るのをそれと言えるならば……人間なら知りませんが、我の知る限りはありませんな」

なる程マリオネット的なのか。
考えてみたら、糸らしきものも見当たらんしね。

しかしそうなると、こいつは一体なんぞや。

自分はそう頭を捻っていると、セブルさんはため息混じりに一つの提案を持ち出した。

「……とりあえず、これも持ち帰って詳しく調べてみたらいいのでは」

三理くらいある。

「……だね。仕方がない、なにか釈然としないが、一旦引き上げるか」

そして自分のこの号令を合図に、自分はシルバちゃんを、セブルさんは幼女を抱え、長時間労働に疲れた身体に鞭を打ちつつ、お家に帰る事にした。

さて……終わり良ければ全てよし、と昔の人はいいました。
今回のこの事件には、様々な問題が未だにクマムシのような生命力で蠢いており、とともではないが終わりが良いとは言い難い。

例えば、この木偶人形はなんなのか、黒いのに取り込まれていた女の子は誰なのか、などなどなど、不完全燃焼や消化不良と称して差し支えないような、まるで喉に魚の骨が引っかかったままみたいな疑問を残す、いろいろな疑惑の多い事件である。

と、前置きをしてはいるが、実は自分、この事件の疑問問題は大して重要視していなかったりする。

いや、確かにまたいつ狙われるかっていうのもあれけどもね。
でも自分はそれよりずっと、ず～っと重要なことを今回の出来事で思い知る事になったのだ。

それは自分の驕り、平たく言うと意識の低さと危機感の薄さ。

確かにこの世界において、自分はとっても強いだろうさ。
それこそ江戸の街に黒船通り越して原子力空母がやってきたかのようなものなのだ。

が、しかし、それはあくまで自分の話。

自分は確かに原子力空母かもしれないが、残念ながら自分がその戦力を挙げて護らなきゃいけないのはやっと帆がついた程度のちっちゃなちっちゃな木製ボート。

すぐに沈んでしまうそのボートを自分は全力で護らなくてはならないのに、今までの敵は彼女ではなく自分に攻撃をし、自分はそれを難も苦もなく撃沈してきた。
だから錯覚したのだろう、敵が彼女を狙わないと。

そしてそれが自分の驕り。

結果ボートは乗っ取られ、自らの護るべき者を危険な所に立たせてしまった。

あまりに愚かであまりに浅はか。
二度とあってはならない最低な出来事。

だから自分はこの時、固く心に誓ったのである。

もう二度と、大事な人を決して傷つけない、と。

「……シルバちゃん」

少し震えた声で腕の中にいる彼女を呼ぶと、彼女はすぐに顔をあげ、こちらの視線に目を合わせた。

「……？」

先ほどの以心伝心がよほど気に入ったのか、未だに一言も声を発せずに目をクリクリさせて自分の言葉に応えるシルバちゃんは、なにか自分の目に補正がかかっているのかいつもの5割増しくらいにかわいく見えた。

そんな彼女に微笑みながら、自分は優しく謝罪の皮を被った誓いを立てる。

「……怖い思いさせて、ごめんね……これからは、なにがあっても自分が君を護るから……なにがあっても、誰が相手でも」

目頭が熱くなって、喉も震えてこれ以上なにも言えなかったけど、彼女には充分通じたようで、ただただ真っ直ぐ、少し笑いながら自分を見つめてきてくれた。

「……」

責めるでも蔑むでも、許すとか許さないとかでもなく、彼女はひたすら純粋に、自分の瞳に語りかけてくるのである。

“私なら大丈夫です”と。

そんな彼女のきれいな瞳に、自分の心は幾ばくか救われたような気がした。

だからだろうか、自分はついつい、彼女を強く抱きしめていた。

お姫様だっこの状態からだったから、体制は少々難しいが、それでも自分は彼女を抱きしめた。

そして何分か、もしかしたら数秒かもしれないがそれくらいして、自分は再び先ほどと同じ体制に戻っていた。

そして再びかち合う視線の奥で、自分は彼女の瞳を見てると唐突にあることを思い出した。

「……そういや、結婚式まだだったよね……帰ったら挙げるか？」

自分のそのいきなりな発言に、彼女はにっこりと微笑みながらただ一回こくりと首を縦に動かしてくれたのである。

こうして、自分の座右の銘が“果報は寝て待て”から“油断大敵”に変わる程にめまぐるしく変化した今日の戦いは一応は幕を閉じたのである。

……ただ一人、セブルさんだけを取り残して。

「……お二人とも、我の存在を忘れて二人の世界に……はやく戻ってきてください」

そんな彼の心の叫びは、ただただ風に消えて自分らの耳には届かないのであった。

あ、あと邪魔したらシルバちゃんが怒るかもだからって声を小さくして主張していたのも原因かね。

……とりあえず、かわいそうなセブルさん。

……さて、ここまで言っておいて、実はもう一つ、ここにきて発生した問題があったりする。

そしてそれは残念ながら先延ばしにしてどうのっていうようなことができない問題らしいのだ。

すなわち、可及的速やかに比較的迅速に対処しなくてはならない問題。

それはいったいなんなのか。

答えは簡単、単純明快。

「……後で回収じゃダメなの？」

「我らがいなくなった後に誰かが回収しに来るかもしれませからな」

自分ら二人が見下す先で転がってるお人形さんの回収だよ。

でも、それならばさっさと回収すれば良いんでね？とか思うだろう。

しかしそうは問屋が卸さない。

というか、卸してくれたら問題になんかなりゃしない。

こいつを運べないのにも、それなりに理由があるのである。

「つってもさ、自分ら二人して手が塞がっとるんよ？」

そういうことさ。

具体的には、自分はシルバちゃん、彼は幼女を抱き上げているので両手がいっぱいいっぱいです。

「ですよね……」

その事に対しての自分の発言に対し、彼はため息混じりにそう言った。

「……どうすんべ？」

本気で困惑、そんな気分。

もう自分は帰って風呂入って布団に埋葬されたい気分なので、なんというか、投げやりな感じの感情も滲み出ている。

さて、ここで突然だが、世の中には“しわ寄せ”というものがある。どこかで誰かが裕福な暮らしをしていたら、地球の裏では貧しい家庭がある、極論かつ色んなとこから攻撃されそうな例えだがそんな感じなものが。

つまり誰かが幸せになる裏で、おおよそにして誰かが不幸になる。大会で誰かが優勝したら他の誰かが敗退してる、色んなとこから攻撃されなさそうな例えでいうとそんな感じ。

平たく言うと貧乏くじさ。

そして世の中とは理不尽なもので、その貧乏くじを引くような人はなぜか不思議と同じような人となるようにできているのである。

そして自分の手の中に、その貧乏くじを引く星のもとに産まれた人物をじっとじいっと凝視する少女がおりましたとさ。

「……な、なんですかお嬢様」

彼女の視線の先にいるのは、自分に殴られ剣が埋まって謎の存在に追いかけまわさ、最終的には鉄砲で撃たれた挙げ句に大事に育ててきたお嬢様にその怪我についてなど見向きもされず、存在しないかのように振る舞われたセブルさんである。

そんなかわいそうな彼に彼女はただひたすら無言でじぃ～っと視線を交差させ、無言の圧力をかけているのだった。

しばしの沈黙。

後、先に目をそらしたのは攻撃をされていたセブルさん。

そして沈黙を破ったのもセブルさんであった。

「……我が、持ちましょう」

そしてそのシルバちゃんの幸せのしわ寄せとして、セブルさんは見事、貧乏くじを引き当てたのであった。

……本格的に、かわいそうなセブルさん。

ちなみに、そのまましばらく歩いてから自分が念力つかって運べばいいと気が付いて、セブルさんにもっと早く気づけと怒られたのはまた別のお話し。

４９回目＊一難去らずにもう一難（後書き）

・元ネタ

かっこいいポーズ・グルグルした魔法陣のあれ
ピクス・３Ｄになったピンク玉の二面ボス
大気固定・どっかの超能力部に乗り込んできたチキ姉さんの
マミる・首がとれること
ざ・世界・どっかのおＤＩＯさんのあれ

こんにちは、みんなの心のシャルロッテ、南師だよ

今回は色々なことが色々だったね

でも、言わしてもらっていいかな

やっぱり一回はヒロインに攫われてもらうのは常識だと思う

……はい、まぁそうです

ヒロイン攫わしたくてこの後半ができあがりました

そしたらナルミ君が静かに怒りました

そして勝手にくさくなりました

……いや、この今回のナルミ君程キャラクターが一人歩きした経験はないってくらいこいつ暴走しましたからね

ま、次回には大変な目にあうのですが

それはともかく、今回の超展開、ぶっちゃけリピーターが半分いなくなるのくらいは覚悟してます
それくらいにひどいのは自分でわかりますが……

まぁ書いちゃったものはしかたがない、としてここで投下します
でもさすがにこれだけならアレなので、もひとつ作って同時に投下です

ま、今回はこんな感じです

では、そろそろくどいと言われそうなのでこれは一旦やめます

まぁすぐ次回にあとがきがあるのですが

では皆さん、次回もまたみてくれるよな！！

ではでは、南師でしたー

５０回目＊後悔なんてない訳ない（前書き）

みっつめの更新だよ
もふたつ前からみると都合がいいよ
もはやなにがやりたいのか途中でわからんくなったよ
それでもいいなら先まで読むといいよ
でも警告したから怒らない方がいいよ

50回目＊後悔なんてない訳ない

あのよくわからないままに終わったよくわからない乱闘から早いものでもう1日が経つ。

つまりそれはあれが昨日の話だったって事だが。

この国的にはそろそろ夏が近づいているらしく、爽やかな換気を促すために開け放たれた窓の外には雄大な積乱雲がフワフワとその巨体を風に任せて前進している。

ここは自分の仕事部屋、とか言われているが、まぁ今の自分の仕事とはなんぞやね、ここに来る意味あるんかね、と自分は誰かに聞きたいくらいに仕事がない。

なんせ昨日のあれのおかげで仕事がかなり削減されたからね。

もう今日ここ来んでもよかったんでね、ってくらいに事業仕分けされたからね。

何でも、今日は休んで明日今日の分もやれってさ。

はは、残酷だよね。

ちなみに昨日はあの後、途中気絶させられていた使用人さん方……まぁ一人ガチで死にかけな人もいたが、彼らを治療、回収してお城に戻り、色々報告を済ました後にお家に直行。

健全な意味でお持ち帰りした幼女をとりあえず使用人さんに預けた後に、そのまま自分は寝ようとベッドに潜り込んだのだが……いや

ぁ、なんというか、本能とはすごかった。

ちなみにあのお人形さんはセブルさんにそのまま預けちゃいました。
調べてくれるゆーから任せました。

彼はそん時、こーゆー特殊な魔法やらはあまり他人にバレんよーにこっそりひっそり調べなきゃいけないとか言ってた。

国内でもそういうのを気をつけながら生きていかないといけない、ってついでにお説教も食らって泣きたくなった。

ざっくり昨日の説明をするなら、こんな感じかね。
端折りに端折って端折りすぎな気もするが、鍋に入れる白菜くらいにぶつ切りで説明したから仕方がない。

細かい説明は面倒だし。

で、今現在だがシルバちゃんは今頃念のため色々検査をされていたりして、この場どころかお城にすらいなかったりする。
きっと今では家でメイドさん方に色々調べられているのだろう。

かわりに、この部屋には自分の他に一人、セブルさんが真面目な顔して目の前におらしている。
傍らに昨日自分を襲ってきたお人形とその武器たる鉄砲みたいななんかを引っさげ……まぁ、布みたいのでグルグル巻かれとるから知らない人なら謎の荷物にしか見えないだろうが。

とにかく、彼は自分に報告しにきたのである。

この木偶についての調査の結果を報告するため、の所にわざわざ重

いものを引っさげて。

……の、はずだと自分は聞いていたのだが。

「で、ナルミ殿。お嬢様との式はいつのつもりでいるのですかな？」

彼はもしかしたら別の目的、主に自分の精神を徹底的にデストロイするためにやってきたのではないのだろうか？

「……あうぅ」

そんな彼の真面目でまっすぐで迷いない質問に対して、自分はただただ顔を赤くして叫びにならない悲鳴をあげながら混乱するしかないのである。

いくらあんな事があったからとして、あの時の自分はどうかしていた。

まさか平気であんな事を言うとは、気が狂っとるとしか言いようがない。

考えてみたらあの時はあれ以外でも恥ずかしいことを言ったりしたり……あぁそうだ、一番あれだったのは、黒い塊を倒した時のあれが一番だめだった。

そうだあそこからあの日自分は壊れてきたのか。

だからあの後お家でもずっとシルバちゃんの耳元であんな事やこんな事を囁きながらそんな事やどんな事をやってしまったんだ。

ようしならば過去に行ってあの時のあの自分をどうにかして正気に戻してやるとしよう。

待っていろよあの時の自分、大石良雄含む総勢４７名の赤穂浪士らに追われて攻められてとうとう討ち取られる寸前まで追い詰められた吉良義央の気持ちを味長続きガムの如くたんと味合わせてやる。

「……ナルミ殿？」

そう混乱した頭で恥ずかしさを少しでも和らげるために、代名詞を多用しながら思考を巡らせている自分に、セブルさんが不思議そうな顔をして呼びかけてきた。

「……なにかな？」

極めて冷静に、この焦りを悟られないように徹底的に徹底して返事をしたつもり……なのだが、自分でもわかるくらい声が上擦った。

そんな自分を心配して、心優しき彼は自分にこんな思い遣り溢れる言葉をくださった。

「……大丈夫ですか？昨日言ってたかっこいいぽーずの後遺症がでてたりするんですか？」

その後さらに彼は“辛いなら休んだ方が”と言ったそうなのだが、彼のその言葉を聞く直前に自分は意識をどこかに飛ばした。

ひぃばあちゃん、自分は今からそっちにいくよ。
今の自分ならばあちゃんの三味線技術を１から１０まで全て全て余さず吸収できる気がするよ。

さぁ、レッツ三途リバー。

「ナルミ殿？おーい」

「うるさいよ、旅立たせてくれよ」

さぁ、いざ楽しい船旅をと意識だけを飛ばしていた所でセブルさんに連れ戻された。

そのままご先祖様に挨拶をしてこようと意気込んでいた自分は、そんなセブルさんに極めて理不尽な文句を垂れた。

……うん、逆ギレ甚だしいね。

「旅立ち？どこに？」

そしてどこまでもまっすぐで真面目なセブルさんは、自分の言葉をそのまんま受け取り理解不能という顔をしながら、主に“どこに旅立つの？”と言いたげな顔でオウム返しに近い疑問の言葉をこちらに向けてきた。

「……いや、気にしないで」

そしてその顔を見た自分は、なにか唐突に真冬のオホーツク海にダイブしたかのように熱が取れ、今までの焦りはどこへやら、急激に冷静さを取り戻したのである。

「……まぁ、なら深くは聞きません」

さすがセブルさん、話がわかる。

うん、さすができる男セブル。
自分の気持ちをよくわか

「で、式はいつに？形式は？どのような衣装で？」

……帰れ。

「……お願いだからそれはまた今度ね、うん。いまはそっちのお話ししようや」

泣きたい気持ちを抑えつつ、自分はそうたっぷりの沈黙の後にやっとこさ言葉をひりだしたのだった。

……こらそこ、えーって言いたげな顔しない。

「えー」

えーって言わない。

「お嬢様の晴れ姿ですよ？なによりも優先すべきです。主にお嬢様の衣装については」

んなわけあるか。

自分はため息をつきながら、もう完全に投げやりにこたえていく。

「いーじゃん、白無垢で。はたまた真っ白いウェディングドレスで」

「それはないです」

あら。
なんかばっさり叩ききられた。
自分が少し面を食らっているのをしり目に、彼は一人興奮気味に話し続ける。
「やはりお嬢様は紅を中心にナルミ殿に合わせて黒を散りばめた服が一番です。髪飾りも黒いものを使って派手になりすぎず、だからといって地味にならない程度のものを仕入れます。なのに白なんてもってのほか！なにが悲しくて白い服なんかを使わなきゃならないんですか！有り得ないですよ！！」
……うん、そうか。
ここは文化の違いかね。
そう頭の片隅で思いながら、生暖かいものを見る目でいまだに話し続ける彼を眺めていると、その視界の隅になにやら一人のメイドさんが降ってくるのが目に入った。
「異議あり」
そして彼女はセブルさんに突きつけるように指を向け、声高らかにそう宣言した。
なんか赤字ででっかい吹き出しが出てきそうだが、そこは偶然の一致だろう。
「奥様が着る礼服は黒いものが一番です。髪飾りが黒は同意しますが、やはり黒い礼服に紅い首飾り以外はないと思います。同じく旦那様も黒い服を着て貰うのが最良の選択です」

……なんか、それ葬式みたい。

そう思いながら自分が少し小さめの身長をしたメイドさんを眺めていると、セブルさんは息を荒げて反論する。

「ナルミ殿が黒い服というのはもはや決まりきった事ですが、お嬢様はやはり紅だと我は思いますな。少し暗めの紅い礼服こそがお嬢様の一番映える色なのです！！」

そうか、自分の葬式スタイルは確定なのか。

当事者なのに蚊帳の外、というのは今に始まった訳ではないのでもはやどうでもいいとです。

慣れました、人間とは慣れる生き物ですので。

そう自分は自らに対してかは知らんが言い訳めいた事を考えながら、ぎゃーつく言い合いをしている彼らをいないことにして、椅子ごとクルリと身体を後ろにむけてぼんやりと窓の外を眺めつつ、なにやら口寂しいので電子タバコをふかふかと吹かすことにした。

……そういやぁ、あの幼女は今頃どうしてんだべか？

いや、きっと家のメイドさん方は彼女を優しく治療なりなんなりをしてくれているのだろうし、もしかしたらまだ寝ているかもしれないが、はてはて彼女自身は起きたらいったいどうなんじゃろな。

まず記憶がないならないでそれはそれでやりやすい。

が、下手に記憶があったなら、そいつはとっても面倒くさい事になるだろうな。

仮に記憶があったとしても、彼女にとって今回が初犯……というのもあれだが、もし初めての体験なら事前に犠牲者もなく食い止められたからまぁダメージは浅いだろう。

しかし問題は彼女は今回が始めてではなく、もう何度も今回のような事を経験済み、昨日のような未遂ではなく、完遂したという意味での経験を何回も重ねていた場合が一番危ないと自分は思う。

まずあれを完遂した、ということは正確には違うが彼女は街単位で人を殺害、もしくは外傷を負わせたという事と等号で結ばれるという事だ。

となると、彼女自身はこれからはかなりの自責の念に捕らわれる可能性が高い。

いくら彼女自身が悪かった訳とは違うゆーても、まぁ人間……人はそう簡単に割り切れるようはできていない。

自分的には、出来うる限りの時間を与えて彼女自身が納得できる答えを見つけるだけの手助けはしてやることもやぶさかではないが……。

……一番最悪なのは、時間をかけた結果壊れてしまった場合よなぁ。彼女自身、昨日の時点で他人を心配する優しさとかマトモな思考があっただけ、これが一番怖いのよな。

そうなったらもう社会復帰は諦める……本格的なお医者さんならなんとかできるかもだが、自分はそんな人間じゃあないのでもう社会復帰は不可能と考えるしかないかもしれない。

まぁ壊れる方向性にもよるが……いったいどーしたらいいのやら。

なるべく彼女にはダメージも少なく新たな人生を送って欲しいものだがね。

まぁ触手の体内にいたという時点で乙女としたらダメージだろうが、それはまぁ置いといてだ。

はてはて……そもそもどのように彼女を扱えばいいのやら。

……。

……。

……やめた。

なんか、ネガティブな方向へ気持ちがマッハだからこのことは後にしよ。

まぁ今後の彼女については、彼女と会ってからじっくりゆっくり話し合いましょう。

そういや話がとっても変わるが、昨夜のシルバちゃんはやたらと我慢強かった。

いつも彼女はなぜかはしらんが声を出さないように口をおさえたりと色々必死になって頑張りつつも、それでも最終的になにかかしらの声のような悲鳴のようなそんなものがはみ出してくる……というか自分がひねり出させるのに、昨日は一度も……って、なんでいきなりこんなあれな話になってんだ？

あれだな、原因は“話し合い”という単語からのマジカルバナナだな。

はぁ、やだやだ。

なにか激しく自己嫌悪。

と、自らの思考によりとっても悲しくなっていると、急に後ろから

「……で、ナルミ殿はいったいどれがいいのですかな!?」

そんな呼びかけが聞こえてきた。

「はえ!?」

それに対して、なんとも間抜けかつお前萌え路線狙ってんの?と言われかねない奇妙な鳴き声を上げながら、自分は跳ねるように後ろを向いた。

そこには、なにやら半ギレのセブルさんとメイドさんが。

……怖いよぉ。

「だから!ナルミ殿にとってお嬢様はどの姿が一番魅力的かと先程から聞いています!!」

そんな怒らないでよ。

怖いし、そもそも話しかけられたタイミングから結構テンパってるんだから。

えっと……魅力的なのでしょ?

あれだ、さっきからの会話の流れ……自分が諦めるまでの流れからしたら、自分の趣味とかではなく彼女のウェディングドレスをどうするかだべな。

うーん……。

「……とりあえず、彼女がいる所で彼女も交えて決めたらいいんでは？」

うん、模範的な回答だと思う。

「……最終的にそれならお嬢様は、“ナルミさんはどんなのがいいですか？”って聞いてきて、最後はナルミ殿が決める事になりますぞ」

……おぇ。

「……声真似気持ち悪っ。君正気？」

「……正気ですよ」

だとしたらなお危ない。

……つーかさぁ。

「んなことよか、たったと説明終わらしてくんね？もう疲れた」

自分がそう言いながらさらに深く背もたれに体重を乗せると、彼らはいかにも不満げな顔をして

「そんな事って、奥様の事なんですよ？」

「そうですよ。一生に一度の事なんですよ？」

そうブーブーと文句を垂れ……なんか流れがさっきと同じだ。

「い、い、か、ら！彼女の服くらい自分が決めるから！！」

なので流れを断ち切るために自分はそう叫んで、その話を強制的にぶっちした。

……まぁ少し恥ずかしい……ごめんなさい嘘です。かなり恥ずかしいです。

こら、お前らそんな顔しない！！

「……なら、仕方ないですな」

「えぇ、仕方ないですね」

くそっ！

こいつらなんでそんな笑顔なんだよこんちくしょー！！

「……で、どーなんセブルさん」

半ば睨みつけながら、自分はそう彼に迫る。

するとどうだ、彼はなにか鼻で笑うように面白そうな顔を……てめこら。

「若い頃の恥はかき捨てるものですよ」

……。

だぁまれジジ青年。

「君は最近自分をやたらバカにしてるね」

「めっそうもない」

あるわい。

「バカにしてるというよりは、今更ながらお嬢様がナルミ殿の所に嫁ぐという事に対する醜いあてつけですな。ご気分を害したなら、申し訳ございません」

……いや、うん。

こちらこそ、昨日ほったらかして押し付けで申し訳ございません。

と、なにやらカウンター気味に申し訳なさがこみ上げてきた自分をしりめに、彼は布にくるまれたお人形その他諸々を机に……全てはむりっぽいので、鉄砲と頭とかの人形の諸々の部品の一部を机にぶちまけた。

まぁどれも本格的にバラけてるってより、大ざっぱに腕やら脚やら頭やらで分けられている感じだがね。

「では、今回夜なべで調べた結果を報告いたします」

……ごめん。

ちなみに先程のメイドさんはいつの間にやらどっかに消えた。

本当に忍んでるよな、彼女ら。

そう頭の片隅で考えながらも、大事な話なので脳みそを真面目モードに切り替えて話を聞く。

「結果から言うと、これは少なくとも魔法、魔術の類は全く使われてはいないということしかわかりませんでした」

……はい？

「なに？魔法で動いてたんでねーの？」

「いえ、そう思っていたのですが、残念ながらこれには魔法に必要な要素が全くありませんでした」

魔法でない……となると、このお人形はいったいなんぞやな。

あれか、もしかしてうちのメイドさん方みたいな忍なことをやるやつが、身替わりの術として使っていたのかな？

そうやって自分がない頭を雑巾のごとく振り絞って考えていると、彼は少し困ったような顔をしながら

「しかし、かわりに奇妙なものがありまして」

そう言って人形の頭を右手でほいっと持ち上げた。

そしてその人形の後頭部の部分を左指でさしながら

「このように、部品ひとつひとつに見たことのない文字が刻まれているのです。全く魔力は感じないのですが……」

そこまでセブルさんが言った所で、自分は彼からその頭を強奪した。

そしてまじまじとその文字を凝視する。

……肝心のその文字は読めない、が。

「……セブルさん」

これってあれでないか？

「はい？」

自分の予想が正しければ

「他の文字、見して。もしかしたらこれ、日本語かもしれん」

これは、もしかしたら昔に使われていた、よくある筆記体みたいなあの日本語かもしれん。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊τ☆

で、それから自分はセブルさんの持ってきた歯車やらなんやらのお人形さんの部品を全て手に取り、それに刻まれた……というか、なんか特殊なインクで書かれた文字やらを見してもらいましたとさ。

というか彼はそれを自分に見せるためにこうやって原型留めたままここに持ってきたんだと。

ま、少し歯車が外れたりとバラけはあるがね。

が、そんなセブルさんの気遣いも虚しく。

「……どうですかな？」

「……むり」

書いてる字が読めないのである。

どう足掻いても読めないのである。

常に英語をブロック体で書いてる人間が筆記体で書かれた単語を読めない以上に読めないのだ。

しかたないよね。

だが、自分自身がこれは日本語やもしれん、と豪語したからには、この文字を読めないというのは示しがつかない訳である。

なのでほら

「むぅ……本当に日本語ですか？」

疑いの眼差しがひしひしと。

「だと思うよ？でも旧字、つまり昔使われてた文字の類だからなぁ……」

いかにも困った、という雰囲気を醸し出しつつ本気で困りながら言い訳をする。

理系に進んだ自分には、そんな旧字体解読なんていう文系なスキルは持ち合わせておりません。

……まぁ昨今の文系に進路を進めた学生でもこの年ならばそんなスキルは普通習わないのだがね。

ね、だからホンヤクコンニャク～とか使いたい所だが、生憎こんにゃく芋にあたるものがこの大陸には存在しない野菜なんだってね。

軽く絶望だよね。

そう思い自分はしかたないから別のを考えるか、とため息をつきながら目の前にある左手首を持ち上げ、その書かれた文字をまじまじと凝視する。

特になんも考えないで。

「……こんな旧字体なんぞしらんよ」

したらばなんか勝手に口からそんな言葉が漏れ出した。

「ちなみにお嬢様はこの大陸近辺で使われていた古代語ならば粗方は読めますぞ」

そしてセブルさんが自慢げに反応した。

そうか、凄いね……ん？

お嬢様？

セブルさんでなく？

「なに、シルバちゃんそんな特技あったの？」

「はい。幼い頃からお嬢様は熱心に古代語の勉強をしていました」

……意外だ。

あの自分の中で準ドジッ娘にされている彼女が……。

しかも残念ながらおバカ認定されています。

ポジション的には頭のいいおバカだが……あれよ、数学３９点が尾を引いている。

生きる上には頭はまわるが勉強が出来ないタイプのバカという認識。

だからどちらかっていうと暗記モノというか頑張らないと覚えられないような語学に準ずる特技があるのは、自分的には意外なのだ。

歴史オタの彼女の兄貴ならば不思議は無いのだがね。

「はぁ……あのシルバちゃんがねぇ……古代語になにか彼女の琴線に触れる要素でもあったのかね」

だから自分は本気の感嘆を込めてそうほとんど無自覚に言葉を口から吐き出したのだ。

するとどうだ、セブルさんは真顔でぬけぬけと

「いえ、ただゼノア様があまりに可愛げがなく手が掛からないので、暇つぶしにまだ言葉もつたなくて現代言語も書けないお嬢様に教えてみた所、現代言語よりも早く覚えてしまっただけです」

そう抜かしはじめた。

そしてさらになにか恍惚としたような顔で聞いてもいない話を続けてくる。

「ゼノア様は本当に手のかからないお方で、気が付いたら勝手に勉強、自主的に稽古をやっていて我の教えていないような事までまるで砂漠に水を垂らすかの如く吸収して……それに対してお嬢様は同じ事を2日3日かけて教えなくては覚える兆しも見せず……まぁ古代言語は幼すぎたのもあって現代言語と同じようにそれと並行して覚えましたが、とにかくお嬢様は真面目に勉強しても空回り。本当に手の掛かる育てがいのあるお方でした。お嬢様はあれです、あれ、座学よりも身体を動かす方が性に合ってるようでして、奥様に毎日怒られながら魔法の基礎を理論から叩き込まれていた時は毎日涙目になりながらも覚えられずにいたのに対して、魔法を実際に使わせてみたらすんなりと扱えるようになるくらいでして。多分お嬢様はその時魔法について頭でどうしたらいいかと考えるより先に身体が感覚で魔法を使っていたという感じですな。いやはや、お嬢様は本当にどこまで行ってもお嬢様ですよ。だから我はそんなお嬢様をお嬢様のまま育ててきたのです」

そうか……考えてみたらこいつが諸悪の根源だもんな。

シルバちゃんも被害者だもんな。

そしてそれは君、シルバちゃんをバカにしてんのか？
なんかそれならこの前の数学３９点も奇跡に……つーか物理で点を稼いだ事が奇跡だぞ？

……とりあえず。

「……仕事に私情を持ち込むなし」

「でも、お嬢様に何かしら損害がある訳でもないでしょう？」

……だけどもね？
確かに彼女にデメリットはないが……いーやもう、めんどくさい。
つーか考えてみたら旧字体読めた所で骨董品を誰が作ったかわかるとかしか用途ないじゃん。

「……うん、もう好きに生きて」

……自分はもうどうしようかこいつと頭で考えながらこう言ったが、考えると好きに生きた結果がこいつなんだよな。
……世も末だな。

「……それにナルミ殿も、お嬢様、つまりナルミ殿の奥様が古代言語を扱えると胸を張って言えるではないですか」

「そーですねー」

もはや諦め９割、呆れ１割のため息がついつい口から漏れてしまうのを寸ででとめ、止めたことを後悔しながら返事をした。

そして返事をして約5秒、自分の中で再びマジカルバナナが完成した。

「……あ、ニュータイプキング・ソロモンズ・リングがあった」

主に奥様から結婚からあの時の自分滅びよからの指輪で行き着いた答えです。

「……なんですか？それ」

いきなりな自分のつぶやきに対して、不思議そうな顔をしつつセブルは聞いてきた。

そんな彼に少しテンションが下がりながら、自分はこのどん詰まりに対する打開策を打ち明けるのである。

ちなみにテンションが低いのはマジカルバナナの途中に答えがある。

「ん、いや昔の王様がつかってた、動物の言葉がわかる指輪、まぁソロモン王の指輪だからソロモンの指輪ゆーんだがね？それをもとに“ノームの知恵（グノーシス）”がつくったのがそれの改訂版でいつの時代いかなる言葉も自由自在に操れるというのが新ソロモン（ニュータイプキング・ソロモンズ・リング）の指輪なのよ」

ま、指輪が赤く光ったら過去の世界に指輪が青く光るまで強制転移、しかも自分じゃ調整できんというデメリットがあるのだがね。

そう思いながら自分はポケットからいつもの……あり、ない。

自分の思い描いている指輪がないぞ。

自分は少し焦りながら、ポケットの中にあるはずの指輪を、学祭につかった赤い指輪を必死こいて探すのであった。

無言で自分を見つめるセブルさんに気づかずに。

「……」

おかしいな、いつもならすぐみつかるのに、と自分はなぜポケットからでてこないかをかなり焦りながら考える。

なぜない。

いつもならポケットに放り込んでそのままなはずだ。

落とすなんてこともない。

そうしばらく考えていると、自分はある一つの事柄を思い出したのだ。

……そっか、シルバちゃんにプレゼントしたまんまだったね、全能の真球。

すーっかり忘れてましたよ。

……まぁ、あげたんだから返してなんて言いませんよ。

しかし……したらばどうしましょう。

「……ナルミ殿は」

自分が再びなにやらどうしよーか考えていると、セブルさんがなに

やら真面目な声で話しかけてきた。

「ん？なに？」

対して自分はその真面目さ加減に気が付かず、軽ーくいつもどーりの返事をした。

同時に、しかたがないから指輪を新たにつくるかなーと考えながら、ポケットをまさぐっていると指輪と言うのもアレな感じの駄菓子屋で売ってるような黄色いプラスチックでできた指輪のようなものが出てきた。

それは上にプラスチックでできた安い花がついており、指輪部分はこう下が切れていてどんな指にもはまるように工夫がなされた１００円以下の指輪である。

なぜここにあるかは謎だが。

とりあえず、いつか机の中を一度ひっくり返そうか。

あと、あまり具体的にイメージしすぎるとそれ以外のニアピンなものが出てこないことを今身をもって知った。

……でだ、指輪を見つけて少し心が楽になった自分に対して、セブルさんはやはり真面目に厳かにこう質問するのである。

「どこかの国の王子、だったりしますかな？」

「……はぃ？」

なにをこいつは言っている。

「なぜそうなる」

「そろもん王が持っていたとされる動物と会話ができる指輪、それの改訂版をナルミ殿がさも持ってるのが当然のように先程から言っているので」

……あうち。

「違います！これは自分がつくったんです！！」

自分は全力で否定した。

「……つまり王族に献上する指輪をナルミ殿が作っている……ノームの知恵（グノーシス）とは、ナルミ殿自身のことなのですか？」

しかしドツボに嵌ってしまった。

「……いや……作り方、知ってるだけだから、うん」

もはや下手な言い訳はせぬ。

これは嘘をつきすぎると帰れなくなるパターンだからな。

そしてなんだかんだでセブルさんは頭がいいお方なので、空気を読んで話を切り上げてくれるのだ。

「……まぁ、話せないのなら無理強いはしません」

誤解しながらね。

ま、もう諦めたよ。

「……でも、一ついいですか？」

もはや色々人生を諦めた自分に、セブルさんは先程とは打って変わって控えめに質問してきた。

「なに？」

「……ナルミ殿の国には、人間だけでなく小人種（ノーム）も住んでいるのですか？」

……そういや考えてなかったよ。

この世界にノームがいる可能性。

「……こっちでノームとは土の民という意味です」

だが自分はそんな自らのミスすらもめんどくさくなって、投げやりに適当な嘘をセブルさんにつくのである。

「……なら、ナルミ殿は」

するとこうなるわな。

うん、学習した。

「言う義理はありません」

だから少し……かなりアレな言い方だが、自分はバッサリと話をぶ

ったぎったのである。

だって、疲れたんだモン。

「……そう、ですか」

でもこう小さくなられると罪悪感がふつふつと芽生えてくるんだよね。

ま、今は気にしないどこ。

「それよりも、まずは気を取り直してこの木偶の坊の解析から始めましょーや」

自分はなにかこの底無し沼に沈むような気持ちを振り払うように、比較的明るくそう号令をかけたのである。

「はい、そうですね」

それに反応して、セブルさんもいつもの調子で返事をする。

と、同時に、彼は机の上に紙の束とインクを取り出した。

どうやら彼は自分が解読したのを書記る積もりのようだ。

「では、書かれている内容を読み上げてください。我がそれを記していきます」

「うぃ。じゃあ頭から順々にいきますか」

こうして、自分とセブルさんは二人揃って真面目にお仕事を開始し

たのである。

自分が読み上げ、セブルさんが記すだけという簡単なお仕事は、こうしてカカッと始まったのである。

しかしこのお仕事、実際終わったのがはじめてからさらに4時間経ってからだというからびっくりなのだ。

なぜかって？

それには二つ理由がある。

一つは歯車からネジからいっこいっこ全てに文字が記されていたこと。

そしてもう一つは……

「……ねぇ、これ必要あんの？」

「あります。こうしなければ意味がないじゃないですか」

「いや、だからって……こんな細かな人形の部品の大きさまで計っ

て記すなんて……ないわー」

このお人形の細部まで完璧なスケッチをするハメになったからですよ。

ターヘル・アナトミアを制作した時のクルムスも真っ青なくらいに完璧にね。

「細部の細部まで、きっちり記してくださいね」

「うぅ……几帳面」

「そういうナルミ殿は大ざっぱすぎます。ほら、ここ線が曲がってます」

……今更ながら、なんで自分はこいつとコンビを組んでいられるんだろうか？

これはもしや自分の今までの人生で一番の謎かもしれないな。

さて……で、ここまで自分たちはぐだぐだと一つの人形を巡って…

…まぁ大半がセブルによりシルバちゃんをダシにした自分いじりだったのだが……とにかく今日1日は、このお人形のために消費されたと言っても過言ではない。

だからだろうか、自分はこの時、裏で起こっていたとある事柄に気

が付かなかったのは。

確かに自分はこの時セブルさんといて、その場所にはいなかったので気付きようがないといえばそうだろう。

しかしこれはそこにいなくとも、気づくことはできただろう。

だからこれは、言い訳してもしかたがない。

これは自分の不注意であり楽観的かつ適当な性格が引き起こした一つの重大な事件であり歪みなのだ。

それを認めるしか道はないのだ。

それは、この事を解決するために向き合わなくてはならない事実なのだ。

今回起こった黒い塊襲撃事件は、なんとかかんとか犠牲者は辛うじて出ずに終結し、謎の襲撃者も着実に解析されており、表向きは何事もなかった、ただ単に自分とセブルさんの頑張ったレベルが上がっただけの事件である。

だがしかし、この事件は少女の身体に大きな爪痕を残し、心を犯し打ち砕くには充分なまでに重大な事件だったのだ。

それに自分は気が付かなかった。

そして自分は家に帰ってから気が付き、悔いいることになるのである。

自分の愚かさと見る目のなさを呪いながら。

５０回目＊後悔なんてない訳ない（後書き）

・元ネタ

ホンヤクコンニャク・青狸秘密兵器のひとつ
キングソロモンズリング・とあるタイムトラベル漫画。１９９７年初版発行。ぶっちゃけ認知度が今まで出した中で一番低い自信がある。カーラさんの漫画は大好きです。……少女漫画描きとは思いにくいけど

皆さんこんにちは、みんなのハートのハリボテエレジー、南師だよ

さぁ今回は……なんだろうね

本当はあと４倍くらい進むつもりだったんだけどね、残念ながら暴走しちゃったんですよ

なのにあいつが勝手にのろけやがって……

まぁ書いてて楽しかったっちゃあ楽しかったんですが、多分大多数がなにこれうざいと感じたと思います

まぁ南師さんの次回作にご期待ください（笑）

そんなわけで……どんな訳かは知りませんがとにかく今回更新した三回、なんかとっても残念なことになりました

待たしたあげくの体たらく、ひどいものだ

というかそもそも私自身自らの文章の長所短所、それどころか特徴とか個性とかも全く最近見失っていて、もはやなにがなんやらな感じなんですよ

2月3月くらいが一番迷走してましたまぁいまでも迷走していますが

もう本当に、だれか私の文章を正確に分析してください全く自分に自信が持てません

ま、私みたいな生き物が持てたからなんだという話ですがねまぁ少し色々あって、立ち直りはしたはずです

……多分

とりあえず、いまんとこは大丈夫かもなのです

ま、私の文章がどうなのか、とかについては診断サイトでもいいから誰かに教えて頂きたいのは本気でマジですが

誰か教えてくださーい

さて……ではではこれ以上は見苦しいのでそろそろ終わりにいたしましょうか

……チラ

……チラチラ

はい、じゃあ次回更新は6月が終わる前にはだしたいですね

では皆さん、それまで心の中の南師と契約して待っていてください

あぁ、ほむほむかわいいよほむほむ

あ、あと最近題名変えよかなとか思ったりしてます

実際はまだ未定ですが

……ではでは、色々病んでる南師でした

51回目＊嵐の前のハリケーン（前書き）

今回は皆さん口から砂糖がでてくるかもしれないから、お気をつけを

51回目＊嵐の前のハリケーン

セブルさん企画お人形解体新書が作成されたその日の夜の話である。

この日は自分がお家に帰ると何やら慌ただしくドタバタと使用人さん方が走り回っていた。

なにがあったか近くのエルフ耳なメイドさん捕まえて聞いてみると、シルバちゃんが何やら体調不良で大変らしい。

……で、彼女は言ってから何やら“しまった”と言いたげな顔をした。

なにがしまったなのかはわからんが、とりあえず何よりもその時はシルバちゃんが心配だったので彼女を放置しシルバちゃんのとこに行こうとして……止められた。

なんでも、何やら今はシルバちゃんが自分に見せられないようなあられもない恥ずかしい格好だから行くなだと。

そして彼女は……別のメイドさん、角付きメイドさんにぶん殴られた。

こう、手に持った桶でスパーンと。

……しかし流石オーガは力が強い、彼女が殴れば人であってもよく飛びよく跳ねるという……死んでないよね？

……うん、大丈夫だピクピクしてる。

で、殴ったメイドさん曰わく、今日シルバちゃんが行った検査やら何やらが、あまり芳しい結果ではないから少し取り乱していて、本当ならすぐに会いに言って欲しい。
だけど、本人は気を落ち着かせてから自分に会いたいと言っていたので、今は会わない方がいいらしい、と。

ちなみ先程殴られたエルフ耳な彼女は自分に変な心配させないために嘘ついたんだと。

だからお仕置き部屋に連れてってお仕置きするから許してやってとオーガさんに言われてしまった。

……うん、多分彼女が桶でエルフ耳メイドさんを殴らなかったら、自分ちょっとなにがあったのか聞きながらエルフ耳さんを締め上げてた可能性が極めて高い。

ほら、なんたって誘拐された次の日じゃん？
だから今ならシルバちゃんが無理やり男の人に色々ヤられたって言われても、自分すんなり信じちゃうよ。

まぁそれはおいといて。

とりあえず、その後自分は芳しくない結果とやらについて詳しくとオーガさんに詰め寄ったのだが、シルバちゃん本人から話を聞けだとか私から言う訳にはいかないだとかと丸め込まれ、泡を吹きながら気絶するエルフ耳さんを引きずって去っていく彼女の姿を……そういや、お仕置き部屋ってどこや。

なんか自分の家なのに自分で中身を把握しきれていない気が……。

……で、それを見送ってその後は久しぶりに一人寂しくご飯を食べて、そのまま使用人さんに連れられて寝室に押し込まれてしまった。

なんでも、シルバちゃんが落ち着いたから自分に会いたいと言ってるらしい。

ちなみに、自分の部屋じゃ駄目なのかと聞いたらここの方がなにかと都合がいいんだと。

……と、そんなことがありまして、シルバちゃんが来るその時まで、自分は心配で落ち着かない気持ちを落ち着かせるために、ベッドにダイブしてどうでもいい事を考えながら、自分はぐったりとお家のベッドでうつぶせに死んでいた。

で、今にいたる。

そしてそのままどうでもいい考え事も絶賛継続中、と。

……という訳で、どうでもいいが手首が痛い、腱鞘炎になるかもしれないくらいに手が痛い。

ったくセブルさんったらよ。

あんなにスケッチ描かせるとか……少しは労れ。

ったく……。

……あ、ちなみに、お人形さんを解体した結果、脳みそにあたる部分が紛失していることが発覚しました。

どうやら、奴は機能を停止したら一番重要な部分を抹消する仕組みをされていたようなのである。

……あ、動力源もだから心臓もだ。

具体的には、機能停止と同時に強力な酸性の液体が入った袋を破ってどばーっとするらしい。
そしたら後にのこるのは、部分が溶けた溶液と、それを入れてた袋だけ。

うん、ある意味合理的だと思った。

……だがしかし、そんなことを自分が見逃すはずがない。

自分はそれを見越してお人形さんの機能が停止したと同時にゲシゲシと人形を痛めつけ、その酸性の液体が詰まった部分をぶち破ってすべて外に……はい、すいません。

キレてただけでした。
たまたまです、はい。

最初はオイル的ななんかかと思ってました、はい。

……でもそのおかげで、その部品は表面が少し溶けただけの被害だったのだから自分悪くない。

……まぁこのお人形も所詮魔術の産物だから、表面溶けたら描いてあった一番重要な魔法陣やらその類が消えて紛失したといって差し支えない状態だったがね。

で、残ったのは金属製の歪な円盤のみでござる。

ちなみに液体は空気に触れたらすぐ、って訳でもないけどわりかし早く乾燥するように固まったので、周りに余計な被害が及ぶことはなかった模様。

てなわけでそれらはようわからんから後はセブルさんに解析を頼み、自分は真っ直ぐ帰ってきたのよ。

……ちなみに自分、風呂敷は持ってないのでその噂の部品を修復することは出来ませんでした。

ねぇ、納戸のタンスん中にはあったのにね。

……まぁセブルさんもお人形さんだけで手一杯なようで、あ奴が持ってた鉄砲は自分が預かることになりました。

というか、お人形だけで疲れてた自分らは鉄砲の存在をそのまま忘れててセブルさんが帰った後に部屋の隅に転がってるそれを見つけて自分が預かることになったんだがね。

……ちなみにちゃんと追いかけて押し付けようとしたよ？

したらばあいつ、『ナルミ殿はそれについて知ってるようですので、それはナルミ殿に預けます』だと。

……くそ、オタクの宿命兼中二の黒い思い出である昔買ったまま封印されていた銃器の本が本当に役に立つ日がくるとは思わなかった。

……つーか、これ渡されるんなら歯車一個パクんなくてもよかった

のに。
渡すんならさっさと渡せよっていうね。

ま、いいや。

……にしても、シルバちゃん遅いな。
そろそろ自分寂しいぞ。

と、考えていると、自分の後ろの扉が……まぁうつ伏せだからベッド以外は全部後ろだけどね。

とりあえず扉が開いて誰かが入ってきた。
恐らくシルバちゃんだろうと自分はそのままもっさりと起き上がって扉の方をみると……うぅむ。

「……すまんね、わざわざ来てもらってあれだがちょっと今自分も少々込み入った事情があって、君のお話しを聞いてあげれる状態じゃあないんだ。明日……と、確約はできないが、少なくとも3日後までにはきちんとお話しする時間を設けよるから、それまではお部屋を一つ貸すからそこでくつろいでくり。場所はメイドさんを呼ぶから連れてってもらって」

……自分の予想に反して、やたらとちっちゃくて白い姿がそこにいた。

昨日助けたまま預かっていたあの養生中の幼女がいたのだ。
彼女は白い簡単なワンピースのようなものを着ており、顔は俯き長い髪に隠れて表情はよく見えない。

そしてなにやら小さく震えていた気がする……けど、ぶっちゃけ期

待を裏切られて少しイラッとして八つ当たり的に投げやりな反応をしてしまった。

あとから思ったらこれは大人気なかったかね。

……ま、うなだれている結果長い髪が顔にかかっていて、表情がわからなかったのも原因かもしれないが。

でも、とりあえずそこらはそん時は頭になかった自分は彼女にそう早口に告げて、再びうつ伏せにベッドへと舞い戻った。

……したらば後ろから彼女がなんか震えた声で

「……ごめんなさい」

と、小さく、本当に小さくかすれそうな声で言ってきた。

「……なにが」

本来はこの場合こういうのはいけないんだろうが、自分はちょいと投げやりかつ適当に彼女の謝罪を受け流した。

もちろんうつ伏せのまま、顔もあげることもせず。

……が、流石に次の発言は反応せずにはいかなかった。

「……あの、あなたの、お嫁さんの声が、でなくなったのは……あたしのせい、です」

「……はい？」

彼女の発言に反応して、自分は飛び起きるように起き上がった。

……声、とな？

なに、シルバちゃんにあった異常って、それ？

「……声って、シルバちゃんの？声がでなくなったの？」

「……はい」

自分の問いに、彼女は本当に申し訳なさそうに、今にも泣きそうな声でそう答えてくれた。

対して、自分はというと……

「……しょーもな！！」

「……は？」

脱力したように今度は仰向けにベッドに倒れた。

「なに、彼女の異常って声が出ないだけ？」

「……そう、ですけど」

「ますますしょーもな！なんよ、そんだけかい！！」

「……え、っと……え？」

自分は彼女の困惑したような声や気配など完全無視してあー心配して損した、そんなん能力の使いすぎで炎症おこしただけじゃろな、

んなもんジャック先生が声を絶対出さないようにしたらいずれ治ると教えてくれたべさ、あれは声が出なくなる訳とちがうけど、とか思いながら不貞寝していた。

と、不貞寝していたら、先程の泣きそうな声なぞどこへやら、彼女は困ったような声で話しかけてきた。

「……あの、声、ですよ？出なくなったんですよ？」

うん、声だね。
出なくなったんだってね。

「そーだってね」

「……心配じゃないんですか？」

う～？
いや確かに心配というか、どうしたら手っ取り早く治るかは考えなきゃだがね。

なにせジャック先生も一年……二年だっけ？
まあそんくらいかかったからね。

けどまぁ……うん。

「だって、死なないべそんだけなら。死なないんなら声が出なくなるくらい自分な些細な事なんよ。死ねば死に損生くれば生き得よ。おわかり？」

まるで子供をなだめるように、自分はねそべりながら彼女に言い聞

かせた。

そして顔だけを彼女に向けると、彼女は本気で混乱したような声で頭を抱えだした。

「え？あ……うん……うん？あれ？……今ってそういう……いや、いやいや」

「……」

それをしばらく無言で眺めていると、彼女はなにやら気を取りなおしたようにこちらを向いて、こう聞いてきた。

「えっとぉ……いや、あの、お嫁さんとしてはそうかも……でもないかもだけど、ほら、あなたの体面とかもあれ、でしょ？」

「……うぃ？」

意味がわからない。

つか、体面って……なに、君はシルバちゃんを社会的デメリットとでも捉えていんのか？

「体面って、なにさ。確かにシルバちゃんの声が出なくなったんなら不便かもだが、そんな後ろ指指されるよーなことでもないべ。それにむしろ彼女は自分を助けるために危ないとこに飛び込んで、そういうデメリットを負ったんだよ？褒められはすれど、世間様に陰口叩かれる言われはない」

「……不便の一言ですますのね」

起き上がりながら一気にまくしたてた自分に対して、軽く引き気味な白髪少女。

しかし自分のマシンガンは先程からの小さなイライラを弾丸に、止まることなく動き続ける。

「それに、これで彼女が後ろ指指されるよーな社会なら存在する意味なぞないと思うがね。昨日も言ったが自分は彼女が不当な扱い及びちょっかいを出されたら誰が相手でも潰しにかかる。それが国単位であっても例外なく制裁するよ。例え相手がこの国であっても、相応の被害は覚悟してもらう。というかなにかあったら自分が護るし体面なんぞ気にしてるんなら学生結婚なんぞする気はないわい。んなもん、資源回収の日にダンボールと共にポイしたわ！！」

なんか途中彼女には関係ない話になったが、ここらはまぁ若さ故に感情のコントロールができないってことで。

「え……あ……ごめん、なさい」

とりあえず、そこまで言い切った所でなにやら急に冷静さを取り戻した。

取り戻した結果……なにやらこのままでは自分と彼女の間に意見の食い違いができるような気がした。

言うなれば、自分はステータス異常の怒り状態なのに対して彼女は混乱というなかなかにカオスな状況なのである。

だから自分はとりあえず、彼女にはお引き取り願うことにした。

「……とりあえず、君は部屋に……今からメイドさん呼んで部屋案内させるから、部屋で休んでなさい。今のままならお互い会話が成り立ちそうにないからね。それに夫婦の寝室に嫁さん意外の女性と二人きりとは、あまりよろしくないんでね」

主にシルバちゃんのスイッチ的な意味で。

……で、自分がそういうと、彼女は一瞬呆けた後に顔を徐々に赤くして

「ふ、夫婦の寝室って……！は、破廉恥よ！卑猥よ卑猥！変態！！」

そう罵ってきた。

そして……

「女の子にそんな話！普通しなっぱあっ！？」

「……」

赤い彗星のドロップキックにより、彼女は頭から廊下（画面外）の端へと吹っ飛んだ。

かわりに部屋の外にいるのは、スタッと危なげなく着地した赤い彗星、もといシルバちゃんである。

……あ、目がイってる。

そのままシルバちゃんは、自分に軽くお辞儀をした後に白い彼女が

吹っ飛んだ方向へと……おい、今視界から消える瞬間なにかが鈍く光ったぞ。

「ちょっ！まっ！！」

自分は急いでベッドから降りてダッシュを開始、シルバちゃんの後を追った所、そこには白い彼女に馬乗りになってナイフを突き立てようとするシルバちゃんの姿が。

ヤバい、と思った瞬間シルバちゃんは彼女にナイフを突き立てるが……

「っはぁ！！」

「……っ！！」

……幼女はその刃を必死の形相で白刃取った。

「ふっ……ふふはははは！！」

そして壊れた。

彼女は引きつったような変な笑い声をあげながら、シルバちゃんの突き立てる刃を力の限り押し返した。

「わ、やっと手に入れた新しい人生を！そう簡単に手放さないわよお！不定種（アンノウン）なめんなぁ！！」

そしてどっせい、という声を幻聴しそうな勢いでそのナイフ、ひいてはシルバちゃんを押し返した。

それによりシルバちゃんはそのまま尻餅をついてナイフを落とし、その隙に幼女は軽やかに立ち上がり腰を低く保ち臨戦態勢をとりはじめた。

そして呼吸を荒くしながら、吠えるように叫びだした。

「ふー……ふー……な、んですかいきなり！！」

まぁ当然やわな。
同じ立場なら自分もそう言う。

しかしシルバちゃんは違うらしく、素早く落ちたナイフを拾い上げて再び襲いかかろうと……

「こーら。危ないことはダメだよ」

した所を自分により後ろから抱きしめるように取り押さえられた。

自分は同時に危ないからシルバちゃんの握っていたナイフをグッと握り、刃を潰してつかいものにならなくした。

……あ、こら！
つかいものにならなくてもあたったら痛いんだから投げないの。

届かなかったけど。

「ふー！ふー！！」

とりあえずそうやって捕獲されたシルバちゃんは、自分の腕の中で

涙を流しながら幼女をまるで親の仇を見つけた時のように彼女の中の全ての憎しみを込めた瞳で威嚇した。

……うぅむ。

いったいなにがあったのやら……。

「どうしたんよ。そんないきなり……」

と、そこまで言った所で彼女がなにも喋れないことを思い出した。

なので、自分は読心能力を発動することにした。

この前シルバちゃんを背負いながら暴れまわった時のあれね、あれ。

「……なにがあったか、教えてくんね？君が考えたら自分、それを読み取るから」

そう自分が言うと、彼女は少し視線をこちらに向けて

『……あいつが、私を貶めようとした挙げ句にナルミさんを侮辱したからです』

と言って……思ってきた。

それを読み取って一瞬意味がわからないと思考が停止していると、すかさず彼女は詳しい理由を教えてくれた。

『あいつは、私の喉のことを許可なくナルミさんに報告して、ナルミさんが私を軽蔑するように言葉巧みに誘導していました。声が出ない私といるのはナルミさんの体面に関わる、と。だけどナルミさ

んがそれを意にも介せずに対応したら、今度はこいつはナルミさんに助けてもらってさらに今は養ってもらっている身分のくせにナルミさんに変態だとか破廉恥だとか暴言を吐きました』

……それは、捉え方の問題ではという気もするが。

と、ここまではまだ良かった。

問題はここからだ。

シルバちゃんは、だんだんと自分に説明しているうちに中身を思い出してか、徐々に顔を俯けながら、さらに自分に語りかける。

『あいつはナルミさんに卑猥だとか変態だとか……捕まって足手まといになった私を助けてくれて、式を挙げようっていってくれたナルミさんを……喉が使えなくなった出来損ないの私を護ってくれるといってくれたナルミさんを……こんな私を、受け入れて手を差し伸べてくれた方に……』

と、彼女はそこまで思った所で、今度はスカートに手を突っ込んでその裏から小さなナイフを数本取り出し

『ナルミさんを！バカにしてぇ！！』

それを全部幼女目掛けて投げつけた。

危ない！！っと自分は思ったが、それと同時くらいに幼女が

「はっ！！」

それを全部回し蹴った。

……なんつーか、綺麗なフォームと綺麗なじゅんぱげふんげふん。

……むぅ。

しかたがない。

「……君さ、一旦退去してくんね。話がこじれそうだし、何よりこの娘が君を殺しにかかりかねない」

「……わかりました。では、また今度」

彼女はそう言うと、じりじりとこちらを警戒しながら後ろに……あ、彼女の後ろにメイドさん発見。

「そこのメイドさん、ちょい彼女を部屋に連れてってあげて」

自分はそう優しーくメイドさんにお願いすると、幼女はバッ！と後ろを振り向いた。

そして直後、メイドさんがガッ！と幼女にアイアンクロー……え～。

「あたたたたた！！」

「……わかりました。彼女はきっちり私がお部屋へとお送りします」

……なんか、怖いよう。

というかいくら相手が幼女でも左手一本で人を持ち上げるとか……怖いわぁ。

「いた！いたたた！とれる！はなし」

「黙れ」

……怖いわぁ。

「……あんま手荒に扱わないでね」

うん、この一言を言うだけでもだいぶ勇気が必要だったよ。

そしてメイドさんは自分に向かいにっこりと笑いながら

「大丈夫です。今はお部屋に放り込むだけですから。その後はご主人様と奥様でゆっくりと彼女の今後についてお話しをして決めていただければ」

とかのたまいやがった。

放り込むってあんた、猫じゃないんだから。

いや、猫でも放り込んだらいかんよ。

……怖いからなんも言えないけど。

自分がそうやってメイドさんに震え上がっていると、彼女はなにか険しい顔をしながらなにかを心配するようにこう言ってきた。

「……とりあえず、ご主人様。奥様を頼みます」

そしてそのまま幼女を引きずり……いや、浮いてるな。

とりあえず彼女は幼女をワイルドな持ち方で捕獲したまま廊下の奥へ消えていった。

……今更ながら、不定種（アンノウン）ってなんなんだろ。

とっても１４歳らへんから発病する病気の臭いがして香ばしいよ。

っと、そんなことよか、今は腕の中のシルバちゃんの心配をしたほがいいわな。

「とりあえずシルバちゃん、落ち着い……てないね」

自分が彼女にそう話しかけながら彼女の顔を覗き込むと、彼女はえぐえぐとしゃくりあげながら泣いていた。

……ほら、鼻水垂れてる。

チーンしなさい、チーン。

自分はそういう思いを込めてティッシュを彼女の鼻に当ててやると、彼女は自分が持ってるのをいいことにそのまま鼻をチーンした。

……手についたよ。

「……とりあえず、シルバちゃん。お部屋に戻るか」

自分は手について糸を引いているシルバちゃんの粘液を別のティッシュでフキフキしながらそう言って、そのティッシュを遠くに見えるベッド脇のゴミ箱にポイと……外した、しかも全部。

まぁ後でいいや。
ポイとした後に未だにあぐあぐと泣いているシルバちゃんを抱き上げて、お部屋の中に戻るのであった。

そして自分はベッドに座り、その膝の上にシルバちゃんを座らせるという形に落ち着き、少しずつシルバちゃんを落ち着かせながら彼女の詳しい容体を聞くのであった。

……ちなみに、右手は始終彼女をなでなでする事をいつの間にか義務づけられていた。

いやね、離すと彼女、更に泣きそうになるんだもん。

そして左手は彼女の両手に抱えられて拘束済みと、なんかいろいろ大変なことになってしまっていた。

……しかし、だシルバちゃんや。

君は声が出ないので、自分が君の思考を読んで会話をしているのだよ。

……とりあえず、まず真っ先にどうやったらずっとなでなでしてもらえるかとか考えるのは、よくないと思うよ。

＊＊＊

さて……犬が嗅覚を、うさぎが聴覚を発達させた生き物であるように、人間とは、視覚が発達した生き物だったりする。

と、いうことは、人間は視覚から得られる情報を重視し、それを主におきながら暮らし、生活し生きている。

が、それすなわち人間は視覚が無くなるとそれからの生命活動をする上で多大なるデメリットを負うことになるということと同義である。

そしてそれはこの世界……まぁ人間はいない……いやいた、一人。まぁそれはおいといて、つまる所がこの世界においても似たようなことがあるっていう訳よ。

さらに言うと、悲しきかな地球よりかは幾分幾ばく多大に結構文化レヴェルの低いこの世界において、そのようなハンディを負うという事は、まぁそのやられる方からしたらプライドが傷つくかもしれない上、大変失礼で身も蓋も鍋もない言い方だが、同情され手を差し伸べられ庇護される対象ではなく、侮蔑され虐げられて差別される対象になってしまうのだ。

それが全員そうだというわけではないし、例外的に種族の差とかもあるのだが、ね。

例えば、嗅覚が麻痺したウサミミさんならまだ耳があるからいいのだが、聴覚が麻痺したウサミミさんは致命的、という感じに、その種族特有のメリットが消えた場合にその人はそれだけで存在価値が消失したかのような扱いを受けるのだ。

そしてシルバちゃんは残念ながら、感覚器官ではないが“声”を失うことになってしまってたのだ。

……そう、ここまで言えばわかると思うが、今のシルバちゃんは実は吸血鬼としては非常に危うい立場にいる。

聞くと吸血鬼の最大の特性は“声”と“耳”による音波レーダーがあげられる。
そして他には比較的強い力に属性は一択、訓練された吸血鬼でも最大二つの属性しか使えないが、一つの属性一点集中で他に比べて大きな魔力が持ち味らしいのだ。

あとは吸血による魔力体力の急速回復だが……吸血鬼としてはそちらはむしろデメリットも抱えてるらしいから考えない。

なんでも、定期的に血を吸わねば死ぬ上に近くに人が居なけりゃ血を吸えない。
つまり吸血鬼はソロで無双できるスペックを持ちながら、パーティーで活動しないと弱体化がハンパない種族っていう訳だ。

ちなみにこの吸血のデメリットは、吸血鬼が特別血を吸った場合の回復量がハンパない代わりに背負う羽目になったデメリットなんだと。

だからあれさ、エリザあたりのオマケとして吸血ができる種族は、それで回復できるっちゃできるがあまり期待はできないんだと。

つまりは吸血鬼以外は飢え死なない。

あと、美味しい血液、つまり純度の高い……基準はわからんが、そういう血液を飲むと魔力の質も少しづつよくなるんだと。

……自分のみたいな。

理由？

しらん。

で、それなら効率よく成長できるならメリットなんでないんかと聞いたら、なんでも質は良くなっても、微々たるものすぎてやっていけないんだと。

ちなみにこの微々たる成長は吸血鬼以外にはないみたいですよ。

これを聞いた時、こっちの世界でのデメリットが、あっちの世界でメインに据えられているのに違和感を感じたね。

……さて、で、吸血鬼の特性、メリットの中に“声”がでてきた。

そして只今シルバちゃんはその“声”が全く持って使えない事態に陥っている。

それだけで今の彼女は吸血鬼としては落ちこぼれ、社会的には吸血鬼として扱われなくなるレベルである。

……と、ここで終われば彼女としては救いがあった。

なにせこれなら一応はまだ“人”扱いされるからね。

実はとっても大変なことに、彼女はもう一つデメリットを抱えることになってしまっているのだ。

それはいったいなにか。
それを語るにはまずこの世界と地球の絶対的な違いを理解することからはじめなくてはならない。

とは言うものの、なにも難しい事を言う訳でもなく、また自分もそんな難しい事を考えたくもない。

なので平たく真っ直ぐ解りやすくその違いを述べますと、ズバリすなわち魔法があるのかあらぬのか、という事である。

そしてその魔法というものを使うにおいて、先ほどのような種族によって重要度の違う感覚器官なぞ超越し、どんな種族もそれを無くすだけでクルマがエンジンを無くしたに相当する程のスクラップな扱いを受けるまで重要な部分がある。
確かにバッテリーが無傷であって、多少のライトはつくかもしれないが、もはやそれは廃車と同義、そんな扱いをされてしまう程に大変な状態。

それが“声”をなくす、つまり魔法の詠唱的なのが唱えられない人の末路である。

無詠唱でも多少の魔法は使えるが、なかなか結構難しい上に割に合わない。
メリットとしたら即効性があるくらいしかないのだと。

……聞くと、魔法が使えない人はもはや人ではなくてそこらの動物家畜と同じような扱いを受けるのだとか。

しかも彼女は吸血鬼、レーダーが使えず大きな魔力も生かしきれず、

持つのは魔法で対処可能なレベルのメリットである力の強さと一般的にはデメリットスキルの吸血しか残っていない。

……で、普通なら婚約相手が声を無くしてしまったなら婚約破棄は当然として、実家からは絶縁確実、そのままお家を追い出され、仕事だってある訳がない。

そしてそんな落ちぶれた吸血鬼に普通の人が血を提供してくれるはずもなく、後は路頭で飢え死にするかどっかの変態に飼われて尊厳踏みにじられながら生きていくかのほとんど二択であるらしい。

……で、彼女はどうなるかっていうと。

「……ここの変態に飼われて尊厳踏みにじられながら生きていくことを選択した訳ね」

『……飼ってくれますか？』

「踏みにじられるの前提で話進めないの」

と、いう訳である。

どこまでも前向きなのが彼女のいいところなんだがね。

とかなんとか、シルバちゃんの後ろから、自分はなるべく優しい手つきを心がけながら彼女のセミロングな髪を梳いて遊びながら考える。

……とはいえ、さすがの彼女も今回は、最初っからポジティブに生きていくことができた訳ではないらしい。

自分聞くと、自分がいない間にシルバちゃんはとっても情緒不安定でヒステリックかつネガティブになっていたらしい。

まず最初に声が出ないと診断された時はしばらく言葉を理解することができなかったし、理解してもそれを直視できずにいたらしい。そして直視したらしたで今度は泣きながら暴れ出し、終いにゃ自分に捨てられるくらいならと自殺を図ろうとしたんだとか。

なんとかメイドさんたちが取り押さえて未遂で済ましてくれたがね。

いやぁ……感謝感激。

で、それから先がひどかった。

その後彼女はもはや魂が抜けたような死んだ瞳をしながら涙を流して虚空を見つめていたかと思えば思い出したように暴れだす。

なんでも頭ん中では様々な捨てられ方で自分に捨てられる様をシュミレーションしてセルフで絶望してたんだと。

……なんか、少し残念。

こっち側とズレてるのから感じるのもあるかもしれんが、それでもあんまり信用されてない感があって少しがっかり。

……んで、そうこうしているうちに自分が帰宅する時間になってきた。

シルバちゃん的にはこの時、自分に捨てられるかもしれないという

気持ちから、もしメイドさんに頼んで自分に伝えてもらった場合、そのまま二度と会えずに放り出されるという最悪なイメージが頭をよぎったので、彼女らに頼んで自らで直後説明する機会を設ける事にしたらしい。

……ちなみその時仮に捨てられるにしてもその直前に自分と最後の思い出として営むことができるかもしれないと舞台は寝室に決まったんだと。

で、そうこうしてるうちに自分が帰宅。
そしてご飯を食べて寝室に押し込められた自分にいざ告白しようとやってきたシルバちゃんは、いざ寝室についたらなかなか決心がつかずしばらくの間扉の前でずっと立ち尽くしていたんだと。

んで……こっからがややこしい。

そんな風に迷いが生じていた彼女の耳に、なにやら小さな足音が聞こえてきた。

反射的にシルバちゃんは身を隠して様子を見ると、なる程先ほどの幼女の姿がそこにはあった。

……ちなみにこん時シルバちゃんは内心かなり不安だったんだと。
幼女に自分をとられたかと思って。

で、彼女はいざとなったら後ろから刺すための準備として自殺未遂の時に使ったナイフを取り出しながら様子をみていた。

すると幼女は扉をあけて、予想と反して自分に謝罪の言葉を述べた。
そして幼女はシルバちゃんの容体を自分に告げた。

それを彼女は幼女がシルバちゃんを貶めて自分を奪うために伝えたのだと判断し、彼女は幼女を刺すため足を踏み出した。

……で、あれがきたのよ。

自分のくだらねー発言。

それから先は簡単だったらしく、幼女の疑問に対して当然のようにシルバちゃんを護る発言、しかもそれでシルバちゃんを虐めるような社会なぞいらん、相手が国だろうと立ち向かう的発言を聞いたシルバちゃんはさぁ大変。

今までの不安が一気に崩れ、その場でへたり込んで声は出ないけどわんわん泣いたんだと。

……今思うと、自分相当に恥ずかしいこといってたよな。

……死にたい。

……で、そのわんわん泣いてる途中で彼女は聞いちゃった訳よ。

幼女が自分を変態と罵る声を。

そしてそれを聞いたシルバちゃんの中では、以下の事柄が渦巻いていたらしい。

まず自分に捨てられるかもしれないという底知れぬ絶望感から、自分がなにがあっても味方になってくれるという事実による安心感幸福感のこのいい意味での落差。

一日中引きずったせいで不安が解消されても未だに尾を引く不安定な情緒。
そしてシルバちゃんと自分の間を引き裂いて自分を奪おうとしていることになっている幼女。

……で、その敵である幼女が自らの唯一にして最大の理解者とされている自分を“変態”と全力でけなしはじめた、と。

あとは身体が勝手に動いたらしい。

そこから先は見たまんま、幼女が連行されシルバちゃんは自分が抱き上げ一時間かけてこの話を聞き出したのだ。

そして、今はと言うと、彼女のこれからについて話し合っている。

「……とりあえず、ご実家に連絡入れる？」

『……多分、話がこじれる気がします』

「そっか……だね、セブルさんいるしなぁ……」

しかしなかなか内容が薄い。

要因としてはきっと自分が彼女の髪で遊んでるからというのがあるだろう。

……まぁ楽しいからいいんだがね。

と、考えながら彼女の髪を右手だけで頑張って三つ編みにしてみようと無謀な努力をしていると、いきなり彼女の思考から不安げなも

のが流れてきた。

『……ねぇ、ナルミさん』

「ん～？」

その不安な念波を感じた自分は何がくるのか考えながら、右手の作業を一旦やめる。

『……私の声、治るのかな……』

「大丈夫だべ」

そしてすぐにまた再開する。

『治せるんですか？』

「しらん。が、まぁなんとかする」

『なんとかなるんじゃなくて、なんとかしてくれるんですね』

「……まぁ」

『えへへ……期待してます』

……あれ、なんだこの敗北感。

珍しくシルバちゃんが優位に立たれたきがする。

まぁいいけど。

と、自分が少しばかりショックを受けながらシルバちゃんを三つ編んでいると、彼女は両手で少しもじもじと自分の左手人差し指と薬指をいじりながら恥ずかしそうな気持ちとともに自分に語りかけてきた。

『……ね、ナルミさん』

「ん？なんね」

と、同時に三つ編みが片方完成。

使った手は右手だけだがズルをしないとは言っていない、ということにする。

そして自分がシルバちゃんの左側の髪に手を伸ばした所で、シルバちゃんにお願いされた。

『……私のこと、シルバって呼んでください』

彼女の言葉で、この前エリザに言われたことがいきなりフラッシュバックした。

そうだったね、気にしてたんだってね。

「ん……シルバ」

『……えへへ。これからずっと、ですよ』

……なんだこれ。

リア充爆発しろとはよく言うが、いざ自分がリア充になったら爆発したくなるぞ。

……と、自分が思っていると、シルバちゃ……が、昨日あったことを語り出した。

『昨日ね、ナルミさんと別れた後に姫様やお母様たちにどうやったらナルミさんともっと仲良くできるか相談したの』

ふむふむ。

『そしたら、もっと甘えなさいって言われて……』

クラァ！！

すでに充分に甘ったるいのにまだ甘くするか。

『だから甘えるの！！』

「おふっ！？」

彼女はそう比喩的表現ではなく心から叫ぶと、自分の方に覆い被さって自分のことを押し倒した。

そして自分の胸に顔をうずめると、そのままなぜか動かなくなってしまった。

……とりあえず、右片方だけの三つ編みはなんともアンバランスであるな。

『……ありがとう』

それからだいたい1分くらいか、やっとシルバちゃんは動き出し…
…とはいえ、物理的にではなく自分に語りかけてくるだけなのだが。

そして彼女はポツポツと、自らについてを語りだした。

『……私、不安でした。だって声がなくなるってことは、普通はそれだけで全てがなくなるって意味で……姫様やみんなともいられなくなるし、お父様たちの所にも帰れなくなる。……そしてなにより、ナルミさんに捨てられる、私の場合、本来ならそんな未来が待っているはずでした』

……。

『そしてそのまま私は一人、魔法も使えず誰にも助けてもらえずに路頭に迷い、街角で孤独に死んでいたはずです。……いや、もしかしたらこの国にすらいることも叶わないで、外の世界でどこかの動物に喰い殺されていたかもしれません』

……ふむ。

なんか少し胸のあたりが湿ってきたぞ。
あとシルバちゃん、服をそんなに握り締めると伸びたらしわくちゃに……。

……いや、いいや。

『……でも、ナルミさんは私の味方だった。私を護ってくれるって言った……私が全てを失っても、ナルミさんだけは側にいてくれる

って……』

「……そっか」

なんだこの空気。

「辛かったんだね……」

そもそも女子にこんな風に泣きつかれる経験なんてまずなかった。

「……もっと早く帰ってくればよかったね……ごめんね」

それにそれを慰める役割になるなんて、想像だにしなかった。

妄想は何度もしたけど。

「……よしよし」

したがってあとの慰めの言葉を紡ぐ事ができなくなった自分は彼女の頭を優しく包むようになでなでするのが精一杯なのである。

……これが正確で、いいんよね？

『……これからきっとこんな風になった私のことで苦労をかけると思います』

うん、聞いた話面倒なかとにはなりそうだね。

『それに今の私はただの役立たずで、これからもなにもできないで迷惑ばかりかけることになると思います』

……ふむ。

『けど……うにゅ～』

おぉ、やはり柔らかいほっぺただ。

……まぁ自分の胸に顔をうずめた女性がそのまま真横にほっぺたを伸ばされる様はなかなかにシュールだが。

「むやみに自らを卑下て泣き言を言う人は役立たずです。むやみに自らを卑下らないで泣き言を言う人はよく訓練された役立たずです。そして泣き言を言っても頑張るのが自分の求めるよく訓練されたシルバです。でもこのままではむやみやたらに自らを卑下して泣き言を言いまくって頑張るのを放棄した役に立たたずのシルバちゃんです。で、君の将来は役に立たないシルバちゃん？それともよく訓練された役に立つシルバ？」

『……』

「あきらめたら試合終了だぞぉ。君にはまだ四肢が無傷で残ってるじゃないか。まだ脳みそは正常に作動してるじゃないか。それなのに頑張らないでぐしぐし言うようではいつまで経っても“シルバちゃん”でしかありません」

『……そんな意味で今までちゃん付けだったんですか？』

「んにゃ、せっかくの節目だし」

うにうにうにうにに。

少し考える風のシルバちゃんを後目に、自分はその柔らかいほっぺたを卑猥な手つきで揉みしだく。

「……多少の泣き言くらいなら聞いてあげるよ、一人で抱え込むよか話した方がすっきりするべ。けど、君の卑下たセリフはききたくないな。せっかくかわいい嫁さん貰ったのにバカみたいじゃないか」

『……むぅ。そうやって恥ずかしいことをサラッという』

……ん？

……。

……っ！！

……わ、忘れよ。

「とにかく！君にゃぁネガティブは似合わないの！強く元気に生きなさい！そもそも迷惑なんか考えるんなら結婚なんて制度が無意味だべ！損得勘定で結婚するくらいなら結婚なんてそもそもせんわ！！」

『痛い痛い痛い！……でも少し気持ちいいカモ』

「……あ、ごめん」

……ちなみ最後のはきかなかったことにする。

「……ま、そんな訳で君にゃぁ自信を持って生きてて欲しいのサ。

声の方はなんとかするから」

自分がそう言いながら手をほっぺたから離して再び頭をなでなですると、彼女はしばらくの沈黙の後、顔をあげてこう伝えてきた。

『……うん』

短いけれども決意となにやら自信に満ちた気持ちの籠もった一言。

自分はそんな一皮剥けた彼女を再び優しく包むように抱きしめてやり、小さな頭をよしよしと撫でてやる。

……リア充経験のない自分としては、この行動が正しい答えかはよくわからないが……少なくとも、間違ってはいないはずだ。

と、思う。

……これが正解で、いいんよね？

『……えへへ』

……ま、幸せそうでだからべつにいっ

『……ふぁ』

「……くちゅん！！」

……。

「……シルバ……ちゃん」

『……ふぁい？』

「口押さえてくしゃみしような。鼻水とよだれぜんぶ飛んだぞ」

『……ごめんなさい』

べつにいくない、これはいくない。

……ちょっと、感情入りすぎて甘やかしすぎたかもしれない。

……とりあえず、だ。

声出なくなって一番最初にかけるのが迷惑でなくて鼻水とはどういう了見だこら。

……さて、時計を見れば丑三つ時、自分はむくりと起き上がる。

と、同時に隣で寝ていたシルバから布団が落ちて、彼女の肌が露わになった。

……本当に、着痩せすんよななこいつ。

とりあえずこのままだと風邪をひいてしまうので、落ちた布団をかけてやる。

……さて、そして自分はベッドから降りてテキパキと服を着る。

下にはジーパンに赤色靴下、上は……なんか暑いからタンクトップでいいか。
そして遠くからみてもわかりやすいように真っ白けっけな白衣を羽織り、青と紫の中間くらいの色をしたスニーカーを履いて準備完了。
……いやぁ、白衣普通に暑いね。
けどまぁ窓開けたら風が涼しいからいいけどね。
……で、なんでこんな自分が格好をしているかというと、自分ちょっと悪い子だから夜遊びに行こうと思うのよ。
だって、あの大変面白くない事件から日にち的には早くも2日が経ちましたでしょ？
そんでその結果今日はお人形解体新書作成という結果になっちゃって、しかも今日の……昨日のお仕事は今日に持ち越しという悲しい結果。
そして今日の幼女とシルバちゃんの大騒動。
もうあれよ、これからしばらくは一人で自由に遊ぶ暇なんてない訳よ。
だからそのために、自分は今日の夜に少し遊び溜めすることにしたんだね。
……唐突に話変わるが、あの幼女の名前ってなんなんだろ。
あと、不定種（アンノウン）ってなんなんだろ。

……めざめるパワー？

……まぁ、いまはいいや。

とりあえずそういうこと。

なので自分は窓を開け、昨日パクッた歯車右手にお空にダイブ。

そして……そのままどこに飛んで行こうか。

とりあえずあれだ、歯車手がかりにサイコメトリー。

とりあえず……こいつが最初に造られた所まで飛んでいこう。

……で、これから始まるのはなんの遊びなんだろうね。

始める自分がわからないから困るよな。

とりあえず、探偵ごっこかかくれんぼか、はたまたケードロ鬼ごっこ。

そこらへんのニュアンスが似合うような気がするが……あ、あれだわかった。

これはどっちかっていうと、子供の遊びよりもリアルハント、つまり狩り。

散弾銃を手に鹿やウサギを追い詰める、一方的なああいうの。

うん、そうだそんな遊びだ。

そうすることに今決めた。

……だって自分、さっき言ったもん。

自分は彼女が不当な扱い及びちょっかいを出されたら誰が相手でも潰しにかかる。
それが国単位であっても例外なく制裁するよ、って。

いやぁそれにしても本当に……

初夏の夜風は気持ちイイねぇ。

51回目＊嵐の前のハリケーン（後書き）

こんにちは皆さん、レポート地獄が泥沼化、南師ダヨ

早速今回の元ネタ行くナりよ

・よく訓練された～＊ヘリに乗ってるおっちゃん（たしか）
・サイコメトリー＊おなじみな触ったら情報得られるやつ
・ジャック先生＊黒い無免許医師
・あきらめたら試合終了＊先生ェー！！
・他書き忘れ＊あるかも

……これでどうでおじゃるか？

まぁ多少適当でないと人間息つまるべ
時間とかもそこら……やめて！
叩かないで

……ふぅ

さて、おふざけはここまでで少しばかり小話、というか質問を前々からあった話なのですが、皆さんはこのうちどれを読みたいですか？
ちなみに弐から伍は番外編で本編とは全く関係ありません、きちんと本編の続きは書きます

壱・寄り道すんな、このまま続け
弐・それよりナルミ君って地球だとどんな生活してたん？
参・いや、むしろ人間（女子）をここに放り込んだら楽しくね？

四・逆にヒロインや姫様地球に放り込まね？
伍・あれだ、ナルミ君と嫁さんの赤裸々な１８歳未満立ち入り禁止な夜の生活を詳細に書くしか道はないよね。

さぁ、どれ？

あ、あとなんか最近変なお話しがいくつかでてきたのですよ
設定だけで、書いてないんですが

で、質問
あなた方はどれが読みたい？

壱・超帯電体質の吉田さんの話“吉田コンセント”
弐・ハムスターが神様“大山鳴動鼠一匹”参・全てはタイトルに集約“一年七組奥村環・生徒会を任される”
四・ある夏の海の家“しおあじ”
伍・面倒くさいトランプゲームが題材のエセ推理“ダウト”
禄・他のいいから続き書けよ
七・おぜうさまが大変な、私の描いた東方同人誌

さぁ、どれ？

……と、長々と書きましたが、ぶっちゃけあとがきに書くこと思いつかなかったから書いただけなので、無理に答えんでもいいとです

あとこうすれば送れたことをごまかせ……あ、イヤ！
私のＰＳＰ捨てちゃだめぇ！！

……ふう

ちなみに今回は単にラブらしたかったのが一番です
やはり女子はいいよね、うん

これからも皆さん、どうぞよろしくお願いいたします

……ちなみにアンケート、どちらもどれが一位でも書かれるのは壱と禄のみのつもりですよ
個人的にしりたいだけなので

二足のワラジ履きたくても、足は二本しかないのです
四本もないのです

だから二足のワラジがあったら一旦脱がないけないのです

つまり、さらに遅れて皆さんの怒りが有頂天

……そうなればそろそろ本格的に討伐依頼がでそうですからね

ではでは～

52回目＊周りが怒ると怒れない（前書き）

内容が遅々としてすすまない

52回目＊周りが怒ると怒れない

この時自分は夜空をフワフワと飛びながら、これから先のことについて考えていた。

とりあえず犯人を生け捕りは決定でそっから先はどーすんべかなぁ、とか。

案外人形つくられた場所が遠いからやっぱ人形が術者的なのと離れたとこにいこうとか。

あ、あと情報を読み取った結果術者は女性らしいです。

なんか、オットセイとかトドとかババコンガとかサイコパスの婦人警官みたいなタイプの気持ち悪い肉団子に似たおばさんでした。

なんか、シルバが若くてメリハリのある方で、しかもさっき見てきた直後だからかトロールみたいな姿が頭にいきなり入ってきた時にはガチで吐きたくなった。

というか、ちょっと吐いた。

……あ、一応言うが、いくらなんでも捕まえたあとに鉄の処女やらなんちゃらの牛やらみたいな拷問はするつもりはないよ。

自分、スプラッダー嫌いだし。

ちょっとやりたいのはスコップ渡して1日中穴掘らすのと埋めさす実験か、1日中眉間に水滴を一定間隔で垂らして放置する実験か、1日中鏡に向かってお前は誰だと言わせる実験のどれかをやりたいだけだから。

自分、優しさでできてるフェミニストだから。
女性にそんな拷問なんてできないよ。
実験はするけど。

とかなんとか、考えているこの時の自分はとっても油断してるように見えたんだとさ。

だから彼はつい後ろから近づいてしまったと。

「ナル……」

「バーデン・バーデン・リリー！！」

「あばっ！！」

したがって実は今までの人生で一番アンテナを張り巡らしていた自分の認知圏内に入った彼は、自分による挨拶代わりの電撃を見事にくらってしまったのである。

ちなみに、避雷針は張り巡らせてなかったのに彼の真上に雷が落ちたのは気にしてはいけない。

ねぇ、意識のアンテナは張り巡らせてたのにね。

まぁあれだ、とりあえず、これで腰痛でも治れば文句はないだろう。

腰痛なんかあるたぁ思わんが。

……で。

「……なにやってんの、セブルさん」

「あが……が……」

ふむ……犯人だった場合生け捕りにするため、死なんよう手加減はしたし、元々彼は一応スペックの高い種族だから、一応墜落しないでフラフラと浮いてはいるが……。

……残念だよ。

とりあえず、自分はそんなフラフラのセブルさんを見つめながら、彼が復活するまでの時間を過ごす。

……ま、すぐに治ったぽいからあんま時間はかからんかったがね。

「……大丈夫かえ？」

「……なんとか」

それはよかった。

「で、なにしにきたん？だいたいわかるけど」

「……つっ……お？」

ん？

「おぉ……」

どしたん？

「肩の凝りが治ってぺっ！！」

「落ちてろ」

……ふむ。

馬場チョップは意外にも強いのな。

そしてこれで落ちないセブルさんは日に日に成長しているのか？

チョップした右肩、へこんでないし。

へこます気はなかったが。

「おぉぉぉ……別の意味で肩が……」

だろうね。

「……で、なぜいるし」

とりあえず悶絶するセブルさんに、再度同じ質問を重ねてみた。

「いたた……もちろんナルミ殿が犯人を殺しにいくだろうと思ったので、我も共に犯人を消すためにナルミ殿を待ち伏せていたのです」

……。

そっかぁ……。

だめだこいつ危険だ。

「というか、一人で行こうとするならもっとうまく隠した方がいいですぞ？手がかりの歯車を盗むのも、もっとできたでしょうに」

……。

そっかぁ……。

だめだ自分残念だ。

そしてこいつ……

「……君、きっと連れてかない言うても絶対」

「もちろん、勝手に後を追いますよ。そんなわかりやすい格好をされたら遠くからでも追えますからな。というか、なぜそんな格好を？」

……うっさい。

鬼ごっこは鬼がわかりやすいとより緊張感が増すんだよ。

……まぁさっきまではいろいろアレでアレをナニして少しばかり冷静さを欠いて残念な状態になってたからこんな格好だが……今考えたらなんかもう残念だ、恥ずかしい。

ねぇ、なんであんなに護ってやらないかんって気持ちになったのか……謎だ。

彼女は単体で……あ、今は弱いからか。

……ま、いいか。

とりあえず、セブルさんを仲間にするのは問題ないだろう。

これ、つまりは探す手が増えたって訳だしな。

連れてっても足は引っ張らんべ。

「……しゃーないの。んだらば、ついてき。あと、くれぐれも殺さんような」

とりあえず釘を刺す。

なんか言わないと彼なら見つけ次第ぶっ放しそ

「え？なぜですか？」

……ほらね。

「まず見つけ次第に消す、これが大前提でしょう」

今のセブルさんは、目を見開いて鼻息を荒げ、顔全体で理解不能と言っている。

……気持ちは分からないでもない、が。

「残念ながらそれはできない。そして拷問等も今のところするつもりはない」

と、言った所セブルさんは怒りを露わにした顔を近づけながら

「なぜ！お嬢様を攫った犯人ですぞ！？」

と、自分の顔面１０センチ程んとこで叫びだした。

……そうか、君がシルバに迷惑をかけるまえにはよだれ、たまに鼻水をかけなさいと教えたんか。

そして、君は本当にばかだなぁ。

「さらにその先にこの事件の依頼主がいるでしょうが。そっちもサックリやらないと、またいつシルバが狙われるかわかったもんでないべ？」

自分は言い切って、呆れマックスなため息を吐き出した。

すると目の前のセブルさんは能面みたいな……り？

なんね、その顔。

「……チッ」

うわっ、感じ悪っ。

「なに、なんか自分した？」

だが感じが悪くても、なにか自分が悪いことをしたかと思ってしまうのが自分の悪い癖。

そしてついついそう聞いてしまうのも悪い癖。

「……別に、なにも」

「そ、そう……」

うぅん……なんなんだべ。

……とりあえず、自分は再び不機嫌全開なセブルさんを仲間に引き入れ、敵さん捜索を開始したのであ

「……とうとう呼び捨てか……ケダモノめ」

……あ、そっち？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊И☆

で、それから数刻、意外にも犯人はあっさりさっくり捕まった。

……と、いうか、うん。

捕まったというかこれは……

「……ちょっち自分吐いてくる」

「……ハッ、惨いな」

なんつーか、自分らがついた時には既に森の中で事切れていたのだ。

……こらぁ、そこ。

人の死体見て嬉々とした顔するんじゃあない。

……とりあえず自分はその死体を見て2秒で目を逸らした。

少ししかみなかったからこの死体が太った不細工なおばちゃんであるというくらいしかわからんかったが、セブルさん曰わくなにやら鋭利な刃物で両腕両脚を切断された後にチマチマ刃物で突き刺されて内臓（モツ）を引きずり出されて、ついでに森の愉快な仲間たちにおいしくいただかれて……うぇ。

……くそぅ、自分が吐いている間にも、セブルさんは着々と自分に情報を発信してくれる優しさに涙がでるよ。

「……種族は……エルフですね。辛うじて。年齢は……恐らく２００はいってるかと。性別は女……はっ、どうやったらここまで醜く肥えることができるのやら。ったくこの糞ババァが。こいつ絶対我とナルミ殿を足したよりも重いですぞ？」

そう、うん知らん。

そもそもエルフの２００が若いか古いかもようしらんしね。

こらぁ、セブルさん。

死体ゲシゲシ蹴らない。

生々しい音が響くでしょ……うげぇ。

「……ナルミ殿」

と、自分が視界の外で死体と戯れているセブルさんに対して心から抗議を申し出ていると、セブルさんが心配げな声で呼んできた。

ちなみに自分はマスターリバースのためお口が使えないので本当に

心を込めての意味ではなく、心から抗議をしていたりする。

で、そのセブルさんは心配している感のあるスタンスは崩さず、しかし死体を踏むのは止めずで自分にこう聞いてきた。

「……もしやナルミ殿、死体は苦手ですかな？なにやら反応が初めて戦場に立った新米兵士のような反応で……」

おぅ、あたぼうよ。

「……誠に幸いながら……うぷ、自分は死体なんぞに今までの人生でめぐり合うことなぞなかったかんね……おろっ……おべぇ」

あぁ、ヤバい。
あとは胃酸しかでてこない。

ごめんよ名も無き樹よ。
君の根っこを溶かしてしまった。

「……でも、ナルミ殿は人間の戦士では」

「……活人剣なめんな。基本非殺傷だ非殺傷。闇の勢力とは違うのだよ……うぷっ」

闇の勢力なんかリアルにあるかしらんがな。

だんだん自分、息を吐くように嘘をついて、くしゃみするように人を騙して、鼻をすするようにまわりを欺く人間になっているような気がする。

……ま、それはいいけど。

緊急避難……とかいうやつだ。

別に偉くなりたいから嘘をつくとか、お金が欲しいから人を騙す訳じゃあないからね。

……緊急でもないか。

「……はぁ、闇、ですか」

でもまぁ信じてもらえたようだからよしとしよう。

「ん……そうそう」

「……我はあまり踏み入らない方がいいですな」

「ですね」

踏み入られたら困るからね。

とか考えていると、セブルさんはなにやら中身がいっぱい詰まって分厚くなった封筒のようなものを肩越しに差し出してきた。

思わず受け取って後ろを見……てすぐにもどる。

「……なにこれ」

「ナルミ殿宛ての手紙です」

なに、落ちてた……んだろうね。
じゃなかったら最初に渡してたはずだろうからね。

「この死体の下にありました。あと服の下とかにも同じものが。恐らく獣等に荒らされないようにいくつか予備をおいておいたんでしょう」

「……さいですか」

うん、確かにこれはこちらの世界での当て字的な自分の名前がかいてあるが……しょーじき開ける気にはならないね、これ。

魔法的トラップかもしれんしね。

と、思案しながらそれを月に向かって掲げて透けないかなぁとやっていると、後ろからセブルさんが声をかけてきた。

「……読まないのですか？」

対して自分は間をおかず、封筒を透けさせながら答えてやった。

「読みたいのですか？」

「……いや読みましょうよ。今のところ唯一の手がかりですぞ？」

……え～。

いや、嫁さん攫った犯人の死体に埋まってた手紙なんて、きっと残念なものに違いないって気になってんだよ。
うん。

あれだ、自分らが捕まえて痛めつけようと考えていた所でそれができなくなった事での不完全燃焼な気持ちが勝手にそう判断させてんだ。

……なに言ってんだ自分。

超高校級のバカだな。

……とかなんとか言っても読まなきゃ先に進まないのもまた事実。

「……しかたがない、読むか」

「最初っからそうしてください」

……彼も彼で不完全燃焼に終わって微妙にイライラしてるな。

言葉に小さなトゲトゲがある。

そんなセブルさんの視線を背中に感じつつ、自分は封筒を破って最近やっと覚えた

……

「……セブルさん、読んで。達筆すぎて読めない」

「……またですか？」

えーえーどうせ自分は日本語だって達筆だったら読めなかった愚か者ですよ。

……でもため息はやめてください。

「……指輪は？」

……そだったね。

けどそれを認めると、さらに惨めな気持ちになりそうだからなにも言わない。

すると優しいセブルさんはしっかりと手紙を読んでくれるのである。

「……ぱぁ。えー、ハセガワナルミ侯爵様へ。この度は我々の元同士である“パール・パエルー”が多大なる無礼を働き誠に……」

ん？

どした？

なんかやなことかいてあったかい？

「……ながっ」

あらっ。

「……要約すると、ここで事切れている肉団子は昔秘術……つまりはあの人形ですな。それを盗んで集落を抜け出した裏切り者であり、集落でも秘術の漏洩を防ぐため殺害及び抹消する機会を狙っていたが人形が強く消せずにいたと。しかしナルミ殿が人形を壊したので無事に消すことができたので感謝をしている。そしてこいつは裏切り者なので集落の者はお嬢様誘拐には全く関係がない。とのことで

す。あとはこの肉塊の詳細な経歴と大量のナルミ殿に媚びを売る言葉の羅列。そして今は秘術を持ち帰るため直接謝罪できなくて手紙での謝罪になることの詫びですね。いつか直接詫びにくると」

「……さいですか」

なんか正直トカゲの尻尾切りにしか聞こえんぞ。

「……うわ、見てくださいこいつの過去。昔は痩せてたようですが、この似顔絵、ガリッガリの虫みたいな顔で、本気でエルフとは思えない程醜いですよ。それから……うわ、いつの顔を見ても綺麗どころか普通と呼べる顔がない。目がギョロリとして歯並びが歪んで歯が抜けていて鼻の穴が上を向いて……あげてきったら切りがない」

……そーなのかー。

「……君、それ信じるの？」

「まさか。こんな怪しさ満点の手紙を信じる訳がないじゃないですか」

だよね。

そもそも本当にその秘術とやらを取り返すためにこのおばんを殺害したんなら、まず自分らに土下座でもしてお人形さんを返してもら……あ。

「……ふむ。セブルさんや」

「はい？」

「これは一旦お家に帰った方がいいやもしれんな」

「どうかしましたか？」

うむ、どうかしまくりだ。

なにせその手紙を信じるなら、相手は秘術を取り返すためなに人を殺める集団だ。

……いや、確かに手紙の通りならオバハンがかなりの自業自得っぷりだけども。

とりあえず、そんな集団がその秘術を取り返すために真っ正面から全うな手段を行うとは思えない。

……つまり

「あれだ、もしかしたら、セブルさんに預けてあったお人形が全部盗まれているかもしれないわ」

セブルさんとこに盗みに入って部屋を漁るくらいはするかもしれないってことですよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊∂☆

セブルさんち……というかシルバの実家のセブルさんの部屋にいくと、見事なまでにビンゴだった。

この部屋の現状は、まさに汚い部屋と書いて汚部屋（おへや）と言っていいくらいな惨状になっている。

それはもう部屋は荒らされ、本棚はひっくり返され、布団はベッドからずり落ちて、絨毯だって裏返し。

相当頑張った痕跡が見てとれる。

そして、そんな部屋に自分達は立っていた。

ちなみにその立っているメンバーには、もちろん家主であるガルクさんも存在している。

彼は寝起きをたたき起こされて不機嫌になってる……とかはなく、単純に疲弊しているというかげっそりしているというか……まぁ、うん。

なんとなく察した。

……本当にごめんなさい。

考えてみたら、ガルクさん偉い人だもんね。

あんなことの後だったらそりゃあもう激務真っ盛りだもんね。

なのに文句もなしに睡眠中叩き起こした自分についてきてくれて……少しくらいイライラを表にだしてもいいんですよ？

……今度なんか埋め合わせします、絶対。

で、そしてさらに追加でここには三人くらい座っている人たちがいる。

三人とも自分は全く知らない人だが、一応説明をするなら左が背は１７０くらいで腰まである青い髪をクソ長いポニーテールにしている青い切れ目の怖いサムライガール。
しかしその身長と長い脚に対して胸は岸壁なので、とっても残念な感じがする。

あ、あとみたことない尻尾がある。

次いで真ん中が……なんつーか、日本人形を目と髪を緑にした感じ？だいたい１２０かそれ以下かの身長で、おかっぱカットに髪をきっちり切りそろえ、もはや昭和の小学生みたいな見た目の少女。

そんなぱっと見１０歳おかっぱ少女は、目は虚ろにただただ自分を中身のない目で凝視する。

……ある意味この中で一番怖い。
なんか、呪われそう。

で、最後の右側は……なんか自分より腕が四本程多い。

後ろでお団子にしている髪は茶色で、今にも泣きそうな目は潤んでいるがしっかりゴールド。
小柄な身体をしっかり伸ばして気丈に振る舞おうと座っている。

……ちなみいろいろと、おそらくシルバよりでかい。

……これ、男でも絶対肩凝るってのが見てわかる。
彼女にさっき自分がセブルさんにかましたやつやったげたら感謝されるかね？

……とりあえず、ここまで説明した彼女たちはいったい何者かと言うと、非常に間抜けな人たちです。

なぜかって？
そりゃああれさ。

「……まっさかもうトンズラこいてると思うてたが、まだ部屋にいてしかも自分らが扉開けるまで気づかないとは……」

お人形盗もうとした所を現行犯で捕獲された泥棒たちでございます。

だから彼女らはみんな漏れなくお縄の贈り物をされています。

……おかげで右の娘はいろいろと……おっと、危ない危ない。

とかなんとか思いながら、自分はどーしよっかなと天井を仰いだ。

「……これは、なんだ？なにがあったんだ？」

自分も聞きだいですガルクさん。

「……一応説明すると、この前シルバが拉致られたのは知ってますね？」

「あぁ。それはセブルから聞いた」

「で、先ほど自分らがその犯人を死体で発見したのですよ。なんでもそいつが裏切り者で自分らがそいつを殺す隙を作ってくれたとか。で、彼女らがその裏切られた人たちの仲間らしいです。きっと裏切

り者が使ってたお人形さんを取り返しにきたのでしょう。詳しくはこれを」

自分はそう言いながら先ほどセブルさんに読んでもらったお手紙を丁寧にガルクさんに……

「やっぱなし！！」

「は？」

手渡す寸前で中止した。

危ない危ない、死ぬとこだった。

この状況は非常にヤバいよ。

いや、ガルクさんにムッとされることがでなくてだ。

「……ガルクさん、今すぐリリスさん呼んできて。それでいて状況を説明してください。……この場にいきなり突入されたら、恐らく非常に後出しの言い訳は聞いて貰えない事になります」

と、自分はガルクさんの目を見て言いながら、チラッと盗っ人三人衆を横目で見やると……うぅむ。

「これは傍目からはどう頑張っても若い娘をオッサン三人が拉致監禁してこれからイタズラしようとしている画にしかなりません」

オッサン言うてもまだ自分、２０いってないがね。

でも言いたいことは通じたのか、ガルクさんは神妙に頷いて

「……わかった、連れてくる」

「お願いします。リリスさんがきちんと状況をわかって来てくれたら、自分もシルバに言い訳できますのでそれらも含めてよろしくお願いします」

これ、必死ね。

いや、頭じゃ物理的に彼女に殺られることがないのはわかっているが、なぜだか彼女は自分を殺せるような気がしてならないんだよね。

とりあえず、扉の向こうに消える大きい背中を見送りながら一人小さくつぶやいた。

「頼みますよ〜っと」

……で

「おいそこ。なぁにやろうとしている」

なにやら物騒な刃物を部屋から集めているセブルさんは、いったいなにがしたいんでしょうかね。

「え？もちろんいろいろと吐かせるために」

「……それ、君が納得いく答えでるまで虐め抜くつもりだろ。例えば彼女らが本当のこと言っても、君が嘘だと思ったらやめないべ」

「……む。甘く見ないでください。これでも昔は拷問官として生計を」

「……なにがあったし」

「先代魔王様が亡くなったあたりからですかな？とりあえず当時の旦那様達は我の故郷に逃げてもらい、我は擬態した姿ではなくこの姿……翼は隠してましたが、で、城で働いておりました」

「……」

「いや、そんな目で見ないでください。我はむしろ拷問官として冤罪を救ったり、当時の代理魔王の仲間を内部崩壊を狙ったりと頑張ったんですよ？なにせ我は心を司る種族ですから、上に取り入ったり囚人の心を掴んだりは得意ですからな。……まぁちょっと冤罪の方にも記憶の改竄等々で辻褄を合わさせてもらったりしましたが、概ね良心的でしたよ？本当に拷問したのは本当に悪い奴だけです」

そうか。

「で、彼女達は？」

「本当に悪い奴です」

「帰れ」

確かに悪い奴かもだが、手紙の通りなら彼女らも被害者一族だ。

「疑わしきは罰せずだよ」

今の自分は人の死体というものを見たおかげで只今テンションたださがりの極めて感情論から遠いところにいるので……うぷっ。

思い出したら吐き気が……もう全部出したのに。

……ま、まぁとりあえずいまの自分は極めて冷静、非常に論理的な考えができる訳であ

「……でもここは我の部屋ですので、侵入したことへの罰は我が決めても問題はないかと」

……。

……あれ、正しい反論が見つからない。

ような気がしたが、騙されないよ自分は。

「この国には被害者が加害者を直接裁く法律でもあるのかな？」

「……チッ」

チッ、じゃないよ。

「ったく……君は特定の事情が絡むと本当に感情的に動くよね」

「……まぁ、そういう種族ですから」

自らの感情制御できんで心を司るとかのたまってんのかね、君は。

とは思っても、口では言わないよ自分。

と、こんな感じに話も一向に進まないままコントのようなことをやっていると、背後の扉から誰かが入ってくる気配があった。

そちらに目をやると、先ほど奥さんを迎えにいったガルクさんが……リリスさんをおぶってやってきた。

「……なぜに？」

あ、つい本音が。

……まぁ、だいたい想像つくがね。

「……眠いからおんぶとだだをこねられた。そして置いてこうとしたら乗ってきた」

ほらね。

というか、いや確かに目はしばしばしているが……もはやこれは半分寝てるぞ。

あれだ、最初からこちらに来るより睡眠をとるという選択肢はなかったんですかねリリスさん。

一応あなたにきちんと事前に伝えて同席できるようにもチャンスを設けたと言う事実が欲しいだけなので、そこまで無理やり来なくてもいかったんですよ？

……まぁ、彼女ら的発想なら優先順位は睡眠よりガルクさんだな。

あの娘の母親だし。

「……いや、うんまぁそういう特性ですからね」

「もう慣れたよ」

本来慣れたらだめなものかと思いますよ？

「で、話は進んだかい？」

「それが全く。誰かさんがお話し聞くのをすっ飛ばして彼女たちを虐めようとしましたからね」

「……我が悪いんですか？」

「悪くないとでも？」

「いたっ！あたたたた！！」

「やぁ！私も虐めるの！縛るの！！」

……とりあえず後ろでなにやらねぼけて勘違いしたリリスさんにガルクさんが頬を伸ばされているが、無視しましょう。

というか、言っちゃあ悪いがいくら綺麗な部類とはいえ４０過ぎの女性がそういうのは……まぁ、まだ許せる範囲か。

「いたっ！髪！抜ける！ナルミ君縄！こいつ縛って黙らせる！！」

わぁお、まさかの罪人追加だよ。

とりあえず自分は無言で三人を縛ったのと同じタネも仕掛けもないセブルさんが用意した縄を手渡しながら、年上に対して思ってはいけないだろうがこいつら邪魔くさいとか素で思ってしまったのだ。

なのでしばらく後ろの二人は無視して話を進めることにする。

「……で、君たちはなにをやっていたんかい？」

……いや、びっくりすんなよ。

確かに話をいきなり戻して唐突に振ったから普通ならわかるが、あくまで今の君らの扱いは罪人だからね？

いつかはこの話しされるのわかってたでしょ？

そんな自分の言葉にこたえてくれたのは、自分よりも腕がお得な右側の少女である。

「……私たちは、人形を探していました」

うん、やっぱり。

「じゃあ次に、君らはなにもんかね？」

「……分家です」

……はい？

「なんの？」

「セタ一族の分家です。私たちは、本家の」

と、ここまで彼女が言った所で左のロングポニテが彼女に叫びはじめた。

「ちょっとミナ！それ以上は」

「黙って！今隠したらそれこそ怪しまれるでしょ！そんなの一族の恥よ！私は嫌だ！ご先祖様と同じ人間に軽蔑されるなんて絶対！ご先祖に顔向けできないじゃない！！」

……うわぁ。

なに、この娘ガチか。

なんか、この必死さは信じた方がよさげな気がした。

そもそも瀬田さん絡んでたんなら部品の日本語も火縄銃も説明つく気がするし……。

そう思ってるうちに、六本腕の彼女が叫ぶように続きを話しだした。

「私達は本家のセタ一族を護る分家です！勝手ながら今回の混乱に乗じて裏切り者をしま」

「んんっ……んっ……」

……途端、この場に場違いな甘い声が部屋の中にこだました。

「はぁ……はぁ……」

「ん……んんっ」

声の方をみてみると、疲れきってるガルクさんと両手足を縛られて丸くなってるリリスさんが転がってた。
リリスさんは猿ぐつわをかまされ、全く言葉は話せていないがとりあえず幸せそうだだった。

「……ごめんなさい、家主でシルバのご両親なのは理解してます。が……出てけ」

とりあえず、蹴り出して扉及び鍵をかけた。

正確にはガルクさんを蹴り出してリリスさんを引っ越しの荷物の要領でお運びした後に鍵をかったのである。

そして自分はそのままコツンとおでこを扉に当てて失望しながら体重を預けた。

「……ガルクさんはもうちょい真面目でお堅くて良識ある人かと思ってたのに。確かにリリスさんの押しが強いのはわかるが……。酔った親戚のじっちゃんよりたち悪い。……いや、この場合ガルクさんよりリリスさん……もういいや、面倒くさいからガルクさんで。真面目に強く怒ればリリスさんも真面目になるだろうから怒らなかったガルクさんが悪い」

限りなく失礼な発言。
もちろんガルクさんに。

親戚のじっちゃんには悪いなんて微塵も思わん。

なんだよ、彼女いなくてもいいじゃん。
確かにじっちゃんの世代は18で結婚してたかもしれんが、昨今の

平成産まれ１６歳少年にそんな話をされてもねぇ？

そして孫が彼女と初詣に行って１日会えなくなって嘆いていた親戚のばっちゃんと男女の付き合いはまだ早い、いや遅いと自分挟んで口論しないでください。

あと、別のばっちゃんあなたの孫は当時まだ４歳です。

なぜ自分と彼女がいつかお見合う話がここで出ますか。

確かに自分は親戚内では数少ない男子ですよ。
そしてお孫さんは自分に懐いてますよ、肩車が高いから。

でも、だからって一つ回って同じ干支の親戚とつき合わされるお孫さんの気持ちを考えてあげてくださいよ。

下手したら自分が捕まりますよ？
彼女に訴えられて。

というか、なんであなた方母方の親戚はそんなに家の父さんの評価が高いのか。

全く持って訳わからん。
あんな吹いたら消えそうな昼行灯のどこがいいのか。

春先にベランダで椅子に座って目を開けながら寝てる所で鼻先に蝶々がとまるくらいにボケた人ですよ？

ちなみにこの状態はきちんと写メにも動画にも残ってるから間違いなく発生していた。

どんな確率の奇跡だよ。

そんな宝くじの一等当てるよりも素晴らしい確率でボケているのがうちの父さんなんだよ。

だのに正月に父方のじいちゃんばあちゃんも一緒に呼び出してテンション高く自分や父さんや長谷川のじいちゃんの肩組んでなんたらかんたらと……自分含めた長谷川筋の一族はあなた方のテンションに対する対応に困り果てています。

……つーか、父方のじいちゃんは2つ隣の町でちっさな鉄工所経営してんのは知ってるが、母方のじいちゃんはなにやってんだろ？
あのそれなりな名家っぽいお屋敷で……。
なんか母さんもどっかボケた箱入りだし……。

……もういいや。
不本意ながら縁切れたし。

でもあの人たちがそれに引っ張られて無意味に自分の評価も上げるのが一番残念なのですよ。

……まぁ、とかなんとか言いながらちゃっかり自分18になったら16の嫁さん貰う事になったのだが……あれ？
自分18なってもまだ彼女15だっけ？

……気にしてはいけない。

とかなんとか、なにやら母方の親戚のパワフルさを思い出してた自分の耳に、なにやら聞き漏らしてはならない言葉が聞こえてきた。

「……あ、そうか。最近は我が居なかったから奥様は旦那様へ薬を盛り放題だったのか。……だから最近奥様はやたら元気で旦那様はやつれていたのか」

……ふむ。

自分は下をむいていた顔を左に９０度頭おでこと扉の接地面を軸にして回転させて、にっこり微笑みながらセブルさんの方をみた。

そして言うのはただ一言。

「詳しく」

さぁ、尋問の始まりだ。

……ちなみに本来尋問されるべきであって話す気満々だった三人娘は……自分が存在を忘れてしまっていた結果完全空気になってましたが気にしない。

「む？いや、ただ我がいなくなったから奥様が気の向くままに薬を盛って旦那様と励んでいたというだけです。毎回我が酒とかを用意して旦那様のとこに持って行き、旦那様に渡していたので、今まではあまり……というか、我があまり入れないように奥様に言っていましたし、旦那様自身も奥様を警戒しながら飲んでましたので……まぁたまにやられましたが、とりあえずそこまで被害はなかったのですが……まぁ今回はその用意する時点で奥様自身が盛ったんでしょうな。下手に我以外の使用人に盛らせたら本物の毒を盛られるかもしれませんし」

……はい、尋問終わり。

セブルさん、実は頑張ってたんだな。

「……悪いことしたな」

「えぇ。本来なら個人ではなく国を巻き込んだ色々な問題になるような行為です」

……。

「……合成繊維のコートでもプレゼントしたら許されるだろうか？プラスチックつかってるのなら耐魔法でしょ……」

「……冗談ですよ」

いや、冗談じゃすまないべ。

あれだ、確か、つか確実にガルクさんは自分より階級は上だべ。したらばこれ、上官蹴り転がしたのに等しい行為だべさ。

別に今の地位が云々はどうでもいい、というか出来ればこの荷物は重すぎるのですぐさま粗大ゴミに出したいのだが、何分世間体が悪いし国からのお仕置きが怖い。

そして世間体云々より何よりも、ガルクさんはシルバのお父さんだから……。

……なんか今頭に『17歳少年、15歳少女を拉致して逃亡』という三面記事が頭に浮かんだ。

「……ナルミ殿は今回の騒動の功労者なんですから、これくらいそんな」

「うん。確かに自分功労者かもだが、生憎とガルクさんはもう一人の功労者を送り出した雇い主で、結果立場的には自分と同等くらいの功労者になるんでないか？君、ここで隠れて使用人なんかやってたくらいだから表舞台には立ちたくないべ？したらば自分とガルクさんのやったことの価値はイコールで結ばれるよな」

む、とセブルは一瞬難しい顔をしたので、自分はさらに頭に浮かんだものをフィルターにもふるいにもかけずにそのまま次々口からだした。

一度悪い考えが浮かぶと次々と連鎖しと悪い考えが出てくるのが自分の残念なゆえんだよね。

「しかもガルクさんは自分より地位が高く、政治家さん活動が極めて長い。こんな国に飛び込んで一年そこらの新人とだったら、明らかに実力差がありすぎるべ」

「いや」

「さらに今回の騒動でシルバも頑張った結果声が出なくなってしまった。嫁入り直前の娘がだよ。近くにいたのに婚約者守れんかった新入りと、新入りのせいで娘が声を無くしてしまった国の実力者。さて、世の中はどちらが」

「……待て」

……おっと、エンジンかかりすぎて卑屈になってしま……ごめんなさい。

え、なんでそんな怒りのオーラ出してんの？

自分の発言……うん、自分のことだが確かに聞いてて気持ちのいいものでは

「声が、出なくなった？」

……あ。

「お嬢様が？お嬢様の声が？」

おい、やめろ。

そんな亡者だか幽鬼だかわからん動きで近寄るな。

「……本当なのか？本当にお嬢様は」

「安心しろ。自分が治す、問題ない」

怖かった、はっきり言って怖かった。

セブルさんの顔は旅行から帰ったら誰かにより壁に蝉が釘で打ちつけられてたという場面に遭遇するくらいに怖かった。

……が、それ以上にもはや絶望、人生に生きる意味がない、夢もキボーもありゃしないというような表情があまりに痛々しく……つい、迷いなく力強く言っちゃったんだ。

……ま、治す気は最初っからあったからいいんだがね。

「でも、声……おじょっ、さまの……ふぐっ」

……泣くなし、おっさん。

ほら、ティッシュやるから鼻……だから！

自分でチーンしなさい！！

シルバみたいな女の子ならまだ許せるが、セブルさんみたいな男は願い下げだ！！

いくらイケメンでも許さんぞ！！

「……でぼ、こべがでなくなって……どぼやっておじょうさばを……ぶびっ、なおぶんでずが」

……おい、鼻。

手にはかからんかったが、橋かかっとんぞ。

「……あ、あらゆる薬を作る程度の能力なめんな。蓬莱の薬で不老不死つくった能力だぞ」

実際やれるかしらんし、あれは姫様の能力も使った結果できたものらし

「待って！！」

……ものらしいがね。

で、なによ八本腕少女。

「……蓬莱の薬なんぞ作らんぞ？不老不死なんてロクなもんでねぇかんな」

「そんなのはいいの！！」

あら。

なんね、そっち方面のヤヴァイ人かと思ったら違うのね。

じゃあなにか、打つと覚醒して色々ハイになる怪しいお薬か？

そんなん自分つくらんぞ？

「でもそんな薬が作れるんなら、伝染病の特効薬も作れないですか！？」

……あ、なる程。

「なに、君らの集落ってもしかして」

自分がここまで言うと、八本腕少女は俯きながら弱々しく

「……はい、もう、半数以上が病気にかかってしまい……既に、かなりの数が亡くなって……」

と、語った所で左にいるポニテガールも声を殺して泣き出した。

真ん中？

一ミリも動かんよ。

もう、あれだ。
この真ん中人形なんじゃね？
と、真ん中の娘について考えていると、八本腕少女はいきなりガバッと上を向いて叫び出した。
「だから！だからお願いします！伝染病のくすぎぃ！！」
が、止められてしまった。
……まぁ、そりゃあこうなったら止まるしかないよな。
なんたって、口ん中にいきなり剣先が突っ込まれたんだもん。
剣の方が少しサイズがおっきいのか、口の両端が切れてるのが痛々しい。
「……黙れ」
そして剣を突っ込んだ犯人は、自分の隣で泣きながら先ほどまで言葉が崩壊していたはずのセブルさんであった。
彼は両手で剣を構えたまま、先ほどとは打ってかわって流暢な言葉で彼女たちに怒りをぶつける。
ちなみにこの時自分は彼のあまりに恐ろしい迫力となにも感じないかのような冷たすぎる無表情、そしてなによりこれが突然の行動すぎて動けずに彼を見ることしかできなかった。
「貴様らのせいで、お嬢様は声を失ったのだぞ？貴様らのせいで、

お嬢様は未来を失ったのだぞ？貴様らのせいで、お嬢様は全てを失ったのだぞ？」

「が、あがっ」

恐怖で涙を流しながらガタガタ震える少女の歯が、剣とぶつかり合いガチガチという音がせわしなく部屋に響く。

「それなのに貴様は謝罪もなくまず真っ先に言う言葉が仲間のために薬を作れとな？集落が全滅しそうだから貴様らを救えと？」

「あ……がっ」

「笑止。貴様のような者が育った集落なぞたかが知れる。伝染病でもなんでも、勝手に滅びればいい。……そうだな、祝いに貴様ら集落にはお前ら三人の首でも贈ってやろう。もちろん首を刈るのは貴様らをそこらへんの浮浪者あたりにさんざ嬲りものにしてもらってからだがな」

「ひぅ！！」

「このっ！やめろ！ミナから離れろ！！」

ここでやっとポニテガールが声を出して芋虫状態で頑張って飛び跳ねセブルさんに体当たり……を、しようとしてセブルさんのカウンターキックを腹にやられそうだった。

そうだったというのは、彼女の叫びで魂が戻った自分がなんとかかんとかセブルさんのキックを受け止めたからだ。

右手でセブルさんの脚を掴み、左腕でポニテガールを抱える形で。
右手はこっちの世界にきてから今までで一番重いものを掴んでいるようで、少しばかりびっくりした。
……しかし蹴りを出しても剣先が微動だにしないセブルさんの力量はすごい、というかすごすぎる。
あと、両手足縛られた状態でセブルさんまで跳ねてったこの少女も地味に過ごいのな。
とか呑気なことなんか当時の自分は考えてなかった。
それよりも、少しイライラ、主にすぐに動けんかった自分にイライラしながらこれからどうしようか考えていた。
「……剣、下ろそうか」
「……」
「下ろせ」
「……あなたはどちらの味方ですか？」
「少なくとも、今は中立だ。彼女らの身勝手な発言にも、君の浅はかな行動にもイラついているものでな」
それよりも自分に対するイライラのが大きいがな。
自分がこう言うと、セブルさんは剣を少女の口から引っ込めた。

剣から解放された少女は口の両端から血を流し……少々粗相をしてしまい床を汚して泣いている。
その顔色は悪く、まさしく血の気も失せた顔色だ。

……ふむ。

「……君らは本当にその集落の人かね？にしてはお粗末というかなんというか、言っちゃ悪いかだが疑わしいぞ。仮にも伝説級の野郎の部屋に侵入する奴が、自分らの気配に気づかないで一人づつ後ろから捕縛されるわ、部屋の探し方が雑だわ、後先考えない発言するわ……」

……あー、これ以上はやめとこう。
なんか、かわいそうになってきた。

「セブルさんも、少しは考えて行動しぃな。イラつくのはわかるが、やることぶっ飛びすぎだ。あれじゃあ暫くまともなお話しができないべ。あんなお口無理やり塞いで、彼女らの発言権取り上げたらダメでないのさ」

……あ、これ知ってる。
周りみんなが冷静さを欠いてる時にやたら一人だけ一歩後ろでやたらいつもより冷静に物事を見ているっていう貧乏くじ状態だ。

そして冷静になりすぎて人としてはアウトかもしれない合理性のみを考えた選択肢が出てきやがるというね。

……はぁ、やんなっちゃう。

とりあえず、彼女ら自身は嘘はついていないようだね。

本当に彼女らの集落はなにやら大変大変なことになっているようですな。

……これは嘘はついていない味、あ、はいちがいます。
舐めてないです、読んだだけです。

言動がなんか胡散臭いけど、考えていた事はガチでした。

……いやほんとに、さすがに見ず知らずの女子を舐める程人としての道を踏み外してはいないよ。

……ま、それは置いといて、話を続けましょう。

本当にこういうことはやりたくないないんだがね。
人としての道を踏み外してるような気もするが……仕方がないと割り切っている自分がいる。

「……はぁ。とりあえず、こーゆーことはやりたかないんだが……交渉といこう」

自分はそう言いながらいまだに左腕で抱えるように捕まえていた女の子を元の位置に戻した後に、右手をセブルさんの肩に置き彼がなにかやらかさないよう抑止しながら三人を見据えて……おい、真ん中。

少しは動け。
お前本当に生きて……た。

なんだ、まばたきするんじゃん。

……で、自分は言うのですよ。

彼女らの集落に住人が何人いるかはわからんが、自分は言わないけないのですよ

「それでは交渉しましょうか。まず君らには自分の質問に正直に答えてもらう。もちろん嘘や隠し事なんかはなし。でも君らにはわからないことはわからないと言ってもらっても構わない。もちろんわかるのにわからないと言うたらダメ。この約束を守ってきちんと全部の質問に答えてくれたんなら……

先ほど君らが言ってた伝染病を治してあげよう」

彼女らの家族から友達から、全部ひっくるめて人質にとるような交渉の名を借りた脅迫を。

ちなみに。

そのあと自分は彼女らに考えさせる時間を与えるという名目で少し猶予を与えながら、扉を開けて先ほど蹴り出したランドルフ夫妻の様子を見た所

「……」

「……ね、ねぇあなた」

「……」

「わ、私が悪かったわ。確かにすこぉしお薬をお酒に入れたけど、は、反省はしているの。ね？」

「……」

「だ、だから許して。もうしないから。な、なんでも言うこと聞くから」

「……」

「ねぇお願い、なにか言ってよぉ」

「……」

「やだぁ、そんな目でみないで……」

なにやらカオスだった。

そこには、縛り上げられ芋虫状態になっているリリスさんと、ただただ無表情でリリスさんの目を見つめるガルクさんがいた。

リリスさんは必死になんとかしてガルクさんの気をひこうとしているが……なんというか、暖簾に腕押し糠に釘。

しかし塙のようになにも表情に出さないガルクさんは、全くもって反応しない。

きっとあれだな、ガルクさんはお薬盛られたことに対して怒って……ん？

そういや、セブルさんさっき……

「……ね、セブルさん」

「……なんですかな？」

「さっきセブルさんはセブルさん以外の使用人は信用ならん的なこと言ってたが……セブルさん、もしかして盛る側の人？」

……あ、おいこら目を逸らすな。

「……大丈夫、いつものことです」

「なにがだ」

ったくこいつは。

「つーかそもそもそのお薬は大丈夫なん？普通薬は毒なんだよ？」

「あ、それは問題ないです」

「根拠は？」

「ただの精力剤の粉末に奥様がひと月かけて魔力を練り込み摂取した者を興奮させるようにしたものですから」

……それ、多分危ないと思う。

「これがまた高値で売れるんですよ。製法は奥様が独自開発したも

ので、道具に魔術を施して間接的に魔力を入れる製法ですから解析も難しいので製造は奥様一人でやっています。ですから絶対数が少なく、単価がとても」

「うん、もういらないその話」

なんというか……その母親の娘がこれから先どうなるか心配だよ。

「……ねぇ、なにか言ってよぅ」

「……」

あっちはまだやっとるよ

「……ちなみに旦那様はもう薬については諦めています。まぁ飲みすぎて抵抗ができたのもありますがね」

そっか……じゃあ多少おかしくなった程度しか薬は効いていなかったけど、その抵抗飛び越して影響が出るってこたぁ相当盛られたんだな、ガルクさん。

……そういや

「……薬について諦めてんならなんで怒ってんだべ」

てっきり薬盛られたことについて怒り心頭かと思ったんだが……諦めてんなら違うよな。

と、自分がセブルさんに聞いた所、予想外のとこから答えがきた。

「……諦めてもマトモな思考が出来ないくらいに盛られたら流石に怒らない訳にはいかないだろう。しかもそれでナルミ君に迷惑をかけたんだからな。すまなかった」

それは先ほど怒っていたご本人、ガルクさんであった。

いえいえ、こちらこそ蹴り転がしてすいませんでした。

「全く、リリスの奴は……最近本気であいつの育て方間違えたかと思ってくるよ」

いや、知りませんよ。

つか、育て方って。

「……まぁ、奥様は幼少期があれでご両親を亡くされ不幸のどん底だったので、その時の心の傷がまだ残っているのですよ。甘えさせてあげてください」

「そうだけどもなぁ……」

……自分は介入しない方が良さそうだ。

ちなみにリリスさんは……あ、悶えてる。

あぁ、やっと踏んで貰えたのか。

靴後がくっきり……ガルクさんの靴……いや、自分しらね。

……なんでこう育ったんだろう。

なんか……それを知るイベントをさっき逃したような気がする。

と、リリスさんを眺める自分の視線に気づいたのか、ガルクさんは自分の肩にポンと手を乗せて……奥義を授けてくれた。

「……いいか、ナルミ君。リリスみたいな女はなにかあっても怒ったりしてはだめだ。無表情に、目を見つめるんだ。目で蔑んだり哀れんだりしたらだめだ、悦ぶ。視線を逸らして放置しても、いずれそれも無意味になる。重要なのは放置せずに放置すること、かまっているがかまっていない状態、これが重要」

……いや、そんなこといきなり悟ったような表情で伝授されても、ねぇ？

感謝しかできないよ。

「わかりました！ありがとうございます！！」

多分今までで一番いい笑顔だったと思う。

いやぁ、いいこと聞いた。

早速今度試してみよう。

そう思っている自分の表情をみて、ガルクさんは満足げに頷くと、後ろを向いてリリスさんをひょいとお姫様のように持ち上げて

「じゃあ、俺はもう寝る。これ以上は邪魔にしかならないだろうからな。後は好きにやっていてくれて構わん」

と、言ってスタスタと廊下を歩いていった。

夜の闇に包まれた廊下に消えるその背中には、自分にとって先輩としての優しさと年上としての威厳が溢れていた。

なんかもうあれだ、あれ。

ガルクさんのことはこれから心の中で、師匠と呼ぶことにしよう。

だからあれだ、なんかガルクさんとリリスさんがここに来る意味なんてなかったとかは思わない。

だって彼は自分心の熱血教師なのだから。

と、自分が心からの敬礼を心でしていると、横からセブルさんが

「……それにしても、よくわかりませんな」

「ん？なにが？」

「自らの主人についてこう言うのもあれですが、もう抵抗も出来てる薬を少し多めに盛られたくらいでそんなに怒らな」

「寝てろ」

「っぴゃ！？」

……そしてあれだな。

ここで自分の脚払いによって床にキスしている人生の先輩に対しては、もうさん付けで呼ばなくてもいいな。

だってこいつは、自分の心の反面教師なんだからな。

「ったた……勘違いしてるかもしれませんが、旦那様はいつもは気にもとめな」

「寝てろ」

「ぶっ！！」

……はぁ。

52回目＊周りが怒ると怒れない（後書き）

網戸の穴から蛾が侵入、南師です。

あいつら本当なにがしたいんでしょうかね。

真夜中に侵入してパタパタ電気にまとわりついて、最終的に潰されて……

……一寸の虫もなんとやらと言いますが、虫にさわれない程嫌いな私からしたらとりあえずクイックルワイパーにガムテープを装着した武器で遠距離から涙目で捕獲する私の気持ちを考えたら殺さず逃がすなんて高度なことはできません。

さて、そんな話は置いといて今回のまとめにいきましょう

・バーテンバーテンリリー＊黒いウサギみたいな幼女の必殺技
・薬をつくる程度の能力＊竹やぶのお医者さん
・そのた＊あれば忘れ物

ま、こんな感じで許してください

さて……そんで今回ですが、いやぁ話が進みませんねぇ

このままのペースじゃああとなんぼでこの騒動が終わるのか……

いやはや、もうなにがしたいのかわからないですよね

……そういやなにやら今度遊戯王の禁止カードで開闢の使者が制限で復活するとかメンタルマスターが禁止になるとか

……まぁ最近はやることも集めることもなくなったのですが
と、なんにも話題がなくて頑張って話を広げようとしている南師です
……あ、そうだ
そういや聞いた話、居合いって自分の身長プラス２０センチまでなら居合えるらしいです
つまりよく考えんで設定したナルミ君の刀が2メートルの設定って、１８６（たしか）のナルミ君の居合いって、実は実現可能な話らしいんですよ
まぁ、相当達人じゃなきゃできないらしいけど
いやぁ……よかったよかった
なにがよかったのかって話だが
あと、私は素人だから本当にそうなんかは知りませんが
……さて、いつにも増したグダグダさ加減の本編とあとがきでしたが、今回はこれで終わりということで
とりあえず、今回はいつもより早く更新できたかな？
ま、いいや
とりあえずこのままいたら皆様にギアレックスけしかけられそうな……うぅん？

……フルトン銃向けないでください
私を捕獲してもランクはオールDですので……

あぁん！
みんながいぢめる！！

……なんか最後にこんなウザったい一人芝居をやらないと気が済まない私がいる

それでは皆さん、夏風邪にはお気をつけてお過ごしください

ではでは、これからもよろしくお願いいたします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8563h/

なりたくないけどチートな勇者

2011年8月18日15時52分発行